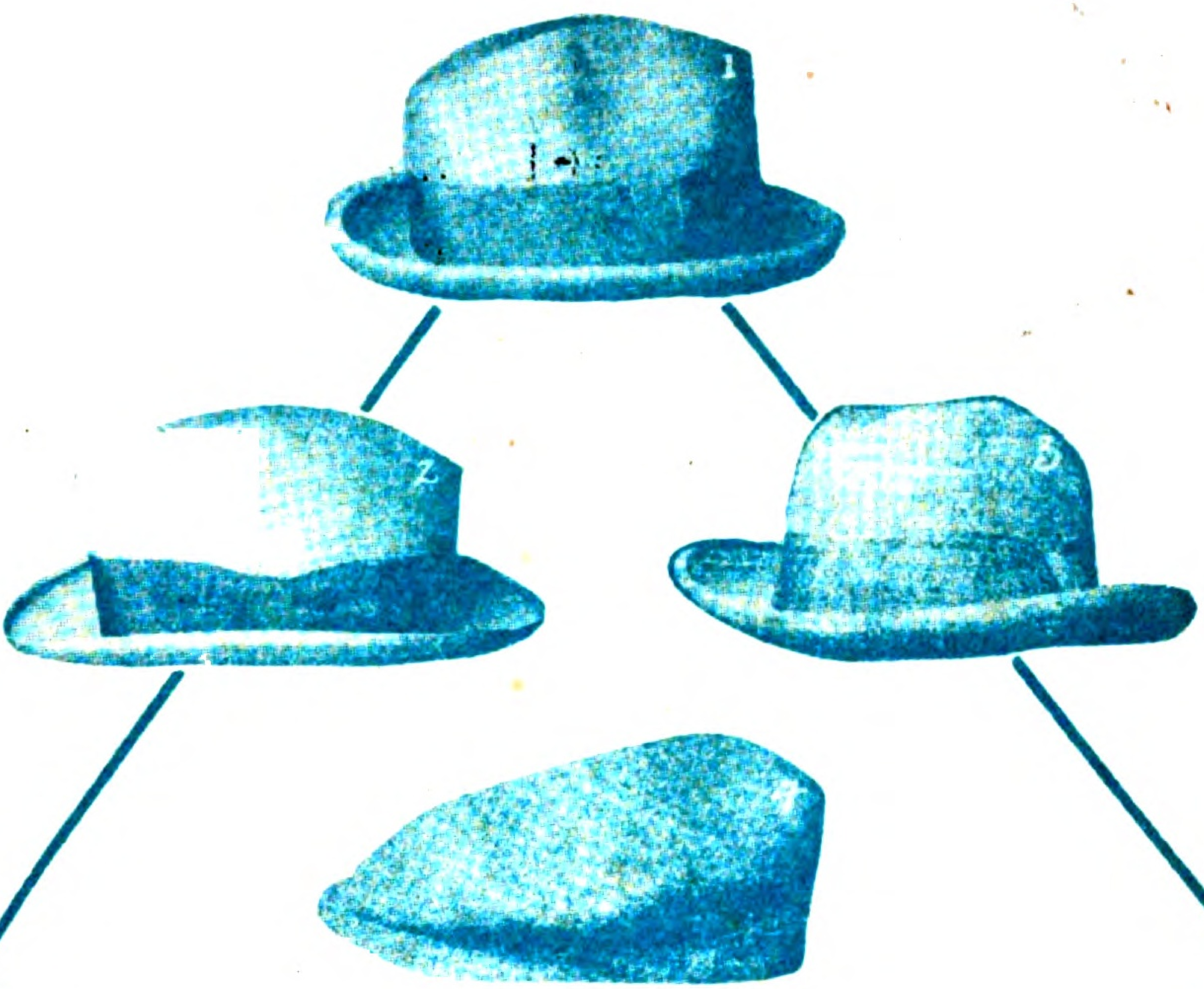
LA REKONSTRUO

改造

拾壹月号

4:11

1922



(1) 中折（舶來）
鼠色
十一圓

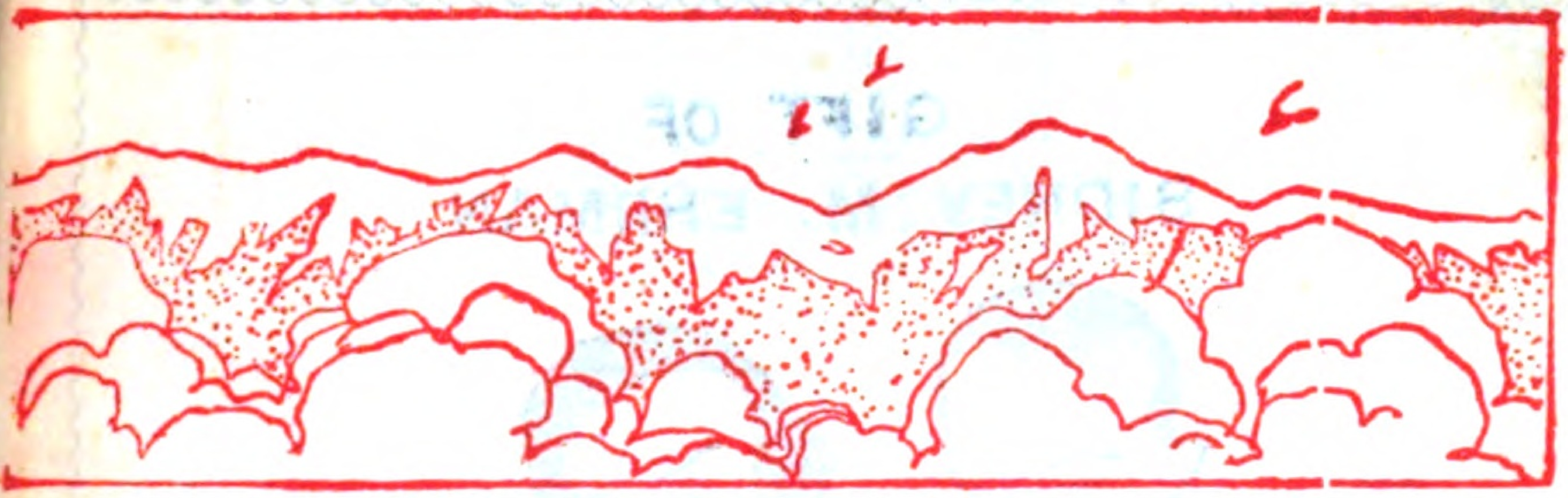
(2) 中折（舶來）
薄鼠色
九圓五十錢

(3) 中折
薄茶
八圓五十錢

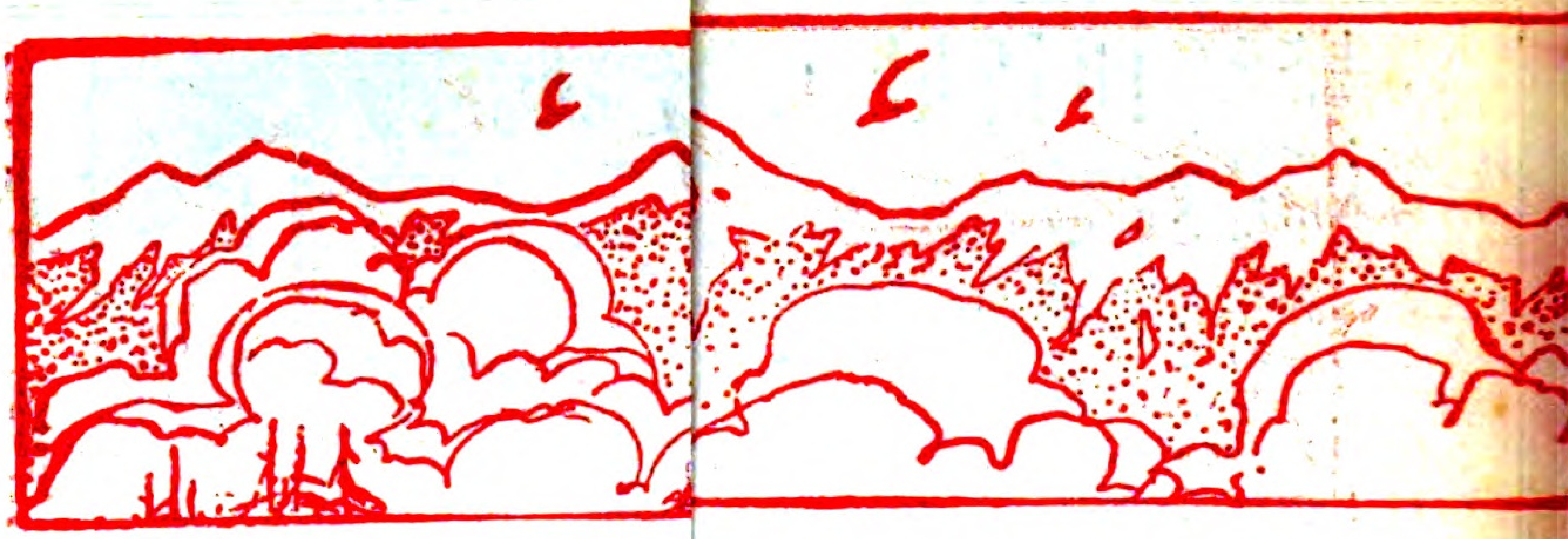
(4) 鳥打帽
三圓五十錢

東京今川橋

松屋呉服店



改造十一月號目次



關西大學教授 文學士 佐藤清氏著

「帝大英文學研究」別册第一

愛蘭文學研究

最新刊

定價金壹圓七拾錢 送料六錢

研究社が發行の榮を得つゝある「帝大英文學研究」は、時々其の別册として更に長篇の英文學を公けにする計畫である「愛蘭文學研究」は其の第一册である。言ふ迄も無く愛蘭近代の文學イエーツ、ダンサニイ、シング、グレゴリイ夫人の作品が代表する戯曲乃至詩は愛蘭魂の流露であつて、世界文學の異彩であり、はた英文學の爲に萬斗の氣を吐く物である。彼等の戯曲は散文に於る詩の精神の甦生であつて、素朴且つ神秘なるチャームは脚燈を超えて觀衆を縹渺たる空想裡に拉し去る。此特色ある文學の邦語に飜譯され、或は登場された物は既に屈指に餘りあるが、しかも徹底せる研究を世に問ふ物は、實に本書を其の嚆矢とする。全卷五章、愛蘭文學の本質＝異敎的精神＝基督敎的精神＝愛國的精神＝愛蘭文學復興の先驅＝愛蘭文藝復興、ペンを先づ此の文學の淵源に起して、現代の趨向に及ぶ縷述二百五十餘頁、篤學なる著者の態度は蕭然襟を正しめずには措かない。

研究社英文學書類

- 東京帝大英文學會編 **帝大英文學研究** 自一輯至三輯 定價 一—一圓 二—一圓廿錢 三—一圓五十錢
- 小日向定次郎氏著 **現代英文學講話**（第二版） 定價金壹圓半錢 送料金八錢
- 市河三喜氏著 **マーチャンド・オヴ・ヴェニス**（第三版） 定價金貳圓 送料金八錢
- 市河三喜氏著 **マクベス**（第三版） 定價金貳圓 送料金八錢
- 石川林四郎氏著 **テニスンの詩研究**（第二版） 定價金三圓 送料金八錢
- 平田禿木氏著 **キップリグ彼等**（第三版） 定價金八拾錢 送料金六錢
- 岡倉由三郎氏著 **おもかげ** 原文、譯文註釋附（第二版） 定價金壹圓半錢 送料金八錢
- 岡倉由三郎氏著 **コンラット あはのアンナ**（好評） 定價金壹圓五十錢 送料金四錢
- 市河三喜氏著 **スティヴンスン 寶島**（第三版） 定價金二圓五十錢 送料金八錢
- 平田禿木氏著 **最近英文學研究**（第三版） 定價金貳圓 送料金八錢

東京麹町富士見町 振替東京二八六〇一
研究社
電話九段一五七〇番

四大家傑作頒布會

此の四大家傑作頒布會は左記四先生の力作各一枚宛を春・夏・秋・冬の四季に組合せ一口となしお頒けするものなり。畫は山水・人物・花鳥等種々にて、何れも努力した傑作で御座います。

當中央美術協會の理想は、大家の力作を資産階級のみならず一般有趣味者が容易く需められる程度の廉い價で御頒けしたいと云ふのであります。隨て筆者には甚だ少い御謝禮で努力の傑作を御揮毫して頂くのでありますから、何人でも御承諾下さるのではありません。今回の四先生は營利でない、前記の旨意を御諒解、特別の好意を以て揮毫して下さるのであります。隨て何時でも此價で御頒け出來るものでは御座いません。御希望の方は至急御申込み願ひます。

規定

一、本會の筆者左の通り

中村不折先生　富田溪仙先生
小川芋錢先生　小杉未醒先生

二、會費一口金百五拾圓也（送費 内地七拾五錢 植民地九拾錢）

三、作品は一尺二寸幅長さ四尺六寸の特製大瀧紙（越前岩野氏製）に入念に揮毫せし四先生の筆各一枚宛を、春・夏・秋・冬の四季に組合せたるものなり。畫は山水、人物、花鳥等いろ〱にて何れも努力の傑作なり。

四、申込み金等一切不要、會費並に送費は、揮毫出來の節居宅代金引換小包郵便にて現品と引換のこと、東京市内は郵便に依らず、使を以て作品を御届けし其節會費を頂戴す。

五、申込期日十月三十一日限り。但し期限内と雖も申込豫定數に達したる場合は謝絶することあるべし。

六、揮毫出來期限は申込を受けてより十日乃至八十日間とし、配布は申込み順による、發送若くは御届けする際は必ず一日前に書面にて案内す。但し申込一時に多數なる時は配布多少遲延することあるべし。

七、申込みは普通の端書又は手紙に「貴協會開催の四大家傑作頒布會に入會致し候、揮毫出來の節は居宅代金引換小包郵便にて送附相成度申込候也」と記し住所姓名を明細に記入、東京市麹町區元園町中央美術協會）宛御投函の事。

不明點あれば端書にて申込まれたし。別に印刷せし明細規定書を送呈す。

東京市麹町區元園町一ノ一九
中央美術協會
電話九段八四一番
振替東京二九七番



●東京特約販賣店●

京橋 伊藤文房具店
同 文祥堂文房具店
同 文永堂文房具店
日本橋 三越呉服店
同 白木屋呉服店
神田 文房堂
上野 松阪屋いとう呉服店
大阪 三越呉服店
名古屋 松阪屋いとう呉服店
其他市内及全國著名の百貨店文房具店に有ります

日本總代理店 東京 神戸 米國貿易會社

内容見本贈呈

米國製

ムーアー萬年筆は

「漏らぬ」がモットーです

特長は振らずにすぐ

書けること永年使へること

我國文獻ありて以來の最大著作！

文學博士　吉田東伍先生著

縮刷 大日本地名辭書

菊判寫眞凸版廿五字三十一行三段洋裝脊革天金製　全七卷　總紙數六千二百頁

首卷＝汎論・索引（本年九月發行）
第一卷＝上方（本年十一月發行）
第二卷＝中國・四國・西國（本年十二月發行）
第三卷＝北國・東國（十二年二月發行）
第四卷＝阪東（十二年三月發行）
第五卷＝奥羽（十二年五月發行）
第六卷＝北海道・樺太・琉球・臺灣（十二年六月發行）

以上の順序で發刊し配本の豫定ですが出版の前後する場合も生じませうから豫め御承引を願ておきます。

發行の順序と特價規定

特價五拾五圓　定價六拾圓

送料各　首卷は金二十三錢（第四種書留）
一―六マデ各冊（書留小包各冊廿十錢（臺灣、樺太、朝鮮、滿支、（書留小包各冊五拾五錢

月賦拂方法＝申込金五圓　九月（書留代拂込（一通算）以下毎月金五圓宛　本年十月より大正十二年七月迄十回に拂込むこと

▼送本　第一回、第二回、第四回、第六回、第八回、第九回、第十回月着金の都度　▼送料は上記月賦金御拂込と共に適宜御同送願ひます

東京神田　振替口座東京五一〇一番

冨山房

賣捌　全國書店

新刊

岩波哲學辭典

（特價提供）

編輯

宮本和吉　高橋穰

上野直昭　小熊虎之助

執筆者

（哲學）

阿部次郎　安倍能成

出隆　藤岡藏六

伊藤吉之助　石原純

佐竹哲雄　紀平正美

桑木嚴翼　兒島喜久雄

村岡典嗣　宮本和吉

小山鞆繪　西田幾多郎

得能文　田邊元

山内得立　朝永三十郎

（認識論）田邊元

（論理學）高橋里美

（倫理學）西晉一郎

錦田義富

（心理學）

速水滉　淡路圓次郎

楢弘園　城戸幡太郎

增田惟茂　桑田芳藏

野上俊夫

小熊虎之助　須藤新吉

高木貞二　高橋穰

曾田[illegible]一　千輪浩

上野直昭　矢田部達郎

橫山俊平

（美學）大西克禮

（社會學）加田哲二

小泉信三　高田保馬

（敎育學）篠原助市

（宗敎學）赤松智城

波多野精一　石橋智信

宇野圓空

（印度哲學）宇井伯壽

（支那哲學）宇野哲人

（佛敎）衞藤即應

大野法道　矢吹慶輝

（基督敎）藤井武

石原謙　高橋信太郎

高倉德太郎

（神道）村岡典嗣

（精神病學）中村隆治

（生物學）谷津直秀

（生理學）橋田邦彥

（法理學）穗積重遠

小野清一郎

（言語學）市河三喜

（希臘羅甸語）田中秀央

理想的辭典の要件は知識の正確。語彙の豊富。識見の高邁。内容の最新。敍述の簡潔。說明の平易。檢索の簡便。價格の低廉等である。辭書を擇ぶ者は外形の尨大に眩惑されずに、此等の要件が充たされてゐるか否かを吟味しなければならぬ。岩波哲學辭典は右の如き理想的辭典の製作を目ざして、大正六年以來波多野、石原、矢吹諸氏の熱心なる協力のもとに、編輯者能者及び書店の意氣投合せる眞摯なる努力によつて成つたものである。編輯者は嚴正なる學術的良心によつて、一切の無用なるものを振ひ落し、必要なるものは一も洩すことなく網羅した。坊間に流布せる哲學大辭書の徒らに無用なる語彙の多く、必要なるものを逸せるものと同日の論でない。また一々の術語の說明も、正確を害せざる限り、極めて平易に、また一切の冗辭閑文字を省いて極めて簡潔に敍述するを旨とした。從つて他の大辭典に比すれば、量に於て數分の一なるに拘はらず、項目數に於ては殆んど變らない。またこれらの說明が極めて正確であり且つ最新の研究を基礎とせることは、精選せられたる執筆者の顏觸れによつても察せられるであらう。それらは皆日本哲學界の權威或は新進の篤學者であつて、各その得意の項目に筆を振つてゐる。なほ各學科については執筆主任者がこれを統一し、全體に亙つては編輯者が統一を試みた。加ふるに索引には新意を加へ外國語索引を一括し、日本語索引にローマ字を用ゐ難讀術語の索引をも加へてゐる。さうして價格は稀有の低廉である。世界に於て最良を誇る事は出來ぬにしても、日本に於て最良であることは密かに弊店の自信するところである。眞の知識への渇望に燃えた現代人にとつて、この書は好き伴侶となることと思ふ。

四六倍判　背革角革函入

總頁　一千二百四頁

特賣期間　十一月末日

特價拾六圓

定價拾八圓

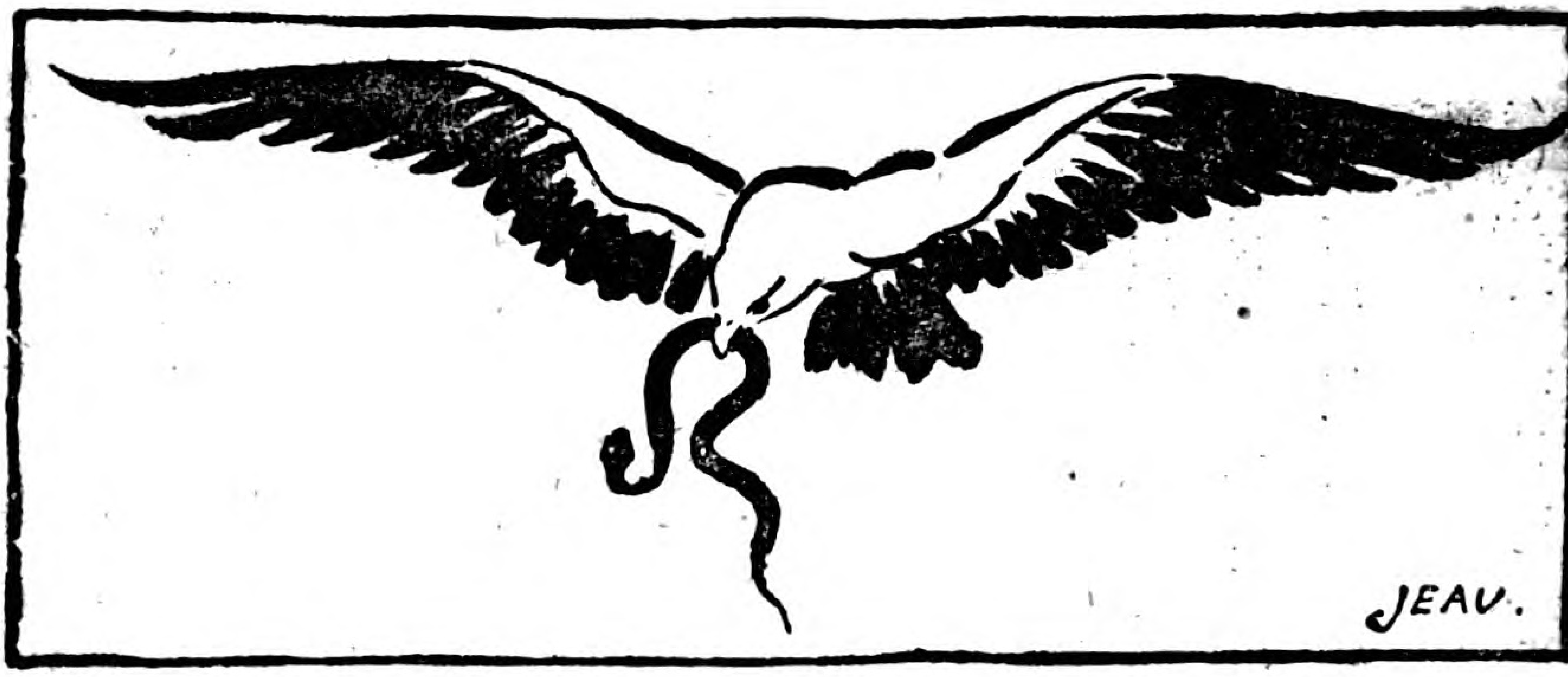
送料内地　金五拾四錢

鮮滿臺樺　金八拾五錢

内容見本　郵券二錢封入

發行所　東京市神田區南神保町十六　**岩波書店**

振替東京二六二四〇番　電話九段一二八〇番　一二八一番



==(改造十一月號)==

更生を望む政治機能

大戰とともに、すべての政治組織、社會組織に重大な變改を見るべく期待された英國、佛國は依然として舊組織を存續し、舊人物そのまゝで政局の中堅を形成しつゝある、我國また舊態ソツクリ保存されて暮色そぞろに血の氣に乏しい、何等かの期待を世人から掛けられんとした革新俱樂部は却つて犬養、島田を迎へて十八世紀色の上塗をした、固より期待さるべき何者もなく、何等の新彩もない、馬を牛に乗り替へただけの話で鈍味を一層ましたわけだ、勿論、人そのものも代替が世人の期待する所で、併せて從來の政治形式に國民が、就中青年が共鳴を持ち得ない點が多いからだと思はれる。

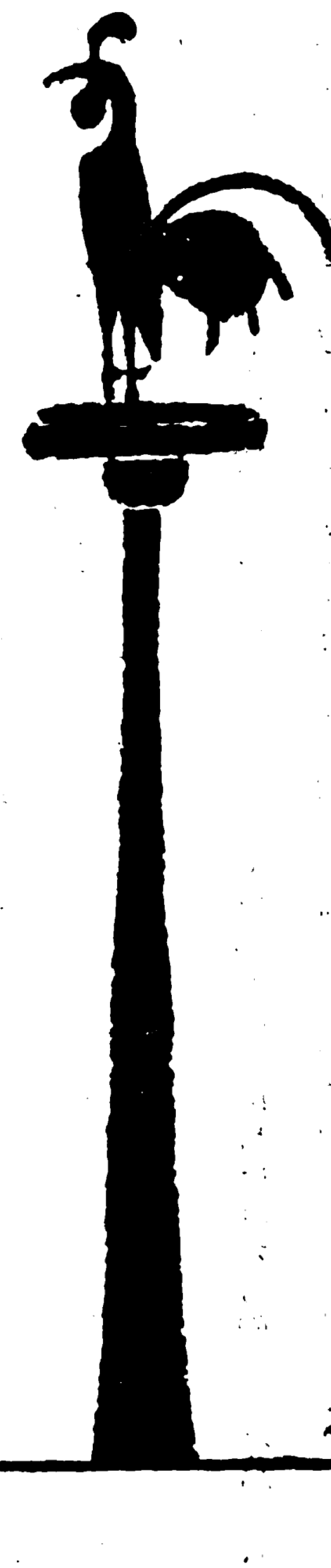
吾々は敢えて職業政治家を排斥するのではない、指導者無用を高唱するのでもない、ただ大戰後の世界が、從來のやりかたで、從來の前垂掛けの懸引式でだまされるには余りに悧發になり過ぎてゐるから、この處は一切の舊人物を——大戰前に世界の取引に從事した一切の舊人物の總てを葬り去るのでなければ駄目だと思はれる、レニン・ガンヂ・ケマル 等が我等青年者の心を深く捉へて離さぬのは何故である。ロイド・ジョージ、ポアンカレーの働くのが古き歴史の活動を見るが如くで我等の頭にピンと來ぬのは何故である、我國の軍閥の盲動もそう見える、高橋、加藤の動くのが一層そう見える。名は革新と云ふが、革新俱樂部の動くのがそう見える、かくの如き顯著な事實を心しづかに玩味したら世界の心がどう動いてゐるかが分明するだらう。

我等は政治の機能としての現組織がいかに缺陷があるかを指摘できる、我々の周圍の社會組織にいかに缺陷があるかを看取できる。

この重大な點を綱要とし得ない革新團にどれだけの期待が持てやう、若い人々も多いがその思想や、行動やには何等の光りもないではないか、老人の前に跪坐するのもよくない、そして時代の華である青年の方向に全くの臀を向けて——世界の動いておる心をも知らないで。——明治維新の殘物である慷慨の思想の殘物のみを有つて大聲叱呼したところで殘るのは自分のごだまばかりだ。

我々は革新俱樂部を悲む。

惡魔の宗教



厨川白村

一

神の宗教があるごとくに惡魔の宗教がある。そして神と惡魔との中間に人間が在る。西洋の中世傳說では、人間はしばしば自分の魂を惡魔に賣附けてゐるが、いつの世にも、智識や戀愛や眞理や財物を惡魔に捧げてゐる人間は甚だ多いしかしそれらは、人間が自分のものを惡魔に提供したり賣附けたりしてゐるのだから、まだ罪が淺い。彼等がいつのまにか神樣の物をまで持出して、惡魔の手に渡すに至つては、眞に沙汰の限りである。いま宗教について、そんな事實は無いと云へるだらうか。もと〳〵神の使徒たるべき宗教家が、いつのまにか惡魔の傳道者になり、神の宗教を惡魔の宗

教にしたりしてゐる事實は無からうか。神の御手にあつた筈の慈悲の教が、いつしか大魔王の毒手に握られた劍と變つて居はしないだらうか。浦潮にあるべき筈の武器が、いつのまにやら張作霖の手に這入つたやうに。
わたくしは先づ神殿のなかに惡魔を見出だした話から始めよう。

二

二三年前の夏はじめて私は東北地方へ行つた。講演といふ野暮用のために引きづり出されて、『奥の細道』とは似ても似つかぬ殺風景な旅をした。仙臺、石の卷あたりをうろつく時、案内の人がわたくしを松島の瑞巖寺とかへ連れて行つて呉れた。すべての名所見物をうるさがる私にとつては、それが仙臺侯の菩提所であらうが何であらうが更に用事はないので、ちよと門の所まで行つてのぞいて見た。私はそこで、見てはならない惡魔的な或る物を見た。恐ろしとも不快とも反感とも何とも云ひやうのない心持ちになつて、私は忽ちにして面をそむけて去つた。掃ききよめられた此禪寺の庭の松かげに、半點の俗塵をもとめぬ此淨域に、何事ぞ、戰利品の大砲が一つ、砲口をこなたに向けて据ゑ附けられてゐた。法燈長しへにゆらめく祭壇のかげに、錆び刀よりも錆びた人殺しの道具が飾られてゐる。墨染の衣と算盤とを、また經文と春畫とを、同一の場所に見出したよりも私は不快に思つた。

しかし不快に思つたのは、私の方が間違つてゐたのかも知れない。經典と武器、宗教と征服とは、歴史上の事實としては實に兄弟分なのである。ごく仲のよい隣同志なのである。それはちやうど、寺院の法要と銀行通帳とが、說教僧と婦女姦淫とが附き物であると同じく。

『神は偉大なり』といふ旗じるしを掲げて、右手に劍、左手に經典を高くかゝげつゝ戰場に現はれたものは、教祖マホメツトばかりではない。南無妙法蓮華經と云ふ神聖な文字が朝鮮征伐の清正の旗を飾り、また天上の靈光に現はれたと

いふ十字の記號に「この旗じるしにて汝は勝つ」In Hoc Signo Vinces といふ神の啓示を標語として軍を進ませた者はコンスタンテイン大帝であつた。もとく〵人間の腹の中では、神と惡魔とは同居してゐる。詩人ブレエクの口吻を用ゐて云ふと「天國と地獄との結婚」から生れた子供が人間なのだから、その腹の中では、神は惡魔によつて立ち、惡魔は神によつて養はれる。二つのものはお互に利用したり利用されたりしてゐるのだ。そこで、この人間性の半面である神性が今では宗教信仰となつて現はれ、他の半面にある獸性惡魔性が征服欲勝利慾また爭鬪本能となつてゐるのに不思議はない。そしてこの二つの者の野合の結果、經文と武器とは實は極めて仲の好い事を示す多くの恥づべき事實を人類の歴史に曝露してゐる。憲法といふものが信教の自由を認めて置かないと、信仰の相違の爲めには刄物三昧に及び、戰爭や喧嘩までもやり兼ねないのが、末法濁世の淺ましさだ。十字軍をはじめとして歐洲の歴史に絶間なきほど多かつた宗教戰爭は、食物の爭奪即ち領土主權の爭ひと宗教宣傳との緊密な關係あるが爲めに行はれた慘劇であつた。かつて三百年のむかし、切支丹の教徒に向つて、歐洲史に見るのと同じ殘忍なる迫害を加へて、同胞の中から多くの殉教者を出したものは日本人である。明治になつてからも、田舍に基督教會の建物が出來ると、それに石を打つゝけてゐた者どもの心理をおもへ。その潜在意識のかげには果して何があつたか。

日本人の宗教信念とその偶像禮拜心とを、少くとも過去の時代に於ては、完全に支配し得た神社佛閣に、血で汚れた錆刀や大砲などの戰利品を麗々と飾られた日本の政治家と軍閥とは、極めて聰明にして巧智な、そして深謀遠慮ある者であつた。かれらはマホメツトよりも淸正よりも、またコンスタンテイン大帝よりも遙かに巧妙なる煽動家であり、また野蠻なる戰鬪者であつた。今から十數年前、かくの如き巧妙なる方法によつて、軍閥と民心とを永久につなぎ合さうとした某々宰相の如き、もし彼等をして封建時代に生を享けしめば、智勇兼備の名將はおろか、幕府三百年の覇業を創

める位は、恐らく朝飯前であつたらう。かれ等は經典と武器とが、法衣と算盤とのごとく、また過去帳と春畫との如く極めて仲の好い物であることを、ちやんと心得てゐたからである。

三

いま改造の途上に急ぎつゝある世界人心の不安動揺は、唯だわづかに三つの差別あるに基く。詳しく云へば、この三つの差別あるが爲に生ずる反抗鬪爭を、何とかして解決すべく世界を擧げて努力してゐるのだ。先づ第一には民族（或は國家）の別より生ずる反爭。第二には兩性の差別より生ずる反爭、第三には階級の差別に基く鬪爭。そして此三つの爭鬪のいづれに於ても、寺院教會の既成宗教は屢々強者のために利用せられ得べき屈強の武器であることを、過去現在の事實が明かに證明してゐる。否、單に人間の肉體を征服するよりも毒瓦斯よりも、既成宗教は屢々精神的征服のための武器として、更に一層恐るべき精鋭強大なる惡魔の威力を發揮し得たのだ。甚しきに至つては、劍や鐵砲が全く用をなさないやうな鬪爭に於てすらも、寺院教會の宗教のみは、征服者のために最も都合よき武器である實例は極めて多い

第一民族鬪爭のために、宗教が、進軍の先頭に押し立て行く旗じるしとなり、手先であつた例の極めて多い事は、既に上に述べた。いふまでもなく宗教信仰は人々の創造生活に屬する問題であり、またひろく人類の爲のものであつて、その本來の性質から云へば、決して國境や民族の差別の上に立つ者でない事は、わかり切つた話だ。印度の黑人が佛教を信じた如くに、吾等日本人も亦同じ佛教を信じ、また日本人が敵國人と同じ宗教を信じて隨喜渇仰の涙を流したからとて少しも不都合はないわけだ。もとより同じ佛教であり基督教でありながら、それが或る特殊の國土や民族の宗教となるとき、自然にその特殊な國家や民族の色彩を具備するに至ることも、おのずからなる現象として咎むべき事ではあるまい。唯だそれが惡用せられる事によつて領土の擴張の帝國主義の手先となり、資本主義的國家の擁護の武器となるとき

それは明かに宗教としての頽落であるのみならず、人類に與ふる害惡も亦た眞に恐るべき者がある。

いま世界は此第一の民族鬪爭の問題を解決すべく永久平和の大理想をかゝげ、先づ其最初の一歩を踏み出すべく、極めて姑息なる軍備縮小と云ふが如き手段を試みてゐる。しかしたとひ之を極度に完全に實現し得て軍備全廢の域に達しやうとも、依然たる資本主義の經濟戰を以て之に代えるならば、結局人類の不幸は唯だその形を變化した迄で、世界平和の大理想は果敢なくも蹂躪せられるのだ。かういふ時にこそ最も力をこめて、この大理想の實現の爲に盡し得るものは、本來國境や民族の上に超越して人心を支配し得る宗教そのものであらねばならぬ。然るに二十世紀の歴史上には、神に奉仕すべき宗教家みづからが、永久平和の大理想に向つて貢獻するどころか、寧ろ惡魔の手先となつて之を蹂躪しつつ破壊してある多くの事實を眼前に見るのは何とした者だらう。

わたくしは固より英米の兩國に於て、基督教徒が近世の平和運動の爲に盡すところ極めて多かつた事實を認めるに躊躇する者ではない。しかし夫れは單に英米だけのことで、獨佛露の如きに至ては、甚しく無力なものであつた。現に昔帝政時代の獨逸は、自國を以て神の國なりと宣し、亞非利加や極東に向つて領土侵略の帝國主義を實現しようとするとき、基督教の神は、いつもカイゼルと云ふ惡魔のために手先きに使はれた道具であり武器であつた。はじめ膠洲灣に土地を占領しようとする時、惡魔が抱藏せる野心を滿足せしむべき二人の宣教師は、先づ山東地方に神の教を說いた。そして或る支那人の妻女を姦した。これが爲に其宣教師が殺されたとき機は熟した。乃ち獨逸の加特力教會は之に抗議する事によつて、軍閥國家のために山東占領の好個の辭柄を拵えてやつた異教徒を教化して基督の教によつて救つてやらうと云ふ布教傳道の宣教師は、あれは實は身に寸鐵をだも帶びざる最も精鋭なる兵士ではなかつたか。むかし印度を征服した英國が先づ東印度會社といふ商賈人によつて侵略を行つたのは寧ろ舊式だ。今日では算盤よりも先づさきにバ

イソルの方が侵略の武器として重寶がられてゐる。

獨逸は嘗て Berlin から *Buda-Pasth* を經て *Bagdad* に至る三つのBを貫く鐵道敷設の惡魔的夢想をゑがいて世界大戰のもとをなした。其獨逸が破れて、今度はまた同じ近東土耳其あたりに聯合國が馬鹿々々しい慘劇をはじめた。エホバの神を信ずる基督教徒とアラアの神に仕ふる回教徒との爭の歷史は古いが、二十世紀の今では、エホバもアラアも共に領土利權爭奪者の看板に過ぎない。資本萬能の帝國主義と亞細亞に對する民族的反感とは、基督教を旗じるしとして、實はメソポタミヤの石油坑に垂涎し、バグダツド鐵道をねらつてゐるのだ。更に一方またケマル・パシヤの蠻勇に率いらるる回教徒に至つては、是はもう教祖以來、惡魔の劍を振りまはすに慣れたる三億萬の未開人だ。來るべき天國はおろか、いま眼前にインフエルノを現じつつある餓鬼畜生の爭ひである

この爭鬪は單に國際間に於てのみではない。同じ一國内ですら、英國の愛蘭問題のごとき、アルスタを除いた愛蘭が聖パトリツク以來、頑固な舊教徒であるが爲に、あの紛擾は半世紀にわたつて、今になほ砲火劍戟の爭亂をさへ繰返すのだ。愛蘭の自治とか獨立とかケルト人種だからとか云ふ問題ばかりに基くのではない。

わたくしは二十世紀の現代に於て、今なほ斯くの如き事例が無數に多い事を知るが故に、一々それを列擧し指摘するの煩を避ける。唯だ、さきに英米の基督教徒が平和運動に貢献するところ多かつた事を云つたが、それに就ては、また別に、彼等が『右手のなすところを左手に知らせない』やうな顏をして、われらのすぐ近くの朝鮮や支那内地などに於て何事をなしつつあるやをも一顧しておく必要がある。即ち今日世界に於ける最大最盛の資本主義的國家である米國といふ國民的色彩の極めて濃厚な基督教宣教師が、その米臭紛々たる基督教を提げて朝鮮支那に於て何事をなしつつあるかを思へ。かれらは彼等の後からついて來るべき自國の資本家の爲に先づ道を拓くべく、その民族的勢力扶植のために、バイソルと

祈禱とによつて、砲彈や潜航艇以上の目ざましき惡魔的侵略力を發揮しつつある事實を見よ。聖書と祈禱とでも追附かないと見ると、幾多の美名のもとに今度は慈善病院をまで建てて民心を收攬する。さぞかしベタニヤのラザロのやうに死んだ者までが生きかへる事であらう。經文と劍とを兩手に持つて行つたマホメットや、むかし南都北嶺の坊さんが僧兵となつて惡鬼のごとくに戰つた位は、まだ無邪氣であつたが、現代の宣教師は、バイブルの外にまだ毒瓶をまで提げてその征服慾と勝利慾とを滿たさうとするのだ。××××××××××××××××××××××××××××××、××。××××××××××××××××××××××××××××××××××、××。

しかし英米の基督教徒の中には、とにもかくにもPeace at any Priceの極端説をさへも唱へて、國際平和の實現に努力したものは多かつた幾千萬の日本佛教徒は、世界平和の大理想の爲に今まで果して何者を貢献したか。××××××××××××、×××××××××××××××××××××××××××××××××××。しかし永久平和と自由解脱の極樂淨土を西方十萬億土の遠きにのみ求めずして、先づこの現世界の地上に建設すべく、たとひわづかなりとも彼等は努力した覺えがありと云ひ得るか。

平和の神の教が民族鬪爭の具となるとき、血を見て喜ぶ惡魔の顔に浮べる會心のほほえみを見よ。

四

次には、第二の兩性の差別から生ずる反爭に就て、なるべく簡單に一言しよう、この第二の反爭を解決すべく、いま婦人問題が世界の人心を惱ましてゐる。元來がこの兩性反爭は決して砲火劍戟に訴ふる事の出來ない性質のものである

が、この場合に於てすらも、寺院教會の既成宗教は、横暴なる男子專制の爲やはり絕好の武器となつて役だつ事を忘れはしなかつた。また顧つて考へると、遠い〱過去に於て女性中心の社會が滅びて了つて以來、今日に至るまで幾千年の間、男子は其暴力によつて絕對的强者として女性を壓迫して之に君臨し得たがゆへに、必ずしも他の武器を借るほどの必要もなく、安心して、たやすく女性を蹂躙し虐使し征服することを得た、從つて唯だわづかに布教傳道者の口を借つて、婦人屈從の輕便な旗じるしだけを掲げておけば、それで充分に濟むのであつた。そしてその旗じるしと云ふ者が、やはり宗教から得たものである事は云ふ迄もない。然らばその旗印とは如何なるものぞ。

人間の腹の中に巣をくつてゐる惡魔は、食物の爲の爭鬪本能ばかりでなく、今度はまた性慾といふ別の姿になつて、更にその恐るべき猛惡兇暴の威力を發揮してゐる。古代の原始宗教に於て、また今日の淫祠邪教に於て、此惡魔が神と握手し提携したとき、それは各種の生殖器崇拜教となり、また甚しきに至つては、おぐらき神殿のかげに、犧牲や供物や救濟と云ふ神の名に於て行はれる司祭僧侶の婦女姦婬となつて現はれた。昔からすべての宗教學者、すべての性慾學者が說くところの宗教信仰と性慾との極めて密接なる關係に就ては、今さら私のやうな門外漢が之を繰返す必要もないであらう。實際、兩性問題に於ては、神の名に於て立てる宗教は、その起源發達の歷史からして既に明かに惡魔の宗教たる立派な資格を具へてゐたのであつた。

幼稚な宗教生活の心境は、先づ自我の放棄に於て法悅の快感を喜ぶ事である。司祭や僧侶の手に導かれて祭壇の前にぬかづき合掌禮拜せるとき、多くの善男善女はたやすく自己のすべてを投げ出して、忘我恍惚の境に入る。職業的宗教家である多くの妖僧や惡僧や怪僧は、人心のこの虛に乘じ、心のゆるみに附け込んで、善男からは巧にお布施と稱する財物を卷き上げるとおなじく、更に弱きが常なる女からは、その天地にも易へがたき貞操を、やす〱と事もなげに捧げしめた。

地方あたりの説教僧が良家の處女や寡婦を姦するばかりではない。江戸時代の「蓮華往生」も、古代の埃及印度などの神殿で普通に行はれた「宗教的賣婬」も、また露西亜帝政の末路 たくみに其宮廷貴族の女たちを誘惑して居た怪僧ラスプウチンの魔力も、すべてみな同一の心理から解釋せらるべき事であつた。×××××× ×××××××××。學者が呼んで『宗教的賣婬』と總稱する者は、神を象徴し代表せる或者によつて婦女の貞操を穢す風習を謂ふのである。之には色々の種類があつて、たとへば、×××××××××××××××、××××××××××××××××××××××××××、神の偶像を抱擁せしめるとか云ふ類のは甚だ多い。しかし最も普通でまた最も惡性なるものは、地上に神を代表せりと云ふ王侯若くは僧侶が、自ら所謂「活き佛」になりすまして、此恐るべき姦婬を行ふ事である。宗教家とか僧侶とかいふ者に、今も昔も女たらしが多いのは、要するに惡魔と神とのこの握手提携だと思へば何も不思議はないのである。經文と春畫とは昔から極めて仲の好いものであつた。

この極端なる實例としては、たとへばバビロンのミリツタ崇拜 Mylittacult のごとき、今日、常人のあたまでは到底考へられもせず信じられもしない樣な醜怪な風習が、かつて熱烈なる宗教信念を以て行はれてゐたのであつた。多くの「寺院賣婬」や divine harem などもすべて皆おなじ意味のもので、東西古今にわたつて少しも珍しい話ではない。寺院には歌舞音曲をする無數の女が居て、戀愛の有無なぞはもとより問題外として單に祭式として「不見轉」の性交が行はれる。參詣者はそれによつて「淨め」られ、賣婬の料金は「淨財」として寺院の收入となつた。印度あたりの寺院の大規模なものには、千五百人ぐらゐの女僧があつて、それには良家の娘が尠からず居た。みな幼時から寺院で特別な教育をうけて、國中で教育ある女と云へば、恐らく是等の巫女の外にはなかつた位のもので、それがみな此宗教的賣婬を營むのであつた。希臘のコリンスに在るアフロヂイテの神殿の賣婬女僧の數は、一寺院だけでも一千人に達してゐたさ

うだ。その他、殿堂の境内で性交を許さない場合には、寺院の周圍に於て此種の賣婬窟の非常に多い事は、現在の日本に於て觀音の靈場とか何とか云ふ土地に之と全く同一の魔窟が堂々として存在する事によつて、たやすく理解せられるであらう。近松や西鶴の作に出てゐる歌比丘尼といふ尼僧すがたの賣婬婦も亦たわが日本に於ける此實例の一つだ。またかの『十訓抄』や謡曲にある江口の女、普賢菩薩となつて上天すと云ふ話は、實は普賢菩薩が、性慾に惱める男子を救はんが爲に、しばらく遊女に化身して居たと云ふので、傳説としての意味は矢張り同じものだと解し得られるだらう。

かくの如き實例は枚擧に遑がない。今さらエリス、ブロッホを繙き、或はフレイザアの『黄金樹枝』の如き名著から受賣りをすれば、古今東西にわたつて際限がなからうが、私にはそんな餘暇はない。また以上のごとき幼稚な原始的な宗教でない場合に於ても、廣く一般に宗教心理と性的心理との交渉に就ては、宗教學性慾學人類學のほか、また別に心理學の方面からも、たとへばジェームスの『宗教的經驗』(レリヂアス・エキスピリエンス)なぞのうちに論じられてゐる通りだ。わたくしはなほ更に進んで、今日の佛教とか基督教とか云ふ遙に進化した宗教が、如何にしばしば男子專制婦人征服のために好個の武器を提供し、有功なる旗じるしであつたかを指摘しよう。

××××××××××××××××××××、××××××××××××××××××××××、古代宗教の婦女姦淫も亦た、後に至つては色々な美名によつてその形式を變へて進化した。教會は花嫁で基督は花婿であると云つて見たり、尼さんや信心ぶかい處女のことを、神の花嫁たちと言つて見たりするのは毫も珍しくない。尼僧がはじめての得度式には花嫁の盛裝をして神の祭壇にぬかづき、この神秘的なる結婚式によつて永久に基督の妻となると云ふのだ。性慾の惡魔がさまざまに姿を變へて佛智不思議となり宗教的神秘說となると共に、羅馬舊教の祭式ともな

り、聖母崇拜(マリエンクルツス)ともなつたのだ。新教に於てもまた、かのディクソンの著『精神的の女房たち(スピリチュアル・ワイブス)』に數へあげられたやうな奇怪な多くの現象を見るに至つた。

宗教の進化は、やがてその女性觀をして、幼稚な原始宗教とは全く正反對の觀を呈するに至らしめた。即ち女人凌辱は、今度は逆轉して女人崇拜となつた。女子の生活の全部が男子性慾の對者としてのみ觀られるとき、さきに之に屈辱を與へてゐた者が、今度は更に悧巧になつて、之を尊崇禮拜するに至つたのに不思議はない。つまり逆の手を執つただけで、男子と同樣な人格を「人」としての婦人に認めない點に於て、根本精神は少しも異る所がないからだ。日本の佛教は、階級的な、そして男尊女卑の孔子教を奉じた支那を通うして傳來したのだから趣を異にするが、印度の佛教には先づ天を拜し地を拜し太陽を拜し、また女人を拜せよと云ふ思想が、たしかに存在した。しかし此女人讃仰の極端なるものは、固より中世基督教の聖母崇拜(マリエンクルツス)である事は言ふまでもない。即ち聖母マリアによつて現はされた「女性」を禮讃し渇仰する事によつて、そこに救ひの神を見出したのであつた。

さきに私は女性觀の逆轉といつた。そして端がはからずも聖母崇拜に及んだとき、惡魔の宗教の女性觀が如何なる進化の經路を取つて、今日の婦人侮辱思想となつたかを語るべき好機を得た。

羅馬舊教で云ふところの清淨受胎説(イマキュレート・コンセプション)は、何も西洋ばかりではない、日本の佛教にもいくらも有る。試みに『古今著聞集』の釋教の部を繙いて見ても、同じ樣な救世主降誕說話はいくつも出てゐる。女が佛や偶像を夢みて孕むと云ふ類の話は、若し之をさきに述べた僧侶の「宗教賣淫」にあらずと見るならば、此清淨受胎說に歸するほかなきものではないか。たとへば、

御母の夢に、金色(こんじき)の僧きたりて『われ世を救ふ願あり、願くはしばらく御腹にやどらん、我は救世菩薩、家は西方にあり』とい

ひて、をどりて口に入ると見たまひて、孕まれ給ひつる所なり。――『古今著聞集』卷二、

性信二品親王は、三條院の末の御子。御母は小一條の大將濟時卿の女なり。むかし母后の御夢に、胡僧來りて『君の胎に託せんと思ふ』と申しけり。その後懷姙したまひけり。――同上。

平等院僧正行尊は一條院の御孫、侍從宰相の子なり。母の夢に、中堂にまゐりたりけるに、三尺の藥師如來を抱き奉ると見て、いくほども經ずして懷姙ありけり――同上。

マリアの清淨受胎はプロテスタントの方では否定してゐるが、とにかく、亭主に覺えのない子供が出來たのならば、それが基督だらうが、「××××××××××、×××××」だらうが何だらうが、それはみな明かに姦通によつて生れ出でた私生兒に相違ない。東西の宗教家といふものが兩性關係に就て僅くまでも馬鹿々々しい苦をなさなければならぬに至つた其動機を深く考へて見ると、その裏面には婦人征服の宗教的な新しい旗じるしが、たやすく發見せられる。

五

進化と共に逆轉して女人崇拜となつた清淨受胎說の根本には、性慾の絕對拒否がある。正しい生殖行爲をも否定し去らうとする禁慾思想が、疑もなく其根柢に存在する。茲に至つて、惡魔は更に恐るべき新しき假面をかぶつた。すべての種類の宗教が、皆ことごとく或程度の禁慾思想を主張せる明確なる事實あるを見よ。

婦人の人格をみとめずして、單に夫れを橫暴なる男子が自己の性慾滿足と生殖作用の對象としてのみ見るとき、禁慾思想はやがて女人罪障の說となつてあらはれた。すでに婦人の人格を認めないのだから、性慾の人格化、即ち私がさきに『近代の戀愛觀』に於て反覆して說いたやうな戀愛は到底考へられない事になる。個性化されたる人格的な性的生活即ち戀愛を、正しく認めて居ないのだから、勢ひ荒淫亂行となるか、然らずんば此不自然なる禁慾思想たらさるを得な

いわけだ。即ち女人といふ者から性的生活を全部引き拔いて、淸淨受胎說と云ふ馬鹿げ切つた虛僞を作り出し、これを禮讃して居たのである。姦淫と禁慾と、凌辱と崇拜とは、婦人の人格を認めざる惡魔に取つて、兩方ともに、極めて都合のよい旗じるしであつたのだ。すべての兩極端は相等しい。原始宗教の婦女姦婬も、進化した宗教の禁慾生活も、外面は正反對だと見えながら、實は全く同一物に外ならないのである。

禁慾主義に立てる昔からの高僧の多くは、强烈なる情慾の人であつた。聖僧と云はれる人たちの顏を見るとき、私はしばしば惡魔的な性慾犯罪者をさへも聯想する。また僧侶に限らず、すべての禁慾的傾向の思想家は、强い性慾の爲に自分がひどく苦しんだ體驗ある人か、或は嘗て Voluptas の生活に溺れた人で、是は現にトルストイなぞの自らの告白によつて明かに知られる。(ことわつて置くが、私は決して之を惡いと云ふのではない。藝術なぞも矢張り性慾の轉化で私はロダンがアトリエでの仕事服を着た寫眞を見て、あの淫蕩の怪僧ラスプウチンを想ひ出した事すらあつた)。

筆が思はず橫道にそれたが、この禁慾思想はまづ初代の基督敎に於て保羅の敎であつた事は人の知る通りだ。その婦人に對する敎訓に云ふ。

『婦なる者よ、主に服ふが如く己の夫の服ふべし。そは基督敎會の首なる如く夫は婦の首なればなり。基督は身の救主なり。されば敎會の基督に服ふごとく、婦もすべてのこと夫に服ふべし』——以弗所書五、二十二——二十四

亭主を活き佛か神の化身だと思へと云ふのだから、此婦人壓迫は日本の夫唱婦隨說どころの騷ぎではないと思ふ。もとより私は之を以て古代の僧侶が、自ら活き佛となり救ひ主となつて婦人を姦し、或は犧牲として神前に女を獻げたのと同一視する者ではないが。

しかし禁慾思想によつて、基督敎が眞に婦人征服の完全なる武器となるに至つたのは、言ふ迄もなく中世紀に於てで

ある。男子專制の思想は、婦人をおのが性的生活の對象たる奴隷としてのみ見るが故に、性慾を否定すると共に、女人を以て一切の罪惡の素因なりと見なし、人生の魔障なりとして之を侮蔑した。（同一の中世時代に於てすら女人崇拜の他の半面に此反對現象を見る事は、既に上にも述べた通り、自然なことではあるが、また興味ある事實だ）。拉典語の女 Femina の語は「信仰なきもの」を意味し、女性は永久に呪はれたる者として、さげすまれた。そこで橫暴な男子が考へ出した極めて面白い、そしてまた婦人侮辱思想の態度を示した有力な一つの旗じるしが出來た。それは即ち中世の「妖女の術」である。

妖女といふ思想は必ずしも中世基督教の創始なりとは限らない、世界到る所に類例がある。即ち男子が自分の性慾の抑制すべからざる不思議の威力を一種の魔法だと信じ、その魔法を相手の女になすり附けて了つたのだ。即ち女人は魔ものであつて、この妖術を行使する者だと說いたのであつた。獨逸語の妖女に當る言葉は Hexe だが、その語源は、Hagat 即ち「流浪の女」の意であつた。すべての女人は、玆に到つて遂に惡魔その者だと考へられた。今日の吾々から考へると兒戯に類した思想ではあるが、この旗印は近代に到るまで非常に頑固な迷信となつて、歐洲の人心を支配し得たのであつた。（古代の宗教賣婬の場合は、つまり性慾滿足によつて、この魔もの——佛教で云ふ〝魔〟——を拂ふ事を得るが故にこれを救濟だと思ひ、宗教的法悦の恍惚境だと感じたのであつた。）

基督教神話に云ふエバが智慧の木の實（即ち性的智識）を味つてから、人間は墮落して神の樂園を追はれた。一切の性的生活は罪惡だと云ふ所から、かの原罪說は生れた。淸淨受胎などと云ふことも畢竟するに、この原罪なるものを、女人から無理に抽出しようとして出來た說話に過ぎない。かりに禁慾思想を正しとしても、そしてまた性慾を以て魔障なり陰魔なり罪業なりと見るとしても、性慾生活は男子も女子もお互樣の事なるが故に、婦人のみが此禁慾思想の結果として侮辱を受ける謂はれは、寸毫だもあり得ないわけだ。女人よりも寧ろ性慾熾盛なるが常なる男性ことに破戒僧な

どこそ、罪業の權化だと云はれなければなるまい。

禁慾主義の佛教が同じくまたこの旗じるしを用ゐて、婦人征服の武器としてゐる事は、固より言を俟たない。高野の山は長い間女人禁制であり、說教僧はいつも壇上から、女子に五障三從ありと云つて、今日なほ參詣の婦女に向つて甚しき侮辱を與へてゐる。禁慾の宗教としては極めて寛容の態度をとれる念佛宗に於てさへ、その『淨土和讃』の一首に云ふ、

彌陀の名願によらざれば、
百年萬劫すぐれども、
いつつのさはり離れねば、
女身をいかでか轉ずべき。

古來宗教家は、さながら變態性慾病者のサディズムのごとくに、東西ともに女を虐めることによつて自瀆的快感を貪ぼつたのだ。女は虐められながらも、外ならぬ往生成佛の一大事で「百千萬劫すぐれども」救はれないぞよと云つて、活き佛を粧ふ僧の口から此猛烈なる威嚇を受くるに至つては、婦人たるもの、長い間、文句は云へなかつたのである。宗教の惡魔的威力も亦た偉大なるかな。この點に於ては軍閥的國家擁護の惡魔の劍としてよりも、それが人生の根本問題である罪惡觀などを利用してゐるだけに、一層また有力な旗じるしであつた。

犯罪者のなかに、心から宗教信仰深きもの見ること稀ではないといふ事實を、犯罪學者は指摘してゐるが、以上わたくしが述べた宗教の性的暗黑面を見ただけでも、這般の消息は容易に理解せられるであらう。既に餘りに長きに失した此一節を終るに先だつて、私が曩に世に公けにした『近代戀愛觀』に就て、序ながら玆に一言して置かう。

自覺ある個人がその性的生活を强く個性化したものが戀愛である。それは云ふまでもなく個人としての對等の人格を

基礎としてゐる。ところが婦人を男子よりも一段と下等なものにして、戀愛なき凌辱的、不見轉結婚をも神聖なりとし正義なりとする爲にはさしあたり宗教の惡魔的威力を借る事は最も都合がよい。古代の寺院賣淫などは全然戀愛を無視して相手構はずに「神聖なる」性交が行はれたのだ。支那の方では立派な宗教になつてゐた孔子教の、祖先崇拜、階級差別の教を日本化したる家族主義の信仰が、如何に多く、この人格的なる戀愛結婚妨害の利器として役だつてゐるかを思へ。××××××××××××××××××××××××××。ちやうど古代宗教が結婚式に際して先づ王侯とか僧侶とか家長とかに「初夜の權」Jus primae noctis を與へて、處女の神聖を奪はしめたと同じく、今ではその Defloration が見ず知らずの新郎によつて行はれると云ふだけの違ひだ。生蠻の生首が勳章に進化したやうに形だけは少し高尚になつても根本精神は變化して居ないのである。すべての不合理を合理的に見せかけ、醜穢なる蠻行を神聖にして道德的なるかの如くに誤魔化すために、宗教もしくは夫れに類似したる一種の信仰は、常に至便最良の假面を提供する。

六

第三の差別に基く反爭は即ち階級鬪爭だ。この爭ひに於て、傳來の誤れる既成宗教や寺院教會が、貴族資本家などすべての特權階級のために、今も昔も、如何に巧に惡魔の爪牙となつて御用を勤めつゝあるかに言及しよう。

すべて强者の專制恣横は、宗教の魔力を借りずしては行はれ難い者だ。昔から多くの暴君や專横の貴族は、この理由のために必ず先づ寺院僧侶を保護した。神とか佛とか寺院とか教會とか何とかいふ偶像を背後にして僧侶が物を言ふとき、理屈なしに人は首をうな垂れ易いからだ。嘗て宗教家の言說に、不思議な一種の感化力があり魔力があると思はれたのは、實に其背後に光を放てる偶像の蠱惑であり權威であつたのだ。さながら魔法使ひの杖のごとく意のまゝたや

ずく弱者を左右し得る點に於て、御用學者や道學先生の言論よりも遙に有力なる平和の武器であつたのだ。讀經壇の前に合掌禮拜するとき、人はいつもの自己を放棄してエクスタシイの心境に入る。つまり一種の催眠（ヒプノチズム）にかゝれる其虚に乘じて、魔王の黒き手は易々として彼を動かすのである。さながら電車のなかで何かに見とれてゐるひまに財布を掏られるやうに。

私は今さら中世の羅馬教會と法王の教權とが如何に恐るべく偉大な者であつたかを繰返すの煩を避けよう。また佛蘭西革命以前の貴族と僧侶との關係などを擧げて東西の歴史上に、專制の怪力としての宗教が、如何にしばく巨大なる暗影を投じたかをも云はないであらう。唯だ茲にまだごく新しい事實として、露西亞專制政治崩解前における希臘教會の偉力を見ようと云はう。かのロマノフ王家の虐政は教會の神秘的威力を唯一最大の武器とする事によつて、はじめて行はれ得たのであつた。教會の議決命令信條は直に神の宣言として、救世主の名に於て行はれるが故に、すべての modes は云ふまでもなく、政教いづれの方面に於ても、その絶對の命令には必ず絶對の服從が要求せられた。露國の希臘教會は一億萬に近き民衆を信徒としたが故に、儼然として帝都に君臨せる大魔王のごとき其シノッド（總本山）は、常にあの尨大なるザアの帝王を、意の儘に左右し得たのであつた。一世の大思想家トルストイも之がために破門せられた。信仰の人ドイトストイエフスキイが、西比利亞の曠野に流囚幽閉の身となつて、『死人の家』に描いたやうな慘憺たる迫害をうけた志士は、數知れず多かつた。ラスプウチンに劣るまじき幾百幾千の怪僧と妖僧と俗僧の魔の子によつて、遂に今の赤色の露西亞を生むべき素因が、過去半世紀の間に釀成せられたといふ戰慄すべき事實を回顧せよ。神の救ひ、み佛の慈悲の名に於て働き得る魔王の宗教的威力は、何も遠く時代を隔てた昔の歴史談のみではない。

人或は云ふだらう、それは專制政體露西亞の特別の國情に因るのだ。英米その他の諸國に於ては然らずと。それならば僕

び思へ、今日いづれの國に於ても、その寺院教會或は青年會や救世軍の如き凡ての宗教團體が、果して何人の資力によつて維持せられつゝあるかを。詳しく言へば幾千萬の宣教師僧侶といふものが、精神的にも肉體的にも何等の苦しい勞働に服せず、唯だアーメンを唱へ木魚をたゝく事によつて、金襴の袈裟法衣を纏うてやすく／＼と生活し得るのは、主として何人の資金によつてであるか。あの巍々として雲表に聳ゆる大伽藍大殿堂におさまつて、數奇をこらした庭園を控えた書院の一室に閑日月を送れる僧侶は、その衣食の資を主として如何なる階級に仰ぎつゝあるかを思へ。もとより吾々のやうな貧乏人の金をも、多少は捲き上げてゐるに相違ないが、そんなのは先づ貧乏寺か然らずんば所謂貧者の一燈で固より云ふにも足りない。その維持資金の大部分が支配階級資本家大地主などの寄進であり寄附であることは今さら云ふまでもない事實だ。

米國は世界に於ける最大の資本家國であり、また寺院教會の最も富有な國だが、その國でのまた最大の資本家の一人であるロツクフエラの爺さんが今年八十幾つかになるまで、寫眞といふものを嫌つて滅多に寫させた事がなかつた。――私はこの話を、つい前週に或る外國雜誌で讀んだのだが。――そこで或る新聞記者が、無理にでも寫眞をとらせて呉れと賴むと、翁は遂に之を諾した。然しそれには一つの條件があつた。お前さんが來月まで、毎日曜には缺かさずに私の行く教會へお參りするなら、そのあとで寫させてやる。記者は遂に其言の通りにして此寫眞を得たと云つて、皺くちやの爺さんの顏が寫眞版になつて出てゐた。如何にも、之なぞは日本でも資本家の御隱居さんの云ひさうな事だが、その教會が又ロツクフエラ家の巨萬の大寄附金によつて維持せられて居る事はいふ迄もなからう。またかの支那朝鮮の内地などへバイブルと醫療器械とを提げて行つて、資本主義的國家大發展に資しつつある多くの宣教師も、これら資本家の財源によつて派遣せられてゐる事も言を要しないのである。

米國とちがつて日本のやうに古い歴史を有する國では、今日なほ寺院が幾百年前から支配階級によつて與へられ保護せられた牢固な基礎の上に立ち、その或種の者の如きに至つては既に巨萬の世襲財産を擁して、併併みづから既に立派な御前樣であり貴族でありブルヂョアである。從つて事柄は更に明瞭だ。

多年うまい金儲けをして身は大資本家となつて貴族に列せられる頃には、引退して何食はぬ顏で、今さら論語なぞを說いて廻つた男があつた。それも長年の罪滅ぼしには誠に結構であるが、多年の搾取によつて積み得た巨萬の財を寺院に寄進して、新聞記者にお寺參りを强要する亞米利加の御隱居さんとは實に好一對の者であらう。わたくしは經濟學に就て何等の知る所はないが、陶朱猗頓をしのぐ資本家のあの私有財産が、もし第四階級からの搾取によつて成立する不淨の財なりとするならば、寺院や教會に寄附せられてゐる淨財といふ者の大部分が、如何なる罪惡の罪滅ぼしであるかまた如何なる性質來歴のものであるかは、民衆の一考に値ひするではないか。極めて無遠慮に云へば、さきに述べた原始宗教に於ける「寺院賣淫」の賣淫料と軒輊する所なき不淨の淨財ではないか。

こゝに至つて私の念頭に浮ぶものは、バアナアド・シヨウの傑作である三幕物の戲曲『バアバラ少佐』である。作者一流の辛辣痛烈を極めて皮肉を以て、世界最大の軍器製造業者アンダアシヤフトをして、資本家一流の奇怪なる人生觀を語らしめ、この人殺しの武具製造者の娘バアバラをして、救世軍といふ宗教團體の一士官たらしめ、之に對するにバアバラの戀人である希臘語の敎授や、『神樣に救はれなくたつて好いから、早く俺の情婦を返せ』と云つて救世軍に怒鳴り込むビルといふ若者や、救はれるとまた直ぐに救世軍で金を盜むプライスや、その他色々の人物を配合して、巧みに現代の宗教團體と階級鬪爭との關係を深く突込んで描き出し今日の社會問題に就て色々考へさせる作品である。その二幕目の終に近い所に、救世軍が貧民救濟の事業資金に窮して、二大富豪から一萬磅を受取る話がある。半分はボウヂヤアと

によつて、之れ泥醉といふ害惡を世に廣める大酒造業者、さきにヘイキントンのお寺を再建した功勞によつて男爵に叙せられた資本家から得られた。あとの半分は即ち軍器製造業者アンダシヤフトの寄附金で、色々の殺人機械を造つて神の平和を破壊する惡魔が、勞働者を搾取する事によつて儲けた金だ。作者シヨウは此問題に關して、例によつて長たらしい其序文の一節に於て言ふ、

『富への施物分配者としての宗教團體は、壓政者補助のやうな者だ。石炭や毛布やパンや砂糖水で「貧乏」の謀叛的な鋒先きを取り拂ひ、來世に於ては廣大無邊の幸福が得られると云ふ希望を與へて置いて、犠牲者を元氣づける。その時はもう貧乏人が、ちやんと富人の御用を勤めて早死にする段取りが之で完了してゐる時だ』（同書一七八頁）

すべての宗教團體が、現世に於ては社會事業の爲に盡し、未來に於ては極樂淨土や天國に導くと云ふ救ひの仕事は、實に無産者の血と汗とを搾取して得られた資本家や貴族などの財嚢から出てゐる。そこで此宗教家たちは果して如何なる言を以て、其所謂難有い御説教なるものをしてゐるのか、彼等の言動が動もすれば軍閥的帝國主義的國家の擁護となり、男子横暴の五障三從の説となりつゝある事は既に上に述べた。この階級闘爭の問題に就ては果してどうであらうか。

私は平素寺院の説教なぞを聽くやうな機會はない。しかし、ついこのあひだ、ふと茶の間に轉がつてゐた『婦人』といふ雜誌を取つて何心なく中をのぞくと、卷頭に大本山と關係淺からざる或る貴族の夫人で、いつも佛教婦人會と云ふものを主宰したりする人の説教めいた物を見た。その中には下のごとき言がある。

『階級闘爭といふ事に就きましても、佛教の教理が因果の原則の上に立つて居ることから理解させて頂きますと、世間のすべてはみな各自の惑業のあらはれであつて、自己の業果によつて自縄自縛せられ、どうしても因果を自身で左右することは出來ないのみならず、善因善果と云ふ事も其人の業果なのです。此世に於て正直に勤勉しながら、なほ不運であつたり、不義のものが却つて幸運であつたり、到底現在一世では説明の出來ない矛盾も三世因果の法から容易く信ぜられますし、又現世の果報の中には過去世の業の

あらはれもある、現在の業が現在に生ぜず、未來に於て果を引くものもありませう、此矛盾も三世に亙つて考へれば因果の法のあらはれに外ならないのだとも思ひます、大無量壽經に『善人善を行じて樂より樂に入り、明きより明きに入り、惡人は惡を行じて苦より苦に入り、冥きより冥きに入る』とのお示しは誰にも了解の出來る自明の理なのです。無差別に、平等に、と希ふことは人間の欲求として無理からぬことで御座いますが、但し玆に因果の理の必然として、有産無産、貴賤の區別が自ら出來るやうに考へられます。

是は貴婦人の言だから特に敬意を表して私は批評を謹むが、とにかく其主意は、俗に云ふ「因果をふくめて」である「貧乏するのは天罰だ、罰あたりめが」と云ふ事である。諦めろと云ふのである。特權階級に取つては之よりも都合のよい說はない。村の坊主が壇下の地主から布施を貰ひ、庫裡の修繕費を寄附させて、小作人に向つて云つて聞かせる說教も、恐らくは之と異曲同巧の者であらう。お救ひによつて來世は極樂に行けるぞと甘い事を云つて、人を現世の阿鼻地獄に投じておく者の言葉として極めて適切なる者ではなからうか。此種の佛教者はしばしば「平等」に「惡」の字をまで附けて、さも憎さげに「惡平等」といふ。そして、差別觀の上に立てる平等觀でなければ駄目だといふが、なるほど詭辯的な辛辣な思想遊戲としてはさう云ふ事も立派に云へるであらう。しかし今日の樣な息苦しい行詰つた生活をしてゐる吾等に取つては差別の上に立つ平等といふ、まるで跛の下駄を穿いたやうな平等では承知が出來ないのである。大乘佛教は、あの古代印度で八釜しかつた四姓の差別をすらも撤して說かれたものではないか。お救ひで極樂往生をする時にも、五濁惡世の悲しさは寄進の淨財の額によつて、白切符と靑切符との差別があるのだらうか。ちやうど坊さんの讀經の度數と時間とが、布施の金額によつて異るが如くに。

また職業的宗教家の或者はいふ、聖者の說ける同朋主義、平等無差別觀は、宗教生活の法悅に於て體驗せらるべきもので、大乘佛教の此所說は社會改造問題に持出すには餘りに貴きに過ぐと。なるほどさうかも知れない。しかし若し其通ならば――即ち宗教生活と社會問題とを峻別する事が正しいと云ふならば、今日何が故に佛教家は自ら進んで社會事

宗なる者に手出しをするのであるか。何の必要あつて何の理由あつて、

● 佛教徒社會事業の奬勵並に聯絡統一に關する件。

一、各派宗務所又は本山は社會課を設置して左記各項の事務を專任せしむる事。

（イ）宗派内寺院住職を奬勵して所在地方に適切なる社會事業を經營せしむること、云々

かくの如き決議案をまで提出するのであるか。それは明かに頭と尻尾とで物を言ふ惡魔の胡麻化しではないか。私は宗教家が社會事業に干與する事を正しと信ずる。そして飽くまで共同朋主義と平等無差別の宗教觀を、人間の全生活の上に徹底せしむべく努力し高唱してこそ、宗教家の宗教家らしさはあるのだと思ふ。吾々に宗教生活と社會生活との二重の生活があるのではない。そこには唯だ一つの人間生活があり唯だ一つの生命の躍動があるのみだ。これを無理にも二つに峻別して説かうとするのは、例の惡魔の財源……もう言はなくても解つてゐるだらう。

人々はいま生活の痛苦に悶え、魂の飢えに泣いてゐる。かくて救ひを求めんとするに急なる人心の虚に乘じて、怪しげなる因果を説き、消極的な諦めをすゝめて、資本家や特權階級の溫情主義の手先きとなるが如きは、決して眞の宗教家の天職ではあるまい。それは飢えたる鼠に與ふるに猫イラズの饅頭を以てする惡魔の業ではないか。

或所で市區改正をして電車の爲に道路を擴げた。そこには可なり大きな寺院があつて、境内には勿論空地もあつた。電車道路のためにその一部を取拂はうとすると、寺僧は頑然傲然として之を峻拒した。曰く、當山は何とやら家と云ふ貴族の菩提所だと。やむを得ず、其寺と反對の側の十數軒の小さき民家は取り拂はれて、電車線路は迂曲する外なかつた。惡魔の殿堂の威力は恐ろしい。

以上は主として日本の現狀に就て云つたのだが、西洋の方を見ると、中世修道院の孤獨の宗教が、文藝復興期以後全く面目を一新するに至つて、宗教の社會性といふ事が著るしく強調せらるゝに至つた特に近代に至つてはオウエンやサ

ン・シモン等の宗教的な社會改造論が最初の刺戟となつて、宗教は社會運動と結び、前世紀中葉のキングスレ、モオリス等の基督教社會主義ともなつた。もとよりそれは長續きはしなかつたが、ラスキンやカアライルの社會論も亦た此系統に屬する者であつた。特に英米で今日宗教家の社會事業の盛なのも、當時の影響だと見られ得る。但しマルクスやラツサアルの感化が強くなるに從つて、基督教の博愛人道主義的の社會改良論は勢力を失墜した事は疑はれない。特にまた宗教家には東西ともに固陋な人が多くて、今もなほ、現世に於て人は各々其分に安んぜよ、やがて來世に天國は到らむなどと說くので一般から云へば基督教は動もすれば勞働階級の強い反感憎惡の的となつてゐる。しかし此點では日本の念佛宗の人たちが今なほ因果說や偏狹の差別論を持出すのと違つて西洋の基督教は確かに一歩進み出してゐる。即ち神の王國は天國ではない、現在のこの地上に基督の精神が支配するのだと說き、神を現世と離さないで考へる所謂內在（インマナンス）の說に重きを置いてゐるが如きは夫れだ。

序ながら近ごろ、日本で僧侶の力によつて「思想善導」を圖るといふ話を聞いた。今の日本の佛教界に果して其人があるや否やを私は知らない。說の可否は別として、現代英國思想界一方の雄たるイング僧正の如き學德たかき人が。

七

人間が生きると云ふ事は、そこに何等かの信仰があり要求があり理想があるからだ。すべて是等を否定すると言ひながらなほ生を貪ぼる者あらば、そは虛僞の徒にあらずんば即ち畜生だ。人間らしき信仰、人間らしき要求、人間らしき理想の全部を否定し去るとき、そこには「死」よりほかに步むべき道は有り得ない筈だからである。近頃日本文壇の作家の一部に怪しげな虛無思想の流れを見るやうだが、あれなぞは自分が生きんとする努力の足りない結果、極めて淺薄なる自暴自棄に陷つた絶望を、贅文の商賣道具に使つただけの者としきや考へられない。少しく酷評すれば、損をした株

屈のやけくそ生活と何等選ぶ所なき者である。眞のすぐれた思想家藝術家には、たとひそれが虛無主義の人であるかの如くに見えて居ても、そこには常に何等かの理想と信念の閃きがあつた。普通に虛無思想家だと思はれてゐるツルゲエネフは、あれは實は一種の夢想家であつたのだ。また絶望厭生の破壞思想を噴火山の爆發のやうに十九世紀の思想界に投げだした最初の第一人者バイロンさへ、今日から思へば、「自由」といふ理想を棄てては居なかつたのだ。唯だツルゲネエフやバイロンに於ては、この理想と信念とが餘りに夢幻的であり空漠たる者であつたと云ふに過ぎない。

私は斯くの如き意味に於て、また常に、肉より靈へ、物より心へ、常識より神秘へ、有限より無限へとあこがれる事が、人間のたふとき本性である事を信ずるが故に、宗教その者の意義と存在とを飽くまでも强く肯定する者である。たゞ其信仰とあこがれと理想とが、空疎なる概念や、死せる偶像であつてはならないと云ふのだ。この信仰、この理想は、飽くまでも生命の烈火に燃ゆる人生の藝術であり人生の宗教であらねばならぬと考へるのである。かの前世紀の多くの唯物論の徒や或はニイチエ、バアナアド・ショウなどの口吻を學んで宗教そのものを否定し攻擊するが如きは、根本に於て人間性の貴とさを侮辱したる謬見だと思ふ。それは確に人間冒瀆である。

わたくしは基督によつて佛陀によつて說かれたる宗教が、その本質に於て天地と共に偉大であり、日月と共に永久である事を十分に承知してゐる。毫も夫れを疑ふものではない（支那に於ては宗教となつて居た孔子敎といふ祖先崇拜敎は、宗教として全然無價値な者だとは思ふが）。唯だ私の言はんと欲する所は、既成の寺院宗教の偶像化、功利化を飽くまでも排擊したいと思ふのである。生命なき囚たれたる既成宗教が賤劣なる妖僧俗僧の魔手に弄ばれ、巧みに利用せられ惡用せらるるとき、大魔王の恐ろしき毒手が、神壇の背後に動きつつある實際の事實を見よと云ふのだ。今日いかに多くの憎むべき罪惡が、胸に十字をかけたる黑衣の人や、活き佛を粧ほへる圓頂緇衣の徒によつて、白晝公々然とし

て、神のおん名に於て、み佛の稱名によつて行はれつゝあるかを見よと云ふのだ。幾百年幾千年の長い歷史によつて穢がされた帝國主義的國家擁護の宗教、婦人抑壓の宗教、特權階級の走狗となり了れる宗教を葬り去つて、自由清新の潑剌たる生命の熱に燃ゆる宗教たらしめよと求めるのである。寺院教會のうちに「囚はれたる宗教」を先づ野に放つて、眞に人間のものとせよ、民衆の手に返せよと呼びたいのである。

神や佛が寺院教會に在りとのみ思ふのが根本の誤謬だ。信仰は人間の個性の表現であり、生命の創造である。詩人實朝の言葉を借りて云へば「神といひ佛といふも世の中の人のこゝろの外のものかは」（『金槐集』雜部）たとひトルストイは國教たる希臘教會から破門せられても、また愛國心と宗教との野合に力づよく反對したにしても、彼が近世に於ける最大の基督者であつた事を疑ふ事は出來まい。革命詩人シエリイは無神論者であつたと普通に云はれるが その大作「解縛のプロメシアス」を讀むと、彼が囚はれたる教會の神を否定してゐた他の半面に於て、「放たれたる神」には燃ゆるがごとき熱烈の信仰を有つてゐた事が明かに知られるではないか。

既成の寺院の宗教は、たとひ夫れが俗僧の手によつて濫用せられない迄も、多年の歷史的因習の結果、それ自らのうちに既に多くの迷信と偏見とを包藏し、殊に私が現代生活に於ける新理想主義の三つの標識として掲げた（一）世界平和（二）戀愛至上主義による男女關係の更新（三）階級打破の新社會を求むる思想（詳しくは改造社より近刊の拙著『近代の戀愛觀』一〇五――一一四頁を參照せられたい）と背反せる事著るしきは、上來述べ來つた通りの有樣だ。今もなほ昔ながらの極めて偏狹固陋なる差別觀の上に立ち、過去の時代の多くの謬見迷妄に煩はさるが故に、既成宗教が今や既に自滅自縛の窮地に瀕しつゝあることは否定すべからざる事實である。

『行きて諸國の民に敎へよ』といふ馬太傳の結語を見て、わたくしは雄々しいと思ふ。民心を化導して彌陀の心光に浴

せしめ、街頭に教を說いて衆生濟度の使命を果たさうとする宣教傳道の大業が、心きよく德たかき聖僧によつてなさる時、わたくしは夫れを貴しとも難有しとも思ふ。それを何事ぞ、濁世末代の俗僧が、有緣を度すと稱しながら、實は私腹を肥し、資本主義の害毒を大いならしめ、婦人を侮辱し、あまつさへ軍閥の爪牙となつて國際平和をまで妨ぐるが如きに至つては、誰か之を惡魔の傳道にあらずと云ひ得るものぞ。皎々たる滿月にさへ、いつも暗い半面があるやうに、佛陀や基督のたうとき教の半面にも、黑い魔王の影は潜み易い。

友人の紹介名刺を持つて來て玄關に面會を求める男がある。會つて見ると保險會社の勸誘員で、かれは滔々と保險の功德を說き立てる。あなたのお爲ですからと云ふが、實は彼自身の會社の利益配當を一錢でも多くしたいからだ。保險は私の爲に加入するのだから、私が求める時私から申し込む。保險の押賣はお斷りすると云つて、私はハイカラな服裝をした其勸誘員を追返して了つた。

今の寺院教會の布教僧宣教師と、この保險の勸誘員と果してどれだけの違ひがあるだらうか。各宗各派は何の必要あつて布教傳道の競爭なぞをするのか。その競爭する心には、各保險會社の勸誘員が惡辣を極めた競爭をすると同じく、寺院の收入と勢力とを少しでも大きくしたいと云ふ職業的爭鬪根性が毫も無いと云へるだらうか。是は獨り異れる宗旨宗派の間に於てのみならず、同一宗派內に於ても、僧侶や宣教師ぐらゐ勢力爭ひや慾得づくの野卑な喧嘩をするものは無いと思ふ。苟くも宗教家の假面をかぶれる以上、今の政治屋や實業家のやうに露骨な惡事が働けない爲に、彼等職業的宗教家は驚くべく陰險な狡猾な手段を以て仲間の喧嘩なぞを事としてゐる。習ひ性となつては、おのづからその人相顏面にも現れるのであらう。多くの俗僧や宣教師の顏や目つきを見よ、おのづから老猾陰險の色あらはれて、容易に近づく可からざる者も、決して稀ではないのである。いづれの道を踏んで行つても、救ひの山の頂にのぼれば、同じ眞如

の月は見られる。是非おれの示すこの道を通ほつて登れと言はずとも、また強ゐて茶店の婆が客を呼ぶやうな眞似はしなくても、神や佛の使徒となつて衆生濟度の使命を果す事は立派に出來るではないか。それを無理にも押賣りの態度で大學傳道だの何だのと騒ぎ立てるのは、あれは惡魔の軍隊の一齊射撃だらう。そんな卑しい眞似をして迄も自己の寺院教會を大きくしたければ、一層あの保險會社と同じく株式組織の會社に改めたらどうだ、資本金一億萬圓とやらを募集して基礎を固め、何々宗傳道株式會社、配當幾割と云ふ方が、無邪氣なだけに惡魔的分子は遙に少くて好い。その株式も宗教の事だから、綿絲のやうに暴落はすまい。また殊に資本家の味方になつて因果を說いたりするにも徹底して却つて便利であらう。

むかしミルトンが『失樂園』に描いた大魔王(サタン)は神樣を向うに廻はして壯烈な大喧嘩をやつてゐるが、二十世紀の惡魔はそんな拙(まづ)い事はしない。ちやんと神樣を道具に使つて、大昔の僧侶が「寺院姦淫」をやる時、女の身に神を宿してやるのだと云つたと同じく、巧みに善男善女を操つて、慈悲や救濟を名として、今の腐敗せる既成政黨にも劣るまじき惡事をさへ働いてゐる。さうして既成政黨が自らの惡事によつて自らの滅亡を早めつゝあると同じく、既成宗教もまた、自ら「悔ひ改め」ざるかぎりは、自滅の外なき者ではなからうか。

求めよ、然らば與へられんと云ふ。今は人々が心の生活に飢えて、求むること日に益々切なるの時である。しかるに寺院や教會は「パンの代りに石や、魚の代りに蛇」どころの騒ぎではない。猫イラズの饅頭にも似たる惡魔の殘飯を與ふるほか、理想たかき現代の新人に與ふべき清新なる何物をも提供して居ないではないか。職業的宗教家みづからにさへ僞らざる確固たる信仰が無いのではないか。

今はすべてのものが皆新しき內容と形式とを得べく努力してゐる。その今日に於て、少くとも日本だけで云へば、一番時勢の進運に後れてゐる者は、遊廓と寺院とであらう。二つのものは、昔から仲が好い。

舊信仰の殿堂が今すでに惡魔の殿堂と化しつゝあるを見よ。いつまでも其おぐらき須彌壇のかげに、消えなんとする明滅の燈光を仰がんよりは、人々よ、先づ自らの心の聖殿に、新たなる生命に燃ゆる信仰の聖火を點ぜよ。（終）

思惟の支配に對する反抗

長谷川如是閑

一

『解放』が近代的要求となつて、强く社會的行動の上に現れた時に、一部階級は大きい恐怖に襲はれた。丁度これと同じやうに、その『解放』の渦中に『本能』といふえたいの分らない怪物が仲間入りをして『本能の解放』が要求された時に、一般に、恐ろしい道德破壞が襲來したと信じられた。實際、生活の衝動そのものが、生活の合理的理解を超越して、現世に勢力を振ふといふことは、それまでの人間の信仰の上では考へ得られないことであつた。それまでの人間には、全く『本能』といふものは無かつた。それは維新前の日本人の體内に『丹田』といふものはあつたが　彼等の頭裡に『腦髓』といふものゝなかつたのと同じであつた。近代人の本能の發見は傳統の生活にとつては、船舶に於ける蒸汽機關の發見のやうなものであつた。前代の人々は、現實を承認するのに、道德の認可を要すると信じてゐたのだが、近代人は、その反對に　道德の承認に、現實の認可を要すると信じた。さうして、後に至つて觀念化され論理化されてその世俗的の働きを大部分失つたがその頃はもつと素朴的性質に富んでゐたところの科學が、その恐怖時代の民衆の側の武器であつた。その科學と社會的大勢との結びつきから出來た自然主義は、その觀念を以てゞなく、その行動を以て社會を横行濶歩した。思想は社會的事實の所産であるといふ實際を承認しないで、事實が思想の所産であると信じてゐる人々は、まるで、自然主義といふ疫病神が、突然人類の間に舞ひ下つてでも來たかのやうに考へて、此の恐怖すべき進入者に對して防禦することが、共同の安全の爲めに、人類の負擔してゐる任務であると考へた。而して彼等は『自然主義』といふ思惟を征服することによつて、自然主義的現實を持ち來した近代の歴史を作り更へることが出來ると考へた。で自然

主義的現象によつて生活の特權を脅かされつゝある階級は、此の思惟の征服事業に全力を注いだ。それが彼等の階級的生活を安全に保存する唯一の――でなければ、最も有効の――方法であると考へた。

然るに社會的現實は、そんな思惟の舞臺に於ける人工的演劇は畢竟閑散階級の遊樂である、とでも思つてゐるかのやうに、その自然主義――ではなく、自然主義を產み出した社會的進化の事實を不作法に進行せしめて、思惟の世界に於ける特權階級の目覺ましい活動などは、火星の世界の出來事と共に、全く異なる境域に取り殘して、社會事實それ自からの方向を進んでゐるのである。ヨーロッパ、アメリカ、乃至東洋の日本の上層に五彩の雲を漂はせてゐる思惟の世界で何ういふ風が吹いてゐるか、それは地上の現象ではないので、吹くがまゝに吹かせてゐるといふ鹽梅である。實際、現代に生きてゐる人間の總數から見ると、極めて少數で、全然その數字や實物を無視しても何處にも故障を生じないやうな小さなサークルで、自然主義の理想主義のと騷いでゐることは、現代の歷史的進行の上では『事實』と認めるには余りに沒交涉な事柄なのである。それよりも、中央アフリカの奥の蠻族の生活が世界史に與へてゐる影響の方が、遙か大きいのである。

近代の歷史に現はれた特徵は、それから產れた思惟の特別な狀態に在るのではなく、その思惟を產んだ事實の特徵に存するのである。思惟は、それ〳〵の階級の現實の立場によつて、明暗、黑白、左右、の何れとも現はれる。同じ人間を見ても、醫者は、それを生理的肉塊と見、心理學者は心理的綜合と見、唯心哲學者は魂の鞘と見る。かやうに、萬人が現に彼等自から抱へてゐる人間といふものさへも、全く別ないろいろの物になつて現はれるといふのが、思惟の世界の特色なのである。從つて現代に榮へてゐる思惟は、『現實』の何の一面をでも摑んで、何んな風にでも組み立てられる。近代の『解放』を道德にしやうと不道德にしやうと、それは人々の好むまゝに可能なのである。たゞ豫め定つてゐることは、事物の右側に立つてゐるものはそれを右側から見えるやうな形で見、その左側に立つてゐるものは、それを左側から見えるやうな形で見るといふこと――昔の支那人さへ思ひついてゐたこと――だけである。それが、拒むべからざる階級的生活の決定的勢力なのである。階級的生活は必然に階級的思惟の系統を產み出す外はないのである。

二

自然主義と科學との結びつきと解されてゐる素朴的傾向が行動化した時――行動化するには素朴的であることが必須の條件である――それを思惟の堤防で喰ひ止めやうとする特權階級の試みは、陰に陽に、可なり有力な結果を齎した。

それは晉に、近代的行動に對して、それを外部から禁壓する取締法律のやうな働きを呈するのみならず、それを內から緩和する緩解劑のやうな働きを呈する。さうして、その思惟が何ういふ階級の間から發生したかといふことを探究すれば、その思惟の、行動に對する批判的地位が大抵わかつてしまふ位なのである。過激思想取締法案は決して無產者の間から案出されない。舊ロシヤの政府筋から出たものならば、それは決してクロポトキンの思想內容を持つてゐないものであることを斷言して差支ないであらうし、舊ドイツの政府筋から出たものならば、それは決してマルクスの思想と一致するものでないことを斷言して差支ない、同時にその逆も亦眞なのである。而して思惟の生活は、それ自體特權階級の特權的生活であるから、思惟するといふこと自體に、近代的行動に對する一種の回避が潜んでゐるといへる。で『行動』を『思惟』の世界に連れ込むことそのことが既に、近代運動に對する一種の緩衝的作爲であるといひ得る場合がある。サンジカリストの行動をベルグソンの哲學にまで持ち來すといふことは、さういふ思惟に依て生活する人々――さうしてその人は、それをする閑散を有する特權階級の人である――にとつては、爲ない譯に行かない、又爲なくてはならない仕事であらうが、それは、サンヂカリズムの行動そのもの――而かも行動の外にサンヂカリズムはないのである――にとつては爲ないでも少しも差支ない仕事なのである。ソレルの美しい言語と文字とは、さういふ言語や文字の鑑賞にのみ生活の意味を求めてゐる階級生活――それも特權的生活の一つである――をしてゐる人々にとつて、限りなく喜ばしいことであらうが、サンヂカリストの多くがさういふ階級の人達ばかりであつたなら、恐らくサンヂカリズムなるものは、フランスにも何處にも起らなかつたであらう。此の地表に生起した出來事が、文化人の頭腦に何ういふ意味で現はれるかといふことは、文化人にとつては、可なり重大なことであらうが、行動の形で現はれた近代の社會的運動は、全くさういふ文化人以外の人間の裡に發生した事柄なのである。その人々は彼等の行動がエラン・ヴイタールであるか、

ソーシアル・ミスであるかを知らうともしなければ、知る必要もない。そこで、近代的行動そのものは、文化人が、それを如何に思惟するかによつて少しの影響を蒙ることなしに進んで行くのである。言ひ換へれば、思惟の歴史と行動の歴史とが、背中合せの、二つの別々の芝居を打ちつゝ進んで行くのである。

かういふ見方は、思惟の生活者の多くによつて當然否定されるであらう。思惟を、生活に先在するアプリオリに基づけるものも、思惟を生活事實の所産とするものも、右のやうな思惟と行動との乖離を認識することを承知しないであらう。前者は、その證據として、生活の事實が、彼等の目的觀に一致するといふ觀念的證據物件を提供し得るであらうし後者は、思惟と行動との一致を示す實證的見地からの論理的證據物件を提供し得るであらう。それにも拘らず。上述の斷定を固執することの出來る理由がある。何時の時代に於ても、思惟の世界を支配する人々の生活は、その支配を構成する論理上の根柢の上にある。然もその論理は彼等の階級的生活に先在するものではなく、その反對に彼等の階級的構成から生れたものである。然るに近代的行動の自然主義的乃至本能的進行は、思惟の支配者の階級的構成を破壊すべく働き出した行動なのである。從つて其行動が特別の技巧で思惟に結び付けられない限り、それと思惟の進行とは別のものでなければならないのである。思惟の生活者が其思惟を行動に結び付けた場合には——それは必ず試みられる仕事である——思惟が生活の現實と並行するといふとが眞實であるが、行動から言へばそれ自體を思惟に並行せしむると言ふことは不可能である。何となれば、行動それ自體は思惟以外の境地から生れたものだからである。現代的社會運動としての行動は階級的思惟の崩壊に依つて、行動それ自體の生活を建設する過程である。だから、現代的社會事實は、後者の立場からは思惟の進行と沒交渉であると言はなければならない。

三

社會が組織の進化を持ち來たす時——或は革命を伴ひ、又は伴はずに——は大抵今述べた樣な關係で、思惟の進行と現實の人間的行動の進行とが、稍もすれば沒交渉になると言ふ歴史的事實がある。ギリシヤの生活が崩壊する時に、彼の哲學的思惟の進行と生活の進行とが全く背中合せに進んだのである。ローマの生活が崩れる時には、彼の完成した法

的思想の歴史とは、矢張り背中合せに進んで行つたのである。中世の生活事實が崩壞の過程を歩んでゐる時、そのスコラスチシズムは完成への道を歩んでゐたのである。日本の王朝の文化思想が完成しつゝあつた時、それと全く沒交涉な地方の豪族の支配が生活事實の上で進行しつゝあつたのである。今日の社會的事實も亦世界がその數千年の歴史に於て僅々數回しか出遭はない樣な劃紀元的時期に當つてゐると見ることが出來るならば、さういふ時期に每時も世界が思惟の進行と生活事實の進行との乖離を見た樣に、今も思惟と事實との喰ひ違ひを來しつゝあるのは當然のことである。

それは畢竟一定の系統を追ふて進行した生活が、それと必然の關係で組み立てられた思惟の系統を構成せしめ、その生活系統が一定期間有機的の進行を遂げた結果組織が老衰して崩壞に向ふ過程を取りつゝあるに拘らず、それが産んだ思惟の系統は、その思惟の世界だけに於ける生命を存續させて行くのみならず、現實の崩壞に對する心的反抗の形で、益々それを發展せしめて行くからである。例へば固定した階級生活が崩れて行く時にも　獸類同士の戰爭と違つて、その階級が新興の階級の爲めに全滅させられる譯ではないから、そこに當然階級的傳統を繼承する一團の生活者を殘しつゝ進むのである。然も其階級が崩壞する時にはその殘存者は、大抵思惟の世界にその舊階級の生活意識だけを保存するといふ手續を取るのである。それは丁度華族が貧乏して平民同樣に零落しても、その系圖だけを寶物として抱えてゐることに依つて、彼自ら尙ほ貴族であることを信じて疑はない樣なものである。思惟の系統は斯樣にして、崩壞した階級の心的遺産として、何時までも思惟の世界に寶物然たる存在を續けて行くのである。

四

思惟に對する行動の反逆は、强ち近代的事實ではない。事實としての歴史は、前代の思惟の世界では全く考へ得られないやうな現實を持ち來す過程であると言つていゝ。ローマが産んだ華々しい文明が、北方の蠻人の足下に蹂躪されるといふ樣なことは、ローマが産んだ如何なる偉大な又は偉大ならざる思索家の思惟の過程としても有り得ることではない。又ローマの生活は崩壞しても、ローマの文明が産んだ法的精神は今も尙連綿としてその系統を世界文明の上に續けてゐるが、その法的精神は結局ローマの生活を救ふことが出來なかつた樣に、今でもその法的精神に依つて孰れの國の

生活をもその崩壞の過程から救ふ譯には行かない。ギリシヤの哲學が永久に榮えても、それがギリシヤの生活の崩壞をどうすることも出來なかつた樣に、その後の如何なる國の生活をも、その必然の過程から引戾すといふことは出來ない。それほど歷史は思惟の世界から逸した進行を採る。

右の如き平明な事實を認識し、理解するに異常の困難を感じるのは、思惟の生活者の免れ難い運命なのである。何故ならば、それ自らを完成せしむる過程だけしか取らない思惟の世界のうちに、その思惟を產んだ生活そのもの丶崩壞を見出すといふことは絕對不可能のことだからである。しかしそれは行動者に取つては何でもないことなのである。貴族が大道の物賣になるといふこと又はならねばならないといふことを、思惟の論理の上で見出さうとしても、それは一生考へても難しい。しかし、千九百十八年にロシヤに居つた貴族は、譯なしにそれが可能の事實であることを發見したのである――それが不可能であると信じて自殺した貴族の外は――しかもさういふ事實が必ずしも近代的現象でないことは、歷史の段落毎に現はれて來る澤山のエピソードに依つても推察されるのである。

思惟と行動との背反が、あらゆる時代を通して歷史を作り出して居つた理由は、又他の方面からも理解される。それは如何なる時代に於ても、その社會的機構の上では必らず全體が行動し、極めて少數が思惟したといふことである。哲學史を讀んでゐる人々は往々、或る時代の思惟の結晶が即ちその時代の人間全體の心的生活そのものであつたかの樣に思ひ誤るのである。甲州から出た水晶を見て、甲州の土が水晶その物であると思つたら間違ひである。甲州の土に水晶を作り上げる樣な化學的作用を起す可能性のあることは間違ひはないが、水晶を出すといふことは甲州の地質の全體の特質であるよりは寧ろ、或る一局部の特別の性質である。この特別の性質から生れた水晶は、甲州の土の持つてゐる特別の性質を十分に說明してゐるけれども、甲州の土の一般的性質――それは一層大切な性質――は少しも說明してゐないのである。甲州の土が葡萄を產し米を產し松茸を產し、何々を產すること等に就いては、一塊の水晶は全く說明してゐないのである。哲學史は或る社會組織の下に出來上つた階級的生活の極めて局部的な性質が產んだ思惟の現象の歷史であつて、その時代の人間全體の心的生活の現實とは、或は一致することを得るが、事實に於ては大抵一致しないも

のなのである。無論普通に、思想の系統が民族的又は社會的集團の心理を基調とするといふことに間違ひはない。然もその一般的心理は、乾度、系統的思想が論理的發展を始めるときに、それと分離して了ふのである。何故ならば、集團の心的狀態は特別の階級的生活に於ける論理的思索の過程とは全く別の過程を持つてゐるのであつて、後者が思想史を展開せしめて行くに對し、前者は事實の歷史を展開せしめて行くのである。通常、一を合理的生活、他を不合理的生活と呼んでゐる程、二つのものは分れて了ふのである。而して現實の歷史が右の後者に依據して進行するといふことは、歷史哲學を實際上の困難に陷れてゐる所以である。理性の世界は論理の世界である。歷史が若しその世界の所產であるならば、論理學が、歷史を完全に吾々の理解の下に持ち來すことが出來て、未來は全然人間の思惟で組み立てられることが出來る理窟である。論理の世界が、現實の歷史に對して全く無力であることは、社會的事實の進行に對する思惟の力の效力の如何を說明してゐるのである。フランス革命がルソーの思想から產れたといふのは思惟の生活者の常習的の考へ方であるが、フランス革命はルソーの思索の延長ではなく、ルソーの思索を產んだ社會事實の延長である。フランス革命は生活事實の發展であつて、思惟の論理的發展そのものではない。

五

人間的行動が多くの場合、人間的思惟に對して、反逆的態度を取るに至つたのは、思惟者と行動者との絕對的分業の賜物である。思惟するものは行動せず、行動するものは思惟せず、といふやうな分離が、生活組織の階級的分立と共に成立したことは、必然に右の樣な結果を持ち來す外はない。人間が唯行動の生物であるならば、それは全く動物の一種に過ぎないと言はれてゐるが、思惟だけの生物であるといふことも亦考へられないとすると、人間は思惟と行動との生物でなければならない。人間に向つて、全く思惟せずに唯動け、と命ずるのは、全く動かずに唯考へろ、と命ずると同じく不可能を命令するのである。然るに階級的生活組織はこの不可能事を或程度迄人間に强制することに依つて出來上つてゐる。特權階級の生活者は 彼自身の個人的の營養と生殖と文化的享樂との爲めの外全く彼れ自身を行動させることをしないで、思惟の專門的生活を營み、特權を持たない階級の生活者は 彼自身の個人的生活に就いてすら、思惟することを

禁じられて、全く他の階級の思惟が定めた目的のために、馬車馬の樣に行動させられてゐる。斯樣な分業が、思惟の生活と勞働の生活との各々を所期の如く完全に發達させたには相違ないが、さういふ生活組織の下に人間が永久に生きて行くことが出來るものであるかどうかは別の問題である。原始時代に於て、思惟は唯宗敎的のそれだけであつたが、それは全く普遍的で、誰もが同じ樣に考へ、同じ樣に行動した。宗敎的思惟はさういふ性質に於て始めて普遍的なのであるが、それさへ後に至つて分業的となり、僧侶と俗人とは思惟者と盲從的行動者とに分れて了つた。而して宗敎上の改革は、毎時も必ずこの分業を打ち破る性質のものであつた。宗敎に於て眞である斯樣な事情は、一般の思惟に於て又眞でなければならない。即ち、思惟と行動との分業を打ち破ることが歴史の劃紀元的段落でなければならないが、分業が社會進化の最も重大な機制である以上は、思惟に於ても分業に依る進化に俟たない譯に行かない。しかしその分業の機制による分擔だけが、——即ち考へることだけ、又は動くことだけが、人間生活の全體であつては堪え得られるものではない。分業は唯人々の社會的擔任であつて、生活そのものをその奴隸とすることとは、丁度一生涯兵役に服せしめられると同じく、全く生命を枯死させることである。思惟と行動との極端の分業は、行動者を思惟者の奴隸とする組織であつて、解放の時期には屹度反抗を受けるに違ひない制度なのである。

六

個體の進化の過程を觀察すると、例へば、人間にしても、個人が老衰して行くに從つて其個人のうちに、次代を形作る生活體が發生して、それが子供になつて産れると共前代の個人は死滅して行くのである。社會の有機的進化に於ても前代の組織そのもののうちに崩壞の機制が働くと同時に、新しい生活組織を産み出す機制が働いて、それが次ぎの組織を構成するに從つて前のそれが崩れて行くのである。而して前代的組織の産んだ思惟の系統は、その組織の變更と共に改更され、その改更の程度も、組織の變化の程度に依據する譯であるが、既述の通り、前組織は滅びても、その思惟の系統は、その組織の改更と共に改更され、その改更の程度も、組織の變化の程度に依據する譯であるが、既述の通り、前組織は滅びても、その思惟の系統は一定の系統的組織の下に保存されるのである。氏の過程を思惟の立場から觀ると

前の組織の崩壞の裡に醱成された新しい組織は、それ自體前の組織の產んだ思惟の系統に對する反抗となる譯なのである。

近代の社會的進化が産み出したそれぞれ絕對的の運命を持つた二つの階級、即ち資本家階級と無產者階級との對立的進行は、矢張り社會過程に關する上述の特質を持つた進行なのである。元來、無產者階級は、資本主義の組織が、彼自らのうちに崩壞の過程を倂せつゝ進行した結果生れたものであつて、奴隸化され機械化された全く無力な個人個人が、その機械的構成の當然の結果として、生活の集團的統一を形作つた結果有力なる階級的存在と成長した譯である。而してこの階級は現代の組織に於ては最も多數の人間を包含すべき性質のものである。何となれば、現代の社會組織は全く產業的であつて、さうしてその產業の組織に基く社會に於ては、機械的勞働者が人間の全數の中の大部分を占めることになるのは、軍國的組織に於て人間の大部分が兵隊でなければならないのと同じである。而してこの人間の大多數は、思惟の歷史的過程とは全く沒交涉に發生したところの生活を生活してゐるものであつて、無論その思惟の現在の過程とも交涉のない生活をしてゐる集團なのである。近代的國家がどんな國家哲學を作り上げやうが、又近代的特權階級の生活がどんな生活の哲學を作り上げやうが、それは一切無產階級の現在の生活過程とは交涉のないものである 彼等無產者が思惟の生活を見ることは、丁度地上の人が高い空の雲の世界を仰ぐ樣なもので、彼等自身はその雲上の世界から降つて來る雨に濡らされ、そこから落ちて來る雷に打たれる運命は免れないけれども、その雲の上の世界は彼等の力の全く及ばない別世界なのである。その世界の思惟の過程は堂々たる思想の歷史となつて永久の心的生命を持つものであるにしても、それは彼等の世界に於ける出來事ではない。而して彼等は彼等自らの生活に全くさういふものを持たない爲めに、その生活を無意義と考へること――思惟の生活者が常にさう考へてゐる樣に――すらない。思惟の生活者は自分達がそれぞれ生活の哲學を持たないならば生きてゐる甲斐がないと考へてゐる。考へてゐないものも、さう考へやうとする傾向だけは有つてゐる。それが眞實であるならば、無產者の生活は、人間に取つて全く不可能な生き方でなければならない。ところが、無產者はそれにも拘らず生存を續けてゐる。のみならずその生存が甚だ力強い集團的生活を組成

するに至つたといふ事實がある。若し生活といふものが特權階級者の宣傳してゐる樣に、或る特別の思惟の系統――哲學史――がなければ成り立たないといふものであるとすれば、無產者階級の成立が次第に有力になりつゝある事實をどう理解したらいゝであらうか。

特權階級の思惟を離れて考へれば、無產者階級の有力な成立を理解するのは譯もないことなのである。これは丁度フィジオクラットと呼ばれた古い經濟學者が、農業に就いて考へた樣な間違つた淺薄な考方と言はれてゐる考へ方――實際は間違つてもゐなければ、淺薄でもない考へ方を採用しても、間違ひでもなく、淺薄でもなく理解されることなのである。即ち產業に於ては生產程大事なものはない、生產に於ては勞働程大事なものはない、故に產業に立脚する社會に於て、勞働に任ずる唯一の階級たる無產者の集團が最も有力でない譯に行かないのは當然のことである。この當然を當然でなくするには唯思惟の手品による外はない。だから、思惟の世界に於ては、無產者階級の有力は決して承認されない、如何なる論理も、現代の生活に於て無產者の勞働生活を最も有力でそして最も意義ある生活であると認めることはしない。道德も哲學もそれが論理の所產である限り決してさういふ承認を與へない。思惟の世界から一歩を踏み出せば、直覺や常識が譯もなく受け容れることを、極めてやかましい法令――道德や哲學――によつて禁厭的に否定するといふことは、所謂哲學や所謂道德が過激思想取締法案の樣な、階級的必要を充すところの性質を持つたものであることを想はせるのである。事實、現代の思惟の組織が一から十まで、過激思想取締法案と同じく、階級的特權の維持のために編成されたものであることは考へ得られないにしても、當然千萬のことを、煩はしい手續によつて、當然でないやうに變化させるに於ては、さういふ嫌疑をうける事を避け難いのである。

現代に於ける社會運動は右のやうな理由で、現代的思惟から獨立した行動でなければならない。それは決して無產者階級の思想的構成が、特權階級のそれと相容れないことに起因したものではない。又それは哲學的見地の差異から起つた爭でもなければ、政治的見地の背馳に基いたそれでもない。社會運動に現れた現代的行動は、生產者の階級が社會組織に於て占める地位の有力となるに從つて、自ら彼等の集團の生活方向として現はれたものである。而して彼等の生活

が第一次的——最も原始的——の意義に於ける生活（勞働）に立脚して居るものであるために、その運動も亦第一次的の性質を有つた生活の欲求となつて現はれた譯である。即ちそれは極めて具體的な生活の要求である。その行動の論理的歸結は何處に行かうとも、直接の要求は、生活の第一次的條件を要求するものに外ならないのである。生活の第一次條件を充さうとするのは、結局人間的完成を求むることに相違ないから、人間といふことの解釋次第で、その行動に或は宗教的、或は道德的、或は哲學的動機や意味やを認めることが出來るのであるが、それは思惟の生活者が彼等無產者の要求をどう思惟すべきものかといふ問題であつて、無產者彼自らの行動それ自體の問題ではない。

斯樣な見地は啻に思惟の生活者の反對を招くのみならず、無產者その人の多くに依つて反對されるに違ひない。何故ならば、思惟の支配は、支配等自らの階級を征服するだけでは決して完全にその支配を維持し又發展せしむることは出來ないのであつて、その支配の下に統括される凡ての階級に、その思惟が遵奉されることが、その支配の成立に必須の條件なのである。從つて階級的支配が最も堅固に成立してゐる時節に於ては、虐げられることに喜びを感ずる程、支配者の思惟が被支配階級の間に堅固に成り立つてゐるのである。さうして被支配者の生活がさういふ信仰の上に安定して了ふと解放は返つて彼等を怒らせ又は失望させることとなるのである。で、現代に發生した無產者階級の人々も、その極く近頃迄の生活は右の樣な心理的組み立てに依つて居つたので、無產者としての階級的生活が、さういふ心理を全く消滅させるには多くの年月を要することとなのである。無產者的運動の內部に種々なる心理的段階があるのは、全くその事情によるのである。

然しながら、特權階級の思惟がその勢力を無產者階級の人々に殘して居る場合でも、それが悉く特權階級の勢力の保存に役立つと限らないことは言ふ迄もない。思惟の論理的構成は社會的所因にも依據するし、又個人的所因にも依據するので、思惟の生活者の一部の人々の生活意識がそれぞれそこに現はれることが出來る。從つて、それ自らのうちから反逆的思惟が生れることは珍らしくない。例へば、自然主義的危險の堤防であるところの理想主義的安全地帶の中から、革命の論理が生れたりするのである。で、無產者の運動が若し思惟の世界の論理を必要とする場合に、これをそのうち

から求めることも敢て難しい話ではない。

七

無産者の運動が、思惟の世界の論理を採用することの不可能でないことは無論であるが、それは畢竟行動がさういふ論理を道作れとしないことを心細さがる様な思惟の生活者の生活様式に親みを持つ人々が、無産者的運動の將卒のうちに尠くないからであると見なければならない。それは決して運動そのものゝ性質に必然のことではない。近代的運動の本來の性質は、近代的組織が多數人類の生活に持ち來した變化の不自然性から逃れ出でやうとする行動であつて、極端に言へば、車に轢かれた人が輪の壓迫から逃れ出でやうとするそれである。でそれは思惟の上では寧ろ超道徳的超論理的行動といふ考へ方によつて說明されてゐる性質のものである。それは在來の社會組織が規定してゐる目的觀に依属すべきものでは無論ない、從つてその行動の結果が、その目的觀に一致する道徳や哲學と背馳するといふことは、少しもその行動を沮む力とはならない。例へば總同盟罷工を行ふことは、現在の階級的組織を絶對視する目的觀とは相容れないが、そして又對手方の階級的生活の思惟はそれを承認する論理を組成することは出來ないが、それにも拘らずそれは現代的行動の最も重要なものと見做されてゐる。是は唯總同盟罷工だけに存在する事實ではない。有ゆる現代的行動を通じてさういふ原始的性質を含んでゐる。それは思惟に先在する行動であるといふ意味で、而して又生活の第一次的條件の要求であるといふ意味で、『原始的』と呼ぶことが應はしいのである。

現代的行動の多くはその意味に於ける原始的性質を持つてゐる。社會運動に於ける行動から戀愛に於ける行動、藝術に於ける行動に至る迄、それぞれ原始的性質を帶びてゐる。思惟がそれに對して無力であることも、その行動が思惟に先在する程度のものであることの當然の結果である。而してこの原始的行動から更らに新な思惟が、思惟の世界に於て誕生する順序なのである。而してそれが思惟の世界の歴史に新しい頁を加へることは、目下の問題とは全く別な事件なのである。

一九二二、一一、一〇

小作問題と小作法

——農村法律問題の三——

末弘嚴太郎

一　はしがき

小作問題は今や農村問題の中心として萬人注視の焦點に立つて居る。之れは農村に於ける問題の直接當事者にとつてのみならず、國民全體の食料問題に關聯した重大な問題である。萬人の均しく利害關係をもち興味を有する事柄である。

此問題は現下の農村諸問題中最も著しく一般の注意を惹いて居る問題である。併し此の問題は單に之れのみを引き離して研究せらるべきではない、又解決せらるべきでもない。現在農村に於ける各種の問題には其の根柢に於て互に共通な大きな病源がある。之れに觸れない以上小作問題の徹底的解決は之を期することが出來ないのだと私は考へる。然らば其の共通の病源とは何か？　私は之れに答へて、吾國の農業そのものが全體として行き詰りつゝある、其所に萬弊の病源があるのだ、と云ひたいのである。

小作問題を夫れ自身引き離して考へると、問題の重點は無論分配問題にある。從つて分配の改定のみに依つて差當り一先づ此の問題を解決し得るやうにも見えるけれども、農業そのものが漸次に發展する資本主義經濟組織の渦中に捲き込まれて他の營業企業と對立して競爭すべく餘儀なくせらるゝに至つた結果茲に自ら行き詰りの決末を見るに至つたの

たとすれば、單なる分配の改定のみに依つて問題を解決することは到底不可能である。

小作人が其業の勞多くして功少きを知るとき、彼が分配の改定に依つて其地位の向上を要求するのは當然である。而して其の要求が充分彼等を滿足せしむるに足る程度の貫徹を見ない限り、彼等が結局農業を見棄てゝ都會に走り工業に赴かむと計るのは當然である　都會は娛樂が多い、租税負擔が輕い　そうして一面失業の危險はあるものゝ比較的容易に比較的多額の報酬が得られる。地主に迫つて地位の向上を計りつゝ事終に成らざりし小作人が都會に走るのは當然である。彼等は地主に要求して彼等の勞働を現存以上高價に賣却することを考へるか又は都會に走つて職を工業に求めるか、彼等の撰ぶべきものは其の二途何れかでなければならぬ。彼等の思想が浮薄になつたのでもない、危險になつたのでもない、世の中が今のやうになつた以上、さうして農村生活をしてより愉快により有利なものたらしむべき何等積極的乃至消極的の施設政策も施されない以上、人々相率ゐて農村を見棄てるのは極めて自然である。成程小作人が農村を去ることは先づ第一に地主にとつての大事である。第二には又米穀の消費者一般にとつての大事である。茲に於てか彼等は口を揃へて聲を合せて小作人を非難し農夫を攻撃する。けれども、一方には地主の壓迫並に之れを擁護する法律と官憲とがあり、他方には又農村生活そのものゝ不利不愉快がある以上、小作人が其の兩面の壓迫に因る苦難を免るべき唯一の手段は都會に走ることでなければならぬ。それは極めて當然の趨勢である、成程彼等が相率ゐて農村を去ることは國家食料問題の見地より見て極めて重大の出來事である。けれども一方には農地の私有制度を基礎とする營利的農業經營が許され且保護されて居る以上、又他方農村に於ける小作人の生活が都會の工業勞働者のそれに比して甚しく不利益不愉快である以上、單なる非難や教訓に依つて彼等を强ひて農村に縛り着けることは到底不可能である。人々は稍ともすれば小作人に向つて「國家全體の爲めに米が要る　だからお前等は「國家の爲め」に骨肉を惜まず働かねばならぬ」と教へる。けれども吾々は小作人に向つて「國家の爲め」にそれを要求せんとする前に、「國家の爲め」に彼等の地位の改善を計らねばならぬ、彼等が都會に走らずとも充分の愉快を以て農村生活を營み得るやうに考へねばならぬ。然らずして濫りに小作人に向つて「國家の爲め」を强要することは餘りに利己的である。我儘である。

けれども又吾々は他方現在の小作制の下に於ける地主の地位をも考へる必要がある、今や資本主義の大浪は地主までをも其渦中に捲き込むに至つた。土地が營利資本として考へられ、農業が利廻はりを目安として經營されることゝなつた以上、地主が其の資本——土地——の利廻はりを氣にするのは極めて當然である 其の結果彼等は一方に於ては極力小作人の小作料減額要求を擊退して利廻はりの低減を防止しつゝ、依つて得た所の小作料を成るべく有利に利殖せむと考へる。それが爲め彼等は其の收得した小作料を農地農具肥料の改良其他小作人優遇の資に投ぜずして、成るべく利廻はりのいゝ商工業殊に有價證券に投資せんとする。其の結果現在の如く農業が資本主義的思想を以て經營される傾向が段々甚しきに至れば農業の進步發展は自然妨げられる虞がある。併しそれは極めて自然の趨勢である。又小作人の要求之を拒み難く其壓迫漸く强力なるに至れば地主は漸次農業經營に絕望する。そうして彼等に形勢の甚しく惡化しない內に相當の代價を以て土地を手放した上商工業に乘換へやうと考へる。事は極めて自然である。近時吾々は屢々比較的目先の利いた地主の口から一種の土地國有論を聽かされる。彼等は今の中に相當の代價を以て土地を買ひ取つてくれと主張するのである。そうして他の利廻はりのいゝ企業に乘移ろうとするのである 此の主張の當否實行の能否は結局其の「相當の代價」如何に歸着する問題であつて、一槪に論定せらるべき問題ではない。けれども此の主張それ自身が吾國の農業も亦資本主義の巨濤に捲き込まれたことを語るものである。さうして吾國の農業が資本主義的營利經營に放任せらるべく既に不適當となつたことを語るものである。農業を私人の營利經營に放任する制度を認むる以上、地主が商工業に匹敵すべき相當の利廻はりを要求することは論理上當然に之を認めねばならぬ。然らざる限り地主が農業を見棄てて商工に赴むくは當然である。其の結果農地の經營は漸次に衰微するであろう さうして其の趨勢は結局穀物產額の減少・穀價の騰貴に依りて農業の利廻りが商工業のそれに匹敵すべき相當有利のものとなるまでは止まらないであろう。併しそれは農地の經營が私人の營利企業に放任されて居る現在の制度當然の結果であつて、地主が此の傾向に從ふことは極めて自然である。

小作人が去り地主が去つて農地が荒れる。農業が衰へてゆく。其趨勢は穀物に對する需要の如何に依つて直接之を左

有することは出來ない。農地が減り農産物が減つて其の價額が騰貴し其の結果農業も亦商工に比して利廻はり上充分引き合ふに至るまでは農業が衰へるであらう。而かもそれは農地經營を私人の營利經營に一任する當時の結果であつて多く異とするに足りないのであるけれども折角吾々に穀物を供給する爲めに與へられてゐる土地がかくの如く資本主義的營利企業の目的物となつて他の企業との關係上營利を標準として一般の需要如何に關係なく經營されることは果して正當であらうか？私はそれを大に疑ふのである。

畢竟するに資本主義の影響は農業までをも利廻りを目安として經營せしむるに至つた。而して其の結果利廻りの薄い吾國の農業は忽にして行き詰つたのである。小作料を目標として利廻はりを考る地主にとつても又小作料と費用とを控除した純益を目安として收益を考へる小作人にとつても現在の小作制度は最早利益少きものとなつたのである。而して小作紛爭、小作地の返還、農業嫌忌の傾向其他農業に關する各種の悪むべき現象は實に其原因を茲に有するのである。して見れば小作問題を單なる分配問題としてのみ觀察し討究することは決して此の問題の徹底的解決に導くべき方法ではない。小作問題の解決は結局小作制度の廢止に依つてのみ解決されるのであると私は考へる。

私は之れより以下小作權の存續を前提しつゝ其の改善を説かむとする。けれども私はそれを以て單なる過渡的漸進的の一時的手段に過ぎないと考へて居る。吾々は無論徹底的解決の必要を認める。一日も速かに其日を來らしむべく努力せねばならぬと思ふ。けれども愈々其の日の來るまで少くとも現在の制度をこのまゝに放置することは出來ぬ。過渡的にでも一時的にでも出來得る限りの改善を施して其の日の來るのを俟たねばならぬ。その意味に於て私は以下小作問題法に付いて研究を進めたいと思ふ。

二

小作問題解決案の第一歩として考へられねばならぬ事柄は**小作法の改正**である。

理想的小作法は地主小作人の双方に出來得る限りの滿足を與へつゝ之に依つて農業の隆盛を期し得るものでなければならぬ。分配上の正義を實現しつゝ之に依つて爭議の發生を未然に防ぎ得るものでなければならぬ。少くとも直接耕作

に從事する小作人に向つて耕作に對する充分の興味を與へ得るだけのものでなければならない。何故なれば然らざる限り小作人は農業を嫌ふに違ひないさうして農業は衰へるに違ひないから。小作法の改正は之を目標として行はれねばならないのである。

現行の小作制度上小作人は到底滿足するに足るだけの分配を受けて居ない。絕對的に見て其の分配が公正なりや否やは暫く別論とする。少くとも小作人をして其職に安じ其業を勵ましむるに足るだけの分配が與へられて居ないのは事實である。而かも實力に多大の相違ある地主と個々の小作人とを契約自由の原則の下に自由に相對立せしむるとき小作人は自力を以て到底充分滿足なる小作條件を得ることは出來ない。彼等は稍ともすれば地主に壓迫されて從來の不利なる條件を持續すべく餘儀なくされる。茲に於てか政府は所謂社會政策的見地よりして干渉を企てる。法律の强制に依つて地主の勢力を矯めつゝ地主小作人間の契約自由を制限して小作人の爲めに比較的公正なる小作條件を與へやうと試みる。吾が農商務省が一昨年此方小作制度調査委員會に附議して居る小作法案の如き即ち其の精神を以て立案されたものに外ならない。政府議會にして若しも獨立自由のものならむには此種の社會政策的立法は容易に之を行ひ得るであらう。けれども現在の如く憲法を以て私有財産を極度に保護しつゝある國、其結果地主資本家は超國家的實力を保有して其力能く國策を動かし得る國に於て、政府は果してどれだけの理想を小作法の上に實現し得るであらうか？　彼等は其の支持者たる資本家や地主と妥協せざる限り何事をも爲し遂げ得ない。かゝる政府がどうしてか能く理想的の小作法を制定し得やう。昨年小作制度調査委員會幹事私案なりとして一新聞紙の報道する所となつた小作法案の如きですら地主の熱心なる反對に會つて現在既に行き悩むで居ると傳へられて居る。吾々には今日の形勢に於て此種の立法的手段による小作條件の顯著なる改善を期待することは到底不可能のやうに思はれてならない。

成程地主は小作人の直接行動を恐れる。議會と政治家とも亦之を恐れる。其の結果小作爭議の頻發、小作地返還の流行等は事實上彼等を壓迫して多少の讓歩を誘致するに違ひない、併してかくして實現される小作法の改正は實を云ふと地主小作人の實力衝突の賜物に外ならない。それが唯立法の形式を經て形になつたゞけである。政府の自由なる判斷に

依つて理想が實現されたのでは決してない。其の際政府の占め得べき役目は單なる調停者乃至は地主の代辯者たる地位に過ぎない。資本家に依り地主に依つて支持された政府に向つて理想の社會政策を行ふべきことを要求するのは事夫れ自身矛盾なのであらう。

此故に私は現在の如き時勢の下に於て立法的手段に依る小作條件の改善に多くの期待をもつことが出來ない。立法的手段に依る場合ですら事は多く地主小作人の實力衝突に依つて爲し遂げられて居ること上述の如くだとすれば、吾人は寧ろ事の解決を地主小作人の直接協定に一任したいのである。何となれば政府は立法的手段をとる場合ですら最早尚々單に調停者たる地位を占め得るに過ぎないのだから。

小作問題に於ける不公正は多く地主小作人間の實力不均衡に起因する。何故なれば個々の小作人を以て個々の地主に對するとき前者は必ずや後者の爲めに壓迫されるからである。併し小作人が一度團結して一勢力を組成し之に依つて地主に對立するとすれば其所に初めて勢力の平均が生まれる。茲に初めて自由にして平等なる交渉協定を期待することが出來る。さうすれば契約自由の原則を以てしても尙且公正なる小作關係を實現し得るに違ひない。此の意味に於ては私は現在非常なる勢を以て發達しつゝある小作人組合が事實上地主との團體的交渉に依つて得る所の成果は、政府の所謂社會政策に依つて爲し遂げらるゝ所のものよりは遙かに偉大なものであるに違ひないと期待して居る。國家が法令の制定を獨占する時代は既に過ぎた。從來の極端なる中央集權主義は既に時勢に適しない。無能なる國家が萬事を其の無力なる手中に獨占せむとするは災である。それよりは資本家と勞働者とをして又地主と小作人とをして自治的に立法せしむるがいゝ。さうすれば團結せられたる勞働者・集中せられたる小作人の力は團體交渉に依つて能く國家の爲し遂げ得ざるものを爲し遂げ得るであらう。かくして或は一地主を中心とし或は一地方を限つて團體的な自治的協約立法が行はれるとすれば、元來地方的特色の著しきを以て特色とする農業關係は、國家の集權的劃一的立法に依るよりは反つて滿足に規律されるに違ひない。此の意味に於て私は、現在吾國の政治事情の下に於ては、議會に依る小作法の制定よりは寧ろ小作人組合の發達に依る自治的協約的の小作法制定に多くのものを期待して居るのである。

三

かくの如く私は立法的手段に依る小作條件の改善に多くのものを期待して居ない。それは寧ろ小作人組合の發達に依つて事實上成就せらるべきものだと考へて居る。

從つて將來小作人組合の充分なる發達に依つて公正なる小作條件が實現せらるゝに至るまでは、今後も尙引續き小作爭議が頻發するに違ひないと考へて居る。何故なれば、滿足されない小作人は農地を見棄てゝ都會に走るべく最後の決意を固めるに先立ち極力地主と戰つて其の位置の改善を計るに違ひないから。けれども戰は要するに不經濟である。解放運動に於ける戰術として小作人は屢々爭議の途を執らねばなるまい。併し現實問題として彼等と雖も其の爭議が一先づ速かに片付いてくれなければ困る。爭議そのものは決して目的ではないのだから。又之を公益的見地より考へても、爭議に因る農業の不振農地の荒廢は到底之を看過することは出來ぬ。出來るだけ速かに之を鎭定し以て農業をして其の正常なる經營に復歸せしめねばならぬ。茲に於てか吾々は爭議調停の制度を考へねばならない。

小作爭議調停法案は先頃小作制度調査委員會を通過して新聞紙上に發表された。此の法案の大綱を說明すること及びそれに對する批評は本節の終に於て別に項を設けて之を試みたい。併し先づ茲に本法案と小作法案との關係について一考を費す必要があるやうに思はれる。

先きに內務當局の意見なりとして新聞紙の傳へた所に依ると、調停の標準たるべき小作法を制定せずして調定法のみを先づ制定することは全然無意味であると云ふ意見があるとのことである。而して其後漏れ聞く所に依れば此種の意見は司法省に於ても亦之を抱く者が少くないとのことである。けれども私は之を以て一種の法律萬能思想だと云ひたい。團體爭議調停の眞諦を解せざるものだと云ひたいのである。私は小作法の改定とは無關係に先づ調定法が制定されても少しも無意味ではない、否反つてそれが自然の順序だと考へて居る　何故なれば元來團體爭議は勢である。一片の法律乃至は現在の裁判所の如何ともすべからざる所である。現在小作法規の極めて不備な時代に於てすら爭議の調停滯濟は決して此の不備なる法律を標準として爲されて居るのではない。また爲さるべきでもない。爭議は法律を超越して解決され

る。それは勢である。成程裁判所は法律を標準として爭議を判定すべく憲法を以て强制されて居る。けれどもさらばと云ふて爭議の解決がすべて裁判所の手に依つて爲されるものと考へ、又法律を標準としてかはるべきだと考へることは正當でない。第一に團體爭議は其性質上到底法律のみを標準として現在の司法裁判所の手に依つて解決せらるゝに適して居ない。加之裁判所の手續が現在の如く緩漫にして且多額の費用を要する以上、縱令小作法の改定成ると雖も、之に依つて小作爭議の解決を計ることは餘り望みがあるまい。是れ裁判所の外に法律を超越して爲さるゝ調停乃至仲裁制度を必要とするに至つた所以なのである。殊に又調停法に先立つてなまじ中途半端の小作法が制定されると、それが反つて調停者の手足まとひになる處がある。法律を楯にとつて調停に應じないものを生ぜしめる處がある。私は此の意味に於て今や實施に着手せられむとして居る借地借家の調停手續か或は昨年制定された借地法借家法の爲めに妨げられはしないかと密かに恐れて居るのである。論者は曰ふ。現在の小作關係は民法に於て極めて不完全に且小作人に不利に規定されて居る。今此の法律の下で調停を行へば地主は稍ともすれば法律を楯にとつて調停に應じないであらうと。けれども團體爭議の調停は大體に於て法律を超越してなさるるにあらざれば成功しない。現在事實上行はれて居る調停の如きでも決して現行民法を基準として爲されて居るのではない。而かもそれは民法の規定が甚しく不完全であり又甚しく時代に遅れて居ればこそ比較的容易に行はれ得るのであつて、若しも今日小作法を作り明日調停法を行ふとすれば調停は反つて成り難いのである。

　此故に私は小作法の制定如何に關係なく先づ調停法を制定して調停の機關と手續とを定むべきであると信ずる。さうして調停の結果度重なるにつれて之を將來小作法を制定する際の資料とするのもよからう。又さなくとも調停の結果たる和解條件は――丁度同盟罷工の終止協約が罷工關係者を覊束するやうに――少くとも當該爭議に關係した地主小作人間の一時的自治協約法となるであらう。かくして、恰も國際法の發達が戰爭後の講和條約に初まつて漸次平時の平和會議平和條約にまで進むだやうに、又資本家勞働者間の勞働協約制定が先づ爭議後の和解調停に初まつて漸次常時永續的の協約に移り行きたるが如く、地主小作人間の小作條件が敢て爭議の勃發を待つまでもなく常時平和的に且團體的に協

定される日が來るであらう。かく考へるとき、小作法に關係なく先づ調停法を制定することの決して無意味でないことを私は斷言したいのである。

世界戰爭中住宅問題が各國に於てやかましくなつた際歐米諸國の主として先づ力を盡したのは調停制度の設定であつた。現に獨逸の新借家法が制定されたのは調停機關の設置におくるゝこと實に數年の後に及むで居る。先づ手續法を作つた上頓て實體法に及ぶことは法律一般の發達變遷の上から見ても決して不思議ではなく寧ろ反つて自然だとも云ひ得るのである。

以上の私の意見は小作制度調査委員會が小作法に先立つて先づ調停法を制定したことが決して無意味ではないと云ふことを主張せむとするにある。決して——世間に風評あるが如く——調停法を制定した以上小作法案は之を拋棄せよと云ふのではない。調停法は既に發生した爭議の鎭定を目的とする。小作法は更に爭議の發生を豫防し得るものでなければならない。私は其の理想に到達すべく一日も速かに小作法の改定せらるゝことを希望して已まないのである。唯先にも一言した通り現在吾國の事情に於ては立法的手段に依つてかゝる理想を實現することは實は極めて困難であらう。これよりは反つて地主小作人間の團體協約に依つて自治的協約法が成立し、之れに依つて小作條件の改善される日が寧ろ近いのではあるまいかと考へて居る。

第一　小作權の確立

一

小作法の改正を議するに際して先づ第一に取扱はれねばならぬ問題は**小作權確立の問題**である。

現行法に依ると小作權はあらゆる意味に依て極めて薄弱である。それが小作問題に關聯するあらゆる惡の根源である。吾々は速かに小作權の確立を計らねばならぬ。それは小作人の人格完成と云ふ理想的見地から見ても又農業奬勵と云ふ功利的見地から見ても絶對的に必要である。

抑も小作權の法律的基礎薄弱なることは小作人の人格の不完全なることを意味する。換言すれば、地主に對する彼等の隷屬を意味し服從を意味する。完全なる人格者は確固たる地盤の上に自力を以て確立せねばならぬ。如何に苦むでもいゝ、併し自力を以て立ちたい。完全なる自由人はかく希望せねばならない。他人の好意のみを前提として生存する者、それなしには生存の基礎危きを感ぜねばならぬ者がどうして完全な人格者と云ひ得やう。彼等は奴隷と異ならない。牛馬に均しい。何となれば、彼等はかくして或は美食するを得、安住することが出來るかも知れない。併しそれは單に他人の——飼主の——好意に依つてのみ與へられて居るに過ぎないから。彼等が一度飼主の爲めに何等の價値を供給し得なくなるとき、又彼等が一度飼主の御機嫌を害ふとき、忽ちにして彼等は生命の危機に瀕せねばならぬ。かくの如き者がどうして完全な人格者であり得やう。世の温情主義者、淳風美俗論者は稍ともすれば勞働者雇主間の關係地主小作人の關係は温情相親しみ互讓相輔くるの關係でなければならぬと云ふ。誠に其の云ふ通りである。けれども彼等は其の理由に依つて直ちに法律上勞働者の地位を確保し小作人の權利を保全すべき手段を設けることに反對する。さうして彼等は『萬事が法律的になつては困る。雇主と勞働者と、地主と小作人とが法律を以て相對峙するのは面白からぬ現象だ』と云ふ。成程それは面白からぬ現象に違ひない。けれども法律を以て雇主と勞働者、地主と小作人の關係を正確に規律することを以て彼等相互の日常生活關係を法律的ならしむるものと考へる思想は——實を云ふと——世の温情主義者、淳風美俗論者自らの甚しく恐れて居る法律萬能思想に過ぎない。彼等は一般に國家至上主義者である。國家は道德律までをもディクテート出來るものだと考へて居る。其の結果雇傭に關する法制は雇主勞働者間の日常關係を規律し小作法は以て地主小作人間の日常關係を規律するものだと考へる。併しそれは甚しく不道德的な法律萬能思想である。私は考へる。雇傭法、小作法は不良なる非道なる地主、雇主乃至は小作人、勞働者が現はれたときに國家の强力を借りて之を鎭壓せむが爲めに裁判所の前に行はるゝ審判の尺度に過ぎない。法律は決して吾々日常生活の規律ではない。あつてはならない。雇主と勞働者、地主と小作人、其の相互の日常關係は法律の外に於て當事者相互の善意と力とに依つて締結せられ成立するのである。

此の故に法律を以て小作人の權利を確立することは決して當然に地主小作人の日常關係を法律的な冷酷なものたらしむるものではない。それはいさと云ふ際惡い地主冷酷な地主の現はれた場合に小作人を保護せむとするものたるに過ぎない。平素唯地主の好意のみに依倚し何等特に保護せられたる法律的地歩を有せざる小作人は日夕只管に地主の好意を失はさらむことを努めねばならぬ。其所に自ら威壓と屈從とが生まれるのは當然である。傳習的に事實上の威力を備へてまた地主にとつてはそれは確かに都合のいゝことに違ひない。けれども口に溫情を說き淳風を唱へる「道德的」な人々が強いて對手を法律的に劣勢なる地位に止め置き之に依つて事實上の威力を己の手中に保持せむとする其の態度は明に卑劣であり不道德である。對手を奴隸とし牛馬として之に溫情を垂れむとするのである。それは決して道德的ではない、完全なる人格を要求する小作人の堪え得べき所ではない。

第二に又小作權の確立は農業政策上極めて重要な事柄である。小作人は土地の直接耕作者である。彼等をして土地に親ましめ耕作に興味を感ぜしめざる限り農業は當然に衰へねばならない。さなきだに小作人は漸次に農地を見棄てゝ都會に走らうとする。それは農業が資本主義的營利企業として經營される當然の結果であること上述の如くである。それは結局農業を私人の營利經營に一任する今日の制度の根本的改廢に依つてのみ解決される問題に違ひない。けれども兎に角現在の小作制を維持しつゝ成るべく小作爭議を減少し成るべく小作人の都會に走ることを防止せむとするならば、出來るだけ彼等を保護し彼等の農村生活をして愉快な安全なものたらしめねばならぬ。殊に彼等は直接の耕作者である彼等が其の業に深き興味を有するや否やは農業の興廢に對し極めて密接な關係のある事柄である。此の故に彼等の地位をし成るべく安固のものたらしめ、成るべく其業に安んぜしむることは農業の發展乃至維持につき極めて必要である。歐洲に於ける土地解放、之に依る土地所有權の確立が農業の發展に取つて偉大な功績のあつたことは世人の廣く知る所である。それならば今や土地所有權と地主とが反つて——土地解放以前に於ける封建的土地貴族が地主を壓迫したやうに——直接の耕作者たる小作人を壓迫して其の重荷となつてゐる以上、之を排除し又は少くとも之を抑制して小作人の權利を確保し其の地位を向上せしめることが今後の農業を發展せしむるに付き必要なのである。世人は稍ともすれば此

の理を忘れて徒らに所有權を神聖視する思想の殘骸を墨守しやうとする。さうして單に不確實な權利を有するに過ぎず從つて又收穫物の二分の一以上までも地主に納めねばならない小作人に向つて「土地に親しめ耕作に興味を持て！」と教訓する。併しそれは抑も無理な注文である。

然らば小作權確立の爲めには何が必要であるか？以下個々の問題に入つて之を論ぜねばならぬ。

二

小作權確立の問題について法律上最も重要な事柄は**小作權の物權化**である。

現行法に依ると小作權は――先に說明した永小作權（本誌大正十一年八月號九月號）の外は――すべて賃借權である。即ち債權である。換言すれば、小作人は小作地の上に直接之を利用し得べき何等の對物的權利を有するのではなく、單に地主に向つて土地の使用を許與すべきことを請求する對人的の權利を有するに過ぎない，その權利は單に地主個人に對する對人的の權利であつて土地其物に對しては何等直接の權利があるのではない。其結果若しも地主が其の土地を他人に讓渡せば、小作人は新地主に對抗し得べき何等の權利をも有せざるが爲めに、新地主の請求あり次第何時でも土地を返還せねばならない。成程かれは舊地主に對しては小作契約上の債權を持つてゐる。從つて此の場合舊地主に對しては債務不履行に因る損害の賠償を請求することが出來るけれども金錢を以てする損害賠償はそれ自身決して本來の履行と同一の價値を有するものではない。殊に現在の如く訴訟手續が多大の時間と費用とを要求する以上裁判所の手を借りて賠償を訴求することは決して容易な仕事ではない。かくして縱令賠償を受けることが出來たとしても頭佰費用倒れとなつて實質上得る所は極めて少くなる。殊に時間と金とに乏しい小作人がかくの如き煩雜にして緩漫なる訴訟手續に依つて自己の請求を貫徹することは事實殆ど不可能に近い。而して小作人は他方新地主に對して何等の權利をも有せざるが故に新地主の請求あれば何時と雖も直に小作を明渡さねばならぬ。而かも其の小作地は小作人にとつて其の唯一の生活資源であり、從つて之を明渡すことは彼にとつて生活の根柢を覆すべき大事件である。成程かれは他に別に小作地を求めることが出來るであらう。けれどもそれが爲めには更に多額の金を拂つて小作を買ひ取らねばならず、又新に苦心

して新小作地の經營を初めねばならぬ。從つて小作人は一度手に入れた小作地は成るべく之を手離すまいと苦心する。新地主の開渡請求があれば出來得る限りの讓歩をしてゞも賃借を續けやうと努める茲に於いてか地主は小作人に對する自己の要求を無理矢理に貫徹する手段として小作地を他人——それは彼の妻でも又兄弟友人でもいゝ——に讓渡すことが出來る。さうして彼の代辯者たる新地主をして其の要求を提出せしめる。其際新地主は曰ふ『小作地を開渡せ！但し云々の要求を承認するに於ては引續き貸し與ふるも可なり』と。さうすれば小作人は如何に其の要求が不當だと思つても、折角多年苦心して經營した小作地をムザ／＼開渡すよりはまだましであると考へて、泣く／＼要求を容れるべく餘儀なくされる。

若しも小作權が永小作權の如く直接物を目的とした權利、從つて誰が地主にならうとも之に反對し得る權利であるならば、かくの如き不當な結果は絕對に生じない。成程地主がかゝる奸策を用ふることは決して屢々行はるゝことではあるまい。けれども萬一かゝる地主に出會つた場合——而して今後農業が漸次資本主義的營利思想を以て經營するやうになる限り、而して小作爭議その他に依つて稍ともすれば地主小作人間の情誼が薄くなる傾向がある以上、小作人がかゝる地主に出會ふことは遺憾ながら段々增加するものと見なければならぬ——小作人が自己を防衞すべき何等の法律的手段をも有しないと云ふことは法律上決して公正のものとは云ひ難い。又小作人をして眞に安むじて業を營ましむる所以ではない。而して小作人にかゝる不安がある以上彼は決して其の小作地に永久的の改良を加へ充分の耕作を行ふ譯がない而かもそれは農業政策の見地より見て極めて忌むべき現象である。此故に小作人の權利を物權化して之を確立することは獨り小作人一個にとつて必要なるのみならず、公益上も亦極めて必要であると云はねばならない。

無論現行法は、一方に於てかゝる薄弱なる小作權を設くると同時に、他方に於て物權たる永小作權をも認めて居る。民法の立案者は恐らく、かくして二制何れを採ぶべきかを當事者に一任すれば彼等は各好む所に從つて强弱何れかの權利を擇び設けるに違ひないと考へたのであらう。けれども經濟的强者たる地主が小作權の强固を好まない以上小作人が如何に熱望しやうとも永小作權の設定を受け得る見込みは到底あり得ない。果せる哉永小作制度は今や僅かに歴史的遺

物として存續するに過ぎずして、民法執行後新設されたものは殆ど皆無に近い有樣なること既に上述の通りである。

次に又民法は「不動産ノ賃貸借ハ之ヲ登記シタルトキハ爾後其不動産ニ付キ物權ヲ取消シタル者ニ對シテモ其効力ヲ生ズ」（民法第六〇五條）なる旨を規定して小作權と雖も之を登記しさへすれば物權的効果を生ずることゝして居る。けれども賃借權の登記には地主の同意が要る。而して其同意を與ふるや否やは全く地主の自由となつて居るが故に、小作權の强臆を喜ばない地主が容易くかゝる同意を與へないのは極めて見易い事柄である。して見れば此の規定も亦到底小作權を强固ならしむるに付いて何等の效能がないのである。

法律の規定かくの如くなるが故に、從來住宅地の賃貸人は屢々上記の奸策を用ゐて借地人を苦しめた。それは恐らく「地震賣買」なる名稱と共に多數讀者の記憶に殘つて居ることゝ思ふ。併し此「地震賣買」の弊を矯めるが爲めには既に明治四十二年建物保護法が制定されて「建物ノ所有ヲ目的トスル地上權又ハ土地ノ賃借權ニ因リ地上權者又ハ土地ノ賃借人ガ其ノ土地ノ上ニ登記シタル建物ヲ有スルトキハ地上權又ハ土地賃貸借ハ其ノ登記ナキモ之ヲ以テ第三者ニ對抗スルコトヲ得」る旨が規定されることゝなつた。所が其後同じ奸策は家屋の賃貸借についても行はれることゝなつた。借家人はそれが爲め屢々故なく立退きを要求されて途方に暮れた。其弊は大戰此方住宅難の惡化と共に殊に甚しくなつた。けれども之れ亦大正十年法律第五十號を以て借家法が設けられ「建物ノ賃貸借ハ其ノ登記ナキモ建物ノ引渡アリタルトキハ爾後其ノ建物ニ付物權ヲ取得シタル者ニ對シ其ノ效力ヲ生ズ」ることが規定された結果として解決された。それならば今や同樣の保護は小作權に向つても亦與へられていゝ。私は其の時機は既に到來して居るのだと考へて居る。

無論法律は縱令かくの如くに不備に出來て居ても、從來裁判所があらゆる手段に依つて借地人借家人を救はうと苦心したことは事實である。中には賃借權を現行法に於ても亦既に物權であると主張した判決例もある。けれども其の解釋には結局無理がある爲めに現在判例としては認められて居ない。又或る裁判所は事實の認定を巧みにして當面の救濟を與へた例がある。即ち家主が現に他人に賃貸借用せしめて居る家屋を第三者に讓渡す。其際新家主は全く賃貸借の存在を知らざることとあるべく、知らざるも之を承繼するの意志なきことゝあるべく、又或は新舊家主間に賃貸借關係承繼の合

務あることもあるであらう。其所で法律上借家權に物權的效力を與へて借家人を保護することの出來ない裁判所は、事實の認定に於て新舊家主の間にかゝる賃貸借關係承繼の意志あることを認め、之に依つて借家人は新家主に對しても亦從來の賃貸借を主張し得べきを認めたのである。かくの如く法律論に依つて救ふことの出來ない法の不備が事實の認定の信用に依つて事實上救はれる例の少からざることは私の先きに「嘘の效用」（本誌大正十一年七月號所載）に於て詳說した所であるが、借家人其他小作人等を保護するが爲めには裁判所は場合に依つてかゝる變則の手段を用ふる餘地は尚充分に存するのである。けれども此種の方法は決して完全のものとは云ひ難い。到底それは變則である。權道に過ぎない。正面より法律を改正する必要も減少するものでない。而してそれは借家關係に關する限り既に借家法を以て解決せられたのである。小作權についても亦近く同樣の法律が制定されねばならない。

翻つて法制史を繙くと吾々は次の事實を發見する。或人の所有不動産に對する他人の使用利益は當初先づ單に所有者の好意に依つて維持されたのみで、何等法律上の保護を與へられない。それが段々進むで、法律保護を與へらるゝに至る。而かも其與へらるゝ保護は當初先づ債權的に止まり、時と共に漸次物權的となる。私は之を稱して賃借權の物權化的傾向と云ふのである。

例へば、英法に於て他人の土地を耕作する者は當初單に villein と稱する農奴の一種に外ならなかつた。彼等は土地に附着して耕作其他の勞働に從事せねばならなかつた。而かも其耕作地に對しては法律上保護せらるべき何等の權利をも有することなく、地主の請求あれば何時でも返地せねばならなかつた。所が永年習慣に依つて此事實的使用利益は漸次に化して法律的利益となつた。尤も其最初の保護は單に莊園裁判所 Manorial court に依つて與へられたに過ぎなかつたが、後には其慣例が普通裁判所 King's court に依つても認められ、エドワード四世（一四六一—一四八三）の頃には遂に吾國の永小作權に類する Copyhold となつた。之と併して單に一定の期間を限つて他人の土地を使用する權利 tenancy for a time certain も當初單純なる債權としてのみ認められたに過ぎなかつたものが、漸次物權的に保護せられ、遂にヘンリー八世（一五〇九—一五四七）の法律 21 Hen VIII.c. 15 以來は賃借人が借地の所有を開始しさへす

れば以後物權的保護 leasehold を受くるに至つたのである。

羅馬に於ては不動産賃借人の地主に對する權利は終始遂に單純なる債權として保護されたに過ぎなかつた。學者は其理由を說明して、羅馬に於ては不動産と賃借する者の地位は經濟上重きを成さず、之を保護するの必要が社會上一般に認められなかつた爲だと云ふて居る。それでも其の羅馬法に於てさへ發達の末期に於ては―先に說明したるが如く吾國の裁判所が事實認定の信用に依つて事實上賃家人に保護を與へたと同じやうに―新舊の賃借物所有者相互間に賃借承繼の合意ありたるものとして賃貸人を救つた例が少くなかつたやうに思はれる（Code, L. IV, tit. 65, loi 9 參照）。

此の羅馬法の主義は、一方獨逸諸國に入つてそれまで其所に行はれて居たゲルマン系の法律――それによると今日吾國などに行はるゝやうな羅馬法流の所有權を認めず苟も合有 Gewere を伴ふ以上賃借權も亦所有權と併して物權的の取扱を受けた――を征服して、其所に羅馬法流の所有權觀念と賃借權債權主義とを植付け、遂に所謂「賣買は賃貸借を破る」 Kauf bricht Miete の原則を確立するに至つた。此原則は獨逸普通法上の大原則として遠く獨逸民法第一草案にまで及んだ。併し其以前既に一七九四年のプロイセン普通法典に於ては賃借人が賃借物の占有を行うた以上、以後其權利は物權的に保護され、從つて賃借物の所有者が代つた場合にも從來の賃貸借關係は當時新所有者賃借人間に移轉して其まゝ存續するものと取扱はれ、其後現行獨逸民法は第二委員會以後輿論の要求を容れて上記「賣買は賃貸借を破る」の原則を棄てゝ、賃貸不動産讓渡の場合に關して新に第五七一條の規定を設けて大體プロイセン法典と同樣の原則を採用するに至つたのである。

かくの如く羅馬法の主義は、一方獨逸諸國に入つて其固有法を征服したが、其れと同時に佛國方面へも入つて其法律となつた。併し頃て多少の變更を加へられて賃貸不動産を無償で讓受けた者は賃借人に對して明渡を請求出來ぬ、有償に讓受けた者は請求出來るけれども相當の猶餘期間を與へねばならぬことになつた。所が大革命勃發後一七九一年九月二十六日―十月六日の法律は更に變更を加へて、耕作地の賃貸借に付ては賃貸借期間の殘期六箇年以下なるときは時後請求を爲し得ず、以上なるときは耕作地讓受人自から耕作することを約束する條件を以てのみ明渡を請求し得る、反之

借家に付ては革命前の法律がそのまゝ行はれること、なつた。而して其後一八〇四年ナポレオン法典は更に一歩を進めて賃貸借が不動産の讓渡以前確定日附を以て爲されたる限り讓受人は原則として明渡請求權を有せざることを原則とするに至つた。

以上諸國に於ける法律變遷の歴史は、不動産賃借權が債權より轉じて漸次物權的に保護されて行く傾向のあることを教える。一體人間の生活に必要缺くべからざる重要の物質に對する吾々の支配關係は漸次物權的に保護される傾向がある。何となれば、債權は法律の强制こそあれ其事實滿足せらるゝや否やは畢竟債務者の自由意志にかゝるが故に、各人をして成るたけ他人の無法な拘束から免れしめる爲めには、生活の必需品を成るたけ物權的に保護する必要があるからである。かかる必需品に對する吾々の需要は出來るだけ中間者を排斥した人對物の直接關係として保護されねばならぬ借地權借家權小作權の物權化的傾向は實に此意味に於て極めて重要なる社會的意義を有するのである。

昨年借家法案が議會に提出された際私は「吾國の新法案がフランス民法を去ること百二十年、ドイツ民法に後るゝこと二十年の今日、其第一條に於て借家權の物權化を計りつゝあるは――借家權徹底して住宅に對する吾々の需要如何に重要なるかゞ一般人に依つて體驗せられつゝある今日殊に――誠に時宜に適した考であると思ふ」と說いた。私は今日小作制度調査委員會幹事私案なりとして流布されて居る小作法案第五條に於て「小作權ハ其ノ登記ナキモ小作地ノ引渡アリタルトキハ爾後其ノ小作地ニ付物權ヲ取得シタル者ニ對シテモ其效力ヲ生ズ」と明定されて居るのを見る。私は此際更に聲を大にして前言を繰返へしたい。さうして小作權の物權化は實に小作法改正の第一歩なることを一般讀者に告げたい思ふ。

(未完)

日蝕觀測と相對性理論の價値

石原純

一

一昨年以來私たちの待つてゐた皆既日蝕は近く九月二十一日に來て、さうして過ぎてゆきました。私たちは何故にこれを待ち、そしてどんな結果を之に期待したのであつたでせう。

それは近代に稀な偉大な驚くべき理論として物理學にあらはれ、惹いて哲學の認識論のうへにも尠からぬ影響を及ぼすに至つたアインスタインの相對性理論が。私たちに始めて啓示した一つの事實が、果して私たちの經驗し得る處と一致するかどうかを確むる一つの機會を與ふるものであつたからであります。

ほんとうにアインスタインが彼の相對性理論を擴張して萬有引力を論じやうとするに際し、最初に突き當つたものは光線が物質の影響によりて屈曲すると云ふ事實でした。彼が一九〇七年に、「輻射學及び電子學年報」のなかに書いた報告に於て、始めて萬有引力論に說き及ぼしたうちに、彼は既にこの事實の豫想を述べてゐます。當時これを讀むだ多くの學者のうちで果して幾たりの人が之に注意を向け、若くはその將來に就て正當に豫測したことでしたらう。恐らくはアインスタイン自身でさへその爾後の發展を異常なものとして感じたでもありませう。彼は引き續いてこの問題について研究しました。そして彼が一九一五年に萬有引力論を完成したときでさへ、まだ一般の世間に取りてはそれが理解に遠い徒らな數學的論述であるやうに見えたのでした。嘗て一九〇五年の謂はゆる特殊相對性理論の熱心な研究者の一人で

あり、之に對する有名な最初の説明書を著はしたラウエでさへ、その一般相對性理論に關する近著の序文に於て斯う述べてゐるくらゐです。

「アインスタインが重力の場の方程式を見出したときに、彼は曾てゾムマーフエルドに書き送りました。『あなたが之れを研究するなら、あなたは、この理論を成る程と思ふやうになるでせう。この書の著者は最初この理論に甚だ懐疑的に對しました。それですからずつと遅くなつて漸くこの著述を始めたのでした。けれども自分が理論に深く立ち入つて考へれば考へる程、之に内在する説得力をより多く感ぜずにはゐられませんでした。……』」

私はこの言葉を特に無意味に見過ごしたくありません。理論を承け容れやうとする人に對しても、亦これに反對しやうとする人に對しても。あなたがたは自分自身を先づ深く理論のなかに立ち入らせなくてはなりません。そこにこの偉大な内容に面接して、始めておのづからな説得力を感受し得られるのでありましよう。若くは或る稀世の學徒にも亦そのうへで始めて更に大きな新らしい理論を之に對立させることが出來るのでせう。それまでは私たちは先づ沈潜して之が忠實な研究に身を委ぬべきであります。それが少くとも敬虔なる學徒としての當然の義務であると私は思ひます。

一般相對性理論の理解がまだ世間に遠かつたときに、ともかくもアインスタインの豫言した光線屈曲の事實を經驗的に確めやうとする企畫が起されました。一九一七年三月英國の王立天文學會は二年の後に起る日蝕皆既が之を實行するために得難い機會を與ふることに注目し、それが當に歐洲大戰の酣であつた時期であるにも拘らず、すべての困難を排除して遠くアフリカ及びブラジルへ觀測隊を派遣することを建議し、王立學會（學士院）と共同して之がすべての準備を整へました。アインスタインが後にその觀測の結果の發表された一九一九年十一月にロンドン・タイムスに寄せた短い説明の冒頭にこの事に云ひ及ぼして

「科學者の間にもと、成り立つてゐた聯盟關係が破壞された後に於て自分が英國の天文學者及び物理學者と、書信のかやうな機會をもつことは私のよろこびとなし、且つ感謝する處であります。英國の科學者たちがその時間と勞力とを費し、英國の學者が物質的の費用を準備して、戰爭の最中に敵國で完成し發表された理論をためしたことは、英國の科學の高い誇ある價値に協うたものです。たとへその目的とする處は、單に太陽の引力の光線に對する影響にあつたにしても、私は科學のこの專門に屬する英國の學者仲間に對し、自分の個人的の感謝をあらはすことを大なる欣びとしない譯にはゆきません。その助力なしには、私は自分の理論からの最も著しい結果の證明を得ることが出來なかつた筈であるからです」

と述べてゐることに對しても、私たちは科學の價値の普遍性について顧みるべき著しい具體的の事例を思はせられます。

二

かやうにして二つの觀測隊は一九一九年の春英國を發して夫々西アフリカの海岸並びにブラジル北方へ向ひました。そして五月二十九日の日蝕を觀測して歸り、その結果を十一月六日の學會席上に發表したのでした。アインスタインの豫言によれば、遠方の星から來る光は太陽の近傍を通過する際に之に引かれるやうに屈曲します。從つて之を寫眞板上に撮影すれば、星はまさにその存在すべき位置よりも太陽に近づいてその光を印しなければなりません。ところが多くの寫眞板について之を檢した結果は、ほゞその理論からの歸結と數量的に一致することが見出されたのです。

これが發表されてから、アインスタインの理論は俄に世間の注目を惹きました。ロンドン・タイムスは先づ「科學の革命」、「時間及び空間の新理論」と題してこれを紹介し、多くの新聞雜誌が之に倣ひました。獨逸ベルリンのイルスト

リールテ・ツアイツングは「世界の新偉人アルベルト・アインスタイン、彼の研究は我々の自然考察の全轉覆を意味し、コペルニクス、ケプレル、及びニウトンの認識と同價値である。」と云ふやうな題目をさへ掲げました。この理論がどんなに世間を驚かしたかは之によりてもその一般を推し量ることが出來るでせう。

一九一九年の日蝕觀測の結果は幸に理論との一致を見ることが出來ましたけれども併しこの判斷は、すべての科學上の理論に對してさうである通りに、さほど容易に終結せしめることは出來ないのです。先づ第一にすべての觀測に伴ふ誤差が論究せられなければなりません。元來この一九一九年の日蝕はこの觀測の目的に對しては寧ろ好都合の條件を具へてゐました。何故ならば、星の位置の移動を驗するためには、丁度日蝕の際に太陽の近傍になるべく光度の大きい星が存在することが必要であるのに對し、この場合には太陽があたかも金牛宮星座にありてその附近には比較的に大きな星をたくさんに見ることが出來る筈であつたからです。併しながら之等の星の寫眞像から眞の位置を知るためには、そこにまだいろいろの影響によりて寫眞像の位置が變化してゐることを認め之を補正しなければなりません。地球の大氣が光線を屈折させること、又地球の運動のために謂はゆる光の錯行を生じて光線の方向が變ること、寫眞板が光線に對して垂直でないための影響等を顧慮する必要があります。その外觀測地の濕度の變化が鏡や寫眞板に及ぼす影響もあるでせう。これ等の一切の影響が取り除けられて始めて目ざすものが得られるのです。ところがそれらの既知の事情に伴ふ變化ばかりでなく、まだ私たちに他の方法ではためされてゐない原因からの移動が入つてゐるかも知れません。即ち太陽の周圍に遠くまでも或る氣體が擴がつてゐると、そのために光線の屈折が起つてゐます。又日蝕の際に月の陰影中にある地球大氣の部分が冷却して同樣に光線の屈折を結果することなども論ぜられました。それですから理論に相當する眞の移動を之等のものから完全に取り離して見出すためには、只一度の觀測だけではまだ充分と云はれないかも知れ

ないのです。これが再度の日蝕の機會の待たれた所以です。

この一九一九年の日蝕と同様に太陽の近傍に多くの光度強い星のある場合は一九三八年を待たなくてはならないのです。本年の日蝕はこれに較べては都合のわるいものではありますが、それでも多少の結果は得られるわけですからいろいろな國から觀測隊が出されました。米國、英國、印度、獨逸和蘭聯合隊などが之に赴きました。この日蝕は濠洲から西方、フイリッピン、印度、アラビヤ等の南方を經てアフリカ東岸に及んだのですが、皆既の見られるのはニュージーランドの北方、東經一七二度三六分、南緯三〇度一五分の地點から東經四三度一七分、北緯五度三〇分の點に達し、その間にある陸地としては濠洲大陸、クリスマス島・バンチイドグ島などです。多くの觀測隊の結果がどんな內容をもたらすか、まだ不明ですが、恐らく數箇月後にそれらが報道せられることでせう。

アインスタインの一般相對性理論の經驗的事實による證明が可能とせられる場合はこの日蝕觀測の外に、尙ほ水星近日點の移動、並に日光のスペクトル線が地上の光に對してあらはす移動が數へられてゐます。このうちの前者に關しては理論からの値がもと觀測値からのニウカムの計算と非常に能く一致しましたが、尙ほ近時の精確な天體觀測に基づくときは却つて多少の齟齬があるやうです。又スペクトル線の移動に關しては、この理論に相當するものの外に他の諸原因に依るものが甚だ多く錯綜し、太陽面上の物理的狀態を確定することが出來ないために、充分の目的を達するのに非常の困難があるやうに思はれます。併しその或るものは既にやはりアインスタインの理論に近い結果を得てゐるのです。ともかく事實による積極的の證明は今日まだ絕對に滿足し得られるまでには至らないのですが、又少くともこの理論に明瞭に反する事實も私たちの經驗しない處であると謂つてよいでありませう。

三

相對性理論の當否は勿論經驗的事實によりてのみ判斷せらるべきものであつて、これは尙ほ將來に待たなければならないのですが、その認識論的價値は既に充分に私たちの認め得べき處でなければなりません。私はこゝにその詳細を述べてゐる余裕をもちませんが、その大體を綜括すれば次のやうなものでありませう。

相對性理論は物理學的判斷の相對性を特に私たちに深く敎へました。私たちはめい〳〵の現在する物理學的狀態を異にして、物理學的事象を觀測するに從つて、各その判斷を異にします。併しそれらの判斷は悉く同等の權利をもつて正しとせられなければなりません。この多くの異つた判斷形式のなかに、私たちは不變的な關係の成立する概念體系を取り出すことが出來るので、之を自然法則として云ひ表はします。自然の普遍性、實在性唯一性、絶對性、等は悉くこれに基づいてあらはれます。

直觀形式の基礎としての時間及び空間の判斷も亦この意味に於て相對的でなければなりません。そして時間及び空間の數量的測定は自然法則がすべての觀測者に對して不變的（若くは共變的）の形を保つやうに行はれなければならないのです。時間及び空間が自然法則に依存すべきことは、こゝに充分の明瞭さをもつて從ふでありませう。

このことを深く考へるならば、誰がアインスタインの說いた時間及び空間の觀念を認識論的に價値のないものとして否定する大膽さをもち得たでありませう。充分の理由なしに之を敢てするものがあつたなら、私はその人の認識論に對する盲目的の行ひに驚かずにはゐられません。この文の最初に引用したラウエの言葉のなかにある、理論の說得力と云ふことも、私は畢竟この認識論的價値に依るものであると信じます。ミンコフスキーが一九〇八年に於ける有名な講演「空間及び時間」のなかで「若し數學者が自由の推量に任せて判斷したなら、最後には自然現象がこの相對性理論にかなふものとして思惟し得るであらうとなし、かやうな豫知は純正數學の異常なる勝利であつたでせう」と云つたのも、私

は同じ意味に解すべきであると思ひます。つまり數學は經驗と無關係に成立し得る一つの思考形式の科學ですが、相對性理論がこの數學上に於ける最も至當な不變性をもつと云ふことが、その謂はゆる說得力でなければならないのです。

ミンコフスキーは同じ講演に於て、空間と時間とを融合して四次元の「世界」をつくり、自然法則の悉くをこの世界の不變的な幾何學的關係に歸着せしめやうとしました。この事は相對性理論に取りて寧ろその最も重要な眞髓であつてこゝにこの理論の一般認識論的價値が始めて決定せられたと謂つてよいのです。このミンコフスキーの仕事があつて、相對性理論は遂にうち崩すことの出來ない基礎を得たのであると私は思ひます。後にアインスタインの擴張した一般相對性理論も今から見ればこの基礎の最も當然の延長に過ぎません。若し自然法則の全體系が唯一の「世界」の幾何學によりて整齊な形を保つて云ひ表はし得たとしたならば、私たちは之よりもより望ましい何ものを指示し得るでありませうか。恐らくはこゝにその認識論的價値の窮極が到達し得られることを想ふことが出來るでもありませう。

勿論、自然現象の法則はまだ論じ盡されてはゐません。特に最近に物理學上の一つの大きなスフィンクスとしてあらはれてゐる量子論に至りては、それを相對性理論とどんな關係に持ち來すべきかに就いて全く暗黑のなかに閉ざされてゐます。これが解釋は現時の非常な困難な問題であつて、恐らく容易には成功し難いものでありませうが、併し私は少くとも量子論が何等かの形に於て相對性理論と融合して、物質の基礎法則となり得る可能性をもつことを想ふことが出來ます。

四

私は最後にもう一度繰返しませう。相對性理論の認識論的價値は之を正しく判斷する人に取りて、決して理解に難いものではなく、更に深くその數學的構成に立ち入りて見る場合には寧ろその至當な極めて美くしい理論に驚歎せずにゐ

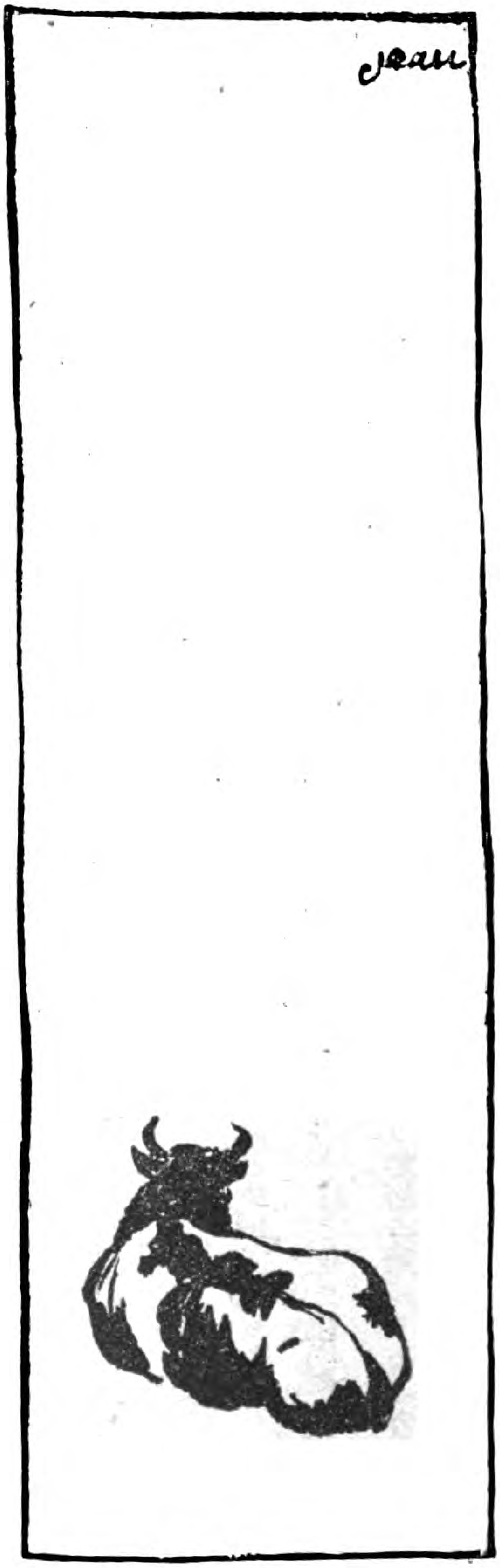
られないでありませう。かやうな理論に相當して私たちの經驗的事實が統一せらるべきことを、恐らくは哲學者並に數學者は自由に、併し最も大きい可能性をもつて想像し得たでありませう。但だ一つの物理學理論としての相對性理論の當否は、この可能性のみをもつては決定せられません。それはどこまでもこの理論が經驗的事實と適合するかどうかによりて判斷せられなければなりません。この意味に於て日蝕觀測並にその他の天體及び光學的觀測及び實驗などが私たちに大切になるのであります。

相對性理論の事實的根據はまだ確實であると云ひ切ることは出來ますまい。特殊相對性理論については光學的並に電磁氣學的實驗によりて、特に亦個々の電子や、量子論と結びついたスペクトル理論に於てさへ、かなりの確かさをもつて證明せられたと云つてもよいのですが、一般相對性理論に至りては多少の疑の殘存することは認められます。けれどもこの理論がひろく物理學及び認識論のうへに及ぼした効果に關しては、今日もはや誰が否定することが出來るでせうたとへアインスタインの理論が將來假に事實と一致しない點を含むことが見出されたとしても、私たちは之を變更して新たな理論を立てやうとするに當りて、現在の理論が私たちに教へた諸考察を全く無視することは斷じて不可能であると私は信じます。少くとも私たちはこの意味に於てアインスタインの理論を尊敬しなくてはならないと思ひます。

相對性理論の出現以來、世間には多くの囂々たる反對論をなすものもかなりに私たちの眼に觸れます。併し私はその內容の積極的に之に勝るやうな理論を何處にも見出すことは出來ません。認識論の上から見てそれらはどんなより以上の價値があるかは、云ふまでもなく否認せられなければならないばかりでなく、物理學的に相對性理論に反對しやうとするものは、先づ之に反する新らしい經驗的事實を求めなければなりません。かやうな事實に據らないで徒らに理論に抗しやうとするのは無意味の悶えに過ぎないのでありませう。

我が邦に於てもこの頃土井不曇氏が一つの反相對性理論を主張せられてゐるのを見ます。私はこゝに多く之に云ひ及ぼすことを躊躇するものでありますが、强ひて云ふならば、土井氏の理論は認識論的にどれだけの價値があるかを私は全く認めることが出來ないばかりでなく、又それが何等の新らしい事實に基づくものでもないことに關して、私は同氏のために之を悲むのであります。氏の理論の根據となる事實は、すべて旣知のものに屬し、只之に對する解釋の變更に過ぎないのです。この變更が妥當であるかどうかに就いては私は別に論じたいと思ひます。同氏がその著書に於て「美のために」「眞理」のためにと呼號しながら、自からの理論を主張することに余りに急なる結果、アインスタインの理論を或は「奇形兒」視し、或は「僭越」視して、少くとも種々の意味に於て尊敬に値する先蹤に反抗するあらゆる言葉を惜まれなかつたことは、眞摯なるべき一人の學徒の態度として、私は多くの遺憾を感ぜずにはゐられません。世間の人たちは少くとも氏の聲に驚かされて道途に立つかも知れません。只その理論の內容を正當に批判し得るものは研究室の外にはゐないのです。私はひたすらに氏がその本然の研究に沈潜して尙ほ深く考へられて後に、同學者のおのづから之を聞いて街頭に傳ふる機會を待たれることの、どんなに科學にふさはしいゆかしさであるかを悟られんことを希望します。科學は永遠につゞく人間の仕事です。徒らに急いで世間を騷がすのはこれに對する責めを免がれることは出來ますまい。

尙ほ土井氏が「東京日々」の紙上で私自身に向つて云はれたことに對しては、近く同紙上でお答へするつもりです。又その著書のなかで私との交渉について述べられたこと、並に同書內容中の理路不明の諸點に對しては「思想」十二月號に書きます。併せてこゝに附言します。



近代の科學と希臘の哲學

雜誌『改造』のために

ハインリッヒ・リッケルト

主題と編制

今日歐羅巴の廣い範圍に於いて、科學的頭腦の所有者が、活潑に追求努力しつゝある數多の問題のなかで、殊に科學そのものの本質と並に科學そのものの價値とに關する問題は、重要なる位置を占めるものである。將來に於いてもま

た科學は尙ほ依然として今日までの樣なものであらうと言ふ事は、最早多くの人々の信せざるところである。科學は、恐らくは、全く過去に屬するものであらうか、それとも、科學がその存在の權利を保有するがためには、すくなくとも根底から改造されなければならないものであらうかと考へられてゐる。（譯者曰、本譯文に於て「科學」はヰッセンシャフトを意味す。もとより狹義の個別科學の意味ではない。）

人々が『古い』科學に向ける諸々の攻擊は、おほよそ近代の『生命の哲學』の思潮と提携し合つてゐる。生命そのものが、科學に適合しなければならないとは最早信じられないで、寧ろ、全く逆に、科學は生命に奉仕するものである事が要求されてゐる。斯かる要求の窮極の根帶は、たしかに、（知性偏重の）主知主義を征服せんとする精神運動のなかに橫はつてゐる。主知主義の意味するところは、一面的偏執的に悟性の上に住まうところの生命解釋である。斯かる生命解釋とは反對に、此の『全き人間』が、その活動のあらゆる側面を具有したるがままにして、なほ世界觀の中に於いてもまた、己が權利の承認を贏ち得べきこと、これこそ人々の希ふところである。至高の財寶たるに値ひするものは、知性ではなくて、充ち滿ちたる生命である。されば、吾々が眞實に追求するの價値ある爾餘すべての財寶に對して、準矩たらしむべきものは、まさしく此の生命である。此のことは、今日多くの人々において、直ちに自明のことと思はれてゐる。

けれども斯樣な思想には、屢々、煩はしい暗影がつきまとふてゐる。抑々生命とは何であるか？ 勿論時としては、斯樣な問題に對して或る解答が與へられることが、必須事であるとは考へない。けれども、若し吾々が、生命といふものからして、科學の任務を規定しようと思ふ場合には、一切はまさに此の解答の如何に懸つてゐるのである。抑も、吾々は『生命』といふ概念のもとに、生物學によつて研究されてゐる樣な、有機態の自然的生活的存在を考へるのであるか

？そして、從つて、科學が生命のために奉仕せんがためには何を爲す可きであるかと言ふ問題を決定するに當つては、吾々は一の自然科學的概念を根本に置く可きであらうか？

若しも、此の樣な道程を通つて、それでもつて『全き生命』を護らんがための、主知主義征服の努力がなされると言ふのであるならば、吾々は、ただ問題を斯樣に提出することをも避けなければならない。如何なる事情のもとにおいても、科學は所詮文化の一部であり、そして、ただ文化生命といふ立場からのみ、其の任務は規定さるべきである。しかも、文化なるものは、常に、歴史的に制約されたものとしてあらはれてゐる。そして、その限り、單なる自然概念によつては、決して、理解さるべきものでない。さればこそ、科學の問題に對してもまた、生物學的の生命概念を提げて近づくわけにはゆかない。そこで、この理論的研究や理論的説明の意味を、剩餘の文化生命との關係において、明瞭にするがためには、人々は寧ろ歴史的に考へて行かなければならない。

このことは、世界觀としての狹い歴史主義と、何物をも提携させることではない。たしかに、吾々は、文化人としてまさしく、吾々が現に生きてゐるところの此の歴史上の現位置を超えて、大いに歩み出づ可き權利をば、否恐らくはその義務をさへも有つてゐる。そして、偶然なる事物に小心翼々として固執することは、如何なる場合に於いても、決して、苟くも文化勞作たるものの眞意であることは出來ない。けれども、此の際、吾々が、今日までの努力によつて贏ち獲たる數多の文化財を、土臺として利用し、此の土臺の上に、吾々自ら更により多くを築かんとする時に甫めて、吾々は、現在を超えての進歩を希望し得るといふ事もまた同樣にたしかである。然らずんば、過去への後退が、そして文化の沒落が、吾々を脅やかすであらう。それ故に吾々は、わが文化の目標を考へるに當つて、吾々の關心をひくが如き本質を具へてゐる諸事象について、その歴史的源泉をも尋ねてみよう。そして有終なる文化提開のためには、文化の現狀

は如何なる要求を課してゐるかを、ここに考へてみるであらう。

以下此の小さい評論は、此の樣な視點のもとにおいて、科學の問題を明かにしようとするものである。吾々は尋ねてみよう。歐羅巴に、先づ以つて、科學として現れて來たものは何であつたか、そして、泰西に於ける今日の科學研究は、その發端に對して如何なる關係に立つてゐるか？　此等の問題を尋ねてみるときに、吾々は、科學の概念について、自儘ならぬ根據ある規定に達しうるであらう。もとより、言ふまでもなく、殊に學問的生命にとつては、何人も其の發端の姿に立ち留まつて、それで滿足してゐようといふわけにはゆかない。まさしく、吾々は、其の後の發達分化の情態をこそ眺めなければならない。およそ過去に踏み歸らうとする試みは、いづれも、現實をよそにするロマンチークの心境から生れたものであつて、最初から、難破し失脚すべき宣告を荷うてゐる。然し乍ら、一つの文化財の初期の諸段階に考へ到ることは、――それらに對して、今日吾々は、多くの點に鑑みて、斷乎たる對立の有樣にあるといふ事が、示されるといふのであるならば、――さらば、それは現在そのものにとつて豐富なる教訓となるであらう。それ故に、吾々は、歐羅巴に成起した最初の科學の本質を、ここに眼前に描き出してみよう。然るときに、吾々は、その如何なるものが一般に眞の科學であるか、そして從つて、文化財としての全科學を失つてしまうといふ危險に曝されまいと思ふならば、如何なる點が見棄てられてはならないか、といふ問題を考へることにならう。そこで、吾々は、ふりかへつて、歐羅巴に於ける科學的生命の故郷、即ち希臘に眼を向けよう。

今日吾々において科學といはれるものは、希臘において、始めて、哲學の概念のもとに抱かれて來た。そして、このギリシヤの『知への愛』は、そののち歐羅巴に於いて科學として現れた總てのものにとつて、決定的なるものとなつてゐる。（譯者註、希臘の語原において、哲學とは即ち『愛知』を意味する。）そのかぎり、希臘精神は、遙かに今日に到るまでも――此

の様な過去との聯關について、何事をも知つてゐないものの中にさへも——生き存へてゐる。偖て、吾々は、何時までもこの様にあることを欲む可きであらうか、それとも、新時代の文化要求を思ふとき、斯様な事情は根本的に改められることが必要であらうか。吾々は、四つの點について、別々に、此の問題を研究したいと思ふ。先づ最初に、吾々は、希臘において科學の研鑽に從事した所の主體について考察しよう。それは、最初の理論的なる人々の態度を理解するがためである。次に、此の理論的なる人が、自らの作品として產み出した文化財の客觀的內實を規定しよう。更に進んで、吾々は、此の理論的性格の人々が、その目的を達成するがために利用したところの媒介物について、究明するところがなければならない。即ち、科學的思惟の形式としての概念の本質が、吾々の關心をひくのである。つぎに、ギリシャの科學と聯關して、どんな一般的の世界觀が成立したか、若しくは、最初の理論的なる人々は、いはゆる生命の意味なるものを、何處に見出してゐたか、最後にこの問題を確めよう。

吾々は、概念上、これらの四つの點をそれぞれ切り離しておく。蓋し、此等種々相異つてゐる所の諸要素は、希臘に於いては事實上緊密に結びついてゐたのであるが、すべて必然的に相互に連結してゐなければならないか如何か、といふ疑問がいきなりはつきりしてゐるからである。殊に、吾々は、最早、希臘の世界觀を吾々自らのものとして、これを保持することは出來ないけれども、それにも拘らず、他の三つの點に關しては、ギリシャの科學の本質を規定してゐるところのものに、確りと固執しなければならないといふことは、思考しうるであらう。斯様な結論になりうることは、殊に吾々の出發點をなしてゐるところの問題にとつては、重要なことである。そして、希臘精神は、主知主義としての哲學にあらはれてをり、また、疑ひもなく、この主知主義的の世界觀は、最初希臘に成起した様な種類の科學と、緊密に結合してゐるものであると、斯様に謂つたとしても理由のないことではない。然らば、一體、希臘の科學の様に處置し

てゆくところの科學は、必然的に、主知主義へと赴くものであるか？　それとも、最初に舉げた科學的思惟の三要素をとつて考へるときには、吾々は希臘人と同じ道程を進んで行つて、しかも其の際、主知主義的世界觀に到着しないといふことも可能なのであるか？　吾々が、此の視點のもとにおいて、希臘の哲學を考察するならば、直ちに、すくなくとも、わが現代の科學にとつて最も主要なる問題が、明らかになりうるであらう。そして、吾々は、ここには、たゞこの點に制限しようと思ふ。

理論的なる人の出生

希臘の人々に固有なる理論的の作業を理解するがために、吾々は、最初に、知識と科學とを區別しておく。もとより、この兩者は、人類の發達においても、また個人の生活においても、漸次に、交々相流通移行するものである。けれどそれにも拘らず、その意味乃至その價値から言ふならば、この兩者は、原理的に異別なものなのである。このことは、既に次の點にあらはれてゐる。即ち、およそ知識なしの科學といふものは存在しないけれども、しかし科學のない知識といふものは、極めてたしかに可能なことである。

眞實の知的理解といふものは、ずつと希臘人以前に、何時でも、また如何なる民族においても、見出される。人々は、實踐的生活において、それを必要とするが故に、知識を得ようと努める。この場合に成立するところの知的理解は機會あるごとに累積されて、大きな團塊となり、つひに、內容上種々の點において、科學が教へる所のものと一致することが出來る。けれども、此の知識は、科學的であることを要しない。人々が、これを求めるのは、全く非科學的の目的に向つてである。即ち、例へば、時刻の測定とか、地面の測量とか、そのほか土地監理、租稅徵集などといつた樣な

目的に、人々は、この知識を利用するのである。或はまた、僧侶たちは、これを、宗教上の祭祀に、奉仕させようとするのである。知識が、斯様なお役目を勤めてゐるものである限り、それは、未だ、希臘の人々が哲學と稱んだ所のものではない。彼等の科學は、勿論、科學以前の知識と結びついてゐて、これを自身のなかに取り納れてゐる。けれども、斯ういふ事が起り得るまへに、先づ、――希臘人以前には、歐羅巴に見出されないところの――或る特殊なる精神的素質を有する人々がなければならない。そこで、吾々の考察は、科學研究の主體の上へと導かれてゆく。そして吾々は、何よりも、その本質を理解しなければならない。

およそ、人が、知識そのものの外に存する目的に使用せんがためには、最早知識を求めることをせず、たゞ知識そのもののためにこそ、何事をか知識せんと欲む時にして、はじめて、彼の態度は科學的であると謂ひ得るであらう。かくして、ここに、吾々が理論的なる人と呼ぶところのものが成立する。希臘人以前には、未だ甞て聞かなかつたところの一典型、慌忙たる生命情欲旋轉のたゞ中に、眞なるものの認識よりほかに、何物をも思はざる一典型。この樣な精神素質に關する言葉が、始めて、ヘロドトスの書物に見えてゐる。そして、其の事柄もまた、そこに明らかに描かれてゐる。クレーソスがソロンに曰ふ、『貴下は、哲學的に知識しながら、多くの國々を、理論を求めて、遍歷されたと、私は聞いてゐます。』これが決定的の要點である。『夷狄』クレーソスにとつては、斯かる努力は、實に驚愕である。だが怪しむに足りない、今日と雖もなほ、多くの人々が、かかる勞力を以つて、理解すべからざるものと考へてゐるであらう。然しながら、省察のために知識を愛すること、これこそ、まさしく、特に、希臘的なるものである。そして、希臘の人々は、彼等が、かくも非實踐的に、若しくは、かくも純粹理論的に、振舞ひ得たことを誇つてゐた。かくして、彼等は、始めて哲學者となつた。

古い精神的態度から、如何にして漸く、この新しい態度が、いて立つてきたか、吾々は斯樣に問ふを須ひないであらう。理論的討究のあらはるべき場所には、たしかにつねに、最も逼迫せる生活窮乏からの解放がとげられてゐて、人々が知識愛求の勞作にいそしむがための、餘裕ある時間が保存されてゐなければならない。けれども、斯樣な豫備條件は、希臘以外の場所においてもまた缺けてはゐなかつたのであるが、これにも拘らず、ここに、希臘人以前には、決して科學は存在しなかつたのである。このことに就いての理由を、吾々は、これ以上追究することをしない。そして、寧ろ、如何なる原理上の轉向が希臘人のもとにおいて行はれたかを、決定することだけに、考察を制限しよう。偖てここに、吾々は、目的と手段との關係が根本から顚倒したといふ事實を視る。簡單に言ふならば、科學以前の——前科學的性格の——人々は、生きんがために知識を求める。これに反して、科學的乃至理論的の人々は、知識を求めんがために生きるのである。もとより、斯樣な例は、二つの極端なる場合を示すものであつて、それが、この樣に全く純粹な相において實現されるといふことは稀であるが、併し乍らそれにも拘らず、此の兩者を對立することは、甚だ教訓的である。然かも殊に、希臘において實現された此の轉向が、その人間生命にとつての意義において、二つの異つた視點のもとに考察せられ得るといふことを考へるときに、この對立は特に吾々を教へるところが多い。

この手段目的顚倒の事實は、先づ、一つの心的過程として、これを、同じ心理學的概念の下に含まれる他の諸過程と比較することによつて、解釋することが出來る。さてこの場合には、吾々は、評價移動の過程について——それは多樣にあらはれるものであるが——一般的に語ることになる。かくて、例へば、大概の人々は、元來、或物を買はうといふ目的のために、金錢を求める。そして、ここでは、金錢は、純然たる手段としての價値を有つてゐる。けれども、金錢のために金錢を集めるところの守錢奴においては、逆に、此の關係は顚倒してゐる。即ち、價値抑揚の置き場所が、目

的なるものから手段なるものへと移動して、かくて、金錢は目的となり、そして生命はこれが所有（財産）に奉仕するものとなるのである。理論的なる人々の特徴をなしてゐるところの轉向は、まさにこれに呼應するものである。實踐的なる人々にとつては、知識は、彼等がその完成に向つて努力するところの目的としての生命を、增進するための單なる手段であるのに、最初のギリシヤの哲學者たちにおいては、この價値抑揚の置き場所は移動して、彼等は知識を目的となし、そして生命は尙ほたゞ知識のために奉仕するところの手段たるに止つてゐる。斯様な比較は、多くの人々にとつて、不愉快なことに思はれるかも知れない。けれども、一人々々の個人の心的過程を心理學的に說明することを問題とするかぎり、この比較は全く正當なものである。守錢奴と理論的なる人とは、元來の評價關係を顚倒するといふ點において――即ち、最初に目的であつたものから手段たるものの上へと、價値抑揚を移動させるといふ點において、兩者互に事情を同じくするものである。

否、吾々は更に進んで言ふことが出來る。そして、實にまさしく、此の事は、吾々の思想關係にとつて、重要なことである。若しも、今日様々に行はれてゐる様に、純粹自然的生命を以つて最高の財と見做し、そして他のすべての財の準矩をここに見るのであるならば、かかる理論的なる人の處置は、守錢奴の態度と同様に、疑問なものと思はれるに相違ない更に、兩者は、彼等の生命の正しい意味を、根本的に過つたものであり、そして、目的から手段へと價値抑揚を移動するといふことは、兩者において、生命の壞敗を意味するものである。省察そのもののために知識を愛するが如き學究のまへに立つては、生物學的の立場をとる哲學は、救はるべきすべを有たない。そこで、此處から、いはゆる『實用主義』なるものが育つてくる。

けれども、此等上述の過程は、これをまた全く別な他の一視點のもとに考察して、次の様に謂ふことが出來る。即ち

文化なるものの意味を顧慮しつゝ考へるならば、理論的なる人と守錢奴との間には、單に何等の類似をも認むべきでない許りでなく、寧ろ反つて、原理的の反對さへも確認されるのである。凡そ、金錢は、これを生命の目的たらしむるにふさはしき何等の價値をも固有してはゐない。それ故に、守錢奴の樣に、この金錢を手段として取扱ふことをしない人々の生命は、無意味である。これに反して、知識には、眞理の價値が固着してゐる。それ故に、若しも、理論的なる人が、生命を、斯かる價値の實現のために奉仕させるのであるならば、その人の行爲は、此の價値を思ふとき、優れたる意味に滿ちたるものである。もとより、斯樣に考へるがためには、單なる生命の價値から獨立に、それ丈けで妥當するところの自己價値なるものの存立を、前提しなければならない。だがさうしたあかつきには、科學以前の（前科學的の）人々から理論的なる人を區別するところの價値移動の事實は、新しい光明に照らし出されてくる。ここに到つては、理論的なる人の出生は、最も重大なる一文化事件たるの意義を有つてゐる。蓋し、以前には其の本質において嘗て把握されてゐなかつたところの一つの自己價値が、この事件によつてはじめて、意識のなかへと高められ、かくして、單なる生命を超越する一の新文化財の培育が可能にされたからである。されば、文化てふ視點のもとにおいては、希臘に於ける理論的なる人の出生は、決して生命の壞敗として考へらるべきものではなくて、寧ろ、それは、最も重要なる一つの文化財の展開のための豫約として見られなければならないのである。實に、それは、歐洲の科學全體の發端を示表するものである。

科學の主體に關して確定すべきであつたところを、明かにするがためには、以上の解釋で足り得るであらう。苟くも、理論的研究があらはる可きであるならば、知識は由來眞理の價値を固有するの故をもつて、この知識を追ひ求める人々がなければならない。かかる人々、彼等にとつては、**眞理は既に自己價値であり、これが實現は、認識の道程を通して、**彼等の生命に意味を賦與するものである。

神話を放れたる聯絡

此の新しい精神態度の地盤に生ひ立つた科學的理論の、內容的形成については、しかしながら、以上の說明からは、未だ何事をも察知するわけにはゆかない。吾々は、知識それ自らのために乃至省察そのもののために、如何なる知識をもすべて探し求めて、これを科學の中に採り入れはしないであらう。例へば、私がいま讀書してゐるといふ事は、いかにも確かに眞實である。けれども、斯樣な乃至これに類似した事實のみからでは、科學は建設されようとしない。もとより、種々の事情によつては、斯樣な事實と雖もまた、科學的意義を保有することが出來る。けれども、一つ一つに切り放された事實としては、それらは、斯樣な意義を有つてはゐないのである。そして、既に、吾々がそれらを『切り放された』と呼ぶといふことそのことが、そこに科學たるがためには尙ほ缺けてゐるところのものを暗示してゐる。即ち、斯樣な事實は、他の諸事實と共に、一つの包括的の聯絡に齎らされなければならない。吾々が、それらを、かかる聯絡において認識しようと求めるときに、始めて、吾々は、科學の道程に步み入るのである。

最初の哲學において、この科學的聯絡の本質をなしてゐるものは、何であるか？ 希臘に於ける理論的なる人々は、彼等の認識追求の努力に、何等の限界をも置かなかつたといふことを、吾々は見出す。乃ち、彼等は、『全體者とは何であるか？』といふ疑問を提出した。從つて、此の研究は、『世界』をその對象と爲した。そして、ここに世界とは、彼等が、存在するものとして、前提したところの總てを、意味したのである。ここから、最初の科學の內容が生じてくる。即ち、最初の科學は、世界全體の聯絡における世界部分の說明である。そして、斯樣な方向への努力は、人々が眞理のために眞理を愛した場合において、始めて、出生し得たのである。人々が、知識を以つて、理論以外の目的に奉仕させよ

うとする限りは、存在するところの全體者に關する探求の如きは、重要なるものとは思はれないであらう。蓋し、斯樣な探求の實踐上の價値は、常に、問題たるに止るからである。これに反して、希臘の哲學者たちは、まさしく此の甚だ非實踐的なる目標をば、自らうち立てたのであつた。そして、ここをもつて、彼等は、省察そのもののために知識を愛することから、また、科學てふ客觀的文化財へと到達したのである。

彼等の事績の本質は、次の樣にして、一層精細に、闡明されるであらう。彼等の探し求めたところのものは、あらゆる特殊なる現象の根底に横はる所の普遍者若しくは共通者であつた。そして、彼等は、これを、世界の『アルヘー』と呼んだ。（譯者註、アルヘーといふ希臘語は、以下にも述べられる樣に、元來、〔始め〕即ち原質といふ意味から、漸くにして原理といふ意味に展開してゆく。吾々は、そこに、神話から哲學への移行を理解しなければならない。）元來、この言葉は、時間的の『始め』を意味する。けれども、ここに眞に考へられてゐるところのものを、理解しようと思ふならば、人々は、まさに此の時間性なるものから眼を轉じなければならない。最初の科學の人々にとつては、『始め』（原質）とは、あまねく存在しそして絶えず存在したところのもの――從つて、非時間的乃至永遠的と呼ばるべきであるものの謂ひである。今日吾々は『プリンチープ』（原理）と言ふが、矢張り同樣に、なほ時間的要素の餘韻を含んでゐる所の詞語を、使用してゐるわけである。（譯者註プリンキピウムといふ羅典語は、元來、時間的乃至其他の序列における最初のもの、從つて、後に從ふものに對する始まり又は準矩源泉若しくは基礎となるものの意味である。）なほそのほかに、吾々は、根據とか若しくは本質とか、言ふことも出來る。併し乍ら、人々が、如何なる名稱を選ばうとも、事柄は常に同一である。『世界を、その内奧において統べてゐるところの者を、俺は識るのだ。』このファウストの精進は、既に、最初の歐洲の科學の性格にとつての、準軌たるものであつた。

偖て、ここに創造された文化財の内容を、一例を擧げて、闡明するがために、吾々は、最初のギリシヤの哲學者たち

の一人が、吾々に遺してゐる命題を、思ひ出さう。即ち、アナキシメネスは、次の樣に敎へた。『吾々の靈は、空氣であり、そしてこれによつて吾々を組み合せてゐる樣に、空氣と呼吸とが、また全世界組織をも包括してゐるのである。』ここに、次のことは、容易に明かになるであらう。即ち、世界の始め乃至その原理の認識は、すべての事物を統一的の聯絡において認識すべく、如何樣に吾々を敎へてゐるか——そして、最初の理論的なる人々が、自ら產み出した科學といふ作品の客觀的內實が、そこに如何樣に込められてゐるか、といふ事が、容易に明かになるであらう。

この科學的內容の本質に、すべての點からして、限界を與へるがために、吾々は、ただ一つの規定を附け加へよう。一體、世界の組織聯絡の解釋は、科學の形においてのみでなく、なほ他の形においても存在する。そして、斯樣な解釋にもまた科學が結合し得るのであるから、それは、吾々にとつて、重要なるものである。即ち、實踐上の視點のもとで集められた知識と同樣に、神話なるものは、科學の前程段階であつた。併し乍ら、それはたしかに前程段階であつた。まさにそれ故にこそ、吾々は、神話をば、同時に、科學から嚴密に區別しなければならない。そして、このことは、困難なことではない。

神話にとつては、事相の理論的意味における眞理が、重要の問題ではなくて、むしろ、神話は、想像に訴へて、事物の聯絡をば、人間に類似した本體の顯現として、說明するものである。そこで、神話にとつては、大地は女となり、大なる天は男となる。否、更に進んで、この神話上の人格化は、天と地の成立以前にあつた所のもの——人々が抽象的概念的に謂ひあらはす外はなかつた樣な、所謂『無』——の上にまでも擴げられる。ただ神話にとつては、此の『無』は決して本當の無を意味するのではない。混沌たる虛空『カーオス』は、大きく欠伸する口腔であり、そこから、秩序ある宇宙が、始めて生れてきたといふ。けれども、此の樣な世界解釋の仕方は、理論的なる人の排斥するところである。そ

れ故に、理論的なる人が、神話に近接する場合には、彼は、同時に、世界の『魔法を切り放す』可き任務を有つてゐる。從つて、科學的認識の內實を規定するに當つては、そこに認識せられたる事物の聯絡が、明確に、神話を放れたるものとして表示されるといふことが、重要視される。

この場合に於いても、たしかにまた、前科學的即ち神話的の聯絡から、科學的即ち純粹理論的の聯絡へと導いて行く漸次的の移行がある。けれども、斯樣な事情は、兩者間の原理的の差別を、止揚するものではない。それは丁度、實踐的の要求より成起したる不完全の認識から理論的科學への移行が、單なる知識と科學との間の原理的の差別を、問題として遺すと同樣である。かかる移行は、所詮、一者から他者への移行としてのみ、理解すべきである。このこともまた、一の引例によつて、明かになるであらう。通常、ターレスを以つて、最初の哲學者と稱してゐる。彼は、全體者は『水』であると、教へたからである。けれども、此の思想家の此の光榮は、また、兎角に論じられた。即ち、恐らくターレスは、萬象はオケアーノスに淵源すると說いてゐる神話の中に、既に含まれてゐたところの思想に、單に表現を賦へたにすぎない、と言ひ得るであらう。（譯者註、オケアーノスはテチスと共に水の神である。そして、これが萬象發生の双生神であると說く一派の神話が既に行はれてゐたのであつた。）從つて、彼の教說は、神話と科學との間に介在する一の移行の現象であつたであらう。然るに、アナキシメネスの場合は、原理的に異つてゐる。世界の原質は『空氣』であると言ふ彼の命題は、萬物の根原として水を擧げたターレスの命題に、近く相類するものにみえるであらう。けれども、アナキシメネスに於いては、彼が純粹科學的に認識せんとするの意圖を懷いてゐたといふことは、明かである。蓋し、萬物は、空氣の濃厚化若しくは稀薄化によつて成起したものであると、斯樣に、彼は空氣について思惟するのである。ここに於いてか、世界は、根本的に、『魔法から切り放された』のである。それ故に吾々は次の如く言ふべきである。ここにこそ、理論的要求か

ら發現して、いかなる神話からも原理的に異別なる統一的聯絡において、世界の全體者を認識せんとする一つの試みがある。

概念の發見

吾々は、既に、科學的なる人の本質と、並に、その作品の實質的内容とを、理解したが、この理論的主體が、自ら認識しようと欲する所の客觀的聯絡を、己れの所有に爲すがための媒介の具――斯くして後に、彼の知識を整頓して、これを他人に傳達し得るものたらしめるがための媒介の具に關しては、なほ未だ明瞭を缺いてゐる。既に最初の哲學者たちが、斯かる媒介の具を、永く繼續して使用してゐたといふことは、もとより論を俟たない。然らずんば、彼等は、何物をも認識しなかつた筈である。けれども、彼等は、その何物をか認識するに當つて自ら爲してゐた所のことを、たゞ極めて不完全にしか意識してゐなかつたのである。實に、それより外ではあり得なかつたのである。彼等の眼は、たゞひたすらに、認識の對象に向ひ、かくて、對象の認識は、なほ未だ、問題にはならなかつた。これらの思想家たちは、換言するならば、論理的に思惟してはゐたけれど、併し乍ら、彼等は、何等の論理學をも討究せず、從つて、彼等に認識を可能ならしめたところの『ロゴス』(理性)については、何事をも知らなかつたのである。偖て、希臘の科學がロゴスへの武歩は、如何に果されたか？

斯かる武歩が進められるためには、先づ第一に、此の點に關して疑義を抱くに至るべき機會に、逢着しなければならなかつた。そしてこのことは、既に研究が可なりの程度にまで發達したのち、且つまた、それまでは各個對象の上にのみ注がれてゐた理論的なる人の眼が、認識の主體の上へと向けられるに至つて、ここに始めて、事實となつて現はれた。

此の方向に於ける轉向をば、人々は、所謂ソフィストたちの事業と見做してゐる。この見方が適當なものであるとするならば、彼等ソフィストたちは、ここに、それまで全く不問に殘されてゐた一つの新しい世界をば、發見したものであつた。彼等は、すべての個人が自分だけで單獨に有つところのもの、今日吾々のいはゆる心的なるものをば、たゞ各々の個人各個にのみ屬するところの主觀的なるものと考へた。彼等は、發見者の滿足のなかで、――今日でもなほ個々心理學者たちが爲てゐる樣に、――同時に、彼等によつて見出された領域に、自らを閉ぢこめた。そして、まさしくこのことは、重大なことであつた。蓋し、かくして、すべての個人に共通なる包括的の世界と言ふが如きものは、疑はしいものとならなければならなかつたからである。たゞ一人々々の個人が、すべての事物一般を計るべき尺度であると考へられた。斯樣な前提のもとに於いては、人々は、萬人に妥當なる世界認識と言ふが如きは、もはや、到達すべからざるものと考へてゐたし、また實際にそのことは爲し得なかつたのである。

　ソフィストの議論は、決して、言葉の惡い意味での「ソフィスト的」（詭辯的）ではなかつたのである。凡そ、個體それ自らの心的生命を外にしては、それ以外の何物も、直接に個體に與へられるものはないといふことが、信じられる限り、――人間が己れ自身を踏み出でて、かくて、世界を客觀的に把握し、乃至は、その聯絡において世界を認識するを得るに至ると言ふ事は、抑も如何にして起るのであるかは、理解すべからざるところでなければならない。されば、諸々の事物に關して、吾々自ら構成するところのすべての思考は、たゞ全く個人的の思考であるか、若しくは、たゞ各々の個人にとつて眞理と考へられるもののみが、『眞理』と呼ばるべきかであらう。かくて、ここに先づ必然的に、次の疑問が起つたのである。世界の聯絡に就いて一の科學を創成するがために、人間の意圖に從ふところのものは、抑も如何なる媒介の具であらうか？

偖て然らば、始めてギリシャの哲學を導いて、ソフイスト一派の消極的なる心理主義を超出せしめ、斯くして、此の新問題の積極的解決を與へ得たのは、何人であつたかといふことは、ここに穿鑿するの必要はない。吾々は傳統を保持しよう。乃ち、アリストテレスは次の樣に言つてゐる。ソクラテスの事業功績として承認されなければならないのは、二つの事柄である。そして其の二つながら、知識の原理に關するものである。即ち、歸納證明（歸納法）と、そして一般的なる概念規定（定義）とである。このことは、簡單に言へば、次の事實を意味する。即ち、あらゆる個體各々が己れ自ら單獨に有する所の特殊なるものから、比較綜合によつて、共通者が取り出され、かくて普遍者は概念において見出されて、その内容は精密に説明若くは『限定』されるのである。概念規定は、今日なほ、定義と呼ばれてゐる。そして、此の概念の形成こそは、實に、かの媒介――――科學において、人々が、個人的臆見の多樣性を超越するがために恃むところの媒介の具である。概念のうちにこそ、最初の第一歩からして、あらゆる科學的理論が、動いてゐたのである。それ故に、ソクラテスの思考は、アリストテレスに從へば、かくも簡單に示されてゐるが、それだけ、その意義は偉大なるものであつた。彼によつてこそ、次のことが、明かになる。吾々は、たゞに吾々自らの個人的なる心的生命を理解するのみではない。寧ろ、何人と雖も、探求しさへすれば、彼と他の人々とを結んでゐる何物かを、見出すことができるのである。即ち、概念において、若しくは、ロゴスにおいて、彼は何らか超個體的なるものを確保するのである。このことが如實となつたあかつきには、直ちに、彼をば主觀的なるものより客觀的なるものへと導き、かくて、原理的に、萬人に妥當なる世界認識をも可能ならしめる所の媒介者をば、彼は同時にここに所有するものである。

偖て、長い間事實上利用されてはゐたが、併し乍ら今にして始めて發見されたところの此の認識媒介が、認識の對象に對する關係は、これを如何に理解すべきであるか、或は、世界本體の理解にとつて、抑も概念は何を爲すか、と言

問題は、暫らくこれを考慮の外に置かう。斯様なことは、ソクラテスにとつて、主要の問題ではなかつた。彼の求めたところは、單に實踐的生活に於いて、すべてにとつて正しきものに關し、人々を啓蒙理解せしめることであつた。それにも拘らず、事物の聯絡に關する科學にとつてもまた、彼の思考は重要なるものである。彼に到るまでは、人々はたゞ、客體と並に主體と——換言すれば、外界の事物と、並に、心的内生活を具備する人間とを、識つてゐたにすぎない。ソクラテスにして正しいならば、さらば、吾々は、概念において或る第三者を所有するものである。此の第三者こそは、認識主體の領域にも、また認識對象の範圍にも屬することなく、寧ろ、眞正の『媒介』として、中間に橫はるものである。而して、まさにそれ故に、これこそは、科學が期望するところのもの——即ち、多くの異別なる人々を通しての、一つの同一的なる外界の認識——に導くものである。ソクラテスのロゴスは實に、個々の人々の個的なる心的生命からして、（彼等にしてこれを求めるならば）、すべてに共通なるものたり得る所の一の世界へと、橋梁を架するものである。

認識媒介者としての概念は、何故に、かの理論的なる人、並に、神話を放れたる知識聯絡と同樣に、最初の哲學の本質に屬するものであるかといふことは、玆に吾々はこれを理解する。最後に、知識が、一般に、從つて以つて、傳達せらるるに至る所の形式——（即ち言語的表現）——を考へるならば、吾々は、總括的に、次の樣に言ひ得るであらう。希臘に於いて、科學は、實際の文化財として、次の如き性質の命題から成立した。即ち、科學は、その命題の言葉をば、明確なる概念に結びつけて、かくして、認識諸對象の聯絡に關する所の、眞理それ自らのために求められたる眞理をば一義的の表現に齎らしたのである。

希臘の主知主義

此の論文の先頭に提出された問題のための結論を、効果あるものたらしめんがために、吾々は、希臘哲學の展開をたどつて、尙ほ最後の一歩――上來論じて來た諸要素に劣ることなく、この希臘哲學をして、歐羅巴の全科學にとつて意義あるものたらしめてゐるところの、最後の一武歩にまで迫らう。其の際、吾々はまた再び、認識の媒介としての概念乃至ロゴスに、結びついて行かう。さうすれば、現代多様に論議されてゐる所の世界觀が、如何にして成立したかといふことが、最もよく闡明されるであらう。だが、吾々は、ここでもまた、一般の原理だけに限つておく。

既に夙く、希臘人の許に於いては、同質なるものは唯だ同質なるものによつてのみ認識されるといふ見解（譯者註、エムペドクレス流の認識模寫觀）が行はれてゐた。科學の成果は、これに從へば、一の原像の模寫において求めらるべきであつた。此のたゞ全く單獨に議せられたる前提は、ソクラテスの概念論の地盤に於いては、廣大なる歸結へと導かれなければならなかつた。即ち、概念なるものは、また、吾々が認識すべき原像に適合すべきところの模寫であると見るならば、そのときは、全體の世界は、それが認識せられ得るものたる限り、一の概念的乃至論理的性格を、享有することになる。知性の認識媒介（概念）と、認識に應ずるが如く規定せられたる乃至知性的に規定せられたる對象とは、必然的に相呼應する。ここから次の結論が出る。論理學と本體學とは、相互から、區別せらるべきものでない。否、寧ろ思惟と實在とは相一致するものであり、從つて、世界の本質は、たゞ思考としてのみ考へられる。かかる前提の下に於いて、理論的なる人は、世界に向つてかう言はなければならない、『お前は、お前を摑む精神に等しい』と。そして、このことは、たゞに宇宙論にとつてのみではなく、同時に、人間生命の意味の理解にとつてもまた、重大な意義を有つことになる。兩者は、多言を費さずして、明瞭になるであらう。

およそ、同質なるものは、たゞ同質なるものによつてのみ、認識さるべきであるならば、事物の秩序は、思考の論理

的秩序から、原理的に異別であることは出來ない。從つて、眞なる思考を一つの組織に齎らすことが出來たならば、吾々は同時に、これを以つて、實在の組織的聯絡を把握するものである。即ち、實在の世界は、論理的に整へられたる秩序世界である。けれど、これでも未だ總てではない。更に、吾々が直接に生きてゐるところの感性界の本質もまた、ここから規定される。感性界は、恒に、かかる論理的秩序に反對するところの無規則なる充滿乃至雜多を呈示するが故に、斯樣なる世界には、眞正の實在たるの性格は、歸屬するを得ない。それは、單なる現象、若しくは、第二次的の存在となる。かかる存在は、一の非合理體として、そこに眞の認識は存しない。世界は、その本質においては、恒に、ロゴスによつて即ち理性によつて、司配されてゐる。そして、此の世界理性は、實に神性と一致するものであるが、それが親しく吾々に昵んで、かくて、吾々は、自らの裡に於いて、その理性に支配される、即ち、論理的に乃至理性的に、思惟するのである。かくて、知性は高められて世界原理となる、乃至は、事物の本質は、主知主義的に理解される。

然るとき、人間の規定（本分）に關する見解も、以上と緊密なる聯絡にある。吾々は、萬有と調和して、たゞ吾々の知性によつてのみ知識されるものであるならば、吾々の生命の意味もまた、知性からこそ、生れるものでなければならない。さらば、即ち、ロゴス乃至理性は、實在であるばかりでなく、同時にまた、世界目的、すべての眞純なる努力の目標、將た最高財（善）である。既にソクラテスの教への中に、此の見解は準備されてゐた。正しきものを知識する人は、また正しきことを行爲するに相違ない。罪惡とは、畢竟するに、誤解（知識の不足）である、それ故にこそ、ソクラテスにとつては、普遍妥當的なる認識が、然かく重要だつたのである。しかるに、彼に追從したギリシャの偉大なる形而上學者たちに於いては、この同じ確信は、遂に、次の樣な姿をとることになる。文化のすべての價値は、知性的價値に即して、計られなければならない。規範の世界は、嚴密なる意味において mundus intelligibilis（叡知界）となる。

かくして、この主知主義は、結局、また實踐上の關係においても、生命解釋として大成し、そして、宏大なる歸結を作ふところの一の體系となつて結ばれる。

吾々は、これ以上其の詳細に亘つて、希臘の世界觀を、究明するの要はない。蓋し、「充ち滿ちたる生命」こそ最高の財であると考へてゐるところの現代の思想家が、上述の如き世界觀を嫌厭する所以、將たまた、更に、斯くの如き結論に導くに到つたところの科學をば、不信の心を抱いて、考察することになり易い所以も、吾々は、今にして既にこれを理解する。近代の人にとつては、知性は、世界と生命のすべてに對する尺度ではない。實在の本質は、その最奥の根底においては、論理的なるものであり、從つて、非合理的なる感性界は、何ら眞の現實性を有するものでない、といふことは、近代の人の信じない所である。彼は、すべての文化の價値を、理論的眞理に即いて計量しようとは全く考へない。寧ろ、彼は、藝術的生命、倫理的生命、宗教的生命において、單なる知性的の完全性には決して還元せられ得ない所の獨立せる自己價値を承認する。かくしてのみ、彼の生命解釋は、この歷史的位置——そこに彼が文化人として立つところの——と諧調を保つものであると、彼には思はれる。吾々が抑もの始めに言つた樣に、この全き人間が、その活動のあらゆる側面を具備したるがまゝにして、なほ世界觀の中でもまた、毅然たる地位を占むべきである。それ故に、若しも科學が、この生命の科學的ならざる結構をば、承認し得ない場合には、かかる科學は棄て去らるべきものである。

希臘の科學の永遠的要素と一時的要素

偖てここに、吾々の所論の出發點である所の科學の現狀が、その過去との聯絡において、明らかになつたであらう。勿論、吾々は、近代の問題をその全範圍において提出することを考へはしない。況して、其の解決を企圖するのではな

に、併し乍ら、吾々の今日の科學が希臘の哲學に對する關係を、尠くとも問題として見るがために、吾々自ら其の中に動きつゝあるところの思潮方向が、明瞭に會得されるに到るまで、なほいま暫らく、この既に着手されたる思想の脈絡をたどらう。その際、吾々は、かの希臘の主知主義は一面的なる世界觀であり、近代の人は最早これを以つて自ら滿足してあることは出來ないといふ事を、無條件的に承認する。それにも拘らず、若しも、吾々が一般に、なほ何物か科學の名に値ひするものを、擁護しようと欲むならば、吾々は、希臘の人々が意識に齎してゐた樣な、理論的なる人、神話を放れたる認識聯絡、將た概念をば、動かす可からざる文化の理想として、固執するの必要はないであらうか？

此の疑問は、先づ、最後の世界觀の問題を顧慮することなしに、答へられなければならない。そして、吾々が、科學を以つて、爾餘のものと併立する一つの文化財――それが獨裁權を要求することが尠ければ尠いほど、愈々益々、その特質に於いて、擁護せられ且つ完成せらる可きであるところの一つの文化財――と考へるときには、直ちに、上述のことは可能となる。然るとき、吾々は、次のことを見出す。希臘の人々は、尠くとも此の特殊なる文化財の或る點について、不滅の功業を果してゐる。そして、吾々は、吾々の心に科學を求むるかぎり、此の點に關する彼等の道程を、見棄ててはならないのである。さきに吾々が概念上區別することが出來たところの、最初に擧げた三つの要素について、再び別々に、この事を擧示してゆかう。

およそ一般に科學が存在すべきであるならば、何よりも先づ、理論的なる人々こそは、缺く可からざるものである。科學的討究は、爾餘の文化的諸勞作と併存する一つの文化勞作であるといふ事を、吾々が前提する時に於いてこそ、眞理なるものは、生命が保有するところの他の諸々の自己價値と並んで、純粋に一つの自己價値であることが出來る。しかるとき、これが實現のためには、省察そのもののために知識を愛し、若しくは、認識は眞理なるが故にのみひたすら認識を

求むるところの主體が必要である。さきに述べたるが如き價値の移動、並に、ここから由來して起るところの、手段の目的への轉換といふことがないとすれば、科學てふ文化財の根本的なる培育は、思考し得られざるところであらう。それ故に、吾々は、すべての人々が其の生命の意味を科學的討究において見出すと言ふことを、願ひはしない。否、希臘に於いてもまた、このことは說かれなかつたところである。理論的なる主體の數は、現代におけると同樣、希臘においても、比較的少數であつた。併し乍ら、科學的認識を以つて自らの使命として選んだところの、（小數ながらも）幾人かの人々は、科學的ならざる何らかの目的のために知識を求むるにあらずして、たゞ理論そのもののためにこそ、これを愛するものであると言ふ意味に於いて、彼等は恒に希臘の人でなければならない。偖て、この點に關しては、最初の希臘の科學の本質から、原理的に背離するといふことが、決して、あつてはならないのである。これが第一の點である。

次に、希臘の人々に於いては、すべての個々なるものをば、全體との聯絡において認識すべく求めることによつて、そこに科學の客觀的內容が生れたのであつたが、――かかる科學の客觀的內實に關しては如何？　この點に關しては、今日吾々においては、確かに本質的の相違が存立する樣に思はれるであらう。近代の理論的なる人は、つねに必ずしも世界全體なるものの上に其の注意を注いで、斯くて、およそ萬象の原理は何であるかと云ふ問題を提起するに至りはしない。吾々は、世界萬有に關する科學と並んで、その認識目標の制限せられたる專攻的の特殊學理なるものを有するのである。併し乍ら、このことは、希臘精神にとつてもまた、全く關知しない事柄ではなかつたのであるが、よしやこの事實をば度外視するとしても、斯かる科學の特殊分化は、未だ決して、希臘の認識目標からの原理的背離（吾々にとつて本質的なる方向に於ける）を意味するものではない。蓋し、世界のすべての部分々々が認識において聯絡づけられるところのものが、假令眞の全體そのもの――全體一般――ではないとしても、しかもそれは、常に、何らか一つの全體――特

殊的全體」であつて、科學は實に、かかる全體を把握せんと欲するものであり、且つ、自己に屬する個的なるものすべて、かかる全體に連接するものである。それ故に、吾々と雖もまた、科學に於いては、認識聯絡の『アルヘー』乃至『原理』を放棄することは出來ない。これが實に決定的の點である。此の點に比較すれば、次の事情――即ち、近代の科學は、希臘の科學よりも遙かにより以上に、世界を特殊なる諸領域に分解して、その各々に對して、認識の特殊なる原理を探求せんとするものであると言ふ事情は、第二次的のものとなる。吾々に於いてもまた希臘の人々に於けると同樣に、恒に、箇別的なる部分は、それが部分として屬してゐる所の全體との聯絡に於いて認識されるのである。否これに留らない。吾々と雖も、もとより、吾々が先づ以つて個々別々に研究する所の種々なる特殊的全體をば、一の窮極にして全包括的なる全體の部分として認識することを、永久に斷念しようとは思はないのである。終りに、純粹に科學的なる聯絡は、吾々にとつてもまた最初の哲學者たちに於けると同樣に、神話を放れたるものでなければならないと云ふ事は、全く何等の特別なる説明をも要しない。かくて、上述の第二の要素に關しても、希臘の認識理想は、理論的なる人に關するものと同樣に、爭ふ可からざるものである。

然らば、認識の媒介、即ち概念に關しては如何？　この點に關しては、人々は、恐らくは大部分、アリストテレスがソクラテスの方法として語るところの古い道程を歩むことに、反對するであらう。近代の世界には、まさしく、概念的思惟に對する嫌惡が、實に樣々にあらはれてゐる。そして、科學に於いてもまた、直觀が思惟に代る可きであることが、欲まれてゐる。けれども、此の點に關してもまた、希臘の哲學に對する原理的の反對が語られてはならないと云ふ事を、ここに指摘することは困難でない。たしかに、科學的概念構成の仕方には、今日、甚だ樣々なる仕方があつて、それらは、直觀の世界に對して、甚だ異別なる關係に立つてゐる。吾々は、一般化的なる歸納法のみを以つてしては、

間に合はない。近代の研究の複雜なる分化、多數の個別的諸理論に即しての世界全體態の分派、これと連繫して、方法も多様である。然し乍ら、また同様に、吾々は、斯かる多様雜多の中に存する所の共通なるものを、看過してはならない。そして、然るときにおいて、吾々は次の結論を固執しなければならない。即ち、單なる直觀は、たゞそれだけでは、未だ何等の科學的眞理をも與へるものではないのである。このことに關しては、既に唯だ一つの事情にして、決定的である。およそ、科學の命題は、言語から成立してゐる。故に、かかる言語の意味するところのものを、精密に傳へることが、常に、必要である。而して、斯かる言語の一義性なるものは、原理上、ソクラテスの意味における『限定』によつてのほか、これに到達することが出來ない。吾々が科學によつて表現しようと思ふものの內容は、——吾々の言語を聞き若しくは讀む者の總てが、その意味を同一なるものとして一義的に理解するために、——概念的に規定されてゐなければならない。個別的なる個人たちに屬するところの、多くの異別的にして且つ動搖的なる表象からは區別されて、一つの概念內容の論理的同一形式なるものが無いならば、共通なる一對象に對しての、苟くもすべてに妥當なる認識といふが如きものは存在しない。それ故に、何らかの概念もなくして、苟くも、科學が成立し得ると云ふことは、理解すべからざることである。かくて、此の點に關してもまた、吾々は、必然的に、概念において思惟する希臘の哲學者たちの、追從者でなければならない。

以上の如くして、ここに吾々は、決定的なる歸結に到達した。吾々は、さきに既に、次のことを理解してゐた。即ち希臘に於いては、科學は、眞の文化財として、命題から成立してゐたのであるが、科學は、この命題の言語をば概念に結びつけ、かくすることによつて、認識諸對象の聯絡に關する、眞理それ自身のために求められたる眞理をば、一義的の表現に齎したのであつた。しかるに、近代の科學もまた、これと異るものであり得ないと云ふことは、今に到つて、既

に明かでなければならない。理論的なる人、神話を放れたる認識聯絡、認識媒介としての概念の規定、實に此の三要素において、希臘の人々は、一の文化財を完成した。かくて、これこそは實に、超時間的――永遠的――意義を有するものである。即ち、すべての時代に妥當するものである。それ故に、吾々が一般に科學の追求を欲むかぎり、吾々はまたこれを固執しなければならないのである。

併し乍ら、以上を以つてしては、未だなほ、主要問題は、決定されてゐない様に思はれる。抑も、吾々は、近代人として、なほ科學をば欲み得るであらうか？　希臘的なる主知主義の世界觀は、現代の文化意識に、背馳するものであるが、吾々は、科學を欲むとき、同時に必然的に、かかる主知主義の世界觀に陷ることはないであらうか？

既に以上の說述を經てきたあとでは、此の問題に答へることも、もはや困難ではない。たゞ一つの事を、吾々はなほ爲なければならない。即ち、吾々は、希臘思想の前提――同質なるものはただ同質なるものによつてのみ認識される、從つて、眞實なる概念は、世界の本體の模寫である、と云ふ前提――を問題として問ふてみなければならない。さうすれば、そこに、新しい境地への展望が開けてくる。即ち、若しも、希臘の認識解釋が、當然保持すべからさるものとして表明されるあかつきには、吾々は、是を以つて、同時に、主知主義の世界觀のすべての歸結から解放されるであらう。然るときには、吾々は、概念による認識を以つて、――全文化生命の上に君臨する獨裁的支配權をここに認容することなくして、――人間が世界に對するに當つて自ら撰び得る諸々の形式の中で、爾餘のものと並立する單に一つの形式であると考へていい。否、更にそれ以上である。若しも、吾々が、科學を以つて、他の同樣に權利づけられたる諸文化價値と並立する一の特殊なる文化價値として、一とたび認識するに至つたならば、そこに、まさしく、理論的なる人にとつて、一つの義務が生れてくる。即ち、藝術的、倫理的、宗教的價値をば、單に知性的なる完全性の理論的價値に即して

計量すべからざる、夫々獨立せる自己價値として、これを承認すべき義務が生れてくる。要するに、若しも、希臘の模寫說が倒れるならば、主知主義なるものは、希臘の科學討究の他の三要素との結合に於いて、斷じて最早必然的でないことを曝露する。そして、これらに對して、一面的なる世界觀を將來するの責任を負はせて、それをもつて、古い科學を非難すべき權利は、最早何人も有つてはゐないのである。

近代の科學が希臘の哲學に對する關係如何の問題を闡明するためには、以上の暗示で足りるに相違ない。終りに臨んで、最後の決定に導くべき道程に關して、尙ほただ一言を加へよう。以上の論述によつて、次のことは既に明かである。理論的なる人は、主知主義の世界觀に對して、如何なる立場に立つかといふことに關しては、吾々は、たゞ認識理論によつてのみ、その解決を獲るものである。然かも、この場合には、就中カントの哲學が、考慮されなければならないであらう。何故ならば、科學的の思惟作用をもつて、世界本體の模寫行爲であると考へるところの、希臘的の解釋は、カントの哲學によつて、最も強く搖り動かされたからである。この意味において、かの一見甚だ特異なる專門的處置に赴きつゝある近代の『批判主義』は、また哲學の最後の世界觀の問題にとつても、偉大なる意義を保有するものであることが、考へられるのである。吾々が希臘的なる科學の概念を固執し得て、然かも必ずしも、希臘的なる主知主義に陷るものではないと云ふことを、若しも認識論が明示し得るならば、これをもつて、ひとり知識論の基礎が置かれるのみではない。同時にまた、全文化生命の包括的理論が建設せらるべき、その土臺がここに創設されたものである。（ハイデルベルヒにて）

gesamte Kulturleben einzuräumen. Ja noch mehr: haben wir einmal die Wissenschaft als ein besonderes Kulturgut neben anderen, ebenso berechtigten erkannt, so ergibt sich grade für den theoretischen Menschen die Pflicht, die künstlerischen, die sittlichen, die religiösen Werte als selbständige **Eigenwerte** anzuerkennen, die niemals an dem theoretischen Wert einer bloss intellektuellen Vollkommenheit gemessen werden dürfen. Kurz, wenn die griechische **Abbildtheorie** fällt, zeigt sich der Intellektualismus durchaus nicht mehr notwendig mit den drei anderen Faktoren der griechischen Forschung verknüpft, und Niemand hat noch das Recht, die alte Wissenschaft damit zu bekämpfen, dass er sie für eine einseitige Weltanschauung verantwortlich macht.

Dieser Hinweis muss genügen, um das Problem des Verhältnisses der modernen Wissenschaft zur griechischen Philosophie klarzustellen, und lediglich ein Wort sei zum Schluss noch über den Weg hinzugefügt, der zur endgültigen Entscheidung führt. Aus unseren Ausführungen ist deutlich geworden allein durch eine **Theorie des Erkennens** erhalten wir darüber Aufschluss, wie der theoretische Mensch zur Weltanschauung des Intellektualismus steht, und zwar wird dabei vor allem die Philosophie **Kants** in Betracht zu ziehen sein, weil durch sie die griechische Auffassung des wissenschaftlichen Denkens als eines Abbildens des Weltwesens am stärksten erschüttert worden ist. Daraus ergibt sich die grosse Bedeutung des scheinbar so spezialistisch verfahrenden modernen „Kritizismus" auch für die letzten Weltanschauungsprobleme der Philosophie. Gelingt es der Erkenntnistheorie zu zeigen, dass wir an dem griechischen Begriff der Wissenschaft festhalten können, ohne damit dem griechischen Intellektualismus zu verfallen, so ist damit nicht allein die Basis für eine Wissenschaftslehre gelegt, sondern zugleich das Fundament geschaffen, auf dem eine umfassende Theorie des gesamten Kulturlebens sich aufbauen lässt.

Und dann haben wir daran festzuhalten: blosse Anschauung gibt für sich allein noch keine wissenschaftliche Wahrheit. Dafür ist schon ein einziger Umstand entscheidend. Es bedarf stets der genauen Angabe dessen, was die Worte bedeuten, aus denen die Sätze der Wissenschaft bestehen, und eine solche Eindeutigkeit lässt sich im Prinzip nicht anders als durch eine „Begrenzung" im sokratischen Sinne erreichen. Der Inhalt dessen, was wir durch die Wissenschaft zum Ausdruck bringen wollen, muss begrifflich bestimmt sein, damit Alle, die unsere Worte hören oder lesen, ihren Sinn als denselben verstehen. Ohne die logische Form der Identität des einen Begriffsinhaltes im Unterschied von den vielen verschiedenen und schwankenden Vorstellungen der einzelnen Individuen gibt es keine für Alle gültige Erkenntnis eines gemeinsamen Gegenstandes. Daher ist nicht einzusehen, wie die Wissenschaft jemals ohne bestimmte Begriffe auskommen soll. Auch mit Rücksicht hierauf bleiben wir also notwendig die Nachfolger der in Begriffen denkenden griechischen Philosophen.

So sind wir zu einem entscheidenden Ergebnis gelangt. Zuerst sahen wir, dass in Griechenland die Wissenschaft als reales Kulturgut aus Sätzen bestand, deren Worte sie mit Begriffen verknüpfte und dadurch die um ihrer selbst willen gesuchte Wahrheit über den Zusammenhang der Gegenstände des Erkennens zum eindeutigen Ausdruck brachte. Jetzt muss klar geworden sein, dass es mit der modernen Wissenschaft nicht anders stehen kann. In den drei Faktoren des theoretischen Menschen, des mythenfreien Erkenntniszusammenhanges und der Bestimmung des Begriffs als des Erkenntnismittels haben die Griechen also ein Kulturgut herausgearbeitet, welches zeitlose Bedeutung besitzt, d. h. gültig ist für alle Zeiten, und an dem wir daher festhalten müssen, so lange wir überhaupt Wissenschaft treiben wollen.

Aber damit scheint trotzdem die Hauptsache noch nicht entschieden. Können wir als moderne Menschen noch Wissenschaft wollen? Verfallen wir damit nicht zugleich notwendig der griechischen Weltanschauung des Intellektualismus, die dem Kulturbewusstsein unserer Zeit widerspricht?

Auch die Antwort hierauf ist nach den früheren Erörterungen nicht mehr schwer. Nur das Eine haben wir noch zu tun: wir müssen die griechische Voraussetzung in Frage stellen, nach der Gleiches allein durch Gleiches erkannt wird und der wahre Begriff daher ein Abbild des Wesens der Welt ist. Damit eröffnet sich der Ausblick auf eine neue Situation. Sollte sich nämlich die griechische Deutung der Erkenntnis als unhaltbar erweisen, so wären wir dadurch zugleich von allen Konsequenzen der Weltanschauung des Intellektualismus befreit. Dann dürfen wir in der Erkenntnis durch den Begriff lediglich eine der Formen neben anderen sehen, die der Mensch bei seinem Verhalten zur Welt sich wählen kann, ohne ihr damit Alleinherrschaft über das

hang mit dem Ganzen zu erkennen suchten? Hier scheint heute bei uns doch ein wesentlicher Unterschied zu bestehen. Der moderne theoretische Mensch wendet seine Aufmerksamkeit nicht immer dem Weltganzen zu, um dann die Frage zu stellen, was das Prinzip aller Dinge sei. Neben der Wissenschaft vom Weltall haben wir Spezialdisziplinen, die ihre Erkenntnisziele beschränken. Aber das war auch dem Griechentum nicht fremd, und selbst abgesehen davon bedeutet die Spezialisierung der Wissenschaft noch keine prinzipielle Abweichung vom griechischen Erkenntnisziel in einer für uns wesentlichen Richtung. Wenn es auch nicht das Ganze ist, in dessen Zusammenhang alle Teile der Welt beim Erkennen gebracht werden, so bleibt es doch stets ein Ganzes, welches die Wissenschaft erfassen will, und zu dem sie alle ihre Einzelheiten zusammenfügt. Auf eine „Arche" oder ein „Prinzip" des Erkenntniszusammenhanges können also auch wir in der Wissenschaft nicht verzichten. Das ist der entscheidende Punkt. Im Vergleich zu ihm wird der Umstand sekundär, dass die moderne Wissenschaft in viel höherem Masse als die griechische die Welt in Spezialgebiete zerlegt, um für jedes von ihnen nach besonderen Prinzipien der Erkenntnis zu suchen. Stets wird von uns wie von den Griechen der einzelne Teil im Zusammenhang mit einem Ganzen erkannt, zu dem er als Teil gehört. Ja, auch wir wollen doch nicht für immer darauf verzichten, die verschiedenen Ganzheiten, die wir zunächst gesondert untersuchen, als Teile eines letzten, allumfassenden Ganzen zu erkennen. Dass endlich der rein wissenschaftliche Zusammenhang für uns wie für die ersten Philosophen ein mythenfreier sein muss, bedarf wohl keiner besonderen Erörterung, und so bleibt mit Rücksicht auf den zweiten der genannten Faktoren das griechische Erkenntnisideal ebenso unangefochten wie in Bezug auf den theoretischen Menschen.

Wie aber steht es mit dem Erkenntnismittel oder dem Begriff? Hier wird man vielleicht am meisten sich weigern, den alten Weg zu gehen, von dem Aristoteles als sokratischer Methode berichtet. Ja vielfach zeigt sich in der modernen Welt gradezu eine Abneigung gegen das begriffliche Denken, und man wünscht, es solle auch in der Wissenschaft durch die Anschauung ersetzt werden. Doch ist nicht schwer zu zeigen, dass in dieser Hinsicht wiederum von einem prinzipiellen Gegensatz zur griechischen Philosophie nicht geredet werden darf. Gewiss gibt es heute sehr verschiedene Arten der wissenschaftlichen Begriffsbildung, die in einem sehr verschiedenen Verhältnis zur anschaulichen Welt stehen. Mit der generalisierenden Induktion allein kommen wir nicht aus. Die Vielheit der Methoden hängt mit der Differenzierung der modernen Forschung und der Aufteilung des Weltganzen an eine grosse Zahl von Einzeldisziplinen zusammen. Aber das Gemeinsame in dieser Mannigfaltigkeit dürfen wir ebenfalls nicht übersehen,

Problem in seinem ganzen Umfange zu stellen oder gar seine Lösung in Angriff zu nehmen. Aber wir verfolgen die begonnene Gedankenreihe noch so weit, dass die Richtung deutlich wird, in der wir uns zu bewegen haben, um das Verhältnis unserer heutigen Wissenschaft zur griechischen Philosophie wenigstens als *Problem* zu sehen. Dabei erkennen wir unbedingt an, dass der griechische Intellektualismus eine *einseitige* Weltanschauung ist, mit welcher der moderne Mensch sich nicht mehr zufrieden geben darf. Müssen wir nicht trotzdem, falls wir überhaupt noch etwas bewahren wollen, das den Namen der Wissenschaft verdient, am theoretischen Menschen, am mythenfreien Erkenntniszusammenhang und am Begriff, wie die Griechen ihn zum Bewusstsein gebracht haben, als an unverrückbaren Idealen der Kultur festhalten?

Die Frage ist zunächst ohne Rücksicht auf die letzten Probleme der Weltanschauung zu beantworten, und das wird möglich, sobald wir in der Wissenschaft *ein Kulturgut neben anderen* sehen, das in seiner Eigenart umsomehr zu bewahren und auszubilden ist, je weniger es den Anspruch auf Alleinherrschaft erhebt. Dann finden wir, dass die Griechen wenigstens für einige Seiten dieses besonderen Kulturgutes Unsterbliches geleistet haben, und dass wir ihre Wege in dieser Hinsicht nicht verlassen dürfen, solange uns die Wissenschaft am Herzen liegt. Das sei für die drei zuerst genannten Faktoren, die wir begrifflich auseinanderhalten konnten, wieder gesondert aufgezeigt.

Soll es überhaupt Wissenschaft geben, so sind zunächst *theoretische Menschen* nicht zu entbehren. Grade wenn wir voraussetzen, dass die wissenschaftliche Forschung eine Kulturarbeit neben anderen ist, kann auch die Wahrheit nur einer neben anderen Eigenwerten des Lebens sein, und dann brauchen wir zu ihrer Verwirklichung Subjekte, die das Wissen um der Betrachtung willen lieben oder deshalb allein nach Erkenntnis suchen, weil sie wahr ist. Ohne die dargestellte Wertverschiebung und die aus ihr hervorgehende Verwandlung des Mittels in einen Zweck wäre eine gründliche *Pflege* des Kulturgutes der Wissenschaft nicht denkbar. Wir werden darum nicht wünschen, dass *alle* Menschen den Sinn ihres Lebens in der wissenschaftlichen Forschung finden. Davon ist ja auch in Griechenland keine Rede gewesen. Die Zahl der theoretischen Subjekte war dort wie bei uns verhältnismässig klein. Aber „*die*“ Menschen, die das wissenschaftliche Erkennen sich zum *Beruf* erwählt haben, müssen in der Hinsicht Griechen bleiben, dass sie das Wissen nicht zu ausserwissenschaftlichen Zwecken suchen, sondern es lieben um der Theorie willen. Das ist der erste Punkt, in Bezug auf den es keine grundsätzliche Abweichung von dem Wesen der ersten Wissenschaft geben darf.

Wie steht es sodann mit dem objektiven Gehalt der Wissenschaft, der sich bei den Griechen daraus ergab, dass sie alles Vereinzelte im *Zusammen-*

Weltvernunft, die mit der Gottheit zusammenfällt, erschliesst sich uns so weit, als wir sie in uns zur Herrschaft kommen lassen, d. h. logisch oder vernünftig denken. So wird der Intellekt zum Weltprinzip erhoben oder das Wesen der Dinge intellektualistisch gedeutet.

Im engen Zusammenhang hiermit steht sodann die Ansicht über die Bestimmung des Menschen. Wissen wir uns allein durch unsern Intellekt in Harmonie mit dem All, so muss vom Intellekt aus auch der Sinn unseres Lebens sich ergeben, d. h. der Logos oder die Vernunft ist dann nicht nur die Realität, sondern zugleich der **Weltzweck**, das Ziel alles echten Strebens oder das höchste Gut. Schon in der Lehre des Sokrates war diese Meinung vorbereitet. Wer das Richtige **weiss**, muss auch das Richtige **tun**, oder Sünde ist im Grunde genommen Irrtum. Darum war die allgemein gültige Erkenntnis für Sokrates so wichtig. Bei den grossen griechischen Metaphysikern, die auf ihn folgten, nimmt diese Ueberzeugung schliesslich die Gestalt an, dass alle Werte der Kultur an intellektuellen Werten zu messen sind. Die Welt der Normen wird zum „mundus intelligibilis“ im strengen Sinne des Worts. So vollendet sich der Intellektualismus auch in praktischer Hinsicht als Lebensauffassung und schliesst sich zu einem System von grossartiger Konsequenz zusammen.

In ihren Einzelheiten brauchen wir die griechische Weltanschauung nicht weiter zu verfolgen, denn schon jetzt verstehen wir, weshalb ein Denker unserer Zeit, der im „vollen Leben“ das höchste Gut erblickt, sich von ihr abwendet und dann auch leicht dazu kommt, eine Wissenschaft mit Misstrauen zu betrachten, die zu solchem Ergebnis geführt hat. Dem modernen Menschen ist der Intellekt nicht das Mass für das All der Welt und des Lebens. Er glaubt nicht daran, dass das Wesen der Realität im tiefsten Grunde logisch sei und daher die irrationale Sinnenwelt keine wahre Wirklichkeit besitze. Er will vollends nicht alle Werte der Kultur an der theoretischen Wahrheit messen, sondern er schreibt dem künstlerischen, dem sittlichen, dem religiösen Leben selbständige Eigenwerte zu, die sich auf keine bloss intellektuelle Vollkommenheit zurückführen lassen. So allein scheint ihm seine Lebensauffassung mit der geschichtlichen Situation, in der er als Kulturmensch steht, in Harmonie zu sein. Der ganze Mensch mit **allen** Seiten seiner Betätigung soll, wie wir gleich am Anfang sagten, auch in der Weltanschauung zu seinem Rechte kommen. Deshalb ist die Wissenschaft verwerflich, falls sie die ausserwissenschaftlichen Ordnungen des Lebens nicht anzuerkennen vermag.

Zeitlose und zeitliche Faktoren der griechischen Wissenschaft.

So wird die gegenwärtige Lage der Wissenschaft, von der wir ausgegangen sind, im Zusammenhange mit ihrer Vergangenheit klar. Selbstverständlich denken wir nicht daran, das moderne

verknüpfte und dadurch die um ihrer selbst willen gesuchte Wahrheit über den Zusammenhang der Gegenstände des Erkennens zum eindeutigen Ausdruck brachte.

Der griechische Intellektualismus.

Um dies Ergebnis für das an die Spitze gestellte Problem fruchtbar zu machen, verfolgen wir die Entwicklung der griechischen Philosophie noch einen letzten Schritt weiter, durch den sie nicht minder als durch die bisher genannten Faktoren von Bedeutung für die gesamte europäische Wissenschaft geworden ist. Dabei knüpfen wir wieder an den Begriff oder den Logos als das Mittel des Erkennens an. So wird am besten klar, wie es zu der **Weltanschauung** kam, die man in unserer Zeit vielfach bekämpft. Doch beschränken wir uns auch hier auf das allgemeine Prinzip.

Schon früh herrschte bei den Griechen die Ansicht, Gleiches könne nur durch Gleiches erkannt werden. Die Leistung der Wissenschaft war danach in dem **Abbilde** eines Urbildes zu suchen. Diese zur ganz vereinzelt bestrittene Voraussetzung musste auf dem Boden der sokratischen Begriffslehre zu weitgehenden Konsequenzen führen. Sieht man nämlich auch im Begriff ein Abbild, das dem Urbilde, welches es erkennen soll, zu gleichen hat, dann bekommt die ganze Welt, soweit sie erkennbar ist, einen begrifflichen oder logischen Charakter. Mit Notwendigkeit entspricht dem Erkenntnismittel des Intellekts ein erkenntnismässig oder intellektuell bestimmter **Gegenstand**. Daraus aber folgt: Logik und Ontologie sind nicht von einander zu trennen, ja Denken und Sein fallen so weit zusammen, dass das **Wesen** der Welt sich nur **als Gedanke** denken lässt. „Du gleichst dem Geist, der Dich begreift", muss der theoretische Mensch unter solcher Voraussetzung zur Welt sagen, und das wird von Bedeutung nicht allein für die Lehre vom Kosmos, sondern ausserdem auch für die Auffassung vom Sinn des menschlichen Lebens. Beides lässt sich mit wenigen Worten klar machen.

Falls Gleiches nur durch Gleiches zu erkennen ist, kann die Ordnung der **Dinge** von der logischen Ordnung der **Gedanken** nicht prinzipiell abweichen. Gelingt es also, die wahren Gedanken in ein System zu bringen, so erfassen wir damit zugleich den systematischen Zusammenhang der Realität, d. h. die wirkliche Welt ist ein logisch geordneter Kosmos. Doch das ist noch nicht Alles. Von hier aus bestimmt sich auch das Wesen der Sinnenwelt, in der wir unmittelbar leben. Da sie überall eine regellose Fülle oder Mannigfaltigkeit zeigt, die im Gegensatz zur logischen Ordnung steht, kann ihr der Charakter einer echten Wirklichkeit nicht zukommen. Sie wird zur blossen **Erscheinung** oder zu einem Sein zweites Grades, von dem es als einem Irrationalen wahre Erkenntnis nicht gibt. Im Wesen ist die Welt überall vom Logos oder von der Vernunft beherrscht, und diese

nicht untersucht zu werden. Wir halten uns an die Tradition. Aristoteles sagt, es seien zwei Dinge, die man als Leistungen des **Sokrates** anerkennen müsse, und die sich beide auf das Prinzip des Wissens beziehen: die Induktionsbeweise und die allgemeinen Begriffsbestimmungen. Sachlich bedeutet das kurz gesagt: aus dem Besonderen, das jedes einzelne Individuum für sich allein hat, wird durch Vergleichung das Gemeinsame ausgeschieden und so das Allgemeine im Begriff gefunden, dessen Inhalt genau anzugeben oder zu „begrenzen" ist. Die Begriffsbestimmung nennen wir noch heute Definition, und die Bildung des Begriffs ist in der Tat das Mittel, mit dem man in der Wissenschaft über die Vielheit der individuellen Meinungen hinaus kommt. In Begriffen hatte sich vom ersten Schritt an jede wissenschaftliche Theorie bewegt. So einfach also der Gedanke des Sokrates nach Aristoteles sich darstellt, so gross war seine Bedeutung. Durch ihn tritt zutage: wir kennen nicht allein unser individuelles Seelenleben, sondern jeder, der danach sucht, ist imstande, etwas zu finden, was ihn mit den anderen Menschen verbindet. Im Begriff oder im Logos hält er etwas **Ueberindividuelles** fest. Sobald das aber geschehen ist, besitzt er darin zugleich das Mittel, das ihn vom Subjektiven zum Objektiven führt, also im Prinzip auch eine für Alle gültige Erkenntnis der Welt ermöglicht.

Wir sehen zunächst davon ab, wie das Verhältnis des längst benutzten, aber jetzt erst entdeckten Erkenntnismittels zu den Gegenständen der Erkenntnis aufzufassen ist, oder was der Begriff für die Erfassung des **Weltwesens** leistet. Darauf kam es Sokrates nicht an. Er suchte eine Verständigung der Individuen über das für alle Richtige lediglich im **praktischen** Leben. Trotz dem bleibt auch für die Wissenschaft vom Zusammenhang der Dinge sein Gedanke wichtig. Bisher kannte man nur Objekte und Subjekte oder Dinge der Aussenwelt und Menschen mit ihrem seelischen Innenleben. Falls Sokrates Recht hat, besitzen wir im Begriff etwas **Drittes**, das weder in die Sphäre der erkennenden Subjekte noch in die der Objekte der Erkenntnis fällt, sondern als echtes „Mittel" in der **Mitte** liegt, und das grade deshalb zu dem hinführt, was die Wissenschaft anstrebt: die Erkenntnis der **einen**, identischen Aussenwelt durch die **vielen** verschiedenen Menschen. Vom individuellen Seelenleben der Einzelnen schlägt der sokratische Logos die Brücke zu einer Welt, die allen gemeinsam werden kann, falls sie nach ihr suchen.

So verstehen wir, weshalb der Begriff als Erkenntnismittel ebenso zum Wesen der ersten Philosophie gehört wie der theoretische Mensch und der mythenfreie Erkenntniszusammenhang. Denken wir endlich an die Form, durch welche Erkenntnis allgemein mitteilbar wird, so dürfen wir zusammenfassend sagen: die Wissenschaft in Griechenland bestand als reales Kulturgut aus Sätzen, deren Worte sie mit bestimmten Begriffen

schaftlichen Menschen und den sachlichen Gehalt seines Werkes verstanden haben, fehlt noch Klarheit über das Mittel, mit dem das theoretische Subjekt den objektiven Zusammenhang, den es erkennen will, in seinen Besitz bringt und dann sein Wissen so formuliert, dass es auf Andere übertragbar wird. Schon die ersten Philosophen machten selbstverständlich von diesem Mittel dauernd Gebrauch, denn sonst hätten sie nichts erkannt. Doch nur sehr unvollständig kam ihnen zum Bewusstsein, was sie dabei taten. Es konnte nicht anders sein. Ihr *Blick* richtete sich so sehr auf den Gegenstand der Erkenntnis, dass die Erkenntnis des Gegenstandes noch nicht zum Problem wurde. Die Denker dachten, mit anderen Worten, logisch, aber sie trieben keine Logik und wussten deshalb nichts vom „Logos", der sie zum Erkennen befähigte. Wie vollzog sich der Schritt der griechischen Wissenschaft zu ihm hin?

Zunächst musste man Veranlassung haben, hier eine *Frage* zu stellen. Das geschah erst, als die Forschung schon verhältnismässig weit entwickelt und ausserdem das Auge des theoretischen Menschen von den Objekten auf die *Subjekte* des Erkennens gelenkt war. Die Wendung in dieser Richtung sieht man als eine Tat der Sophisten an. Ist das zutreffend, so entdeckten sie damit eine neue, bisher unbeachtet gebliebene Welt. Sie sahen das, was jeder Einzelne für sich *allein* hat, das Psychische, wie wir es heute nennen, als das Subjektive, das nur je einem Individuum angehört. In ihrer Entdeckersfreude beschränkten sie sich zugleich auf das von ihnen gefundene Gebiet, wie es auch heute noch die Psychologen bisweilen machen, und gerade das war wichtig, denn so musste die allen Individuen *gemeinsame* Umwelt problematisch werden. Der einzelne Mensch sollte das Mass aller Dinge überhaupt sein. Eine für alle gültige Erkenntnis der Welt hielt man unter dieser Voraussetzung nicht mehr für erreichbar, und man konnte es auch nicht.

Die Argumentationen der Sophisten waren nichts weniger als „sophistisch" im schlechten Sinne des Wortes. Solange man glaubt, dass dem Individuum nichts anderes als sein eigenes Seelenleben unmittelbar gegeben ist, muss es unbegreiflich bleiben, wie der Mensch aus sich heraus kommt und damit fähig wird, die Welt objektiv zu erfassen oder in ihrem Zusammenhang zu erkennen. Alle Gedanken über die Dinge, die wir uns machen, sind dann lediglich *individuelle* Gedanken, oder „wahr" darf man das allein nennen, was jedem Einzelnen als wahr erscheint. So entstand zunächst mit Notwendigkeit die Frage, welche Mittel dem Menschen zur Verfügung stehen, um eine Wissenschaft vom Zusammenhang der Welt zu schaffen.

Wer es dann gewesen ist, der zuerst die griechische Philosophie über den negativ gerichteten Psychologismus der Sophisten hinausführte, so dass eine positive Lösung des neuen Problems gegeben werden konnte, braucht hier

das unter praktischen Gesichtspunkten gesammelte Wissen war der **Mythos** eine Vorstufe der Wissenschaft. Grade deshalb aber müssen wir ihn zugleich streng von der Wissenschaft scheiden, und das ist nicht schwer.

Dem Mythos kommt es nicht auf Wahrheit im theoretischen Sinne der Tatsächlichkeit an, sondern er legt sich den Zusammenhang der Dinge mit der **Phantasie** als Aeusserung menschenähnlicher Wesen zurecht. So wird ihm die Erde zum Weibe und der Himmel darüber zum Mann, ja die mythologische Personifikation erstreckt sich sogar auf das, was vor Himmel und Erde war, auf das Nichts, wie man abstrakt begrifflich sagen müsste. Nur bedeutet dem Mythos dies Nichts kein Nichts. Das „Chaos", aus dem der Kosmos erst entstanden ist, wird ihm zum gähnenden Rachen. Diese Art, einen Weltzusammenhang herzustellen, lehnt der theoretische Mensch ab. Wo er an den Mythos anknüpft, hat er daher zugleich die Aufgabe, die Welt zu „entzaubern". Deshalb empfiehlt es sich, bei der Bestimmung des Gehaltes der wissenschaftlichen Erkenntnis den Zusammenhang der erkannten Dinge ausdrücklich als **mythenfrei** zu bezeichnen.

Auch hier gibt es allerdings wieder allmähliche Uebergänge, die vom vorwissenschaftlichen, mythischen zum wissenschaftlichen, rein theoretischen Zusammenhang hinführen. Doch dieser Umstand hebt den prinzipiellen Unterschied zwischen beiden ebenso wenig auf, wie die Uebergänge von den aus praktischen Bedürfnissen entstandenen Kenntnissen zur theoretischen Wissenschaft den prinzipiellen Unterschied zwischen blossem Wissen und Wissenschaft in Frage stellen. Die Uebergänge sind eben nur als Uebergänge von Einem zum Andern zu verstehen. Auch das sei an einem Beispiel verdeutlicht. Es ist üblich, Thales den ersten Philosophen zu nennen, weil er lehrte, dass Alles „Wasser" sei. Doch hat man diesem Denker seinen Ruhm auch bestritten. Vielleicht, kann man sagen, hat Thales nur einem Gedanken Ausdruck gegeben, der schon in dem Mythos steckte, nach dem Alles dem Okeanos entstammt. Dann wäre seine Lehre eine Uebergangserscheinung zwischen Mythos und Wissenschaft. Prinzipiell anders dagegen steht es mit Anaximenes. Zwar scheint sein Satz, dass die Arche der Welt „Luft" ist, dem des Thales vom Wasser als dem Grunde aller Dinge nahe verwandt. Aber bei Anaximenes sehen wir, dass er die Absicht gehabt hat, rein wissenschaftlich zu erkennen, denn die Luft wird von ihm so gedacht, dass alle Dinge aus ihr durch Verdichtung oder Verdünnung entstanden sind. Damit ist die Welt grundsätzlich „entzaubert". Deshalb dürfen wir sagen: hier haben wir einen, aus theoretischen Bedürfnissen entsprungenen Versuch, Alles in der Welt in einem einheitlichen Zusammenhang zu erkennen, der sich von jedem Mythos grundsätzlich unterscheidet.

Die Entdeckung des Begriffes.

Nachdem wir das Wesen des wissen-

sammenhange zu erkennen suchen, kommen wir auf den Weg der Wissenschaft.

Was macht in der ersten Philosophie das Wesen des wissenschaftlichen Zusammenhanges aus? Wir finden, dass die theoretischen Menschen in Griechenland ihrem Streben nach Erkenntnis keine Grenzen setzten. Sie stellten die Frage: was ist Alles? Die Forschung machte die „Welt" zu ihrem Objekt und verstand darunter alles, was sie als vorhanden voraussetzte. Daraus ergibt sich der Inhalt der ersten Wissenschaft. Sie ist eine Darstellung der Weltteile im Zusammenhang des **Weltganzen.** Ein Streben danach konnte erst dort entstehen, wo man die Wahrheit um der Wahrheit willen liebte. So lange man das Wissen in den Dienst aussertheoretischer Zwecke stellt, wird die Erforschung von Allem, was es gibt, nicht als wichtig erscheinen, denn ihr praktischer Wert bleibt stets problematisch. Die griechischen Philosophen dagegen stellten sich grade dies eminent unpraktische Ziel, und damit sind sie von der Liebe zum Wissen um der Betrachtung willen auch zum objektiven Kulturgut der Wissenschaft gekommen.

Das Wesen ihrer Leistung lässt sich genauer so zum Ausdruck bringen. Sie suchten das Allgemeine oder Gemeinsame, das jeder besonderen Erscheinung zu Grunde liegt, und sie nannten das die „Arche" der Welt. Ursprünglich bedeutet dies Wort den zeitlichen „Anfang". Doch grade von der Zeitlichkeit muss man absehen, wenn man verstehen will, was hier gemeint ist. Anfang heisst den ersten Männern der Wissenschaft das, was überall ist und immer war, also zeitlos oder ewig genannt werden darf. Wir sprechen heute vom „Prinzip" und brauchen damit ebenfalls ein Wort, worin noch das zeitliche Moment anklingt. Auch Grund oder Wesen können wir dafür sagen. Aber welchen Namen man wählen mag, die Sache bleibt immer dieselbe: „Das ich erkenne, was die Welt im Innersten zusammenhält". Dies Faustische Streben war schon für den Charakter der ersten europäischen Wissenschaft massgebend.

Um den Inhalt des Kulturgutes, das hier geschaffen wurde, an einem Beispiel zu verdeutlichen, denken wir an den Satz, der uns von einem der ersten griechischen Philosophen überliefert ist. Anaximenes lehrte: „Wie unsere Seele Luft ist und uns dadurch zusammenhält, so umspannt auch die **ganze Weltordnung** Luft und Odem". Daran wird leicht klar, wie die Erkenntnis der Arche oder des Prinzips der Welt uns lehrt, alle Dinge in einem einheitlichen Zusammenhang zu erkennen, und wie darin der objektive Gehalt des Werkes steckt, das die ersten theoretischen Menschen aus sich herausstellten.

Nur eine Bestimmung fügen wir hinzu, um das Wesen der Sache in jeder Hinsicht zu umgrenzen. Darstellungen des Weltzusammenhanges gibt es noch in anderer als in wissenschaftlicher Form, und sie sind für uns wichtig, weil auch an sie die Wissenschaft anknüpfen kann. Ebenso nämlich wie

wächst dann der sogenannte „Pragmatismus“.

Doch man kann die Vorgänge auch unter einem völlig anderen Gesichtspunkt betrachten und sagen, dass mit Rücksicht auf den Sinn der **Kultur** zwischen dem theoretischen Menschen und dem Geizigen nicht nur keine Gleichheit, sondern sogar ein prinzipieller Gegensatz zu konstatieren ist. Wer Geld wie der Geizige nicht als Mittel behandelt, lebt deshalb sinnlos, weil Geld keinen Wert hat, der geeignet ist, es zum Zweck des Lebens zu gestalten. Am Wissen dagegen haftet der Wert der Wahrheit, und der theoretische Mensch handelt daher mit Rücksicht auf diesen Wert eminent sinnvoll, wenn er das Leben in den Dienst seiner Verwirklichung stellt. Freilich muss man, um so zu denken, voraussetzen, dass es **Eigenwerte** gibt, die unabhängig von dem Werte des blossen Lebens gelten. Tut man das aber, so kommt die Wertverschiebung, durch welche der theoretische Mensch sich vom vorwissenschaftlichen Menschen unterscheidet, in ein neues Licht. Dann bedeutet die Entstehung des theoretischen Menschen ein **Kulturereignis** von grösser Tragweite, weil dadurch ein in seinem Wesen vorher nicht erfasster Eigenwert ins Bewusstsein gehoben und so die Pflege eines neuen Kulturgutes ermöglicht wurde, das **über** dem blossen Leben steht. Unter dem Gesichtspunkt der Kultur stellt die Entstehung des theoretischen Menschen in Griechenland sich demnach so wenig als Entartung dar, dass sie vielmehr als Vorbedingung für die Entwicklung eines der wichtigsten Güter der Kultur angesehen werden muss. Sie bezeichnet den Beginn aller europäischen Wissenschaft.

Diese Bemerkungen können zur Klarlegung dessen, was mit Rücksicht auf das Subjekt der Wissenschaft festzustellen war, genügen. Soll es zum theoretischen Forschen kommen, so muss es Menschen geben, die deshalb nach Wissen suchen, weil der Wert der Wahrheit daran haftet, oder für welche die Wahrheit zum Eigenwert geworden ist, dessen Verwirklichung durch das Erkennen ihrem Leben einen Sinn gibt.

Der mythenfreie Zusammenhang.

Für die **inhaltliche** Ausgestaltung der wissenschaftlichen Theorien, die auf dem Boden der neuen Geistesha tung erwuchsen, ist jedoch hieraus noch nichts zu ersehen. Man wird nicht jedes Wissen um seiner selbst oder um der Betrachtung willen suchen und in die Wissenschaft aufnehmen. Dass ich z. B. jetzt lese, ist zwar gewiss wahr, aber aus solchen oder ähnlichen Tatsachen allein lässt sich Wissenschaft nicht aufbauen. Freilich können unter Umständen auch sie wissenschaftliche Bedeutung erhalten, doch als **vereinzelte** Tatsachen besitzen sie sie nicht, und schon der Umstand, dass wir sie „vereinzelt“ nennen, weist auf das hin, was ihnen dazu noch fehlt. Sie müssen mit anderen Tatsachen in einen umfassenderen **Zusammenhang** gebracht werden. Erst damit, dass wir sie in diesem Zu-

[illegible] ne Wissenschaft gegeben. Die Gründe dafür verfolgen wir nicht weiter, sondern beschränken uns darauf, festzustellen, welche Wendung im Prinzip sich bei den Griechen vollzog. Wir konstatieren dann eine radikale Umkehrung des Verhältnisses von Zweck und Mittel. Der vorwissenschaftliche Mensch, so dürfen wir kurz sagen, sucht Wissen, um zu leben. Der wissenschaftliche oder theoretische Mensch dagegen lebt, um Wissen zu suchen. Allerdings sind damit zwei extreme Fälle bezeichnet, die in voller Reinheit selten verwirklicht sein mögen, aber ihre Gegenüberstellung bleibt trotzdem lehrreich, und zwar besonders, wenn wir daran denken, dass die Wendung, die in Griechenland eintrat, in ihrer Bedeutung für das menschliche Leben unter zwei verschiedenen Gesichtspunkten betrachtet werden kann.

Die Umkehrung von Mittel und Zweck lässt sich einmal als ein psychischer Vorgang dadurch erklären, dass man ihn mit anderen Vorgängen vergleicht, die unter denselben psychologischen Begriff fallen. Man mag dann allgemein von einem Prozess der Wertverschiebung reden, wie er vielfach vorkommt. So suchen z. B. die meisten Menschen ursprünglich Geld zu dem Zweck, sich etwas dafür zu kaufen, und das Geld besitzt dann Wert lediglich als Mittel. Bei dem Geizigen dagegen, der Geld um des Geldes willen anhäuft, kehrt dies Verhältnis sich um. Der Wertakzent verschiebt sich vom Zweck auf das Mittel, so dass das Geld zum Zweck wird und das Leben sich in den Dienst seines Besitzes stellt. Dem entspricht die Wendung, die den theoretischen Menschen kennzeichnet. Während für den praktischen Menschen das Wissen ein blosses Mittel zur Förderung des Lebens als des Zweckes ist, nach dessen Erreichung er strebt, verschiebt bei den ersten griechischen Philosophen der Wertakzent sich so, dass er das Wissen zum Zweck macht und das Leben nur noch Mittel im Dienst des Wissens bleibt. Der Vergleich mag Manchem anstössig erscheinen, und doch ist er, so lange es sich um eine psychologische Erklärung der seelischen Vorgänge in den einzelnen Individuen handelt, durchaus berechtigt. Der Geizige und der theoretische Mensch haben die Umkehrung der ursprünglichen Wertung d. h. die Verschiebung des Wertakzentes von dem, was zuerst Zweck war, auf das Mittel mit einander gemein.

Ja, wir können noch mehr sagen, und gerade das ist für unseren Zusammenhang von Bedeutung. Sieht man, wie es heute vielfach geschieht, in dem rein natürlichen Leben das höchste Gut und den Massstab aller anderen Güter, so muss das Verhalten des theoretischen Menschen als ebenso fragwürdig erscheinen wie das des Geizigen. Beide haben dann den richtigen Sinn ihres Lebens gründlich verfehlt, und die Verschiebung des Wertakzentes vom Zweck auf das Mittel bedeutet bei beiden eine Lebensentartung. Die biologisch orientierte Philosophie steht hilflos vor dem Forscher, der das Wissen um der Betrachtung willen liebt. Daraus er-

aber ihrem Sinn oder ihrer Bedeutung nach sind sie trotzdem prinzipiell verschieden. Das zeigt sich schon darin, dass es zwar keine Wissenschaft ohne Wissen gibt, wohl aber Wissen ohne Wissenschaft sehr wohl möglich ist.

Wahre Kenntnisse finden wir lange vor den Griechen zu allen Zeiten und bei allen Völkern. Man strebt nach Wissen, weil man es im praktischen Leben braucht. Die Kenntnisse, die dabei entstehen, können sich eventuell zu grossen Mengen anhäufen und inhaltlich vielfach mit dem, was die Wissenschaft lehrt, zusammenfallen. Wissenschaftlich braucht dies Wissen trotzdem nicht zu sein. Die Menschen suchen es zu völlig ausserwissenschaftlichen Zwecken. Man benutzt es z. B. zu Zeit- oder Landmessungen, zur Bewirtschaftung des Bodens, zur Steuerhebung u. s. w., oder es wird von Priestern in den Dienst des religiösen Kultus gestellt. Solange die Kenntnisse in einem solchen Dienstverhältnis bleiben, sind sie noch nicht das, was die Griechen Philosophie nannten. Ihre Wissenschaft knüpft zwar an das vorwissenschaftliche Wissen an und nimmt es in sich auf. Aber ehe das geschehen kann, muss es Menschen von einer besonderen geistigen Verfassung geben, die man vor den Griechen in Europa nicht findet. So werden wir auf das Subjekt geführt, das Wissenschaft treibt, und sein Wesen haben wir vor allem zu verstehen.

Wissenschaftlich, können wir sagen, verhält sich der Mensch erst dann, wenn er das Wissen nicht mehr sucht, um es zu einem ausserhalb des Wissens liegenden Zweck zu verwenden, sondern wenn er etwas zu wissen wünscht um des Wissens willen. Damit entsteht das, was wir den **theoretischen Menschen** nennen, ein vor den Griechen unerhörter Typus, der im Getriebe des Lebens und der Leidenschaften nichts anderes will als erkennen, was wahr ist. Das Wort für diese Geistesverfassung findet sich zuerst bei Herodot, und auch die Sache wird dort deutlich bezeichnet. Krösus sagt zu Solon: „Ich habe gehört, dass Du philosophierend viele Länder um der Theorie willen durchwandert hast." Das ist der entscheidende Punkt. Den „Barbaren" Krösus setzt ein solches Streben in Verwunderung, was nicht auffallen kann, denn auch heute noch würde Mancher es unverständlich finden. Aber das ist eben spezifisch griechisch, dass man um der **Betrachtung willen** das Wissen liebt, und die Griechen waren stolz darauf, dass sie so unpraktisch oder so rein theoretisch sich verhalten konnten. Dadurch wurden sie erst zu Philosophen.

Wir brauchen nicht zu fragen, wie allmählich die neue Geisteshaltung aus der alten hervorging. Wo es zum theoretischen Forschen kommen soll, muss wohl stets eine Befreiung von der drückendsten Lebensnot eingetreten sein, damit der Mensch für die Betätigung der Liebe zum Wissen Zeit übrig behält. Doch solche Vorbedingung fehlte auch anderswo als in Griechenland nicht, und trotzdem hat es dort vor den Griechen

Begriff der Philosophie, und die griechische „Liebe zum Wissen" ist entscheidend geworden für alles, was später in Europa als Wissenschaft auftrat. Insofern lebt das Griechentum weiter bis zum heutigen Tage, selbst in denen, die von solchen Zusammenhängen mit der Vergangenheit nichts wissen. Ob wir wünschen dürfen, dass es so bleibt, oder ob eine grundsätzliche Aenderung in diesem Zustand mit Rücksicht auf die Kulturbedürfnisse der Neuzeit notwendig ist, wollen wir in Bezug auf vier Punkte gesondert untersuchen. Wir betrachten zunächst die Subjekte, die in Griechenland Wissenschaft getrieben haben, um das Verhalten der ersten theoretischen Menschen zu verstehen. Dann bestimmen wir den objektiven Gehalt des Kulturgutes, das dieser theoretische Mensch als Werk aus sich herausstellte. Hierauf suchen wir Klarheit zu gewinnen über das Mittel, welches er benutzte, um sein Ziel zu erreichen, d. h. uns interessiert das Wesen des Begriffs als der Form des wissenschaftlichen Denkens. Endlich stellen wir fest, welche allgemeine Weltanschauung im Zusammenhang mit der griechischen Wissenschaft entstand, oder worin die ersten theoretischen Menschen das sahen, was man den Sinn des Lebens nennt.

Wir trennen die vier Punkte begrifflich von einander, weil die Frage nahe liegt, ob die verschiedenen Faktoren, die in Griechenland faktisch eng verknüpft sind, alle notwendig mit einander verbunden bleiben müssen. Insbesondere wäre es denkbar, dass wir uns zwar die Weltanschauung des Griechentums nicht mehr zu eigen machen können, trotzdem aber mit Rücksicht auf die drei anderen Punkte an dem festzuhalten haben, was das Wesen der griechischen Wissenschaft bestimmt. Solche Eventualität ist zumal für das Problem, von dem wir ausgegangen sind, von Bedeutung. Nicht ohne Grund hat man gesagt, das Griechentum äussere sich in der Philosophie als Intellektualismus, und zweifellos hängt diese Weltanschauung eng mit der Art der Wissenschaft zusammen, wie sie zuerst in Griechenland entstand. Führt eine wie die griechische verfahrende Wissenschaft notwendig zum Intellektualismus, oder ist es möglich, dass wir mit Rücksicht auf die drei zuerst genannten Faktoren des wissenschaftlichen Denkens dieselben Wege wie die Griechen gehen, ohne dabei zu einer intellektualistischen Weltanschauung zu kommen? Sobald wir die griechische Philosophie unter diesem Gesichtspunkt betrachten, kann wenigstens das Problem klar werden, das für die Wissenschaft unserer Zeit das wichtigste ist, und darauf wollen wir uns hier beschränken.

Die Entstehung des theoretischen Menschen.

Um die den Griechen eigentümliche theoretische Leistung zu verstehen, halten wir zuerst Wissen und Wissenschaft auseinander. Freilich gehen beide sowohl in der Entwicklung der menschlichen Gattung als auch im Leben der Individuen allmählich in einander über,

Problem so zu stellen. Die Wissenschaft bleibt unter allen Umständen ein Teil der Kultur, und nur vom Standpunkt des **Kulturlebens** lässt sich ihre Aufgabe bestimmen. Kultur aber zeigt sich überall als **geschichtlich** bedingt und ist insofern durch blosse Naturbegriffe nicht zu erfassen. Auch dem Problem der Wissenschaft kommt man deshalb mit einem biologischen Lebensbegriff nicht bei. Man muss sich vielmehr historisch orientieren, um über den Sinn des theoretischen Forschens und Darstellens im Zusammenhang mit dem übrigen Kulturleben Klarheit zu erhalten.

Das hat mit einem engen Historismus als Weltanschauung nichts gemein. Gewiss haben wir gerade als Kulturmenschen das Recht, ja vielleicht sogar die Pflicht, über die geschichtliche Situation, in der wir augenblicklich leben, hinweg zu schreiten, und jedenfalls kann ein ängstliches Haften am zufällig Gewordenen niemals der Sinn irgend einer Kulturarbeit sein. Aber ebenso gewiss dürfen wir erst dann hoffen, über die Gegenwart hinaus vorwärts zu kommen, wenn wir dabei die bisher erarbeiteten Kulturgüter als Fundament benutzen, auf dem wir selbst weiter bauen. Sonst droht uns ein Rückfall in die Vergangenheit und ein Niedergang der Kultur. Daher werden wir bei einer Besinnung auf unsere Kulturziele auch nach dem geschichtlichen Ursprung der Erscheinungen forschen, deren Wesen uns interessiert, und dann zusehen, welche Forderungen die gegenwärtige Lage der Kultur für ihre fruchtbare Weiterbildung stellt.

Einen kleinen Beitrag zur Klärung des Problems der Wissenschaft unter diesem Gesichtspunkt geben die folgenden Blätter. Wir fragen: was trat in Europa zuerst als Wissenschaft auf, und wie steht die heutige Forschung des Abendlandes zu ihren Anfängen? So kommen wir zu einer mehr als willkürlichen Festsetzung ihres Begriffs. Gewiss gilt für das wissenschaftliche Leben in besonders hohem Masse, dass Niemand bei seinen Anfängen stehen bleiben wollen kann. Gerade dem Zustande der spätern Differenzierung haben wir ins Auge zu schauen. Jeder Versuch, zur Vergangenheit zurückzukehren, entspringt den Tendenzen einer wirklichkeitsfremden Romantik und ist von vornherein zum Scheitern verurteilt. Aber die Orientierung an den frühen Stadien eines Kulturgutes bleibt für die Gegenwart selbst dann lehrreich, wenn sich zeigen sollte, dass wir zu ihnen in mancher Hinsicht heute in entschiedenem Gegensatz stehen. Deshalb vergegenwärtigen wir uns das Wesen der ersten Wissenschaft, die in Europa entstand, um uns dann die Frage vorzulegen, was an ihr zur Wissenschaft überhaupt gehört, und was daher nicht aufgegeben werden darf, falls man nicht Gefahr laufen will, alle Wissenschaft als Kulturgut zu verlieren. Wir lenken also den Blick zurück auf die Heimat des wissenschaftlichen Lebens in Europa, d. h. auf Griechenland.

Was uns heute Wissenschaft heisst, fiel dort zum ersten Mal unter den

Moderne Wissenschaft und griechische Philosophie.

Für die Zeitschrift „Kaizo".

Von Heinrich Rickert (Heidelberg).

Thema und Gliederung.

Unter den Problemen, welche die wissenschaftlichen Köpfe in weiten Kreisen Europas heute lebhaft beschäftigen, spielt die Frage nach dem Wesen und dem Wert der Wissenschaft selbst eine grosse Rolle. Viele halten es nicht mehr für gewiss, dass es in der Art wie bisher auch in Zukunft noch Wissenschaft geben werde. Sie gehöre, meint man, entweder ganz der Vergangenheit an, oder sie müsse wenigstens von Grund aus umgestaltet werden, um Daseinsberechtigung zu behalten.

Meist hängen die Angriffe, die man gegen die „alte" Wissenschaft richtet, mit den Tendenzen der modernen „Philosophie des Lebens" zusammen. Man glaubt nicht mehr daran, dass das Leben sich nach der Wissenschaft zu richten habe, sondern verlangt, dass umgekehrt die Wissenschaft sich in den Dienst des Lebens stelle. Ihre letzte Wurzel hat eine solche Forderung wohl in den geistigen Bewegungen, die auf eine *Ueberwindung des Intellektualismus* gerichtet sind. Unter Intellektualismus versteht man eine Lebensauffassung, welche sich einseitig am Verstand orientiert. Im Gegensatz zu ihr wünscht man, dass der „ganze Mensch" mit allen Seiten seiner Betätigung auch in der Weltanschauung zu seinem Rechte komme. Nicht der Intellekt, sondern das volle *Leben* gilt als höchstes Gut. In ihm haben wir daher den Massstab für alle anderen Güter, die wahrhaft erstrebenswert sind. Das erscheint Vielen heute geradezu als selbstverständlich.

Solche Gedanken verbinden sich jedoch nicht selten mit einer störenden Unklarheit. Was ist das Leben? Eine Antwort darauf hält man bisweilen nicht für notwendig, und doch kommt gerade auf sie Alles an, falls man vom *Leben* aus die Aufgabe der Wissenschaft bestimmen will. Ist unter „Leben" das natürlich-lebendige Dasein der Organismen gemeint, wie es von der Biologie erforscht wird und sollen wir also einen *naturwissenschaftlichen* Begriff zu Grunde legen bei der Entscheidung darüber, was die Wissenschaft zu tun hat, um dem Leben zu dienen?

Falls auf diesem Wege eine Ueberwindung des Intellektualismus zu Gunsten des „ganzen Lebens" erstrebt wird, müssen wir es ablehnen, auch nur das

汎イスラム運動の將來

・汎イスラミズムの將來

内藤智秀

一

英國の首相ロイド、ジョージはグラッドストンの失敗を再び繰り返し、コーランを抹消せんとする政策を取りつゝあつた。然れどもコーランは熱烈なる信仰心を有する二億に餘る信徒によりて支へらるゝが故に、容易に是を絶滅し得べしとも思はれない。却て英國外相カーゾンをして「過去二十年間の公生活に於ける努力は水泡に歸した」と、嘆息せしめた程、英國の在來の回教徒政策は失敗に終つた。されば果然昨年の春以來ロイド・ジョージは其近東政策に對する態度を豹變し、回教徒に對して讓歩する事甚大で、是が爲英國國民の一部から反感を買ふに至つた。

即ち其實證を示せば左の通りである。一昨年八月十日佛國セーブルに於て案出された列國の對土條約によれば、歐洲に遺されたる唯一の回教國で、且獨立の體面を維持する世界唯一の回教國たる土耳其の領土は、戰前の略四分の一に、又其人口も略三分の一に縮少せられ、アラビア、メソポタミア、シリア、パレスタイン、アルメニア、スレース等を失ひ、且小亞細亞の大部分を領有するに止まり、スミルナは希臘の委任統治地となり、マルモラ海の兩岸の海峽地帶と稱して土府と共に英佛伊日より委員を出す海峽管理委員の統治を受ける事となつた。

然るに昨年二月より三月にかけて倫敦に開催された近東會議の結果によれば、右セーブル條約の條項は事實上死文となり、アンゴラ政府を事實上承認し、若干の武裝解除地帶を設けたのみで、海峽地帶の大部分は廢棄せられ、殘部の海峽委員會には土耳其人を議長とし、或は土耳其よりも委員を出して治外法權に代るべき法制改正準備委員會を設け、其他外國郵便局制度の廢止さへをも考ふる事とした。

更に又本年三月には巴里に近東會議を開き、海峽地帶の全部

の主權を土耳其に與へ、只幾分の武裝解除地帶を設け、ダ、ボ兩海峽の航行は土耳其人を委員長とする國際委員の監督に讓り、其他清算委員會を設けて土耳其の賠償金支拂を保障させる如き個條も作つたが、歐洲に於ける土耳其の領土も、チヤタルジヤよりも深く内地に込入つてガノスから勃牙利國に至る線まで擴張した。

更に又八月廿三日の聯合國の通牒によると、東スレースたるマリツア川の東部及兩海峽其他スミルナに於て讓歩する等、二年前の聯合國の政策の强硬なりし事に比較すれば、實に雲壤の差の存するを思はしめる。是等は主としてロイド・ジヨージの急轉直下の大讓歩の事實を物語るものであらねばならぬ。

英國政府が回教徒に對して斯くの如き軟弱なる態度に出づるに至れる原因は多々あるであらうが、吾人の思考する所によれば、左の五個條を算へる事が出來る。

第一、英國國内に於ける勞働黨の態度の强硬な事

第二、佛伊兩國と土耳其との間に條約の成立し掛けた事

第三、ケマル軍が案外に隆盛な事

第四　希臘國内の政變

第五　印度其他の英國植民地に於ける回教徒の叛亂

以上五個の原因の内、吾人は今第五の回教徒の叛亂の根柢なりと稱する回教主義の主張を探究し、其主義の推移及將來を思考して見たいと思ふ。

二

汎回教主義によれば、永遠に一民族が他民族を征服し服從せしむるには人道上許すべからざる所である。回教徒は其産業の獎勵によりて各回教民族の經濟を豐にし、教育の發揚によりて精神的發展を遂げ、尠くとも歐洲列强の國民と肩を並べる迄に向上させなければならぬ。而して世界に散在する各回教徒は互に相糾合して一大國家を建設し、基督教國民と相對抗して各種の發達を圖らなければならぬと云ふ

即ち南洋及支那の回教徒は各種の原因により多少溫順であるが、英露佛伊等の基督教國の支配を受けつゝある印度の回教徒及中央亞細亞又は阿非利加北部の回教徒は最も熱烈に此主義の遂行を熱望する。曾て一千年前彼等の祖先が其文字言語を世界の各地に使用せしめ、宗教的に又政治的に殆んど全世界に威力を振ひ、其詩其科學及其哲學は中世の世界を支配し、恰も羅馬の文明希臘の文化が近世世界の文化的根柢となれるが如く、數學及化學等に於てアラビア文明は實に近世文明の基礎を作つたのである。故に其後裔たる今日の回教徒が徒に被治者の位置に甘ずるは忍びざる所であると主張する。かくて、彼等は日本にも最

近回教寺院を建立した。奉天に於ける汎回教協會よりは我が政府當局に宛て土耳其語講座を官立學校に開始する事を促しつゝあると云ふ。殊に印度の回教徒は、彼等が過去に於て英國の文化的指導を受け、其文明的恩惠に浴した事を忘れたものではないが、彼等が最近其自覺し覺醒すると共に、永久に其征服者の威壓を受くるに忍びざるを主張し、國内の國民主義者と共力し、更に又永く派を異にせるが爲に反目の形にあつた土耳古回教徒の運動を助け、互に歩調を一にして猛進せんとする傾向を示しつゝある　故に昨年の春聯合國、内にも英國が回教徒の爲めに不利を圖りつゝあつた時、印度の回教徒は各所に示威運動を試み更に政治運動を敢てし、君府を土耳古領とする事、アドリアノープルを含む東スレースを土耳其領とする事、其他小亞細亞全部主權恢復の爲に應援し、或はハリフア廳の移轉に反對する等、常に土耳其の同教徒たる同胞の爲に盡瘁したのであつた。それ故英國をして前述の如き大讓歩をなさしめたのであつた。

かく始めは抽象的なりし汎回教主義が遂には現實的な政治運動となり、今日では列強に對する一の恐怖の種となつた。されば英國は妥協的態度に出づるの止むなきに至り、表面政治的示威手段を以て土耳其國民軍を威嚇したが、遂には在來の政策を一變して軟化せざるを得ざるに至つた。吾人は其思想の流れを採る爲汎回教主義の推移を一考して見たい。

二

回教は其開宗の最初より他教を排して唯一神アラーをのみ信仰せしめ、人種の如何に拘らず其信仰者は悉く是を同胞と見做すが故に、其成立の當初より汎回教主義的思想の素因を含む。それ其布教運動の歴史は是を汎回教主義の歴史と見る事が出來る。然し今此所に論ずる近世の意味の汎回教主義の最初の熱心な主唱者はサイツド、ジヤマル、ルテイン（一八三八——九六）である。彼は波斯ハマダン附近の一村落に生れ、後阿汗に移住し、二十五歳の頃内亂に遭遇し、アジム、カンに從て印度に危險を避けた　然し印度政府の峻嚴な抑壓に逢ひ、此所にも滯在する事出來ず、爾來三十三歳に至る迄埃及又は君府に漂浪生活を送り、後遂に埃及でリヤド、パシヤの支給を受けて生活を營んだ。彼が丁度四十一歳の時反英宣傳をした罪により放逐せられ遂には印度のカルカツタに捕牽の身となつた。彼は斯くの如き不幸を以て悉く英國の壓迫に原因するものと信じ、英國を以て不共戴天の仇敵と考へた。それ故彼が後アラビア人の反亂も止み解放の身となりて巴里に寄寓せる頃（一八八四年）「剛毅なる手」と題する阿剌比亞語の雑誌を發刊し、回教徒間に數多の讀

者を得て、根本より英國の對回教徒政策を攻撃した。即ち彼は回教徒の綜合的一致團結によりて歐洲列强の進蝕を阻止し、且回教諸國が過去に失へる土地を恢復すべきであると絶叫した。然るに此雜誌も英國の爲に發行停止を命ぜられ再不自由な生活を送つたが、土耳其帝アブドウル・ハミツドの後援を得、更に友人の紹介で其生國波斯の陸軍大臣となつた。後彼は諸國を遍歷して其主義を宣傳し、殊に土耳其のスンニー派の同教徒と波斯のシャー派の同教徒が傳統的感情に支配せられて稍もすれば反目する事を以て最も忌むべき事とし、强敵たる基督教國の前には互に提携し相共力すべきを痛論した。其後倫敦に遊んだ事もあつたが、其志を遂げず、君府に歸り土耳其帝アブドウル・ハミツドの保護の下に歿せし五十八歲に至る迄、實に彼は終世、列强の壓迫に備へ、土耳其及波斯回教徒の糾合に盡瘁した。

西歐の文獻の上に、汎回教主義なる文字の始めて現はれたのは、一八八一年の末、佛國の Revue des deux Mondes (Vol xvi, p.924) の内に現はれたものを以て嚆矢とする。更に翌年正月十九日には英國の Times 紙上に此文字が見えて居る。是を見てもサイツド・ジヤマル・ルデインの努力が空しくなつた事を知られる。

即ち彼の死去は必ずしも其主義の死を意味するものでなく、彼の第一の弟子たりしマホメツト・アブドは雜誌及著書によつて其主義を宣傳し、日常の說教にも師の事業を完成せんとする事を忘れなかつた。即ち彼は「非回教徒に對する回教團體の政治的服從は回教の教理に違反するものである、回教徒に惠まれたるものを武力によつて列强が奪掠する事は後日の侮を招く所以である」と云つて居る。更に「西は歐洲土耳其より東は印度に至る地方の回教徒は、其勇悍なる點に於て遙に他の諸人種を凌駕する。其れ故回教徒は最も勇氣あり且活動的な君主の下に互に糾合一致して西歐より襲來する激浪を阻止すべきである」と述べ、更に「此志を遂げるには先づ無智なる回教徒を覺醒せしめ、巡禮の中心地に聯合協會を組織すべきである」と結論した

マホメツド・アブドの外にも兄弟弟子として有名なるアブドウル・ラーマン・カワキビが居る。彼は一九〇二年に不幸な最後を遂げる迄常に熱心に汎回教協會の建設を力說した。

是等の志は其他埃及印度等の數多の巡教者の血と淚とによつて、一九〇三年には佛國巴里に汎回教協會が設立された、其趣意書には左の十二個條が書き上げられて居る。

一、舊教國民の宗教、社會、道德及知識を增進せしむる事

二、全回教徒の爲に聯合の中心地を定むる事

三、同教徒相互の友情を温め其交際を便宜にする事
四、非同教徒の誤解を除去する事
五、同教徒各目の能力を發揮せしむる爲相互に援助を爲す事
六、非同教國內の同教徒に禮拜上の便宜を與ふる事
七、世界の各地に支部を設け講演出版によりて主義の宣傳をなす事
八、倫敦に同教寺院を建立する爲寄附金を募集する事
九、土耳其帝を援助する事
一〇、先づ各同教國の主權者をして主義を承認せしむる事
一一、此主義貫徹の爲先づ英國の政府當局と會見する事
一二、同教法に違反する列強に對しては充分の注意を拂ふ事

以上

斯くの如く廿世紀の初期に於て、愈々汎同教協會の設立を見たが、當時獨逸皇帝の主として援助を與ふるものは土耳其青年黨であり、且つ其青年黨の首領エンヴェル・パシャは、汎同教主義の遂行よりも、寧ろ土耳其民族の發展を以て第一義の目的とした爲に、內部的團結の連鎖が兎角緩み勝で、遂に大戰勃發の際にも彼等をして離れ〴〵に單獨行動を取らしむるに至つた。然るに大戰終局を告げて列強が對土條約を締結せんとした時、列強が同教徒の大部分に對する態度は餘りに苛酷なりし爲、再汎同教運動を惹起せしむるに至つた。

それ故昨年來列強は英佛伊等の其內部的不統一緩和其他の爲と、汎同教的運動に備へる爲に同教徒に對し軟弱なる妥協的政策を取る樣になつた。随つて過去の歷史的事實と其思索によつて汎同教主義の將來を判斷する事を要求せられた場合は、勃發的で不測な大なる支障の惹起せられざる限り將來は世界主義及ソヴィエット主義の存在に拘らず再び大戰前の如く、各同教國に民族主義的傾向を呈するに至るべきを答へざるを得ない。

吾人は此關係を更に左に具體的に詳述して見たい。

四

汎同教主義遂行の困難なる三個の理由を發見する。

一、同教內にスンニー派及シヤー派等の區別があつて各は必ずしも本質的に融和せざる事
二、諸同教國の政治上及經濟上の關係は列強の政策によりて變動し、或は離間せらるゝを以て同教相互の政治經濟的統一の困難なる事
三、各同教國民は各々民族主義的感情を有し、容易に其永續的融和を遂ぐる能はさる事

右の內第一の場合を考ふるに、眞に熱狂的な同教徒は、信仰の點に於て他派の者を容るゝ餘裕なく、同教經典には寬容を說

き、忍容を勸めるけれど、他の派の多くの者を容るれば容るゝ程、事實上各個人の金剛の信心は緩み、共團結の綱は遲緩せざるを得ない。故に汎回教主義者の多くは、比較的傳統を無視する青年又は壯年者或は回教内の他派の實情を知悉せざる者である。

第二の場合は、國民が互に日々其經濟生活を營むに當り、國内國外の政治及經濟關係に影響せらるゝ點尠なくない。是が人心を支配する事も亦稀少ではない。然るに回教諸國の政治經濟の關係は歐洲列強の對回教徒政策により、常に如何樣にも變化せしめられつゝある。例へば廿世紀の初頭より大戰勃發の當初迄獨逸帝の爲に最も多く惠まれた者は回教徒中では土耳其民族であつた。其れ故土耳共の青年黨はエンヴエル・パシャを指導者として先づ自國民の利益のみを圖つた。隨つて他國の回教徒は反感を懷き、百年前の如く再土耳其の横暴を忍ぶよりは寧ろ歐洲の文明的指導を受くる事の賢明なるを唱へた。殊に土耳其内部でも青年土耳其黨が一九〇八年に新憲法を制定して、信教の如何を問はず全國民に同權を賦與した事は、却て眞面目な回教徒の不快を招くに至つた。更に目下英國の對回教徒政策により最も多く惠まれつゝあるものはヘジヤス國である。即ち其四皇子は各々近隣新興國の王となり、自ら新に獨立して諸種の特權に浴して居る故、反英熱の盛な今日でもヘジヤス・シリア等の回教徒は明に親英主義者である。英國民が來年六月パレスタインに於て回教徒に讓歩せる如く、近東に於て再政策上列强と共に土耳其國民軍に讓歩する事大なれば、土耳共が英國を恨む事印度の如く烈しくはならぬ筈である。隨つて將來土耳其、及印度等の回教徒が今日迄の如く固く一致的行動を取るべしとも考へられぬ。（然し若し英國の一部の論者の反對意見が通つて、再近東及中東に對して强硬な態度に出たならば其際の結果は議論外である。）即ち列强の政策の如何により、回教徒内の團結力に變化を及ぼすべきは當然である。

第三、國民主義的感情の爲に汎回教主義者の結束に亀裂を生ずるに至るであらう。埃及青年黨が甞て土耳其青年黨と不和なりし所以は、兩者共其本質的希望が民族的獨立を得るにあつたからである。即ち埃及青年黨は優勢な土耳其青年黨と協同行爲を敢てして再土耳其の支配下に屬するを忌みたるは事實である。土耳其青年黨の首領エンヴエル・パシャの宣言にも「吾人土耳其民族は其思想上又實際上に於て明に一民族たるを以て、夢想家の計畫する汎回教主義の運動の如きは、吾人に本質的の興味を與へるものでない」とある。更に印度の國民主義者ガンヂーが印度七千五百萬の回教徒と一致的行動に出たのは、兩者

の敵が同一英國であつたと云ふ事最大の原因をなして居る。隨つて其敵の態度の軟化すると共に其結合の連鎖も多少緩むべきは容易に思考される。同樣に埃及、印度、波斯、中亞等の同教徒が土耳其の同教徒と同一の敵の爲に壓迫せらるゝ時にのみ團結力堅固で、其敵手の壓迫手段の軟化と共に結合の綱の緩むのは當然であると考察される。

最近一大傑傑として世界の注目を惹きつゝあるケマル・パシヤさへ、本年一月一日のアンゴラに於ける議會演説に於て左の如く述べた。

「吾人は傳統的な夢を見る事に厭きた。數多の同教徒に全ツラン民族の統一的大帝國を建設せんとする。而して汎同教主義と全ツラン主義が生れた。然し吾人の政治は合理的で文明的でなければならぬ。吾人は全同教徒の幸福を祈り其獨立の日の早きを欲するけれども　强て是を求むれば土耳其國を危險ならしめ、且つ吾人の事業を阻害するものである。隨つて吾人は彼等に同情はするが行動を共にして戰ふ事は出來ぬ。吾人は醒めつゝあるもので、彼等の如く夢みつゝあるものではない。即ち吾人は吾人の獨立を得んが爲に戰ふもので別に他意はない」と。

即ちケマル一派の徒黨は在來汎同教主義によつて援助された事實は信ずるであらうが是を標榜するものでない。それ故同教國たるヘジャス・イラク・シリア等が何れもアンゴラ政府たるケマル派と行動を共にせぬが、其援助を始めから期待せざりしが故に　失望もしない。是に反し波斯、阿汗、印度、土耳機斯坦高加索等は何れも土耳其國民黨たるケマル一派に同情し、アンゴラを同教國の中心とし、其國民議會をして同教徒の指導者たらしめんとするが、ケマル・パシヤは是に對して寧ろ消極的態度に出て居る。要するに汎同教主義を以て夢想的なものと考へ、アンゴラ國民黨を中心とする國粹的にして民主的な獨立國家を建設せんとするのが、ケマル・パシヤの中心思想である。

斯くて汎同教主義の將來は、教徒各人の信仰的欲求と、列强の政策と、更に民族主義的思想の爲に、遂に彼等の希望するが如き結果を齎す事困難であらう。宗教が一の民族的國家構成の素因となるは勿論なれども、其素因たり得るものは宗教の外に、言語　風俗、人種、傳統、地理、政治、經濟及其總括的感情もある。されば單に宗教を等しくするのみの理由によりて、其宗教を本質的連鎖として一の統一國家を作らんとするは極めて困難な事であると思ふ。それ故同教徒は多少の連絡を保ちつゝ各自民族的國家を形成しつゝ、各國民獨特の生活を在來營みつゝありしが如く、列强の對同教徒政策の軟化せんとする將來に於ては、當然其狀態を猶ほ永く繼續するものであると思ふ。

換言すれば汎回教主義も現代の世界思潮の一たる民族主義の大潮流の中に流れ込むべき多くの可能性を有するものであると思ふ。

回教徒の政治的將來

大川周明

一

埃及、土耳古、波斯　亞富汗斯坦、印度に於ける、回民主義者の萬難不屈なる精神は、回教諸國復興の明確なる豫兆である此の點に於て世界戰は、最も鮮かに解放戰の天意を具現する。

世界戰は、國家内部に於ける貧民に擡頭の機會を與へ、國際的には隷屬民に復興の機會を與へた。而して之を歐羅巴對回教諸國の關係に就て見れば、回教徒は、世界戰によつて、政治的には資本的帝國主義の鉄鎖を斷離し、宗教的には基督教的精神の桎梏を超へ出すべき、二重の獨立を獲得する途を拓かれたものである。鋭きこと利鎌の如くなるは、獨りケマール・パシヤが揭ぐる弦月の旗のみでない。埃及獨立の基礎を見事に築いたが、不幸流謫の身となりて、今や南海の一島に、薄暮カイロの空を長望しつゝあるザグルル。・パシヤの双眼にも、又は法衣を脱して戎軒を事とし、神出鬼沒の軍を指揮するクチュク汗の劍にも、又は英吉利壓迫の毒手の下に、能く印度回教徒の生命となつて、健闘疲るゝを知らぬアリ兄弟の魂にも、等しく歐羅巴を戰慄せしむべき鋭くして强き光、今は混沌たる回教世界に、北斗の星の如く輝いて居る。

猶太人は休徴を乞ひ、希臘人は知識を求む。休徴と知識とを求むるには、たゞ彼等のみのことではない。現代に於て、徒らに回教復興を高調するは、主觀的詠嘆と誤り去られ、世人を納得せしむる所以でない。故に僕は、拒む可からざる事實に據り、且其等の事實が無言に而も有力に語りつゝある意識を闡明

することによつて、回教の將來を論斷せねばならぬ。

二

回教は、典型的なる律法教として、信仰が信者の內面的並に外面的生活を、徹底して支配する。故に回教徒の生活に於て、宗教と法律と道德とは、尙ほ未だ分化を遂げず、從つて政治と宗教とは、決定して不可分である。此等は、回教にとりて、同時に非常なる强味であり、且非常なる弱點であるが、兎にも角にも事實是くの如くなるが故に、回教諸國の盛衰が、回教其ものゝ信仰の强弱と、直接に相結ぶべきことは、因緣最も明白である。

さて回教諸國の沒落が、信仰の墮落其因をなせることは、歷史の示すところ瞭然たるが故に、玆に再叙する必要がない。知らんと欲する所は、若し回教諸國が政治的に復興途上にありとすれば、果して其の缺き難き條件たる信仰の復活ありしや否やである。之に對して僕が得たる解答は、實に力强き『然り』である。

其初め回教の搖籃たりしアラビアの沙漠は、第十八世紀の中葉に於て、更に回教復活の搖籃と成り、ムマムマツド・イブン・アブドル・ワハーブの信仰を、其裡に育んだ。この偉大なる改革者の出現によつて、全回教世界に亘るリヴイヴルが起つた。彼は第一に、獨一のアラーに對する絕對の歸依を力說し、神人間の一切の仲介を排した。第二に、コラン及びスンナの私の解釋を禁じた。第三に、信仰の統一に累する一切の儀禮を棄てた。第四に、劍かコランかの鐵則を確立し、說教によつて歸依せざる異教徒は、劍によつて之を征服す可しと命じた。此の運動は、ワハーブ運動として知られ、ナジドの一角にワハーブ教團即ワハーブ帝國の基礎を置いてより、五十年ならずして全アラビアに權威を揮ひ、世界の回教徒に深甚なる刺戟を與へた。一八一二年、埃及のムハマツド・アリ・パシヤ、英軍の援助を得て之と戰ひ、其の政治的發展を阻止したけれど、ワハーブの精神的感化は、依然として勝利の步みを續け、殊にサイド・アーマツドの出現によつて。印度回教徒の間に確乎たる根を下ろし、その覺醒の根本的原因となつた。そは印度に於てアーマツド運動の名を以て呼ばる。

次で第十九世紀の中葉に至り、回教は更に二人の偉大なる改革者を生んだ。其一人は、アルジリに生れ、ワ、ハーブと同じく、繁瑣なる神學の其價値、儀禮の無實義を力說し、教祖時代の純人に復れと叫べるムハマツド・ベン・アリ・アス・サヌスである。彼は、北亞弗利加一帶に、强烈なる信仰を鼓吹し、殊に力

をサハラ沙漠の沃地に位する諸部族教化に努め、同教の如何なる他の團體も有せざる多數の歸依者を得て、所謂サヌス教團を創立し、其の後繼者は、今や之を以て一個の國家に等しき組織に發達せしめた。

他の一人は、バハイズムの名によつて、吾國にも其名を知らるゝ波斯回教改革の泉となれるミルザ・アリムハマッドである。之を思想の上より言へば、此の最後の改革者は、自餘の兩者に超出して居る。彼は、ムハマッドの神使なること、コランの天啓なることを承認しつゝ、而も其の絶對性を拒んで、天啓は、究極的のものに非ず、時代と共に一層深遠なる眞理、一層適切なる律法が、神より人間に啓示せらるべきことを主張し、直ちに正統回教の根城に挑戰した。彼が非常なる迫害を受けたことは言ふ迄もない。二十五歳にして傳道を開始してより第七年、途に銃殺の酷刑に處せられ、其の弟子も亦殉教の血を流したが、而も今や約百五十萬の信者を波斯に於て有するに至つた。

叙上三つの偉大なる魂、及び之に感激して蹶起せる幾多の魂によつて、回教の宗教的信仰は、百年以來日に復活しつゝあつたのだ。信仰と政治とに間髮を容れざる回教に於て、斯くの如きリヴイヴルが、政治的復興を伴はざる道理がない。

三

げに之を皮相に就て見れば、同教徒の政治的勢力は、叙上のリヴイヴにありしに拘らず、第十九世紀中葉以來、換言すれば西歐諸國が漸くナポレオン戰爭の創痍より癒えて、貪婪の手を四方に伸べて以來、秋の入日の如く迅速に沈んで行つた、故に或は此歷史的事實に據つて、上來の僕の主張を駁撃する者あるかも知れぬ。さり乍ら、物の表面に眩かず、能く其の内面に透徹し得る人は、此の表面の衰敗の裡に、回教復興の力が、段々政治的にも物凄く動き初めて居たことを決して看過しなかつた。さればこそ、ポールグレーヴ、スミスの如き烱眼なる先見者は、夙く四十年以前に於て、回教諸國の政治的擡頭に關し、憂心冲々として深刻なる警告を西歐諸國に發したのだ。

蓋し全回教徒に亘る普遍的運動が、回教諸國に於て組織され初めたのは、實に前世紀の中葉、回教の政治的勢力が、表面底止する所なき勢を以て衰退せる時であつた。さり乍ら、零落ちて根のみとなりたればとて、直ちに枯木と思ふてはならぬ。回教も亦表面最も悲境に沈淪せる時、却つて勃々たる芽を萠え出でしむべき力を養つて居た。メッカの一神學者の小冊子に火を點ぜられ、隱約の間に諸國に弘布せられたる汎回教主義、サイ

ド・ジャマルッディンの熱烈なる同教諸國統一運動、シナッスイ・エフエンディの青年土耳其運動、ムスタフア・カメルの埃及解放運動、總て此等の新しき宗教的・文化的・政治的諸運動は、其眼能く事物の眞相等に徹し得る人には、明白に同教の政治的復活を語つて居たのだ。固より尚初に於ては、此等の諸運動は、朴素なる非實際的運動であつた。而も同教諸民族は、此等の運動によつて、初めて民族的自覺を覺醒せられ、世界政局に對して必要なる注意を拂ふに至り、玆に諸國に於ける具體的國民運動が喚起されて來た。

四

第一に之を土耳古に就て見る。その初めて起るや、專ら土耳古の復興、土耳古文學の建設を力説せるスナッスイの青年土耳古運動は、幾くもなくして純乎として純なる政治運動となり、遂に土耳古革命を成就するに至つた。

更に之を波斯に見る。ザイドジヤマル・ディンの眞摯熱烈なる提唱によつて長夜の睡眠より覺醒せられたる波斯國民は、筆紙盡し難き艱難辛苦に堪えて、能く波斯革命を成就した。

土耳古・波斯兩國の革命は、中道に挫折した。而して革命の指導者等は、眞個の力なくして徒らに西歐の物眞似する歐化主義なるかの如く謗られ、輙瀕國事を誤れる小才子者と非難された。

而も實事の眞相を語れば、兩國の革命は、挫折せるに非ず、挫折せしめられたのだ。土耳古の場合に於ては、第一に墺露兩國が、新土耳古の出現は喜ばなかつた。彼等は、土耳古革命の成功が、自國の革命黨並に國內異民族に及ぼす影響を恐れ、且彼等多年の宿願たりし君府進出及びサロニカ進出の希望が、强き土耳古の出現によつて水泡に歸すべきを恐れた。第二に英吉利は、土耳古の政治的成功が、印度及び埃及に及ぼすべき影響を恐れた。第三に佛蘭西は、同じくテニズイ・アルジエリに及ぼすべき新土耳古の感化を恐れ、且從來近東基督教徒の保護者として、亞細亞土耳古に占め來りし特殊の地位を失はんことを恐れた。かくて列强は、間接又は直接、土耳古に憲政行はれ、責任政府樹立せられ、而して國運の恢興せらるゝを妨げた。墺太利が、ボ・ヘル二州を併合せる時、列國は之に對して何等の抗議をも提出しなかつた。伊太利が、宣戰を布告することなくしてトリポリ劫掠の非道を敢てせる時、列國は唯だ土耳古の弱めらるゝを喜んだ。再度のバルカン戰に際して、列强は種々なる口實の下に、土耳古壓迫に協力した。而して一方世界に向つて、土耳古は憲政に適せず、青年黨は空想家にして政治の

能力なしと宣傳し、信を世界に失はしむるに努めた。ロイター電報を現代世界史の教科書と考へて居る日本人の中にも、此の宣傳に乘せられて、國土無限の苦衷に一顧の同情なく、却つて西歐の應聲蟲となつて理由なき非難を彼等の上に加へし不心得者が尠くなかつたことは、日本國のために僕の耻ぢて止まざる所である。

こは波斯の場合に於ても全く同一であつた。波斯の議會は、實に英露兩國の傀儡たりし皇帝が、露國陸軍大佐リアコフの率ゐるコサク騎兵旅團をして、暴力を以て解散せしめられた。解散に次ぐ一年の健鬪によつて、勝利が遂に國民の手に歸した。擯位を宣せられたる皇帝は、英露兩國々旗の下に保護せられた。而して英露は廢帝の再立を圖りて、陰險極りなき奸策を試みた。やがて新波斯が、米人シスターを招聘して、財政の根本的改革を試み、内憂外患を克服して漸く革命の實を擧げんとするや、波斯分割を目的とする英露は、双葉にして巨樹を刈るべく、遂に復た、武力を以て干渉し、遂に憲法を中止せしむるに至つた。而して世界に向つて高言すべく、波斯國民は憲法の運用に適せずと。

波斯・土耳古は、弱き乍らも獨立國なるが故に、其の政治的自覺は革命運動として現れた。埃及に至りては、事實英吉利の鐵鎖に繋ばれたる奴隷なりしが故に、其の自覺は獨立運動として現はれた。クローマー卿が、二十年に亘る長き埃及統治の後、英國は最早埃及に對して、武斷政策を用ゐるの要なしとし、カイロより英國陸軍を撤退するも可なりと吹聽せる時に、埃及を外人の支配と掠奪とにより解放せよと叫ぶ獨立運動が、儼然として潜める姿を現はすことは、世界を驚愕せしめた出來事であつた。而も是の如き運動が、一朝にして起り得る道理はない。そはアートメツト・アラビ・パシヤ以來、埃及人の培はれたる種子が、一朝の奇縁に激發せられて萠芽せるものに外ならなかつた。

五

歴史の進行は、紆餘曲折する。從つて露呈し來る所の風光は、歩々に變幻する。高處に立脚するに非ずば、決して其の方向を正しく把握することが出來ぬ。世界戰の經過に於て、此事は特に然りである。

世界戰の始まるや、心にもなき『正義』と『自由』とが、聯合諸國の長き舌によつて、際限なく弄ばれた。而も之を以て彼等の僞善と速斷してはならぬ。彼等は『世界史』によつて斯く言はしめられのだ。この正義と自由との爲の戰に於て、埃及は

第一に英吉利の保護國となり、土耳古はアンゴラに幽閉せられて、波斯も亦事實上の保護國となつた。回教の歷史ありて以來、此時ほど頽退の極に沈んだことはない。さり乍ら是く屈せしめられたるは、やがて昂々然として頭を擧ぐるための準備であつた。見よ、埃及はザグルル・パシヤの努力によつて、先づ半ば英吉利の羈絆を斷つた。波斯はレザ汗の武力を以て英太利との恥づべき條約を破棄した。土耳古はケマル・パシヤによつて再び君府に新月旗を翻へすことになつた。

勝利に乘じて功を擧ぐるは易い。窮迫の極より奮興して、强敵と苦戰するの勇氣は、魂の鍛練なき者の、斷じて不可能とする所である。僕は回教諸國の最近史を讀み、彼等の現在を目睹して、脈々の新生命、再び彼等の間に勃興せるを認め、權威を以て彼等の前途の多望を斷言する。そは昂まる潮である、寄する浪である。人間が如何に疾呼しても、最早止まるべくもない。

六

回教諸國と勞農露西亞との提携、並に土耳古・亞富汗兩國同盟は、やがて出現すべき團結せる回教の政治的勢力の前提である。就中新露土條約が、其の第四條に於て、東方諸國の國民的自由獲得の爲の運動と、露西亞勞働階級の新社會建設の爲の運動とが、同一精神の上に立てることを力說し、兩者の結合を高調せることは、不盡の醍醐味を藏して居る。戰時と戰後とを通じ、是くの如き明快にして深遠なる文辭は、寡聞なる僕の知らざる所である。そは實に適確親切に、世界史の方向と、之に對して採るべき道とを示して居る。

獨逸皇帝は、回教勢力を自己の野心に利用すべく、土耳古をして『神聖戰』を布告せしめた。而も何等得る所なくして却て帝位を去らねばならなくなつた。今や勞農露西亞が、全回教徒の指導者となつて、彼等の勢力を世界革命の爲に用ゐんとして居る。これが露西亞の爲に利益となるか否かは大なる問題でない。獨逸の場合に於ても『神聖戰』の布告は、而も獨逸の利益にはならなかつたけれど、この布告によつて、世界の回教徒は、政治的な深刻なる反省を促された。此の反省は、獨逸の爲には役立たなかつたけれども、回教の將來の爲に、重大なる意義を有することは言ふ迄もない。露西亞の場合も、また同然である。彼等の回教政策は、回教其者のために、極めて有意義であり、且回教復興の直接の支援となつて居る。僕は、ケマール・パシヤの一擊が、亞細亞に漲る不義の一端を仆せることを歡喜し、この機會に於て、復興亞細亞の前驅たるべき回教勢力

に關する叙述を試みんとして、此の小篇を草した。稍々詳細に回教徒の本情を知らんと欲する讀者の爲には、遠慮なく僕の小著『復興亞細亞の諸問題』を自薦する。

汎回教主義と汎亞細亞主義

——土耳古復興の意義——

ラスビハリ・ボース

土耳古と歐羅巴間の確執は、今日初まつたことではない。それは數世紀前からのことだ、そしてその確執の根原には、人種的若くは宗教的偏見が横たはつてゐた。そしてそれは只だに、土耳古と白人間の爭であるに止まらず、亞細亞と歐羅巴國の鬪ひであつた。

土耳古は昔から亞細亞の門番であつたのみならず、一時は、亞細亞を代表して歐羅巴大陸に於て、その勢力をふるつたものだ。その頃からして既に、白人は土耳古人を敵視し初め、そして土耳古の全滅を企てた。かくて幾度か、殘忍なる陰謀を企て、土耳古の領土を漸次と掠奪し、巴爾幹戰爭當時は、土耳古の歐羅巴に於ける大部分の領土は、白人の占有に歸してゐた。

このような悲運に遭遇しても、尚ほ、土耳古のヴァイタリテイは消滅し盡さなかつた。それを恐れて、歐羅巴人は土耳古を絶對に、歐洲から抹消し去るべく決心したのだ。

土耳古が歐洲大戰に對して、同盟側に參加したことは、土耳古の敵にとつては、正しく絶好の機會であつた。この機會に乘じて、聯合國は土耳古を滅ぼさうとしたのであつた。それらの國々のうち、特に英國は土耳古の全滅を希望して止まなかつた。その理由とする所は、印度に於ける英國統治の確立を計ることゝ、亞細亞に於ける英國勢力の扶植に重大關係を持つからであつた。

ロシアは疾うからコンスタンチノープルに南進して土耳古の

滅亡を望んでゐたし、他の聯合國中の八國は人種的若くは宗教的排土耳古感情から、土耳古の滅亡を希望してゐた。

所が、亞細亞にたつた二つの眞の力を有つ國がある。一つは日本だ、他の一つは土耳古だ。英國は日英同盟に依つて、日本を完全に×××てゐたので、その方面から英國の勢威に挑戰する心配はなかつた。然るに土耳古は、さうした關係に導くことが出來ず、隨つて時たま、脅威となるので、自然土耳古を殲滅する計劃を立てたのだ。これは英國のタイム・オーナード・ポリシイで、その强敵若くは競爭者を買收することが出來なければ、必ず殲滅を計つたものだ。スペイン、フランス、ロシア、ドイツ、何れも英國のこの政策の犧牲にされたことがある。そして英國は未だに、この政策を放棄しないから、世界に國を立てる者は、均しく英國を、警戒せねばならない。

英國にとつて印度は、經濟的、軍事的、戰略的見地から云つて絕對だ。印度の金、印度の原料、印度の人を濫用して、英國は今日の盛大を持ち來しそしてエヂプトから支那に至るまでの弱國の間に、その勢力を扶植した。そして英國は將來も印度を利用して、その勢力を確保せんとするだらうが、印度の全人口の三分の一は、卽ち回敎徒で、それらは皆、土耳古の王を敎主として、崇拜してゐる關係上、印度と土耳古との因緣は非常に深いと云はねばならない。そしてこの因緣を辿つて、場合によつては、英國を驅逐するために、印度は土耳古の援助を受けないとも限らない。又た土耳古が、强くなるといふことは、英國の印度及び亞細亞に至る道程を脅かすものだ。英國が土耳古の滅亡を企劃する第一の理由はこゝにある。

世界に於て土耳古の外に、回敎徒の維持する開明國としては三つで、卽ちエヂプト、ペルシア及びアフガニスタンだ。そして英國は數十年前から、これら諸國を、政治的及び經濟的に、併呑しようと試みてゐた。卽ち英國が、エヂプトに手を延ばす計劃の起こりは、千八百七十九年であつた。が千八百八十二年までは、エヂプトに於ける英國の勢力も、餘り强大でなかつた。千八百八十二年の夏に、エヂプト王に對する反亂の勃發に乘じて、それを鎭壓する口實の下に出兵したのが、きつかけだ、當時は、反亂が鎭壓されたら、直ちに撤兵する方針だと公言したに拘はらず、今に至るも、英兵はエヂプトに止まつてゐる。つまり千八百八十五年から、エヂプトは外觀は兎角、實際には、英國の領域となり了した。そして英國が正式に、エヂプトを保護國として宣言したのは、千九百十四年の十二月であつた。卽ち、歐洲大戰後數ヶ月であつた。此時に際しても英國は、大戰がすんだら、エヂプトに獨立を與へることを約束したものだ。

併し戰爭は終つたが、詭詐に長ずる英國は約束を守らず反對に、エヂフトを正式に屬國となし、その旨世界に公表した。盜賊が盜賊に援助を與ふることは、自然の人情なので、他の自國も之を承認したのだ。彼の有名なエヂフトの國民黨を率ゆる志士、即ちエヂフトに於けるガンヂたるザゴロル・パシャは、英國の斯の如き不正と非道に對する反抗運動を初めた。所が、この運動が全エヂフトをベックとするに及び、英國は漸次とその本性を露はし、無辜の群集に發砲して、多數の死傷者を出し、エヂフトの首府カイロ及び他の市では、戒嚴令を布き、强姦、强盜、笞刑、捕縛、死刑等は毎日のように行はれた。そして昨年の暮には、遂にザグロル・パシャをも、ある印度洋の島に追放するに至つた。然し獨立運動は止まなかつた。ザグロル夫人共他の領首等によつて導かれて續行された。かくて露骨な抑壓のみでは、目的を達することができないと觀取したので、英國は抑壓と讓歩と並び行ふの政策に出で、今春を以て、エヂフトに所謂自治を與へた。がそれは自治の質を與へず、單に自治の形骸のみを與へて、エヂフトを瞞着しようとしたものだ。エヂフト人は明かに、その眞相を觀破つた。彼等は過去に於て幾度か英國に對しては、苦い經驗を持つてゐたから、決して誑されなかつた。彼等はエヂフトの本當の獨立が恢復されるまでは、該運動を繼續することを決しつゝある。こうして何時鳴動し出すかも計られないエヂフトは、英國から云へば、戰略的に重要な位置に置かれてゐる。だからエヂフトを確保することが出來なければ、英國の亞細亞に於ける狀態は、頗る不安に陷ることゝなる。そしてエヂフトの確保は、即ち土耳古の隷屬を先要條件とするを以つて、英國が土耳古の衰亡を熱望する所以であつた。

英國がペルシアを、ねらふことになつたのは數十年前からだ。が北の方からロシアもペルシアに野心を藏してゐたから、千九百六年までは、英國としては、その野望を充たす機會がなかつた。所が、千九百七年の八月に、ロシアと英國の間に諒解が成立して、英國はペルシヤの南部をとり、そしてロシアは北部に占據したので、ペルシア政府の勢力は、僅かに中部の猫額大の地方に制限された。即ち、英國の勢力の範圍は、十三萬七千四方哩、ロシアの勢力は三十萬五千方哩なるに、ペルシア政府の勢力は、たつた十八萬八千方哩に縮少された。然し、千九百十三年となつて、この中部地方までも外債のために、英國の抵當として提供することゝなつた。若し歐洲大戰は初まらず、ロシアの政府は亡びなかつたら、ペルシアの中部までも、英國に併合されてゐたに違ひない。

歐洲大戰が初まるや、ペルシアは嚴正中立を宣言したに拘は

らず、英露は、ペルシヤを殆んど、軍事的に占領したのであつた。白耳義の中立を破つた獨逸は、非常に白國人から攻擊された。然るにペルシアの中立を犯したからとて、誰も英露を批難する者はなかつた。ロシアに於ける帝政の破壞及びレニン政府の成立は、ペルシアを悲慘なる運命から救ふ動因となつた。政權をとつて間もなく、モスコー政府は、ペルシアから撤兵し、過去に武力を以て掠取した利權を破棄してペルシアを獨立國として承認した、それに他國から攻められた場合に援助するとの攻守同盟まで結んだのだ。思ひがけないこうした運命は、英國の計劃を水泡に歸せしめた。然し、最後の手段として、根氣强い英國は、一昨年もう一度ペルシアを陷穽に入れんとしたものだ。即ち、ペルシア政府の大臣を買收して、ペルシアに不利益なる條約に調印させんとした。然しそれはペルシア國民黨の首領たちの反對のために、實行されなかつた。けれど英國の政治家は、少しも屈退せずに、印度の安全のため、ペルシアに勢力を扶植せねばならぬと更に公言したことであつた。未來も英國は、同一計劃を實行するために、努力するであらうとは、餘りに見え透いたことだ。然し、ロシアのことは別としても、土耳古が力を持つてゐる間は、それは到底不可能だと、英國はよく諒解してゐる。英國が假に成功しても、ペルシアは土耳古の援助を受けて、英國の支配を顚覆する當然性がある。が若し土耳古が斃れてしまつたなら、南亞細亞の獨立は恐くなくなるので、從つて英國の侵略に挑戰する國もなくなるのだ。そのために、英國が土耳古の滅亡を欲したのは餘りに、當然であつた。

印度とペルシア間のアフガニスタンは、千八百三十七年から、英國の脅威を感じてゐたので、英國は種々の口實を設けて、幾度もアフガニスタンに侵略したことがある。その結果、千八百七十八年にアフガニスタンは殆んど、英國の保護國になつてしまつた。英國は同國の外交權を、すつかり把握したが、千九百十九年に（同國）皇帝は、排英派に暗殺されたので、彼の皇太子が即位した。物のよく分る若い賢い新王は、英國に掠奪された主權を、奪還することを緊急事とした。で即位後、間もなく英國に對して開戰した。當時は英國の陸軍は復員中であつて、又た印度の非協同運動の形勢も惡化してゐるので、一時英國は大いに當惑させられた。かくして遂にアフガニスタンと英國間に、講和條約が締結された。それに依つて、アフガニスタンは、純然たる獨立國となり、今日に於て世界の諸國と外交關係を開始することができた。

けれど一時は獨立國になつても、更に英國の野心のために、その獨立を保持して行くことが、アフガニスタンとしては困難

だ。どうしても他國の援助がなければ、早晩、又た英國のために併呑されるに極まつてゐる。アフガニスタンはこれをよく知つてゐる。英國も十分それを承知だ。然らば、どういふ國が、アフガニスタンを援助することが出來るかといふに、東方の印度或は西にゐるペルシアは、何れも今日の所、それをよくし得ないところだ。北にゐるロシアは、よく出來ても、宗教、傳說、風俗の相異があるから、亞細亞人同樣、快よく同國のため犧牲になり得るとは望まれない。然し同じ宗教、同じ傳說、同じ風俗、を持つてゐる同じ亞細亞人たる土耳古には、それが出來るのだ。これも又た英國が土耳古の滅亡を欲した理由の一つであつた。(外電に依ると、アフガニスタン王は、同國の軍事改革のため、アンゴラ政府から軍事顧問の招聘をケマル、パシアに交渉したとのことだ)。

歐洲大戰の結果として、ロシアの制度が變はり、侵略主義の人々のあとに自由主義の人々が政權を握るに至つたことは、その脅威を拭つて與れた。歐洲の强國は何れも國力が衰弱したので、土耳古を全滅せんとする政策を永續させることが出來なくなつた、たゞ英國だけは、如上の理由のために、土耳古の破壞政策を、繼續して保持してゐた。が戰時に際し、英國が危機にあつた時は、首相ロイド・ジョウジは、われ〳〵は古い名譽ある歷史を有する土耳古の領土を、處分する爲で戰つてゐるのではない、われ〳〵は又た、土耳古からその首都、若くは人種の數から云つて、土耳古人が優位を占めてゐる所の小亞細亞なりスレースを奪取せんがために戰つてゐるのでもない」と、公言したことであつた。

過去の歷史に徵するに、有利な約束なれば、英國は必ず、之を履行するが、然し、英國にとりて不利な約束とみれば、曾て守つたことがない。この場合も英國は、その約束を守るよりも、むしろその利己的慾望を滿足せんとしたのだ。即ち、彼は他の聯合國に率先して、セーヴル條約を締結した。そして君府政府に、殆んど强制的に調印させた。この條約こそは、正義なり、人道を去る遠いもので、その條項は、土耳古の存在を、全然拒否するものだ。然し土耳古青年の愛國心と、犧牲とがあつたゝめに、該條約は今や無效となつて、正義は遂に勝利の月桂冠を得たのだ。

この屈辱的條約には到底不服だとして、土耳古青年等は反抗した、そしてどうしても土耳古の復興を計らねばならないと結束した。その中心人物ムスタフア・ケマル・パシアは、彼の僚友だちと一緒に、小亞細亞にアンゴラ政府を設置し、全國から代表者を集めて國民議會を召集し、土耳古の獨立を恢復する爲

め、新しく軍隊を組織したのだ。英國は之を知つて、その對抗策として、土耳古多年の敵であり且つ小亞細亞に領土的野心を持つてゐた、希臘をそゝのかした。けれど英國の援助を受けて、今日までアンゴラ軍と戰つてゐた希臘軍は、彼らのため、却つて全然打ち破られてしまつた。このアンゴラ軍の勝利は、たゞに土耳古の勝利ではない、それは歐羅巴に對する亞細亞の勝利だ。換言すれば亞細亞勢力復興の第一步だ。そしてパシャは、この復興戰の先陣を指揮するものだ。昨年の暮、彼は印度のキラフアット委員會に宛てゝ左のような手紙を送つた。

「私は回教徒としての、若くは亞細亞人としての權利を擁護するを目的とするわれ〳〵の奮闘に對して、われ〳〵の印度の兄弟たる印度教徒と回教徒から、道德的、物質的に與へられた援助を深謝し、且つ印度其他諸國に於ける苛刻な抑壓と、小亞細亞に於ける最も蠻的な侵畧とが、われわれの神聖な主義の勝利を到底妨げることが出來ず、將來も出來さうにないことを見て誇りとするものだ」

今年の五月十六日に、ローマに於けるアンゴラ政府代表者は又た、印度の中央キラフアット委員會に宛てた手紙の中に、左の如く書いて寄越した。

「大西洋岸から太平洋に至るまでの人民は、今や奮起して各自の權利を要求しつゝある。だから若し歐羅巴が依然としてその現在の貪慾なり自惚を固執するならば、その結果惹起する重大事變に對する責任は、彼等、否な彼等のみに負はさるべきであらう。」

この二つの手紙に依れば、パシャは、單に回教徒のためのみでなく、亞細亞全體の生存權のために、戰つてゐるのだ。そしてその政策の貫徹のために、彼はロシア、ウクライナ、アルメニア、ボハーナ、ジョルジア、アゼンバルザン、ペルシア及びアフガニスタン等と同盟を結んだ。彼が回教徒のみのため働いてゐたものなら、ロシア、ウクライナの如き非回教國と同盟する必要はなかつたのだ。即ち、ロシアとして回教徒を助けた理由は、たゞ英國の帝國主義乃至は資本主義破壞の點に於て、共通の利害關係の下におかれてあつたがためであつた。又た英國の帝國主義乃至は資本主義の打破は、即ち亞細亞の復興だ。それでエヂプト、ペルシア、印度等は土耳古の勝利を祈つてゐたのだ。その故に土耳古の勝利は即ち亞細亞對歐洲の勝利で、そして亞細亞獨立の基礎の第一步だ。

歐洲大戰や、土耳古が神聖戰爭を、宣布したに拘はらず、エヂプト、ペルシア、アフガニスタンの如き回教徒の國々は、それに参加しなかつたのみならず、土耳古國内の回教徒でさへ、

山本有三戯曲集

（忽五版）

山本有三作

天才戯曲家として一作を出すごとに讀者の血を躍らし、そしてその核心をシカと把握して離さないのは山本氏の戯曲である、氏の人生へ對する愛着、舞臺に對する細緻の觀察は篇中の何人をも躍らし泣かさずにはおかない、此書に收められたる五篇の總てが、均しく東都で歡迎せられ、そして舞臺の上では幾萬の人を泣かしめた傑作のみであることは呶々するまでもない、「嬰兒殺し」の含蓄多き殺人婦に對する熱情、「坂崎出羽」「津村教授」「生命の冠」に用ゐられた忍從の辛さと困難にはいかなる男兒でも涙なくては讀むことは出來まい。

內容

津村教授
嬰兒殺し
生命の冠
女親
坂崎出羽守

定價貳圓八拾錢

◇送料書留十九錢◇
◇四六判布製美本◇

東京芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

萬雷の一時に落下する如き大音響を我社會に與へた本全集の豫約募集は出版創始來の好果を收

豫

（ニ）體裁册數

洋裝、菊版、背皮兩面クロース、金文字

天金函入　全四册、壹册平均約四〇〇頁

新型横組

は解約者と見做す

（右拂込金の外に送本料を要す）

（乙）一時拂＝金拾九圓とす（四册分）

拂込期日は大正拾壹年十月卅一日限り

但し申込金不要（右拂込金の外に送本

武林無想庵作

長編

最新刊

には天地の何物をも犧牲に供した

アラビヤ人の如きは、英國に買收されて、土耳古に對する謀反を起して土軍と戰つたのであつた。蓋しその時に於ける土耳古の目的が、汎アジア主義、即ち反帝國主義乃至は反資本主義的でなかつたから、該戰爭は失敗しその訴へは、他の同教國から答へられなかつたのだ。併し、今日土耳古は、上述の如く回教徒及び亞細亞の生得權のため戰つてゐるので、回々教の人々のみならず、他の宗教の人々までもが、極力土耳古に聲援しつゝあるわけだ。

個人の生涯に於けると同じく國家の歴史にも、四つの段階がある。即ち少年時代は、單に後年の鬪ひに對する必要な準備として智識の獲得のみに、その活動が制限されるものだ。そして青年時代となれば、軍國主義が旺盛となりそして權力と威信とを崇拜するようになる、又た壯年時代には、商工業が繁盛し、最後に老年時代となつたなら、美術や哲學が勃興し、そして死と再生との準備としての衰亡期に入るものだ。

亞細亞は大抵以上四つの段階を經て來た。そこでは曾て盛んな時があつて、凡ゆる歴史の讀者が知悉してゐるとほりに、世界の文化史上に重要な役目を演じて來た。尙ほ亞細亞が如何にして世界の指導を持續し、且つ地球上の暗黑部を、文明の燈火を以つて明るくしたか、又た如何にして亞細亞が歐羅巴の精神的先驅者として寄與し、そして歐羅巴の科學、美術、哲學、及宗教に影響を及ぼして、その支配的勢力をふるつたかといふようなことは、悉く歴史を研究する者の知つてゐるところだ。一言にて云へば、歐羅巴をその野蠻時代から救つたものは、亞細亞の犧牲と努力とが主だ。この亞細亞の支配は紀元千七百年まで續いてゐたものだ。亞細亞は即ち、今やその最後の段階にまで到達したので、滅亡が初まり、特に最近五十年間に於て、全然その活力を失つて形骸となつてしまつた。

が一九〇四―五年に、日本がロシアに打ち勝つたといふことは、亞細亞の再生であつた。そして今日のケマル・パシヤの勝利は、又た曾ての名譽あり光榮ある地位と世界の指導權とを、亞細亞が挽回する第一の階梯なのだ。けれど白人とは違ひ、亞細亞は決して、その權力と指導權とを濫用することなしに、人類の幸福の增進と、そして不正と暴力に基礎をおくものでなく、萬人の正義と權利とに基礎をおく本當の平和を確立するために、そを利用するであらう。

文藝に就ての雜感

武者小路實篤

○

作物は要するに作者の心の動きを知らせるものである。作者の心が安價に切り動いてゐない時は、作物は安價なもの切り生れない。だから作者が眞劍なものを書かうとする時には、作者の心を眞劍に動かしてくれる材料にぶつかることが必要である。だから大概の作者はその人獨特の材料をあつかう。その時、作者の心が一番強く、深かく、微妙に動いてくれるのである。その著しい例としてストリントベルヒをあげることが出來る。彼のかく男女の關係や、離緣した妻のもとにある娘のことをかく時、彼の心は一番強く動いてくれるのである。だから彼は好んでさう云ふものをかく、苦しんでかくと云つた方がいゝかも知れない。ともかくそれをかく時、ストリンドベルヒは一番ぬけ目なく、一番深かく強く、眞劍になり、血みどろになつて作をかくことが出來るのである。

○

セザンヌの靜物に價値があるのは、セザンヌにとつては靜物をかくことによつて、自分のあらはしたい美、神秘、心がしつくりあらはせられるからである。かつちりした構圖、物と物との關係、色と色とのもつれあい、及び對立が、セザンヌの心の確實さと、深さと氣質の純粹と、神秘と、趣味以上の趣味の高貴とを語つてゐるからである。

自分の心を本當に動かさずに、他人の心を動かすことは出來ない。自分が無邪氣になり切れ、赤子の心になり切れ、そしてたのしんで畫がかければ、或は作が出來れば、それは又他人の心を赤子にし、純粹なたのしみを與へることが出來るだらう。

しかし意識してかいたものは遂に相手を意識的に動かす以上に出られない。

うまく書かうと努力されたものはうまいと云ふ感じを人に與へうる。うまくかけると云ふことにはそれ相應の苦心とよろこびのあるものだ。それは相手にわかる。しかし要するに作者の心の動き切り通じない。

ましてそのかいた人の心が不十分に切り動かなかつたり、一面的であつたり、考へ方が足りなかつたり、趣味の賤しさ、不十分さが出たりしてはたまらない。

作者は何處までも本當に自ら心を動かしてなるべく高價に自分の心を動かして作をすべきである。

作者の心が微妙に働かない時に、どうして微妙な作が出來やう。

○

ダンセニーの作品は眞實性の不足な所があるが、作者のかく時のよろこび方に大きな時と、高尚な處がある。そして貴さがある。

だから賴りになる作品とはちがうが、たのしむことは出來る。そしてそのたのしみは、純粹にくる。

○

マーテルリンクになるともつとかく動機は深かくなる、彼は人生を肯定したいために、人間に生れたことを人間の心

で肯定したいために心を勞してゐる。そしてその戰ひで得た結果を最も客觀的に、純粹に書からうとしてゐる。彼にとつての最大の敵は死である。彼は之に勝ちたがつてゐる。昔はそれをあきらめたがつた。しかしその後彼はそれに打ちかたうとした。

彼は死に打ちかつ不滅なものをしつかとつかみたく思つてゐる。その問題が彼の全心を奪つてゐる。だからさう云ふものをかく時、彼は眞劍になれる。

○

眞劍になれる材料をあつかふことが大事だ。自分の全心をぬけ目なく充實して生かし、その人の持つてゐるあらゆる智慧と智識と感情と慾望と實感でものゝ眞を見、或は感じ、それを具體的に現はすことが創作家のよろこびだ。それが出來た時、創作家は自分の使命を果したことをよろこぶ。そしてその創作を他日よみなほした時、自分の全心が十分に動いてくれることが必要だ。

○

いくら如實にかけ、或はうまくかけてゐても、かくものゝ心の動き方が淺く、作者がのり氣なくかいたものは、讀んで心細い氣がする。心がよむことで充實させるわけにはゆかないから。

○

しかしいくら眞劍にかき、心を充實させてかいても、その眞劍さや、充實さが下らなければ仕方がない。それは作者の心の小さいことを示すにすぎない時がある。さう云ふ作品の下らないのは云ふまでもないことである。又いくら作者が力んでもその力が作品の外に半分以上あふれ出てゐたらその作品は面白くないものになる。作者の心の動きが深かく

強く、微妙でそれがすなほに作品にあらはすことが出來る時、その作品はものになる。

○

だから表現の骨をのみこまない内はいくら素質のいゝ人もいゝ作品をかくことは出來ない。又いくら素質のいゝ人でも半眠狀態の時にかいたのではものにならない、心を動かさずにはものにならない、又いくら心を動かしても、それが作品にすなほにそゝぎこまれなければものにならない。いくら又作品にそゝぎこまれても作者の素質が研かれず、又貧弱ではものにならない。

○

作者の心の動かし方があらはれるのだから、作者は心を十分に動かすことの出來る材料を見つけなければならない。作品の價値をきめるのは作者がそれをかいた時の心の動かし方の强弱、眞僞、純不純、公平か偏狹か、廣いか狹いか、深いか淺いか、緻密か粗雜か、それ等できまるのである。作者の心の動き方に拔け目があつては駄目にきまつてゐる、又無良心であつたり、ものゝ眞を見ぬく力が不足してゐたりしたら、それは作者の恥である。

○

日本の作家はまだ若いのだから、之から眞價のあらはれる仕事をしてゆくであらう。今迄の仕事で價値をきめるのは失禮であらう。各自が内心の要求で、自己の藝術的良心をいやが上に滿足さしてゆけば、どん〳〵こわれるものはこわれて道は自づと開けてゆき、本當に個性のあらはれた完成品が生れるやうになるであらう。

さうなればその作品は世界の藝園の何處かに永遠の花を咲かせて、訪れる人をよろこばすであらう。どんな小さい、或はどんな色彩をもつ花にしろ、それが自然であり、眞實であり、個性がすなほに顯はれてゐれば、その美は見る人の

心を美しくするであらう。

○

文學は獨りのみこみをよろこばない。萬人の心に響き、又理解されることをよろこぶ。それには眞實でなければならない、虛僞や、空虛のいけないのはわかり切つてゐる。しかし文學は日常生活の記錄ではない、新聞記事ではない。事實の報導ではない、心の動きである。心をしつかり動かすために、事實をかく方がよければ事實をかく、しかし心が停滯しなければならないやうな事實はかいてはならない。創作と云ふものは事實を模寫するものでないことはわかつてゐる。事實らしく見せる努力が創作でもないこともわかり切つてゐる。たゞ作者が事實をかく方が眞劍になれ、複雜になれ、微妙に確實に心を動かすことが出來る時、作者は事實をかく、大事なのは事實をかくことにあるのでなく、心を動かすことにあるのだ、出來るだけ高價に心を動かす點にある。

心を動かす、動かし方の爲に我等は寫實的なもの　がかきたくなつたり、想像的なものがかきたくなつたりする。それが時代的に來たり、人類的に來たりする時、クラシックの時代とか、ロマンチックの時代とか、自然派の時代とかゞ生れる。それは心を出來るだけクラシック的に動かしたい時に生れるものが、クラシックの文學であり、もつと自由をあこがれる時、ロマンチックの文學があらはれ、それでは人間ばなれがして現實を反省しないではゐられなくなつた時自然派が生れる。それらは心の要求できまるものである。それが個人的にもくるものである。自由に心を動かしたあとは、確實に心を動かしたくなつたり想像の翼をはり切らしたくなつた後、地面の上をはいまわりたくなつたりするのは心の要求である。人類、或は個人はそのどれもの心の動きによつて、自分の生命を生々させ、新鮮にさせ、充實させる我等の心は常に同一の動き方で滿足するものではない。主觀的な作者の弱點は心の動きが制限される處にある。同一主

義者が多くなるに從つて、讀者の心はそれだけでは我慢が出來なくなる。心はもつと自由に生々することを欲する。常に同一の感じを與へる傾向のある作者の群が多くなることは、その主義の短命を示すものである。新印象派とか、キュビズムとか、未來派とか云ふものは盛えると同時に滅亡することを意味する。なぜかと云ふと人間は常に心を一面的に動かされては我慢が出來なく出來てゐる。すぐ食傷するやうに出來てゐるからである。その運動が奇拔であればある程、反動は早く來る。人に強いる處が多い運動は無理がきかなくなる時、滅亡する。

表現派とか、ダヾイズムなぞも心を自由に動かしたいと云ふ要求から出てゐる間は何處か生命があるだらう。だがその心の動かし方が千變一律になつたり、支離滅裂になつたり、頭を故意に混亂させる處まで墮したら滅亡するより仕方がない。大事なのは各自が自分の心を出來るだけ深かく、大きく、強く、眞實に、自由に、微妙に、確實に動かすことである。隨勢で心を動かしたり、先入主で心を動かしたり、浮かれたり、輕い動機で心を動かしたりしては碌なものが生れないことは當然である。

しかし我等はどんな問題にも眞劍になるとは云へない。眞劍になれる材料を撰ぶことが必要だ。それにはその人にとつて眞劍にならないではいられない問題をあつかうことが必要になる。前にも云つたが、ストリンドベルヒは自分がすぐ血みどろになれる材料をもつてゐる。

彼がもし幸福な家庭に育ち、又其處に安住出來たら彼のかくものは變つたにちがいない。そして愛する娘と一緒に生活出來たら、彼の作品のあるものは地上に生れなかつたにちがいない。貧と、結婚の不幸、それは彼に血をもつてどなければかけない多くの材料を與へた。彼はその材料と無比なとつくみ方をして血みどろな一流の爭そひ方をした。そして彼はその苦しみに何度も押えつけられながら又立ち上つた。その材料をあつかう時、彼は誰もが入れたい心の動かし

方をすることが出來た。

ドストエフスキーの作品が我等の心を奪ふのはその心の動き方の驚くべき力による。彼は自分の心を最も強く動かす材料を撰んだ。そして彼の特別な驚くべき心を最も強く執念深く、感動させる方法で神に生かした。

ゲーテはまたその無比な聰明さと、透明な大海のやうな心の動かし方で我等をとらへる。

シエキスピアは無比なドラマチックな心の動かし方で、我等の心を自由にふきまくる。その自由さと大きさと復雜さと強さには驚嘆する。

彼等は自らの心を無比な動かし方で動かして創作してくれたのが我々の心に傳はるのである。

○

だからさう云ふ作品はいつも生命をもつてゐる。あはたゞしい氣持の時はぴつたり來ないかも知れない。しかし内心の要求が強くなるに從つて彼等の作品は我等の心を本當に動かしてくれる。

○

自分はすべての人間を人間にする運動には贊成である。それにもかゝはらず、日本の社會主義的文藝評論家のものをよむと、その心の動かし方に反感をもたないわけにはゆかない。彼等は人間らしく自分の心を生かすと云ふ欲望を少しももつてゐない。自分の心を生かすことには何の要求ももつてゐない。千變一律で、よんで自分の心が少しも動かない。元よりそんな人は社會主義者にならないでも下らないもの切りかけない人であらう。だからそれは社會主義のせいとは云へないかも知れない。だが自分の心を不自由にし、窮屈にする主義をもつて、自分の心を内に窒息させてゐる。人間らしさのないものをよむと、不快を感じる。そして社會主義にたいしても不快を感じないわけにはゆかなくなる。

人間らしく心を動かすことをよろこばない主義、そんな主義は閉口だ。日本には本當に人間の心をもつた、人間らしい言葉のつかへる社會主義者は居ないのか知らん。眞實や事實にたいする良心の貧弱を 言葉の粗雜でごまかし、低級な讀者を頭において千變一律な人間が物を云はずに主義が物を云つてゐるやうな文章を見ると、どうも厚意がもてない。

僕は軍バツや資本主義的な人のものを書いてゐるのを見ると隨分軍人や資本家に腹を立てるが、社會主義者のものをよむと社會主義が嫌ひになる。思想上の諸君は閉口だ。早く本當にものゝわかる、人間の心をもつた大なる社會主義者が出て來て、彼等の馬鹿さと偏狹さと、不自然さと、化石しかけた頭をはつ切りさせてくれないと社會主義は人間を人間にしない主義のやうに誤解されるだらう。

人間を人間にするための主義ではないのか。尤も彼等は馬鹿ものだけを相手にして眞理とか、人間の心とかを相手にしてゐないのだから、あんな文章が自づと生れてくるのだらう。彼等は人間に話してゐるのではなくブルジョアに話してゐるのだから。そしてプロレタリアートのために戰つてゐるのだから、動物と神樣に話してゐるので、人間のことはつい忘れてゐるのであらう。

○

今の時代では社會主義者だけが馬鹿なのではない 他になほ馬鹿が多い。なほ馬鹿を氣にするから馬鹿にわかるやう馬鹿語をつかうことについなる。自分は今の日本の文壇には隨分ブルジョア趣味に終始してゐるものゝあることを知つてゐる。しかしそれはその作者がブルジョアに屬してゐるから下らないのではなく、人間の本心を動かす力が不足してゐるからである。かゝる作家はプロレタリアートになつた處が、矢張り大した作は出來ないのだ。人間の内心の要求を感じることは出來ないのだから。

人間の心を強くもたないから、主義や、境遇がその人の心を萎縮させ、よき人の心をはがゆくさせ、人間らしくさせないのである。自分は人間の心を作品に求める。そして自分の心を強く、大きく、廣く、或は深かく、心ゆくかぎり動かしてくれ、或は反省させ、或は人間に生れたことをよろこばしてくれ、そして人類的本能を目ざましてくれるものを求める。

人間の心を人間の心らしく動かすことをよろこばないあらゆる主義に自分は反對する。自分は自分の心も、兄弟姉妹の心も同じく人間の心であることを信じ、又人間らしい心の動かし方を自由にしたがつてゐることを信じる。自分は一方そのために、又その目的のために正しき社會のくることをのぞむものである。頭の狹い人間の云ふことを聞いて頭を動かすのは閉口頓首再拜である。自分は一人立つものは強いと云ふ感じを彼等のかくものをよむ時に感じる。しかしそれは人類の意志の下に一人たつものは強いのである。

人類の意志のもとにたつものは一人でも萬人でも同じく強いものであることを自分は知つてゐる。

自分はくり返して云ふ。

自分は人間でありたい。そしてすべての人が人間であることを望むものだ。

勿論、自分はそのために、優れた人間を尊敬しやうと思ふ。本當の超人が出たら尊敬しやうとも思ふ。しかしそれは人間を高めてくれるものだからである。生甲斐、生るよろこびを與へてくれるものだからである。

遠方より友の來たるよろこびを孔子は讃美したが、本當の人間の心にふれるよろこびはそれ以上讃美すべきよろこびである。（二二、九、二八―一〇、一）

結婚生活の分裂の後に

江口渙

過去滿七年に亘る私と彼女の結婚生活は、去る六月半に起つた大爆發に依つて、私が最後の決心をしたために、どうにも出來ない程度に破壞されたのだ。そして、それ以來二人は長らく別居生活をつゞけた揚句、この九月十五日に彼女が微笑のうちに荷物をまとめて東京へ引き揚げると同時に、離婚屆が呈出されて四年越しの問題に最後の整理がついたのである。

この問題について二三日前、讀賣新聞からも眞相を明かにするために何か書けと云つて來た。然し、私は「こんな問題を原稿にするのはいやだ」と云つて拒つた。すると今日また「改造」から同じやうな要求が來た。私は迷つた。實際、こんな一個人の生活の變動について、萬年筆を動かすのは私には少しの愉快をも與へない。然し又「讀賣」の婦人欄に出た記事や、「國民」夕刊の御丁寧にも寫眞入りか何かで書き立てた三段組の記事をよむと、そのあまりくどい出鱈目にあきれるとともに、つい抗議を提出したい氣持にもなる。

「國民新聞」に依ると、私と彼女とは思想の隔りから夫婦別れをしたんださうだ。双方とも何と云ふ堂々たる態度だらう。あれを讀んだ時、私はくすぐつたかつた。彼女も、怖らく私以上にくすぐつたかつたらう。そして、私はこの記事が双方を傷けまいと殊更企てた者の小細工に依つて通信社へ屆けられた通信の轉載ではないかとさへも疑つた位だ。

双方の思想の隔り、それも山ほどある原因の隅の方の一つかも知れない。然し思想の隔り一つ位で、七年間の結婚生活を根本から破壞する人間があつたとしたら、その人間はよくよく人生を愛する事を知らないで、唯徒に自己を人生の道化役者に仕立てて愚劣な大向ふの興味を喚らうとする人間にすぎない。私はこれでもまだ自分を人生の道化役者に仕立てた覺は一度もない。第一「國民」の記事には「八月二十五日頃人を仲に入れてきれいに別れた」と書いてあるが、お相憎様私は七月二十九日から九月十一日まで行衛不明（？）の旅行をしてゐた。だから

人を仲に入れなくつたつて入れやうが無かつたぢやないか。凡ての事は悉く當事者間に於いてのみ決定されたのだ。出鱈目も休み休み書くが好い。

ここまで書いて來ると、勢ひ凡ての事を殘らず書かなければならない破目になつた。だが矢張一寸逡巡する氣持になる。然し逡巡してゐては何にも云へない。唯、フランクに云ふより外に途がない。

私と彼女とは、結婚生活は双方の性格の相違、否、性格が持つてゐる缺點の極度の相違のために徹頭徹尾不幸な結果に終つたのだ、そして、結局私にも彼女にも同じ程度に氣の毒なものにならざるを得なかつたのだ。一體、結婚生活に於いては、双方の性格の好い方面がどんなに違つてゐやうとも、それに却つて好い調和を引き起す事はあつても、大抵の場合大した不幸を産み出すものではない。ところが缺點の方面があまりに甚しく相違してゐると、何時かは救はれ難い破産に陷るものらしい。

私と彼女との場合がまさにさうであつた。然かもその缺點と云ふのは双方とも子供の時の家庭生活に依つて、何時か知らぬ間に各々の生活の根に隨分色濃く染めつけられたものらしい、そして、それが滿七年間の家庭生活にさへも大きな禍を持ち來して、何時か双方の感情を、又、神經を極度に傷け合つて行つたのだ。その結果、とうとう家庭を破壞するより外に、どつちも救はれる途がないまでになつて終つた。さう思ふと實際怖ろしい氣持がする。

その缺點と云ふのはかうだ。先づ私の方からが云はう。私の父は死んだ森鷗外氏と同期の陸軍一等軍醫正だ。だからその頃の古い軍人氣質とでも云ふ可き一種の性癖を持つてゐた。つまり妻子を省る事に軍人として恥ぢると心得てゐる性癖だ。その上妻子に對して極端な家長權を振り舞はしたし、又その振り舞はし方が人一倍峻烈だつた。お蔭で家庭には絶えず險惡な風雲にばかり閉されてゐた。

殊に父は私をきらつてゐた。從つて私も父をきらひだつた。なにしろ父が可怖つて可怖つて、無闇におどおどしながら育つて來た。然かも父は有らゆる生活、有ゆる行動に極度に干渉し、かつ顏を見る度に私を罵る事を忘れなかつた位だ。今から考へれば父は何も全然愛情がなかつたわけでもあるまいが。殊に私が文學書類を耽讀するやうになつてからは尚更それがひどかつた。

そのうちに私はかう云ふ家庭に自分を生かして行く必要上、

特殊の戰術を案出した。つまり孤獨の城に立て籠ると云ふ戰術だ、然かも一面變に強いくせに一面變に弱い處のある私は、徹底的にこの孤壘を守るだけの力はなかつた。そして父が私のこの最後の城をも踏み潰さうとすると或る場合私はこちらから門を開いて敢然と逆襲を企てたものだ。それが尚更父を怒らせた。然かも一方に於いて悪い事に私は時としてはこの孤獨の城に立て籠る安易さを、心私かに享樂する感じさへあつた。

同時に父の親權の振り舞し方がひどければひどい程、何時か私は干渉慾、乃至支配慾に對する根強い反抗心、否、時には病的と思はれるほどの反抗心を養つて終つた。この支配慾に對する反抗心は、後年私に無政府主義的傾向を生ぜしめる萠芽になつたものらしい。

結婚生活に依つて私は自分をこの孤獨の城からそれとも救はうと企てた。事實、私は自分でも十分この孤獨癖を持て餘してゐたからだ。ところが結婚後日月を重ねるまゝに、彼女が干渉慾、支配慾の以外に強い、むしろ病的に強い女である事が解つた時私は何時か次第次第に再び孤獨の城に立ち返つて終つた。然かも尚私は自分の城を徹底的に守るだけの強さはなかつた。積りに積る不愉快さが何時か堪らない程度に達すると、矢張、私の方から城門を開いて猛然と逆襲した。だから時には意外に小さな事件を動機として、私の怒が轟然と爆發するので彼女から見れば思ひもよらない事で思ひもよらない程怒られると云ふ感じを抱かせられたらしい。つまり孤獨の城に立て籠つて有ゆる不愉快を殺さうと努めながら、結局ほんとうに殺し切れずにそのまゝ貯蓄するのが私の悪い處だ。こんな事も二人の間に再び埋める事の出來ない溝を造つた一因の一つである。

さて、こんどは彼の女の假の缺點に就いて述べやう。それも矢張彼女の子供の時の生活により多くその萠芽を持つてゐた。

彼女の父はある田舍の大きな煉瓦工場の工場主だつた。今はもう故人になつたが、實に溫厚な玉の如き人だつた。亡くなつた母も亦、一面隨分勝ち氣な處もあつたが、他面には脆すぎる位涙もろい優しさを持つた人だつた。そして、二人は九人の子供達を殆ど溺愛に近い程度まで深く愛した。現に彼女は父親には生涯にたつた一度、小學時代に叱られた事があるだけだと好く話してゐたのでも好く解る。そして、子供達の有ゆる我儘を許し、又、許す事を樂しんだらしい。

こんな話がある。彼女の一番上の兄が子供の時お祖母さんと一緒に淺草の仲店へ玩具を買ひに行つた。どの玩具屋でもどれもこれも氣に入る玩具がなくつて、「あれもいや」「これもいや」—

とさんざ駄々をこねた揚句、屋根に乘つてゐた看板の大きな鯛を見附けて是非ともあれを買へとせがんだ。そして、とうとうそれを買つて貰つて俥に積んで歸つたと云ふのだ。この話だけでも、如何に子供の無法な我儘が許されたかと云ふ事が解る。

その頃の彼女は兩親とともに工場の中の大きな邸宅に住んでゐたらしい。從つて物質的にも餘程豐富な生活をしてゐたらしい。その一方、工場のあつた村や、彼女が通つてゐた村の小學校は、殆ど工場のために存在してゐたも同樣だつたし、その小學校には工場の職工の子弟が大勢通つてゐた。そのため工場の中はもとより村でも村の小學校でも、校長や先生を始めとして大勢の生徒達は、何時も彼女に「小さき女王」の如く振舞ふ特權を許してゐたものらしい。その結果、何時か彼女の性格の中には人に對して何等かの優越感を持たなければ承知の出來ない傾向や、又、自分の思ふ事は飽くまで通さなければ止まない性癖を生じたらしい。これが彼女の生涯に本質的な禍を生むに到らうとは、當時の田舍小學校のボンクラ教師どもの頭では、到底思ひ及ばなかつた事だらう。

やがて彼女が女學校へ入つて間もなく、父が永患の床についたので止むなく工場から身を引いて一家を擧げて東京へ移つてからは、殊に工場が燒けてからは、家運は段々傾いて來た。その上、長兄の恣な不身持と沒常識な橫暴のために母や弟妹が無性に苦しめられ出してからは、彼女は何時か他人に對して極めて根强い反抗心を養ふやうになつたらしい。「他人に負けたくない」「少しでも莫迦にされたくない」「寸時も他人の蔭に立ちたくない」こんな氣持が不斷に彼女の根を張つた。人一倍勝ち氣な女としては、それも實際尤もだつたらう。

ところがその「飽くまで負けたくない」氣持と、「自分の思ふ事を何處までも通さなければ承知の出來ない」氣性とが、遂に私と彼女との結婚生の根帶をも破壞するに到つたのは、まことに痛ましい事と云はなければならない。

結婚後三ケ月を彼女は私の兩親の家で送つた。そして、二人は春になつて始めて東京に家を持つた。その一週間目位の事だつた。彼女は結婚したら勉强すると云つてゐたので、私は何の氣なしに「英語を教へてやらうか」と云つた。すると彼女は「いりません」と云つて手嚴しく彈ねつけた、私は怒つた。然かも彈ねつけて置きながら、後を向いて押入れへ顏を隱して泣いたさうだ。（これは別れる時、彼女が話した思ひ出の一つだが）つまり私から英語を教へられる事が、彼女のなみ外れて强い自尊を傷けたのだ。然かも嚴しくはねつけたものの、流石に私に氣

の涙になつて泣いたのださうだ。

又、こんな事もある。結婚後間もなく二人は上野へ何かの展覧會を見に行つた。彼女の言葉に依ると、その時私が賞める畫は何故か彼女にも好く思はれるし、又、私がけなす畫は矢張何故か悪く見える。然かもそれが理由なしにさうなるのださうだ。そして、彼女はつくづく考へたといふのだ。

「結婚前には凡てに對して自分自身の判斷を持つてゐた。それでどうしてから無くなつて行くのだらう。つまり自己と云ふものが、夫の自己の中へ消えて行くのではないかしら。これでは仕方がない。是非とも自己を取り返さなければいけない」

かう思つた彼女は、その後有ゆる場合に極力自己を取り返す可く努力したのださうだ。然かもその「自己回復」の態度と方法とが、あまりに峻烈であつたために、好く私を怒らせたものだ。それが月を重ね歳を經るに從つて、單に自己を回復するとか、自己を樹立するとかと云ふ程度に止らずして、更に、進んで、私の云ふ事、爲す事の悉くに極力反對するやうになつて終つた。然かも、私は又私で理由なく反對されゝばされるほど益々強く出ないわけには行かなかつた。かてゝ加へて、子供の時に培はれた彼女の極度な我儘と「我を通さうとする心」とが再び復活して來たのだから堪らない。慘憺たる夫婦喧嘩が殆ど三日置きにはきまつて繰り返へされた。喧嘩になると彼女も私も一歩も引かない。そして、何度も何十度も何百度も、皿が壞れ、本が飛び壁にはいたましい穴が開いた。

彼女は實際、殆ど有ゆる場合私の意見に反對したと云つて好い。然かも、それが私に對してのみ反對するのだ。私が右と云へば左と云ふのだ。左と云へば必ず右と云ふのだ。然かも、さうしてお互に極力いがみ合つてゐる處へ第三者が入つて來て私の意見に贊成すると、彼女は今までの凡てをけろりと忘れて私と同じその意見に從ふのだ。その事が好く私を怒らせたものだ。

やがてそれが年とともに更に烈しくなつて行つて、お仕舞には私の顔さへ見れば理由なしに突つかかつた程だ。私のゐない留守には非常に私の歸りが待たれると云ふのに、一度私の顔を見ると、もうつんけんせずにはゐなかつた。文句を云つた。突つ懸つた。何故か彼女はさうせずにはゐられないのださうだ。然かも何故さうせずにはゐられないのか、彼女自身にも全く理由が解らなさうだ。これは恐らく彼女の省察力では手の屆かない心の奥の奥に、何か私に對する本質的な不滿があつたのではあるまいか。

そんな次第で私に相談を持ちかけては好く私を苦しませた。

右にしやうかと云ふから私も好いと思つてさうしろと答へると、左が好さゝうだと云ふのだ。ぢや左にしろと云ふと、こんどは又右が好いと云ふのだ。例へば雨傘だ。曇り日に外出する時、好く私を玄關へ呼んで「降りさうだが傘をどうしやう」と訊くのだ。「降りさうなら持つて行け」と云ふと「邪魔だ」と云ふのだ。「邪魔なら置いて行け」と云ふと「降つたらどうする」と云ふのだ。「心配なら持つて行け」と答へると又々「邪魔だ」と云ふのだ。とどのつまり私は「おれは氣象臺でないから天氣の事は解らない」と答へる外に途が無かつた。

それが單に雨傘だけの問題ではない。日常生活の小さな出來事の凡てに亘つてさうだつた。そして私は何時も唯徒らに「おれには解らない、解らない」と答へる以外に手段がなくなつた。何と答へたつて私の答へでは到底彼女の氣に入らなかつたからだ。それが尙更彼女を焦立たせたのは云ふまでもない。不親切だと云つて好く私を責めたものだ。

四五年前から彼女は何かにつけて傲岡々々と文句を列べるくせがついた。絶えず云ひたい限りの不平を口にした。物質的な不平をも、亦、精神的な不平をも。結婚後三年四年の頃、恰度私の小說が賣れ出した際には、私は彼女に出來るだけ着物なども買つてやつた。ところがそのうち、私はひどい神經衰弱にかかつて原稿がかけなくなつた。收入が減つた、と云ふよりも殆えなくなつた。居候が殖えた。生活がだゝびろく擴がつた。物價が騰つた。臺所が苦しくなつた。着物が買つてやれなくなつた。一緒に行くと約束した旅行にさへもつれて行けない。その結果、彼女の不平不滿はいよいよ烈しくなつて行くばかりであつた。そして、ますます私に喰つて懸つては、私の執筆の邪魔をした。邪魔をされて物が書けないと、忽ち收入が減る。收入が減ると尙更彼女の不平が殖える。喧嘩がいよいよ烈しくなる。かうして私の神經衰弱は鼠算のやうな勢で、ますます增進して行くばかりであつた。

物質上の苦痛を訴へるのも、女としては無理のない事かも知れない。唯、彼女に於いてはそれが又あまりにひどすぎたやうだ。然しこれも自己克服の力を全然欠いてゐる彼女としては、又無理もない事かも知れない。然し、私だつて何もしやうとしなかつた譯ではない。唯、出來なかつたのだ。さう思ふと、彼女にも氣の毒になるが、又、當時の私自身にも同じ程度に於いて矢張氣の毒にならざるを得ない。

その裡に、私と彼女との間に於いて、人生に對する、否、むしろ家庭生活に對する看方、考へ方の根本的に相違が發見され

た。

それはかうだ。彼女の考に依れば「妻と云ふものは夫の全生活の中で、最高の又最大の位置を占む可きものだと云ふのだ。その考へ方から推して行くと、第一私が小説を書く事が既に怪しからんと云ふのだ。そのわけは小説をかいてゐる間私は、寢ても覺めても小説に沒頭してゐて、妻の事などは全然忘却してゐると云ふのだ。私も何も忘却しやうとするわけではないが、執筆中は自然創作に心を奪はれて夢中になるから、返事もろくろくしなくなるのは止むを得ない。それが氣に入らないのだ。

その上、私は内心妻よりも創作の方を重大視し、かつ大切にしてゐると云ふのだ。社會主義運動も矢張それと同じ理由で怪しからんと云ふのだ。苟しくも妻をほんとうに愛するならば、家に待つてゐる妻を忘れて檢束されたり、或は牢屋へ行くかも知れない危險を冒し得可き筈はないと云ふのだ。かつ又、心から妻を愛する夫ならば、妻のためにその全生命を注ぎ、全精力を傾け、全生涯を捧ぐ可きもの、否、むしろその全生活を犧牲に供す可きものだと云ふのだ。

私は「そんな事はいやだ」と答へた。そして、彼女に對する愛情と、小説の創作と社會主義運動とは相並行し得るものであつて、決して互に抵觸す可きものでないと主張したその上、妻が如何に夫の愛情を強要し得る權利があるとしても、私の大切な仕事、小説の創作と社會運動をまでも捨てさせやうとするのは、彼女の不當なイゴイズムから出發してゐる不當な要求、無法な支配であると云つてはねつけた。それが彼女の氣に入らなかつたのは云ふまでもない。そのため彼女は小説家兼社會主義者の夫を持つた事をつくづく後悔すると好く怒つたものだ。そして、私が何かの運動に出懸けやうとした時、暴力をもつて妨げた事さへある。

然し、社會主義運動に携るのは怪しからんと云つて私を責めた彼女の言葉は、私と別れた後の彼女が現在營みつゝある新しい生活に依つて、彼女自身ものの見事に裏切つた事を彼女のために惜まないわけには行かない。そして今となつて見るとその言葉は、彼女が私を唯苦しめんがために苦しめる必要上、案出した無理難題だと曲解されても仕方がない感じさへある。

それはまあ好いとして、とにかく彼女は自ら家庭に於ける女王となつて、私に騎士の役目を演じさせなければ承知が出來なかつたらしい。然し私は幸か不幸か騎士ではなくして、唯の夫にすぎなかつたのだ。

彼女が私との結婚を後悔したもう一つの理由がある。

彼女は結婚前から少女雜誌に少女小説を書いてゐた。結婚後には更に少女對話を書いたり童話を書いたりした。そして、段々方々が原稿を頼まれるやうになり、仕舞には可なり多くの依頼をさへ受けるやうになつた。その結果、少女對話集と童話集との出版をも見るに到つたのだ。

事實、私は「赤い鳥」に一回頼んだきり、七年間彼女の原稿の世話は一度もしなかつた。又、私に自分の原稿の世話をして貰ふ事を彼女は非常にきらつてゐた。私に手數をかけるが氣の毒でもあつたらうか、同時に自分の地位は自分一個の力で獲得して行きたいと云ふのが彼女の願ひであつた。これも人一倍勝氣な彼女としては尤もな事だ。その原稿さへ最初二三度私に字句の訂正などを相談した以外、今日までついに一度も見せなかつた。又、私も變に私が彼女の文章などを手に入れて木に竹をついだやうにする事を怖れて手をつけなかつた。彼女も亦欲しなかつた。これは双方とも正しい考へ方だといまだに思つてゐる。

だが、單にそれだけならまだ問題はなかつたのだ。そのうちに私の原稿が賣れ出す。私の名前が方々の新聞雜誌に出る。そして、同時に私の妻である彼女が又童話や少女小説を書いてゐると云ふ事が知れ亘つた。

その頃から彼女は好く不平を云ひ出した。自分は自分の力で原稿を書き、又、自分の力で自分の位置を獲得してゐるのに、世間からは江口渙の妻であるが故に原稿が賣れる。或は江口渙が世話をするから原稿が賣れると誤解されてゐるらしいのは心外だ。少くとも自分の努力が、自分の名が、何時も江口渙の名の蔭に隱され勝ちなのは、實にいやだ。一層の事、全部匿名で書からかしら」こんな意味の事を好く口にしては、ものを書く男の細君となつた事をつくづく後悔すると云つてゐた。これも人一倍勝氣な彼女としては矢張尤もな考へだらう。

現にかつて南部修太郎君が、「時事新報」へ「江口渙論」をかいた事がある。その時私の寫眞の下へ彼女の寫眞も出た。そして、御丁寧にも童話作家と銘を打つてあつた。それを見た時、「まるであなたのお蔭で私の寫眞を新聞へ載せて貰つたやうなものだ」と云つて、ほんとうに泣いて口惜しがつた。そんな事から、尚更彼女は世間的に私の蔭に隱される事が一層不愉快になつたらしい。

去年の九月、「スパルタカス團宣言事件」で曉民會一派の社會主義者と一緒に高津たよ子さんが警視廳へ引つ張られた時、彼女は堺眞柄さんと一緒に差入れに行つた。その事が誤り傳へられて翌日の「讀賣新聞」に大きな標題で「江口渙氏夫人も召喚」

と出たものだ。その時も彼女は「何故江口千代と書かないんだ。これではまるであなたの附屬物扱ひだ」と云つて憤慨してゐた。つまり如何なる場合でも「渙氏夫人」である事よりも、一個の「千代子」である事を心から望んでゐたのだ。極度に自己を重んじる事しか考へない彼女としては、これも尤もな事かも知れない。

この點に於いて私とキッぱり別れた現在の彼女は、さぞかしせいせいした氣持でもつて童話を書き、人を訪れ、往來を歩く事が出來るだらうと思はれてならない。

私と彼女との家庭生活に愛情の最初の溝を造つた上に、ひいては實際生活の上にも大きな影響をもたらした一つの事件がある。

その話を手短かに話さう。私には彼女との結婚以前に脆くも壞れた一つの戀愛があつた。對象は私の舊い友人の妹であつた。そして、その人に對して私は事實前後一年の間に十度以上會ふ機會を持たなかつた。會つてもろくろく物さへも云へなかつた。にも係らずその人の面影は、何時か私の心の奥にほのかな花となつて匂つたのである。

まことにその想愛は當時の私にとつて一つの單純な敍情詩だつた。そして、脆くも壞れた後になつてもその敍情詩の追憶は恰も春の曙の淡い靄に包まれて匂ふ花を見るやうな、ほのかに果敢なく美しいものであつた。最後に兩國の驛でその人の兄を見送つた時に一寸顏を合はせただけで、もう十年近くも再び相見る機會がない。今ではその消息さへも全く知らない。そのせいか（現在に於いてはその敍情詩も强いて思ひ起さうと努めてさへ、はつきり思ひ起し得ない位、跡形もなく消えては行つたが）

やがて彼女と結婚する事にきまつた時、私は略私の過去の出來事の凡てを話した。だがその敍情詩だけは、一寸出すのが惜しかつたので、そつと心の奥へ隱して置いた。その事は確かに私が惡かつたといまでも思つてゐる。

たしか結婚後二年ほどたつた或る日だつた。京都から高等學校時代の友人が來て私の家へ泊つた。夜、その友人と床を並べて曉方近くまで話した時に、話が自然昔譚に入つて行つた。その頃私の家庭はもう隨分烈しい喧嘩がつゞいてゐたので、私は不圖その敍情詩を思ひ出した。そして友人に、實はその人ともう少しで結婚する筈でもあつたし。又、自分もしたかつたのだと云つた。その上止せば好いのに「ほんとう云へばおれは面長の脊の高い女が好きなのだ。だから彼女の圓顏で脊の低い處

がどうもいやだ」などと餘計な口まで辷らせたのだ。

ところが意外にも彼女は隣の部屋で眼をさまして、すつかりそれを聞いてゐたから堪らない。次の日私に心から泣いて怒つた。實際、その樣の彼女は見る見る身も心も切られるやうな思がしたらう。第一、凡てを話したと云つたくせに叙情詩だけをそつと隱してゐたことを責めた。その上、その人は矢張彼女と同じ少女雜誌にものを書いてゐた關係上、間接に知つてゐる點で尚更いやだと云つて泣いた。殊に彼女の閲歴や作の事は結婚前から知つてゐる癖に何故結婚した後で非難すると云つて眞劍に怒つた。そして、どうしても出て行くと云つた。

その時は、私も流石に惡かつたと思つたから、心の底からあやまつた。そして、何度も何度もあやまつた結果、とにかくその場は收つた。だが收まらないのは彼女の心だ。それから二人の間に大きな溝が出來たのである。

ところが、たしか四年前だ。その溝も何時か忘却の草に埋もれかけた時、又、私が不用意に堀り返した。それは、「福岡日日新聞」から長編小説を賴まれた時だ。題材の選擇に迷つた揚句、「南風」と云ふ題をつけて伊豆大嶋の一と夏の生活を死んだ素木しづ子と或る文科大學生と上野山清貢とを中心にして描かうとした。それも、まだ記憶の消えなかつたその叙情詩をからませて、處々の楔にしやうと企てたのだ。

ところが三十回ほど書いた頃に、彼女がそれを發見した。そして、又更めて心から怒つた。否、唯に怒つただけではない。私が叙情詩と何の關係もない部分を書いてゐる時でももう絶對に中止してくれ直ぐ止してくれと責め立てた。そして、机を占領し、インキや萬年筆や原稿紙をさへ隱して、不斷に頑強に妨害した。

「創作だからこれだけは許して呉れろ」と如何に理を盡して賴んでもきかない。

第一、こんな事を少しでも書くのは彼女に對する許され難い侮蔑だと云ふのだ。又「この小說が世間へ出ると、世間では貴方の過去にさう云ふ事件があつたものと必ず信じる。そして、さう云ふ過去を持つた男と結婚してゐると云ふ點で、自分は必ず輕蔑される。さう思ふと堪らない。中止しなければ斷じて離婚を請求する」と云ふのだ。そして、以前の事をも蒸し返して極度に私を責めた。

その爭は猛烈に二週間つゞいた。彼女の考方が如何にひがみすぎてゐるか、又、叙情詩が小說の本筋と大した關係がないのだと云ふ事を、私は每日言葉を盡して說いたけども、遂に頭としてきかなかつた。私としては、此のまゝ中止しては第一「福

「國日日新聞社」に申し譯が立たない。次には、それは私にとつて最初の長編小說の試みだつたから實に惜しかつた。その上、止せば經濟上にも大きな損失が來る「離婚か。長編小說か」私は心から迷ひに迷つた。

だが、「止してくれさへすれば、今までの悪い性質は全部改めもするし、又、今後どんな努力をしても貴方のために盡す」と、何度も何度も泣いて誓つた彼女の言葉を信じて、遂に私は執筆を放棄した。そして、新聞社へは病氣のためと云ふ嘘さへもついた。彼女の云ふ處も人一倍勝ち氣な性質としては、尤もだと思つたからだ。まさか長編小說一篇のために、離婚も出來なかつたし、その上、このために彼女のそれまでのひどい我儘や不快な反抗がなをつてくれればむしろ幸だとさへも思つたからだ。

だが、私は莫迦だつた。一週間經つか經たないうちに。彼女は又何時か以前の彼女に返つてゐた。そして、極度の我儘や不法な反抗は依然としてつゞいた。つまり「南風」を放棄しただけが私の損になつたのであつた。そして、こんどは私の側から彼女に對して大きな溝が出來て終つた。

ところが一年の後に同じやうな事件が起つて。私は彼女から戀愛小說の全部を封じられて終つたのだ。去年の二月の「婦人公論」に書いた「避暑の戀」と云ふのがそれだ。あの小說は事實の背景などは全然ない。唯、昔の「叙情詩」から思ひついて、ああ云ふ主題(テーマ)をこしらへああ云ふシーンを空想で捏ね上げたものにすぎない。ところが、明朝の九時が最後の閉め切りと云ふ前夜になつて、彼女が私の机の上に積み重ねられた原稿の後半を讀んだのだ。そして、違約だと云つて猛烈に私を詰つた。然かも私が條理を盡して辯明すればするほど彼女の怒は燃え上つて、とうとう原稿を裂いて終つた。明日が閉め切り。……私は泣くに泣かれぬ破目に陷つた。殊に前半はもう印刷所へ廻してどんどん組んでゐたから。で、止むなく私は彼女をすかしなだめて寢かせた後で、そつと原稿の破れを集めて朝まで無我夢中で矢鱈無精に筆を飛ばせて、然かも彼女の怒に少しでもふれないやうに主題まで幾分更へたりして、とにかく四十枚書き上げたものだ。然かも、二月號の「婦人公論」が届いた時に、彼女は雜誌を寸斷して叩きつけた。

それ以來私は有ゆる戀愛小說の執筆を封じられて終つた。如何なる戀愛小說でも、苟しくも戀愛が描かれる限り、世間では必ずどれも私の過去の體驗であると考へるにちがいないから、いけないと云ふのだ。戀愛小說の全部を封じられる事は、實際、私には苦痛だつた。創作欲の滿足の點からも、又、題材缺乏の

點からも、更に家庭經濟の點からも。でも、そのために家庭を破壊するのはちとひどすぎると思つたから、矢張、私は讓歩しつゞけた。

この春、陽氣の加減か如何した風の吹き廻はしか、私は不圖又戀愛小說がかきたくなつた。で、その事を一寸口に出したら、まもなく彼女の鐵槌を喰らつた。その時はもうつくづくといやになつた。これでは生涯戀愛小說はかけつこないと本氣に考へるやうになつたのもその時からだ。

結婚の當初、私はひたすら彼女を感化しやうともした。又、凡ての點で私と相等しき高さに引き上げやうとも努めた。だがその有ゆる苦心は悉く彼女の反撥する處となつたにすぎなかつた。さう云ふ時の彼女の强情があまりに極端であつたゝめ、癇癪持の私は遂に暴力をさへも用いるに到つた。隨分、撲つたり物をぶつけたりした。そのため時々彼女に生傷さへ造つた。

だが、その度に彼女は頑强に抵抗した。決して敗けてはゐなかつた。果ては私が撲てば撲ち返へし、蹴れば蹴返へすやうにもなつた。その結果、私は彼女に對して暴力は何の効能もないだけではなく、却つて惡い結果を生むにすぎないと云ふ事がやつと解つた。そして、私は何時か次第にそれを引つ込めて終つたが、彼女は最後まで私を暴力で苦しめた。然かも私が默つてそれを受けてゐればゐるで、彼女は又徒らに焦立つた。そして結果は同じやうに惡かつた。賀川豐彦君の有名なる無抵抗主義はかう云ふ際に於いてさへ、矢張一文の價値もないものだと云ふ事を私は骨にしみる程痛感した。

私は後の方では隨分彼女に讓つた。然し、讓れば讓るほど彼女は平然として前進して來た。その揚句有ゆる場合私を支配し、私の生活に極度に干渉し出した。さうなると私も强情だ。頑として撥ね返した。

だが「福岡日日」の事があり、更に「婦人公論」の事があつてからは、私は段々彼女から離れ出した。もう彼女との有ゆる接觸に勞れ果てたのだ。暴力でも到底勝つ見込がない。口でも矢張駄目だ。いくら說き伏せやうとしても、苦茶な理屈を並べて押し返すからだ。その結果、凡てを諦めた私はとうとう子供時代に築き上げた「孤獨の城」へ再び新しく立て籠つて仕舞つた。然し、それでもあまりに不愉快に攻め立てられると、矢張時々不意に城門を開いて猛然と逆襲した。それが尙更二人の間を遠くしたのは云ふまでもない。

孤獨に返るやうになつてからは、實際私は眼に見えて冷淡になつた。そして、大抵の事は「うん。よし。うん。よし」で通

さして終つた。こころが極度な神經質の割に案外鈍感な一面を持つてゐる彼女は、凡てそれを私の是認と感違ひしたらしい。そして、いよいよ盛に振舞つた。それが尚更私に惡かつた。

だが流石に愛情の消滅した事だけは、彼女も感じずにはゐなかつた。そのため彼女は絶えず焦立つた。そして、それを取り返へす可く隨分努力したらしい。然し、その努力も結局、努力しかけては何時も反撥の形、抵抗の形でもつて現はすにすぎなかつた。それが尚更二人の心を遠くして終つたのは、まことに止むを得ない次第であつた。そして、私の愛情はいよいよ消えて行くばかりだつた

彼女が愛人が欲しいと頻りに云ひ始めたのもこの頃からだ。別れ話が眞面目に取り扱はれかけたのも、矢張、この頃からだ。そしてこの春になつてからは、彼女は屢々「別れるか。二人の心持をもう一度築き出すか。眞面目に相談したい」と親身になつて云ひ出した。だが、流石に二人ともその問題に本氣で手を觸れる事を一寸怖れた。何故なら一寸でも手を觸れば苦もなく家庭が壊れる事が知れ切つてゐたからだ。殊に私には經濟問題が分裂後の二人の間に、一番重大な問題として殘る事が解つてゐたから、健康が十分回復して原稿が自由に書けるやうになるまでこのままにして置かうかとも考へてゐた。

その裡、何時か同居で別居の生活が始つた。つまり彼女も私も別々の部屋に立て籠つて、晝夜を分たず頑として相對峙するやうにさへもなつて行つた。かうなつては夫婦の生活も最後の最後だ。その結果、六月中旬にほんの小さな事件が動機となつて、底の底から徹底的な爆發を見るに到つたのは、けだし止むを得ざる自然の勢であつたらう。

だが、彼女も流石に女た。最後の大爆發の後で、一度はすつかり「我」を折つた。そして、「どうか後半年試みに同棲生活をつゞけてくれないか。それでも駄目なら潔く別れる」とさへ云つた。だが、彼女の凡てに絶望し切つた私は、もう殘酷なほど頑として應じなかつた。それまで幾度も幾十度も繰り返されたやうに彼女との妥協は一週間と續く見込がなかつたからだ。その時分裂後の彼女の生活の保證や、彼女が重に仕送りして私が時々補助した彼女の弟の學資の事なども相談された。そして、彼女はもう一度考へ直して見ると云つて六月下旬その相談のために泉州岸和田にゐる親い友人の處に行つた。

ところがろくろく相談も出來なかつたらしく、七月中に又ひよつくり鵠沼へ歸つて來た。彼女の後での話に依ると、その時こそはほんとうに心から凡てを謝罪しやうと思つたのだらう

だ。だが、歸つて來て私の顏を見るが早いかもう突つかゝつた。そして、その時も亦喧嘩分れになつて終つた。その翌日、彼女は東京にゐる彼女の弟の家へ去つたのである。

その後、彼女も到底私とは相容れないと云ふ事を根本的に知つたらしく、七月下旬の最後の話をつけるからもう一度逢つてくれろと云つて來た。だが、私は逢はなかつた。そして、そのまゝ行方を知らさずに福島縣翁崎へ行つて終つた。それは迂濶に逢ふと、又どんな形でどんな程度に、彼女の狂暴な反抗が爆發するかも知れない事を惧れたからだ。その上、うんと原稿を書いて分裂後の整理の資金に充てたいとも考へたからだ。

八月一杯翁島にゐて、それから越後へ行つたり郷里へ母の墓參に歸つたりして、私は九月七日に東京へ歸つた。ところが意外にも彼女は八月二日から鵠沼へ來てゐて、荷物の整理をするから私の歸りを待つてゐたのださうだ。で、私は十一日鵠沼へ歸つて來た。その結果、世帶道具を山分けにしたり、荷物の整理を終つたりして、九月十五日の午後、彼女は微笑の裡に永久に私の家を去つたのである。私は藤澤の驛まで見送つた。夏中私の家へ來てゐたT君は東京まで送つてくれた。

かうして暗澹たる嵐に揉まれに揉まれた滿七年の家庭生活、彼女にとつても私にとつても最初の家庭生活の痛ましい最後の幕は卸された。そして、彼女は舊性北川千代子に歸つたのである。

今や彼女は新しい幸福を見出して、それに向つて勇敢に猛進したらしい。それは私の云ふ可き事ではないから止める。唯、彼女が分裂後の彼女に對する經濟的援助についての私の申出をきれいに拒つたのも、さういふ事情があつたからだとだけ云つて置かう。そして、私は彼女のために、その新しい幸福が眞の幸福であらう事を、心から祈つてゐると云ふ事を云つて置きたい。

彼女は人としてはまことに好い人だつた。又、腹の中も實際きれいだつた。唯、私に對してだけはあまり強かつた。あまり勝ち氣すぎた。又、あまりに我儘だつた。その上、あまりに支配欲が旺盛にすぎ、干渉癖が烈しすぎた。

藤澤の驛で微笑をもつて私と別れた彼女は、流石に汽車が出ると泣き始めて東京まで泣きつゞけたさうだ。そして、

「かうなつたのもみんな自分が惡かつたのだ。江口は夫として好い夫であつた。又、實際親切でもあつた。唯、自分が江口ならどんな我儘でもどんな無理でも許してくれると思つたのが惡かつたのだ」と云つたさうだ。

かうして泣くのも彼女の一面の眞實であらう。だが、又、私の顔さへ見れば、いつでも突つかからずにはゐられなかつたのも、亦、彼女の他面の眞實だつた。然かもこの他面の眞實ばかりを私は七年間突き附けられたのだ。その點に於いて、彼女自身にさへも探れないほどの深い心の奥の奥に、私に對する本質的な不滿が隱れてゐたのではあるまいか。私はいまでもつくづく考へないわけには行かない。

「國民」には私が彼女に「思想」を强いたのを彼女がいやがつたやうに書いてあつたが、これも嘘だ。私は「思想」を强いた覺は斷じてない。如何なる場合でも「思想」は强いる可きものでないと私は信じてゐるから。

彼女は赤瀾會の幹事をしてゐた、そんな事などてんで讀まうともしなかつた。せいぜい大杉君の譯した「相互扶助論」位なものだ。それだつて鳥や野獸の生活が書いてあるのを見て、お伽噺の材料が澤山あると云つて喜んだだけだ。

實際彼女にとつては人生も社會も宇宙も、ある意味に於いては。全然お伽噺であるらしい。そして、そのお伽噺の世界の中で、彼女は何時も自分が王女である事を欲してゐるのだ。だから彼女にとつて男性は何時もそのお伽噺の世界の中で、王女のために美しい花を集める鹿であり、甘い木の實を捧げる木鼠であり、又、王女を護り、王女を乘せて步く獅子でなければならないらしい。

ところが私は不幸にして唯の人間だつた。夫としてはいささか甘い、そのくせ疳癪持ちでありながら變に我慢強い、唯、節操だけは固い夫であるにすぎなかつたのだ。（節操の點に於いては七年間彼女も亦正しかつた事を、私は感謝してゐる）

今や私は彼女が新しく捕へた獅子に誇り、お伽噺の森を過ぎ野を彷徨しては、大空を仰いで陶醉の微笑を浮べるであらう事を彼女のために望んでゐる。と同時に、獅子の皮を被つた狼をほんとうの獅子と見誤らないだけの聰明をも王女の生命の安全のために尙更強く望む者だ。

私は別れた後の彼女を格別責めやうとも、又、憐まうとも思つてゐない。むしろ感謝さへしたい位だ。何故なら彼女は私にとにかく一つの人生を與へてくれたから。假令、如何に苦澁のやうににがかつた人生であつたとしても、それが一つの生きた人生である以上、私の將來の生活に對して、私の努力次第では、どんなにか尊い生命の糧をそのにがい牢の下からさへ何かつ搾り出す事が出來たであらうに違ひないから。

過去滿七年の間、彼女も隨分苦んだであらう。だが、私も矢張苦んだ、だがかうして私はとうとう完全に彼女から解放された。彼女が私から完全に解放されたと同じやうに。

その結果、私は一旦失はれた凡ての自由を再び取り返へす事が出來た。創作の自由、社會運動の自由、戀愛の自由、結婚の自由、その他のもろもろの生活の自由、を。久しく、これ等の自由を確實に取り返へす事の出來た私は、久し振りに如何にものびのびした氣持でもつて青空を仰ぐ事が出來るのである。

こののびのびとした氣持を心ゆくばかり味ひながら、私は最後に再び心から彼女の健康と幸福を祈り、かつ料理好きな彼女が七年間乏しい材料からでも何かつうまい料理を作つて食卓に提供してくれた事を感謝して筆を擱かう。

それからもう一つ、一人の子供も出來なかつた事も、矢張、この破產の大きな原因となつたものに違ひないと云ふ事を云つて置きたい。その代り子供のなかつた彼女は結婚當時から見れば最近の方が、むしろ若々しくもなり、かつ遙かにきれいになつてゐた。(一一・二〇・六)

ロシア飢饉救濟寄金(第三回報告)

壹參、〇〇〇円	兵庫縣	城北尋常高等小學校職員兒童一同
貳〇、〇〇〇	大阪堺市	奈良吉吳服店內婦風會
五、〇〇〇	山口縣	某
、五〇〇	宮城縣	安住仁
、五〇〇	愛知縣	杉浦正一
壹、〇〇〇	秋田縣	村田光烈
五、〇〇〇	山口縣	仙崎小學校內自儆會

ロシア飢饉救濟寄金は之にて締切といたし、先方へ送付の手續をなすことになりました。今後の分は東京大森町御社へ直接御送付を願ます。

龍先生の仙術

佐々木味津三

龍先生が仙術に凝り出したのは、ほんの鳥渡した動機からである。

或る夏輕井澤に夏期講習があつて、仲間と二人が村の學校から派遣されたる時、會が終ると龍先生一人だけ、途をわかれて裄街道を、番場醒ケ井柏原と、詰襟りに糸立てと言ふ奇怪な姿で、番場の原へ丁度日暮れ時分さしかゝつた砌、ひよつくり出遭つたとし寄の旅人から、偶然あなたは仙骨が備つてますなと言はれて、實はそれから本氣で凝り出したに過ぎなかつた。

一體龍先生は、村の學校でも古顔の方だつたのである。尋正の検定しか持つてゐないと言ふので、月給を取り出してからやがてもう十五年にもなると言ふのに、長く次席の又次席と言ふ位置に据置を喰つて、長いこと全く顧みられなかつた。

一つは龍先生一人、その村の生えぬきと言ふので、その邊多少忖度されて、どこか山奥の尋常學校にさへ、榮轉の左遷を喰はないですんだわけであつたが、どちらにしろとにかく根氣のいい咄しであつた。

それでゐて尋常の一年生となると、先生の右に出づる受持はまるでなかつたそうである。

大體が村の禰宜さんの嫡流で、龍先生はその七代目であつた。これが本來なら今頃。龍先生は郷社の社司にでもなつて、なにも營々十有五年、一次席の又次席訓導なぞで、人から存在を疑がはれなくて濟んだ筈だつたが、惜しいことにはその先代がおうやう過ぎて、すつかり財産をすつた以上に先生亦元來が少しおうよう過ぎた。

從つて一年坊主からもなつかれるわけで、その昔龍先生からおしつこのめんどうを教場で見て貰つたと言ふいいかげんの働き者が現に幾人も青年幹部にある位である。

村の大供は勿論の咄しだが、まだ學校へ上らない子供達から迄、龍先生龍先生で呼び來てにされるのも決して無理からぬことであつた。

六人あるご自分の子供達からさへ、龍先生龍先生で通り切つた位である。

髮の毛が甚だしく縮れつ毛であつたので、中には又縮れつ毛の龍先生などといらざる蔭口を利く不了見者もないではなかつたが、とにかく先生はかやうにして人となり、又かやうなるに拘らず、すつかり仙術に凝り出した。

講習から歸るとそして殆んど毎日毎夜、寧日寧夜、先生は仙術に關する本を讀んだ。

諸國近世仙人傳から近世畸人傳、續近世畸人傳、俳優俳人畸人傳と苟しくも仙人に關するらしい本で、仙術を說いてゐるらしい本は、手當り次第凡て讀んだ。

恰もその秋のことである。大阪に一人の仙人が現れたと言ふので、人からその新聞種を又聞きすると、急に又龍先生は病氣缺勤の屆を出して、家人にさへろくろく知らせず、ふいつと一人で旅立つた。

先生としては、全く矢も楯もたまらなかつたのである。

新聞種に從ふと、大阪の今仙人と言ふのは、龍先生よりは少し若い位な年輩の男で、一人身に一人娘と言ふ極く氣輕な身分の者であるそうなが、何んでも近頃になつて大阪の市役所に雇はれた者だと言ふ噺しであつた。

實は娘を四月の新學期から女學校に入れたんだそうで、その學資金を稼ぎたいんだが、自分は仙術を心得てゐるため、日に一碗の水さへあれば他になんの生活費も要らないから、子供の學資金だけ月給を支拂つてくれと言ふやうな事から、極く安い給料で勤めに上つたんだそうである。

先づその新聞種に從つて、不敢取、龍先生は今仙人の宿つてゐると言ふ下宿を訪ねた。丁度まだ今仙人は役所から退けて歸つてゐなかつたので家人に大體の趣きを噺すと、歸る迄座敷へ上つて勝手に待つてゐたのであつた。

待つてゐる間にも待ちかねて、宿の家人に訊いてみると、やはり今仙人は日に一碗の水しか他に全く取らないんだそうである。初めからの契約がやつぱり食料は要らないと言ふ約束であつたんだそうで、已に四ケ月に垂んとするが是迄只の一度さへ晩めしも朝食も、家でも外でも別にそれらしいものを攝つたと言ふことを聞かないし、又見たこともないと言ふ噺しであつた。

已にその噺しだけで、龍先生は又滿身に片唾を呑まざるをえなかつたのである。

なにも日に一碗と限らないがせめて三碗でもよいから只の水

だけで命が保つものとするならば、又天下にかゝる結構な仙術は他にふたつはあるまいと思へたので、實際先生は雀躍としてその歸へりを待つた。

暫くたつと、やがて今仙人は至極尋常な顔をして歸つたのである。

「君ですか？仙術を會得したいつてお方は。」

家人にでも已に聞いたものか、極く無雑作に今仙人は聲をかけ乍ら二階へ上つて來たのであつた。

「は、そうですか。」

と言ふ代りに、已に龍先生も亦、

「ほんとにあの、日に一杯の水だけでなんですか。生きてるんですか。」

一碗の水を訊ねたのであつた。

「え、その水も時には、なんですがね、全く呑まない時もあるんですがね」

今仙人は又尋常な言葉でそれに答へたのであつた。

「そうですか。」

言つたきり、龍先生は暫くまじまじ感に堪えた顔付をしてゐたのである。

「なんなら、今ちよいと小出しにその私の仙術をお目にかけてもいいんですがね。」

所が今仙人の方は極く平氣であつた。

「どうぞ。ぜひ。」

待つてましたと言はんばかりに龍先生が已に眼を輝かして詰じり寄ると、とたんに先生は

「どうです。」

と言つた今仙人の聲を聞いたのである。

見るとそこには、今仙人が一枚の座布團を眼の上高くさしあげて、にたにたと笑つてゐるところであつた。

そしてその座布團は、しげしげ見るとつひ今の今迄龍先生が自身、お尻の下に敷いてゐたものだつたのである。

「恐れ入りました。」

殆んど疊へ面型をつけんばかりに、龍先生が恐縮すると又そのとたん、先生は、

「どうです。」

と言つた今仙人の聲を再びはつと聞いたのであつた。

見るとそこには又いつのまにかその座布團が先生のお尻の下へ這入り込んでゐたのである。不思議と同時に先生は胸とどろかして、

「教へて下さい。教へて下さい。」

子供のやうに身をゆすぶつてせついた。
「そりやなんですがね。お望みとあらば、敎へないこともないんですがね。しかし、」
と言つて今仙人は一寸ためらつた。
「しかし、仙術を會得するには先づ第一邪慾を棄てる必要があるんですがね。」
「尤もです。尤もです。」
先生は只もう神妙であつた。
「この邪慾つてやつがね、あるうちにうつかり會得するとみんな天狗に墮ちて了ふんです。現に私の友人にそう言ふやつが幾たりもあつてね。現に京都の比叡にも鞍馬にも、それから關東の男體にも、秩父にも信州は御嶽なぞに追ひ込まれてゐるんですよ。だいちそいつが取れない間は、うつかりなんでしてね。やれないものですがね。」
「自慢ぢやありませんが、その方は充分その、自信があるつもりなんです。」
先生はひたすら神妙であつた。
「あゝそうですか。ぢややつてごらんなさい。今のその座布團を一つとにかく傳授しませう。」
言ふかと思ふと、已に今仙人はいきなり龍先生の右手を取つて、
「そら、よござんすか。」
と言つてへんな聲をかけたのであつた。と思ふと瞬間、先生の右手は、すうすうと雜作なく、今仙人が敷いてゐた座布團を已に引きぬいてゐたのである。
「どうです。抜けたでしやう。」
今仙人から言はれる迄もなく。
「は、たしかに、たしかにぬけました。」
實際たしかに、抜けてゐたので言下に先生は答へたのであつた。
「ぢや、又入れてごらんなさい。」
言はれるか言はれない間に、果して先生の右の手からは、又座布團がすうすうと音もなく、已に向ふのお尻の下へ這入り込んでゐたのであつた。
「わかりました。わかりました。」
も早や先生は、立派な仙人にでもなつた氣がして、雀躍と頭を垂れた。
もつと色色玄妙摩訶不思議な實例をやつて見せて吳れると言ふので、その晩から龍先生はとにかく今仙人の下宿へ泊ることになつたのであつた。

しかし日に一碗の水のかは、事が大體消極的邪慾から發したものであるから、自然に自分で會得到達が出來る迄は、またきだと言つて、晩にも朝にも先生には他所から辨當めしを取らせて、三度三度たべさせた。

已に座布團さへ習得の出來た自分に、追つては一碗の水迄到達出來ない事もあるまいと考へたので、龍先生も至極安神してゐたのである。

今仙人が說明したそのいわゆる玄妙摩訶不思議なる樣々の實例は、なる程日に一つづゝ實際に先生に見せてくれた。

「今日はこれからね、嵐山に仙人の會合があるから、一寸いつて來るがね。三十分もたてば歸つて來るからまつてゐたまへ。」

ある日お役所から歸ると、今仙人はさも事もなげに龍先生に言ひおいて、別になんの支度もなく、すたすたと歩いて出かけた。

先生が數へて、果して三十分とはたたない時分に、前言のごとく、今仙人はすたすたと又歩いて歸つて來たのである。

「お土產。」

と言つて今仙人は龍先生の眼の前へ、京都名物千枚漬と書いたちいさな罐をさし出した。

又ある晩は、

「今から一寸娘の寄宿舍へいつて來るがね。遲くなつても朝迄には乾度歸つて來て寢てゐるから、君達先に寢てゐたまへ。」

固く戶締をするやうに下宿の家人迄に注意しておいて、今仙人はさつさと歩いて又出かけた。

半信半疑で、先生迄手傳つて、實際固く嚴重にどこもかしこも戶締はして寢たに不拘、しかし朝になると、やはり又いつのまにか隣りの床には、今仙人がすやすやと眠つてゐたのである。

大凡そ一週日たつと、今仙人はもう歸へりたまへ、と言つて先生の歸鄕を促した。

座布團を傳授した上に、これだけ實例を見せてやれば、あとは自分で會得しろと言ふことだつたのである。

一年も三年も、完全に仙人になる迄は大阪に止まつてゐたいとは思はないでなかつたが、しかし先生自身にも、多分この位で仙術が自分にも出來ないことはあるまいと言ふ自信があつたので、そうですかと言つてその晩の汽車で國へ歸つた。

その翌る日から又けろりかんとして、龍先生は學校へ出たのである。しかし誰れにも、ご自身の奧さんさへにも決して仙術を習得に、大阪へいつたなぞとは、寢物語りのおくびにさへ出

さなかつた。

只もう、先生としては、實際誰か他人の前で、その習ひ覺えた座布團の一藝を實驗したくてならなかつた。

その第一發の小手先調べに、先生は先づご自身の奥さんを對手に選んだ。

「いいか。みてゐろよ。お前の敷いてゐるその座布團をぬいてみせるよ。そら。いいか。どうだ。」

先生は變な氣合さへかけて、はつと膝の下の座布團に手をかけたのである。

「ごぜうだんも休み休みおつしやい。なんです。ひとをこんなにひつころがして。」

しかし奥さんは、かんかん先生を叱りつけた。にかゝわらず、不思議なことには、先生に奥さんが實際うしろへ引つころがつたことがまるで解らなかつた。

「どうだい。すうすうと音もなくぬけたろ。」

實際そう思へたのである。

「子供の手前みつともない、いいかげんにおしなさい。」

しかし奥さんは、四十五度に斜めなご機嫌であつた。

「おい、おれこれからな。天狗棚に仙人の會合があるから、一寸行つて來るがね。なに三十分もたてば歸るからな。晩めしには井戸水一杯用意して待つてゐろ。」

そして或日、學校が退けると、先生はま顏になつてすたすたと出かけたのである。

所がその晩龍先生での町内は、先生が行衞不明になつたと言つて、お陸で町内殘らずが金太鼓で大騷ぎを演じた。

三十分はおろか、五時間たつても七時間たつても歸らなかつたのである。先生が言明した天狗だなと言ふ山は、殆んど山ぢう殘る隈まなく探しまわつたが、しかし姿は杳としてなかつた。

その翌る日のおひる時分に、龍先生ははだしになつて、ずだずだに着物は引き裂いたまゝ、眞赤な眼をして、漂然と歸つて來たのである。

「さあ、晩めしだが、おれは水一杯でいいよ。」

言つたまゝで先生は、物の氣に憑かれたやうな顏をしてぐつすりと寢込んだ。

それに又凝りずに、あくる晩になると、

「おれこれから一寸娘の寄宿舍へ遁ひにいつて來るがね。お前達は戸締して先へねてゐろよ。なあに朝迄にはちやんと歸つて來てねてゐるからな」

龍先生は奥さんが懸命になつて止めるのに肯んぜす、ふり切るやうにして又すたすたとどこの寄宿舍に娘なぞがゐるか、ま

頭でどこかへ出かけたのである。

四十五度以上に寧ろ九十度近くお冠を曲げた奥さんは、かんかんになつて實際、どこもかしこも固く戸締をしてねて了つたのであつた。

所がしかし肝心の龍先生は、朝になつてみると、充分確かにお自分の寢床にゐるつもりで、表の縁の下の鳥小屋の中に寢込んでゐたのである。

龍先生が氣が變になつたと言ふ噂さは、その間もなく村ぢうを賑はした。

所がしかし肝心の先生は、そんな噂さにまるで平氣で、いつものごとく學校へは出かけた。

不思議なことには、學校にゐる間は、別に今迄と違つた樣子も目立たなかつたので、校長初め深く氣にはとめなかつた。

氣が變かどうか、そこはよくわからなかつたが、一風變つてゐる點に於いては實際今も昔も變らなかつたので、すこしひどいが又ちよいちよい初めたな位に誰も彼も考へてゐたのである。

勿論本人の先生にしては、内心甚だ仙人のつもりで、今に追ひ追ひと又完全にその蘊奥も極めえらるる位に考へてゐたに違ひなかつた。

それを完全に極めるには、先づおのが邪慾を充分棄てる必要があると考へて そのさきがけとして先生は 月給の袋から五圓札をつまみ出して、一〆目位の赤ほうづきを買ひ備へた。

それをいちいち、ご自分の家の門前に待ち構へてゐて、通る子供は、子供でありさへすれば、誰彼の見境ひなく、どんどん惜しげなく呉れてやつたのである。

縮れつ毛の龍先生が、日本一の上機嫌で、只もうにたにた笑ひ顏をし乍ら、ふところへねぢこむやうにして幾つも幾つもほうづきを呉れるので、中には薄氣味わるさに、悲鳴を擧げて逃げ出す子供もあつた。

それをいちいち又、先生の奥さんは眞赤な顏をして、實際恥ぢを忍び乍ら、頼むやうにしてそのほうづきを又子供たちから貰ひ戻した。

奥さんにしてみれば、邪慾を棄てるどころか、一つでもより多くそのほうづきを亦貰ひ戻して貰ひたかつたからである、

しかし先生はそれだけでは又飽き足りなくて、今度は奥さんの簞笥の中から、辛じて發見した竹筒入りの小錢七圓程をまるまるすつかりさらひ出して、二百羽近くのつぐみを買ひ整へた。

それを一羽一羽たんねんに毛をぬいて、たんねんに又燒き鳥にして、例のごとく門前に陣取ると、通る人毎に、遠慮なくす

すめた。

門の中には、小かげで奥さんがはらはらと氣をもんでゐるのに、通行人は遠慮なくいただいた。

氣違ひのすることだから、逆つてなぐられでもしたら馬鹿なことだと位に考へる臆病者もなかにはあつたに違ひなかつたのである。

不思議なことには、それを通る人に食べて貰へると、肝心の龍先生は極上の上機嫌で、「ひとりきな、ふたりきな、又ひとりきな。ふたりきな。」

唄とも呪文とも解らない言葉に節をつけ乍ら、足拍子さへとつて、只もう他愛なくにたにた笑つてゐたのであつた。

そのまもなくである。冬になつてからのことで、學校の教場にストーブが這入つた時分であつた。

ある日龍先生は、教壇に立ち乍ら、ひよいと突然、例の仙感に接した。

「おい。みんなよつくみておれ。今先生が玆で仙術をやつてみせるぞ。」

言つたかと思ふと、龍先生はやにはに室の隅に吊してあつた棕梠箒をさげ出して來て、今まさにめらめらとさかんなる焔をあげて燃え出して來たストーブの扉を押しあけて、遮二無二箒をふりあげ乍ら、

「そら、いいか。ええい！」

と大聲で怪しげな氣合を施すまもなく突嗟の間に火の中へつつ込んだのであつた。

「どうだ。えらいもんだろ。火が消えたぞ」

そして言ひ乍ら、ぼうぼうと火を移して燃えてゐる棕梠箒を空に打ちふつて見せたのである。

一年坊主の子供達は、自分達でさへやつてみたい棕梠箒の先が、さかんにめらめら燃え出したので、他愛なくやんやと喋した。

龍先生はいちだんと得意をかんじて、鼻うごめかし乍ら、又例のごとく、

「ひとりきな、ふたりきな。又ひとりきな、ふたりきな」

唄ひ乍ら手拍子足拍子を取つて、火のついた箒を教場ぢう持ち巡はつたのであつた。

その旬日を出でない間に、龍先生はつひに破天荒にも左遷の浮き目に出あつた。

山の中の分教場ならば、幾分靜かだから、靜養の足しにもなるだらうと言ふ理由だつたのである。

分教場は、四十人程の炭焼の子供と、五七人の木こり杣の子供達と、全部で五十人足らずの赤子達のために、先年郡費で特に急設したもので、村からは大凡三里程山奥にあつた。

轉任の辭令に接して、こおどりし乍ら喜んだのは、勿論龍先生自身だつたのである。

自分の仙術が愈々堂に達したので、深山幽谷の試練とは、格段の出生と思つたに違ひなかつた。

しかし眼を眞赤に泣きはらして、ひそかに一人すすり泣いたのは、先生の奥さんだつたのである、

六人の子供を悉く駄馬の背にふりわけにしてのつけ乍ら、奥さんは忍び泣き泣き、山を奥へ辿つた。

坂の途中迄折角見送つて來てくれた村の學校の先生達には取りみだしたその泣顔をいささかも亦見られまいとして、奥さんは歪んだ笑顔で別れの言葉をのこした。

しかし肝心の龍先生は、雀躍としててんてん先へ歩いていつたのである。

人跡未踏以上の山奥へ來たかげんか、當座は先生も割合に無事であつた。

先づ冬ごもりの準備として、先生は毎日山へのぼつて、御手のものの木こりの子供達に手傳はせ乍ら、せつせと雜木を束に伐つて結へた。それを住宅の北側へ風よけにたてかけると、先生は山でとれたいが栗をいろりで燒き燒き、玉石混合の生徒達をひとまとめに一學級の教場で、そろばんをはじかせたり本を讀ませたり又、手習ひをめいめい勝手にやらした。

夕方は夕方で、溪間の流れの崖つぷちに、僅かに雜木束で風よけをしたのみの野天に据へた風呂桶の中で、奥さん共々天下晴れての野風呂を使つた。

ふた月程は無事平隱であつたが、三月の學期終り時分のことである。官有林の第三期雜木拂下が又行はれると言ふので、下檢分に大林區署の署長達一行が、はからずもこの分教場に立寄つたことがあつた。

晝餐をとるので、そのために一寸立寄つた機會を甘く龍先生は捕へて、この山奥なる人間未開の赤子達に、文明開化の咄しなぞを、一場の訓話としてその署長に依頼した。

氣輕に引受けた署長を案内して、先づ教場へ導き入れると、龍先生は神妙に、又こんこんといかに署長が偉いお方であるのかを子供達に紹介したのである。

咳一咳、衣紋を合せて、たつた一つの椅子に署長を招じ乍ら、敷布でまに合せたテーブルかけの埃を吹き吹き、やがてま顏

で、紹介し了ると、全くそのとたんであつた。

瞬間にして龍先生は、又例の仙感に接したのである。

と思ふと先生はやにはに、子供達へ氣をつけの號令をかけた。と一緒で、

「おい。いいか。よくみるんだぞ。先生が今茲へ竹籔をこしらへてみせるからなに」

言ひさま、面喰つて氣をつけの姿勢をとつた子供達の前へつかつかと教壇をかけおりたのであつた。

そしていきなり、先づ最右翼の大きな子供を引つ張り出すと、

「そうな。青い奴が一本。」

眼を輝して叫んだ。

「そうな。細い奴が二本」

二人目を連れ出した。

「三本、四本、これは孟宗だよ。」

又眼を輝したのである。

「こつちは節なしの女竹かな。」

首をかしげ乍ら、女の子供を引つ張り出した。

「その先が、まだ竹の子だよ。」と

鼻を垂らした一年坊を連れ出した。そして最後に署長の前へいつて、そこに、

「えい！」

と氣合をかけると、とたんに、又足拍子手拍子を取つて、

「ひとりきな。ふたりきな。又ひとりきな、ふたりきな。」

唄ひ乍ら、首をふりふり子供達を數へ出したのである。

その新學期に、龍先生は又つひに首になつた。迎ひに行つた町内の者達に、とう丸籠で連れ歸へられ乍ら、そして龍先生は新造した座敷牢の中へ封じ込められたのである。

しかし先生自身では、よくこんなに早く仙人になれたものだな位には、内心甚だ得意をかんじたに違ひなかつた。

その證據には、やがてまもなく先生ご自身の奥さんは、恥も外聞も悶く忍んで、又大きな腹を抱え抱え、ひそかに齒ぎしりを噛み乍ら、まがひ物の大島紬を行商迄して歩くやうになつたに拘らず、上の娘達は二人迄、近まの製絲工女に住み込んだに拘らず、しかし一家は日に日に夜に夜に、數升から數合へ、數碗から一碗へ、やがては實際一碗の水さへ、すすらなければならないやうに、龍先生が大阪歸來以來、理想通りの生活を余儀なくさせられたからである。

又全く龍先生は、年來日頃の邪慾執心が今にして完全に亡くなつたものか、時には殆んどその一碗の水さへもとらなくて、

「ひとりきりな。ふたりきな。又ひとりきな。ふたりきな。」

手拍子足拍子踊つては、只專念に唄ひ乍ら、實に平然と唄ひ暮らした。（完）

我輩は猿でない

武林無想庵

學生時代、私は試驗が一番いやだつた。それは勿論先生が私に敎へたゞけの事を果して覺えてゐるかどうか、それを檢べるつもりなんだらうが、私は何も先生の敎へる事を覺えたい爲に學校へ這入つたんぢやない。たゞ先生の喋つてゐる事をきゝながら、たゞそれを參考として、もと〳〵自分自身の學びたいと思ひ知りたいと志してゐる、いろ〳〵な事項に對する、ホンの暗示を得れば、それだけで澤山だつたわけだ。然るに學校のその頃の組織は、私の學校に對する期待とは、まるツきり正反對きはまつたものだつた。自然私は敎室をスツポかして、圖書館へばかりもぐり込んでゐたものだ。さうして自分勝手な本ばかり讀んだ。而もその圖書館でさへ、近著の新しい本と云へば、大抵先生が持出して行つてゐて、自分が金を出して、丸善へでも賴まぬかぎり、目錄には出てゐても、殆んど讀む事は出來なかつた。私はしみ〴〵學校といふものが厭になつた。

◇

なぜこんな事を思ひ出したかといふと、『お話伺ひました戰後の大思想家や文藝家達に象徵されてゐます思想によつて起つた對人關係——戀愛關係など——を實例など擧げましてお書き下されたいと存じます。そして戰後の氣分の流れもお隨意に紹介遊ばして宜しうございます。』といふ、この原稿に對する注文書を受取つたからだ。さうして何だか學校の試驗場で問題紙を配られた時のやうな氣がしたからだ。

◇

「伺ひました」話といふのはからだ。去年出たポール・ルブーの「es drape ax」の事から、『アカデミシアンの候補者に立つほど、充分にブルジョア社會に認められてゐた小說家が、戰場から歸つて、或日、偶然、慘憺たる廢兵達の有樣を見せつけられると、思はず非常なる感激の下に一文を草したが、いつも書きつけのブルジョア新聞では、公安を害するからといふので、どうしても載せてくれない。で、それを左黨の新聞へ揭げると、

無産ブルジョア社會から排斥される。十二分にブルジョアーズでもあるところのかれが[illegible]つて來る。懐疑をはじめる。自作中人公の心に左傾して、自分のタイピストと純真の愛に陥る。各國の經濟的困窮を調査して、歐羅巴を救ふには、國境を撤廢すべしといふ事が生ずる。パトリイといふ思想の根絶を企てる獨逸へ旅行して獨逸人達と意志の疎通を計る。旅から歸ると、タイピストと[illegible]結婚する。ブルジョアジイを脱却する。さうして希望に充ち滿ちた新生活に這入る。……などゝいふ話が出て、それから、かういふやうな例は、戰後の歐羅巴には、随ると[illegible]ころにあるさうだ。單に小説の上ばかりでなく、事實の上でも……なんかんと喋り立てた口のはたを取ツつかまへられて了つたものだ。

◇

ピナンで買つた新聞に、アナトル・フランスの座談が掲載されてゐたが、その標題は、Europe is dying. としてあつた。歐羅巴は死にかゝつてゐる。勿論、ブルジョア歐羅巴の事だ。さうしてそのブルジョアの本場はフランスだ。そのフランスの大好きな、ヴイラ・サイドの主人公、ムツシユウ・ベルジユレは[illegible]へ、ナポリのムセオ・ナチオナアレにある、ポムペイ[illegible]した、[illegible]らしい[illegible]の中へ、もう[illegible]共に突込んでゐる身にも拘らず、去年、アンリ・バルビユツスと連名で、軍國主義に對する、大々的プロテスタションを發表してゐた。歐羅巴は死んでも、アナトル フランスはこれからますます生きるのだ。鮮やかに生きるのだ。彼は今では單なるソシアリストではない。正札つきの共産主義者だ。さうしてあれほどの爺さんでも、本當の生活の完成の爲には、やツぱりマドムワゼル・イヴオンヌ・ヴイダルが必要ださうな。噂どほりとすると試驗問題の一例になる。

◇

因襲を破壞して、進んで勇ましい新生活に這入つた學者に、昔島村抱月氏があつた。さうして今日では石原博士がある。バアトランド・ラツセルも、そのうちの一人だと云へば、或は云はれない事もないであらう。年をとつてから若い女を妻君にするといふ意味では勿論ない。ナポレオンがジョゼフインを追出してマリイ・ルイズを皇后にした意味とは全々ちがふ。雁次郎が榊博士の手術をして貰つた事とも、まるツきり別問題だ。

◇

要は積重した、行詰つた、乾枯びた、どうにもかうにもならぬ因襲道徳の鐵鎖を截斷して、ガアジヤン・ナツトをぶつ放して、溌剌たる新生命に復活するといふ意味だ。如是閑作の[illegible]

『生活取戻し運動』だ。戰爭前までは、過去半世紀間に、凡ゆる半面に於けるブルジョア文化が爛熟しきつて、己惚れきつた増上慢が、その半面たる勞働運動までも煙にまいて、とう〳〵あゝした大修羅場を爆發させて了つたのだ。恰も發達しきつたマンモスの巨大なる牙に、伽藍宗教にも似たやうな、莊嚴を極めた牙に、いつの間にか巢食ひはじめてゐた一種の黴菌が、とう〳〵マンモスの全種族をば、この地球上から絶滅させて了つたやうなものだ。さうして行き詰りきつた歐羅巴文明は今正に死を急ぎつゝあるところだ。さういふ環境の中に立ちながら、人間らしい人間なら、誰だつて『生活取戻し運動』を、せずにはいられまいと思ふ。さうしてその人間らしい人間といふものは、昔ギリシヤでディオゲネスが、白晝大道の眞中をば、高々と提燈を揭げながら、『正直者はゐないか!、正直者はゐないか!』と大聲で探し歩いたと同一程度に於いて、中々探すのは骨が折れると見える。ルブーの『ドラポオ』などは、恐らくディオゲネスの提燈であるのかも知れぬ。

◇

問題に對する答案は甚だ不完全ながらこれだけにして置かうどうせ落第にきまつてゐるのだから、骨を折るだけ馬鹿々々しい。そこで、これから例の勝手な熱に移る。

◇

『生存に對する爭鬪は、同一の種族(スペシース)の箇々或は亞種(ヴァライエティス)間に於て、特別に猛烈を極める。』

これはダルヰンの言葉だ。ダルヰンから見れば、生存そのものが爭鬪なのだ。爭鬪を離れては生物の生存が成立たぬのだ。それを佛說にあてはめれば、この世は修羅場だといふ事になる印度人はこの宇宙を十界に分けて考へてゐたものだ。即ち、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天人、聲聞、緣覺、菩薩、佛——この十界だ。勿論、物理學的、心理學的、倫理學的、社會學的經濟學的、生物學的、近代人なら、凡ゆる部門に分けて、それぞれ別々に考へてゆきさうな問題をば、非科學的に、器械的裝置の實驗なしに、單なる冥想の上だけで、人間生活の特長をば拔き出して、巧みに組立てた、宇宙觀であると同時に、人生觀であつたものだ。詳しい事は、專門家なる木村泰賢君とか椎尾辨匡君とかいふ人々へ訊けばいゝとして、我輩はたゞその考へ方の一部を盜み出して、それをかうした勝手な熱へ結びつけさへしたら、それで氣がすむわけだ。

◇

一體、この十界の考へは、それが藤原時代、既にスゴロクにまでなつて、世の中に行はれたものださうだから、暗默の間に

日本人の頭には、よほど深く滲みついてゐる觀念に相違ない。スゴロクとはもと〳〵朝鮮語ださうだが、この遊戯は印度の波羅寨戯なるものが支那へ傳はり、さうして日本へ渡來したわけだが、そのスゴロクはこの十界のそれではない。それは鷲塚金藤次が初花の首を打つ道具に使はれたり、政岡が飯を焚く間、鶴千代と千松とが、また空腹をやい〳〵云はぬうち、しきりにやつてゐる、あのスゴロクのことだ。そのスゴロクの事ではない。

◇

一をふつたら、菩薩へ行く。六をふつたら、地極へ落ちる。三をふつたら、天人になる。二をふつたら、聲聞へ行く。さうして四をふつたら、佛で上り——と云つたやうな、今日でも新聞紙の新年附錄などによく用ひられる、あのスゴロクが十界のそれだ。この十界スゴロクは、恐らくさうしたスゴロクの元祖であるのかも知れない。我等はまだ見た事はないが、元の教王院さん、故飛田孝正氏、は、それはまだ西教寺に殘つてゐる筈だと云つてゐた。

◇

人生の事はすべてがプロバビリテの問題だ。白鳥を白いものときめたつて、オセアニックの或る島から、黒い白鳥が出た以上は言句はない。ニウトンの引力も同じ事になつた。アインスタインが出なかつたら、白鳥は永遠に白いもので終つたらう。

◇

『一か八か、當つて碎けろ。』といふ。エラン・ヴイタルだ。プロバビリテはそこに偉大なる價値が生ずる。『勝負事はやめられぬ。』といふ。その人間の冒險性がある。ラツセルも戰爭といふもの丶人間生活から取除かれぬ原因の一つとして、その冒險性を敎へてゐた。生はたしかに冒險だ。六十以上で死ぬ人間より一歲以下で死ぬ人間の方が、吃驚するほど數が多い。ビツコでも、メクラでも、但しは天刑病でも、生きてゐられる以上は、すべて適者(フイツト)なのだ。相當に冒險を犯して來たチヤンピオンだ。

◇

既に人生が冒險だときまつた以上、その人生を象徴するスゴロクはなくならない、即ち賭博行爲はなくならない 資本論だけではマルクスはわからぬ筈だ。共產黨宣言のある所以ではなからうか。蓋し、必然性が蓋然性をピツタリと裏付けたものでなければ、どうしても人間の本心にカチリと觸れては來ないからだ。

◇

そこでどうしても階級鬪爭だ。搾取者と全く利害を異にした被搾者といふもの丶存在する事は、如何なる民族、如何なる國家であつたにしたところで、これが社會組織をなしつゝ進展す

る人類であるかぎり、何としても避くべからざる事實だ。歴史や國情などゝいふもので、いかにそれを蔽はうとしたつて、もう駄目だ。階級爭鬪は必ず行はれる。

◇

ところで、マルクスの二大階級爭鬪說は、それは單なる机上のアブストラクションで、現實の世の中には、その外にまだ澤山の階級があると云ふ。最も大まかに見たところで、中間階級といふものが立派に存在すると云ふ。そのとほりだ。それはそれで差支ない。さうしてその中間階級者が大部分ブルジョア階級の擁護者であつて、プロレタリア階級が二重にも三重にも搾取される最も憎むべき媒介者である事も本當だ。學者、文士、藝術家、軍人、役人、さうした職業に屬する人々は、大抵それだ。小ブルジョアとは甚だ妥當な名稱だ。要するに、プロレタリア階級は、十重二十重の敵に取圍まれてゐるわけだ。

◇

我輩は文士だから、今日の露西亞に於ける有名なる文士の事を考へて見ると、アンドレエフ、クープリン、ブーニン、メレジコウスキイ、アンフイテアトローフ、チリコーフ、悉く貧農と勞働者に裏切つて、みんなメンシエヰキに味方したものださうして昔一箇のプロレタリアであり、放浪者であつたことのある、マキシム。ゴリキイ唯一人がボリシエヰキに踏みとゞまつたゞけだ 文士はそのパラジツト的職業の性質上 不可抗的に所謂小ブルジョアジイと媾合しやすい可能性を持つてゐる。さうして單純にして正直なプロレタリアを欺きやすい地位に立つ。

◇

文士は自由思想家だ。本來的に商人主義者だ。それゆゑにボリシエヰキに赴かないかぎり、必ずエス・エルの立場で行詰る。さうしてプロレタリアを賣る事に終る。

學者藝術家皆然りだ。經濟學者が殊にさうだ。マルクス研究者が一層危險だ。貧農と勞働者の要求してゐるところのものは學問より、藝術より、今日やす〳〵と口にし得られる、寢にし得られる、風雨を凌ぎ得られる、歴々目の前に横はつてゐるところの、すべてのブルジョア達の、小ブルジョア達の、無意識に享樂しつゝあるところの、その最上のパンだ。完全な衣服だ。堅牢な住居だ。

◇

釋迦は昔印度のクシヤトリアだつた。釋迦の心に若しマルクス思想の一面があつたとしたら、彼が菩提樹下の悟りの一角には、必ずシユードラが嚴然として横たはつてゐたに相違ない。ガンデイも四千年後の印度人だ。彼れの無抵抗的運動は、どうしてその間に階級意識を交へずに行へるだらうか？

◇

時代はブラフマンとクシヤトリアとを追ひ立てゝ、悉くヴイチヤの中へ打込んで了つた。さうして最も明瞭であつた印度人の四階級は、今日ではもうヴイチヤとシユードラの對立せる二階級しきや殘つてゐない筈だ。印度人ばかりがさうなのぢやない悉く世界がさうなのだ。

◇

三つ振つたから、修羅場へ戻る。現代から將來へかけては、當分のうち、何としても修羅の巷だ。修羅とはアスラの略だ。アは打消しで、無端正といふ意味ださうな。して見ると日本だけは、或はたとへ五大强國の一つであるにも拘らず、明らかに世界のうちの一民族であるにも拘らず、さうした修羅の巷へは這入らずにすむかも知れぬ。何となれば我國は昔から東方の君子國で、或は蓬萊の仙郷で、君子か仙人の外は生息の出來ない土地だからだ。（長春會議に於ける我堂々たる發言を見よ。）

◇

五つ振つて、ダルヰンへ飛ぶ。さういふ結構な我國に、また一つつ新しい政黨といふものが、生まれるところだ。國情を知らぬ外國人であつたら、日本にもいよ／＼プチット・ブルジヨアジイを代表する政黨が出來るやうになりましたね、などゝホザクであらう。それがなぜダルヰンかと云ふと、さういふ中間階級を代表する政黨が出來ると、利害の衝突する狀態がお互ひに接近し合つて、三角關係にわたる爭鬪が、過去の時代よりも一層猛烈になるに相違ないからだ何とならば、ブルジヨアとプロレタリアの間よりはブルジヨアプチイ・ブルジヨア、及びプチイ・ブルジヨアとプロレタリアの間の方が、その關係がより密接だからだ。大和民族といふスペシース中の、政友、憲政といふブルジヨア政黨と、今度の革新派を中心にして出來る小ブルジヨア政黨と、それから……さア、プロレタリア政黨なんてものは、さう、まだ日本にはなかつたつけ……いや、日本の勞働者は氣前よく、もう、とうの昔から、議會政治なんてものゝ存在を忘れて了つてゐたのだつけ。

◇

ダルヰンは撤回だ。あんなエープ・セオリイなんて下らない。神國には向きッこはない外國人はいざ知らず日本人は神の後裔だ。大國主の子孫は神社の番人だが、我輩の先祖は物部の二田の命だ。五伴緒の一團に加はつて、久邇布留嶽へ天下つた一人だ。實父からもらつた系圖にチヤンとさう書いてある。決して猿の子孫ではない。

◇

こんな事を書いてるのは實に面白い。面白くてたまらぬ。これで原稿料がもらへて、安穩に飯がくへるのだから、有難くてたまらない。神國に住んでゐるお蔭だ。もう／＼決して外國へなぞ足を踏み出すまい。露西亞なンぞは身震ひがするほど近づく氣にもならぬが、あのポアンカレエといふ偉い人のゐるフランスへだつて、二度と行く氣にならない。なぜといふと、あの

國は陰毛まで窺へるほどの裸體で、ヅウヅウしく女が人前で踊つてゐるからだ。それを又いゝ氣になつて、禮服なンぞ着込んで淚をこぼさんばかり、嬉しがつて見てゐる男があるからだ。あさましいとも何とも云へたものぢやない。

◇

どうも風俗習慣を異にした國は仕みにくいものだ。日本人には日本より外にいゝ國がある道理はないさ、きまりきつた話だ。併し年々人口は殖ゑるし、版圖は狹いしするから、どうしても侵略は必要だ。シベリアからなぜ撤兵したのか、我輩なンぞにやア、とんとその理由がわからない。陸軍は何と云つたつて日本が一番强いんだ。のみならず、全國皆兵主義だから、三千萬や四千萬の兵隊を出すのは何でもありやしない。グズグズいふ物は片つぱしから、どしどしやツつけて了うサ。どうせ猿の子孫どもだ。

◇

調子にのつて、爰まで書いたところを、横合から女房が口を出して、

——!そんなわけの分らない、とりとめのない、獨合點のアホダラ經を書いて、あなたは一體誰に讀ませるつもり？　と、だしぬけに腰を折つた。

——なんだ見てゐたのか？………誰に讀ませるつもりツて………さうだなア………辻潤に讀んで貰へる位のものだらうよ。

——辻さん一人の爲に書くのなら、辻さんのところへ郵便で送つてやるがいゝわ………「改造」や讀者は迷惑するばかりだわよ………

——よく知つてるね、

——だつて私も讀者の一人ですもの。

——そんなに分らないかね？

——分らないわ……分らないばかりか、反感が起るわ。

——反感が起る？　なぜ？

——なぜツて………『どうだ。俺はこの通り學者だ何でも知つてゐる。お前達のやうな無學なものには分るまい。』といふ、下等なペダントリイが鼻の先にブラ下つてゐるからです。

——ウム、さう云はれて見ると、成程、その通りだ。ぢやア、破いて了はうか？

——それはどうでもあなたの御勝手よ。

——が、せつかく爰まで書いたもんだから、とにかく、まア、送つて見よう………「改造」で反感を起したら、きつと沒書にして了ふだらうから………

——御隨意に……併し、今度からは、もつとよく考へて、誰にでも分るやうな、なるべく人の反感を買はぬやうな、眞面目な事を書くやうにして下さい。

——ウム、さうしよう。

◇

ジヨルジ・デユアメルの短篇集の中に、こんな題のがあつた。

——(Origine et Prosperité des Singes)

露國三政權對立の話

布施勝治

(一)

日本、否な、ミリタリズムの日本！それは恐るべきであるか、或は恐るゝに足らないか……之は實に革命の當初來、幾度か勞農内閣の議題に上つた幾多難題の一つであるが、それに就いての勞農政治家の意見は、從來屢々變化を重ね、今日に至るもまだ定見を立てるに至らぬ。

日本のミリタリズムは今尚ほ相當の勢力をもつて居る、日本は世界戰爭後疲勢せぬ唯一の國である、然しあァ遠い東に端に偏在して居ては、如何に力強いミリタリズムの日本とても、歐露はおろか、西伯利も貝加爾以西へは、容易に手を伸す勇氣はあるまい、加ふるに日本の背後には米國が控えて居る、米國が常に日本を制肘して居る、所謂露諺の「互ひに爭はせよ、然る後に兩者を抑へよ」の政略を用ひてゆけば、日本は結局恐るゝに足らぬ……之れが革命當初少くともトロツキー一派の提唱した對日本策の要諦であつた。更に詳しく云へば、當時トロツキー外相の下に、外務次官であつたボリツーノフの如きは「日本は西伯利に武力干渉を行ふまい」との推斷まで下したものだが、かゝる極端な樂觀説はやがて日本の浦鹽遣艦で、うちこはされボリツーノフは匆皇として、勞農外務省を逃げ出した。

日本の遣艦に次いで陸戰隊の上陸が敢行され、間もなく西伯利出兵となつた。しかしそれでもなほトロツキー等は「日本は協商國のために極東憲兵の役目をつとめるのだ！」などゝ冷罵をもつて之を迎へ、傲然として高を括つて居た。然るにやがて一九一八年末から一九一九年にかけ「日本恐るゝに足らぬ」と云ふトロツキー一派の極東策を根本から覆す重大な事變が起つて來た。それは他でもない、オムスク政府の勃興、コルチャク軍の西進、即ちそれである。

(二)

當時東方からの威嚇は莫斯科政府に對し、如何に強き刺戟を與へたか、莫斯科に於ける赤軍の會議に於て、カーメネフ大佐

(現赤軍總司令官)の西守東攻論が勝を制し、赤軍がその全力をあげて、烏拉爾戰線に集中するに決したことの一事から推しても、思ひ半ばに過ぎる。蓋し當時西にユデニッチ軍迫り、南にデニキン軍の跳躍するあつて形勢頗る險惡を極めたが、彼等を操る英佛兩國は已に夙くから勞農政府の眼中になかつた。然るにコロチヤク軍の背後には日本がある、日本のミリタリズムがある。とても貝加爾以西に出まいと思はれた日本のミリタリズムの手は已に烏拉原を越えてヲルが河畔に廻つて來た。事實はさうでなかつたにしても、莫斯科では確かにさうに見えた、コルチヤク軍の中には日本兵も加はつて居ると見えた、サー大變であるデニキン軍やユデニッチ軍を顧みて居るいとまがない、眞先にコルチヤク軍を徹底的に打ち破らねば、勞農の天下は安泰を得ることが出來ぬ。カーメネフ司令官の率ゆる赤軍の主力は、その精鋭をあげて、ヲルが河畔から烏拉爾に到る東部の戰線に向ひ、躍猪進、勇猛然東を指して殺到して來た。

固より日本兵が中え入つて援けた譯でもなかつたコルチヤク軍のこと、一向手ごたへある抵抗の出來やう筈もない、赤軍の鐵袖一觸、忽ちにして敗退、潰亂、廣い西伯利を一目散に東へ東へと逃げたが、追擊急で息もつかせぬ、遂に一九二〇年一月コルチヤク將軍自ら敵手に落ちてイルクーツクの獄裏悽愴慘絶の最後を遂げた。

（三）

コルチヤク軍は潰滅したが、東方からの威嚇、日本に對する恐怖—それはあまりに深刻に勞農當路の胸に刻まれた。一九二〇年の春赤露に入つた頃、莫斯科は恰もこの「東方からの威嚇」にうなされ、「日本に對する恐怖」におのゝいて居つた時である。日本は恐るゝに足らぬ國でなくて、日本程恐ろしい國はないことゝなつた。如何にしてこの恐ろしい日本の威嚇を避けべきか、如何にしてこの恐怖すべき日本の壓迫を免れるか、レーニン等が焦慮慘憺、漸やくしぼり出した對日本新政策は所謂緩衝政策—即ち日本と露西亞の中間に緩衝國を建設すると云ふ古今未曾有の珍案であつた。

尤も緩衝國建設の當初の原案はオムスク政府倒潰後イルクーツクで、社會革命黨とメニシエヰキーを中堅として起つた「中央政府」となつて提唱され、彼等はせめて東部西伯利の一角丈けでも自分等の掌中に殘して置いて貰ひ度い、さすれば必らず日本の壓迫を緩和して見せると云ふ案をもち出したのであつた。けれども此の案の莫斯科へ傳達された頃は、もう已にレーニン等の胸底には別個の緩衝案がたてられてあつた。即ち緩衝國は建設するが然しその政權はあくまでボリシエヰキーの掌中

に對して全く、[illegible]の政策は[illegible]する、赤色を薄くして桃色にすべく日本に對する[illegible]前[illegible]國[illegible]と云ふ形式をとつてもかまはぬし、[illegible]目の政府は社會革命黨やメンシエヴヰキー等には渡されぬ、然し[illegible]の東方領土クラスノシチヨーコフを中心としてそれが[illegible]當らしめる：それが恰も余の莫斯科入りと殆んど同時頃、即ち一九二〇年の春匆々に定まつたもので、此の珍奇なる勞農政府の新東方策をその當面の立案者たるレーニン及びチチエーリンに親いて、親しくそれを確め、その策源地たる莫斯科から[illegible]通し得たことは、余の新聞記者としての既往に於て、聊か會心の[illegible]にたる[illegible]の一ツである。

（四）

斯くして極東緩衝國建設の第一の計劃が、コルチヤク軍の進出當時、勞農當路の腦裏に深く刻みこまれた東方からの威嚇、・ミリタリズムの日本に對する[illegible]」に他ならぬは明白なる事實であるが、こゝに吾等の考へねばならぬことはレーニン等の諸[illegible]の一ツとして單純な政治的打算丈けで割り出されはせず必らずそれには何等かの經濟的利益を伴ふと云ふ動かすべからざる一大事實である。極東緩衝國の建設は[illegible]に日本の武力[illegible]に對する一ツの政治的計劃と見るはあやまりで、そこには[illegible]にボリシエヰキー獨特の經濟政策が[illegible]用されたことを見逃すことが出來ぬ。

ボリシエヰキー當面の理想は、先づ彼等の手に落ちた勞農露西亞に於て「合理的に仕組まれた經濟組織」を建設するにある。露西亞と云ふ一國をあげて「一ツの自力で立てる共産社會」にする「共産經濟の一單位」を形成すると云ふにある。而してこれがために彼等は從來の政治的乃至歷史的版圖に拘泥せず、共産經濟から割り出した別個の領土方針をうちたてた。即ち彼等は先づウクライ、ヲルガ河流域及び西部西伯利の穀物とドーネツの石炭、ウラルの鑛物、バクーの石油、土耳機斯坦の綿花を以て「共産經濟の一單位」を形成するに缺くべからざる要素とし、又この七ツの經濟策源地さへ我が掌中にあれば、莫斯科を中心とした「共産主義の經濟組織」が「合理的に仕組める」とした。事實又革命の當初から勞農政府の最も苦辛慘憺したのは多く如上「共産經濟から見た露國領土」の支持であつて、それがためにコルチヤクを逐ひ、デニキンを破り、波蘭とも戰ひ、又英國との强敵を向ふに廻して遠くかけ離れた土耳機斯坦を失ふまいとして印度境邊まで手を伸べ、又バクーを奪還すべくアーゼルバイジヤンを赤化し、遠く黑海を越えて土耳古とも握手した。然るに如上の七大經濟策源地を除いた他の地方に對しては、レーニン始め、勞農當路は曾に一向經濟の色を見せぬのみ

か、却て波羅的方面では芬蘭、エストニア、ラトリア、リスアニア等の諸小部の獨立を此方から進んで承認し、北歐及西伯利の北氷洋岸と勘察加とはそれを擧げて列強の資本家に提供する、而して極東三州はそれを分配させて獨立共和國を形成するに至つたのも、一は是等の諸地方が何等勞農本土の資源とならぬのみか却て從來幾十億の巨資を本土に仰いで漸やく存續し來たつた厄介な「穀潰し」の領土である、所謂勞農露西亞の「合理的に仕組まれんとする經濟組織」に入れなくてもよい、否な入れては却て不合理になる、平たく云へば損の多い支店は獨立會計にした方が得だと云ふ所からも割り出されたと見ねばならぬ。

（五）

斯くして極東共和國否な緩衝國の建設は政治及經濟の兩方面から夫々相當の理由があつて割り出されたものであつて、これをたゞ一場の國際茶番として、一笑に附し去るには、あまりに根柢が深いものではあるまいか。一九二〇年五月勞農外相チチエーリンが極東共和國獨立の承認を聲明し、今年春勞農外務次官カラハンと極東共和國大統領マトウエエフとの間に通商條約が締結された。然し無論「極東共和國」！と名丈けは仰々しいが、要するに緩衝國であつて、獨立國でも何でもない。かゝる人工的の國を建設したのは政治的に見て、無論レーニン等一流の政略である、「手」であるとするの他無い。けれども斯かる先方の「手」にも、時と場合によつては此方から進んで のつて見るのも得策とすることがありはせぬか。勿論他に萬全の良策があればそれに越したことはないが、然し、あア行詰つた西伯利出兵を如何にして引つ込めるか 窮余の極 こう云ふ先方の「手」にのつてゞも、何とか結末をつけねばならぬ程、行きつまつて了つたのではないか。緩衝國の建設はいづれにしても、勞農政府の大讓歩に相違ない。これを機會に撤兵すれば、出征軍の體面も幾分か立てられる。たとひ敵の「手」と知りつゝも、それにのるの他無い羽目に落ちて了つたとすれば、いつその事、思い切つてのつて見るがよい。浦潮の分店や、知多の支店ばかりを相手とせず、莫斯科とも直接交渉を開くがよい。その方が大ザツパに徹底的に話を纏めることが出來やう。向ふにも幾多の弱點がある。經濟的には幾多の讓歩を辭せぬらしい。利權を惜しまず提供するらしい。政治的には此方から先方の「手」にのり、經濟的には彼等を此方の「手」にのせてやつては何うか……之れが抑々余が一昨年親しく勞農露西亞に入り、更らに昨年浦潮を訪うて、實地踏査の上で、立論した余の對露私見の眼目であつた。不幸にして我が當局はまだ目醒めなかつた。目醒めて

も決行の勇氣がなかつた。否な 所詮は矢張り吾人の所說の通りに行く他の途はなかつた。大連では知多と談じ 長春では莫斯科とも語つたけれども遺憾乍ら時機は已に遲かつた。 世界の形勢は刻々に進展して止まない 殊に革命露西亞 の變局と來ては走馬燈その儘である。「革命の一月は平時の一年に相當する」とはレーニンが余に語つた述懷の一ツ、實に今年の露西亞は昨年の露西亞でない、一昨年の露西亞ではなほ更らない。

（六）

既往一年有半、日本から見て最も著しい露國の變局は何か、余はこゝに少くとも次ぎの三つを指摘せねばならぬ。

その第一は勞農當路が昨年の春以來再び「日本は左程恐ろしい國ではない」と云ふ當初の意見に逆戻りしたことである。何が故に勞農當局の「日本觀」が斯かる逆轉を見るに至つたか。曰く「不徹底なる撤兵」……少くともその主なる原因である。もし日本軍にして遲くとも一九二〇年の春頃、何等の未練なく、斷乎として男らしく、思ひ切つて一擧に西伯利を撤兵したならば、日本、殊にミリタリヅムの日本の權威はかくまでに露國の勞農の前に卑下されずに濟んだであらう。否な、寧しろ却つて一擧に撤兵したならば、レーニン等の胸の底には依然として「日本に對する恐怖の念がのこつたであらう。日本軍はいつ何時捲土重來するか、何んな恐ろしいことを仕出かすか、一種の不安は常に東方から勞農政府を威嚇したであらう。然るに我が軍の撤兵振りはどこまでも決斷がなく、未練がましい、女々しい、意氣地のない、あくまでもダラ〳〵したものであつた。先づ黑龍江を引揚げ、それから後貝加爾洲を捨て、北部烏蘇里を退き、今度は南部烏蘇里と尼港方面……それでもう益々全部を撤するのか思つて居ると、薩哈嗹丈けは矢張り當分駐兵と云ふことになつて居る、いつまでたつてもはてしがない。こうした不撤底な女々しい撤兵振りは如何なる印象を露國の勞農に與へたか。率直なる彼等は勿論日本軍は赤軍の壓迫に堪えかねて退却したものとしか考へぬ。彼等は日本軍は押しさへすればいくらでもヘツこむ、日本軍は案外意氣地がない、恐ろしくもこわくもない……と云ふことにして了つたのも當然ではあるまいか。もし一擧に全部の撤兵を敢行したならは、誰れが之れを赤軍にシテやられての退却だと見やう。むしろそれを捲土重來の準備と見たかも知れぬ。少くとも弱く見られる筈はなかつた。

昨年大連會議で知多委員ペトロフ等が頑強に日本の撤兵を強要して下らなかつたのも、今度の長春會議で勞農委員ヨツフエが高飛車的に薩哈嗹撤兵問題を提げて突つ込んで來たのも、畢竟ダラシない不徹底な撤兵から、「恐ろしくない日本」と思つ

たのが見當違ひで「日本は案外くみしやすい」となすに至つた勞農當局の「日本觀」の急變の反映ではなかつた。

（七）

第二は主として經濟方面の變局である。即ち一九二〇年末の對波蘭戰爭と昨年度の凶作とがレーニン政府をして、所謂「經濟正面に於ける戰略的退却」を余儀なくせしめ、その結果、かの有名な新經濟政策なるものが實施されることゝなつた。

新經濟政策實施の結果、國内に於ては各方面に資本制度が復活される、對外關係に於ては一層速急に資本列强と妥協して外資を吸收する方針となる。內外に對する經濟政策は片ッ端から改變される。所謂「合理的の經濟組織」とか「七大經濟策源地を基礎とする一ツの經濟單位の形成」など云ふ當初の計劃も引つ込められる、少くともその即行計劃が延期された。その結果は更らに「共產經濟から割り出された領土方針」も撤回されて、又もとの通り政治的乃至歷史的領土方針が復活される。即ち領土はよくても悪くても廣い方がよいとなる。殊に極東三州は東洋諸國との通商上欠くべからざる仲介地である。浦潮斯德に至つては極東に於ける外資吸收口として最も肝要な港となつて來る。遂には今春勞農外務省前極東局長ヲズネセンスキーの如き「ウヰッテの極東政策」復活論を提唱して勞農官場を賑はせるに至つた。

斯くして緩衝國建設當初の政治的動機、即ち日本に對する恐怖は著しく薄らぎ、經濟上の「損の高い支店を獨立會計とする」の策も撤回に及んだので、何だか極東共和國の存在が、露國から見て、だん／＼意義が小いさくなつて來るやうに思はざるを得ぬ。今度の長春會議で、ヨッフェが開會劈頭、勞農露國と極東共和國とを一方の連帶條約國となし、更らに協約の効力範圍をなるべく廣めて、勞農露國にも及ぼさうと頻りに術數を廻らした如きも、要するに將來いつか極東共和國を、たとひ全然取消すまでにはゆかぬにしても、少くとも、勞農聯邦の一ツに編入する位のことは、あり得べきことゝして、その場合の用意に、日本と極東共和國丈けの協商を避けんとしたものではあるまいか。

（八）

變局の第三は昨春浦潮斯德に於ける莫斯科の分店アントーノフ政權が倒れて、メルクーロフを首領とする白色政府（最近ジテリフス將軍メルクーロフに代つて同政府の首班となつた）の現出したことである。

僅かに日本軍駐屯區域內に蠢動し、兵は多少あつても（カッペリ及セミョノフ軍の殘兵）武器はなく、政府とは殆んど名の

みの浦潮政府、固より物の數に入れるにも足らぬやうに見へるのだが、しかもなほ此の政府の出現がどれ丈け我が「目醒めた對露外交」の妨害となつたか。アントーノフ政權の存在した頃は、露國はたとひ極東三洲を獨立させたとは云へ、內實に於ては全く莫斯科政府の配下に統一されて居つたから、交渉の相手が判然とわかり、撤兵にしろ、通商にしろ、萬事まとめて交渉をやらうと思へばやれた。然るにこゝに突如として毛色の變つた政府が一ツ出現し、且つそれが又最も我れに手近い浦港に於て出來たので、事は甚だしく六ケしくなつて來た、複雜になつて出來た、押收武器の如きも、どつちに渡してよいか、色々と面倒なことになつて來た。いつそのこと斯んな厄介な政府は思ひ切つて潰して了つた方が片がつく譯だけれども、我が軍が從來同情を持つて來た白色政府を自ら手を下して潰すことは到底出來ぬ義理合である。否な、我が軍のある筋は今も尙ほ彼等に對して援助を辭せぬ。何とかしてその存在を續けさすべく百方策を廻らして居る。漸やく我が所謂對露策に目醒めた外務當局が兎も角も當初の方針を進めて大連會議を開き、その決裂するや更に長春會議を開いて莫斯科及知多兩政府を對手に出來る丈け交渉をやつて見たが、それは外務當局丈けの方針であつたものか、軍部のある筋では依然白色政府に同情をよせ、從來の援白討赤策をすてない。その揚句はついに今度の武器紛失問題が起る、二重外交問題がもち上る。愈々以て不體裁なことになつて來た。

（九）

固より白色政府は赤色乃至桃色政府とは到底氷炭相容れない。浦潮政府を知多もしくは莫斯科政府と混同するが如きはもつての外の謬見である。どこまでもこの區別を判然とつけて置かねばならぬことは云ふまでもない。然し乍ら、靜かに物事の表裏をあわせて考察する時、露國問題をその全體を通じて達觀する時、我等は何うしても兩者の區別をあまりに絕對的のものに考へ過ぎては居らぬか……と自ら反省せずに居れぬ。元來白と赤もしくは桃色とは無論同じでない、然しそれは單に色合丈けの差であつて、その實質は何うか。主義と政見とを異にして居るが、然し彼等はともに同じい露西亞人ではないか。血は水よりも濃い。兩者の爭ひにわり込んで一方に肩を入れ他方を抑へるのは畢竟夫婦喧嘩にわり込んで餘計な世話を燒くやうなものではあるまいか。大風一過、夫妻が再び仲直りした時、兩者からは惡まれる。世間からは笑はれる。

從來我が西伯利對策の事毎に失敗を重ねて來たのは、多くその原因をこゝに胚胎して居る。單純にして率直、利害の打算を

[illegible]して誰に向け我が軍人が特に多くこの誤算をくりかへした。

セミョーノフは快男兒だと聞けば直ちに彼に惚れ込む。ホルワットは練達した老爺だと云へば直ぐ樣彼の爲めに肌を脱いで立つ。コルチャクは偉丈夫だと聞けば前後を顧みずに彼に落ち込む。此等白色將軍を扶助すれば、必らず西比利はおろか露西亞が赤白化し得る。彼等を援助することが帝國にとつて千年の計である…と無暗に彼等に肩を入れ、人命を犠牲にし、財を投じて援助した。しかも事態が少しく良好となるや、彼等白色將軍は徒らに尊大虚傲、日本など眼中にないといふが如き風を見せつける。而して一朝事志の如くならざるや、日本の援助の足らざるを怨み、自分等の意氣地なきを恥づることがない。愈々赤軍の大鐵槌におし潰されるや、その多數の部下は敵側に早變りし、頭目丈けは身を以てのがれ、救ひを我れに求めて來る。之れを憐みてやらないと直ちに日本武士の無情を訴へる。何たる馬鹿々々しいことだ、恩を施して仇で報ひられるとはまさにこの事を云ふのか。しかも斯くの如きは西比利出兵足掛五年間、終始間斷なくくりかへされ、今日に至るも尚ほ改めるに至らぬとは一體何所にその損得があるか。重ねて云ふがそれは要するに赤色乃至桃色政府と白色政府とをたゞその色合の差丈けを區別して、その實質の同一なることを忘れたことにある。主義と政見をこそ異にすれ―それとて頭目丈けのこと―兩者共に同じい露西亞人であることを忘れたことにある。純白の將軍でシエヰキーとは不倶戴天の仇敵であると固く信ぜられたコルチャクすらイルクーツクの赤色法廷で、訊問が日本の某武官の白軍援助の報酬として領土的要求をなしたと云ふ問題に及んだ時、自分は露國の將軍としてかゝる要求に對しては無論斷然拒絶したと辯じ、たとひ「白」であつても矢張露西亞人であることを切言して、赤いボルセヰキーの裁判官をして感泣せしめたと云ふ事實もある。もし夫れコルチャクその他白色將軍の部下の兵卒に至つては主義も政見もあつたものか、否な、むしろ彼等の多數は勞農主義者であつた。コルチャク、デニキン、セミョーノフ等白色將軍の擧つて事の半ばに挫折して無殘な末路をたどるに至つた所以はそこだ。浦鹽政府と莫斯科乃至知多政府と、その色合こそ白、赤、桃色の差あれ、實質はいづれも同じ露西亞人、二者は之れを全然混同するも不可だが、絶對に別物視するも亦不可、今後の對露策を講ずるもの、先づ露西亞を露西亞人の露西亞として全體的に達觀せよ、個々別々の個人や小團體に腐れ緣をつなぐをやめよ、而して過去の失敗について學び、再びそれを反覆せぬ樣心せよ

（十月十日）

トルコの復興と回々教徒の運動

大久保幸次

一

歐洲人――基督教徒――白人の金城鐵壁もそろそろぐらつき始めた。「特權階級」としての顔が段々きかなくなつて來た。我が日本人の爲めに、白人萬能の傳統を破られた彼等は、今度はトルコ人の爲めに、世界は自分丈けのものでないことに氣がついた。ムスタフア、ケマール、パシアの奮起は、唯にトルコ人の爲めであるばかりでなく、回々教徒はいはずもがな全アジア人、否虐げられたる全人類の、生きんとする心の叫びを代表してゐるに外ならぬ。

歐洲人は東洋を不易、不變なるものと考へてゐた。もう、固り切つた、押しても、突いても身揺ぎもしない、感じの鈍い、何をしても構はぬやうな、大きな團體として取扱つてゐた。故に彼等は思ふ存分、勝手氣儘に東洋をいぢくり廻し、さいなみいぢめて平氣でゐた。彼等が、近時、忽然として覺醒し、歐人の横暴を憤つて、己が生存權を主張し始めた東洋を見て、眼を丸くして驚きあわてたのも無理はない。

東洋の中でも、回々教徒の世界は、その地理及び傳統の關係上、歐洲から一番虐げられてゐた。彼等は、狂暴なる蠻人と罵られ、其の土地は奪はれ、其の生存は脅かされてゐた。併しながら、回々教徒は如何に歐洲人の壓迫を被るとも、己が立場を固守し、己が傳統を捨てず、己が世界に立籠つて、依然、歐洲基督教徒の大雰圍氣と對抗する別個の一大雰圍氣を持ち續けて來た。この別個の雰圍氣こそは、回々教徒の力の存するところであつて、歐洲基督教徒から嫌惡され、迫害されるのも、これあるが爲めであると同時に、近時彼等が根強く活動し得るに至つたのも、亦、これがためである。

一體、世界に於ける一神教を代表する猶太、基督及び回々教徒の世界程仲の惡いものはあるまい。極東に於ける諸教徒間の爭ひが比較的穏かに行はれたに反して、この三教徒は絶ず猛烈に爭つた。尤も、猶太、回々教徒間の仲は左程でもないが、基

督教徒は他の二教徒を相手として永い間爭鬪を續けて來た。しかも、それは信仰そのものゝ爲めの爭ひではなく教徒によつて構成された大きな世界とか、雰圍氣とかの間の戰で　例へば、基督教徒の世界といふやうなものと、回々教徒の世界といふやうなものが、いつの間にか出來上つて、それ等が互に別個の存在として、全體となつて相對立し、相頡頏するやうになつてしまつたものである。しかし、もとを洗へば、この三教こそは、世界に於けるあらゆる宗教の中で、最も結緣の深いもので、どれも同じ一本道を歩ゆんでゐる姉妹教に外ならぬ。即、三者とも、宗教素質の豐かな西南アジアのセム種族の間から生れ出でた所謂一神教で、其の代表者たるモーゼもキリストもムハンマッドも亦この種族の傳統の中に育てあげられた人物に過ぎない。ところが、この共通性が、反つて同時にまた、反撥性となり、彼等はもう傳統的に惡み合ふ間柄となつてしまつたのである。

所謂呪はれた猶太教徒を壓迫してしまつた歐洲基督教徒の世界の爲めには、回々教徒の世界の現出は實に容易ならざることであつたらう。彼等は自分の眼の前に、同じく一つの神を信仰する教徒の大きい別世界が忽ち出來上つたのを見て愕然として驚ろいた。

二

この新世界の構成者はアラビアのムハンマッドその人であつた。彼はアラビア人中のアラビア人と稱すべき人で、齡四十の時（西暦六百十年）初めて新宗教に對する神の默示を受けたのである、怪しげなる神々を崇拜し、信仰的、道徳的に墮落し切つた當時のアラビア人の狀態に慨歎してゐた彼は、行商として四方を遍歴してゐる中に、猶太教生や基督教徒に接して、其の長所、短所を知つてゐたが、第一の默示を受くるに及び、愈々豫言者としての強き確信をもつて、直ちに新宗教の傳道に着手したのである。

今極く簡單にこの回々教の教理に就いて説明して見たいと思ふ。回々教の眞の名は、アラビア語でイスラームといふ。イスラームとは正に「歸依」の意で、神と神意の中に自分を打ち込んでしまふことである。我々が回々教と一口にいふのは、支那の西域に住んでゐたトルコ民族の回紇（ウイグル）人が之を信じてゐたところから支那によつてさう命名されたからである。信徒はムスリムで、マッサルマンとか、ムーゼルマンとかいはれてゐるのは其の複數形ムスリムーンの轉訛である。因に教祖の名はマホメットとか、ムハメッドとかモハメットとかいろ〳〵に成つてゐるが、ムハンマッドといふのが、アラビアの原音に近い。トルコでは、これがメーメッドと訛くなつてゐる。經典は所謂「

ーランで、これはクルアーンといふのが原語の發音に近くカラー（讀む）といふ言葉から出てゐて、「讀まるべきもの」の謂である。コーランは普通百十四章（スーラ）に分たれ、教祖がメッカ、メディナの兩都で受けた默示を、詩や散文詩のやうな形式をもつて、美しいアラビア語で荘重に書いてあるが、單に信仰の指南車たるに止らず同時に法典であり、又日常生活の規範である。

回々教の教理は、大體に於て猶太、基督兩教とに似たり、寄つたりのもので、極めて率直、簡潔である。即ち、イスラームの根本義は"La ilaha illalah muhammadun rasulalla"（神の外に神なく、ムハンマッドはその豫言者なり）に外ならぬ。回々教の神（アルラー）は獨一無二の絶體神で、ゾロアステルの二元神や、基督教の三元的一神や、原始アラビア人の多神に反對し、徹底的の一元論である。即ち、神は永遠の存在で、生まず生まれず、神と均しきものなく、最初にして最後のものである。神は偉大であり、正義であり、崇嚴であり、全智であり、王者であると共に、慈悲であり、惠み深きものであり、平和であり、保護者である。そして、かゝる大いなる神を識つて、其の中に浸入してしまふことが人間の理想でもあり、務めでもあり、又幸福でもあると説いてゐる。從つて、かゝる絶體にして大なる唯一神の御前にあつては、人間は凡て平等なる單位である。人間と神との距離は誰れも同じで、その間に些の差別もない。故に回々教では、佛教や基督教の意味に於けるが如き僧俗の區別は無い。否、教祖ムハンマッドすらも唯の人間に過ぎない。彼は自己に神の性を具へてゐるとは決して云はない。唯神の聖旨と福音とを傳へる爲めの使はし人であり、豫言者であり、改革者であるに過ぎないとしてゐる。從つて回々教では、アブラハムや、モーゼや、キリスト等をも偉大なる豫言者としては認めてゐるが、例へばキリストをば、三位一體の一部としての子たる神としては認めてゐない。彼も矢張りムハンマッド同樣人間なのである。然らば、此等の豫言者の中でのムハンマッドの位置はどうかといふに、ムハンマッドは、一切の豫言者の中で、最後のものにして、又最も完全なるものとして考へてゐる。此の點で回々教の立場が定まる譯である。即ち「神の外に神なく、ムハンマッドはその豫言者なり」である。

回々教の一切の信仰は、神の外に神なしてふ簡單にして、而かも偉大なる根本義を忠心として成立する。いはゞこれが大本の幹で、他のいろ〳〵の教儀は、凡てこの幹から派出する枝葉に過ぎない。五大信條として、この根本義と、祈禱、斷食、順禮と、それから喜捨とを數へるが、第一箇條と他の四箇條との

間には甚しい隔りがある。何故なれば、祈禱以下のものは、唯一神を信仰し、之に奉仕する爲めの勤行に過ぎないからである。回々教徒の第一の務めとして、又神との交通を意味する祈禱に對しての必要條件としての心身の淸淨の如きも亦かゝる大なる神の御前に跪く爲めの、人間の全部的準備に外ならぬ。自分は、回々教の教理に關する詳細なる説明は之を他日に讓り、これで只簡單に此の宗教の根本義をのみ述べて置いたのであるが、上に獨一無二の神を据へ、下に一切平等の人間を置いた信仰こそ、三億の教徒の心を一つに結びつける堅い楔で、こゝに此の教徒の侮るべからざる力が存し、そして、かゝる力を持つて、今や忽然として覺醒したる彼等は、その生存の爲めの運動を開始したのである。

輓近に於ける回々教徒の運動は實に世界の驚異とも稱すべきものであつて、從つて極めて興味ある問題である。しかし、紙面に制限がある爲めに、到底各方面に亘つて評述することは不可能であるからして、回々教徒覺醒の理由を簡單に説き、今世界の耳目を聳動せしめつゝあるトルコ民族の民族的活動を中心として、近時二三の國を組織したるアラビアの民族の運動に及び、最後に回々教徒の運動の特長を記して此の稿を終ることにする。

三

近代に至るまで回々教徒の世界は最も悲慘なる狀態に陷つてゐた。歐洲基督教徒の世界が日進月歩の勢を以て、內外に發展を續けて行くのに反し、この世界は、病人のやうに眠りこけてゐた。彼等は、古の教徒が持つてゐたやうな熱情を失ひ、精氣潑溂たりし信仰は、頑なる形式に固定し、華かなりしサラセンの文化も影をひそめ、風俗は頽廢し、道德は衰へ剩さへ、トルコ、ペルシアの如く僅かに國家的存在を保てるものゝ外は、多くは、異教徒たる基督教徒の壓迫の下に屈從を忍ばねばならなかつた。

然るに、十八世紀の初め、アラビアの內地ネジドにアブドルワハブ出でゝ、宗教改革を唱へ、原始回々教の眞純に立ち戻るべしと絶叫するや、沈滯しゐたる回々教徒の世界も俄かにざわめき出し、彼等は漸く覺醒して、新らしき天地に向つて進むべき用意を整うるに至つた。それからトルコ皇帝アブデユル、ハミード二世（一八七六――一九〇九年）が汎イスラーム主義の理想を抱くや、よし其が時代錯誤であつたにもせよ、兎に角一部の回々教徒に生氣を與へ、緊張せしむるには充分であつた。內に改革者、理想家を出した彼等は外より色々の新らしいものを吸收することを怠らなかつた。彼等の世界はいかに墮落

し、如何に沈滯したるにもせよ、歐洲近代文化の主要なる要素をも供給し、或は世界を震慴せしめたる程の大國をも建設した優秀なる諸民族を含むでゐる立派な文化的雰圍氣であるから、絶えず兩方から輸入さるゝ驚くべき物質文明と、新らしき精神文明とに接して、決して無關心ではゐられなかつた。そこには無論、新舊思想の衝突も行はれたが、彼等は、便利なる各種の交通機關や、電氣や、器械に對して、古き生活を適應せしむるに努め、近世科學や、代議制度や、社會主義や、資本主義や、共産主義や、勞働問題や、婦人問題やをば興味を以て研究した。取り分け、トルコの如き直接歐洲に接せる民族にありては、國家を思ふるの士は、頻りに西歐文物の輸入に努め、頑迷なる專制政治を覆して、憲法を復活せしめた。（一九〇八年七月）ペルシアの如きも、其の文化は到底トルコに及ばないが、それでも專制に對する革命起り、同じく今世紀の初めに於て立憲國の班に列した。

かうして二三の獨立國が頻りに國勢の挽回と內政の改革とに努めてゐる中にも、歐洲よりの力の大波は、日に〳〵回々教徒の堤防を壞ち行くのであつた。回々教の宗國たるトルコさへ、大戰前に於て歐洲領土の大部分とアフリカの版圖の全部を失ひ、ペルシアの如きも、英露兩國の勢力範圍となり、更にアフガニスタンに至つては、其の獨立は單に名義にのみ止まり、アラビアのオーマンは最早取るに足らず、アフリカ唯一の獨立回々教國たりしモロッコもフランスの爲めに併せらるゝの運命に陷入つてしまつた（一九一二年）其の他の諸地方が、悉く基督教國の支配を受くるに至つたことは勿論である。

かく自分等の天地が眼に見えるやうに狹められてゆく樣を見てゐる回々教徒はどうして安閑として居られやうぞ。彼等はもう昨日の回々教徒のやうにぼんやりしてはゐられなくなつた。彼等の胸の中には、生きんとする炎が燃え上つて來た。彼等は歐洲基督教徒の橫恣を惡まずにはゐられなかつた。彼等は至る所に運動を起した。そして日露戰爭に於ける日本の勝利を見て、非常に意を强うした。そして自分等もさうして白人間を打破せねばならぬと考へた。

世界大戰後は彼等の運動に一層大なる自信を與ふるに至つた。何故なれば、彼等は、これによつて歐洲に對する幻滅の悲哀を感じたからである。彼等は軍人として歐洲の地に至り、初めて所謂文明世界なるものを見た。そして自分等が想像してゐたのとはまるで違つてゐたことを知つた。そして其は決して彼等の理想鄕ではなく、幾多の僞善と罪惡と矛盾と缺陷と爭鬪とに充ちて殺氣の文明であることを發見した。彼等はおもい〳〵敵

郷へ歸つて、見聞した醜き基督教徒の世界を同胞に物語つたとき、彼等の心は如何に動いたであらう。彼等は、より良き世界の建設の爲めに、そしてほんとうの自分等の安住地を見出す爲めに、最善の努力となすべきことを心に誓つた。そしてそれが爲めには基督教の支配から、壓迫から解放されなければならぬと考へた。過激派と回々教徒との理想には氷炭相容れざるものであるが、現狀破壞の點に於て一致してゐるので、過激派は東の天地を其の宣傳の地として睨んでゐる。しかし回々教徒の運動は飽くまでも神を中心として行はれてゐるのであるから、よし政策上一時これと結びつくことがあつても、一切の宗教を無視する過激派とは到底道伴になつて行く事は出來ないのである。

かうして、全世界の回々教徒は今や至る所に於て生存權の主張の爲めに活動しつゝある。列國の對トルコ政策の失敗は、愈々回々教徒の反感を買つた。インドに於ては、トルコ人の爲めと、自己の生存の爲めに、回々教徒はシァヴカット、アリー兄弟を中心とし、今までは犬猿の間柄であつた印度教徒と握手し、ガンヂーと力を合せて、排英運動をやつてゐる。ペルシヤにも、アフガニスタンにも、ロシアのトルコ民族の間にも、アラビア人の間にもかゝる運動は行はれてゐる。更にアフリカを見るに、エヂプトは到々英國と分離してしまつた。トリポリではイタリア排斥が行はれ、モロッコでは反イスパニヤ運動が芽をふいた。そして最近に於ては、偉人ムスタフア、ケマール、パシアの蹶起によつて、トルコ人は基督教徒に對して大氣焔を上げ、回々教徒を狂喜せしめ、世界に對してはトルコ人の偉大さを教へ、全アジア人に對しては、痛快さと賴もしさの感じを與へた。

さて、今回のトルコ人の成功は其の民族運動の賜であるが故に、私はかゝる運動の起源と、經過とを少し詳しく述べ、序に之と密接の關係のあるアラビア人の民族運動をも少しばかり書いて見たいと思ふ。

四

回々教徒のいろ〳〵の新しい運動の中で最も注目すべきものはこの民族運動であらう。一體、回々教では、信徒は、其の人種、國境の別なく一切平等であるが故に、從來彼等を主として支配してゐたものは、宗教的感情であつて、民族的感情若しくは國民的感情ではなかつた。即ち、同教徒ならば、いづれも同胞で、敢て、皮膚の色や、國別や、言語の差異や、歷史の如何を問はなかつたのである。例へば、トルコの如き民族關係の複雜な國では、宗教の如何を問はず、トルコ國籍を有するものは、いづれもトルコ臣民ではあるが、回々教徒たるトルコ人

は、異教徒の同國人よりも、信仰に繋る他國の回々教徒の方に、ずつと近い親しみを感じてゐたのである。そしてかういふ宗教的感情が、回々教徒をして至極團結力の強い、一つの大きな纏つた雰圍氣を形ちつくらしてしまつたのである。

然るに、この回々教徒も、前世紀の中葉以來、嘗て歐洲諸民族がしたやうに、民族的に目醒めて來た。基督教徒が凡百の民族を包含してゐるやうに、回々教徒も亦、別個の民族的存在を持つてゐるいろ〳〵の民族から成り立つてゐる。彼等は今迄回々教といふ大きな世界の中に、神といふ大いなる實在の下に、自分等の人間としての均しさのみを知つてゐたが、今や、自分自身を振返つて見た時、めい〳〵が違つた環境の中に、違つた衣服を着、違つた家に住み、違つた言語を使つてゐることに氣がついた。そして、それに氣がつくと、自分の本體をもつとよく知つて、自分は自分としての存在を續けて行くことが、どうしても必要でもあり、亦必然でもあるやうに感じた。かうして回々教徒の間に忽ちにして民族運動が興つて來たのである。即ち、彼等は一齊に回々教のうすものを拂ひ退けて、自分の本然の姿を凝視しやうと努めた。トルコ人はアジア人の源となつかしみ、ペルシヤ人はイランの古を忍び、アラビア人は、回々教を世界に與へたる撰民らしい誇を感じた。そして彼等はめいめい己が民族の尊さと、偉大さとを感じて、神聖なる郷土を建設せんが爲めに努力した。

取り分け彼等の中で、民族運動を最も眼醒しくやつたのはトルコ人であつた。トルコに於ける國民的、民族的自覺は既に前世紀の中葉に其の萌芽を發し、トルコ民族の爲めに強固なる祖國を建設することを以て其の目標とした。さて、青年トルコ黨が暴君アブデュル、ハミード二世を廢して、新トルコを建設するや、（一九〇八――一九〇九年）初めは自由、平等、博愛の主義に則つていやしくもトルコに國籍を有するものは、民族、宗教、言語の差別なく等しく忠良なるオスマンリ即ちトルコ臣民たる可きことを宣言したので、異教徒、異民族は互に手を取り相抱擁して嬉し泣きにないたといふ程であつたが、青年トルコ黨は熱心なる民族主義であつて、トルコ人が從來あまりに國內の異民族、異教徒に寛大で、其の同化を強ひなかつた爲めに、すつかり國步を誤つてしまつたことを知つてゐるから、自由、平等も結構ではあるが、國家の統一を計る爲めには、異分子の同化が最も必要であることを考へたので、今度は、消極的に異民族異教徒のトルコ化に努めた。オスマンリ主義は即ちこれである。無論、トルコ國內の一切の住民はオスマンリの名の許に統一せらるべきものであるから、その爲めには、先づ總ての國の

徒國民にして各民族の中堅たるオスマン、トルコ化されることが必要であつたらうが、併し、これはトルコのやうに數個の大いなる異民族や異教徒が代表されてゐるところでは、到底困難にして實行し得べからざる事であるので、トルコ人のかゝる態度は、可成り他民族の感情を害したやうであつた。

オスマンリ主義に失敗したトルコ人は純民族運動たるトルコ主義に走つた。トルコ主義はトルコ語でテュルクリュック（Türklük）と稱し、純然たる人種的——民族的の意義を有し、他民族には關係なく、自分がどこまでもトルコ人としての存在を確保しやうとするのである。歐洲に於けるアジア系統に屬する諸民族の運動としては、フインランド人、エストニア人、ハンガリー人、ブルガリア人、それから此のトルコ人を結びつけやうとする所謂ツラン運動の如きものもあるが、此のテュルクリュックといふのは、一千萬のオスマン、トルコ人の民族的存在を明かにすると共に、其の人種的系統と、言語と、宗教と歷史とを共通にする他國に散在する一切のトルコ民族（オスマン、トルコ人を入れて約四千萬）との精神的結合をも計ることを目的とするもので、汎トルコ主義と稱せられるのも之が爲めである。この當時は世界諸民族間には汎スラヴ主義、汎ギリシヤ主義等もあつて、この汎トルコ主義と相對立してゐたが、小アジアに於ける土、希戰爭はある意味に於て、トルコ主義とギリシヤ主義との爭も見らるべきである。

五

元來オスマン、トルコ人は、その他のトルコ民族に對して優越的感情を持ち、且つ囘々教の傳統あるによつて、今迄已が民族的本體を凝視することが出來なくなつてゐた。然るに、今や彼等は自分は孤獨の存在には非ずして、世界の他の部分には、自分の血に繋る同胞の存在し、自分も亦其の一員であることを知つて、非常に頼もしく思つた。この同胞とは、所謂ウラル、アルタイ語系に屬する北方アジア民族のツングース、モンゴル、サモイエード及びフイノウグルと並び稱さるるトルコ、タヽル民族即ち廣義のトルコ民族のことで、現今これに屬する主なるものは、東より數へて、シベリア、レナ河畔のヤクート、イエニセイ河上流のコイバルとカラガス、支那甘肅省以西、新疆省及び蒙古西部のタランチ、ヅンガン、支那の西境から中央アジア方面へ住居するカラ、キルギス、カラ カルパク、キルギス、ユズベク、サルト、中央アジアから西アジアへかけて擴がつてゐるテュルクメン、インド北部のモグル、イルチシュ河畔のシベリア、タヽル、ヨーロツパ、ロシア東南部に住むカザン、アストラハン、クリム、ノガイ、カフカス、それからペルシアへ

も擴がつてゐるアゼルバイヂアーン等のいろ〳〵のタヽル、次にバシュクルド、それから、一番西の方へ住つてゐるのが、バルカン半島と小アジア地方のオスマン、トルコ人、即ち單に我々がトルコ人と稱するもの――此等がトルコの名を有する約四千萬の一大民族であつて、東、シベリアから西、東歐に亘つて擴く散住し、從つて文化の程度や生業の種類を異にしてゐるが、いづれもトルコ語の各方言を用ゐ、回々教を奉じ（ヤクート等の希臘正教を信じ、又古代北アジアの原始宗教たるシアマンの名殘を止むる僅少の例外を除けば）勇敢にして、質直なる北方民族で、古來屢々大國を建設して東西の舞臺に活躍した。今のトルコ帝國はその中の最も永續的のものであり、又代表的のものである。

トルコ人の前にかゝる新らしい世界が開かれた時、彼等は如何に心強く感じたであらう。彼等と他のトルコ民族との間には忽ちにして民族愛の鎖が結ばれてしまつた。兩者の間の精神的交通は頻繁になつて來た。アジアの奥のトルコ、タヽル人にして、トルコを慕ひムハヂール（回々教の爲めの移住者）となつて、トルコに歸化し、トルコ主義の爲めに盡すものが增へて來た。トルコ人の方でもさうである。彼等は、從來自らオスマンリ（Osmanly）と稱してゐた。之は文明人、精錬された人といふ事を意味するからである。之に反してトルコ人の本來の名たるテュルク（Türk）は、未開人、粗野愚昧なる人を意味してゐたから、トルコ人は從來の稱呼を避けてゐたのであるが、今や彼等は自らテュルクと稱して、トルコ人の名の最も美しく、且本元的なることを誇りとするに至つた。その言語も同じく、オスマンリヂア（オスマンリ語）(Osmanlyja) といふたのを、テユルクヂエ（トルコ語）(Türkje) と稱するに至つた。こんな風にして彼等は先づ言語の整理の歩を進めたのである。

民族運動の起る處では、必ず言語の整理を伴ふのであるが、トルコでも先づ之に手を染めて、國語の整理と外來語の驅逐とをやつた。一體、トルコ語は、文法の正確な、單語の豐富な、格調の調和的な立派な言語であるが、回々教とペルシア文明との影響を受けて、アラビア語とペルシア語の單語や表現法を多量に含んでゐる。その關係は、我が國語の中の漢語のやうでもあり、歐洲近代語の中のギリシヤ、ラテン語のやうでもあつて、取り分け文語に於て甚しい。勿論、其の中にはトルコ語化されたのも隨分あるけれど、兎に角、國語の純粹を傷けるものとして、民族運動者は、出來得る限り外來語の數を少なくし、在來のトルコ語を其の代りに多く使用することにした。其の結果從來、徒らに煩雜を極めてゐた古典トルコ語の中から、簡素

なる形式を以て、複雜なる內容を微細に表現し得る近代トルコ語が生れたのである。前に云つた通りに、ロシア共の他に住んでゐる他のトルコ民族即ちトルコ、タタル人の各方言にも、無論アラビア語や、ペルシア語が含まれてはゐるが、其は比較的少數であるから、トルコ語から、かゝる外來語を除けば、shがchとなり、hがmとなり、vがbとなるやうな、方言上の差異さへ考慮すれば、コンスタンチノーブルのトルコ人と、ロシアやアジアの內地に住んでゐる他のトルコ、タヽル人との間に言語を通しての交通が出來るのであるから、全トルコ民族の精神的結合に稗益することが頗る大である。そして一方君府のトルコ語がトルコ人の標準語であるやうに、ロシア內地のトルコ、タヽル人の標準語は、君府と相並んで、彼等の文化中心地たるカザンのカザン、タヽル語である。そしてトルコ語とタヽル語との中間を行つたやうな、どのトルコ民族にでも解るやうな言語を殊に使用してゐるものさへある。

それから國語の整理と共に國字の整理をもやつた。トルコ語は凡て他の回々敎徒のいろ／＼の言語のやうに、アラビア字で綴られるが、これは、基督敎徒の大部分がローマ字を使用してゐるのと同じである。ところが、アラビア字は、アラビア語の性質上、元來子音を表はすべき文字で、個々の母音を表はす完全な字母を缺いてゐるから、トルコ語の如き母音の協調法といふやうな複雜な母音組織を持つてゐる國語では、どうしても其のまゝ使用することは不便であるので、從來も出來得る限り、綴法に注意を拂つてゐたが、民族運動者は、以前よりも母音をより正確に表はせるやうに工風し、綴を整理し出來得る限りトルコ語に適應させるやうに努めた。尤も、新文字作成の試みや、我國の如くローマ字採用論なども起つたが、それは具體的の結果を齎らさなかつた。

國語、國字の整理の次に、民族運動の主要なるプログラムは國民文學の建設であつた。トルコの文學は、ざつと古典文學、通俗文學及び近代文學の三通りに區別することが出來やうが、其の中古典文學は著しくペルシア文學の影響を受けてゐて、極めて濃艶なものではあるが、純粹なるトルコ民族の純眞なる藝術的産物と見ることは出來ない。トルコ人のほんとうの文學は、ごく古いものは別としてペルシア文學の傳統を脫した近代文學であつて、單純と眞實とを其の目標とした。この新らしい運動は、既に十九世紀の中葉に始まつて、その初期に於ては、西歐文學、取り分けフランス文學の影響を受けてゐたが、それが段々薄らいで來て、次第に民族運動の盛んなるにつれ、純トルコ人の思想や、感情や、生活を純トルコ語をもつて發表す

やうになつた。此等新トルコ文學の主要なる代表者には、過渡期に於ては、此の國近代の最大詩人と稱せらるゝナーミック、ケマール氏(一八七八年歿)があり、ほんとうの意味の純國民文學勃興期(十九世紀の末葉)に於ては其の先驅者とも稱すべきメーメツド・エミーンを初め、ジヤー・ギョク、アルプ、アカ、キュンデュズ、イブラヒム、アラウッデイーン、アメル、イフ、エッデイーン、サリック・ゼキ氏等があつて、女流作家では、アンゴラ政府の文部大臣をしたハリーデ、エッデイーブ、ハヌム(同政府國民議會副會長ドクトル、アドナン、ベイ最セ夫人がもすぐれてゐる。

純文學の外に民族運動者は、頻りにトルコ及びトルコ民族の歴史を編纂した。トルコ人の持つてゐたものは、不完全なトルコの歴史や、回々教に關する記錄位に過ぎなかつたが、今や彼等は、トルコ民族の光榮ある過去を思ひ、アジア人の偉大なる事業を慕つて、立派な、系統的の民族史を編み、盛んに已が民族の偉人の傳記を書くやうになつた。君府のトルコ史學會發行の史學雜誌には貴重なる創意的の論文が多い。

右の外、有名なる「トルコ人の御土」(Turk Yurdu)を初めいろ／＼の民族主義の雜誌や、書籍や其の他民族的精神を鼓吹する爲めの種々の機關が設けられた。民族運動の中には、トルコ主義を高調するの余り、極端に走つて、他民族の感情を害したやうなものもあつたが、兎に角、トルコ人の民族的覺醒を促がし、其に關聯する文化的効果の著しいもののあつたのは、動かすべからざる事實である。

六

かゝる民族運動は、歐洲大戰當時まで續いて以て今日に及んでゐるのであるが、ムスタフア、ケマール、パシアの崛起も亦、民族運動の一表現と見て差支へあるまい。何故なれば、彼の理想とするところは、トルコ人の爲めの眞の鄉土を建設するに外ならぬからである。

歐洲大戰は、所謂民族主義の立場から、トルコに於ける異民族、異教徒を解放するの目的を以て、此の國を解體させてしまつた。即ち、アラビア人の多數を占むる地方として、メソポタミア、シリア、ヒヂアーズの廣大なる地域を引き離し、ユダヤ人の鄉土をつくる爲めとあつて、パレスチナを奪つてしまひ、それからアルメニア人、キュルド人等の爲めにも、土地を與ふべく、ギリシア人が多數者なりとしてトラキア及びスミルナ地方をギリシアに割讓することにした。(一九二〇年八月十日調印のセーヴル條約)その結果トルコの面積は戰前の約六十一萬四千方哩が約十七萬五千方哩となり、人口は約二千二百萬が約八

百萬になる譯であつて、トルコの爲めに非常なる打撃たることは言ふを俟たない。勿論、トルコとても、戰敗國としての負擔は覺悟してゐて、異民族の多數を占むる地域は斷念してゐるのであるが、トルコ人の住地までも蠶食されることは、トルコ共のもの丶生命に關することである、ケマール、パシアの奮起も亦、これが爲めで、彼は、唯公平なる民族主義に立脚した地域の區分を要求してゐるのである。故に彼は、アラビア人が住民の多數を占めてゐる前記の諸地方は潔よく斷念して、他民族の民族主義をも尊重してゐるが、トラキアやスミルナ地方の如く、住民の數から見ても、歴史、宗教、文化、國防及び經濟等の諸方面から考へても、當然トルコ國の不可分の一部として殘さるべきものさへも、他國に奪はる丶ことはどうしても許容し得ざることであつた。況んや、か丶る貴き鄕土の一部が、ギリシア人の外交的暗中飛躍や、帝國主義的投機の爲めに、犧牲にされることは、トルコ人に取つて到底忍びざるところであつたのだ。ケマール、パシアがギリシア軍を驅逐し、列強に對して、憶面もなく、自己の主張を陳述し、遂に列國をして之を承認せしめてしまつたのは、畢竟彼の要求する所が正當であつたからである。

彼は、トルコを宗教の國から民族の國へと導びたいと云はれる程に、しかく彼はトルコ人の心に強い民族的自覺を植ゑつけた。トルコ人の爲めの眞の鄕土と祖國とを作つてやることに努めた。故に彼の背後には、トルコ人の心を持つたトルコ人がある。それから、彼の運動は又民衆の運動である。それは、少數の愛國者や志士の運動でなくて、民衆全體の運動である。彼も亦民衆の一人として働き、三百二十名の國民議會の議員は、眞の意味に於ける民衆の輿論を代表してゐるのである。彼の運動の著しき成功の主因は、たしかにトルコ人全體が、民衆全體が、魂を打ち込んで、祖國の存在の爲めに、自分等の生命の爲めに、全部を傾注したことに存する。

七

以上は、トルコのトルコ人即ちオユマン、トルコ人の民族運動の概略であるが、他のトルコ民族、取り分けロシアのトルコタタル人の間には、民族運動が可成り盛んに行はれた。トルコに於けるトルコ人は、自分が征服者の位置にある爲めに、自由に運動することが出來たが、ロシアに於けるトルコ民族は、今は被征服者の地位にあるので、ロシア政府の壓迫が甚しく、それは中々困難な仕事であつた。ロシア内のトルコ、タ丶ル人は其の數約三千萬（彼等の分派並に其の住地は、前に舉げて置いた）で、スラヴ民族のロシア人に次ぐ多數者である。彼等は僅少の

例外を除けば、悉く回々教徒で、トルコ人と血を同じうし、トルコの各方言を話し、ロシアを統治したる歴史を有し、ロシア人の文化に對して大なる影響を與へた優秀な民族で、其の教化の程度もロシア人に比して著しく高く、且經濟力にも富んでゐる。

從來ロシア政府はひたすら彼等のロシア化に努めてゐたので、彼等がトルコ主義の下にトルコ人と同じく民族的に醒めて、前世紀の末葉からそろ／＼民族運動を始め出すと、ロシア政府は以前にも増して壓迫の手を擴げ、この運動の妨害に努めた。然るに千九百五年の露國第一革命は彼等の運動に好機會を與へたので、彼等も多少自由の境遇に置かれ、剩へ議會には、トルコ民族の代表者をも參加せしめ得るやうになつたから、これに勢を得た彼等は、盛んに民族運動を開始し、民族の爲めの學校を開き、文學を起し、音樂を發表し、新聞雜誌を刊行し、産業を奬勵し諸方面に向つて大活躍を試みた。ところが、又々此の運動に對して大迫害が加へられ、運動の首腦者は頻りに獄に投ぜられ、言論の自由は全く奪はれてしまつた。しかし、幸ひにも、彼等は千九百十七年の第二革命によつて、再び生氣づけられ、千九百十七年五月終にモスクワ市に於て「クルルタイ」なる民族大會を開催した。「クルルタイ」に集まつたものは、全ロシアに居住する一切のトルコ民族の一切の階級を代表する九百名の男女であつて、已が民族とロシア國との關係を討議したる結果、ロシアを民主的聯邦共和國となし、トキスターン、カザクスターン（中央アジアの北邊）及びカツカスの如きトルコ民族の住民の多數を占むる地方を自治國となし、他の諸地方に於ては同民族は他の民族と混住してゐるから、彼等に對しては他民族と同等の權利を與へて、自治を許すべきことを決議し、更に全露回々教徒評議會を開き、或は中央民族管理局を設けて、其の理想の實現の爲めに努力すると共に、ロシア全體の幸福の增進の爲めにも貢獻することが少くなかつた。かうして、トルキスターン、カザツクスターン、アゼルバイヂアーン、クリム民族等のトルコ、タヽル人の國家が出來上つたのである。

然るに、其の後間もなくロシアの假政府倒れ、過激派起つて此の國の實權を握るに至るや、彼等は別の意味に於て、トルコ民族に對して迫害を加へ、其の言論の自由を奪ひ、諸機關を閉鎖し、財産を沒收し、首腦者を殺戮し或は追放し、民族主義的思想の撲滅に努め、更に反過激派運動を開始した彼等の自治國を襲ふて、虐殺、掠奪を擅にした。しかし、トルコ、タヽル人は毫も之に屈することなく、或はチエツク人と協力して、過激派と戰ひ、或は千九百十八年ウフア市に開かれたる國民會議に

アインスタイン號

に備ふべき權威ある大雜誌であります

アインスタイン教授講演

ニウトン引力を否定して我が物理學界の大革命者たるアインスタイン教授は本社の招聘にて十月八日マルセイユ發十一月十六日神戸着來朝に決定しました、つ

一高
高工
東京高師
廣島高師
早稻田
鹽見研究所
京大哲學科
東大

西川博士　高橋 勝　吉澤寅一
鈴木 昭　芝 龜吉　金光正道
辻 正次　土井不曇
竹内教授
竹内教授
渥美正教授
三村剛昂
阿部教授
清水武雄　小倉博士　岡谷辰治
二名（不明）
桑木博士　得能博士　鹿子木博士　兒玉學士　宮本學士
柴崎學士　平松學士　矢崎學士
石原純博士　福澤三八氏　三上義夫氏　Berliner 教授
（九月卅日まで申込の分）

主催　改造社

代表者を派して、反過激派運動に左袒し、一旦滅ぼされたる自治國の再興と、諸機關の復活に全力を傾注し、更に一方に於てオムスク政府の武斷的壓制とも鬪ひ續けた。

かうしてトルコ、タヽル人が、擧つて、過激派と戰つてゐる中に、該政府は其の政策上、彼等の爲めとして、タタル、バシユクルド、カザクスターン、トルキスターン、クリム、アゼルバイヂアーンの六共和國を建設したが、此等は孰れもモスクワ政府の支配を受けて、共産主義的の色彩を持つた名ばかりの國で、決して、トルコ民族の欲してゐるやうな、民族主義に基いた、ほんたうの彼等の郷土でない。壓制的獨裁政治―官僚的立憲政治―武斷政治―過激派―とから、各時代に亘つて常に露國内の少數民族としての苦痛を嘗めてゐるトルコ民族は、それでも猶ほ、民族的存在を確保せんが爲めに、今も其の活動を止めないのである。前に述べた如く、ロシアのトルコ、タヽル人はトルコのトルコ人と共にトルコ主義の下に結びつかつてゐるのであつて、兩者の關係は極めて密であるが、トルコ、タヽル人の大立物たる、アフメッドアガイフ及びユースフ、アクチユラ、オグルの兩氏の如きは自由なトルコに渡つて、主義の爲めに奮鬪した。前に述べた如くロシヤのトルコ、タタル人はトルコのトルコ人と共にトルコ主義の下に結び付かつてゐるのであつて、兩者の關係は極めて密であるが、トルコ、タタル人の大立物たる、アフメツド・アガイフ及びユースフ・アクチユラ・オグルの兩者の如きは自由なトルコに渡つて、主義のために奮鬪した。右の外、イスマイル・ベク・ガスプリンスキー、アヤズ・イスハーキ、フアトフ・ケリミ、アメル・テリゴリ、サドリ・マクスーデイリガー、フアフルエツデイーン氏はいづれも民族運動の有力者である。又トルキスターン地方では、青年トルコ黨鬪將として勇名を轟かしたトルコのエンヴエル、パシアが、血に繋がる同民族の爲めに、頻りに過激派と戰つてゐる。將來ロシアのトルコ民族運動の中心地は、この地の名の「トルコ人の國」が示す如く、トルキスタンであらう。

因に、昨年の末から本年にかけて、東京を初めとして、日本全國津々浦々に至るまで、洋服地を肩にして、ゆつたり、ゆつたり、賣り歩るく見慣れぬ外國人がある。多い時には其の數が三百にも上つたので、一時社會の注意を喚起し、いろ〳〵に考へられもしたが、彼等こそは、過激派の魔手を逃れて、命から〴〵東へ〳〵と流れて來たロシアのトルコ、タヽル人で、過激派の爲めに財産を强奪されたものも、家族を虐殺されたものもある。彼等の中には相當の實業家もあり、學者もあり、詩人もあり、藝術家もあり、軍人もあり、學生もあるといふ風で、い

づれも其の糊口を過す爲めに、止むなく、洋服地の行商をしてゐるさうである。みんな、回々教徒で、トルコ語の方言を話し、同じアジア人種であるといふ點から、我が日本人に對して非常に敬意の念を持つてゐる。そして彼等は本年四月七日の聖日金曜に、日本最初の回々教の公式禮拜を行ひ、トルコ、タヽル人、イナヤッツラー師の司令の許に、アラビア語を以て祈禱を唱誦し、トルコ語を以て說教が行はれた。會衆者はタヽルの名士にして、前記中央民族管理局員たるアメル、テリゴリ氏を初め百數十名に上つた。これは我が國文化史及び宗教史上特筆すべき事件であり、かうしてトルコ民族が我が國民と結びついて行くことは、試に結構なことであると思ふ。

八

以上はトルコ民族の民族運動の輪廓であるが、次にアラビア人の民族運動に就いて少しく述べて見たいと思ふ。

アラビア人は大戰前までは、他民族に隷屬して政治的に獨立的存在を持つてゐなかつたけれど、回々教と其の文化を世界に與へたといふ「撰民」としての非常なる自尊心を抱いてゐて、自分の國がなくなつてからも、久しく民族としての强固な存在を維持してゐたので、民族的運動は早晩起らざるを得なかつたのである。

從來アラビア人と最も密接なる關係に立つてゐたのは、トルコ人であるが、これは、トルコ國の領土に彼等が多數居住してゐたからである。即ち、大戰争前までのトルコ帝國に於ては、アラビア人の數は約六百萬で、トルコ人と共に、同國に於ける同派回々教徒の二大代表者となつてゐた位であつたから、兩民族の關係は決して惡いものではなく、トルコの官吏の中にもアラビア人は少くはなく、議會にも相當の代表者を出して、同民族の利益を擁護する爲めの機會をも與へられてゐた。

併しながら、トルコ人とアラビア人とは全く其の傾向を異にした二つのもので、前者は重厚な北方人であり、後者は輕快な南方人である。其の上、回々教のハリーフア（後繼者）の地位も千五百十七年以來トルコ皇帝の手に移り、メッカ、メデイナの兩聖地も其の所有に歸してゐる所から、アラビア人がトルコ人の羈絆を脫して、遠き古の如く、自分が、かういふ宗教上の首座に就くことを希望するのは自然の勢である。

右の目的を達する爲めに、こゝに所謂アラブ主義を標榜する青年アラブ黨なるものが、十九世紀の中葉に於て、先づシリアに生れた。彼等はアラビア人の爲めに邦土をつくることを理想として活動を開始した。その運動はアブデュル、ヘミード二世の汎イスラーム主義の宣傳や、聖地に通ずる鐵道の布設等によ

り、且、青年トルコ黨の樹立した新トルコが民族無差別主義に基づいてアラビア人をも、以前に増して好遇した爲めに、アラビア人の民族運動は幾分の氣勢を挫かれたやうな形になつてゐたが、新トルコの政策がオスマンリ主義となり、三轉してトルコ主義に變ずるや、アラビア人は、己が民族的存在を擁護せんが爲めに、どうしてもトルコ人と戰はざるを得なくなつた。そして既に一八九五年に佛米パリに於て設立せられたる「アラビア國民委員會」の、其の當時よりの宣傳が、いろ／＼の反響を持つやうになつて來た。トルコ主義がトルコ國のトルコ人のみならず、世界的四千萬のトルコ民族全體を考慮中に置いたやうに、アラブ主義も世界に於けるアラビア民族全體を其の對照とした。尤も純のアラビア人といへば、アラビア半島の內部に住する所謂ベドイン位に過ぎないのであらうが、こゝにいふアラビア民族とは、アラビア化され、アラビア語の方語を用ゐ、主としてセム種族よりなるものであつて、其の住地としては、アラビアを初めアジア、トルコのメソポタミア、シリア、ヒヂアーズ、エヂチト及び北アフリカまでをも含むのであるから、其の及ぶ所の範圍は可成りに大きく、從つて、其の中心もアジアトルコの南部とエヂプトの二つに分れた。それに、宗教的抱負を伴つてゐる運動であるから、汎イスラーム主義的の色彩も多分に加はつてゐて、トルコ主義の如く爾く理論に發展して來たものではなく、又トルコ主義に見られるやうな統一を缺いてゐる。

世界戰爭と、トルコの獨墺側への參加はいろ／＼の影響をアラビア人の民族運動に與へた。トルコ皇帝の聯合國へのヂハード（神聖戰爭）の宣言は、アラビア人の宗教熱を煽つたには相違なかつたが、聯合軍側の好妙なる政策は圖に當つて、トルコからアラビア人の住地を引離すことに成功した。即ち、アラビア人は聯合國の御蔭で或る點までアラブ主義の理想を現實せしむることが出來たのである。即ち、メッカ、メディナの兩聖地を含むヒヂアーズ國は、英國の後援の許に、千九百十六年六月トルコに對して獨立を宣言し、同年十一月フセイン、イブン、アリーはヒヂアーズ王となり、トルコ皇帝の持つてゐたハリーファの地位を自分に移すやうなことになつた。次にメソポタミアも、同じく英國の委任統治の下に獨立國として認められ、國の名もイラークと稱し、ヒヂアーズ王の子フエイサルは人民投票の結果、昨年八月王位に登つた。首府は回々教の名都バグダードである。それからシリアも、佛國の委任統治の下に獨立國として認められることになつてゐるが、これは又メソポタミアの如くしかく具體的には定まつてゐない。

かうしてトルコ國内のアラビア人は各自共の郷土を持つやうになつたのであつて、彼等のアラブ主義に對する希望の幾分を滿足せしめたであらうが、もと／＼其の裏面には列國の複雜な關係が潜んでゐるのであるから、彼等がほんとうに滿足して國家としての歩みを續けて行かれるかどうかは疑問である。現にシリアに關してもいろ／＼ゴタ／＼があるし、メソポタミアでは最近排英運動が起つた位である。エヂプトの如きも、猛烈なる民族運動の結果、漸く本年に至り、英國の羈絆を脱して、アラビア人の獨立國となり、フアッド王位に即いて、二千年來初めて、獨立の光榮を有したと稱せられてはゐるが、其でも猶ほ、英國との關係がむづかしく、折があれば排英運動が突發する。彼等アラビア人が自分等のほんとうの郷土を建設し得るに至るまでは、今後も尚ほいろ／＼の經緯があるであらう。國なんていふものは、さう容易くは出來上るものではない。

九

回々教徒内に起つた民族運動の例として、トルコ及びアラビア二民族の其に止めて他を畧すことにしたが、實の所、此の兩民族の民族運動が一番熾烈でもあり、又其の影響する所も一番大きい。

しかし、回々教内の民族運動を以て、教徒内の分離運動と考へるのは間違つてゐる。一體、トルコ人の國とアラビア人の國との關係は、イギリス人の國とフランス人の國との關係とは餘程違ふ。回々教徒諸民族相互の關係は、非回教國諸民族相互の關係とは全く別である。勿論、非回教徒も、全體として一つの雰圍氣を形成し、或は國際的の團體となつて結びつくこともあるが、畢竟民族としては個々の存在で、民族に依つては、御互に無關心でゐられる場合が少くない。しかし、回々教徒ではさうでない。どの回々教民族も信仰を通して、心を通して、堅く結びついてゐる全體であるのだ。例へば、トルコ人、アラビア人、ペルシア人など、民族的には別々に對立してはゐるものゝ、畢竟彼等はいづれも、一つの神の信仰を持つてゐる同胞の一人々々で、從つてトルコ人の苦痛は同時にアラビア人の苦痛であり、又、回々教徒全體の苦痛である。故に回々教國で起つた或る事件は、回々教徒全體が、自分の事のやうに注意する。かゝる心理こそは回々教徒に特有のものであり、又其の力の存する所でもある。大戰後に於けるトルコに對する回々教徒の狀態を見れば、此の間の消息が明かに解る。トルコの獨墺側への參加は、世界の回々教徒を一種不思議な地位に置いてしまつた。何故なれば、英國の領土にはインドの七千萬を初め、總計約一億の回々教徒があり、フランスには、約二千萬、ロシアには約

三千萬の回々教徒があるので、彼等は、其の主權國の爲めに、回々教徒の最も敬愛するトルコ人と戰はねばならなくなつたからである。基督教徒同志には、こんな事は、なんでもない事であらうが、回々教徒に取つては、それは極めて不自然な出來事であるのだ、尤も回々教徒同志が爭つたことは、歷史上、いくらも例證があるけれど、基督教徒同志の爭鬪に比すれば、九牛の一毛に過ぎない、歐洲基督教の諸民族、諸國が、しつきりなしに血腥い鬪を續けてゐることは、同教徒間の爭を血で血を洗ふことゝしか考へてゐない回々教徒に取つては、全く不可解の謎であるのだ。

かうしてトルコ人と戰ふを余儀なくされた聯合國の回々教徒は、同教徒と戰ふた罪滅ぼしに、出來得る限り、敗後のトルコ人の利益を擁護することに努めた。わけても、インド七千萬の回々教徒は、我が事のやうに、騷ぎ立てゝトルコの爲めに盡してやつた。彼等は、英國から、トルコの獨立は侵害しないといふ言質を取つて盛んに活動した。回々教徒でありながら、回々教徒と鬪つたのも、英國の爲めを思つたからであるから、どうか其に免じて、トルコを寛大に取扱つて下さいと哀願した。さうして、これは英國をして恐れしめた。英國は絶えずトルコ問題と回々教徒問題とを結びつけて考へなければならなくなつた。そして、その爲めに歐洲多年の懸案であつたトルコの歐洲驅逐案もそのまゝぐづ〳〵になつてしまひ、あの苛酷なセーヴル條約にさへも、條件づきとはいへトルコに君府を首府として置くことを許した。しかし、セーヴル條約は、トルコ人はもとより世界の回々教徒をいらだせた。そうして、さらでだに、歐洲基督教徒の壓迫に苦しんでゐた回々教徒は、トルコに對して非常なる同情を寄せ、白人に對する敵愾心はいよ〳〵盛んに燃えあがつて來た。かうしてトルコではムスタフア、ケマール、パシアが奮起して、祖國存在の爲めに戰つてゐる中、インドの回々教徒がトルコの爲めに英國に提出した條件といふものは、本家本元のトルコの其れよりも、ずつと過大であり、徹底的であるといふ、珍現象を呈するに至つた。そして、最近トルコ軍がギリシア軍を驅逐して、大捷を博し、愈々其の理想とする所に向つて突進せんとした爲めに、列國との關係が複雜となり、佛、伊の兩國が土國の爲めに妥協的の態度に出でんとするに反して、兎角英國のみが强硬の態度を持し、或は英土將に干戈を交えんとするが如き形勢を呈するに至るや、インドの回々教徒は又もや猛烈なる示威運動を開始し、二十余名の回々教徒議員は結束して、英國もし土國の要求を容れずして之に宣戰するが如き事あらば、インドの回々教徒は一齊に蹶起して、トルコの

爲めに盡すべしとさへ宣言したのである。幸ひ、其後英國の態度も軟化し、終に本月上旬のムダニア會議となつて、英、佛、伊、ギリシア、トルコの諸國は休戰條約に調印することゝなり、トルコは其の要求の大部を容れられて、小アジアは勿論、東トラキアの地をも回復し、こゝに初めてトルコ人のトルコ國を建て得るやうになるのであるが、かゝる大成功は勿論ムスタフア、ケマール、パシア其人の人格に依るのであるが、トルコ人の大覺悟と全回々教徒の燃ゆるが如き同情とがなければ、あゝまで容易に運べなかつたであらう。げに驚ろくべきは回々教徒の熱である。

トルコ人に對するインド回々教徒に對する態度は、よく回々教徒の心理を物語つてゐる。實際彼等の間は文學通りの四海兄弟の間柄である。彼等の國家は、基督教諸國のやうに離れ〳〵の單位ではない。彼等の民族は、基督教徒のそれのやうに、別々の存在ではない。凡てが大きな「回々教の家 即ちアラビア語の Dar-ul Islam の中にあるもので、この家こそは、國民族、言語等一切の差別を超越し、唯アルラーに對する信仰に結びつく、同胞の樂しい住家であるのだ。彼等が不斷に相爭ふ基督教徒の世界を指して「戰ひ家」(Dar-ul-Harb) と稱するも亦宜なるかなである。

十

トルコの成功は、勿論他の回々教徒に對して非常なる刺戟を與へた。目覺めたる回々教徒、不平ある回々教徒は、トルコ人に握手を求めた列强國の態度に皮肉な笑を浮べたであらう。彼等は、弱者にも生存權のあることを知り、そしてそれ要求することが正當であることを認めたであらう。見よ、回々教徒は至る所に於て生きんとする聲を揚げてゐるではないか。基督教徒は彼等に對して今迄余りに殘酷であつた。余りに非人道的であつた。そして彼等は今や其を悔ひつゝある。回々教徒も人間である以上、基督教徒と同樣生きる權利を持つてゐる。基督教徒の覺醒は、回々教徒の覺醒以上に目下の急務ではあるまいか。

（大正十一年十月十三日）

ケマール・パシヤ

饒平名智太郎

はしがき

私は何故マスタフア・ケマール・パシヤに興味を持つかといふに、それは彼がガンヂと均しく帝國主義と當面して奮戰しつゝあるからだ。私は近代資本主義制必然の結果たる、資本家による無產者の搾取を憎む×××

過去に於ける土耳古の歷史は、歐洲の帝國主義の犧牲そのものであつた。その結果最近では、實にピエール・ロチをして云はしめた如く『瀕死の土耳古』と云ふ狀態に陷入られた。さうした瀕死の狀態から土耳古を救つて新らしき生命を與へ、歐洲特に英國の帝國主義に鼻をあかせ、跳跌を來させたのが、パシヤを中心とする土耳古國民黨一派の活躍だ。

「パシヤはガンヂがマハトマ――偉大なる精神――として印度で崇拜されてゐる代りに、勝利者（ガヂー）として今や全土耳古の稱讚を贏ちつゝある。が彼は勝利者であり軍人であつても、彼は決して殺人劍を揮ふミリタリストではない。彼の劍は活人劍だ、彼は一個のパシヨネートな自由思想家に過ぎない。少くも土耳古の勞働者と農民との味方を以つて任じてゐる。だからパシヤとレニンは遂に堅い握手をした。それは結局、歐米の帝國主義乃至は資本主義がさういふ運命に導いたのであつた。私は此の點に特に興味を覺える。彼の此度の希臘に對する勝利は、新土耳古を創造したといふので意義があるのみならず、×××××××××××××××××××××××××××××××××

ケマールこそ本當の新人だ。彼が世界の承認を得て以來、未だ二個年にもならない。だから彼の傳記の如きも、廣く行はれてゐるものとてはない。最近アンゴラに彼を訪ふたことのある米人クレーア・プライスが『ノオートナイトリー・リヴユウ』と

『カーレント・ヒストリー』で發表しのたが、信憑するに足ると思つたから、それらの文獻と外に駐米土耳古大使アームド・ラステム・ベイが印度の『ザ・インデペンデント』で發表したのとを參照して、なるべくケマルを產み出した背景なり事件をも考察に入れながら、彼の人物に就いてスケッチをしてみたい。

一

四十年前、恰度アブドル・ハミッド第二世が帝位にあつてそして新月旗が、サロニキの天空に飜つてゐた頃、サロニキの稅關に勤めてゐた一小吏が死んで、後には寡婦の手一つに女の兒と男の兒を遺した。その女の兒は年頃となつて、普通の土耳古の娘と同じやうな平凡さで嫁に行つた。男の兒は彼の母の考では、同教のお寺の學校に入れて先生にしようと思つてゐた、それが土耳古の母親たちの一般の望みであつた。所がこの兒は往來でよく見る軍人の服裝が好きで、外の子供と同樣、いつしか軍人を憧憬するやうになつた。

さうするうちに、彼はサロニキの陸軍豫備學校の入學試驗に及第して入學を許された。その學校で彼は數學が出來るので、大變その方の先生から可愛がられた。先生は彼のマスタフアといふ名の代りに、ケマール——正義を意味する土耳古の名稱——といふ名を彼に附けてやつた位である。即ち、ケマルといふ名によつて、彼は少年の頃には、彼の數學の先生からサロニキの素直な子供として愛せられてゐたのだが、今日、この名は小亞細亞に於けるアンゴラの泥濘の多い都の鐵人として、世界的に知れるやうになつた。そしてアブドル・ハミッドとかエンヴエル・パシヤ若くばダマド・フエリッド・パシヤだとか云ふ人々は、何れも土耳古の史上の人物であつたが、今では次から次へと世人に忘れられていつた。

でもケマルが少年の頃は——彼は今年四十二歲だ——アブドル・ハミッドの權威が全盛であつた。ハミッドは過去の土帝中での英主だと云はれた程あつて、その智力、精力及び能力の點では土耳古のため大いに貢獻もしたのだが、只だその性格が、時代錯誤的の大缺陷を持つてゐた。ハミッドは勇氣を缺いでゐた、そして周圍の者なり政治の直接執行者を信じ切ることが、性格として出來なかつた。內政、外交、經濟、社會百般の政治機關を一手に握りそして些細な事にまで干渉しなければ、承知しなかつたので、潑溂たる執行力を欠ぎ土帝としての尊嚴をも傷けた。これらの性格に原因して、彼は絕えず暗殺の危險を以つて脅かされたので、自然、彼は官僚的專制政治に墮するようになつた。彼は純然たる專制主義の使徒であつた西洋が 專制

主義を放棄しつゝあつた時に於ける偉大なる東洋の專制主義者であつた　彼がその專制政治を維持するに就いては、フランス革命の話を聞いたことがあるとの些細な疑でもかけられようものなら、如何なる人間だらうが、立所にその生命なり自由が飛んで仕舞ふと云つたやうな苛酷な探偵政治を以つてしたものだ。

そのやうな政治組織は、西洋の思想を公然と皷吹する言論及集合の自由を許さないのであるから、秘密裡にそを保育せねばならないやうな一般狀態であつた。アブドル・ハミツドの治下にある東方民族に於ては、過去の大戰爭の傳說が國內の智脳優秀なる青年を軍隊に吸引する力を持つものだ。が專制君主の王座から案出された探偵政治の網細工は萬遍なくその機能を働らかすものだから、必然的に、軍隊に於ては二重の生活を餘儀なくされた。それは即ち、表面は、堂々たる軍事機關であり且つオツトーマン種族の偉大なる軍閥的傳說の受託機關だ。けれど裏面では、それは禁斷の政治思想の酵母であつた、そしてロシアのニヒリズム等が影響を及ぼして、秘密結社が流行し、就中君府の陸軍大學と陸軍々醫專門學校とに著しかつた。そしてかのニヒリズムの例が此國にての秘密結社を攝めるに隨分與つて力があつたのだが、これらの運動にとつて、その効果を擧げる點から見て如上の君府陸軍大學若くは陸軍々醫專門學校以上に好適の場所とてはなかつた、が然し自由協會と名附ける秘密結社が陸軍大學內に成立し、又た進步協會といふ結社が陸軍々醫專門學校に組織されたとしても、それは何れも非實際運動であつた。そして當時彼等の怨府となつたものは、無論アブドルハミツド其人であつた。

サロニキの陸軍豫備學校、モナスチールの士官學校、コンスタンチノープルの陸軍大學をと次ぎ〳〵にケマルは卒業した。そして二十二歲の時に、屈強の若者として、彼は少尉の肩書を以つて軍隊生活へと入つた。これより先に彼は陸軍大學に入るや間もなく、彼は當時校內に秘密裡に瀰漫してゐた政治思想に感染した。ケマル・ベイの作で發賣を禁止されてゐた一戲曲「祖國(ワタン)」を彼は偶然手に入れてみた。それは、ハミツドが、以前から、凡ゆる手段を講じて沒收して燒棄した本であつた。その著者は官憲の壓迫が甚だしく、――近代土耳古文學史上に大貢献をした人であつたに拘はらず、――遂に英國へ亡命して、そこで亡命者として、餘生を送らねばならなかつた。「祖國」を讀んだ嫌疑をかけられた者は片ッ端から、君府を退去させられた。それほど官憲の忌諱に觸れた此本は、實にわが青年ケマルをして、西洋の政治的理想に興味を持つべく偉大なる感動を與へ、そして默々たる時の推移の間に、ケマルをしてハミツド

の恐怖たるに至らしめた——といへば、昔時ハミッド全盛の頃ならば、嘸ぞ滑稽に聞えたであらう。

二

ケマルは少尉を拜命するや否や、君府のスタンボール區に小さい一室を借りて、自由協會の本部とした。そして其室には、友人で貧乏をしてゐた者を、彼は毎晩泊めてゐた。それが原因をなして、彼の企が露顯したので、ケマルは逮捕され、審問さるべくキルデイズ・キオスクへ護送された。然るに其所の警察の監房に三ケ月も留置された後で、ダマスカスの騎兵聯隊へ體のいゝ追放をされた。そこで彼は、自由協會の地方支部を組織することに努力したが、結局、アラビア地方は彼等獨特の政治的不滿を持つてゐるから、シリアでの活動は到底駄目だ、どうしても土耳古革命の本舞臺は、歐羅巴土耳古に限るといふ信念を得ることゝなつた。夫れで彼はアレキサンドリアへ脱走し、それから遂にパイリスを經てサロニキに首尾よく脱がれ了せた。サロニキは、此時既に、土耳古革命の中心地となりつゝあつたからだ。

彼は故鄕サロニキで四ケ月間、暗中での大飛躍をした。が又も君府政府に、彼の出現を發見されさうになつたので餘儀なく、アカバへ逃走しなければならない破目となつた。所が都合のよいことには面倒なる事件が起つて、それが彼に、事件當時そこにゐなかつたといふ證據を與へたので、君府政府の態度を多少緩和するに役立つ動機となつた。そして君府に於ける陸軍大臣の更迭を待つて、彼の希望は初めて容れられることゝなつた。彼はサロニキの第三軍團の參謀となつて轉任することが出來たのだ。かくて公然とサロニキに歸つた彼は、少しもその素志を曲げず自由協會を進歩統一協會に併呑した。後に至つてそれが統一及進歩委員會といふ名稱の下に、サロニキ、モナスチール及びウスカプ地方に强大なる勢力を扶植するようになつた。

ロシヤに對する緩衝地帶であつたために、ハミッドの土耳古を支持しつゝあつた英國が、土耳古を裏切つてザーと握手したのは、一九〇七年の英露協約に於てゞあつた、それは青年土耳古を奮ひ立たしめて、一九〇八年の流血革命に導く近因となつた。

青年土耳古黨の活躍は、蓋し古るい。即ち一八九一年には巴里で土耳古統一進歩委員會を作つて大會を開き、ハミッドの廢立、政治の根本的改革　舊憲法の復活を決議した。そして一九〇六年に、その本部をサロニキに移し、黨勢擴張に努めると同時に、軍隊への宣傳に腐心した、かくて遂に第三及び第二軍團と

に迫じて一九〇八年八月卅一日を以て事を擧げることにしてゐた。

所が、同年の六月第三軍團に不穩の形勢があるのを見て、ハミッドの强壓が加はつたのを機會として、終にクリスナに革命が勃發してマセドニア、アドリアノープル、小亞細亞等悉く之に饗應して形勢が切迫したと見るや皇帝も遂に憲政の復興を容認しキヤミル・パシアをして新内閣を組織せしめた。此間殆んど流血の慘事を見ず、革命は實に易々たるものであつた。

その結果、青年土耳古黨は議會に多數を占め、天下の權を握るに至つたが、彼等の間には政治家的手腕ある者を缺いでゐたから、執政は依然舊政時代の進歩的政治家の手中にあつて青年に移らなかつた、併かも、内政は漸く專横に流れ、且つそのモツトーとする國威發揚、利權回收は一向實現せず却つてブルガリヤの獨立、ボスニア、ヘルツエゴヴイナの喪失等その主義とは反する事件のみが續發した。

そこで一年ならずして、土帝の意を受けて青年土耳古黨に反抗して起つたのが回教同盟であつた。君府にある一部の軍隊を使嗾して反革命を企て、一時は内閣を更迭させたけれど、サロニキに集つた青年土耳古黨の領袖は、更に第三及び第二軍團を君府に向けて、日ならずしてそこを占領した。そしてハミツドを廢立して、サロニキに移して投獄し、皇弟レシヤトエフエンヂ親王の即位を乞ふた。

ケマルはこの革命に際して、第三軍團長たるセヴケツト・パシヤの參謀として參加して重大なる役割を受持つた。又たサロニキで開かれた統一及び進歩委員會の席上、エンヴエル・パシヤと激論を鬪はして大いに遣りこめたことは、今でも人々の間に話柄となつてゐることだ。

ハミツドに代つて、政治の實權を取つたものは、このケマルの政敵であつた陸相エンヴエル・パシヤとその一味だつたので、ケマルは失意に陷り、一時は斷然政界から身を引いた。

この革命はハミツドに對する國民の怨恨、不信が絶頂にあつたゝめ、一時は凡ゆる階級、凡ゆる宗教の人々を狂喜させたけれど、不徹底なことには、新人の手に政權を移さなかつたものだから、何等見るべき改革事業とてはなく、遂に一の政變として終つてしまつたのは、實に遺憾であつた。

其後の數年、土耳古が瀕死の狀態に陷つて氣息が奄々としつゝあつた間、ケマルの生活は、土耳古の軍人として終始した。エンヴエルは彼をトリポリに追放した、イツゼツト・パシヤは彼を、サロニキに召還した、セヴケツトは彼をアルバニアに移した、然るに、エンヴエルは更に、彼をトリポリに逐還して、

伊太利との交戰中、その地方の不正規兵の指揮に當らしめた。又た第一バルカン戰爭の時は、ダーダネルスの陣地に出陣を命ぜられたが、機會の到來と共に、アドリアノープルの奪還に成功して雄名を轟かしたのは、彼であつた。

三

歐洲大戰の勃發後、土耳古の向背は列强の注視を怠らなかつた所で、英國の如きは土國を獨墺側に起たしめまいとして、大に努力したものだ。然るに當時政治の實權は陸相エンヴエル・パシヤ、内相タラート・ベーの二人の掌中にあつて、特に前者は親獨黨の巨擘として知られてゐた。しかも彼はナポレオンの覇業を慕ひ、政治的汎イスラム主義に傾注し、獨墺側の必勝を確信してゐたので、率先して開戰熱を煽いだ。それに獨逸は豫てからトルコをその藥籠のものとし、獨英事を構へるの日は土國を盟邦として蹶起せしめようとの方針に腐心してゐた。そこで土耳古の上下に對して、獨墺の戰爭を誇大に吹聽し獨土が締盟したなら、露國の侵略は永遠に根絶することが出來、埃及も買收が出來、印度其の他の回敎國は相呼應して土國の爲め盡す所があるだらうと宣傳したものだ。

當時、土耳古で獨逸の利益を代表して、その獨逸化に怪腕を振つたものにワンゲンハイム大使があつた。エンヴエル以下少數の親獨派を操縦して、英國が土耳古から注文された二隻の軍艦を、抑留したことを巧に利用して排英熱を製造し遂に土耳古を動かして、參戰を余儀なくさせた。此時エンヴエルに對立して中立を主張した平和黨とも云ふべきは、皇太子、宰相サイド・ハリム・パシア、藏相チヤヴイツド・ベー其他閣僚の多數並に統一進歩委員會の過半數がさうでケマルも又さうであつた。ケマルは參戰を聞いて、國家の急機を傍觀する能はず、勃都ソフイアの公使館附武官の職を放擲して、急遽、君府に歸つて來た。此時の彼は、依然として若者ではあつたが、既に過去に於て光輝ある戰功を立てた人ではあり、政治的にも活躍して來たから、個人的聲望は十分加はつてゐた。がエンヴエルからすれば、私人としても公人としても敵視してゐたのだが、最早彼を全然無視することは、出來なかつた。

エンヴエルは、彼に第十九軍團を率ゐさせてダーダネルスに派遣した。恐らく、英國の砲彈に當つて乾度　彼は生命を落とすだらうとエンヴエルは望んでゐたに違ひがなかつた。然るに運命は彼を見離さなかつた。此所でのケマルの偉大な軍事的才能は、遂に、彼をして半島に於ける土獨軍の總指揮權を得せしめた。そしてアナフオルタの英軍を退却させた所の戰勝は、彼

の軍人としての經歷に於ても、最も燦然たる成功とされてゐる。それは忽ち獨逸でも彼を大英雄として賞讃させた、けれど國內では、統一及進步委員會から出した一九一七年の年鑑に記錄されて、エンヴエルが不注意にも、その發行を許可するまでは余り人口に膾炙されなかつたことだ。それから二年後となつて土耳古の新聞がアナフオルタに於ける彼の戰勝を書き出すやうになつたので、エンヴエルは初めて氣が附いて該年鑑を沒收して破棄させた。時に、君府でケマルの名を呼ぶことは、政治的に危險とされてゐた。

彼の國民的人氣に驚ろいた、リモン・ホン・サンデルスは、英軍がダーダネルスを明渡すと同時に、彼をロシアの戰地に派遣する許可を得た。ケマルはそこで、陸軍少將に昇任され第十六軍團を與へられた、が彼は間もなく英國からバグダツドを奪還する計劃に就いて、フアルケンハインと衝突をした、その抗議として、彼れケマルは戰地の指揮を放棄して、アレッポに歸つて來た。そして一九一七年九月三日には、自家の意見を長い陳情書としてエンヴエルに送達した。この有名な陳情書の中に—それは全土耳古人が獨逸の勝利を期待してゐた時に書いたものだ—ケマルは宣言するに、君府政府の崩壞と土耳古の經濟的破綻と並に獨逸へ不斷に金を流出する位が戰爭の結果となるだらうといふことを以てした。——英國と佛國は分離せしめることが出來ず、隨つて打ち負かすことは出來ない。英國は、パレスタインを敗ぶり、英國自ら管理する基督教政府を建設してスエズ運河紅海及びエヂフトを領有してそして他の同教國から土耳古を孤立せしめようとするだらう。われ〳〵土耳古が輕卒に對英の戰爭に加入することによつて、所謂當路者の理想的戰爭政策は確立したゞらうが、該政策が成功したところで、われ〳〵の損害は恢復出來るものではないし、又たその失敗は、われ〳〵が獨逸の支配下におかれることゝなるのだ、…フアルケンハインは幾度も、彼が獨逸人だ、だから自然、先づ獨逸のことに關心するのだといふことを、人々に語つてゐる。若し彼が、パレスタインを固守することが出來たら、彼は大戰の偉大な勝利者として、世界なりわが國人の前に、承認せられ、さうして其時われわれは、われ〳〵の祖國を失ふだらう、そしてこの目的のために、フアルケンハインはわれ〳〵から出來る限りの資財と兵力とを搾取して犧牲とするであらう。——

以上の警告に對するエンヴエルの答辯は、フアルケンハインにパレスタインの戰線を指揮せしめ、それからケマルをば當時の皇太子 現皇帝 の侍從の一人に加へて獨逸への旅を命じたのであつた。ケマルは獨逸と與に一ケ年も、不面目な旅行を續

けねばならなかつた。そして彼の警告に眞理があつたといふことが、如何なる詭辯を以てしても蔽ふことが出來ない位に明白となつて來たのは、それから後のことである。

ケマルが此洋行から歸因するや、エンヴエルは彼に再起を促して、キルデリンの諸軍團（第四、七及び八軍團）の總指揮を命じてパレスタインの陣地に送つたが時機を餘りに失してゐた。ケマルがその任地に着いた時は、恰度英國のアレンビー軍の大進擊が、土耳古軍を粉微塵に擊破した後であつた。ケマルはアダナに於て敗軍を止めたところが、君府政府からの暗號電報が來て、ラオフ・ベイが英國との休戰條約に調印のため、ムドロスへの途中だといふことが分明した。

口

彼は悄然としてパレスタインの戰場から君府へ歸つて來た。時に君府は想像もできないような騷然たる無秩序に陷つてゐたかの統一及び進步委員會の委員は皆、何れかへ姿を晦まし、そして微力な反動自由協調黨、即ち反對黨が、タラート及びエンヴエルの後繼者として親英黨のダマド・フエリッド・パシヤを推擧しつゝあつた。議會は一向開かれず君府は指導者なしで、非常な混亂に陷られつゝあつた。既に調印された休戰條約の結果、英軍は君府内では、ペラ及びギヤラタ區を占領し佛軍はスタンボール區に占據してゐた、又た伊軍は亞細亞海岸に割據してゐた。そして他方これらの聯合國の總ての軍艦は、ボスフオラスに碇泊してゐた。更に英國は復員した土耳古の黑海大艦隊から押收した、數多の軍艦を臨時に指揮してゐた。佛軍は歐洲土耳古の鐵道を保管し、英軍は小亞細亞の鐵道のみならず老土耳古帝國の殘骸を輪狀に取圍んでゐた、即ちトランスコーカシア、ペルシア、メソポタミア、カルデスタン、シリア及び地中海若くは小亞細亞の黑海沿岸にある諸港を占領してゐた。尙ほ該條約は、土軍の武器をも聯合國に引渡し、そして陸軍を五萬に縮少することをも要求してゐた。それから聯合國の隨意に土耳古の重要部を占領し、又た緊急な場合には、所謂アルメニア州を占領する權利を與へたものであつた。東部及西部スレースも占領されることゝなつた。

このムドロスでの土耳古の降服は、當時聯合國艦隊の大部分が英艦であつた關係上、英國海軍の司令官キヤルソープ中將に對する降服であつた。この談判は殆んど、彼一人の專斷でやつたようなものであつた。

こういふ國情であつたから、この破壞され混亂に陷つた君府を、新しい土耳古の運命のため修理し復興することは容易でない

と、ケマルは觀取した。當時又た反英派に對する英國の强壓もあつたから、その監視を脫がれるといふ意味から云つても、君府を去つて小亞細亞に根據を求めることを得策とし、陸相を詭計にて說得するに成功した。

小亞での活動は地方防禦隊を國民黨に編入して新政黨の基礎となしムドロス條約は遵奉しながらダマド・フェリッドを脅迫して議會を再び召集せしめ、土耳古をしてその將來の國策を樹立せしめようといふのが彼の目的であつた。フェリッドは幾許もたゝないうちに、ケマルを小亞細亞に放つて自由の行動をとらしたことは陸相の大失策であつたと氣が附いたから、彼は介皇として、ケマルに電命を發して首府に歸還するように云てやつた。然るにケマルは既に野に放たれた虎であつたから、その電報を馬耳東風と無視した。それでフェリッドは策に盡きて彼を軍籍から罷免した。ケマルに對してはエンヴエルでさへ敢てよくし得なかつた果敢な處置に出でたのであつた。それからといふもの彼等兩人の間には、事實上激烈な爭ひが起つた。

フェリッド側の小亞細亞の役人が、ケマルの官吏を捕へて君府に送還したことに對して、ケマル側の官史も、フェリッドの役人を逮捕してその代りには、ケマル側で該地方の行政事務を取扱ひ出すやうになつた。かく暗黑時代に土耳古は分裂したのだ。

やがてヴェニゼロスと政治的希臘主義とが、土耳古にとつて、英露協約中に於てロシアが占めてゐた地位を踏襲したことが明となつて來た。即ち、英軍の戰勝的餘威をバックとする新しい英希の提携が、武裝を解除された土耳古の殘骸にとつて危險極はまることは、かの古い英露協約の舊土耳古に對する脅威以上だといふことが事實化して來たのだ。

一九一九年五月十四日午後九時、君府に於ける英國のサー・ソマーセット・ゴーキャルソープは、スミルナの土軍の、司令官に同市が翌日午前七時に占領されるといふ通牒を發した、更に午後の十一時には、該占領は希臘軍によつて成されるといふことを通牒した。次の日は午前七時に、土耳古の守備隊は武器を投出して兵營の方に引揚げた。希臘の輸送船は入港しつゝあつた。午前十一時までには、英軍が電信局を占領し希軍は上陸を終つた。波止場から、土軍の兵營の方へ前進した希軍は、土軍が密集してゐる兵營の中へ機關銃を縱射した、そして三百の死者と六百の負傷兵を出した。土軍の兵營の外、スミルナ市內若くば遠く市外の沿岸地では、希軍の虐殺が數日間も續いたので、君府のフェリッド政府さへ非常に激昂した、聯合國の委員は餘義なく調査委員をスミルトナに派遣したが、その齎らした報告書は發表されなかつた。

この希軍のスミルナ占領と虐殺とは、小亞細亞の全土を擧げてケマルに投ぜしめる動因となつた。そしてフェリッドの勢力は、全然小亞で見られなくなつた。で彼はそれ以來、二個年の間、空しくボスフォラスを越えて根據地を回復しようとして、一九二〇年十月のデリバツシエ革命に依つて、コニアを漸く回復することが出來たもの丶僅か三日にして、アラツト、パシヤのために又たケマル側に恢復された。其後もフェリッド側からは絶えず小亞細亞の海岸に出沒してコニアを狙つてゐたが、一九二一年の夏ケマルの官吏がアダリアで、エヂプト總督の汽船「パラティナ」に投棄してトパル土耳古人と四人の連累者が船に潜伏してゐるのを突止めて射殺してからといふものは、全然、小亞挽回の計劃を斷念したようだ。今日亞細亞に於けろケマルの地盤は、爭はれないものとなつた。

ギリシヤがスミルナを占領したことに憤慨して、ケマルはムドロス條約を破棄した。が君府の議會で國民黨を以て多數を制せようとの企劃は、相變らず繼續してゐた。彼は今やその大本營をエルゼルムよりアンゴラに移した。そこは沮澤の多いマラリア病の舊都ではあるが、幸にも君府とは汽車及び電信を以て連絡することが出來て便利だ。此都で、現在の有力者たる十二名の國民黨の領袖達が、國民盟約なるものを立案して君府のフェリッド殿下の議會に送達した所が、それを議會では一九二〇年一月二十八日に採用した。即ち該盟約に宣明せられてある聯合國との講和條件の原則、即ち舊土耳古のアラビア地方は放棄するけれども、土耳古領に對する權利は飽くまで固執すること、又た君府を土耳古の首府並に回教主の所在地として保持することの必要、土耳古の治外法權廢棄の承認等を以て正當とし、且つ恒久平和を設定する讓歩の限度として土耳古帝國の議會も宣言したのであつた。

君府の英國軍令部は、此時セーヴル條約の不調を豫見し國民黨の代表者を見附け次第逮捕してマルタへ追放する手段にて、議會に壓迫干渉を加へた　それにも拘はらず、ケマルが永年かゝつて議會内に國民黨の多數を築き上げようとした努力は、無駄とはならなかつた。多數の國民黨議員が、三月十六日の夜――それは有名な話だ――君府を密かに脱出したので、今やアンゴラでは確乎たる基礎の國民議會を開設することを可能ならしめた。盛大な國民會議が國民盟約を可決する目的のみのために、四月二十三日アンゴラで召集された。そして曾ては、ハミッドがその專制政治を振廻はしたこの老大帝國の殘骸は、遂に新しく蘇生して、マスタファ・ケマル・パシヤは、その事實上の大統領として君臨することゝなつた。

五

土耳古と聯合國との講和條約は、一九二〇年八月十日調印された。それが即ちセーヴル條約だ。がそれは餘りにトルコのために苛酷であつた。如何な戰敗國であつても、國民的の自負心が未だに亡びざる青年土耳古にとつて、それを承引することは不可能であつた。該條約によると、土耳古は歐洲に於て、君府と君府に隣接する僅かな領土で滿足せなければならなかつた。又た東部及び西部スレースの主權は希臘に割讓し、パレスタイン、シリア、メソポタミア、アルメニア、ヘヂヤズ等の獨立（前三者は聯合國の選任による委任統治）を承認し、スミルナ及びその隣接地に於ては、主權が依然土耳古にあるけれど希臘に五ケ年間統治せしめ、同期間の後には人民投票を以つて希臘に併合することを承認し、クルディスタンは自治を許し、東方地中海中の島は希臘と伊太利とに分割し、シイプラスは英國に併合され、尚リビアとエヂプトに於ける權利を放棄して、エヂプトに於ては英國の保護權と、モロッコ及チュウニスに於ては佛國の保護權とを承認させなければならなかつた。

加ふるに、ダーダネルスの沿岸を包含する海峽、マルモラ海、ボスフォラスを國際管理に移し、國際聯盟の任命に係る國際委員會の掌中におかれることゝなつた。且つ該條約中の陸軍、海軍及び航空等の條項の凡ゆる實施に關して、（陸軍は五萬に制限された）土耳古政府を監視する國際委員が任命せられ、そして軍事委員の一隊も實際に五ケ年間駐紮することにより、年限は更に繼續することが出來るといふことになつた。

更に屈辱的なことには、英佛伊各代表者を以て組織する財政委員會が、土耳古の每年の豫算案の内容及び執行、借款契約、通貨及び一般財政を改善する計劃等に對する許可及び監督をするといふことだ。それから治外法權に關しては、聯合國の便宜に從つて再議するといふのだ。

如上の條項は、實に土耳古を死地に陷入れるに均しいものと云はなければならない。その瀕死の土耳古の爲めに僅かに氣を吐きつゝあつたケマル一派の青年土耳古がこれに甘んじて服從する氣遣のないことだけは、前述の國民盟約の主旨に於て、既に明白であつたが、君府の形骸のみの政府を擁して英國に籠絡されてゐたフエリッド一派が如何にしてこの條約に調印するまでの手段を踏んだかといふに、それは實に珍話がある。即ちフエリッドは該條約が聯合國から交付されるや直ちに、イルデイズ宮に八十名の知名の士から成る會議を召集して、贊否を討つた。所が、彼は討議を許さずして贊成者に起立を求めた。そ

して形勢が不穩であることを嗅ぎ分けて、皇帝に耳語して起立を乞ふたので、そこに居並ぶ凡ゆる人々は、皇帝に對する禮儀を顧慮して一様に起立した。が中にたつた一人、硬骨漢故リサ・パシアがあつて抗議を發した、彼は憤怒の餘り聲をふるはしながら、一同が起立したのは土耳古皇帝に對する尊敬の意味からであつて、條約に賛成したわけではない、そしてこの會にはさうした條約に對する投票の權利がなく、よしあつても、小亞細亞で公然それに反對を表明してゐる事は出來ないことだと、フェリツドを難詰した。フェリツドは之に對して何等辯明をなさずして、條約が採決されたことを宣告した。そして終りに聽取られるような聲で、小亞細亞は平定することが出來ると附け加へて云つた。

このようにして調印されたセーヴル條約だ。が其後になつてそれが愈々どうしても批准されないことが分明して來たので、流石のフェリツドも遂にその地位から墜落してしまつた。これがもし、批准でもされようものなら、それこそオツトマン帝國の滅亡たるのみならず、土耳古自體の本當の滅亡だつた。だから批准を絶對に不可能ならしめるにはどうしても懸命の爭鬪なしではをさまらなかつた。

ケマル派の國民會議は兵力を集中してエスキ・シエールよりアフユン、カラヒツサルに至るバグダツド鐵道の沿線の希軍を喰ひ止めにとりかゝつた。が海軍は休戰條約適用の下に英軍に引渡してあつたので、海岸は希軍の配下にあつても、それを爭奪することが出來なかつた。だから歐洲に在る希軍の後陣を窺ふ等とは、全然、問題とならなかつた。彼等は小亞細亞に立籠つて、エスキ、シエールからアフユンまでの戰線の正面のみで希軍と接觸してゐた。希軍の總指揮官としては英國の軍人が附いてゐた。アフユンの陣地に於ける烏合の土耳古軍は左側を突かれたので、列を亂して潰走しなければならなかつた。後方へじ十五哩、即ちアンゴラからたつた四十哩の所で、土軍はサカリア河に沿ふて北から南へ戰線を敷き直した。

そこではケマル・パシヤが自ら指揮をした。こゝでも希軍は又た、左側を取圍まうとしたが、ケマルはそれと接戰すべく兵力を引いた。土軍の戰線の南方に當るサカリア河を横切つて、希軍は五十哩も東の方に向つて空しく土軍の左側に出ようとして進んで行つた。然るに陣容を變へたケマル軍の此度の位置は、アンゴラの南西五十哩許りを隔てたる所で東から西へと戰線を張つてゐたのだ、それとは知らずに希軍はケマル軍を打ち破らうとの努力から二十一日間も勞苦したのだ。そして遂に土軍のために散々の目にあはされて、エスキイーセールーアフユーン

線に復歸した。――この戰ひは他日、世界史的戰爭の一として世人から鑑賞されるであらう。ケマルの經歷に於ても、それは一九一五年のアナフオルタの勝利と比すべき花々しい插話だ。

この戰ひによつて、英國が後押しせる希臘主義とその所作たるセーヴル條約とは悉く崩壞したわけだ。去る三月の巴里に於ける近東會議はその結果だ。ケマルも國民會議の外務大臣ユーソウフ・ケマル・ベイを彼の代表としてこの會議に參加させた。その席上で、英佛伊は、雅典かコンスタンチノープルかアンゴラをば、希土間の平和會議の開催地として指定したが、ケマル側の回答ではマルモラ海上のイスミツド灣を會議の候補地として希望した。加之、國民盟約の完全なる承認と平和會議開催前に希軍の小亞細亞撤退とを要求した。イスミツドを希望したのは、此平和會議にアンゴラ側の代表が臨む時に、ケマル自身が會議の樂屋から指圖が出來るからであつた。がこの問題は遂に、未解決のまゝで、更に新らしい局面へと展開していつた。

六

ケマルに就いてまた〴〵云ふべき多くのことがあるのに、私の與へられた紙數はもう幾らもないので、私は結末を急がねばならない。

希軍が既述の如く英國の諒解の下に、小亞細亞に侵入して以來長驅して將にアンゴラの四十哩手前にまで迫つてゐたけれど土軍のため逆襲されたので、エスキイーセール－アフユーンの線まで退却せなければならなかつた。そこに兩軍が對陣して、既に一年となつても何等戰況に變化がなかつた。

然るに希臘は、小亞細亞に出兵してから戰費の負擔が多すぎて國力が疲弊して來たので、自然戰地の將卒も意氣甚だふるはなかつた。それに引きかへ、土軍はケマルの外交政策宜ろしきを得て、露佛の援助により武器、軍資を此間に蓄積してゐたので、新鋭の氣に充ち溢れてゐた。夫れで一度び土軍が、去る八月廿四日以來攻勢に出たとなるや、希軍はそれを支持することが出來ないで潰走した。スミルナ、ブルサは陷れられた。そこで今やボスフオラス、ダーダーネルス海峽及び亞細亞沿岸の中立地帶に侵入して君府にまで肉薄するに至つた。

この戰捷の結果だ、現在のムダニア會議は。そして土耳古が概ぼ戰前の狀態に歸ることだけは明かとなつた、英國の脅威は何ものにも値しなかつた。却つてその持つ弱點を世界に暴露したに過ぎない。希臘の所謂ヘレニズムは全然倒壞した。

ケマルの軍人としての才能は、疾うから試驗濟みだ。が政治

家としての力量を試す機會は、アンゴラ政府の樹立後に屬する、特に露佛との同盟締結に於て、その鮮やかさが見られる。これに就いて少しく記述するであらう。

一九二〇年の夏頃から、ロシアがケマルの運動に注意を拂ふようになつた。當時は既に、聯合國が援助してゐたデニキン、コルチヤツク、ウランゲル等の反革命が崩壞してゐたので、初めてさういふ餘裕が出て來たわけだ。ケマルに對するロシアの態度は、著るしく同情的だつた。聯合國の支配に對する土耳古民衆の反抗運動だと堅く信じてゐた。又たレニンの信條に依れば、英國を倒すことは世界に於ける資本主義の根城を覆すことであつた。そして英國を敵とすることに於て、土耳古とロシアは同一運命の下におかれてゐた。尙ほロシアとしては、當時東洋の赤化に意を用ゐてゐたから、ケマルの運動をも、共產主義にまで持つて行かうといふ考も十分あつた。だから同年の九月には、バクーに東洋共產黨大會を開いて、小亞細亞、トランスコーカシア、シリア、メソポタミア、ペシルヤ及びカスピア海の彼方からも代表者の參集を求めた。所が大いに興味あることは、この大會の席上チノヴイエフが、資本主義西洋の支配に對して、東洋人は神聖戰爭を宣布すべきだと演說して、聽衆の注意を喚起したことだ。これでロシアがケマルとの接近によつて何を得んと期待したかは明白だ。

アンゴラ政府のケマルにとつて、ロシアとの講和は單にアンゴラ政府の承認といふ精神的利益あるのみならず、軍器を得ることが焦眉の問題であつた。

そこでアンゴラ政府は、一九二一年の三月講和委員長ユスフケマル・ベイ、委員アリ・フアド・パシヤ及びリサ・スル・ベイ以下をモスコーに派遣して、チチエリン其他の中央執行委員幹部と講和會議を開かせた。その結果、ケマル派はロシアより財政及び物資の援助を受けることが出來た。

然るにこの頃は共產主義化に對するロシアの政策も、一年前とは違つてゐた。即ち、この條約の第一項中の『……此兩國民の自由及び獨逸に對する權利並に兩國民が自ら欲するところの政體に基いて、自ら統治すべき權利を形式的に確定す。』といふに徵してそれが分る。

又たフランスは當初セーヴル條約に於て、スレースを希臘に與へることに贊成したものゝ、その後となつて英國が君府で銳意專斷的に希臘を手先として、ロシア若くは汎スラヴ主義に對する綏衞並びに印度に通ずる途上の反英回教團を制肘するの策をとりつゝあるを見ては、其外交が失敗であることに氣が附いて來た。それに希臘がセーヴル條約にて承認せられた範圍以上

に、小亞に於てヘレニズムを發揮したことはフランスが到底看過すことが出來ないことであつた。

フランスにとつては將來、獨逸の脅威に對する戰略から云つて英國とは反對に、近東に於けるスラヴ系諸國の崩壊又たは非聯合を希望しない理由はあつたし、シリシアでの土軍との對戰が、軍事的にも危急であつた上に、財政上の負擔にも堪えかねてゐた。其上チユーニス、アルゼリア、モロツコ等北アフリカの佛領に於ける回教徒に對する統御から云つて、土耳古との戰爭を永續することはフランスとして危險であつた。

以上の形勢に迫まられてゐたので、フランスは英國を裏切つて土耳古の壞柔策に出で、一九二一年十月廿日密かに一新聞記者フランクリン・ブイヨンをしてアンゴラ政府と條約を締結させた。そしてフランスとしては諸種の利權を獲得してシリアを撤退し英國を驚倒せしめた。

アンゴラ政府はその結果、シリア國境を改訂し、シリシアに於てバグダツド鐵道を含む廣汎なる地域は恢復するし、武器彈藥の供給は受けて、その地歩を一層鞏固にするとが出來た。かくてセーヴル條約も遂に死文となり了したのであつた。

近東の問題はなか〳〵複雜だ、西歐の伏魔殿と云はれるのも尤もだ。その眞相は到底われ〳〵門外漢には分りかねる。けれど近東をして左樣に、堪えず騷擾せしめてゐる一般的のノートだけは判然してゐる。それは即ち、歐米に於ける資本主義の發達だ。この鍵さへ握つてゐたならば、一切はそれに照準して判斷して間違がない。

七

プライスはケマルの印象を物語つて、鐵のような顏だと云つてゐる。又た恐ろしく單純な線の顏だ。頰骨が可なり高くつて鼻は眞直で大きくて、口は一直線で、そして薄い脣だ。肉體的には細つそり痩せてはゐるが、强さうな印象を與へる。土耳古風の食物では體がもてぬので、西洋料理ばかりで生活してゐるが、弱くて冬の間はよく病氣する。彼は今日世界での確乎したそして眞面目な指導者の一人だと云つてゐる。

また前駐米の土耳古大使ベイに依れば、――彼は普通人よりは身長が高いけれど、細つそりしてゐるせいか、餘り體軀が頑丈だといつたような印象は與へない。むしろしなやかと云つたような感じのする人だ。その人格の力なり彼の興味はよく顏に表はれてゐる。廣い四角な顏だ、その輪郭は精力と決斷とを現はしてゐる。所がその猛烈に動いてゐる姿は、人をしてよく飼育されたアラビア馬の癇癖のある顏を聯想せしめ、大きな精神

的旋風を暗示するものだ。前額の廣いところは理智の相だし、鼻の秀でたところは肉的だ、大きいぱつちりした眼で、その閃光は、鋼鐵の投鎗が飛ぶような鋭さだ。がその發する奥の方は、聊か期待を裏切るような柔かい靑い色をしてゐる、そして心持ち鈍眠みた所が愛嬌だけれど、鋭い眼の光りがそれを打ち消して最後の仕上げをしたのが、その特異な人相だ。

ケマルの顏はよく餌を待ち臥せてゐる豹と比較されるものだが、彼が軍事若くは政治的攻擊に就いて考察しつゝある時の顏にはさういふ所があるかも知れない。で時々强度の殘忍さが彼の顏に漲つてゐることがあるとしても、時には又た、子供が笑ふ時の本當に愉快さうな、顏中で笑つて晴々しいこともある。まあ然し大抵の場合、彼の表情はむツつりした恐ろしい顏だ。

彼の樣子は氣分次第だが、何時もは遠慮勝ちで隔意がましく、殆んど西洋人は嫌つて會はない。彼は東洋人が外國人と交際ふ場合の特徵たる、言葉なり態度の慇懃さを持ち合はさない、ケマルは西洋が東洋に公言する所の輕蔑と、西洋が東洋に大きくそして我儘勝手な仕方で贏ち得た支配と、それから彼の自國が受けた又た現在受けつゝある恐ろしい西洋の不正とを、決して忘れはしない。彼には國民若くは個人として誇りがある。彼には愛國心もある、彼は西洋人が優越權を請求することは、人種的性質のものだと知つてゐる。彼は又た東洋が何時かは、西洋の羈絆から解放されるものだとも豫見してゐる。——

要するに彼は、ペイも云つてゐる如く人格としては、幾多の缺點をもつてゐる。決してガンヂのやうた聖人ではない。がそれはどうでもよい。私は只だ彼が、西歐の帝國主義から壓迫された結果、生きんとする本能に從つて蹶起した土耳古の國民黨の中心人物だといふだけで、彼に敬意を拂ひ、彼の運動の將來に囑目するものだ。彼が全世界の回教徒からも、今や希望の中心となりつゝあることは云ふまでもない。

長春決裂と日露の將來

ウエー・アントーノフ

長春會議決裂の原因は之を會議そのもの、若くは會議中沿海州で起つた出來事に於て求むべきでない。長春會議は日露兩國代表の長春に集る以前に於て、巳に失敗に終るべく、運命づけられてあつた。

それは會議に臨むに當つて、善隣關係を打ち立てる以前、何等他意をもたなかつたのに、日本が露國に對し、讓歩を求めんとしし、かもその要求を公然明示するを敢てし得なかつたことにある。日本は沿海州撤兵の決定を公表するにあり撤兵に對しては何等代償（コンペンセーシヨン）を要求しない、日本國民のために、ただ極東共和國が外國人一般に與へる權利丈けを得んとするに過ぎないことを聲明した。之は誠に結構なことで、勿論露國人に對して好印象を與へた。然るに遺憾なことにはこの美しい宣言の直後、六月の豫備交渉の際、協約が撤兵開始前（その撤兵終了前に締結すべしとの要求に改められた）に締結されるならば、浦鹽に於ける武器を知多に渡すが然らざる場合はチデリフスに渡す—との條件が前後通牒の形式で提起された。

實に此の提議は從來の幾分公明な撤兵宣言の總べてを一擧に無効にせざるを得なかつた。外交に、力あるは、たゞ美しいのみで實質の空虛な言葉でなくて、具體的の行動である。而して武器問題に關する日本外務省の態度は實に這個具體的行動に外ならない。

かくして會議はその開始前、已に決裂すべく準備されてあつた。露國人はまだ曾て干渉（インターウエンション）に甘んじたことがない。我等は干渉（インターフエンション）當時の政策をたゞ外觀丈かへたやうな今日の日本の政策に對してもそれを甘んじて受入れることが出來ない。

會議に於ける日本委員の行動は、武器問題の上に表示された通りの日本政府の方針を以て、終始一貫した。日本政府の露國に對する非友誼的態度は會議中一點の疑を容るゝ餘地ない程、明白に表示された。

それは撤兵開始期日の切迫した時、浦鹽政府はその兵力を擧げて、第一期の撤兵區に移した。八月中旬チテリフスはスパクス及ニコリスクの附近に、たゞに大砲・小銃・機關銃で武裝されたばかりでなく、飛行機はては裝甲列車（その中の一つは八月廿八日パルチザンのために爆破された）までも具備した約一萬の兵を集中した。

旣に浦潮に白でない政府のあつた當時、日本軍當局は同政府に對し、たゞ民兵、豫備民兵、司令官の護衛隊—通計二千人、その武裝は小銃及各一挺につき百五十發の彈をもつ丈けをゆるしたに過ぎなかつた。或は云ふ、白軍は森林中に隱してあつた武器を探し出したのだと。

かの日本軍の保管したチェコ、スロワキヤの武器の「紛失」事件の暴露は、日本國民にも、沿海州に於ける日本軍人が、如何に積極的に白軍を援助したかを表示したが、**露國人は既往の四年間、毎日この種の事實を見せつけられて來た**

日本軍が沿海州でチテリフスを武裝した時、日本外相が知多に對する武器引渡の問題に就いて、二樣の意味にとれるやうな說明（九月十六日のインターウエー）を與へた時、長春に於ける日本代表は其後通牒的に、一般協約か、他の一切の事情とは干與なく、署名後、即時効力を發生すべきを要求した。

露國代表は、沿海州の撤兵はいづれにしても實行され、又撤兵後極東共和國等は容易に白軍の始末をつけ得ること、信じて居るから、日本軍の行動に就いては、あまり氣にかけぬことにして居た。然し交渉を繼續するためには、何うしても日本政府が明白に露國と平等の方針で親善關係を樹立する意志のあることを確認することが必要であつた。たとひ武器事件で明證されたことから推して日本政府が、此の點、多くの期待をゆるさなかつたにしても、とに角露國代表は今一度日本政府の眞意の那邊にあるかを知らうと試みた。薩哈嗹問題は實に之れがための試金石として投ぜられたものである。

……………………………………………………

……………………………………………………

……………………………………………………

……………………………………………………

……………………………………………………

……………………………………………………

……………………………………………………

…………………………………………。

松平氏が基本協約の調印後即時効力の發生すべきを要求した時、ヨツフエが露國の利害に關する諸問題も亦公平な根

紙の上に解決されべきことの保證を得やうとしたのは當然であつた會議に於けるそれまでの日本代表の行爲は、確に人をして、日本が單に日本の利益とする通商復舊問題の滿足なる解決を遂げ、然る後に、何やかや、口實を設けて、薩哈嗹の撤兵の如きを延期しやうとするものではないかとの懸念を起させるに十分な根據を與へたとせねばならぬ。

果してヨッフェが、日本はいつ薩哈嗹を撤兵するかとの質問を發した時、松平氏は薩哈嗹の撤兵は尼港問題の解決を俟つて行はるべきもの、然し尼港問題は日本はたゞ承認された露國政府とのみ交渉するものであることを答へた。斯くして松平氏は露國人の最悪の豫想を實現した。……………………………………………………………………又日本政府が長春會議前の豫備交渉の際、尼港問題を來るべき會議の議事から除去しやうとは曾て一度も口にしたことのなかつたことから推しても、その邊の事情がよく察知される。日本外相が八月一日知多政府に送つた公文中「大連會議の審議されなかつた諸問題、たとへば漁業問題、尼港問題等の如きは基本協約締結後に始めて審議に附すべく、右に就いては我が政府はアントーノフを介して極東共和國政府に通知して置いた」との文句があつたことに照らしても明らかに證據だてられる。

日本政府は尼港問題の附議を六月と八月には同意して置き乍ら、九月十五日になつて拒絶したのだから、當然露國人の疑念がたゞ益々深くならざるを得ぬ。當然なことではないか。一般條約、通商協定、漁業條約の改新、黒龍江はては支那領土を流るゝ松花江の航路問題まで……要するに凡ての問題は之れをあげて現在の露國政府を對手に交渉することかと思ふ。たゞ薩哈嗹撤兵と尼港事變の二問題丈けは出來ない……

なる程、日本政府はやがてかゝる態度を固持することの不可能なるをさとつた。そしてこの二問題も長春會議で協議

してもよいと云ふことに同意した。然し已に刻み込まれた不快な印象は消えない。のみならず此問題に對する日本の新方針もつひに露國側をして滿足させることが出來なかつた。日本代表は最後通牒的に一般協約を調印後即時批准すべきを要求した際に、露國は尼港事變に對する責任を承認せねばならぬとの要求を出した。露國はこれに對し、同意することが出來なかつた。その理由は第一、尼港事變は頼まれない干渉（インターヴェンション）の法策であつたこと、第二、日本軍當局は一九二〇年沛鹽政府に對して、同政府の領內にある尼港へ秩序維持のための軍隊派遣をゆるさなかつたことである。否なそれのみでない、一九二〇年四月四日及五日沛鹽政府の軍隊は全部武裝を解除された。同政府はたゞ警察隊として僅かに二千人以內に限り兵力をもつことをゆるされたのみであつた。日本人は如何して、日本軍のために尼港其他の地に於て政權を實施することをゆるされなかつた露國政府に向つて、尼港事變の責任を負はすことが出來るとするのか。

露國の同意し得る最大の限度は干渉（インターヴェンション）によつて損害を兩國で共に調和することであつた。然るに日本は唯だ一つ露國側から出したこの公平な提議に對して同意を與へなかつた。日本はたゞ日本の損害丈け——しかもそれは日本自身の行動から惹起されたもの——の賠償を要求した。

……………………………………………………

……………………………………………………

………………………………。

……………………………………………………

……………………………………………………

……………………………………………………

………。

扨て然らば今後のことは何うなるか？兩國は依然交通せずにこの儘の狀態を續けるか。日本と露西亞とは相互の間に鐵の障壁を設けるべく、あまりに多くの共通利害をもつて居る。

露國の權威を支持して何もせない今日の露國政府の代りにより從順な別個の政府の出來るを待つなどは、日本ですら何人も期待せぬところ、即ち結局復た改めて交渉をくりかへさねばならぬ。兩國の委員も、之をさとつて、長春を去るに臨み、近く再び會はうとの希望を披露して別れた。

もし日本及露國の現狀をよく仔細に考察するならば、兩國の久しい間に亘つて利害關係は何うしても兩國の間に善隣の交誼の樹立を必要とすることを認めずに居れぬ。從來兩國の國交を危ふからしめた原因は二つあつた。即ちその一つはツアール時代の露國政策が侵略主義であつたこと、今一つは歐洲戰爭及び革命戰に於ける露國の疲弊に乘じて、日本の政策が侵略傾向を帶びて來たことである。先づ專制帝政倒潰後の露國政策について見るに、革命―その結果政權はプロレタリア及農民の手に歸した―は對外政策にも影響を及ぼさざるを得なかつた。それは云ふまでもなく、對外政策が常に國家の社會經濟の組織と必然相合致せなければならぬものであるからである。新らしい露西亞は、啻にツアリズムのあらゆる侵略的計畫を抛擲したばかりでなく、從來露國の版圖內にあつた各民族に對して、舊版圖內に殘らうと、獨立國を建設しやうと勝手に決すべき權利を與へてやつた。今現にサウエート共和國は幾多民族の自治共和國の任意聯邦となつて居る。

露國の敵は今もなほサウエート外交は帝國主義の精神を以て透徹して居る、サウエート政府は各國の革命運動を援助して居る、ツアール時代露西亞とは、手段は違ふが、同一の目的、即ち他の各國に對する自家勢力の伸張に向つて進みつゝあると論定して居る。而して之がために彼等は常に有名な「ボリシエキズムのプロパガンダ」を論據として居る。

成る程露國革命の第一期に於て、サウエート政府が各國政府を倒潰せよ、戰爭をやめよ、公平なる平和を締結せよ………と叫んだ時、之れは即ち永久的に定められたサウエート外交の大方針だと思はれたのは無理もない、然しそれは要するに單に新らしいプリンシプルを肯定したものであつて又四方からサウエート露西亞に殺到して來た全世界に對する自衛の手段に他ならなかつた。サウエートの國際政策の新らしい輪廓は凡ての反革命運動が失敗に終り、封鎖（ブロッケード）も干渉（インタァーウエンション）も終を告げた時に、始めて判然と劃定されたのである。

サウエート露西亞は、國際局面に於て、たゞ一意平和を以てその使命として居る、自己の獨立を固持し、凡ての列國との親善關係を設定しやうとするものである。我等が如何に平和を愛好して居るかは、ゼノアで我が代表が、軍備縮小及戰爭規約の追加が（たとへば毒瓦斯、飛行機、平和の人民に對する加害等野蠻手段を禁止すること）を提案したことによつても證明される。

サウエート政府は、もし他の列强の露國の例に倣ふならば、今一層赤軍の兵數を削減するを辭せないことも聲明して置いた。軍備縮小問題が進行しないとしても、それは露國の罪でない。

歐洲戰爭は資本國をしてその將來の政策を根本的に改めさせるに至らなかつた。今日も依然一九一四年前の如く、列强の國際政策は、弱者を虐げるため、强者がその覇權を樹立するを目的として居る。

今當分世界は不安定な均衡狀態にある。然しおし潰された獨逸の代りに、米英兩國が世界的覇權を握らうとし、アングローサクソン合同國が出來せんとするの形勢はもう歴然として明白となつて來た。

新くの如き狀勢の下に八年間に亘る戰爭と革命で疲弊した露國は余儀なく壓迫の下に呻吟する民族、强國支配下に苦悶する民族を糾合して同盟を建設し、之れによつて彼等の凡てが自家の權利を固持し得るの途を切り開くことを努力す

る他なかつた。サウエート露西亞は極東に於ても斷乎としてツアールの政策を拋棄した。他國の領土の侵略は無論のこと、何等の特殊の權利も得やうとしない。我が政策の目的は隣國の平和的共働と他國からの侵略に對抗する相互的援助にある。

極東に於て交錯する「力」の對立關係は近年大に變化した。この變化は次ぎの二ツの事實に於て最も顯著なるものがあつた。（一）露國が疲弊してその政策が變つたこと、（二）米國の勢力が增大したこと、即ちそれである。而してこの二ツの變局の結果と見なければならぬ。

米國はモンロー主義を、もし歐洲に於てゞなければ、少くとも亞細亞に對して、斷然拋棄した。亞細亞に對する米國の利害干繋とその勢力とは日々增大しつゝある。米國はその亞細亞政策に於て恰かも「他人の力で自國の覇權を打ち樹てた」英國を學ばうとして居る。

華府に於ける同國協同が何うであつたにしても、米國が太平洋に於て米國に亞ぐの强國である日本を獨立させやうと焦つて居る事實を蔽ふことが出來ぬ。米國は日本を敵視する國々（加奈陀、合衆國、墺太拉利、支那）の連鎖に今一ツ露西亞を加へて之れが完結を計らうと努力して居る。

概して米國は露國に對し、他の何國よりも非妥協的、非和解的態度をとつて居る。米國は天產に富む露國を以て最も危險なる競爭者と見て居る。最近の近東紛局に於ても、自ら民族自決の主義を標榜し乍ら、米國は土耳古を扶けずして、英國の肩を以つた。之れは云ふまでもなく、英國を以てダーダネルスの口を塞ぐことが、露國の復興を防止する何より確實の手段であるとの打算からしたものに他ならぬ。たゞ極東露西亞に對してのみ、米國は驚くべき程好意的の態度をとつて居る。西伯利に於ける日本の行動に對する反對の聲は頻々として華盛頓から傳へて來る。然し面白いことにはこ

ゝに於ても米國は曾て露國に實際的の援助を與へたことがない。日本のミリタリストは東部露西亞を日本に併合しやうと夢みて居た。米國は叮嚀に彼等に提議するに協同出兵を以てした。その後日本人の目の爛熟し來るを見るや、米國は、日本軍の撤退も同時に主張する當然の權利をもち乍らも、自分の軍隊だけを引揚げた。米國は華府會議で、山東の撤兵はあくまで之れが遂行を要求したが、西伯利撤兵に對する要求はたゞ形式丈けに止めた。

米國の全政策の眼目は、一方露國に對して好意ある如く見せ、他方日本のミリタリストの計劃を袖手傍觀して事實上妨害を加へないことによつて、日露關係の緊張、兩者の衝突を誘致しやうとするにある。然るに日本のミリタリストの行動は恰かも此の米國の「遊戯」の成功をたすけ、日本のためにも、はた露國のためにも出來る丈け多くの害を與へんとするものである。

露西亞は滿洲に於ける敗辱をたやすく忘却した。それは一九〇五年の露國は露國にとつての緊切な利害のために戰つたものでなかつたからである。然し今日もし露國の利益と主權を侵害するやうな打擊を加へられたならば、露國は到底しかくたやすく忘れないであらう。

太平洋の刻下の局面は、大戰前の歐洲のそれに同樣の展開をくりかへさうとして居る。それはもう疑をいれない明白事である。華盛頓會議はたゞ外觀だけ、競爭國間の衝突を緩和したやうに見ゆるのみで、實際に於ては却てそれを鋭くした。華府會議はまさに太平洋のアルヂニンラスと名附くべきであらう。

太平洋に於ける競爭の恐るべき宿命的歸結はたゞ日本、露西亞及支那三國間の親善關係の設定によつて始めて之を未然に防止することが出來る。蓋し日本はたゞ大陸からのみ危うし得る國であるからである。

然し極東に於ける平和的發達の保證を得んがためには、日本が露國に對するだけでなく、同亞細亞に對しても、侵略政策を拋棄することが必要である。自國の侵略政策をすてた露國は他國の帝國主義的企圖を助けることも出來ない。

日本の多數民衆は平和的外交方針に傾いて來た。既往數十年間著しかつた帝國主義的氣分が薄らいで來た。之れは誠に結構な前兆である。侵略政策は國民の多數の反對があつては到底巧みに實行することが出來ない。然しミリタリストは今後なほ自家の舊い政策を繼續しやうと試みるであらう、此のポツシビリチーはまだ芟除されて居ない。それだから形勢は益々ミリタリストのために不利となる。

今日日本の侵略政策を差し向け得るは露西亞一國である。もしこの事にして實行されんか、兩國の親善關係の設定は中絶される。然しミリタリストの政策は別として、兩隣國民間何等敵意をもすべき理由がない。從つて兩者間の交際に何うしても早晩樹立されねばならぬ。親しむべき理由があつた。然るにたゞ一ツ獨逸參謀本部の政策が兩國民を驅つて戰はしめ、その結果、兩者共に疲弊した。然しその代り敵意の消え去るや、直ちに親善關係の復舊に向つて兩國は一大長足を進めた。

希はくば、日露兩國の平和關係が、獨逸の經驗に鑑みて、今日再びかゝる失態をくりかへすことなく、そして無用な苦しい試煉を嘗めることとなしに、樹立されんことを。

大阪勞働合戰（秋の陣）

解散。決裂。檢束退去。

山川均

一

日本の無産階級運動の爲に、歡びと氣遣ひとをもつて其の成行を注視して居つた勞働組合聯合會は、愈々三十日に創立大會を開くことゝなつた。大阪へ！大阪へ！組合の闘士と社會運動者の群れは、續々大阪に急いだ。二十七日あたりからは、東京驛と新橋驛とを出るどの急行列車も、是等の闘士の幾人かを乘せて居らぬものはない位であつた。私も二十九日の夕方、その跡を追ふて東京を立つた。

『昨晩もとう／＼、終列車までこゝに立ち盡しました。』私を引き繼いだ横濱の高等係が斯う云つてこぼしてゐた。『五時五十分の急行で新人會のTさんが行く筈です。七時の急行には鈴木文治さんと赤松さん、鐵工組合から誰々、これから堺さんの一行も同じ列車です。』

私は六時何分かの急行に乘つて、十分ばかり待つてゐるうちにも　本芝組合の顏なぢみの某君と落合つた。

高等係君の話では、私の乘つた六時の急行には誰れも乘り込んで居らぬと云ふことだつたが、實は伯爵山崎今朝彌君が乘る筈になつてゐた。それで横濱を發車すると、私は列車の中を隈なく捜して歩るいた。列車を幾つか通りぬけて次の列車の扉を開けると、がらんとした車室の中に外套でくるまつた二人の男が、わざと電燈を背にして、一つ坐席に蹲くまるようにして坐つてゐるのが直ぐ目に止まつた。紛れもない大杉近藤の兩君である。危ぶなく聲を掛けようとしたが丁度その筋向ひの坐席に

は、私の尾行刑事が腰をかけてゐるのに氣がついたので、知らぬ顔で通り拔けた。

併併は終に見當らなかつた。私は一週間ばかり、殆んど不眠不休で働いた疲れを急に感じだし、大阪の手前でボーイに揺り起されるまでぐつすりと眠てしまつた。

二

會場の前は、カーキー服や背服の代議員と傍聽者とで群衆が出來てゐた。會場の中では、傍聽者の制限問題だ、大會劈頭の危機を醸してゐた。

大會に先だつ一週間のうちにも、聯合問題には幾度びか波瀾や危機があつた。大會は決して樂觀は出來なかつた。然し二十八日からは、渦卷きの中心は、自然東京から大阪に移つた。私は大阪に於ける最後の二日に、尙ほ多くの望みを掛けてゐた。しかし會場に着いて最後の二日間の形勢を聞いた時、私は大會に對する悲む可き豫感に打たれざるを得なかつた。

日本勞働組合聯合組織の計畫──勞働階級の先覺者が、全力を傾倒したこの計畫は、終に徒勞であつたらうか。決してそうでない。日本勞働組合聯合の計畫と、それに費やされた努力との結果として、少くともこれだけのことが明瞭となつた──即ち日本の組合運動のうちには、明白に異つた二つの原則が對立して居ると云ふことである。

この二つの原則は、今日までは多かれ少かれ、組合運動の内部に蟠まつてゐる感情や行き掛りの問題に掩はれてゐた。組合聯合の問題に起つた幾度かの波瀾と危機とは、主として從來の行き掛りや感情の問題であるかの如く見えてゐた。そして實際にも或る程度まではそうであつたかも知れぬ。けれども組合聯合の計畫が、兎にも角にも創立大會を開くまでに進んだのは、日本の組合運動の内部には、是等の感情や反感以上に力強い、眞實の要求のあることを意味して居る。この力強い要求は、感情や行き掛りといふ可なりに困難な障礙をも突破して、全國の組合勞働者を、この大會に集まらしめたのであつた。

斯ように感情や行掛りの障壁を突破した時に、初めてそこには、第二の障礙のあることが明かとなつた。即ち組合運動に對する根本原則に對する意見の相異である。

或人は云ふかも知らぬ。感情は融和することが出來る、原則の爭ひは融和することが出來ぬ、勞働組合の全國的結合は、之によつて一層困難になつたものではないかと。私の見るところは之に反して居る。敵に對して非妥協的であるように、吾々は味方に對しては妥協的でなければならぬ。けれども味方の間の

眞の妥協と提携とは、相互の見解の相異を蔽ひ隱すことによつて、成就するものではない。吾々は先づ、見解の相異を明白にしなければならぬ。吾々は眞の爭點を明かにしなければならぬ。そして此の明白な理解の上に提携しなければならぬ。大會は少くとも問題を明かにした。そして問題を明かにすることは、問題の解決に進む第一歩である。組合聯合の計畫は、よし失敗に終つたとしても、それは組合の全國的團結を困難ならしめる眞實の理由が、何處にあるかを明かにした。之は聯合運動の失敗ではなくて、寧ろ眞の聯合に進む可き必要な過程であつたと云はねばならぬ。

三

大會に集まつた代議員は、組合の全國的聯合を求める熱心と誠實とに至つては、何人も恐らく異るところが無かつた筈である。けれども其の求めてゐる聯合體の内容と實質とに就ては、必しも意見が一致してゐなかつた。否な組合運動の内部には、全く異つた二つの根本思潮が流れてゐたのである。即ち其一つは現在の組合の間に、極めて緩やかな聯絡の機關を形造らうとする謂ゆる自由聯合主義であつて、今一つは、現在の組合を整理して産業的に合同し、更にこの産業的の組合を全國的に合同して、一個の全産業的組合たらしめようとする——そして此の目標に進む第一歩として、暫らく緩やかな聯合に滿足しやうとする——合同主義である。

第一の原則を主張する人々は、現在の小組合を以て一個の人格と見、この人格たる各組合の絶對の自由と自治とを以て、組合運動の至上の原則であり根本の精神であるとする。是等の人々のうちにも、同一産業に屬する組合の聯合を主張する人がある。けれども、組合の全國的聯合の場合と同じやうに、各産業の場合にも其の聯合は極めて緩やかな提携聯絡の機關を造るに過ぎない、謂ゆる自由聯合であつて、決して一産業を單位とする一個の産業的組合を造らうとするものではない。そこで此の原則に從へば、全國的の聯合又は産業的の聯合に組織せられても組合運動の單位は依然として現在の各組合であつて、全國的の聯合團體乃至は一産業の聯合團體は、單に聯絡の機關乃至は共同の意志表示の機關に止まるものであつて、行動の單位ではないのである。從つて、若し此の原則に從つて日本の勞働組合が成立したとすれば、丁度英國に於ける、從來の勞働組合大會と同じものが出來上る譯である。聯合主義と云へば、多くの人々は、直ちにフランスの勞働總同盟（C・G・T・）を聯想するかも知れぬ。けれども各組合を一個の獨立した人格と認め、この人

格に絶對の獨立と自治とを與へて、唯だその間に緩やかな聯合乃至聯絡の機關を設けることになれば、其の結果はC・G・T・ほどに集中された組織にもなり得ぬことは明白であつて、先づ之に似たものを求めれば、英國に於ける舊式の職業別的組合(クラフユニオン)によつて組織せられた勞働組合大合である。

之に反して第二の原則を主張する人々は、先づ現在の組合組織の整理が必要であると主張する。現在の組合は職業別的でもなければ、さりとて又た工場別でもない。例へば同じ鐵工又は機械工の間にも、幾つかの組合がある。そして是等の組合は精密に職(クラフト)によつて分かれて居る譯でもなく、さりとて工場によつて分れて居るかと云へば、必しもそうではなく、寧ろ偶然の結果として、諸所の工場から同一職業の組合員の集まつて居るものが多い。從つて現在の組合は、或る産業の資本家全體を敵として戰ふ場合は勿論のこと、或る一つの工場主を敵として戰ふ場合にも、決して充分な戰鬪の機關となることが出來ぬ。そこで第二の原則を取る人々は、先づ組合の組織に一大整理を行ひ各産業に從つて、各々一つの强大な組合を組織しようとする。そしてこの産業的の組合を全國的に合同して、全勞働者の階級的の組織にしようとする。例へば東京の機械工聯合の如きは此の傾向を代表する著しい實例であつて、機械工聯合は現在の所では、其名稱の通り『聯合』に過ぎない。之は原則として分散的な自由聯合を主張する爲ではなく、直ちに完全な産業的の合同を實現することは、實際の上から不可能なので、止むを得ざる徑路として聯合の形を取つて居るものである。即ち現在では緩やかな聯合に過ぎないが、しかも其れは『合同の前提としての聯合』であつて、究極の目標とする所は、眞に戰鬪力のある×××××同組織にあるのである。そこで斯ような原則と主張とによつて日本の勞働組合聯合が完成せられることになれば米國のI・W・W・の主張する『一大組合(ワン・ビッグ・ユニオン)』が實現されること丶なる。

四

自由聯合が集中的合同か、英國流の組合大合か産業的の『一大組合(ワン・ビッグ・ユニオン)』か。この二つの思想は、大合の討議のうちにも明瞭に對立した。聯合問題を混亂させて居る幾多の感情や行掛りの問題の奥から、この原則上の爭ひが、儼然とし姿を現はした。

自由聯合を主張する人々は、組合の獨立と自主權をも全てのものを超越した尊い精神と見る。組合運動は、その他の如何なる運動又は如何なる勢力にも隷屬してはならぬ。組合運動を支配するものは、組合運動自身でなければならぬと云ふ意味に解

したなら、組合運動の自主獨立といふことは、恐らくは總ての組合運動の間に異論のない所である。けれども現在の個々の組合、地方的にも産業的にも極めて不完全な組織である現在の個々の組合が、組合運動全體に對して絕對に自主と獨立とを保たねばならぬと云ふことになれば、之は全く別問題である。個々の組合が、組合運動以外のものに對してゞはなくて、組合運動全體に對して絕對の自主獨立を保つと云ふことは、組合運動全體が一つの單位として行動することを、絕對に不可能にすることに外ならぬ。何故ならば個々の組合が絕體の自主と獨立とを主張する限りは、大會の決議によつて、組合運動全體の行動や方針を決定することすらも不可能だからである。そして其の結果は、組合運動とは個々の組合が益々その意志に從つて行動する分散的の運動に過ぎないものであつて、勞働階級全體の意志に基づいて、全ての組合が集中的の行動を取ることは、例外的の場合を除いては、殆んど全く不可能となる。そこで斯ような原則の上に立つ以上は、組合の全國的組織が、聯合といふ名稱であつても、同盟といふ名稱であつても、畢竟、實行力の伴はぬ乘合馬車的決議を通過する、英國の勞働組合大會に均しいものとなる外はない。

自由聯合を主張する人々のうちには、個々の組合は、各々一個の獨立した人格であると主張する人がある。個々の組合が獨立の人格であるとしたならば、一産業の勞働者を結束した産業的の合同組合は、何故に、それ以上に獨立の性質を有する人格であつてはならぬのか。更に全勞働階級を結束する全産業の全國的合同組合は、何故に、それ以上に獨立の性質を有する人格であつてはならぬのか。全勞働階級の組織を以て、組合運動の眞の單位とは考へないで、個々の組合の獨立と自主ばかりを過當に强調するのは、資本主義の前時代に於ける職業組合(クラフト・ユニオン)のうちから生まれた分立主義にこびりついた思想であつて、現在に於ける資本主義の發達狀態に對應する××××××××とは全く時代を別にするものである。

個々の組合が獨立の人格であるとしたならば、全勞働階級の意志を代表する組合の全國的合同團體は、一層强い意味に於て獨立の人格でなければならぬ。けれども何づれの場合にしても組合は人格であるといふのは比喩的の言葉であつて、精密に云へば人格を有するものは唯だ個人である。人格を强調する人は先づ個人の人格を强調すべきである。そして個人の絕對の獨立と自由とを主張する所に、どうして組合運動の餘地があり得ようか。自由聯合が集中的合同かといふ問題は、推し詰めて見れば、畢竟個人主義と團體主義との爭ひに外ならぬ。

Tまた自由聯合の主張者が、合同に反對する最も主要な論據は、合同は中央集權的の組織であるといふ點にある、けれども若し『中央集權』といふ言葉を、少數の組合役員や指導者の官僚主義と云ふ意味に解するなら、斯ような官僚主義と集中的の合同組織とは、決して必然的に相伴ふて居るものではない。現にゴムパースの率ゐる米國のA・F・L・は、聯合（フェデレエション）』である。そして實際には極端な官僚主義が行はれて居る。I・W・W・は中央集權的の一大組合主義（ワン・ビッグ・ユニオン）である。そして何人もI・W・W・を以つて、ヘイウッドの官僚主義によつて支配せられて居ると云つたものはない。由來フランスのC・G・T・は、無政府主義的サンチカリストの謂ゆる聯合主義の上に立つものと見做されてゐた否な聯合主義そのものを體現した標本的理想的の組織であるかの如く見做されてゐた。そのC・G・X・は一體どうなつたらう。ジウオー等の少數指導者の官僚主義の爲に、終に實際上の多數派たる左翼組合を除名した爲に、二つに分裂したではないか。そしてジユオー等の幹部の官僚主義に反逆した左翼は、統一C・G・T・によつて、舊C・G・T・よりも一層集中的な——即ち一層戰闘力のある——組織に進まうとして居るではないか。英國の組合運動は、二千に近い獨立した小組合から成つて居り、集中的の組織を缺いで居ることが、行動力に乏しい主たる理由と認められて居る。そして自由聯合主義者の理想的の組織たる勞働組合大會（トレーズユーオンカングレス）を有する英國の組合運動が、同時に最も官僚主義化した組合運動であつたことは、何人も否まぬ事實である。

斯ように合同論者が、假りに中央集權的の組織といふ用語を用ひる場合には、その中央集權とは、組合の支配權を少數の役員や指導者の掌中に收める官僚主義を指すのではなくて、行動の集中を指して居るものである。即ち全勞働階級の行動を集中することの出來る組織を指すものである。そして最もよく、行動を集中することの出來る組織は、官僚的の組織ではなくて、一般組合員の戰闘の意志と力とを、最も正確に、最も敏速に反映することの出來る組織に外ならぬ。

勞働階級の戰闘力を有力にする爲には、行動の集中を必要とすることは、恐らく何人にも異存のないところである。無政府主義的サンヂカリストとして有名なエミール・プウゼーの如きも、C・G・T、は二段に集中（コンセントレート）（コンセントレーションは即ち中央集權と譯されてゐる文字である）せられた組織であると云つて誇つて居る位である。唯だ事實は、C・G・T・は聯合主義（フェデラリズム）中毒の爲にプウゼーの期待するように集中が實際には不充分であり、從つて有力な行動力を缺いでゐたまでゝある。斯ように組合運動の官僚主義化が、何人も反對すべきものであると同時

に、組合の行動の集中は、苟も組合を以て鬪爭的の團體と見做す者は、何人もその必要を認めて居る事柄である。中央集權といふ言葉は、ブルジア政府の形態を言表はす爲に發明せられた譯語である。從つて吾々は、此の言葉そのものに、一種の不快の感じを持つて居るけれども此の中央集權といふ言葉によつて與へられる聯想の爲に、組合の集中的の組織そのものを毛嫌ひするのは、一種のセンチメンタリズムに過ぎぬ。

五

自由聯合か合同か。行動の分散か行動の集中か。これが大會に流れてゐる二つの思想的潮流であつた。愈々規約草案の逐條審議に入ると、直ちに此の二つの潮流はぶつかつた。然し幸に此の渦卷きを乘り越しても、尚ほ大會の前途には、理事乃至は執行委員の選出方法といふ難所がある。組合同盟側から總同盟に對する『日本勞働總同盟』なる名稱の撤廢を要求する謂ゆる『希望條件』の暗礁が隱くれて居る。

二時間に亘る兩派の交渉の結果はどうなつたらう。休憩後の議場は、異樣の緊張を示してゐた。この緊張した議場の空氣のうちに先づ組合同盟側から、飽くまで自由聯合主義に基づく水沼案を支持する最後通牒的の宣言が放たれた。總同盟側からは京都聯合會の鬪士、辻井君が平井案を支持する爲に起つた。特に力を罩めた『力の集中』といふ一語が演說者の唇を離れた刹那、臨監の警察官は演壇に飛び上つた。『解散!』。四十餘名の正服巡査がどや〳〵と現はれて、演壇の端から端まで占領した。一隊の警官は階上の傍聽席に驅け上つた。

寫眞班のマグネシユムが立て續けに爆音を放つた。そして眞白の煙が議場を包んだ。

六

私は演壇の正面の方へ廻つて、この劇的の光景を見て居つた。どうした間違ひか、私が捕まつたといふ噂が傍聽者の口から口に傳はつてゐた。私はこの噂の間を縫ふて場外に出た。

會場入口の前には、約二百の正服巡査が六隊に分かれて、何といふ陣形だか知らぬが、左右に三列づゝの斜線を描いて固めてゐた。會場の裏手には、尚ほ百に近い正服巡査の影が暗がりに動いてゐた。三十分ばかりして傍聽者が出てしまうと、代議員の一隊は、勞働歌を歌つて會場から左の方へ去つた。續いて他の一隊は、×××××く歌を歌ひつゝ、右手の暗に消えて往つた。

私は途中で前衞社のU君と無産社のN君と一緒になつた。そ

して荒畑、堺の兩君が檢束された話を聞いた。右に折れて戎署の近くに差かゝると、五人の私服が私を取圍んだ。何でも此の五人の一組で、誰れか一人檢束する命令を受けてゐたが、思はしい獲物がないので空手でこゝ迄で引揚げて來た。するとW君の尾行から私のゐることを教へられ、際はどい所で手柄を立てたのださうだ。

戎署の刑事部室には、先着の堺君の外にK君、T君、U君、W君、その他數名の人達が來て居つた。私が捕まらぬうちに、もう京都のM辯護士は、戎署に私を貰ひ受けに來て呉れた。

一體どうした意味の解散なのだらう。組合の大會で、代議員の討論が少しばかり熱したからと云つて、警官が踏み込んで解散を命ずるといふようなことが、日本以外の何處の國に見られるだらう。組合の自主と自治とを蹂躙して居るのは、合同や集中の組織ではなくて、ブルジョアジーの權力ではないか。人々は何故に、敵の權力に對して獨立と自由とを要求しないで、仲間の間にのみ、其れを求めることに急なのだらう。私は刑事部室から『保護室』に移された。コンクリートの土間に敷いた一枚の莚の上に、疲　た體を横たへて、斯んなことを考へてゐるうちに寢てしまつた。

翌日から三日に亘る總同盟の大會が濟むまで抑留されるものと思ふてゐると、翌朝意外にも釋放された。しかし即時大阪を立ち去る可しといふ嚴命であつた。

私は十時の列車で西下した。新聞は案の通り、『社會主義者の大陰謀發覺』の爲に創立大會が解散されたとか、社會主義者が騒擾して大會を混亂に陷入らせたなどとしきりに書き立てゝゐた書き立てゝゐたと云ふよりも、書き立てさせられてゐたと云ふのが事實だらう。之は組合運動と社會主義運動とを離間しようとする、官憲の何時もの戰法だから。私は新聞をおいて、幾度も煤煙の漲つた大阪の空を振り返つた。そして其の下に、組合旗を押立てた示威行列の進むさまを想像した。（十月二日。三十日の夕刊には、信友會の使命を疑ふ云々といふ見出しで私の談話が載つてゐたが、何かの間違ひと思ふ、私は新聞記者と會見したことはない。）

留置場の夢

堺利彦

（一）

九月三十日の夜、私は大ぶん久しぶりで警察の御厄介になつた。それは大阪の天王寺警察署で、幸ひ今度はなぐられも蹴られもしなかつたが、板の間の薄べりの上に、怪しげな毛布を（四人に對して一枚）あてがはれたきりで、枕もなしにゴロ寢をしたのは、聊か獄味を思ひだすに足りた。それでも前夜、汽車の中で、碌に眠らずに通した翌晩の事とて、大した不愉快も感ぜず、間もなく其のまゝ寢入つてしまつた。

一體、私は何んの爲に警察の御厄介になつたかと云ふに、その日、私が傍聽してゐた『日本勞働組合聯合創立大會』が、新派の芝居がゝりで解散を命ぜられて、其の餘波が何故か、（警察側から見て）私共を自由にして置いてはよくないといふ事情を生じたのであるらしかつた。

『新派の芝居がゝり』といふ形容がナゼ出たかと云ふに、その時、演壇の片隅の金屏風の蔭に隱れてゐた警部さんが、仰々しい長靴のいでたちで不意に飛びだして來て、兩手を高く空にあげて、（カイサアン！』と怒鳴るが否や、控室からバラ／＼と、白服の巡査が三十人あまり繰りだして、警部さんを中心に、ズラリと演壇に垣を作つた其の光景が、如何にも『新派の芝居がゝり』であつた。

それから私共數名の惡漢は、警察官に取りまかれて自動車に乘せられ、一たび戎町署に護送され、更に自動車で天王寺署に護送されたのが、その邊は前の『芝居がゝり』との對照上、むしろ『活動式』と云ふべきだらう。

然しそんな事はどうでもいゝが、私には別に一つ殘念な事があつた。右の『創立大會』に引きつゞいて、十月一日から三日まで、『日本勞働總同盟第十二大會』が開かれるのだが、此分ではそれの傍聽が出來ないらしい。私は留置場の保護室で、南京虫と虱とを氣にすると同時に、深く其の事が氣になつた。

然しこれもまだいゝ。私には猶一つ困る事があつた。私は此

の大阪行について、二つの大會の傍聽記を書いて『改造』に寄稿する約束があつた。それがフイになつては『改造』も困るだらうし、私も（稿料の關係上）大いに困る。

と云つて、既に警察の御厄介になつた以上、そんな愚痴や苦情が無効な事は分りきつてゐる。そこで前申す通り、間もなく『殘念』と『困る』との間に泣寢入りに寢入つてしまつた。

所が、何かの拍子にフト目を覺まして見ると、驚くべし、私はもういつのまにか、監獄にはいつてゐた。こんな筈ではなかつたがと、大ぶん不思議な氣持がしたが、何しろチヤアント柿色の着物を着せられ、編笠をかぶせられ、藁草履をはかされて、御看守さんに連れられて石だたみの廊下を歩かされてゐる。

どこに連れて行かれるのだらうと思つてゐると、教誨所に來た。教誨所には數百人の囚人が、固よりいづれも、柿色の制服で、列を正してベンチに腰かけてゐた。『大會』の席場であつた天王寺公會堂のホールそのままの構造であるのを、又少し不思議に思ひつゝ演壇を見あげると、そこには意外な人物が立つてゐた。脊廣の洋服を着た、日本人とも西洋人とも見わけのつかない髭むぢやの男が、これから演説を始めようといふ樣子であつた。

壇上席を見わたすと、そこにもこゝにも知つた顏がある。山川均もゐる、荒畑寒村もゐる、大杉榮もゐる。いづれも柿色で寒そうにショゲてゐる。次には片山潜が目につく。オヤ、いつロシヤから……と怪しむ間もなく、今度は秋水の目にブッつかる。オヤ〳〵……と呆れてゐる中、今度は又、出齒龜君を見つけだす、男三郎君に目禮される、大久保時三郎君に隣席からツッかれる、何しろ之では舊友再會の寄りあひだと、懷かしい氣持で胸が一パイになつてゐると、壇上の辯士はもう『諸君！』とやりだした。

『教誨』にしては變な調子だなと思つてゐると、隣席の時三郎君が小聲で敎へてくれた。今日は只の教誨ではない。あの辯士は有名な學者で、今日は特に我々四人に對して、犯罪に關する講演をして呉れる爲に、態々招聘されて來たのである。近來は監獄でも折々こういふ事をやつてるのだと。成程久しく御無沙汰をしてゐた間に、監獄も進歩したものだと、私は大いに感心した。

同時に私はフト考へついた。イヤ、これは好い都合だ。『改造』の約束が果せないで困つてゐたのだが、この講演をよく覺えておいて、それを跡で書いてやりさへすれば、結構いゝ種になるわけだ。旨い、旨い。これで稿料も何がしか貰へる。……

● （二）

『諸君！』

辯士はもう講演をやりだした。

「諸君。若し私が、監獄とか、犯罪とか、囚人とかいふ事について、世間並の考へを持つてゐるのであつたら、私は今日、諸君に向つて此の講演をやりはしない。

『私は今日、犯罪といふ事について、及び其の原因と救治策とについて、諸君にお話しをするのだが、實の所、私は毫末も「犯罪」といふものゝ存在を信じてゐない。××××××××××××「××」×××××、×××××××××××。

『私の見る所では監獄の内にゐる者と外にゐる者との間に、眞の道徳上の差別があるわけでない。外にゐる者が善ならば、内にゐる者も善である。内にゐる者が惡ならば、外にゐる者も惡である。外にゐる者は外にゐるより外に仕方がなく、内にゐる者は内にゐるより外に仕方がないのである。監獄にはいるのは、只だ其の人の境遇上、はいらねばならぬ事になるからはいるのであつて、當人は其の境遇をどうする事も出來ない、×××××××××××××××××××。

『私がこんな事を云ふと、世人の多くは蓋し、それでは諸君の爲にならないと云ふだらう。然し、世人が果してどれだけ、諸君の爲になる事をやつて呉れてゐるのか、私の云ふ事は、諸君の爲になるかならないか、知らないが兎にかくタマには、教誨師などの説教と違つた事を聞くのも、萬さら惡くはあるまい。

「教誨師などは斯う云はれる。諸君は善い事をせねばならぬ。そうすれば金持にもなり、幸福にもなると。然し諸君がよく御存じの通り、善い事をする者が決して金持になれない。だから多くの人が、何か善くない事で金をもうけようとする。只だ諸君は、外にゐる人達ほど、上手な遣方を知らなかつたのである。』

（私はこゝで一つ手を叩いてやらうと思つたが、マア暫く遠慮しておいた。）

『世間には、何事も只だ偶然だと考へてゐる人達がある。然し世の中に偶然などといふ事は斷じてない。偶然で監獄にはいるとか、偶然で監獄にはいらないとか、そんな馬鹿な事はない。皆それ／＼にチヤンと理由がある。世間には又、斯う云つてゐる人達がある。今ま監獄にはいつて居る人々の多くは、正にはいつて居るべきであり、又外に居る人々の中にも、正にはいつて居るべき者があると。然し私は考へる。若し道徳上から「べ

き」と云ふなら、何んぴとも監獄にはいるべきでない。元來、監獄その者が存在すべきでない。若し外に居る人々が、内に居る人々に對して、あれほど殘酷でなく、あれほど無情でないならば、監獄などといふ者は初から無い筈である。

『然しながら諸君、私はこゝにゐる諸君が皆な天使(エンヂェル)のような人だと人だと云ふのではない。私は決してそうは考へない。諸君は種々雜多であるが、諸君は皆な諸君の爲し得る最善を爲してゐる。所が、その最善なる者がいつでも餘んまり善い事ではないのである。或る意味に於いて、人は總て同じように善であり、同じよ・に惡である。我々は皆な、それ〴〵の境遇の下に於いて最善を爲してゐるのである。けれども、諸君がこゝに入れられるに至つた其の行爲について云へば、諸君は正に有罪である。諸君の或者は、金が欲しいからそれをやつた。或者はそういふ習慣になつてゐたからそれをやつた。或者は又、そういふ風に生れついてゐたのである。兎にかくやつたには相違ない。

『思ふに今、諸君の大多數は、此の私に對して何んの憎しみをも持つてゐないだらうが、それでゐて諸君は私の懷中物をスリ取るだらう。諸君が皆といふのではないが、諸君の中の或者はキツトやるだらう。××××××××××××。又、諸君の中の或者は、私の家の戶があいてゐて、そして誰も人が居ないと知つたら、キツトはいつて來るだらう。何も私を憎むわけではあるまい×、×××××××××。

『だから、今この監獄の中に、私の懷中を狙ふ人が隨分澤山あるに相違ない。けれども、私が此の監獄の門を出ると、社會の人は大抵みな私の懷中を狙つてゐる。諸君の中にはカツパライをやる者もあるだらうが、私は諸君からばかりでなく瓦斯會社からもカツパらはれてゐる。瓦斯會社は僅か三十錢ばかりの物を供給しておいて、そして一圓ばかりも私からフンだくる。それでも彼等は身分ある紳士である。

『又、私が電車に乘ると、實はお錢ばかりの値打しかないのに往復十五錢取られる。それは、請負人等が市會議員に賄賂を送つた爲めに我々人民がその償ひをさせられてゐるのである。若し又、私が瓦斯や電氣で搾られるのを馬鹿くさいと考へて、石油ランプを使ふとすれば、今度はロツクフエラアと云つたような石油王が、矢張り私の懷中を搾る。そして石油王は其の搾つた金の一部分で、大學を立てたり、教會に寄附したりして、我々に「正」とか「眞」とか「善」とかいふ事を敎へてくれる。

(私はこゝで又、拍手をしてやりたいと思つたが、どういふものか、手が自由に動かなかつた。」

『諸君の中には詐欺取財でこゝに來てゐる人があるだらう。然し私は毎日の新聞紙上で、堂々たる商店が明かに詐欺の廣告を出してゐるのを見る。新聞の廣告を讀んで見ると、總てがウソばかりである。

『喩へて云へば、私が今、此の地球の表面に於いて、どこか自分の立つべき場所を見つけようとすると、そこにはモウ必ず誰かゞ先に立つてゐる。そして『のけ―のけ！』と云つて私を追拂ふ。私は海にはいるか、空中に飛ぶかより外に行き處がない。それでも『のけ！のけ！』と拂はれる。のかなければ警察がある、裁判所がある、監獄がある。…………

『斯ういふ事實は、多くの人が其の通りだと云つて認めてゐる。けれども、それが爲に諸君が許さるゝわけではない。斯ういふ事實のあるが爲に、スリやカツパライが許さるゝわけではない。瓦斯會社が幾ら賄賂を使はうと、電氣局にどんな不正があらうと、富豪貴族が如何に廣大な土地を所有して居ようと、そんな事は全く諸君に關係がない、と云はれてゐる。

『そこで、こういふ紳士階級の罪惡と、諸君がこゝにはいつてゐる事との間に、どんな關係があるかを私は考へて見たい。諸君の或者は强盜をやつただらう。或者な何か盜んだだらう。即ち他人の財物を取つただらう。或者は靴店から、代金を拂はないで靴を一足カツパらつただらう。又或者は人殺しもやつただらう。そして諸君は、そう云ふ事をやつて居りながら、ナゼそういふ事をやつたかが分らないでゐる。私から見ると、それが一々チヤンと分つてゐる。外でもない、諸君はそれをやらずに居られなかつたのである。

『諸君はその時、それをやるまいと思ひさへすれば、やらずに濟んだのだと考へるだらう。然し、諸君はその時、どうしてもそれをやるより外なかつたのである。諸君の中には、多少の金を懷中に持つてゐながら、それで猶ほ盜みをやつた人もあるだらう。そんな場合、ナゼそんな事をしたのだらうかと、自分でも不思議に思はれるかも知れないが、其の當時の事情を、十分深く、十分細かに考へて見るならば、矢張り其の色々な事情が諸君を驅り立てゝどうしてもそれをやらずに居られない樣にした事が分る筈である。諸君はそれをやらずに居られなかつたのは、他の紳士階級の人々が諸君に對して或る態度を取らずに居られないのと同じである。××、×××××××××××××××××××××××××、×××××××××××××、×××××××××××、××××××××××××××××。

『諸君の或者は初めてこゝに來てゐるだらうが、若し今、こゝの門を開いて諸君を皆な外に出すとしても、法律が現在のまゝ

である以上、諸君の或者は明日すぐ戻つて來るに相違ない。こゝは兎にかく生きて行かれる處である。外に行き處のない者は、こゝに來るより外はない。そこでこゝに來る事が自然の習慣となつてる者が隨分多い。諸君自身には、そういふ諸君の行道がハツキリ見えてゐないかも知れないが、そこにはチヤンと明らかな道理がある。

『第一、夏よりも冬の方に入獄者の多いのは何故であるか、冬には、人間が夏よりも惡くなるのか。そんな筈はない。只、冬には資本家の綱が餘計に締つて來るのである。冬は寒い。着物も餘計に入る。炭も薪も餘計に入る。そこが多くの人間がそれらの費用を節約する爲に監獄に行く。諸君はそんな事に氣がついてゐないだらうが、こういふ經濟法則は、人の知らさるとに關せす、常に儼然と行はれてゐる。

『又、經濟界の好景氣時代よりも、不景氣時代の入獄者が多い。人は誰でも、よく／＼の時でなくては監獄に行くものではないが、いよ／＼外に行き處が無くなれば矢張りそこに行く。本人は氣がつかないでゐるだらうが。事實は正にそうである。尤も、監獄に行くような人に取つては、いつでも不景氣時代である。又彼等は大抵いつでも貧乏であり、いつでも居どころがない。けれども、それが一般の不景氣時代になると、平生なら耻會で暮らしてゐる人々が、續々と監獄にはいつて行くのである。

『イギリスの大學バツクルが、曾てこういふ研究の結果を發表した。食料品の價格の騰貴するに連れて、犯罪者の數が增加すると。今、米の値段が二割かた騰貴するとしたら、誰がその爲に監獄に行くかは分らないが、兎にかく何程かの人が行く事だけは確かである。若し此の冬に炭薪の値段が三割も騰貴するとしたら、××××××××××××××××、×××××××××××××××××××××××。×××××、××××××××××××××××××××××××××××××××××××。

『何しろ人は貧乏であるが故に監獄に行くのである。尤も、前にも云つた樣に、差當り困つてゐない時に盜みをする場合もある。然し用心ぶかい性質の人であれば、一錢も無くなるまでジツトして待つて居ない筈である。諸君の中には竊盜を商賣にしてゐる人もあるだらう。然し諸君が若し有りあまるほどの金を持つてゐたら、何も好きこのんで夜の眞夜中に、ガンドウ提灯をさげて知らぬ家に忍びこんだりする筈がない。又竊盜をやるのは、いろ／＼な修業と經驗とが必要であるだらうが、其の修業と經驗とを積んで一人前の竊盜になるのは、丁度我々が辯護

士になつたり新聞記者になつたりするのと同じ事である。又、ポケットにたくさん金を入れて居る人が、途中で出會つた人に對して滅多に脅喝などをやるものでない。但し三圓や五圓持つてゐたのでは、矢張りやるかも知れないが、安田や大倉ほどの金を持つてゐたら、決してやる氣遣ひはない。安田や大倉はモツト上手な盜み方を知つてゐる。』

（私はこゝで又、大拍手をやりたくて堪らなくなつたが、兩方の手が縛りつけられた樣になつて、どうしても動かない。四苦八苦のモガキをやつた末、ヤツトの事で二三度叩くには叩いたが、少しも音が出なかつた。外の囚人等も皆な靜まり返つてゐた。）

『そこで諸君、金持が貧乏人を搾る事が烈しくなればなるほど、貧乏人は次第に多くそういふ商賣をやらねばならぬ事になる。本人達としては、ツイした自分の心得違ひからだと、殊勝な事を考へるのもあるだらうが、實は皆な周圍の事情からして、ノッピキならずそこまで追ひつめられて行くのである。

『然らばそれを救ふ道は何か。謂ゆる『犯罪』を無くする方策は何か。外でもない、總ての人間を食へる樣にする事だ。若し男も女も子供も年寄も、皆な安樂な、綺麗な正しい生活が出來る事になつたら、此の監獄は忽ち無用な物になつてしまふ。

『諸君、私は空な理屈を云つてゐるのではない。之から二三の實例を擧げて、右に云つた事の眞實を立証する。

『昔しイギリスでは、『犯罪者』を追放に處した事がある。詐欺や泥棒や人殺しを大ぜい船に積みこんで濠洲に送りつけた。濠洲は新開地で、土地が廣く人が少ない。そこで『犯罪者』達は思ふまゝに羊を取つたりして、皆な裕かな暮しを立てた。羊を飼ふ事は、泥棒や人殺しより遙かにラクであつた。すると、どうだらう、其の泥棒や人殺しが皆な立派な紳士になつた。殊に其の子供達の時代になると、本國の紳士階級と少しも變りのない人間になつてしまつた。そして又、本國どほりに教會や監獄を作りはじめた。』

（此の次に、まだ大ぶん永い話があつたが、少々憚る所もあるので、總て忘れた事にしておく。）

『そこで諸君、私は諸君に受合ふ。今この監獄から、或はどこの監獄からでも、最も兇暴と云はれる囚人を五百人連れだし、又淺草あたりの淫賣窟から、最もアバズレの女を五百人連れだし、その千人の男女を廣い自由な土地に運んで、そこで生活を營なませる事にすれば、程なくして必ず、外の社會の普通な人間と同じような人間になる。

『所が、人間は馬鹿なもので、刑罰さへ重くすれば犯罪が無く

なると考へた。昔しイギリスでは、死刑に當る罪を百以上も拵へた事がある。然し犯罪は以前の通りであつた。そこで今度は、さすがに少し目がさめて、さういふ重い刑罰を廢止した所が、不思議にも犯罪が著るしく減少した。

『諸君、世界の歴史は此の通りである。犯罪を無くする方法は明白である。總ての人に相當の生活を與へる事が、それの第一である。××××××××××××××××××××。××××××、×××××××、××××××、×××××．×××××．×××××××××××××××．×××××××××××××××××××、×××、××××××××××××××。

『××ー××××××××××××××××。××××××××××××××××××××!』

（私はもう堪りかねて、更に四苦八苦のモガキをして、せめて弱微な拍手でも此の痛快な辯士に送らうと思つてゐる時、忽ち長靴をはいた金筋警部が演壇に飛び出して來て、『カイサーン!』と怒鳴り立てた。

（三）

私はそこで本當に目がさめた。時は十一月一日の朝、私は依然として天王寺警察の留置場に轉がつてゐた。

それから私は大阪を追放されて、京都で雨中の清水を散歩したり、石山で十三夜の月を見たりして、スゴ〳〵東京に歸つて來た。兎にかく之で、間に合せながら『改造』の原稿が出來た。

組合帝國主義

大杉榮

多分去年の事だ。第三インタナショナルの大會で協同戰線の決議が通過した。長い間の深い確執を持つた、各國の社會主義

團體及び諸勞働團體が相提携して、其の共通の敵である資本家階級に對して協同の戰線を敷かうと云ふのだ。そして此の決議に基づいて、各國の共產黨は直ちに其の謂はゆる協同戰線運動を始めた

僕は最初から此の運動は眉唾ものだと睨んだ。協同戰線はいゝ。が、此の綺麗な花の下に恐ろしい蕀があるんぢやないかと思つた。共產主義の根本原則である謂はゆる無產階級の獨裁ですらが既にさうなんだ。共產黨の獨裁が、數百若しくは數千の其の首領等の獨裁が、秘密警察の獨裁が、何んで無產階級の獨裁なんだ。ロシアでゝも既に此の獨裁の虛僞を見破る勞働者が續々と出て來た。

それに、共產黨が今それに向つて協同戰線を要求してゐるところの、他の社會主義團體諸派及び勞働團體諸派に對する態度はどんなものだつたのか。彼等はまるでそれを資本家と同じ程度の、若しくは資本家を倒す前に先づ倒して了はなければならない、其の仇敵としてゐたんぢやないか。そしてそれらの諸團體の中からの共產黨分子の分裂を強行して來たんぢやないか。それが急に協同戰線論に豹變したんだ。そこには、どうしたつて、何にかの魂膽がかくれてゐなければならない。

ところが、共產黨隨一の大馬鹿正直者レオン・トロツキイは、此の魂膽をちやんと白狀してくれた。ロシア革命に續いて直ぐさま世界革命が成就するだらうと云ふロシア共產黨の夢は破れた。そこで彼等は、內では謂はゆる資本主義への降伏である新經濟政策でもつて革命の中休みをしながら、外では此の協同戰線でもつてゆつくりと其の夢の實現を謀らうとしたのだ。××××××××××××××。が、彼等には、そこに、『共產黨の指導の下に』とか、『指揮の下に』とか云ふ條件がひつついてゐる。さうでないものは革命ではないのだ。反革命なのだ。

トロツキイは其の『協同戰線論』の冒頭に先づ云ふ『××××××××××××××××××。×××、××××××××ためには、共產黨は先づ無產階級の壓倒的多數者の支持を得なければならない。が、かくの如き多數者を其の指揮の下に持つようになるまでは、其の多數者を惹きつける事のために鬪はなければならない。』

日本の自覺した勞働者には實に異樣に響く『指導』とか『指揮』とか云ふ言葉が、ちやうど日本のブルジュワの政治家共の口から出るのと同じやうに、共產黨の首領に平氣で使はれてゐるんだ。

トロツキイは猶續けて云ふ。『此の準備の時代の間にも、無產

階級の敵×××××××ない事は勿論だ。個人と資本家と×××××××××××、或は勞働者により或は其の敵によつて發起されて、起る。勞働者の大衆は××××××××××。それが資本家の攻擊に對する防禦の一致であつても、又其の敵を攻擊するための一致であつても、要するに其の鬪ひが勞働階級全體としての、或は其の大多數の、或は其の一部分の、生命に關する問題に觸れ又はそれに影響する程度の如何によつて、其の一致の必要を感ずる。」

しかし、無産黨の協同戰線論は、それが勞働者の必要だからと云ふよりも、寧ろそれに反對すれば勞働者に棄てられるからと云ふ消極的理由と、勞働者の此の必要を利用して其の指導權を握らうと云ふ積極的理由とに基づくものなのだ。それはトロツキイが協同戰線に對する共産黨の態度を論じた、其の直ぐ次ぎの章で明かだ。

トロツキイに據れば、共産黨がまだ微々たる少數者の團體に過ぎない國では、協同戰線の問題なぞはどうでもいゝのだ。『何故なら、其の國の大衆運動は、其の有力な傳統のお蔭で今猶決定的役割を勤めてゐる古い團體によつて、指揮され又指導される。』又、それと反對に　共産黨が既に勞働者の唯一の指導的團體である國でも、やはり同じ事だ。『そこでももう協同戰線の問題はあり得ない。』何故なら、共産黨にもう其の目的の指導權を握つてゐるからだ、そしてそれが重大な問題になるのは、たゞ共産黨が既に大政治團體の域に達して、しかもまだ決定的要素とはなり得ずにゐる國に』だ。

日本はトロツキイが舉げた此の三つの場合の第一の例に當る。が、×××××××××。『そこでは協同戰線は大した問題ではない』なぞと云ふ呑氣な事は云はなかつた。彼等は早くから友愛會に目をつけて、此の『決定的役割を勤めてゐる古い團體』と窃かに結びつく事によつて、日本の大衆運動に於ける友愛會の指導權と共に、それを通じての彼等自身の指導權をも獲得しようとした。

協同戰線は、云ふまでもなく、階級鬪爭の上の勞働者の必要だ。最近日本の勞働者の間に起つた協同戰線の計畫、即ち全國勞働組合總聯合の問題は、先きに云つた第三インタナショナルの決議とは獨立して、又其の決議に基づいたヨオロッパ諸國での協同戰線運動とも全く獨立して、日本の勞働者が其の資本家や官憲との難戰苦鬪の長い間に痛感して來た必要から生れたものなのだ。

そして僕は、それが本當に此の必要から生れたものであれば、そこに餘りに多くの魂膽と術策とが混りさへしなければ、ほんの少々の誠意だけで十分成就する見込みがあると思つた。

が、友愛會は、××、×××××××××、××××××××××××××××、××××××××××××××××××××××××××××××××××。そして其のために遂に一切をぶち毀す事に終つて了つた。

•

此の協同戰線の破壞に就いては、友愛會は既に前科者なのだ。

一昨年の五月一日祭以來、友愛會と東京市内の他の七組合とが、『組織なき勞働者に組織を與へ、既設組合の聯合提携を促進する』と云ふ目的の下に、勞働組合同盟を組織した。そして此の同盟は、其の標榜した目的の上では大した効果もなかつたやうだが、其の同盟の成立を促した必要の協同戰線の上には隨分役立つたものだつた。

然るに其の翌年の五月一日祭の直ぐあとで、友愛會は突然其の脫退を申出た。其の理由は『來るべき友愛會大會の準備として友愛會東京聯合會所屬各支部組合を整理する必要があるから』と云ふのだ。が、勿論それは出たらめの理由だ。友愛會、殊に其の東京聯合會の幹部等は、組合同盟會の存在によつて自然に聯合會が無視され、又友愛會の傘下に他の一切の組合を包容して自ら其の指導的地位に立たうとした野望が空しくなつた事を見たのだ。そして『社會主義を奉ずる過激狂燥な團體とは絕對に提携して行く事が出來ない』と云ふやうな聲明をした上で、今云つたやうな譯の分らない表面上の理由を持つて來たのだ。

友愛會の組合帝國主義的野心は、そして其の他の勞働團體に對する無誠意は、此の同盟脫退によつて極めて明白にされた。

そして又、其後東京に於ける鐵工聯合問題に對する友愛會東京鐵工組合の態度、及び大坂に於ける勞働組合同盟會に對する友愛會大坂聯合會の態度も、やはり其の野心と無誠意とを赤裸々にして、自ら進んで協同戰線を破裂させたのであつた。

此の協同戰線破壞の常習犯である友愛會が、本年、三度目の五月一日祭の後に、『名實相伴つた勞働組合の全國的總聯合を組織するためには、日本勞働總同盟の解體をも辭せない』と云ふ友愛會關西勞働同盟會の決議に基づいて協同戰線の運動を始めたのだ。先きに一ぱいも二はいも食つた非友愛會側の勞働者として、誰れか眉唾物だと思はなかつたものがあらう。

が、非友愛會側の勞働者は割合に正直だつた。そんな眉唾物に對してはきつと相手にすまいと、僕などは思つてゐたのだが、しかし協同戰線の必要はそんな過去の事にいつまでもかゝずらつて置かせなかつたのだ。彼等の間にも、友愛會關西勞働同盟の決議と前後して、やはり此の全國勞働組合の議が打ちあがつてゐた。そして友愛會の「解體をも辭せず」と云ふ誠意のあるらしい言葉に勵まされて、益々其の議を進めて行つた。

しかし正直者の彼等にも、先きに幾度も煮湯を呑まされた後味はまだ殘つてゐた『名實相伴ふ』と云ふ言葉の内容に多少の疑ひを挾さんでゐた。それが、友愛會流の中央集權的合同、其の首領等の指揮指導の下に於ける合同を意味してゐやしないか、例の組合帝國主義を含んでゐやしないか、といふ疑ひを持つてゐた。

そこで、非友愛會側勞働者の急先鋒である印刷工組合信友會と新聞工組合進會との有志は、一方に總聯合の促進に極力努力しつゝ、他方に其の聯合は各組合の自主自治を重んずる自由聯合でなければならないと云ふ宣傳を始めた。そして『勞働組合全國的總聯合に就いて、階級鬪爭の戰士たる全國組合勞働者諸君に告ぐ』と云ふ小冊子を發表した。

『勞働組合は、我々勞働者が資本家と鬪ふための機關だ、けれども、×× ××××××××××××××××× ××××××××××××××××××××。しかしながら、若し勞働者の中に、他の勞働者を自分の利益のために犧牲とするところの資本家的精神や、權力で人を支配しやうとする支配階級的精神から脱却してゐなければ、よし今直ぐに資本家を倒す事が出來ても、それは丁度、明治維新に德川の天下が薩長閥の天下になつたのと同じ事だ。

若し勞働組合の全國的總聯合を企てた各勞働組合の人々の中で、何が利己的の野心を持つてゐたり又利己的の野心でこれを妨げようとするものがあつたならば、それは勞働者の皮を被つた資本主義者として、先づ第一に排斥しなければならない。

友愛會は、二三年前に日本勞働總同盟と改稱したが、名稱通りに各勞働組合を其の傘下に統一しようとする運動は、多くの勞働組合が自主的に組織されて發達して來た今日では、もう行きづまつて發展の見込みがなくなつた。そして此の場合、友愛會が『解作を辭せず』とまで云つて運動を起した、名實相伴ふ全國的總聯合の計畫が、今の友愛會をたゞ大きくすると同樣のものを組織しようと云ふのならば、隨分先きの見えない愚なやり方だ。』

合同か聯合か、中央集權か自由聯合か、一體どんな組織が一番いゝかと云へば、勿論いろいろの方法はあるだらうが、大體は最高の機關をこしらへて他は總てその指揮命令に從はうとする中央集權的に合同した一大組合と、各組合から代表者を出して共通の問題を協議して解決しようとする自由聯合との二つに分けられると思ふ。

そこで今の勞働組合がそれぞれ自主的に組織されてゐるとすれば、如何に少數の野心家や他に目的を持つてゐる人達が希望したところで、中央集權的合同は不可能と見る外はない。又、無理に形式だけ中央集權にして見たところで、事實上何の實力もない今の勞働組合の所謂幹部に、これが實行される譯のものでない。××××××××××××××××××××××××××××××××××。

から云ふ組織を主張する×××、××××××××××××××××××××××××、××××××××××××××××××はない資本家同樣だ。

然らば我々は何を欲するかと云ふに、今、方々に分れてゐる職業的又は產業的の勞働組合が、勞働者の實際の必要から聯合するのならば、先づ同じ地方で同じ產業に從事してゐるものから始めるのが自然で、又それが一番强い聯合體の單位になる。其の地方的の同一產業の組合聯合が幾つも集まつて地方的の大聯合をする。一方には同一產業組合が更に全國的に聯合する。それらの總てが集つて始めて勞働組合の全國的總聯合と云ふものになる。そして共通の問題は進んで一致協力して解決に努め、單獨の問題は自身で解決する覺悟と力とを持つ組合の自由聯合の組織こそ、眞に我々の望むところのものだ。

我々は我々の理想する社會の芽生えを先づ我々自身の中に造つて行く事が何よりも必要だ。』

其の間に、共產主義者と無政府主義者との、勞働組合外から宣傳が始まつた。友愛會の大部分は共產主義者に共鳴した。非友愛會の大部分は無政府主義者に共鳴した。殊に友愛會は、其の組合帝國主義の野望に共產主義の中央集權的理論を着せられて、殆んど傍若無人の振舞をする力を得た。

友愛會は其の『解體をも辭せず』と云つた事なぞは夢にも知らないやうな顏つきをしだした。そして其の『名實相伴ふ』を、果して非友愛會側の疑ひ通りに、中央集權の意味に持ちだした。

僕はもう非友愛會の勞働者が此の聯合の問題に努力するのは

無駄だと思つた。そしてもう彼等が潔ぎよく手を引いて、彼等自身が事實の上で始めてゐた産業的聯合及び地方的聯合の問題に全力を盡す事かと思つた。が、彼等はやはり、僕の思つたよりも正直者だつた。彼等はまだ總聯合の可能を信じてゐた。其の必要と彼等の誠意とが友愛會側を動かせるものと信じてゐた。そして彼等は喜び勇んで、月末の給料日前に無理算段をして、續々として大會地の大坂へ出かけて行つた。

が、果して大會は、此の中央集權的合同か自由聯合かの問題で決裂して了つた。

友愛會側は、其の中央集權と云ふ言葉にさすがに多少の後めたさを感じたのか、それに民主的と云ふ言葉を冠せて見たり、又戰鬪力の集中などと云ふまるで違つた言葉を持つて來たりしてゐたが、其の精神は要するに中央集權だ。組合帝國主義だ。共産主義者等の謂はゆる獨裁だ。

大會の決裂後、友愛會側と非友愛會側とは、各々其の態度に就いての宣言書を發表した。

友愛會側は云ふ。

我等は、勿論、組合幹部の專制獨裁は斷乎として排斥する。然しながら、組合最大の使命が堅牢なる資本主義の牙城を屠る事にある事を思へば、先づ組合の戰鬪力の集中に全力を注ぐと同時に、一方には幹部獨裁の弊を生ぜざるやうな施設を考慮すべきが至當である。組合の戰鬪力を考へずして、徒らに個々の組合の自主權の尊重に汲々たる組合同盟會の態度の如きは、勞働運動者として現實的鬪爭の職責を忘れ、空漠なる思想中毒に墮したものと云はなければならぬ。各組合が緊密なる合同を爲さずして、各々自由な立場に立つて自由に聯合し、しかして各組合の自由意志が自由に綜合されて、それが強大なる戰鬪力を生む日を待つとすれば、暴虐なる資本主義は恐らくは永久に枕を高くして安眠を貪るであらう。』

非友愛會側はそれに答へて云ふ。

「總同盟側の人々の云ふ所は、「資本主義が中央集權の組織である以上、それに對抗して鬪ふ勞働者の組織も亦、當然中央集權でなければならない。しかし我々の主張する中央集權は資本主義者の云ふ中央集權とは異なつて、勞働者の意志を代表するところの民主的中央集權的だ。それは權力を集中すると云ふ意味ではなく、×××を集中すると云ふ意味であつて、我々は此の×××の集力を最も必要とするのだ」と云ふのが其の「合同」を主張する論點らしい。

しかしながら、それは明かに議論だ。中央集權と云ひ、自由聯合と云ふのは、何れも我々勞働者が××××××にするために造る組織の方法、形式の問題で、要は如何なる組織が我々勞働者の×××××にする事が出來るか、如何なる組織が我々勞働者の××××××させる事が出來るか、と云ふ事にあるのだ。××××××にすると云ふ事と、×××××集中すると云ふ事とは、殆んど意味が違ふのであるが、假りに××××集中するといふ事が誰れしも望むところであるとしても、總聯合の主要な問題は、如何なる方法によつて團結すれば最もよく×××を集中する事が出來るかにあるのだ。其の方法として我々は自由聯合を主張し、彼方は中央集權的合同を主張するのだ。

　資本主義が中央集權的組織である事は事實だ。然しながら我我は、單に賃金値上、待遇改善のみ欲して自主自治を叫ぶものではない。我々がそれよりも更に必要とするものは、勞働者が常に感ずるやうに、職長、組長、或はそれ以上の權力者に監視されたるところの束縛をのがれて、如何なるところに於ても眞の人間として行動したいと云ふ欲求を、土臺に我々の運動を進めて行きたいのだ。

　眞の勞働者が、他人の束縛を欲しない氣持を、心のドン底に持つてゐる以上、如何なる勞働運動も、此の氣持を土臺にしなければならない。勞働者は理屈によつても集まるだらうが、それよりも更に氣持を以て集まる事が一層力強い事を知つてゐるのだ。」

　議論としては、どつちも、其の階級鬪爭の現實の上に立つた議論だ。友愛會は其の友愛會としての經驗の上に。そして非友愛會は其の非友愛會としての經驗の上に。が、まだ議論の餘地はまだ大分殘つてゐる、と云ふよりも寧ろまだ漸く其の緒についただけの事だ。殊に友愛會側としては、非友愛會側の主張に對して、まだ無理解の點が餘程多い。

　僕は勞働團體の此の二派の主張がどこまで發展して行くかに就いて非常に興味を持つものだ。そして、それよりもまだ、此の二派の主張が實際に於て果してどつちが戰鬪力の強大を齎らすかに就いて、又どつちが新社會建設の本當の方法になるかに就いて、非常な興味を持つものだ。

　又、これは勞働者ばかりの問題ではない。中央集權か自由聯合かに就いては、强權か自由かに（以下七行缺）ない問題なのだ。此の問題に觸れない社會改造の議論は、要するにたゞ議論の遊びだ。

　友愛會は大會決裂と共に非友愛會に對する殆んど絶對的絶縁の宣言をした。が、非友愛會側は、其の宣言の最後を、「しかしながら我々の正面の敵は資本家である。如何に職業的運動者が自己の立場を維持する必要上我々を敵視しようとも、若し共通の問題で同一步調を執る事の必要を感じた場合には、將來の希望なぞを條件とせず一致の行動を執るだけの雅量のある事を玆に聲明する」と結んだ。

二科、院展、帝展

二科、院展、帝展を通じて

木村荘八

一

二科會では山下新太郎氏の諸作を虛心に氣持よく鑑賞しました。作者にさう云ふ作境があるので、見るものに素直に傳つて來るのです。若し嚴密な批判から云へば、然し素純なる山下氏の作と雖も、その揭げる美は極めて消極的な、力の弱いものには相違ありません。然し、その程度の美すらも、つまり消極的な美感なりその作境すらも、示すに足らないものが、他に澤山にある。屢々「美」とは反對の軌道のものさへ澤山にある。――その中に交つてゐるので、氏の作境は弱いが然し何と云つても「美しい」ものに抽ん出て映じたわけでした。

――實は、私は、かう云ふ本意なき「比較」の餘り露骨にあることは、好まぬものであります。で、二科會ではその山下氏の作を虛心に鑑賞して美を享受したにはちがひないが、よりひろく美の情操の前から云へば、「二科では」美くしい山下氏の作も、然しその揭げてゐるところは極く纖少で、弱々しいものだ、と云ふことは、再び改めて云つておきます。

即ちその他には殆んど「美」の名の前には、擧げて云ふ可き程の作は見當りませんでした。

不幸にして「醜」の名に於て云ふ可き作は澤山にありました。……が、それに就ては、事々しくは、敢て云ふ必要も、好みも、感じません。

二

美術院展覽會に於ては、此の場合にも「美術院では」と前と同じく括弧に入れて云つておく程度で、小川芋錢氏の作を虛心

に鑑賞したのでした。――但、この場合には、二科の山下氏に於けるよりも、一段と、鑑賞の釁るところがありました。

小川氏には、同じく一つの濁らぬ作境はあれ、その作境の手段、即ち素描に、稍もすると病的なる作者私樂が認められます。彼の好みと云つてもいゝ、然しそれが主觀以上の範疇には出でぬもの。ひろく客觀の美の判斷からそれを見ると、あらずもがなの、過ぎたる末梢枝が少し眼に付きます。

例へばある繪のラール、ヌーボー的な煙りの表出とか、よく繪の諸所にうづくまる味はいにくひヒネたる線。――だが、或ひはそれ等は、然し作家から云つたならば、却つて特長でこそあれ、缺點ではない、と云ふものかも知れません。然し「私」はそこに缺點を見たのであります。さう云ふ鑑賞者もここにゐると云ふことを云ふ立場になるが

氏の作境なり畫因は、かなり形ちなきところ（アイディア）から形ち（あの作）へ有機的に移つてゐて、即ちそこに「彼一の畫品がある。品の似てゐる作家の例を引いて云ふと、――かねてそれは私の愛好する――森田恒友氏に近似な、作境の安定なり、つまり云ふ雰氣、氣禀……を持つてゐます。

たゞ森田氏の場合よりは小川氏の場合は効果がひくい、と云ふのは、美感の內術品から外術品へわたる過程のところに、小川氏の表現にはどうも省察の釁つた余筆が澤山交るのです。何か、美よりは余計な趣味なり、思想、目標、好み……が、氏の筆を末端に於て舞はすのではないか。過ぎたる私樂の工が、惜しいかな、諸所に、切角出かゝつた美の床しさを手で弄び、凼げる。つまり輕々しくする。

小川氏の爲めに、その無用の飾の畫の骨組みから拔けおちる日を祈る。之れは、いづれ氏はより面白い有機的なる作を示してくれる作家であらう、と思ふ。その私――一人の批判家――の、婆言でありませう。たゞ私は本當に惜しく思ふので、つひ此の言を口にします。

で、その他の院展の諸氏の作品に就ては、私は屢々「人」よりは「技術」「美を案出せんとはかる意圖」、殊にその或るものに至つては「道樂」の、遊離して目に付く、非有機作のみ至るところに見ました。で、それは美にふさはしからぬ感じでした。――私は之等に對しては好んで鑑賞（批評）しません。有望なる作家も見當りません。

三

帝展は劣等であります。山下氏は更なり、小川氏も、洋畫、日本畫、彫刻、各部を通じて、その片影さへ認めぬ。――無名のさう云ふ作家はよしや有つても、選に入らぬのだらうと思ひ

ます。又、名あるさう云ふ作家は、つまりあすこへは豫めはいつてゐないと云ふことを認めます。即ち止むなきことではある。

たゞ、その一つの例外に、彫刻に今年は川上氏のものを見て、それは例年の氏の作境よりは一段進んで、味はひに量積が豐かになつたと思ひました。この小作には好意を持ちました。

作境に持味なり風情のある點では、この作は多分「帝展では」の括弧の範疇のものではない。寧ろ「今の日本の木彫では、此の人の仕事があり得る水準の最高を示す。」と思はれます。氏を鑑賞することにはかねて一つの欣快を抱いております。

然し、その「水準」の高さの問題については、批判の尺度は自づと又別に生じませう。例へば、前時代徳川期の根つけの面の彫りなどゝその水準如何。——しかし、此所には、之れは稿外へ別題とするのが評家の一つの禮儀と思ふ。後人は、恐らく大正の「今」を美の情操へ換へて偲ぶ上に、彫刻技では川上氏の作など、好個のその一資料とすることでせう。その點の効績はあれに充分認めますから。

それに、何と云つても、なにしろ今の「彫刻」と云ふものはおよそ世に情けない貧寒なるものゝ極であります。—川上氏を宥するとも、時にかへがたき欣びである。氏の御自重を望む。

で、その彫刻部の例外のほかには、日本畫、洋畫、悉く、殆んど云ふ可きことなし。殊に今年は云ふ可きことなし。洋畫は中にも淺ましいばかりです。それには、永原氏、岡田氏等が、ひどく不成績なのが、今年を低下させた一つの原因です。

氏等にはあゝ云ふ仕事（肖像）は適さぬのである。何故永原氏は「雪の山」を示されなかつたか。岡田氏は「忍路」を示されなかつたか。——が、氏等は又いづれさう云ふ快適の作を示してはくれるでせう。その作境なり、靜かな（微弱ながら然し）さすがは年功の風格に對する、好意は失ひません。たゞ今年の作はどつちみちいけません。

四

此所に、今年の帝展の洋畫には一點藤田氏の作品が出てゐました。それは異色あるものですから、それに就て概括に思ふところを述べておきますが、あの作には、私の云ふ「作境」はある。その境に殉ずる作味も、經驗も、識も、それ等は他の帝展の何れの學生作より充分にある。先づその點ではたしかに「段ちがひ」以上であります。素人芝居に卒然玄人の現はれた槪がある。それも云はゞ吉右エ門程の苦勞した玄人が。

私の此の云ひ方は、それで、氏に、氏は畫事に關してどう味を出せばどう出る、とか、構圖はどうとる、素描はどう引く、

色はどうおく、云々……を、その玄人技を、充分識つてゐる――その點を認めたとは、既でに言外に充分であらうと思ふ。批判するにはいゝ、一つの「作境」の中で確立した、一材料である。で、之れからその作境を驗しておきますが、――

前言以來私の尊む「作境」は目標の「美」に對して初めてあるものであります。「作境」それ自身のあることを認める謂ひではない。（その程度ならば大觀氏の如き優に作境を有し、先づ龍子、浩一路の諸氏もそれを有するだらう。その故にこそ動きがとれぬであらう。前言にはこれを「遊離した」と簡單に難じておいたところ。）――即ち藤田氏にもその有ることとは、大觀氏程度にあらうと思ふ、只「美」を目標にしての作境か否かは、甚だ疑問である。そこを左に云つておく。

――然し「美」の論を此所でしてゐると限られた紙數も延び、問題も別途にわたつていけませんから、論の筋道は稍外におきますが、で、結論だけ直ちに云ふ。――藤田氏の作には「作境」があり、「美」がある。但、その殆んど代表的なる、末梢とも末梢の廢頽美である。即ち、それは既でに「美」とは云へない種類の一つのものである。

氏の作を見ると、例へばその素描（構造）の中々行き屆いた味には、殆んど銳利な剃刀で襟足を剃りつけて行く一味の切れあぢにも似た「デリケート」な藝境が偲ばれます。偲ばれることでは充分遺憾なく偲ばれます。表現不足はない。（それはあの繪を見て、或る人には、異國の旅舍にある不思議な對人の「我が室內」の詩がひしと沁み込める程度でありませう。浩一路氏の「かゝし」の如き舌足らずではない。）――但、この官能の切れ味を、直ちに「美」に關連させてデリケートと云ふか。乃至、美の情操とは切り離して、末梢の想に於て一の「デリカシー」に判ずるか。

問題はそこで、その根柢に於て、東西に離反を示す。

一體、美には、その本質にとつては、常に、健全なる心の狀態、その豐滿なる根本的の狀態が普遍に不易の土臺となるのである。寧ろ「成り得る」ものである。でなければ美は世に立つに値ひしない。然し、屢々才藝の仕事には、この土臺からはいつか外れた、しかも猶作境の表現に於ては人に何ものか刺戟的な味感を濃く與へずには止まぬ、即ちデカダント、アートがあるものであります。美の理想を滅した或る味があるものだ。

私はこの意味で、此の作を――その「表現」が行き屆いてゐる丈け、それ丈け――美の本質とは豫め遠い、廢頽（デカダンス）の（殊にその域にかなり徹した）一境の作例と認めるのですが、此の作味に感じる、乃至感じないは、感じる人、感じない人、の、受感

及び批判の問題です。

「感じさす力」は中々氏の作にあるのです。即ちパリーの美術界の如き、審美の低い、汎廢頽の人々の間には、此の本邦人の作にはさすがに浮世繪仕立ての武器——calligraphy——が潜む。一つの魅惑の焦點となるのも無理ならぬことでせう。が、今偶々その繪を批評する立場に立つ、私とは、私は以上で殆んど氏をその讃嘆者よりも恐らく妥當に認めたでせう。その同じ認定なり、批判から云つて、同時に、それ故に氏の仕事は審美の理想なり情操を誤まつた不幸な時代の生産品である。排棄するほかには仕方ない、軌道を逆へた所作と判じます。

***

美を識つて作を行なふ、と云ふことをしないのが、何よりも、日本西洋を通じての現代のおしなべての致命な缺點と思はれます。かう云ふ私も、「美を識つて」はゐない、が、又、「識らない」とは、輕々しくは實感が許さないから、敢て云はない。で、凡てかう云ふもの丶見方をするのだが、私は屢々「私」以上へ連なる琴線の有り場を感じることが出來ます。それ故、その糸をさぐる「私」さへ評價を誤まらなければ、私の云ふところは我れながら本當の場合があるのです。臆するところなく、自ら薦めて別に動じません。諸君の仕事は、必らずしも「諸君」がわるいのではないのです。只肝心の諸君の「美」がわるい。それで、切角辛苦して眞面目に仕事しながらも、稍もするとは結果はみす〳〵致命傷を背負ひ込みがちな、徒勞なことになる。私の批評的良心は、虚心に、私情以上に「困つたもの」と思ふのであります。私は貶すのは好きでありません。妄評多謝

大正十一年十月十六日記了

帝展、院展の日本畫を觀て

村田良策

兩展覽會に出品された日本畫を觀て、現在の日本畫を自分の問題として考へ見たいのである。從つてここでは各作品を評價

する意味は少しもなく、擧げられる作品も自分の印象の説明の爲めのみにすぎない。

古來日本人による繪畫の何れの流派も時と共に多くの外來の流派によつて動かされ來つたことは同じであるが、日本的に純化する道に進みつゝあることは、現在に於て外形上種々動搖、停滯を示してゐるに拘はらず認めなければならない事實である。唯如何にして完全な純化を遂げるかゞ最近の繪畫を行ふものの努力であつた。行きつまた繪が常に存し、一般的にも著しい開展を遂げぬにしても、新らしい創造の努力は相應の成績を得つゝある樣に思ふ。

技術の修練だけで、因襲的に繰返さるる製作の傍に常に轉回を試みる意圖が醱酵することによつて、繪畫の史的展開が行はれる。さうして最近の院展、帝展に就て云へば、新らしき更新の意氣を以て立てる院展が、所謂院展的なるマニールに固形化するの傾向は見逃がすことが出來ない。展開的な努力を認め得るにしても全般として技巧の細緻又は色感の繰返しに腐心するの狀は著しい。之に對して本年の帝展が、大いに清新な意圖による作品を示してゐることは注目に價する。大體から見て色彩的効果を中心とするものよりも、日本畫本來の描線を驅つて色感のセンチメントを制御し、一方に於て力の表現を加へんとするとは當然なそして正當な技巧上の進歩であらう。花鳥や風景に線の効果を導き入れること、肖像畫に洋畫的な寫實の精神を汲み入れつゝ個性の表現を線の力に借りやうとする試みは例證するまでもなく眼に立つ事實である。

凡そ行きつまつた點より何等かの打開を試みる行方に種々あり得やうが、主觀の意味を深めて主觀表現の可能性を純化する道と、平凡な寫實から進んで對象、自然界の奥底に迫らうとする試みがある。

大體から本年の日本畫を綜括して見ると、第一に、日本畫本來の傳統的精神を遵守して技巧上にも、内容的にも自己の技能の修練と信念とに賴つて行くもの、第二に、洋畫の手法を取入れて自然物象に、又は肖像に自己の觀照を深めて行くものと、第三に、情趣の豊かさを益々純化して宗教的に、若しくは象徴的になり行くものとがある。

所謂大家の繪は第一に屬するものが多い。大觀氏「夜」の如き、曼舟氏清方氏玉堂氏秀畝氏の如き何等かの美的價値創造の要求を必要としない完成された美の所有者である。欠くるところなき技術を中心とする以上、美的効果は取材の如何に拘はらず常に殆んど自己の現はし得るレベルに達する。之に對して無

理に難を探して批議するは何れにとつても徒勞である。一般者の見地から云ふと、難を加ふることは言語同斷のことがないでもない。「夜」の手法によつて表現し得らるる情趣は殆んど完成に近い。之れに對して「夜」そのものの表現に關する種々なる評價を加ふることは無理である。主觀の相違であつて、夜そのものの解釋の一致が遂に得られぬ以上、技巧的表現上の約束あることを觀者は知らねばならぬ。「夜」の繪そのものを離れても論ぜらる可き繪畫製作の主觀內容の如何を出發點として現實の作品を直ちに評價するは恐らく觀る者の惑ひである。

同じく傳統を護りつゝ而かも技術の約束を進展せしめた點で映丘氏「霞立つ春日野」は異色あるものと思ふ。純粹に大和繪の手法を以て現はし得る空間的距離、大さと、情趣の表現をあれまでに統一した効果に持來したことは一方面を開拓したと云はねばならぬ。構圖上の用意は勿論、畫面の大さに對する用意が大いに關係する。徒らに他の手法を色々に取入れることによつてのみ（例へば「春の光」降滿氏）繪畫の美的効果を强めることの努力はかへつて印象の混濁を將來する樣に思ふ。

第二に寫實の道であるが、洋畫的効果並びに寫實そのものの意味から、自然物乃至風景を主題とするものにこの行方を多く見るのは當然であらう。「ひもろ日かげ」（端館氏）や、「桃園睡朝」（微笑氏）「淨瑠璃寺」（排以氏）等では、或は繪具を重ね、又は量を現はす爲めの筆觸などの苦心があり、光と遠近を可成に巧に示して自然に迫らうとする。この例は多い。

然し之等風景畫に於ける量と遠近とに關する寫實的努力は、肖像畫にあつては主として手法上よりも對象の個性的特質に迫らんとする寫實的精神そのものの現はれが著しい。

院展の觀山氏「天心居士」には卓越せる肖像畫家渡邊華山の面影を認め得るが、華山に於て既にさうであるが、人物を對象とする寫實の精神は、全く日本畫傳來のものでなくして顏面、個性の表現の精神を日本畫的技術によつて生かした。觀山氏の肖像の効果は殆んど洋畫によるそれよりも個性を明快に描き得た。これに比すれば帝展の肖像畫の何れも技の末就を思はせる。と云ふより寧ろあまりに洋畫の手法に捉はれすぎてゐる。從つて妙に思はせぶりな嫌味に陷り易い。（「春」（春光氏）「童女三人」（鄕洋氏）「砂丘の夕ぐれ」（柏邦氏）。蓋し一面に於て肖像に對する氣魄の如何は寫實の根本に根さすだけ大きな努力を必要とする故に、試みとしての洋畫的手法を肖像に於て試みることは、より多くの困難を豫想せねばならぬと思ふ。

第三の情趣を主とするものは院展の日本畫に著しい。それは

主として色感に於て滋潤な趣をぼかしによつて出すことであつた。「ポンポンダリヤ」。しかし其爲めに印象の微弱を誘ふことは光に缺くる顔料から云へば止むを得ない。この點に於て氣分や情趣を色彩にのみよらずして、直線や曲線、或は金、銀によつて强め又は救ふことである。その例として種々の例を擧ぐることを得やうが光瑤氏「白孔雀」の如き、これは寫實的効果を第一印象として快く受けるに拘はらず、線によつて色感のみによる情趣の散逸を、大膽に强さを示すべき黑線を以て制した點に美の効果と、作畫の意義とを認めたい。金地を塗りつぶして、わずかに葉の强い廓線の影をすかして金を覗はせるなど、以上の中庸の効果を求める爲めの苦心と思はざるを得ない。

なほ以上の他に、題材的興味を中心とする傾向は種々な方面に現はれてゐる。題材的興味は主觀の把握と觀照の强弱によつては、あながちに排斥すべきではないであらう。併しながら所詮は興味を中心とするものであるから、或は卑俗になり「遊女」もしくは聯想内容に鑑賞者の心理を誘ふて亞繪畫的効果と實際的興味との混交を感ずるに止り易い。「行路難」。殊に自分としては社會的興味を題材とするを以て直ちに繪畫上の問題とするの傾向を助長する風の見ゆることを以て、藝術そのものを邪道に導くものと思ふ。例へば院展の「八木節」帝展の「小使部屋」の如きで、繪畫としての價値はねらひ處如何によつてのみ決定せられ得ないこと言を俟たぬ。かへつて作家の本意に反する所以を知らねばならぬと思ふ。

印象氏「訶梨帝母」。福田平八郎氏「鶴」。龍郎氏「新來の春」。

前年可成の成績を納めた以上三氏の今年の作に關して、各自異なれる態度の下に益々同じ信念の下に進みつゝあり、且つ何れも相當の大作たる點に於て自分の印象にあるものである。

前年の「鯉」の作家福田氏の敬虔な寫實の態度は右に雄鶴、左に雌鶴、中央に雛鶴を描いて、構想の端正、筆致の眞面目なる點で寫實の眞髓に達しやうとする。併しながらこの繪に於て感ずることは、多少其處に固まりすぎた描寫の態度か作品の上に餘裕なからしめるに至つたと思ふ。換言すれば、この作と「遊鶴圖」（中西氏）とは創作の氣持の上に堅さ又は描寫の自信を持つ心持と、ゆとりのある素直な動機から描寫にいたる心持の動きとの差異が感ぜられる。徹底せる本當の寫實の極致には豁然と開けたフランクな心の平明と温かさとがありにしないか、この作にそれが缺けてはゐないか。この點で印象氏にはな

ほ多くの現現の自由さがあり、從つて希望も多くつながれる樣に思ふ。

印象氏の繪を見ると、主題は問題として考へなくとも、優れた古典的な形式の中に盛つた上品な色感が常にある豐かな感情に誘ひ込み、ゆつたりした主觀の沈潛がある。優れた氣品を繪畫に表はすだけの知的な用意が、主觀を益々深めて行く。古典主義的氣品と技能とが主觀の奔放を制御してゐる樣に見える。いつでも流れるほどの情緒を藏してゐて、自由な境地を見出して行けると思ふ。それだけに今年の作に於ても大樣な、迫らぬ氣魄が旺溢してゐると思ふ。

龍岬氏の「壽永の春」は昨年のと異なり自由さと澁味が多い。沈んだ、そして心の底にひそむ耽美的な精神が一歩進んで動き出したかの樣である。題材上の興味も多少の効果を持つたにしても、やはり自己の唯美的な心と、傳統を生かすだけの力とを持ち、持ち續けやうとする。いい意味の唯美的な精神を日本畫古有の傳統的手法の上に高揚することは一の重大な任務に相違ない。

以上を以て大體印象は終る。なほ洋畫に關して二科と帝展との中から記すことが殘されたが、その餘裕を持たぬのを遺憾とする。(十月十五日)

新刊紹介

□佛蘭西だより（島崎藤村著）著者が佛國での感想などを蒐めたものである。（壹圓參拾錢、新潮社發行）

□大正青年立志案内（大日本國民中興會編）壹圓八拾錢、國民書院發行）

□新世界の印象（樋口龍峽著）著者の歐米印象記（三圓五十錢、國民書院發行）

□馬鹿萬（加藤一夫著）著者の新作集第一篇である（五十錢、一歩堂發行）

□エジプトの文化と建築（濱岡周忠編）エジプト建築に就て說明したもので建築文化叢書の第一篇（二圓五十錢、洪洋社發行）

□佛教の根本思想（友松圓諦譯）エルンスト・ホフマンの原著を譯したもの（二圓、新光社發行

□薔薇園（加藤朝鳥譯）ペルシャ古聖サヂの言葉を譯したものである壹圓二十錢、新光社發行）

□二萬年前（野村長一著）報知紙上に連載した科學小說（一圓八十錢、大日堂書店發行）

□涙壺（加藤まさを著）流麗の筆と美しき純情の持主たる氏の抒情小曲集、ポケット型の美本（日本橋區大傳馬町二ノ十六、內田老鶴圃發行、定價二圓）

武器問題批判

武器問題と大衆

青野季吉

武器問題は普通の意味で一個の國際問題である。それは國際問題として暴露されたものであり、國際問題として發展さる可き運命にあつた。しかしこれは日本軍憲の非常に苦痛とする所だ。愛國者等の非常に憂ふる所だ。そこで今日では、一少佐の責任問題にまで輪廓が縮少されて來た。これで日本軍憲もだいぶ肩が輕くなつたらうし、愛國者等も安堵したであらう。こゝまで問題を縮少して來るために、どれだけ日本軍憲が……………………………………、…………………。

一少佐の「男らしい」陳述通り、二十二輛の武器がその少佐の一個の意志で、…………られたものとしても、少佐はその行爲が日本の………………………………………………………………………………。……。それでこそ國際的に暴露されるまで、…………………………………………………………………………。……………………………、…………………………………………、政府者や軍憲や財政家の常套手段だが。モウそんな「……………」………ごまかされはしない。

武器問題が暴露すると、二重外交がどうだとか、外國に對して何の面目があるかとか、ショーヴイニストやデマゴーグが騒ぎ立てたこの徒輩は政變があれば「憲政の常道」、國際紛爭があれば「二重外交、帝國の面目」、それより外の言葉を知らぬのだ。武器問題は一少佐がシベリヤの寂しき夜のつれづれに、ふと思ひ付いてやつた仕事ではないのだ。立派に日本帝國の…………………………………、……………………………………………………、…………………………。シベリヤ政策を支持した愛國者が、武器問題で向きになるのは可笑しい。シベリヤ政策を正しとした「國民」が武器問題を正しからずとするのはどうかしてゐる。

二重外交など丶言つて騒ぐが、これが一重外交になつたらどうなるのであるか？　巧妙に、協調を保つて「同じ事」をやるだけではないか。結局、ちぐはぐにならないだけの事である。黒い手を出す時に劔を出すか、劔を出す時に黒い手を出すかの違ひだけである。軍閥外交はいけないと言ふ。兵隊が鐵砲をかついで歐を怒鳴つて歩いただけでよかつたのはモウ昔の事だ。それはまだミリタリズムの時代ではない。ミリタリズムがミリタリズムである所以は、ペイオネットを操り乍ら國政を支配する所にある。外交をやる所にある。ミリタリズムの日本を我慢しておいて、二重外交に我慢が出來ぬとは論理が通らない。死んだノースクリフ卿は、日本のミリタリズムは世界を脅威すると言つて、おどかして廻つたが、彼の一生の中、尠くともこの一事だけは本統の事を言つた。「世界を脅威する」日本のミリタリズムが設ケ關の膽をつぶさす位は、當然すぎる事だ。

…………………である。二十二輛の貨車に滿載された武器が、日本軍憲の「管理」をはなれて、白軍――張作霖の手に渡つた。「責任」などはどうでもいい。この最少限度の事實の示す意義が大切である。白軍はロシアの無産階級を搾取するために是非その武器が必

要だ。張作霖將軍は滿蒙の無產階級を搾取するためにそれが必要だ。…………………………………………………。

そこで二十二輛の貨車が運轉を開始したのである。それは寧ろ、…………。…………………「……」…………………………。この事實に當面すれば、武器問題の日本無產階級に有する關係は極めて明白となる。………………………………………………………。…………………………………………………………………。……………………………………………………！

日本の大衆はその自らなる歩みにおいて、遂に勞農露國の承認をその旗幟に大書した。その後、對露非干渉同志會の名において、現實の運動を開始した。日本の大衆の中から、ボルガのほとりの飢えたる者を救へよとの叫びが起つた。それが一個の力强い運動となつて、全日本に擴がつた。この大衆の進行と、武器問題によつてその一端を暴露された支配階級の歩とに、何と言ふ隔りがあることであらう。一は露國の大衆の爲めに叫ばうとする。…………………………

彈と彈丸を與へるのだ。

吾々はデモクラット・ジンゴーやパトリオットの二重外交、責任所在の辭摩を無視する。吾々の重視するのは、相反する二者の歩みが、この如き直接の問題で、如何により多く離るゝかである。

武器問題側面觀

=舊國家觀念の破產=

稻垣守克

一

軍人は考へた。

國家は最高の道德だ。國家は一人格者だ。愛國心は最も崇高なる精神だ。領土の擴張、軍備の充實！それが國家を隆盛ならしむる所以。

……………………………………………………………。第一目的は日本帝國の發展だ。ロシヤが弱ければ日本が安全だ。白軍を援助して赤軍を擊滅することが目下の急務だ。運よく行けば……………………。

此頃は英米が文句を云ふから面倒だが出來る…………………………。張作霖に武器を與へて日本の勢力を固めて置けば損はない。支那がいつまで封建時代の爭亂に苦しんでゐても決して差支ない。

二

資本家は考へた。

ロシヤと貿易して儲かるならいゝ。商賣も始めて見たい。但し過激派の宣傳は斷じて許し難い。過激派を退治する目的の爲めなら出兵も贊成だ、武器を白軍に渡してもよい。

三

愛國者は考へた。

……………どうでもよい。日本の利益のみを考へればそれでいゝ。武器問題が國際的になつたのは困つたものだ。濟んだことは止むを得ない。然し日本人のくせに外國人と一緒になつて武器問題を大騷ぎするものが在る。彼等は國賊だ。此際宜しく自重すべし、沈默すべし。

四

資本主義的平和主義者は考へた。

國際平和は之を望む、然し社會主義は之を排除しなければならぬ。社會主義と平和主義とは別物だ。商賣上不利益になるから戰爭を止めたいのだが、若し利益になるなら敢て戰爭も辭せない。鐵路に石を入れて戰地に送つたりしても成金になれる。平時だから武器問題など起るんだが、之れが戰時なら一番いゝ

商品じやないか。吾人は世界平和と云ふことは云つて見るが、決して「劍を捨てろ」と云ふやうな極端なことは思はない。

軍國主義的平和主義者は云つた。

吾人は新日本の穩健なる指導者である。日本の平和主義的知識階級の代表者である。但しデニキン、コルチヤクの時の反動革命の時には惜しいことをした。あの時日本國民がもう少し自覺してゐて思ひ切つて今一歩デニキンを援助したならレーニン政府は今日まで存續してゐなかつたらうに。

五

勞働階級は考へた。

ロシヤ人も支那人も同胞だ、兄弟だ。戰場で殺し合ひを强制される……………

ロシヤの勞働階級は偉大なる革命を成功して、目下其試錬中だ。…………………

…………………………。白軍に武器を引渡して赤軍を攻擊させようとする……。……………。

六

ロシヤの革命は從來の、……………

………。多くの階級が縱に連結されて、それが人類團體生活の動かすべからざる基本であるかの如く說明されて來た…………

…………………………。

武器を以て共產主義と云ふ思想の大波を防ぐことは不可能である。武器を白軍や張作霖に賣つたりして、コソ〳〵やつてる間に日本人の信用はどし〳〵落ちて行く。ロシヤ人と支那人から憎まれる許りでなく世界から嫉はれる。其結果幸、軍閥とかが其最後に近づくのだらうが。

國家の運命を善導すると自稱する軍人、愛國者よりも民衆の方が案外よく自己の存在を守る術を知つてゐるかも知れない。

×　×　×

國家は昔のやうに簡單なる一人格者では無くなつたやうだ。

武器問題寸評

新居格

武器問題にたいして僕の何よりも感ずることは軍人が相も變らず事大思想の所有者である事である。武器問題の眞相に就いては僕はよく注意はして居なかつた。從つて事件の詳細なる經過を知らずに居た。たゞこの問題が世上の問題になるに及んで多少注意を差向けて來たるに過ぎないのであるがそれ丈の範圍に於いても僕は云ふべきものを見出したのである。武器問題と一概に云ふけれど政府が十月十六日に發表した辯明によると浦鹽に保管中の押收武器の件とチエツク軍の武器紛失の件との二つがあるのである。

後者から先きに一言する。軍事當局は曩きに我軍保管中のチエツク軍の武器紛失事件と張作霖に渡した武器とは全く關係がないと言明した。それを一先づ納得して疑はないとしても八月上旬になつてチエツク領事やチエツク國の債權を有するフランス領事が日軍に賴んであつた保管武器の引渡しを要求し立會の上で點檢した所武器が紛失してゐたと云ふのであつたがそれは十六日の政府の發表した辯明にもハツキリと公けにした。政府は夫を軍法會議の結果によつて明白となるであらうと輕く片付けてあるがそれにしても國際的責任を免かれぬ事は出來ぬ、前者に就いては押收武器を張作霖とか露國側とかに供給したと云ふことを世上の風評として否定し去つた。のであるがしかし政府のこと斷言的辯明は世上の疑惑を明快に一掃したかと云ふに決してそうではない。僕は事實政府の辯明したやうなものであらうとは思ふが、しかし疑惑が殘る所ありとすればそれにも十二分の理由がある。

而してそれには日本の外交的態度が鮮明でない事と軍人の間にある相當間違つた考が禍

してゐると思ふ。

押收武器の處分問題が困難な問題である事は僕も認める。對露西亞の考方からしても押收武器はチタ政府も欲しがるし浦鹽政府も當然に欲しがつたのである。長春會議は武器引渡しのバロメータであつたが長春會議決裂前にはチタ政府に渡たす豫想で交渉を進めてゐるやうに云はれた。而して決裂するならばヂトリツクス將軍の白軍が、他の交渉團體に渡たす意嚮のやうに觀測された。外務省の意嚮がそうであるにも拘らず陸軍側は愼重熟慮最善の方策を執ると云ふ頗る意味深長の態度に出た。やにいやな態度だと思つた。所が長春會議は決裂した浦鹽方面は決裂を祝賀したと通報せられた而してチタ外相ヤンソンからは日本が若し浦潮の白軍を援けるならば日露の關係は惡化すると啖呵を投げつけられた。然るに白軍のヂトリツクスからも押收武器の引渡遲延に就いて非難を浴びせかけられて、十月十五日迄に露國軍需品にたいする保管を解除しないのなら沿海州の執政官として自由處分の手段をとらなければならないのみならず、日露兩國民の提携は覺束ないとまで聲明させた。

日本の對露信用は右の如く頗るたよりないものであるのだがその間に軍人の一派に個人的にも傾向的にも（思想的とは云へない。軍人に思想なぞはないのだから）張作霖の武斷的立場に共鳴するものが浦潮派遣軍の將官連にはある事は否定が出來ぬ。その證據は東京朝日夕刊連載の井上少尉の手記を讀めば明瞭である。また軍人連の時代後れのショヴイニズムも感情的にチタ政府の思想的背景よりも張作霖や浦鹽の白軍により多く好意があつたのは事實であらう。で一時は浦潮と張作霖との聯合さえ少くとも噂された位である。たとひその聯合が不調になつたか乃至は事實無根の虚説にした所でそれは結局、あらうべき蓋然性はない譯ではないのである。押收武器を張作霖に渡した事の事實でありやなしやを僕は問題とはしない。憲政會あたりのやうにそれを以つて內閣を攻めるの具ともしたくはない。從つて、政府がその辯明によつて事實無根と云へば正直に肯定してもいゝ。さりながら考えの違つた軍人共が履き違えた愛國主義から餘計なしかも淺墓なおせつかいを兎に角してゐるらしい事は斷じて認めたいしそれに對して吾人の立場から飽迄も追窮しなければならぬと思ふものである。

犬養毅は軍閥はもう影さえないと思ふ。結局は外交の大方針がないからだと云ふ。外交の大方針特に近代思想を根幹とした外交の大方針のない事は僕は犬養以上に認める。また軍閥なぞもあるとも思はない。たゞあるものは誤つた短見なジョウヴイニズムの殘骸的精神である。いつかの電報によればチエツク武器の紛失事件に就いてヂトリツクスは武器盜難にたいする責任を認めチエツクに向つて賠償金を出す但し賠償支拂の能力はない。所謂無い袖は振れぬがと云つたとあつたがそれらの事も武器問題に關連して疑はうと思へば疑ひうる。後日ヂトリツクスがこれ〳〵の交換條件でその責任を引受けたなぞ云はうものならそれこそ某國の國際的信用は零にならう。まさかとは思ふがあまりに小細工の好きな軍人連は何をやるか分かるものかと云ふ不信用は吾人にはある。それにしても外務省は意氣地がなさ過ぎる。事實が事實ならばそのために內閣の統一が破れたとて仕方がないのではないか。

軍閥攻擊と無產階級

赤　松　克　麿

滿蒙の武器紛失の當の責任者である某少佐の行爲に、軍閥の腹の中が讀んで居るかどう

か、また、紛失武器と張作霖の手に渡つた武器との關係はどうか、我々素人には其の間の眞相が的確に摑めない。併し、軍閥從來の行動、就中シベリア出兵の動機などから考へて見れば、軍閥が保管して居る武器を白軍に渡したり、張作霖に賣つたりすることは、いかにも有りさうなことのやうに思はれる。軍閥がさう思はれても締める外はあるまい。自業自得だ。

軍閥攻擊の段になると、我國の堂々たるリベラリズムの大新聞諸君は筆を揃へて痛擊をやるから面白い。曰く二重外交打破、曰く參謀本部の廢止。それは今の武人階級がまだ完全にブルヂヨア政治の支配下に屈服しない證據だ。軍閥攻擊が無遠慮に行はれ、そして人氣を呼ぶのは、それが封建的な傳統的勢力の餘燼に對するブルヂヨア勢力の總攻擊であるからだ。華族廢止論や一代華族論が叫ばれて人氣を呼ぶのと同じ心理だ。現代の政黨政治家、大新聞、學者などから、いくら軍閥が惡口をつかれても、軍備そのものを廢さうといふのではない。また軍閥が屈服しても、我國のブルヂヨアの外交方針はあまり變らないのである。軍閥外交ではない文治外交の代表者たる松平全權が、長春會議に於て、サガレンに駐兵したまゝ恫喝的に尼港問題を解決せんとした遣り口を見れば、軍閥外交も文治外交もドツチもドツチだ。

併し、ブルヂヨア政治機關に、外務省といふ外交專門の機關が儼存する以上、參謀本部といふやうな出しやばり好きの自稱外交機械があるのは、ブルヂヨア政治の統一上頗る不都合な事には相異ない。それはブルヂヨア政治の組織の不完成を示すものであるから、所謂社會の輿論なるものが、躍氣となつて軍閥攻擊をやるのも當り前である。そして軍閥の自主權を奪つて、軍人階級を完全に、自己の支配下に屬せしめることにすれば、ブルヂヨア政治の基礎は磐石の上に置かれるものとなる。

二重外交が一重外交になれば、我國の外交方針が從來の侵略的態度を改めて、世界平和と人類幸福を念とする立派な態度を取るやうになるとは、無產階級政治の見地に立つ我々には思はれない。我國の資本主義の發達といふことを國家經綸の大綱と考へて居る我國の政治家は、外交方針としては、東亞の覇權を確立することに焦點を置く。商品の市場、原料の供給地などの點から見て、支那、シベリア等に「覇權を確立」する必要が大いにあるのである。その「覇權を確立」するがためには、英米などの列强と悶着を起さねばならぬ。その悶着を片づけるには充實したる武力を要する。當世に於て武力なき外交は全く空砲である。故に一重外交になつてもやつぱり武力は必要である。たゞ軍人が外務省の指揮命令に服從すればよいのである。

軍閥の諸君が、いつまでも傳統的矜持に執着して、獨りよがりの振舞ひをするのは、輿論の信望を失して甚だ不利である。それよりもおとなしく我を折つて、外務省に一切の外交權を任せ、外務省の命を拳々服膺して一退一退するやうになれば、地位は安全であるし輿論からは重寶がられ、頗る悧巧な世渡りが出來るのである。

無產階級政治の見地に立脚する我々は、もとより軍閥の罪狀を憎む。軍閥が武器を白軍に渡したり、張作霖に賣つたりしたことに就いては、極度の憎惡を感ずる。我々は出來る限り明瞭に詳細に深刻に武器問題の眞相が天下に暴露せられ、且つ之れに對して嚴重なる制裁が加へられんことを切望する。併し此の武器問題も、要するにシベリア出兵といふ大罪惡の一飛沫に過ぎない。我々は之れにつけても、二千の生命と三億の國帑とを浪費したしシベリア出兵といふ無謀な愚擧を赦すことは出來ない。武器問題はシベリア出兵といふ軍閥の大醜態の最後を飾るには誠にふさはしい醜跡である。我々は泣き面に蜂の軍閥を國民が何處までも追究せんことを希望する。

こんな問題が起る每に、軍閥の勢力は衰へて行くだらう。既に山縣公が死んだけでも軍閥に取つては大打擊に相異ない。軍閥に昔日の面影がないのは明かである。二重外交は漸次打破されて、一重外交に移つて行くだらう。然し我々に取つては一重外交そのものが問題である。我々は二重外交の問題よりも、モツト大きい問題に打つかる。ブルヂヨア外交對プロレタリア外交の問題である。ブルヂヨア政治對プロレタリア政治の問題である。…………………………………………

(十月十七日)

營業税改廢問題

堀江歸一

營業税必ずしも惡税ならず

營業税全廢と云ふことが時々世間の議論に上るようである。明治二十九年同税法が始めて我國に於て實施され、課税標準の價格や、數量を決定することに關して、税務官吏と納税者との間に起る衝突甚だしく、前者は査定を嚴重にして、收税高を多からしめんとするに對して、後者は頻りに査定額を内端に見積り、負擔を輕からしめようとし、抗争の劇しきを告げた際、世間の一部に於ては、之を惡税であるとし、其全廢を絶叫する聲の高きを見るに至つた。然しながら佛蘭西のカナールの云つた如く、如何なる惡税も其實施されることの久しきに及んだ場合に、其惡税たることの感觸が人民の間に稀薄に爲り、結局良税に化し去るとした事實には、多少の根據がある。假令ひ一個の良税と爲ることは、困難であるとしても、（否天下に良税なるもののゝあるかは、疑問に屬するが）平凡なる税と爲ることは、實際に於て、之を見るを得るであらう。我國の營業税も亦此類のものであつて、實施後一兩年の間に於てこそ、多大なる反對もあつたが、當局者が頑强に之を實施しつゝある間に於て、最初の反對も次第に薄らいで、一個普通の税法と爲り、殊に日露戰爭當時に於ては、非常特別税法の下に、急劇なる增率を受けたに拘はらず、戰後に於て、税率は必ずしも戰前の狀態に復歸されず、結局當初の收入九百萬圓に過ぎなかつたものをして、近年に至つて、六千八百萬圓の多きに達せしめたことは、誠にカナールの所説を事實に於て、證明したものであると認められるであらう。

營業税法の缺點

然しながら之を以つて營業税の良税であることの證明とする

ならば、大なる間違であるとしなければならぬ。由來我國現行の營業税法は佛蘭西の同税法を模倣して、所謂外形税の形式に據り、營業收益を査定する代りに、收益の多寡を直接に支配すると想像せらるゝ外部の課税目標に就て、課税するのであつて、其目標として、建物の賃貸價格であるとか、從業者の數であるとか、賣上金額であるとか、資本金額であるとか云ふようなものが選擇されるのである。是れは個々の營業者に就て、直接に營業收益の報告を徵し、官廳に於て之に對して嚴重なる査定を施す方法の煩冗を避け、最も簡單に營業税賦課の目的を達する趣意に基くものであるけれども、同時に課税の公平は之を期するを得ない。何故に然るかと云へば、其原因は二つある。第一課税目標と營業收益の金額とは必ずしも相一致するを得ない。例へば同一人數の從業者を使役するとか、又は同一賃貸價格の建物に於て營業するとか云ふような二個の商工業者があつたとしても、一方は從業者や建物を緊密に、又集約的に使用するに反し、他方は是等を寬大に又粗放的に使用するとしたならば、課税目標は遂に營業收益を表示する目的物として、何等の價値を有しない譯であつて、税法の不公平卽ち一方の納税者に對すると、他方の納税者に對するとの負擔の不公平は先づ此點に於て生ぜざるを得ない。第二課税目的物として、營業收益其ものを査定することの困難から、課税目標を以つて、之に代らしめるに至つたのであるが、然らば課税目標の決定は容易でもり、又正確であるかと云へば、必ずしも然るを得ない。賃貸價格の査定の如き、商工業者が借家で營業する場合には、賃貸價格が實在するのであるから、之を査定するに、大なる困難は伴はないが、當業者が自己所有の家屋に於て營業するに當り、之を査定する場合には、往々にして官廳と納税者との間に、紛爭を惹起す種子たることを免かれないし、從業者數の如きも、屢々不正なる營業者に依つて、隱匿されるし、請負金額とか、賣上代金とか、資本金額とか云ふようなものに爲れば、結局當業者の帳簿を査閲する權能を持たない限り、其正確なる實數を知るを得ないであらう。斯くて營業税法に於ては、廉直なる營業者が狡猾なる營業者の負擔す可き税金までも負擔し、負擔の重いことの結果、寧ろ競爭場裡に於て後者の爲めに、不利益なる境遇に陷らしめられることゝ爲るであらう。若しも營業税が正確に總ての營業者に依つて、負擔されたならば兎に角、其内に不正の手段に依つて、之を漏脫する者のある以上は、税法の爲めに、一國の營業組織を攪亂することを免かれない。

現に之を我國の實例に徵するに、毎年營業税の課税目標を決定する場合には、必ず税務當局者と納税者との間に爭議が起

り、前者は官憲の威力に保つて、課税目標を高くしく、收税額を食らうとすれば、後者は之を低くして負擔を輕からしめようとし、兩々相爭つて、已まない其上に、收税官吏は自己の擔當する徵税區域に於て、成る可く多くの税金を徵收することを以つて、自己の職務上に於ける成效と考へ、出來得る限り納税者を壓迫して、苛税の負擔を强ゆる賃貸價格などに對しては、殆ど或る金額を割當てゝ、以つて税金全體の收入を多からしめんとするが如きことは、屢々實際問題として、現出する所であるやうに聞き及んで居る。而して營業税が外形の課税目標に據つて徵收される結果 例へば或る年度に於ては事業沈衰して、營業收益の絕無であつた場合にも、尙ほ課税目標其ものゝ存在する以上は、之に對する課税は免かれ難き所であり、收益皆無であつて、尙ほ若干の負擔を强いられることゝ爲るのである。斯の如きは昨年來から本年に掛けて、不景氣の著しき場合に、特に營業税の缺點として、暴露される所であつて、不景氣の今日、營業税に對する非難の著しきを加へ、全廢論の提唱されつゝあることも、亦深く異とするに足らない。其上に各種課税目標に對して、定められた免税點の如きも、物價騰貴し民度亦著しく上進した今日に於ては、低きに過ぎて、税率と共に、負擔を重からしめるの原因たらされば、已まないのである。

營業税の全廢は未だし

然らば營業税法に如上の缺點あることは、直に之を全廢す可しと云ふ議論の根據に充てられるであらうか。私は營業税法に幾多の缺點の存することは、同税法に適當の改正を施さなければならぬ議論を生ずるが、直に取つて此税を全廢す可しと云ふのは、甚だしく早計であると考へざるを得ない。元來營業税は收益税の一種であつて、商工業者の營業收益を課税目的物とするものである。隨つて租税の體系から云へば、營業税は農業者の營業收益に賦課される地租と相對立し、又相補償する地位に立つ可きものであり、國税に於て地租と營業税と相並んで賦課されることが總ての收益を課税目的物として、相當の負擔を加へ、租税負擔の公平を保持する所以と爲るのである。此點から考へれば、我國が明治初年から國税として地租を賦課したがら、營業税は永く之を地方財源に委して置き、明治三十年に至つて漸く之を國税としたことは、一の間違であつた。而して今日再び國税としての營業税を全廢して、地租は之を其儘にして置かうと云ふのは、卽ち往年の間違を再演するものであつて、其愚なること論ずるまでもない次第である。地租は其市街宅地の價格を課税目的物とするものを除けば、槪して地方農民に依

法學博士 福田德三著

定價壹圓九十錢

送料十五錢
四六版布製

國際經濟と國民經濟

本著は我國財政、經濟學の權威たる堀江氏の近著、先づゼノア會議の前後から最近に至る間に於て世界の經濟が如何に動いてゐるか、之に對して我國の經濟社會は如何なる地位と狀態にあるかを詳說し、世界大戰後の今日、國際平和の不徹底より國民生活を蹂躪する政策の行はるゝを痛擊し、對外債務、租稅、不景氣に對する國民の依るべき道を明示す國際經濟と國民經濟に通ぜんとするものゝ必讀に値する快著。

最新刊

東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二番

吉田絃二郎著

小說 ダビデと子たち

定價貳圓廿錢

四六判上製 送料十七錢

最新刊

此書は吉田氏が心をこめて書いた「ダビデ」を中心に取扱つた小說、彼の子は王者の子でありながら、王位を繼承すべき地位にありありながらも、巷の戀に熱烈となつて父に叛き、またその老臣も永らき戰爭に飽きはて、功名を投げすてて故鄉の農に歸る人生觀を深刻に描き出して、彼ダビデの寂しき心中をこま〳〵と描き出して淚にひたらしむ、氏の人生觀、宗教觀を通して眞の生命を見出さんとする努力には我々は心の底から敬虔の念に打たれる。

東京芝愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

山川均著

レーニンとトロツキー

＝好評九版＝

秋高くしてます〱レーニンの偉大さを實感す、彼の存在はロイド・ジョージの存在を輕くせしめ、ウイルソンの聲價を低落せしめた、彼の明晳なる頭腦から新政治の基礎は編み出された、夜長きつれ〲に本書を玩味して勞農の偉傑を偲べ・

東京芝區愛宕下町
振替東京八四〇二
改造社

戯曲

愛すればこそ

谷崎潤一郎氏の大名著

本書は明治、大正の藝術壇の代表作として不朽の神品と稱せらる。　三角關係の深刻なる戀愛を描いたもので、人間愛慾の惱みがいた〳〵しいまでよく表現されて、讀む人をして一氣に藝術の殿堂へと引ずつて行く、眞に名人の名作で、千古に光輝を放つ快著だ。

大正文壇の藝術的代表的

第三十五版

定價壹圓六拾錢
送料拾五錢

東京市芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二番

つて、負擔されることを常とするのであるに對し、營業税は大小都會に於ける商工業者に依つて、負擔されることを以つて、原則とする。而して都會と農村との我國經濟社會に於ける實勢力は今日まで如何なる狀態に於て消長し來つたか、又將來如何なる推移を示すであらうか。此點に就ては、我國に行はる可き經濟政策上の根本方針に關係することの大なるもの丶あるは、當然であるが、之を全體の趨勢から判斷すると、我國の農業では、何としても多數の人口を地方に於て、給養するに足らない、都會に商工業が起つて、地方農村の青年を都會に吸收する、地方の青年も亦田園に於ける單調にして、又貧弱なる生活に飽き、都會の華美に憧憬して、地方を辭去することに躊躇しないとすれば　農業は自ら勞働者の供給不足に苦まざるを得ないであらう。而して都會の商工業者が斯業の發達を促進する爲めに、新開國から價格の低廉なる穀物を輸入する方針を取つたならば、益々地方農村の疲弊を免かれざれば、已まないのである。我國に於ては從來外國から廉價なる穀物の輸入されようとする際には、內地に於ける凶作の爲めに、米價に異常の騰貴を示し、外國米輸入の絕對的に必要と爲るに至らない限り、常に相當の輸入税を賦課して、以つて外國米の輸入を沮止する方針に出でた次第であるから、外國米輸入の影響として、內國農業の苦境に陷つたことは或は微小であると云へるかも知れない。然も今日農村で多少の繁昌を告げて居る所は養蠶なり、侍機なり、其他の副業なりに依賴しつ丶ある結果であつて、純粹の主穀農業を行つて居る地方は常に疲弊困憊を嘆じつ丶ある、現に本年の如き農作の爲めに、米價に甚だしき低落を來したならば、比年農業勞働者の賃銀上進、肥料の騰貴其他諸雜費の加重に依つて、著しく增進した生產費を償い得るかどうかも、一二の疑問に屬するのである。

斯る浮沈の間に處して、我國の農業が次第に衰微することは、勢の避け難き所に屬し、一方に之に代つて、商工業の興起することを認めなければならぬ。然らば此大勢の持續する限り、課税目的物は次第に地方農村を離れて、都會に移ることが自然の狀態であつて、斯くて我國租税制度に於て地租は其重要なる地位を失墜し、營業税が之に代る地位を占める可き道理である。現に大正年間の初年に於ては、我國に於て地租と營業税との收入は三と一との比率に居つたのであるが、爾來前者の略一定不動の金額に居るに對して、後者の增加の急である爲めに、大正十一年度の豫算に於ては、前者の七千四百萬圓に對して、後者は六千六百萬圓に上り、略ぼ伯仲の間に居るに至つた。我國に於て地租の收入の固定的であることは、法定地價を

課税物件に充てた結果であつて、税法に根本的修正を加へたならば、社會の進歩に伴うだけの膨脹的機能を地租に保たせるを得るかも知れないが、其れにしても農業其ものゝ衰微し、農村の荒廢する状態に居る限り、地租の増收は大に之を望むを得ないのに反して、營業税は商工業の繁昌と共に、其收入の多きを期して、誤まらざるものである。而して我國商工業者の内には、我國の商工業を以つて、立國の基礎に充てなければならぬことを主張する者が少なからずあるようであらう。或は商工業者の全部が此説を持するものと見て、間違ないかも知れない。我國の國状、地理、國際經濟上の關係等から考へて、此説のあるのは、當然であつて、決して商工業者の身贔負ばかりとは考へられない、私の如きは我國が一日も早く農業立國と云ふ舊思想から脱し、商工業を立國の基礎として、國民生活の充實と向上とを實現したいものと希望して已まない次第であるが、斯く商工業立國と云ふことは、要するに之を通俗平易に言ひ現はせば、商工業をして此國を脊負ひ立たせようと云ふ趣意に外ならない。既に商工業者にして國を脊負つて立つだけの氣慨があるとしたならば、更に進んで國税負擔の衝に當る可きは當然であつて、苟も國家の中堅に居る者が互に國税の負擔を回避して、何として一國財政の存立を全うするを得るであらうか、私の敢て問はんとする所である。

營業税全廢論の因緣

從來からも營業税全廢論は商工業者の間に行はれて居つた。然し其れは勢力の極めて微々たるものに過ぎなかつた。然るに今回全國の商工業者に依つて、餘程根強く主張されるように爲つたに就ては、商工業者を刺戟した一ツの原因がある。其れは華聖頓會議に依つて、海軍が縮小され、軍事費に對する財源に大なる餘裕を生ずるに至つた一事に外ならない。元來營業税と軍備との間には、密接なる關係がある、明治二十九年當時まで地方財源に屬して居つた營業税が遂に國税として採用されるに至つたに就ては、地方團體が不統一なる營業課税を行うの結果、各地方の營業者が所在地の如何に依つて、不公平なる負擔を蒙り、或は税法の爲めに、一の地方から他の地方に向つて、營業の移動する弊害すら現はれた爲めに、全國に亘つて、營業課税を統一することが必要であると認められ、國税としての營業税法が出現するに至つた事情もあるが、尚ほ明治二十九年に於て、特に此種の改正を行つたのは、要するに日清戰後の經營に必要とする財源を得るの爲めであつた。而して日清戰後經營の主要なるものは、何であつたかと云へば、軍備の擴張に外な

らなかつたのであつて、營業稅の如きも、軍備擴張の財源を得る爲めに、新に國稅として、賦課されたものであると理解される。然らば今日の如く我國に於て日露戰爭以來約三十年に亘る歷史を通じて、始めて軍備縮小が行はれ、歲計に餘裕が生じ來つた場合に、先づ如何なる形態の減廢稅を行ふことに依つて國民の負擔を緩和し、輕減することが適當であるかと云へば、往年軍備擴張の財源を得る爲めに、賦課された營業稅が廢止することを適當とする議論を生ずる。是れが今日に至つて、特に營業稅全廢論の熾烈に爲つた所以と解されるのである。

然しながら上論の如きは、餘りに國家財政に施す可き計畫に因緣情實を纏綿させた嫌がある。而して軍備擴張の財源を得る爲めに增徵され、新に賦課された租稅は一の營業稅のみに止まらず、他に幾多種類のものがあるとすれば、右の如き因緣論を土臺として、減稅方針を決定するときには、軍備縮小の爲めに國庫に浮み出した財源は十數の租稅を廢止し、輕減する爲めに、些細なる金額に分割されなければならぬ。斯の如くして理論の徹底は之を得たとしても、實際に何の効果の見るを得るものがあるであらうか。

地租と營業稅との關係

理論の徹底を求める點から云へば、營業稅を廢止する場合には、同じく收益課稅の一たる地租を全廢しなければならぬ道理である。假に或る偶然の機會から、營業稅だけ廢止されて、地租が獨り存續したとして、全國の農民は果して此狀態に對して、沈默して居るであらうか。農民の利害を代表する地位に居る多數衆議院議員の如きは必ず農民と商工業者との間に、負擔の均衡を求めなければならぬと云ふ議論の下に於て、猛然たる勢を以つて、地租全廢論を提唱するに至ることは、睹易きの勢であつて、營業稅の全廢を決定した政府は何を以つて地租全廢論を峻拒し得るであらうか、決して此點に於て適當なる理由を見出すを得ないのである。斯くの如くにして若しも或る種類の租稅を負擔する納稅者が團結の力を藉りて、其租稅の廢止に運動し、相次いで之に成効したならば、我國に於ては遂に一の收益稅系統に屬する租稅は之を賦課する能はざるに至るであらう。斯の如きは國稅に對する國民の態度として、甚だしき誤まりであり、又國民の義務を閑却したものと評さゞるを得ないのである。

固より私と雖も此際我國の租稅制度に根本的改革を加へ、其一端として營業稅を廢止すると云ふのならば、或は之に贊成するかも知れない。即ち營業稅を廢止し　同時に地租をも廢止

し、農業と云はず、工業と云はず、商業と云はず、總て産業に從事する者に對して、是れまで賦課された租税を廢止して、彼等に對する負擔を除却する、斯くて双方の廢止に依つて、國庫收入の上に生ずる一億數千萬圓の缺陷を補ふのに、所得税の増收を以つてする、即ち收益課税を廢棄して、我國租税の根幹を所得課税に置くと云ふことは、一個の租税政策を以つて見るを得べきであつて、少なくとも我國の租税制度から不確實なる分子を除却して、確實なる分子を増加すると云へるであらう。我國の所得税は隨分苛酷なる程度に於て、賦課され、今日以上に増收の餘地なきやに考へられるようであるが、保全會社其他の方法に依つて、富豪が彼の如き合法的脱税の手段を弄びつゝある一面に於て、今日の收入を擧げつゝあることを考へたならば、税法を正當に施行する殊に中流以上の階級に對して厲行し、以つて所得税の増收を謀つたならば、相當の効果を擧げるを得るであらうが、尙ほ地租營業兩税の全廢に伴ふ缺陷を補ふに足るかは、一個の疑問に屬する。思ふに營業税全廢論者は單獨に營業税を全廢することの行はれ可きを信じて、之を主張するものであるが、營業税と地租との間に、離る可からざる關係あるを知りながら、殊更に之を知らざる態度を持して、此主張を敢てするものであるか。若しも前者であるとすれば、彼等は存外時事に迂濶である譏を免かれないし、又後者であるとすれば、心事極めて醜陋であるとせざるを得ない。

八方美人の租税政策

或は政府は營業税全廢論の氣勢の全國到る所に高まり來つた事實に顧み、之に副ふて民望を收めようとする考を持つて居るが、一方に地租に對する權衡上、營業税ばかりを全廢することも、不可能である結果、遂に地租と營業税との双方に若干の減率を施して以つて一時を彌縫し去らうとする方針を決定したと云ふ説がある、加藤内閣の如き政界に何等の根據を持たず、隨つて何等かの方法に依つて、世間の輿望を得ることに腐心しつゝある一方に、政治上に確乎たる定見を持たないものが斯る八方美人式の減税方針を敢てすることは、怪むに足らないかも知れないが、私は之を以つて營業税全廢に讓らざる愚策であると考へざるを得ない。由來我國の國税に於て最も大なる缺點とする所は直接税の負擔が割合に輕くして、間接税の負擔が割合に重い一事であつた。即ち從來増税の行はれる度毎に主として税率の加重されるものは間接税であるに反し、税制整理の行はれる際に、專ら税率の輕減されるものは、直接税であつた爲めに、斯る結果を生ずるに至つたものに外ならない。試に大正三

年度決算に於ける兩種租稅の收入を見ると、

直接稅　一四三、九九四、八四六圓
間接稅　一九九、七一三、五八一

であつて、双方の間に不權衡があつた。然るに其後所得稅法に改革が行はれて、同稅の收入の著しく增加した爲め、如上の不權衡も亦或る程度まで矯正され、大正十一年度の豫算に於ては、

直接稅　三五一、七一九、四五一圓
間接稅　三八二、五七八、〇六五

と爲つたのである。然るに今營業稅を全廢するとか、地租と營業稅との双方に減稅を加へるとか云ふような方針に出たならば、再び我國の租稅制度をして間接稅に偏倚せしめる嫌を生ぜざるを得ない。果して然らば營業稅を減廢することに關聯して、地租を減廢しなければならず、地租營業稅を減廢することに關聯して、更に間接稅の方面に相當の減廢を施さなければならない。營業稅の減廢に依つて、生ずる結果は正に斯の如く爲る可きものであつて、單に一の營業稅を動かしたばかりで、全部の解決を得たとするのは、大なる誤解である。隨つて營業稅の全廢を主張する論者は右の如き廢減を行うだけの財源が單に陸海軍備の縮小に依つて浮び出すものであるか、此縮小に依つて生ずる財源の餘裕は他に支辨され可き筈であつて、廢減稅に充つるを得ないとしたならば、他に如何なる財源があつて、廢減稅の實行に可能の性質を持たしめるを得るか、之を示す責任を持つのであつて、何等の事情をも考へず、單純に營業稅の全廢を唱へるが如き、一個の空論であり、又無責任なる言說として、見るの外ないのである。

從來我國に於て租稅增收の場合には、間接稅に增率が行はれ、租稅輕減の場合には、直接稅に減率の行はれたのを常とするのは、要するに力の關係に依るものに外ならなかつた。即ち地租を負擔する全國の地主　營業稅を負擔する全國の商工業者は其れ〲自己の利害を代表するに團體の勢力を以つてし、此團體の勢力は能く政黨を左右して、右の如き減廢稅の方針に出でしめるを得た次第であるのに、各種の消費稅を負擔する者の如きは、餘りに廣く社會に散在し、團結の力を以つて、之に反對するを得ない。所得稅の如きは、直接稅でありながら、其負擔者に餘り多くの階級を包攝し、營業稅に於ける商工業者とが、地租に於ける地主とか云ふような纏まつた階級に關係を有せざる爲めに、動もすれば增徵される機會多しとする。即ち我國に於ては、從來力に依つて、租稅の減廢又は增收の方針の決定される事實が遺憾なく示されたのである。此際更に營業稅全廢とか、地租並に營業稅の輕減とか云ふようなことが行はれ、負擔者自ら其負擔を拒否する運動が成效して、稅制の方嚮を左右する、政府には自己の見識に基いた何等の方針がなく唯力ある者の運動に支配され、力ある者は負擔を免かれて、力無き者は却つて負擔を強いられると云ふが如き、何としても事の正しきを得たものと見るを得ないのである。

改造社出版目録

賀川豊彦著
長篇小説 **死線を越えて** 前篇
定價參圓　送料拾九錢　四六版上製
貳百七拾五版

幾多の暗示と光明とを現代の人々に呼びかけた本書の價値は、本書を中心として囂々たることを以て明瞭だ。人類愛に燃え立ち、又は今後の世相と我身の將來を念ふ幾多の人々よ、一讀して本書の使命を諒解せよ。

賀川豊彦著
長篇小説 **太陽を射るもの** 死線中卷
定價貳圓八拾錢　送料拾九錢　四六版上製
百八拾版

前篇は我國に前例なき賣行を示した。本書も前篇に劣らず出版後一ケ年に百八拾版の賣行きを齎らしたのは、百萬讀者の心と心とがピタリと本書と合致したからではあるまいか、敢て天下の青年士女に本書を薦む。

中澤臨川著
小説 **嵐の前**
定價貳圓　送料拾五錢　四六版上製
拾五版

情熱の思想家として文壇の一人者たりしニイチエの失戀を題材として描かれた涙ににじむ思想小説だ著者は我が論壇の麒麟兒として情熱に生れ、情熱に斃れたる理想的生活の持主として青年の憧憬を一身に集めた人である。

志賀直哉著
直哉傑作選集 **壽々**
定價貳圓八拾錢　送料拾九錢　四六版上製
四版

秋の澄み渡つた朝空の如き透明な魂の持主である作者は何と云つても小説の大巨匠であり、最高權威である、日本の藝術を語るものは先づ氏のしみじみした作品を味ふべきである。そこに藝術の殿堂はある。

中西伊之助著
長篇小説 **赭土に芽ぐむもの**
定價參圓　送料拾九錢　四六版上製
九版

「こんなにも虐げられた人々もあるものか」と涙ぐませる。朝鮮と云へば我國だ、朝鮮人と云へば我々の同胞だ、その氷山、そのいぢらしい人情、その死刑囚の苦しみ、どの句章にも生々しい血の流れてをるこの深刻な小説を見よ。

尾崎士郎著
長篇小説 **逃避行**
定價貳圓參拾錢　送料拾九錢　四六版上製
七版

若き日の輝きに充つる一大雄篇を提供する若き社會運動家が、社會主義運動の裏面を赤裸々に告白し、自分は飄然として逃避するに至つた悲しき社會記録だ。全篇火の如き熱烈さに充ち〳〵してをる感激多き小説

尾崎士郎著
長篇小説 **懷疑者の群**（逃避行第二部）
定價壹圓六拾錢　送料拾七錢　四六版上製
三版

若き社會主義者のその内面生活の素破抜きであり、その首領連の裏面史であり、そして若き日の悩み多き戀の秘録である、本書を一讀せずして若き社會主義者の内面生活を窺ふことは出來ない、本書は「逃避行」の姉篇。

創作

留置場の一隅にて　江口渙

百花村物語　佐藤春夫

親　里見弴

盗癖　橋本基



留置場の一隅にて

江口渙

「いよく。雨かな」

私は少し前屈みになつて、自動車の幌の間から外を眺めた。五月にしてはいささかうすら寒い日だ。淺い藍色に煙つた巷の大氣は、まだやつと二時をすぎたばかりなのに、何となく日暮時のやうな感じを與へる。不揃な兩側の建物にも、街路樹の若葉の上にも、又は路面を往來する人々の姿の上にも、鈍い濕氣が充ちてゐる。私は懷へ入れた兩手をじつと胸の前で組み合せた。昨日からの疲勞と亢奮と、昨夜の寢不足とのためか、自働車の吹き上げるガソリンの匂が一層氣分を重々しくした。

私の左手には安物の二重廻を着た刑事が、私にぴたりとくつついたまゝ座つてゐる正面には黑つぽい洋服を着た警視廳の高等係が腰をかけてゐる。二人とも無言のまま時々感じの好くない眼附をしては私を見るのだ。その度に私も上眼遣ひにじつと彼等を睨め返すと彼等は何故か慌てて眼を反らした。

「尾行面」とは好く云つたものだ。この人々の顏には誰も彼も何故かうまで同じやうに、疑ひ深い變に卑屈な、謂はば人間としての尊い或るものを失つたやうな、不愉快な表情が溢れてゐるのだらう。生き生きとした處のない皮膚の色や、ともすれば開きたがる艶の惡い脣や、さては生へもしないものを無理に生やしたとしか思はれない疎な

形や、凡が唯所謂「尾行面」の一語につきる。それでゐて彼等は絶えず私に輕蔑のうすら笑ひを見せてゐるのだ。

「一體、おれを何處へ連れて行くんだい。」

自働車が大きな石造の橋を渡つて柳を植えた河岸について曲らうとした時、私はかう云つて前にゐる洋服の男に問ひかけた。

「何處だつて好いぢやないか。行けば解るよ」

洋服は突つ放すやうに答へると、私の右にゐる和服と眼を見合せて、ふふんと云ふやうな面附をした。すると和服も直ぐ様それに應じて、じろりと横目で私を見上げた。ずんぐりむつくりとしてゐる私服の顔は、私の顔よりは一段低い處にある。

「君達が昨夜留置場であんまり騒いだもんだから、今日はみんなばらばらに分けられるんさ。つまり自業自得だよ」

「何が自業自得だい。頼みもしないのにおれ達を勝手にあんな處へぶち込んで……ふふんだ」

最後の一句を噛んで吐き出すやうに云ひ放つた私は、再びじつと瞳を据えて二人を見較べてやつた。實際、相手の意地惡い眼つきに對して私は尙更一倍意地惡さをもつて酬いざるを得なかつたからだ。だが二人は何故かそれには答へなかつた。唯、如何にも故意とらしく横を向いたと思ふと、前と同じやうな不愉快なうすら笑を見せただけだ。

私は昨夜神田の××會館で開かれた或る社會運動の大結社の第二回大會が開會と同時に解散を命ぜられた時、八十餘名の仲間と一緒に捕つたのだ。その時、私達は銘々數人宛の巡査に圍まれながらいやおうなしに最寄の警察まで引つ張つて行かれた上、古煉瓦か何かを掃溜へでも投げ込むやうに片つ端から留置場の中へぶち込まれた。そして、そのうす汚い小部屋の中へものの二時間も鮨詰めにされた後、一とかたまりづゝ囚人自動車に乘せられては、暗い街を順々に警視廳へ送られたのだ。

だが捕まつた時も、囚人自働車で運ばれた時も、更に鐵格子の中へ入れられた時も、私は格別の不安をも際立つた危惧の念をも感じなかつた。何となれば捕る事位は無論始から覺悟の上であつたからだ。その上官憲の有ゆる妨害を排し

通して、とかくあの會場へ三千以上の人數を集め得た事と、大會が謂はば一種の玉碎を完し得た事と更に又自分達が各各碎かれ踩躙られた玉の破片の一つとして捕へられたのだと云ふ一種の衿持とのために、みんな同じやうにはちきれさうな亢奮に充されてゐたからだ。

實際、警察の留置場へぶち込まれて來る仲間の人數が殖えるにつれて、みんなのそれまで無理にも抑壓されてゐた心の激動は、何時か恣な反抗的の形をとつて爆發したのだ。

五燭の電燈が天井の上の方でうす暗くともつてゐる廊下を隔てて向き合つてゐる六つの部屋は私達の仲間でもつていつぱいにされた。そして、みんなは一齊に床を踏み鳴らす。破目板を叩く。聲を揃へて□□歌を怒鳴る。如何にも元氣さうな聲で笑ふ。愉快に喋る。全く胸の底から爆發した亢奮の遣り場に困つてゐるらしい。その樣子は何處にも「逮捕された人々と云ふやうな暗い感じがないばかりか仲間の誰かが新にぶち込まれて來る度に、みんな總かかりで萬歳を浴びせかける處は、むしろ運動會へでも行つたやうな明るくはしやぎ切つた風さへあつた。

誰は會場の大天井へ□□旗を掲げたとか、誰は丈餘の大赤旗を翻して門前の電車通を走つたとか、誰は三階から宣傳ビラを撒いたとか、そのビラが吹雪のやうに群衆の頭上へ散つたとか、いろいろの手柄話が次から次へと傳へられた。それを聞いたり話したりする度にみんなは如何にも愉快さうな聲で笑つた。

捕つた八十餘人の中には女の人も二人ゐた。詩人で音樂家である盲目のロシア人もゐた。支那人もゐた。朝鮮人もゐた。そして、これ等の珍しい人々が交つてゐると云ふ事が尚更みんなの心をはしやがせたらしい。その上、みんな同じやうな「大きな手」に依つて鯱二無二捕へられたのだと云ふ共通の感じが、妙にお互の心を强く結びつけるためか、これほどはしやぎ切つた騷ぎの中にも、到底平生では見られない程の親しさと溫かさを漲らしてゐた。それが尚更みんなの心を特殊な甘い激動で彩つたらしい。私は舞ひ上る埃と渦卷く煙草の煙の中に蹲つたまま、一寸言葉では現はせないほの明るい亢奮に覆はれながら[illegible]れて始めて接したこの異常な光景を物珍しく眺めたものだ。

騷ぎは自働車の中でも同じであつた。私達の一とかたまりが送られたのは、たしか三臺目の車だつた。時刻は九時少

し前でもあつたらうか。解散を喰つてから二時間以上も經つてゐるのに、警察の前にはまだ見物人の山がうようよしてゐた。私達が大勢の警官に圍まれながらぞろぞろと玄關先へ引き出されるのを見ると、見物は一寸動搖めいたらしい。だがそんなものに注意を向けやうとする暇さへも與へられずに、私達は直ぐ様燈火一つない車の中へ否應なしに詰め込まれた。

間もなく扉が手荒らく閉されて外から鍵が卸されると、ヘッドライトが忽ち闇を貫いて輝き渡つた。と思ふと同時に正面の鐵網越しに再び以前の見物の顔が眩く光を射返しながら、大きな菓物を並べたやうにすらりと眼の前に浮び上つた。それを見ると私の隣りにゐた一人の大學生は、突然眞暗な車の中へ突つ立ち上つた。そして、體を前方へのめらせながら、見物の方へ拳を突き出すやうにして「民衆諸君！」と疳走つた聲で演説を始めた。だがその聲も動き出した自働車の爆音と、その爆音に促されて車の中から湧き溢れた□□歌のために直ぐ様壓倒されて終つた。そして、その時の私には亢奮し切つた大學生の演説よりも、巡査に追はれて自働車の前を左右に逃げ惑ふ群衆の方が、遙かに多くの興味をあたへた。

自働車が走るに伴れて歌はいよいよ旺んに唄はれた。だが歌の文句を好く知らない私は、その叫びに耳を貸しながらも、唯默つてゐるより外はなかつた。そして、體を半分前屈みしながら正面の鐵網越しに頻りと外ばかり眺めてゐた。何故なら何處の街を如何云ふ風に通るのか、一寸それが知りたかつたからだ。だが外があまりに暗いせいか、どうもはつきり見當がつかない。唯、柳らしい街路樹の梢の若葉が風に煽られて緩い波を描くのや、おどおどとした人影が慌しくヘッドライトの光を横切つて走るのが、とぎれとぎれに見えるだけだ。

たつた一度、多分何處かの寄席だらう。大きな軒先に細長い提灯が幾つもづらりと並んで二段に赤く灯つてゐるのが如何にも鮮かに眼に入つた

「やあ、綺麗だな」

私は思はず聲に出して隣の大學生を省みた程、その灯の不思議な華かさは烈しく私の心に沁みた。そんな寄席の灯が

その時どうしてそれほど强く私の心に沁みたか、考へると自分ながら一寸不思議な氣持がする。それは多分殺風景な留置場の中から更に眞暗な自働車へぶち込まれたお蔭で、光と色彩とに飢え切つてゐた私の眼が、思はぬ處で華かな刺戟に合つたので、俄かに嬉しくなつたためだらう。實際、囚人自働車の不愉快極まる動揺のために段々滅入りかけた私の心も、その灯のおかげで又浮き浮きとなつた上に、更に何んだか形の知れない甘い追憶さへも起させた程だ。

だがその華かな刺戟もほんの一瞬の間に過ぎて終つた。それが眼に入ると殆ぞ同時に大きく揺れて右に曲つたと思ふと自働車は相變らず渦巻き起る歌を乘せたまま、電車線路に沿つて前よりも一層暗い途を走りつゞけた。その裡に幾條もちらちらと光の縞を湛へたお堀の水が見えたと思ふと、何時か警視廳へ着いたのであつた。

鐵戸を嚴重に閉て切つた車から降されて、冷々とした夜の大氣に顔を曝した時には、流石に張り詰めて居た私の心も一寸解放されたやうな氣持になつた。そして思はず大きく胸を張つてその冷い夜氣を力一杯吸はざるを得なかつた。氣がつくと私達の降されたのは警視廳正面の大玄關ではなく、帝劇に向ひ合つた横手の出入口であつた。つまりはここが一般囚人の通路ときめられてあるのだらう。

中へ入ると廊下ともつかず玄關ともつかない、だだつぴろい場所に大勢の警官が、甚だ物々しく並んでゐた。明るい屋内のくせに手に手に提灯を提げて、顎紐を卸して垣を造つて立つてる様子は、如何にも私達を待ち受けてゐたと云はぬばかりだ。その上、石造の大建築に特有な冷い空氣と、重々しいそのくせやゝ甲高く反響する物音とが、凡ての感じを更に險しくさせたのは云ふまでもない。然し私の心は間もなく又浮き立つ程の明るさに返つて行つた。それは物の十五分もかかつて嚴重な身體檢査をうけた後、皆んなと一緒に分厚な鐵扉で仕切られた地下室の廊下へぞろぞろと追ひ込まれた時、……………………………………

…………………………………………………………

、私達の入つたのは八疊敷位の警視廳では一番弘い部屋だつた。そこには無論先着の仲間がゐたので、みんながその中へ割り込むと騷ぎは尚更ひどくなつた。そしてそれはとうとう夜中の二時頃までも續いたのだ。

その間私は大抵片隅にごろりと横になつてゐた。そして、多くの場合は前の無口を發揮したまゝじつとみんなの騷ぎを眺めて居た。私の直ぐ右手には盲目のロシア詩人が横つわりに座つてゐた。左の手で窮屈さうに體を支へて、兩足を斜に投げ出して、心持首を傾げてゐる盲目の姿には、軟かな寂しさとでも云ひたいものが溢れてゐた。

彼は婦人のやうに柔和な、そして少年のやうな若々しいその顏に、藝術家らしい物思はしげな色を浮べながら、ロシヤ風のバンドの前金具を頻りと指先でいぢつては、熱心にみんなの騷ぎに耳を傾けてゐた、みんなはロシヤの民謠を唄ふ事を何度も口を揃へて彼にせがんだ。然し何時も彼は唯寂し氣な微笑を泛すだけで、默つて首を左右に振つた。首を振る度に肩まで垂れかゝつて居る亞麻色の髮が緩い波を描いては美しく搖れる。硬く閉さした瞼の上にはきまりわるさうな影が動いて、それが盲人である彼の姿を尙更寂しい、だが、もの優しい風に見せた。

私の直ぐ前には私同樣小說を書き評論を書いて飯を喰つてゐる、佐藤がゐた。佐藤は今日の警戒線を突破す可く、生命から二番目位に大切なその山羊髯を剃り落し、鼈甲緣の眼鏡を安いアルミ金の眼鏡に換へ、筒袖の縞の羽織に前垂をかけてすつかり商人になりすました積で出懸けて來たのに、矢張、むざむざと捕つたのだ。山羊髯が失くなつたために、元來小さな惠比須顏が見違へるほど小さくもなり、又ひようきんにもなつた。それを見ると私は實際何度も噴き出しかけた。

騷ぎが一寸途切れた時だつた　私と佐藤と盲目の詩人との間の話題が、何時かロシヤ文學に移つて行つた。すると佐藤は髯の無くなつた小さな顎を、あつた時と同じく一寸しやくつて、

「チリコフの小說の中に、ロシアの大學生が大勢馬車の中で革命歌を唄ひながら追求されて行く處があるね」

と、云つて私の方を向いた。

「ああ。そんなのがあつたね。主人公の大學生が往來で出逢つた知らない女學生に、帽子を取りかへて貰つて逃げる話だらう。素敵に綺麗な女學生に……」

私は最後の一句に特に力を入れて答へた。何となればその女學生が稀れなる明眸の持主であつた事と、追放され行く馬車の中で前の大學生と偶然一緒に乘せられたために、始めて凡ての事情が解つた結果、二人は美しい戀に落ちた事と

が、いまだにはつきり私の心の中に殘つてゐた。そして、今夜の殺風景な自働車の中を考へると、その大學生の幸福がつくづく羨しかつたからだ。

「あの話、一寸好い話だね、萬事あゝ云ふ工合に行くと好いんだが」

然し私の言葉の意味は、佐藤には全然通じなかつたらしい。

「今夜の自働車の中の氣分がまさにあれだね。あゝして一緒に送られて來る處は、實際、何とも云へない感じだ」

かう云つて胡坐をかいた小柄な脚を大きく振つた佐藤の顏には、その所謂「何とも云へない感じ」がこぼれるやうに微笑となつて溢れてゐる。彼はたしかにその「何とも云へない感じに陶醉もし、又、心私かに享樂もしてゐるらしい。それが尙更私の氣持との距離を大きくした。

「さあ。どうだかな。今夜のよりはロシアの方がずつと眞劍だつたらう」

私は佐藤の笑顏に對してつい眞顏でかう云つた。何も反抗の意味で殊更に眞顏になつたのではない。さう思ふと自然ならざるを得なかつたのだ。

「まあさう云へばさうだが、然し感じに於ては同じだよ」

「僕はさうは思はないよ。何と云たつて今夜のは何處かお祭り氣分を脫しないよ。第一、犧牲の拂ひ方の大きかつた話だけでも當時のロシア大學生の方がずつと深刻だ。浮はついた今夜の氣分なんかとは可なり違ふ」

私がこゝまで云ふか云はない裡に、突然横の方から怒氣を含んだ聲でもつて

「今後の△△△△△は勞働者から出る」

と、嚙んで吐き出すやうに云つた男がある。

意外の處から意外の言葉が發せられたのでいささか驚いた私は、思はず體をねぢつてその方を省みた。見ると大勢寢轉んでゐる眞中に骨組の好い二十三四の男が大きく胡坐をかいて坐つてゐる。何處の會合でも、まだ一度も見た事のない男だ。素袷の胸をはだけて腕組をして、ぐつと肩を聳からしてゐる樣子は、可なりに亢奮してゐるらしい。體つき

から考へてたしかに純勞働者だ、

「大學生が何だ。智識階級が何だ、あいつ等に一體何が出來る。親の脛を嚙つてやがるくせに口でばつかり偉らさうな事を云つてやがつて…………」

相手は私達三人の顔を等分に見較べながら、如何にも腹立たしさうにかう怒鳴つた　だが最初のは間は何のために怒鳴られてゐるのか解らなかつた私は、しばらく茫然とその男の顔を見詰めた。

「ロシアの智識階級だつて、最後になつて、却つて衆民　邪魔をしたぢやないか」

相手が更に言葉を繼いでかう云つた時、私は始めてその心持が呑み込めた　つまり私達がチリコフの小説の中に出て來る革命主義の大學生に就いて論じた事が、直ちにロシアの大學生と智識階級とを、更に日本の大學生と智識階級とを讃へたやうな感じを相手に與へたらしい。そして、その事が更に進んで運動に於ける勞働者の力を度外視してゐるとでも云ふ風な誤解を與へたものらしい。

だがすつかり不意を喰つた私と佐藤は、話の腰を折られたまま、尙可なりの間唯まじまじと相手の顔を見詰めてゐた。

「智識階級に何が出來る」

その男からもう一度戰を挑むやうにかう呟いた時だ、それまであまり口數をきかずにゐた盲目の詩人が、大きく體をねぢると同時に見えない眼をぐいとその男の方へ向けた。そして、突然鋭い聲で叫んだ。

「ロシアの△△△△△はみんな智識階級から出てゐます」

如何にも歐洲人の日本語らしいアクセントを持つた日本語ではあるが、一氣にかう云ひ切つた聲の調子は火焰のやうに熱してゐた。

「莫迦を云ふな、この運動は吾々勞働者の運動だ。勞働者以外の者に何が出來る」

「然し、ロシアの智識階級はロシアの解放のために大きい役目をつとめてゐます」

「でも、今日△△△△△△に必ず勞働者から出る」

「それでもロシアではみんな智識階級から出てゐます」

壁に出來るだけの力をこめて、再びかう云ひ切つた盲目の詩人は自國のインテリゲンチヤの名譽のために、一歩も退かないと云ふ風に見えた無論、相手の若い男も飽くまでも自說を通さうとする。もうすつかり亢奮し切つてゐた二人は何時か知らぬ間に體を眞面に向け合つてゐた。そして段々相迫つてゐる顏と顏との間からは危く火花が散らうとしてゐる。私はとうとう傍から口をはさんだ。

「出るか出ないか、出て見なけりや解らないぢやないか。第一そんな事を今ここで決定する必要が何處にあるんだ」

「さうだよ。全くさうだ」

佐藤も直ぐ樣私の後についてかう云つた。そのため二人はもうそれつ切り默つて終つた。だが二人の顏には依然として隱す事の出來ない亢奮が烈しい反感となつて溢れてゐた。そのお蔭で私達の氣持も自然變に白けて終つた。無論、不愉快な沈默が一時あたりを被ふたのは云ふまでもない。

「最近、智識階級に對する勞働者の反感は、次第に烈しくなつて來た。それは近頃、到る處の社會運動の會合で屢々見かけるところだ。今の二人の爭も、結局はその現はれの一つに過ぎないのだ。無論、二人の主旨主張の焦點は最初から全く喰ひ違つてゐた。そして、喰ひ違つたのを少しも喰ひ合せやうとしないで、互に頑張り通したため、最後にも矢張り喰ひ違つたままで終つてしまつた。だから論爭としては何の意味をもなさない」

さう思ふと、二人が無闇に頑張り合つた事が、尚更一種の愛嬌でもあつた。

「だがそんな事は如何でも好い。とにかく現在自分が手をつけてゐるこの運動は、第四階級の解放運動である以上、結局、第四階級がその運動の樞軸となる可きものだ。そして、第四階級それ自身の意志に依つて動く可きものだ。……無論そんな事は最初から解り切つてゐる事なのだ。然かも解り切つてゐながらも矢張、ともすれば自分一個の氣まぐれな心に依つて動かうとする。さう思ふと今後踏み出す可き自分の足跡の一歩一歩について極力十分に考慮を拂ふ必要がある。

二人の論爭のすんだ前後でも、私は薄べりの上へごろりと横になつたまま、一人こんな事を考へた。だが、格別具體的に考をまとめる事は出來なかつた。何故なら私の折角考へやうとする努力も、同じ鐵格子の中にゐる若い人達のはしやぎ切つた騷ぎのために、ともすると浮はついた渦の中へ捲き込まれ勝ちで、あつたからだ。

だから私はそれでも尙かつ自分の心をそれ等の騷ぎから引きはなして、その問題について一人考慮を致した。昨夜も遅くまで。又、今朝も眼がさめると同時に。だが、矢張、格別まとまつた考も得られなかつた。

一夜を留置場にすごした人達の中には、今朝の九時頃から呼び出されては何處かへ連れて行かれるものがぽつぽつと出來て來た。多分取調もすんで無事に放還されるのだらう。みんな大抵かう思つてゐた。そして內々自分の名前の呼ばれるのを心待ちに待つてゐた。誰だつてこんな處に長く置かれるのを好む者は、無論一人もないからだ。

間のぬけた胴間聲で私の名前が呼び上げられ、外から鐵格子の扉が開けられた時には、正直な處私も矢張さう思つた

「いよいよおれの番か來たな。まあこれで家へ歸つてゆるゆると寢られるわけだ」

動物園の猛獸檻よりももつと頑丈な鐵格子が幾つもずらりと並んでゐる前を通つて、うす暗い廊下を巡査に附添はれながら歩いた時には、私は口の中でこんな事を呟いて一人喜んだものだ。何となればその時の私は、一本の煙草と淸潔な布團と、十分な睡眠とをつくづく要求してゐたからだ。ところが、間もなく私の前に現はれた事實は、全く私の意表に出た。

鐵の丸棒を竪にはめた扉を排して廊下の外に出された私は、更に昨夜身體檢査をうけた玄關內の大きな部屋を素通りして、もう一つ向ふの同じやうにうす暗い廊下をしばらく引つ張り廻された後、一寸とした一つの部屋へ連れ込まれたこれが多分例の高等部屋なのだらう。そこには大きな卓子を中にして、脊廣服を着た所謂高等係が四五人ゐた。その人達は私が入つた時には、入口の方へ脊中を向けて俯向き加減に腰かけてゐる一人の男を、取り調べてゐる處だつた。詰襟の後姿を髮の長い處から考へると、何處かの大學生らしい。

「やあ。君が△△君ですか。どうも御苦勞。……時に君この男を知つてゐるでせうな」

私がすゝめられた椅子に腰を卸すが早いか正面にゐた一人の高等係は、直ぐ樣私にかう訊いて、顎でもつて大學生の方を指した。

見ると知つてゐる處ではない。半歳この方所々の會合や仲間の家で度々會つた事のある男だ。現に昨夜も會場の鬪士室で會つてゐる。島田と云つて××大學の學生である。

私を見ると島田は一寸眼をあげて默つて輕く會釋をした。その顏は可なりに蒼い。多分昨夜の睡眠不足が祟つたのだらう。

「ええ、知つてますよ」

私は二人の顏を見較べながら輕く答へた。

だが一體何のために私と島田に引き合せたのだらう。無論、そこに何かがある。かう思つた私は、いやにじろじろ私を見詰めてゐる高等係の三角な眼を、出來るだけ用心深く眺め返した。

「ぢや、君、無論これも知つてゐるな」

相手の言葉遣いは俄かに崩れた。

「何をだい」

「これ。これ。これだよ」

角張つた顏をつんと突き出して、意地惡く私を見上げた相手の顏には、明かに威壓の色が見えた。そして、私が相手の眼の裏に隱されてゐる何物かを讀まうとする暇もなく相手は卓子の片隅に丸めて置いてあつた赤い布を手早く自分の方へ引き寄せた。そして、肩よりも高いあたりで一二度ばたばたさせたと思ふと、それをさつと私の前へ擴げて見せた。赤地に白く文字を書いた大きな旗だ。その瞬間、正直な處私は「まいつた」と思つた。何となれば眼の前に擴げられた赤旗と大學生と私との關係が、現在如何なる形に置かれてあるかが、直ぐ樣直覺されたからだ。

「かうなつた以上、この旗に見覺えがないなんて事は、云はさんぞ」

不意打を喰つて一寸まごついてゐる心の動揺を取り返へさうと努力してゐる私の様子を直ぐ様、それと見てとつたか相手はすかさず詰め寄つて來た。

「さあ。……さう云へば昨夜曾場でこんな様な旗を二三本見かけたやうな氣もするが、その旗が果してこの旗だつたか如何か、とそこまでは一寸記憶にないね」

私は出來るだけあいまいに、かつ出來るだけゆつくりとした調子で答へた。全くこんな險呑な場合には、成る可くゆつくり答へるに限る。愚圖愚圖と言葉を引き伸ばしてゐる裡には、自然と心の落ちつきを取り返へせると同様に、何とかうまい逃げ途が見つかるものだ。

だが、無論、それを悟らないやうな相手ではない。忽ち骨組の頑丈さうな體をぐいと反り身にして、分厚な肩をいきなり高く上げたと思ふと、

「莫迦を云ふな。莫迦を」

と、部室中が割れさうな聲でもつて、一氣に烈しく怒鳴り始めた、

「出鱈目を云ふな。出鱈目を。……逃げやうつたつて、逃がすもんか」

「誰も逃げたりなんかするもんかい。唯事實を事實として云つてるだけぢやないか」

私は右手で顎の下をさすりながら、一寸顔をつき出してから答へた。それが尚更相手を怒らせたらしい。

「白つぱくれるな。ずうずうしい。何も彼も殘らず島田が自白しとるぞ、これでも逃げられるなら逃げて見ろ」

無理にも威容を造るために洋服の兩腕を大きく前で組んでゐた相手は、かう云ひ終るが早いか腕組を解いて、いきなりどしんと烈しく拳で卓子を打つた。

「ふふん、この手で他人ををどすんだな」

かう思つた私は殊更舌の先で上唇をなめながら、一寸相手の様子を眺めた、そして、出來るだけ氣をぬいて氣勢をそぐ可く、尚更ゆるゆるとした調子でもつて訊き返した。

「島田が何を自白したんだか、一向おれには解らないな」

「無論、解るまい」

「當り前さ。解るもんか」

「解るまいと思つてゐる裡に、島田が殘らず自白したぞ、昨夜、君は解散になつたら振つてくれつて云つて、この旗を島田に渡したらう。會場の辯士室で……自白した本人が眼の前にゐる以上、いくら白つぱくれたつて逃かすものか。おい。島田、さうだな」

ここまで云ふと相手は如何にも勝ち誇つたもののやうに意地の惡いうすら笑を見せながら一寸言葉を切つた。そして私と島田との顏を二三度じろじろ見較べながら、故意と私の答辯をまつた。

「いよいよ、駄目かな」

かう思つた私は止むなく島田の方を向いた。然し島田はやはり顏を上げない。その上蒼ざめた顏のあたりに一ぱい油汗をかきながらてんで身動きさへもしない。そして唯一度、おどおどとして眼をあげてちらりと私を盗み見たばかりである。

「つい喋つてしまつて許して下さい」

普段の元氣をすつかり失した島田の眼が、その時から私に謝つてゐるやうに見えた。金ボタンの正服を着て兩手をきちんと膝に置いて、いやにちぢこまつてゐる體つきが、長く伸ばした濃い髮の毛と對照を作るためか、そのおどおどとした眼の感じを一層みじめたものに見せた。

「おい。君、好い加減に往生して素直に白狀したらどうだ。下手に逃げやうとしてボロを出すより、その方が氣が利いてゐるぜ」

躊躇してゐる私を見ると、相手は促すやうにかう云つた。』

「私から渡されたと思つたのは、混雜の際に生じた島田の記憶の錯誤だらう。自分にはそんな記憶は斷じてない」……

から云つて飽くまで頑張り通さうかしら、然しこれが果して最後まで頑張り通せるものだらうか。渡したのも事實だ。解散と同時に振れと云つたのも事實だ。渡した場所さへこの通り解つてゐる。その上自白した本人がかうしてちやんと眼の前にゐるのだ。かうなつては到底駄目だ。下手に頑張つて中途で不様にへし折れる位なら、一層あきらめて素直に承認した方がましかも知れない」

止むなく覺悟をきめかけた私は、もう一度念のために嶋田に訊いた。

「君、全くそんな事を云つたんかい。困るね」

だが、嶋田はそれには答へなかつた、唯その眼が頻りに「許して下さい」と謝つてゐる。

「ふふん。自白されて全く困つたらう」

私の困つてゐる樣子を見て取つた高等係はすかさす横からかう云つた。と同時に、如何にも勝ち終せたと云はぬばかりに、小憎らしい微笑をもつて私を眺めた。その時、變に眸をとがらせて一寸天井を見上げた相手の眼が、忽ち私を心の底からかつとさせた。そのお蔭で持ち前の負けず嫌ひがぐいと頭を出したためか、私は却つて逆に度胸がすわつた。

「一寸も困りやしないよ、一向平氣だ」

「何を。まだ、そんなへらず口を叩いてやがるんか、づうづうしい」

「……………」

「逃げやうたつて、逃がすもんか」

「誰が逃げるもんかい」

「ぢや、たしかに認めるね」

「何をだ」

「嶋田にこの旗を辯士室で渡した事實を」

「うん。それは認めるよ」

嶋田が自白して終つた以上、仕方がない、私も止むなくその事だけは承認した。
「おや。何の目的でこれを嶋田に振らさうとしたんだ」
「振れなんて云つた記憶は斷じてない」
「斷じてないか」
「無論、ないさ」
「おい。君、たしかに振れつて云つて渡されたんだらう」
こんどはじいつと顔を嶋田の方へ向けた。うす赤い髯を短かく立ててゐる其口元には何となく毒々しさが溢れてゐる
「いゝえ。そんな事を云はれた覺はありまん」
「だつて先刻さう云つたぢやないか」
「そんな事を云つた筈はありませんが」
「ぢや、何て云つたんだ」
「振るために渡されたものと　その時私が思つただけです」
「ふふん、云ふ事が大分違つて來たぜ」
「いいえ、先刻からさう云つてゐるぢやありませんか」
嶋田もあまりに餘計な事まで喋りすぎたので私にすまなくなつて來たせいか、すつかり前の陳述を飜したらしい。
「ぢや。振るために渡されたと思つて、君が勝手に振つたんだね」
「いいえ、決して振つた覺なんかありません」
「莫迦云ふな。調書にはちやんと君が振つたと書いてあるぢやないか」
「そりや何かの間違ひでせう、ほんとうに振つたりした覺はないんですから」
「ぢや、夢中で振つたんか」

「いいえ、唯のびをした拍手に手がぐつと上の方へ上つたもんですから、持つてゐた旗もそれと一緒に上つただけなんです」

「それなら振つたのと同じぢやないか。莫迦」

「さうなりますかね」

最後の島田の言葉が終らない裡に、部屋中にゐる凡の人は、聲を揃へて思はずぷつと噴き出して終つた。にも係はらず、島田一人は蒼ざめた顔を矢張俯向けたまま、血の出るほどの大眞面で身動き一つしやうとしない。その様子が取つて附けたやうな陳述とはあまりに懸け離れすぎてゐるので、尚更みんなは止め度のない程笑ひ崩れた。

「そこでこんどは又君だがね」

部屋中の笑ひ聲が一とかた片づくと、正面にゐる高等係は再び私の方へ眼を轉じた。前の可笑しさがまだ脱け切れないためだらう。ともすればこみ上げて來る可笑しさを殺さうとしては無理にも苦い顔をしやうと努める。それが可笑しくもあり、又、氣の毒でもあるので、私は又々ぷつと噴き出して終つた。

「何が可笑しいんだい」

相手は鼻の先をもじもじさせてこんな事を云つたと思ふと、やうやくもとの眞顔に返つた。

「ところで君に更めて訊きたいのは、この旗だ。一體これを何處から持つて來た」

「何處からも持つて來やしないよ」

「ぢや、君が作つたんだな」

「莫迦な事を云ふなよ。誰がそんなものを作るもんかい。第一、おれに旗なんか作れやしないぢやないか。見ろよ。この通り立派にミシンがかけてあるぢやないか」

私は眞中に縫いつけてある白い文字や、周圍の縁に丁寧にかけてあるミシンの跡を指差しながら、殊更、緋金巾の旗の處々をいぢつて見せた。

「無論、君には作れまいさ。唯、何處で作らせたつて云ふんだ」
「何處でも作らせやしないよ」
「ぢや、如何してこれを手に入れた。誰に貰つた」
「誰にも貰ふもんか」
「それなら如何したんだ」
「唯、拾つただけだよ」
「何處で」
「會場の辯士室で……」
私がかう云ひ終るか終ひない裡に、相手の顏は見る見る朱を注いだやうに赤くなつた。と思ふと、何時か抑へ切れない怒氣が一氣に烈しく溢れて來た。
「嘘を吐くのも大概にしろ、莫迦しい。」云はせて置けば好い氣になつて、好くもそんな出鱈目が云へたものだ」
滿腔の怒氣を一氣に吐き出す如くに、荒々しい聲でもつて喚いたと思ふと、相手は又しても兩腕を高く胸の前に組んで、大きく反り身になつて見せた。私を睨めつけた眼の中には、如何に烈しい憎惡に充ちた光が黑く迸つてゐた。
「嘘なんか吐くもんか、拾つたんだから拾つたつて云ふだけです」
「何處までづうづうしく白を切るんだい、教育ある人間のくせに、好くも嘘が吐けたもんだ」
「嘘ぢやないよ。元來がおれなんか嘘を吐きたくつても吐けない性分でね」
私は殊更にやにや笑ひを見せた。
「何を云つてやがるんだい」
「いや、全くだよ。嘘がどうしても吐けないからこそ社會主義者になつたんだい。嘘が吐ける位ならとつくの昔、資本家になつてらあ」

「うまい事を云つてやがらあ。一體、君達の仲間はみんな嘘吐きだね。かう云ふ處へ引つ張つて來られて最初から正直な事を云ふ奴は一人もゐない」

「ヘツヘツヘ……」

「ふふん。……拾つたら拾つたでも好いさ」

　如何にも私を嘲ふやうな、又蔑むやうなうすら笑を浮べた相手は、かう云つたと思ふと、思ひ切つたらしく一寸言葉を切つた。そして、高く組み合せてゐた兩腕をほどいて、卓子の上に頰杖をつきながら、再びまじまじと私の眼を見詰めた。少し傾けた顏の感じには、まだまだ私の眼の中から何か大切なものを掴み出さうとするやうな様子が見える。

「そりや、君だつて旗の出處を喋れば、それだけ多くの犧牲者を出す事になるんだから、是が非でも云ひたくないのは解つてゐるよ。實際云ひたくつたつて云へまいからな。仲間に對する義理から。云つたつて男として假令殺されても云へまいその位な事はおれにだつて解つてらあ。だからなおれだつて君に男を潰させてまでもこれ以上訊かうとは思はないよ」

「フフン。そりや非常に結構だ」

「餘計なへらず口を叩くない。……ところでこれ以上追窮はしない代りにこんどは君がこの旗を作つた。ものと認める事にするからその積でゐろ」

　相手は殊更うす氣味惡く思はせるためか、わざわざ聲の調子を落して見せた。

「そんな莫迦な事があるもんかい。拾つたのと作つたのは。全然內容が違ふぢやないか」

「つまらん理屈は止したまへ、まあ好いから。今日は忙しいからこれで打ち切りにしよう。旗を嶋田に渡しただけでも拘留二十九日の價値は十分ある」

　私がさう易々とは退却しさうに見えないためか、最後にこんな捨て臺詞を云つた相手にもうそれ以上追窮するのは止して了つた。

事實、私は旗の出處をちやんと知つてゐた。だが全く男としてそんな事が喋れるものかよしんば高が旗一本だからそれだけでは大きな犧牲者が出ないとしても、そのためにそれからそれへと蔓を引つ張られて、何處でどんな犧牲者を釣り出されないとも限らない。だからかうなつた以上、唯「拾つた」の一點張りで。何處までも押し通すより外にない。私はすつかりかう覺悟をきめて終つた。

私は自分が承認しただけの範圍に於ける調書を取られた後、漸くその部屋から出された。その間島田は無論默つてばかりゐた。唯、私と島田と旗との關係に就いて私が云つた言葉の駄目を押すために、高等係が島田に問ひかける時だけはそれでもやつと微かにうなづいて見せた。そのすつかり脅え切つた樣子が、私の眼から見れば　の毒でもあり、又、甚だ不愉快でもあつた。そのため私は高等係が私の言葉を書き取つてゐる間中、殊更絶えず島田の顏ばかり見詰めてゐた。

調書が出來上つて私の書名捺印がすむと高等係が先刻私を引つ張つて來た巡査を側へ呼んで何か耳打ちをした。そして、私は再びその巡査に衞られてうす暗い廊下へ連れ出されたのだ。

一體これから何處へつれて行く積から知ら。まさか正式裁判を仰かさずにこのまま二十九日の拘留にする事もあるまいが、又、よもやこれが一と先放還となるわけにも行くまい。

私は一人こんな事を考へて、ぼんやりと巡査の後へついて歩いた。

その裡に先刻素通りした大きな場所へ出たかと思ふと、こんどは昨夜自働車から卸されて最初にくぐらされた出入口の方へつれて行かれた。不圖、正面を見ると大きな隧道の出口の中から眺めるやうな感じのする玄關のアアチの下に、一人の若い女性が向ふ向きに立つてゐる。髮を總髮いやうな束髮に結つた大柄の女だ。外からの光が強く漲つてゐるため、それを正面に浴びて立つてゐる女の後姿は、影繪のやうにくつきりとした輪廓を見せて、コンクリートの床の上に浮き上つてゐた。

女は私達の近附いて行く事には氣がつかないらしく、頸か肩へくつくほど首を後へねぢつて、脊中へ廻した兩手を一心に動かしては頻りと帶を直してゐた。私の眼が光に慣れると、友染メリンスの帶の端が、外から流れ込む光の中で赤

く動くのが眩いほどに明るく見えた。

通りすぎやうとして何の氣なしに顔を見ると、女は輕く笑つて私に挨拶をした。社會主義者中の長老である和泉氏の一人娘の高根さんだ。高根さんも矢張私同樣昨夜の騒ぎで捕つたのだ。そして女は女ばかり別な檻に入れられて、かうして今まで置かれたものなのだ。高根さんの顔を見ると私も思はず輕く笑つて挨拶を返した。

「あなた、もう歸るでんすか。」

私の方から言葉をかけると、高根さんは何時もの癖の通りに一寸小首をかしげながら、

「さあ。どうですか」

と、答へて、再び無邪氣な笑顔を見せた。そして、その後から

「帯がうまく締らなくつて」

と一人語のやうに云つて、又、片手を帯のお太鼓にあてた。するとその途端にいきなり

「話をしちやいかあん」

と突然聲で怒鳴りつけた者がゐるので、好く見るとアーチの外にちやんと私服が高根さんをまつてゐた。

私が一と足先きに高根さんが直ぐ後についてアーチ外のぬかみを二間足らず歩いたと思ふ頃には、二人は何時か右と左に引き離されて終つた。そして、二人がもう一度笑ひながら輕く挨拶をした後で、私一人、自分の乘る可き自働車の側へ引つ張て行かれたと時には、高根さんの後姿はずつと右の方へ遠のいつてゐた。ずんぐりむつくりとした刑事に護られながら、煉瓦造りの建物に添つてひどいぬるみの路を歩き難くさうに足を運んでゐる高根さんの、大柄な脊中の眞中には、帯のお太鼓の赤いのが矢張くつきり明るく浮き上つてゐた。

かくて私は二人の刑事に添附はれながら、ボロ自働車に乘せられて、再び警視廳から運び出されたのである。

「一體、何處へ連れて行くんだい」

私が再びかう訊きくと、左側の私服は如何にも不機嫌らしい顔附をして

「行けば解るよ」

と突つ放なすやうに答へた。

するともう一人の高等係も故意としげしげ私の顔を見ながら、

「みんな高根の音頭なんかで餘計な歌を唄ふから、又こんな目に會ふんさ……昨夜、高根の奴、頻りに音頭を取つてやがつたなあ」と、意地の惡い笑顔を見せて、相手の私服の横顔を覗いた。

私はもうそれつ切り口をきかなかつた。無論、こんな男とこんな處で口をきく必要はなかつたからだ。下手に餘計な口なんかきくものなら又どんな機會にどんな絲を手操られないとも限らないからだ。

先刻の島田だつて、無論、最初から何もぺらぺら進んで喋つたわけでもないのだらう。きつと餘計な辯解なんかしてゐ裡に、その辯解の辻褄の合はない處をぐんぐんと突つ込まれて、へどもどすればするほど、段々みじめなボロを出したのに違ひあるまい。だが、それにしてもまあ何と云ふへまな口の辷りかたをしたもんだらう。」

私は向ひ合つて座つてゐる高等係と根氣好く睨めくらをしたまんま、一人頭の中で又島田の事を考へつゞけた。

「昨夜、數本の旗をひそかに隱して辯士室へ持ち込んだ時、その役目を引き受けやうと云ふ事を誰よりも先に云ひ出したのは島田であつた。解散と合時に旗を振つて警官の眼をそれにばかり集注しやうとする役目だ。勿論、島田自身から進んで引き受けやうと云つたのだから、私は渡りに舟とばかりそれを頼んだ。何となれば島田は平生から第一線に立つ可き闘士をもつて自ら任じてゐたからだ、實際、彼はこの運動に從事してゐる學生團體の無氣力と無能とを痛罵してゐた。そして、言論に依る宣傳などは、この運動に依つて全然無意義だとも主張してゐた。又、自身は第一線に立つて勇敢に危地を突破する時以外、ほんとうの緊張感を味ひ得ないとさへも云つてゐた程だ。

だから私は實のところ彼をさう好くは知らなかつた。だが、その云つてゐる處から推してとにかく相當にしつかりした青年だらうと思つてゐた。ところが、先刻のさまは何の事だ。全く話にも何にもなりはしない。怖らく最初に高等部屋へ引つ張り込まれた時には、きつと怖くなつてがたがた慄へてゐた事だらう。然し、如何に嚇かされたとしても、あ

あまで喋らんでも好さそうなものに」

私はうすら寒さを防ぐために両手を深く懐へ入れたまま、一人こんな事を考へてゐた。

ボロ自働車は相變らず不愉快極る動揺を續けながら、路の悪い街路の上を無闇矢鱈に走つて行く。時々、かすれたやうな聲を出しては往來を横切らうとする人を脅したり、電車の交叉點らしい處へ來ては一寸止つたりする。止る度に嫌なガソリンの臭が何處からともなく幌の中へ流れ込むので、私は幾度も眼が廻りかけるほど胸の悪い思をさせられた。

その裡に私と向き合つて乘つてゐる高等係が居眠りをしはじめた。自動車の動揺に伴れて脂切つた赤黒い顔が、かくりかくりと大きく動く。顔が少し上を向くとその度に大きく左右に開いた鼻の穴が、一層大きな形に見える。鼻の穴は鼻毛のお蔭で眞黒だつた

私はその鼻の穴を正面から眺めながら「昨夜は高根が頻りに音頭を取つてやがつたなあ」と云つた先刻の言葉を思ひ出して、一寸可笑しくなつた。昨夜、高根さんはもう一人の女と一緒に、私達とは大分離れた處へ入れられてゐた。男の連中は大勢一緒に集められて元氣にはしやぎ廻つてゐるのに、女二人だけが遠く引き離されて、或は心細くはないかしらみんなの騷ぐのを眺めながら、私が一人こんな事を考へたのは遂に杞憂にすぎなかつた。何となればみんなが少し靜かになりかけると、その度に恰も元氣づけるかのやうに、一人で歌を唄ふ高根さんの聲が、遠い向ふの方から聞えたからだ。若々しい、そして女らしい潤をもつた歌の聲が美しい線を曳いて、折れ曲つた廊下傳ひに私達のうす暗い鐵格子の中へ流れて來る度に、みんなは直ぐ様その後をつけて唄ひ出すのだ。向ふで唄ふとこつちで唄ふ。更にこつちで唄ふと又向ふでも唄ふ。かくて可なりの間、暗い廊下越しに何度も歌が繰り返された。

今、私の眼の前で鼻の穴をひろげて居睡りをしてゐる高等係も、昨夜は可なり遅くまであの歌を聞かされたものに違いない。或は歌が聞える度に大いに腹を立てたのかも知れない。その腹立しさと、徹夜服務の睡眠不足とが一緒になつてそれで今日こんなに不機嫌なのだらう。

かう思ひながら、その不様な寝顔を前からじつと眺めてゐると、何だか一寸可笑しくもあり又氣の毒でもあつた。

やがてものの二十分も經つた時分だつたらうか。ボロ自働車はやうやくその不愉快な歩みを止めた。そして、私は附添つて來た二人にせき立てられて、まるで想像さへもしてゐなかつた遠くの警察の玄關先へ降されたのだ。

こんどの警察の留置場は、昨夜三時間ほど入れて置かれた會場の近處の警察のよりは、更に一層きたなかつた。もとより警視廳のとは全く比較にならないほどだ。私はその狹く汚い留置場の廊下の隅の古ぼけた腰かけに腰を卸して、しばらくぽかんと待されてゐた。

留置場の中には一間と少し廣いかと思はれる間口を持つた檻が四つ、板敷の廊下を隔ててうす暗く向ひ合つてゐる。各々の檻の正面は幅五寸はたしかにある角材のペンキ塗りの大格子で如何にも物々しく固めてある。檻の中は廊下の板敷と同じ高さだ。それが中へぶち込まれる者に對して、殊更、侮蔑を與へるためのやうにも見える。

私のゐる處から斜に見える二つの檻には、どつちにも三四人の人が入れられてゐるらしい。然し、留置場の中はしいんと靜まり返つて人のゐるやうなけわいさへない。それがじめじめと濕氣を含むあたりの空氣と、どんより曇つたやうなうす暗さとのために、尚更一層陰欝な感じを與へる。私はこの時、始めて所謂留置場へ入れられたと云ふ意識をはつきり持つ事が出來た。

「一體、ここへ自分は何時まで置かれるのかしら。無論、今日は昨夜の檢束の蒸返しだから、少くとも明日の夕方までは出る事が出來まい。檢束は次の日の日沒までと云ふ内規なのださうだから。否。或はこのままずるずるべつたりに拘留を喰はされるかも知れない。例の二十九日の拘留を……」

かう思ふと、流石に不愉快な氣持が仕出した。殊に昨夜から今朝まではお祭り騷ぎと大した變りのないはしやぎ切つた雰圍氣の中に、大勢の仲間と一緒にゐたのだから、かうして一人遠く引き離されてこんな處へ運ばれて來ると、尚更「獨法師」と云ふ感じか迫つて來て、一寸心の遣り場に困つたほどだ。

やがて重々しい響と一緒に入口の硝子戸を開けて、小肥りに肥つた老年の巡査が一人入つて來た。

「又、檢束か」

がちやりと音をさせて硝子戸の錠を中から卸すと、老巡査はこんな事を云ひながら、よちよちとした足取りで私の方へ歩いて來た。そして、私の姓名と年齢と訊いて、黒塗の小型の木札に書き取ると更にそれを鴨居に釣した名札かけの中へはめた。名札かけの中には既に七八人の名前があつた。

「何で、ここへ連れて來られたんだ」

やがて巡査は隅に置いた事務机に片手をかけながら、しげしげと私を見詰めてから訊いた。ので私が手短かに昨夜からの事を話すと、相手は今までの角張つた態度を變へて、却つて一味の親しさを作つた心のくつろぎを見せて來た。多分、同じ檢束は檢束でも、唯の搔つ拂ひや泥棒とは全く選を異にしてゐる點に於いて、巡査の方でも自然ゆつたりとした氣持で對する事が出來るのだらう。

「新聞で見ると君達の大會は却々盛會だつたやうだね」

遂には自分の方から進んでこんな事まで云ひ出した程だ。

「實際、盛んだつたね」

相手の如何にも好人物らしい笑顔に對して、私も何時か笑顔になつてかう言つた。

「それじや即時解散で、そのまま檢束か」

「まあ。さうだ」

「段取りは何時も大概きまつてゐるからなあ。ハツハツハ……」

不器用な手附でもつて老眼鏡を外してからこんな事を云つた巡査は、しばらく何か考へてゐたが、又々、うすあばたのある圓い顔の人の好ささうな笑を浮べた。

「ぢや。昨夜の警視廳はさぞ賑かだつたらうよ、何しろ君達の仲間は何時でも怖しく元氣だからな。ハツハツハ……」

「全く元氣だね。僕は昨夜始めてああ云ふ處に入れられたんだが、みんなの元氣なのには驚いたよ」

私も思はずこんな合槌を打つた　すると相手は如何にも可笑しいと云ふ風な微笑を一杯口先に見せて、一寸私の顔を

眺めてゐたが、又こんな事をさへ云ひ出した。
「吾々はから考へると君達の仲間は、どうも少し變だね」
「どうしてだい」
「だつて、どう云ふものかみんなあの主義をほんとうに好いと思つてゐるんだね。だから社會主義には說諭はてんで効かないねえ。うつかり說諭なんかしやうものなら、却つて逆にこつちが說き諭れさうだ。だから主義者が來たつて、おれはてんから構はんで放つとくんだ」
「ハツハツハ……」
こんどは私の方が、思はず大きな聲で笑つて終つた。
「全くだよ。何度監獄へぶち込まれたつて、一向改心せんからな」
「社會主義の改心かハツハツハ……」
私は再び大きく噴き出さざるを得なかつた。
「いや。君。冗談ぢやないよ。」
相手は私があんまり笑ふので幾分きまりが惡くなつたものか。こんどは一寸眞顏に返つて見せた。
「一體、社會主義の何處がそんなに好いんだらう。何度刑を喰つても止せないなんて……まさかあの主義で大した金もとれまいのに、どうしてあゝまで止せないんだらう」
「そりや止せないさ。ハツハツハ……どうしたつて止せないよ。ハツハツハ……金なんかとれなくたつて止せないさ。ハツハツハ――ハツハツハツハ……」
この好人物の老人の物の解らなさ加減が、あまりに人間ばなれがしすぎてゐるので、私はとうとう腹を抱へるほどに笑つて終つた。とぼけたやうなその顏と　とぼけたやうなそのとぼけたやうな考へ方とが、あまりにぴつたり調和してゐるので、私は全く笑つて笑ひぬかなければゐられないほどに可笑しかつた。

ところが何處までも人間ばなれのしてゐるこの老人は、私が無闇に大きな聲で笑ふのを見て、却つて不思議さうにしげしげと私の顔を眺めたほどだ。血の出るほどの大眞面目で、うすあばたのある圓い顔を、分厚な肩の上へのせて如何にもまじまじと私を見上げた。その顔附が又可笑しかつたので、私は尚更に一層笑ひ崩れた。

その時、向つて左手の檻にかけてある錠前が、突然がちやがちやと音を立てて鳴つた。そして、直ぐ後から

「ちよいと。旦那」

と、なまめかしい女の聲が檻の中から聞えた。

見ると若い女が三人ほど格子の中に突つ立つて、並んでこちらを覗いてゐる。格子にかけた白い指には、各々指輪が美し〱光つてゐた。

「旦那。ちよいと　ここを開けて頂戴な。ねえ。旦那」

如何にも甘へるやうな聲の調子だ。

「何だ。又、便所か」

「どうも毎度すみません」

「ほんとに毎度だ」

巡査はかう答へると、笑ひながらのそのそと立ち上つた。

こんな處へ若い女が、然かも三人も束になつて來てゐる事が、私には少なからず意外だつた。で思はず異常な興味に燃える眼をあげて、直ぐ様、そのなまめかしい聲の持主を眺めた。

だが、巡査は何の不思議もなささうに「よしよし」とか何とか云つて、がちりと錠前を開けてやつた。

「ほんとうにすみません」

てんでにこんな事を云ひながら、中から扉を押し開けるやうにして出て來た三人の女をなりもみんな藝者らしい。どれも拔き染めのお召しか何かの羽織を肩からづり落ちるばかりに着流したり、派手な色の伊達まきをぐるぐる巻いたり

着物の襟を思ひ切り深くぬいでゐるところは、誰が見ても一と眼でそれと解る程だ。

だが、巡査に向つていちいち丁寧に會釋をしてこそこそと逃げるやうに歩く様子や、白い素足につつかけた留置場の藥草履が三人の姿を可なりにみじめなものにしてゐた。殊にすつかり根のぬけた奴島田や、銀杏返しが歩く度にがくがく動く後姿は、これ等の女がここへ引つ張つて來られる前後の醜態を連想させるに十分であつた。

「あいつ等。何だい。藝者かい」

三人の後姿が突き當りの便所の中へ消えた時、私は巡査に向つてから訊いた。

「ああ。みんなこの近所の不見轉だよ」

「どうしてこんな處へやつて來たんだい」

「例のこれさ」

私の想像してゐたのとは違つて、巡査は意外にも鼻の先を人差指でつついて見せた。

「何だ、さうか。僕は又不見轉の現場でも押へられたのかと思つたよ」

「いいや。そこにゐる男達と一緒に待合の二階で花を引いてゐたところを一と網打たれたんさ」

「かう云ふとこんどは私の直ぐ前にある檻の男達を、顎の先で差して見せた。

「あんまり夢中になつてばちばちさせてしやがつたから嗅ぎつけられたんだらう。昨夜、何でも二時すぎだつたね。みんな珠數繋ぎにされて入つて來たんだ」

「さうか。そこにゐる。男つて、一體何だい」

「こいつ等かい。或る有名な會社の重役連だらう。始終一つ待合でやつてゐるんだよ。あんまりづうづうしいから、とうとうお仕舞にやられたんさ」

「こんな奴こそ、どしどし擧げてやると好いんだ」

「さうだとも」

から云つて私を省みた時には、流石に人の好ささうな老人の顔にも、苦々しさうな色が可なりに烈しく閃いてゐた。巡査も一種の無產階級である以上、如何に無自覺でも矢張この種の資本家の奢侈と淫逸とには、たしかに十分の反感を持つてゐるのだ。さう思つた時、私は先刻自働車で私を護送して來た二人の高等係とに對するのは全く違つた、特殊の親しみをさへ、この善良な老人に抱かざるを得なかつたのだ。

その裡に、三人の女は又ぞろぞろと便所から歸つて來た。見ると三人とも第一顔つきからして如何にもこの邊の安藝者らしい。一人は中肉中脊の細面と云へば人聞きが好いが實は一寸眼が細く釣つてゐる上に、大きな口が變に突き出てゐる處は狐のやうだ、もう一人は肥り肉の分厚な肩と、脂ぎつた丸顔とが短い首で繋がれてゐる樣子は一寸形容に苦しむ位だ。年はもう四十前後らしいのを、無理に若々しく造つてゐるのと、變にべたべたと色つぽいこなしをして見せるのとが尙更その感じを惡くしてゐる。最後の一人は矢張中年增ではあるが、中肉中脊のきりつとした體つきでは、流石に藝者らしいしなやかさがあつた。殊にたつぷりと媚を含んだ切れの長い眼元には、十分男を動かすに足るだけの淫蕩な感じが溢れてゐた。

「どうもお手數さま」

「お待ち遠さま」

女達は口々に甘へたやうな調子でもつてから云つては、いちいち丁寧にお辭儀をして、又檻の中へ入つて行つた。だが流石に一寸體を屈めて狹い出口をくぐる時にはみんな眉を寄せないばかりに氣持の惡さうな顔附をして見せる。それが自身の心のやましさから來る彼等の引け目を、如何にもはつきり語つてゐるので、私は一寸愉快な氣持がした。

「君ももうそろそろ入つてくれないか」

藝者の檻の錠を卸すと、巡査は私に向つて更めてから云つた。

「まあ。もう少し好いだらう。誰だつてがちやんと錠を卸されるのはあんまり愉快なものぢやないからな」

私は殊更戲談のやうに答へただけで、矢張しばらくそこで愚圖々々腰を卸してゐた。

私がここへ來てから小一時間も經つた時分であつたらうか。突然、廊下の外に大勢の元氣さうな笑ひ聲が聞えて、騷々しい足音が段々近附いて來たかと思ふと、重々しい響と一緒に入口の扉が開いて、三人の若い男が巡査に送られながらどやどやと入つて來た。みんな和服の上へレイン・コートを引つかけて板裏草履を穿いた勞働者風の男だ。

「あや、瀨口さんもここですか」

眞先に入つて來た小柄な男が、私を見附るが早いか大きな聲でかう云つた。好く見ると矢張昨夜一緒に捕つた仲間の石上と山岡と西里だ。みんなそれぞれ最も急進的な勞働團體に屬してゐる人達である。

「ええ。一時間位前にここへ送られたんです」

かう答へた時、私は何故かみんなと如何にも久し振りで會つたやうな氣持がした。つまりそれ程この小一時間か私にとつて永かつたんだ。

「高根さんは如何しました」

脊の高い西里が變ににこにこしながらかう訊いた。

「さあ。何處へ送られたか知りませんね」

「何だ。あなた一人ですか。先刻、二人並んで出て行つたから一緒たとばかり思つてゐたのに」

「いゝえ。僕一人です」

「さうですか。それは……あの時、玄關の正面の奧の處で吾々七八人一緒に待されてゐたんです。だからあなた方の出て行くのが好く見えてましたよ。そしたら佐藤さんがね。瀨口の奴、今夜は高根さんと一緒にされて、ボロイもうけをしよるなんて羨しがつてましたぜ」

西里は佐藤の「こわいろ」まで使つてこんな事を云つた。

「ハハッ……莫迦だな」

私は折角大事な山羊髯を剃り落したくせにむざむざと捕つた佐藤のさう云つた時の顏をはつきり眼に浮へて、思はず腹

の底から笑つて終つた。みんなも矢張私同樣、聲を揃へて愉快さうな笑ひ出した。

それを見ると、今まで新に來た人達の名前を木札に書きつけてゐた老巡査は、一寸慌て氣味に机をはなれた。そして誰か何かを追ひ込みでもするやうに兩手を擴げて私達の前に立ちはだかつた。

「おい。おい。こんな處で固つて喋つてゐちやいかん。さあさつさと入つた。入つた。……今度こそは君も一緒に入るんだ」

相變らず人の好ささうな微笑を見せてこんな事を云つたと思ふと、左側の檻の一つを開いて、とうとう私達を追ひ込んで終つた。がたんと角張つた響をさせて扉が閉られる。重々しい音と一緒に外から錠を卸される。私達四人は再び言葉通りに檢束されたのである。

檻の中は間口が一間に少しく、奥行がほゞ二間位はあるだらうか、見た處、一寸とした廊下のやうな細長い部屋だ。三方には灰色の壁が如何にも固く冷く突つ立つてゐる。上には同じ色の高い天井がある。壁の下半分は分厚な羽目板で張つてある事と、板敷の片隅には擦り切れた薄べりが一枚敷いてある事とが、全體の感じを尚更、牢屋然としたものにしてゐる。

その上、正面の壁の思ひ切つた上の方に、たつた一つ、硝子をはめた小さな角窓が切つてあるだけだ。その窓から無論光は流れ込んでは來る。だが金網と蜘蛛の巣とに妨げられ上に、今日は外が曇つてゐるせいか、部屋の中はどんよりと濁つたほどに暗かつた。

私達四人は薄縁の上へ、銘々胡座をかいたりごろりと横になつたりしながら、再び元氣好く喋り出した。殊に私が斜向な檻には藝者が三人來てゐる事、前の檻にはそれ等の藝者の客である三人の資本家が矢張一緒に來てゐる事、そして、待合の二階で花を引いてゐて捕つた事などをいちいち話して聞かせると、みんなが「やあ藝者か」などと殊更大きな聲で云つては、何度も格子の處まで立つて行つて、珍しさうに向ふの檻を覗いたりした。その上、その隣の檻にゐる資本家達が、みんなぞろぞろと便所へ行つた歸りがけに、私達の檻をじろじろ覗た時などには、聲を揃へて怒鳴り立てた程

だつた。それほどみんなは相變らず、元氣でかつ勇敢だつた。
だから私が不圖思ひ出して今日の嶋田の話をした時には、三人とも言葉を極めて憤慨したのは云ふまでもない。
「餘計な事を喋られちやつて、僕も一寸困つてゐるのです」
「拘留」か「檢束」か、大概その程度の代價を支拂へばそれで好いのだ。と思つても、凡てが未決室の狀態にあるために、流石に氣持が落ち着かなかつた私は、ついこんな事を云つた。
「驚いたよ。普段あんなに偉さうな事を云つてやがつたくせに」
先づかう云つて如何にもあきれたらしい顏附をしたのは、一番若い西里だつた。
「これがたつた旗一本の事件だから、まだまだ好いやうなものの、もつと大きな事件だつたら眼も當てられない」
「全くだよ」
後の二人も、直ぐ樣、それに西里の言葉に同意した。
「道理で島田の野郎、先刻警視廳から出て行く時に、變に蒼い顏をしてゐやがると思つたつけ」
「えゝ。彼奴もう歸されたんですか」
「えゝ。さうのやうでしたよ」
かう云つた西里の言葉を聞いた時、今までとは全く違つた、更に烈しい不愉快さを、新しく島田に對して抱かざるを得なかつた。實際、一寸やそつと嚇かされた位で、直ぐ樣、意氣地なく凡ての事を喋つたおかげで、自分一人先へかへれば仲間の迷惑なんか、如何でも好いのだらうか。まさか如何でも好いとは思ふまいが、少とも喋られたこつちは好い面の皮だ。無論、島田の大言壯語を信用して餘計な事を頼んだのが、私の手落だと云へばそれまでだが、然し、それにしても、好くまあのこのこ先へかへれたものだ。淺黑い顏と、高い鼻と、きよろりと光る濁つた眼と、强く聳かした肩とを持つた島田の姿が、如何に悄然と脊ざめてゐるにもせよ、一人のこのこと警視廳から出て行く處を想像して、私はたまらないほどの不愉快に打たれざるを得なかつた。

「今までの處吾々の仲へ入つて來た、學生連中は、「どう云ふものか一般に駄目ですよ。普段、隨分しつかりしてゐるつて云はれてゐる男でさへ、いざとなるとまるで手頼りにならなくつて」

暫時すると山岡が、不圖思ひ出したやうにこんな事を云つた。無論、島田の事で不愉快になり切つてゐる私の心を慰めやうとする氣持も、幾分は手傳つてゐたらしい。

すると直ぐ樣それに應じたのは西里だ。

「だからおれは普段から學生つて奴は大嫌ひさ、親の脛を嚙つてゐるおかげで一寸ばかし理屈を覺えたと思ひやがつて直ぐ偉さうな面をしやがるからな。彼奴達が本で習つた理屈位、おれ達勞働者は平生の體驗で教へられてらあ」

昨夜、ロシアの盲詩人に喰つてかかつた男と略同じやうな事を云つて西里は昂然として肩を聳かした、その顏には何時か抑へ切れない反感が、如何にも不愉快さうに溢れてゐた。

「第一、彼奴達が吾々の運動へ入つて來た最初の動機が、そもそも疑問なんだ、正義のためとか何とか口では利いた風な事を云やがるけど、事實大部分賣名のためだ。自分の名が一寸でも新聞に出た事を、非常に望んでゐるのでも解りますよ。一と晩でも檢束されると、歸つて來てからおれの事何と出てゐたなんて事を云ひやがつて、何よりも先きに新聞を見たがる連中ばかりですからな。要するに近頃大分社會主義が流行るからおれも一つ社會主義で名を揚げやうてな事しか考へないんですからな全く遣り切れねえや」

西里は嚙んで吐き出すやうに云ふと、その小柄な體を一と揺り揺つてぐつと天井の隅を見上げた。そして頰骨の出つ張つた淺黑い顏には、何時か寂しさうな微笑の影が動いてゐた。その微笑は學生達に對する單なる階級的・感だけではなく、ほんとうに充されざる寂しさから湧いたものだと云ふ事がその時の私にはつきり解つた。それが私の心を尚更淋しくさせたのは云ふまでもない。

「全く學生なんて奴は元來主義も主張もありやしねえんだ。唯、流行を追つてゐるばかりなんだからな」

山岡が横からこんな事を云ふと、西里は更にその不愉快を煽られたものか、一層語氣を強めて實を續けた。

「全くだよ。嶋田見たいな奴はね。軍國主義が流行れば軍國主義に、キリスト教が流行ればキリスト教に、又、大本教が流行れば大本教に、何時でも早變りの出來る奴なんさ、そのくせ口の先だけでは吾人は勞働者の味方であるなんて、大きな事を云やがつて、……ふふん、味方だか、敵だか、解るもんかい」

「つまり吾々勞働者を踏み臺にして、賣名をやるか、金もうけをやるか、あわ好くば兩方一度にものにしやうつてえんだから、怖れ入るよ。現在の勞働者があんな奴の喰ひ物にされてたまるもんか」

西里の胡座を搔いてゐる直ぐ側に、それまで腹ん這ひになつてゐた石上が、突然起き上つてから云つた。その顏には「自分達勞働者を喰ひ物にする人々に對する「憎惡と反感」とが、どす黒いほどの色を帶びて湧き上つた。

嶋田の話が横へ反れて何時か私の最初の憤慨は一寸置き去りにされたやうな形になつたが、然し、そのために私は昨夜から頭の中に滯つてゐた問題の一部を解決されたやうな氣持がした。

つまりこれも要するに昨夜のロシアの詩人と一勞働者との論爭と同じく、「智識階級に對する勞働階級の反感」の一つの現はれにすぎないのだ。昨夜はあんな話題をきつかけにあんな調子で突然横鎗を入れられたために變に、不愉快にさせられた私も、かうして膝を突き合せて親しくこの人達の云ふ處を聞くと、流石に首肯しないわけには行かない。同一の運動に於ける勞働階級と智識階級の反目分裂は、果してどつちにより多くの責任があるのだらう。この運動が第四階級解放の運動である限り、今までの智識階級のとつて來た態度により多くの責任はないだらうか。少くとも勞働者を何等かの意味に於いて、自己のために利用しやうとした形跡はないだらうか」

こんな問題について、もう少し十分自分の考へをまとめて見やうとした時に、今まで靜かであつて留置場の中に思ひかけない闖入者に依つて、突然、搔き亂されて終つたのである。否、搔き亂されたと云ふよりも、むしろ異樣な沈默の方へ無理にも追ひ込まれたと云ふ方が好いかも知れない。

「かう滿員ぢや何處へも入れやうがないさ」

こんな聲が聞えたので、私がひよくり格子の間から覗いて見ると、外には骨組のがつしりとした若い巡査が立つて

ゐた。日に焦けて赤味を帶びた角顋を、きよろきよろさせてから頻り　あたりを見廻してゐる。私達が無闇に喋つてゐる間に何時かこの男が前の老人と交代したものらしい。見ると巡査の直ぐ後には見すぼらしい身裝をした一人の男が、膝を兩手で抱へながら、俯向き加減に蹲んでゐる。頭の毛が處々大きく抜け落ちて地肌が白く見えてゐるのが、うす暗い中でもはつきり解つた。

「困つたな」

巡査がぶつぶつ云ひながら四つの檻を見較べてゐると、その男は突然ぬうつと立ち上つて私達の方を覗いた。その時、私は始めてその男が癩病の、然かも見すぼらしい乞食である事を知つたのである。そして、それがあまりひどく崩れてゐるので、私達は思はず聲を出して呼ばざるを得なかつた程だ。

すつかり紫色に腫れ上つた顏は、腐り切つた無花果ところの騒ぎではない。一寸指先が觸れただけでも、どす黒く濁つた膿がぶつりと音を立てて噴き出しさうだ。殊に眉毛の跡さへもない額の下から、熟した巴丹杏のやうな眼球がぎよろりと赤く覗いてゐるのと、唇の左の端がすつかり崩れて曲つてゐるのが尚更、その醜い顏を一層不氣味ものに見せた。

「驚いたよ。大變な奴が舞ひ込んで來たものだね」

「何だつてこんな者を引つ張つて來たんだい。實に近所迷惑だね」

私達は思はず口々に大聲でこんな事を云つた。然し、當の癩病やみは何の苦勞もなささうなきよとんとして、平氣であたりを見廻してゐる。泥と垢とで汚れぬいた筒袖のぼろぼろになつた破れ目からは、その爛れよつた手足が尚ほ一層うづ汚く覗いてゐる。何だか側へ寄るとぷんと臭く匂ひさうだ。

「全く困ちやふね。大體、こんな者を警察へ引つ張つて來るのが間違つてゐるんだ」

巡査は顏をしかめて一寸その男を顧ると、如何にも困つたらしい苦笑を洩した。

「何で引つ張られたんだい」

「何でもね、ついそこいらの橋の袂で荷馬車の上へ置いてあつた半纏とかを盗つ摺つたんださうだよ。だけどねえ」君

こんな奴、その半纏さへ取り返へせば、蹴飛ばして他處の管轄へ追つ拂つて終へば好いんだ。それをわざわざ引つ張つて來るなんて、巡査もよつぽど如何かしてゐるよ」

かう云ふと若い巡査は再びいまいましさうな顏をしかめた。

「ねえ。君。そいつを社會主義者の中へ一緒に入れておやんなさいよ。」

その時、眞向ふの檻の中から五十幾位の聲でもつて、突然かう叫んだ者があつた。例の何とか社會の重役仲間も、先刻からの不遠慮な話し振りで、私達が社會主義者である事を何時の間にか知つたらしい。

「それが好いや。さうして今夜一と晩うんと困らせてやると好い」

又、もう一つの聲が、直ぐ樣、それに應じた。そして、みんなで如何にも嬉しさうにどつと笑つた。

「何を、ブルジョアー」

山岡がいきなり火のやうな聲で怒鳴つた。

「怒つてやがらあ。ハハハハ……」

向ふ側の檻からは更に嬉しさうに笑が溢れた。

「默れ。ブルジョア！」

「ハツハツハ……」

「おれ達は手前見たいな破廉恥罪たあ違ふんだぞ。莫迦野郎！」

「どつちが莫迦だい。吾々こそ貴樣見たいな貧乏人とは生れが違ふんだ。第一、社會主義なんてものは國家に毒を流す點で、癩病やみと同じぢやないか」

「生意氣云ふない。恥知らずの奴、貴樣なんか生れつきの泥棒ぢやないか。ブルジョア！」

「羨しけりやおれ達みたいに成つていろよ成りたくつたて成れまい」

「誰が泥棒なんかになるものか。莫迦野郎」

「…………」

「………………………………………」

相對せる二つの檻にいれられてゐる資本家と勞働者と、互に許す事の出來ない同志が、格子を隔てて云ひ爭つてゐるのを聞きながら、巡査は何時たゞにやにやと笑つてゐた。そして、その癩病やみをどの檻へ入れるのも、中の者に氣の毒だと云ふ風な氣持をはつきり顏に見せて、尙一人で迷つてゐる

「向ふは五人もゐるし、その前は女だし、全く困つたな」

巡査は獨語のやうに又こんな事を云つた。そして、再び私達の檻と資本家達の檻とをじろじろと見較べた。

「大丈夫だよ。おれ達の中へは一緒に突込みやしないから」

巡査がどつちへ入れやうかと迷つてゐるやうな様子を見ながら、西里が、小聲でこんな事を囁いた。それでも私は矢張流石に不安だつた。若しこのまま否應なしに癩病やみの乞食を一緒に突つ込まれたら、實際のところ堪つたものではない。觸れば膿の出さうな體と、呼吸の詰りさうな臭と、すつかり崩れて人間らしい形を失つてゐる顏と、殊に、熟れた巴旦杏のやうに飛び出た眼球で絶えず側から脅かされたら、例へ一分間でも我慢の出來た話ではない。それをこれから先　幾日も幾晩も續けなければならないとしたら、全く如何したら好いのだらう。自分はまだ光明居室でもない。セント・ジュリアンでない、だからどうにもこれだけは御免だ。……は實際、心の底からから思はないわけに行かなかつた

「だからその時、向ふ側の檻にゐる資本家の一人が巡査に向つて又々にやにや笑ひながら、

「君、君、元來社會主義者てへものは困つてゐる人間の味方をするのが商賣なんでせう。だからその乞食を一緒に入れておやんなさいな」とへらず口を叩いた時には、それまで默つてゐた私も思はず荒々しい聲でもつて怒鳴りつけざるを得なかつた程だ。」

「貴樣達こそ癩病やみと一緒に寢ろよ。さうしてみんな癩病になつて死んぢまへ。ブルジョア!」

私の後について直ぐ樣から云つて怒鳴りつけた石上は、更に巡査に向つて

「癩病つて傳染病だねえ。君」

と、駄目を押すやうに訊き返した、すると巡査は一寸の間何事かを考へてゐるらしく首を傾げて、まじまじと私達の顔を見てゐたが、やがてにやにやと如何にも嬉しさうな微笑を見せたと思ふと、

「さうだよ。癩病は傳染病、君達は宣傳病でどつちも十分隔離して置く必要があるからね、まあ一緒にするのは止して置かう」と、云つて、又くすくすと笑つて見せた。そして、そのまま向ふ側の資本家達の檻の蓋を開け始めた。

それを見ると中にゐる人々は、すつかり悄氣返つて終つたらしい。先刻まで見せてゐた小生意氣な樣子とは全然反對に、聲さへも忽ちみじめなおろおろ聲に變つて行つた。

「旦那。それだけは勘辨して下さいな。ねえ、旦那。後生ですから、ねえ、旦那」

「狹くつてもうこれ以上入りやしないんですから。ねえ。旦那」

今まで巡査に對して私達同樣、「君」「君」と呼んで見たり、せいぜい丁寧な時でも「あなた」としか呼びかけなかつた資本家達は、何時か俄かに「旦那」「旦那」と云ふやうになつた。そして、幾度も「旦那」「旦那」をくり返へして、拜まんばかりに哀願した。然し、巡査はそんな事にはおかまひなしに、どしどし前の檻の蓋を開けて、癩病やみの乞食を中へ追ひ込んで終つた。それを見た私達が思はず聲を揃へて、勝利の叫びを揚げたのは云ふまでもない。

「ざまあ見やがれ、ブルジョア！」

「ブルジョアの罰當り奴。うんと癩病をうつして貰へ」

「手前達もそのうち顏が崩れるのか。何より愉快だな」

みんなは口々にこんな事を云つて、如何にも愉快さうに拍手さへした。そして、如何にも小氣持好いと云はぬばかりにしばらく又わざわざ格子へつかまつて、向ふ側の格子をじろじろと覗いてゐた。

「氣の毒だが　他が空くまでしばらく我慢してくれたまへ。この通り一杯で何處へも入れる處がないんだから。それにここでは女とは絶對に一緒に置けないんだし、社會主義者の連中は連中で別にして置く必要があるんだからね」

最後に巡査も流石氣の毒になつたものか、資本家達に向つて、更めてこんな言ひ譯をしてゐた。その言葉は實際單に口先で並べただけのものではなく、たしかに十分に氣の毒さを中に含んだものだつた。だが資本家達はどうしたのか一

と言もそれに答へやうとはしなかつた。恐らくその汚く醜い闖入者に心の底まで脅かされて、息さへも思ふやうにつけないほどの氣持になつてゐたのだらう。

癩病騒ぎのおかげで一とはしやぎはしやいだ私達の檻も、日が暮れかけた頃から、俄かにひつそりとなつて終つた。何故と云ふに、私以外の人達　後から來た三人の人達は、日沒と同時に檢束を解かれて揃つて歸つて行つたからだ。私一人はとうとう後に殘されたのだ。電燈もつかない部屋の中で、一人ぽつねんと蓆縁の上へ横になつてゐると、又昨夜の論爭の事や、島田の事や、旗の事や、二十九日の拘留の事など、又新しく心の中に甦つて來た。一人になつたお蔭でついそんな事を考へざるを得なかつた。だが鳴田の事なんかもう如何でも好い。又、二十九日の拘留だつて、喰はされるものなら止むを得ない。否、いよいよさう決れば誰かが金を持つて受けに來てくれるに違ひない。一日一圓の割で拂へば好いんだから。……からは思ふものの、矢張その事が變に氣にならざるを得なかつた。「起訴か、不起訴か、決定しないうちは一番いやだ」と誰かに聞かされた事があるが、成程さうだ早くどつちかに決まれば、それだけ早く氣持も落ちつくだらうに、……私は一人こんな事を考へて、ぼんやりと羽目板を見詰てゐた。

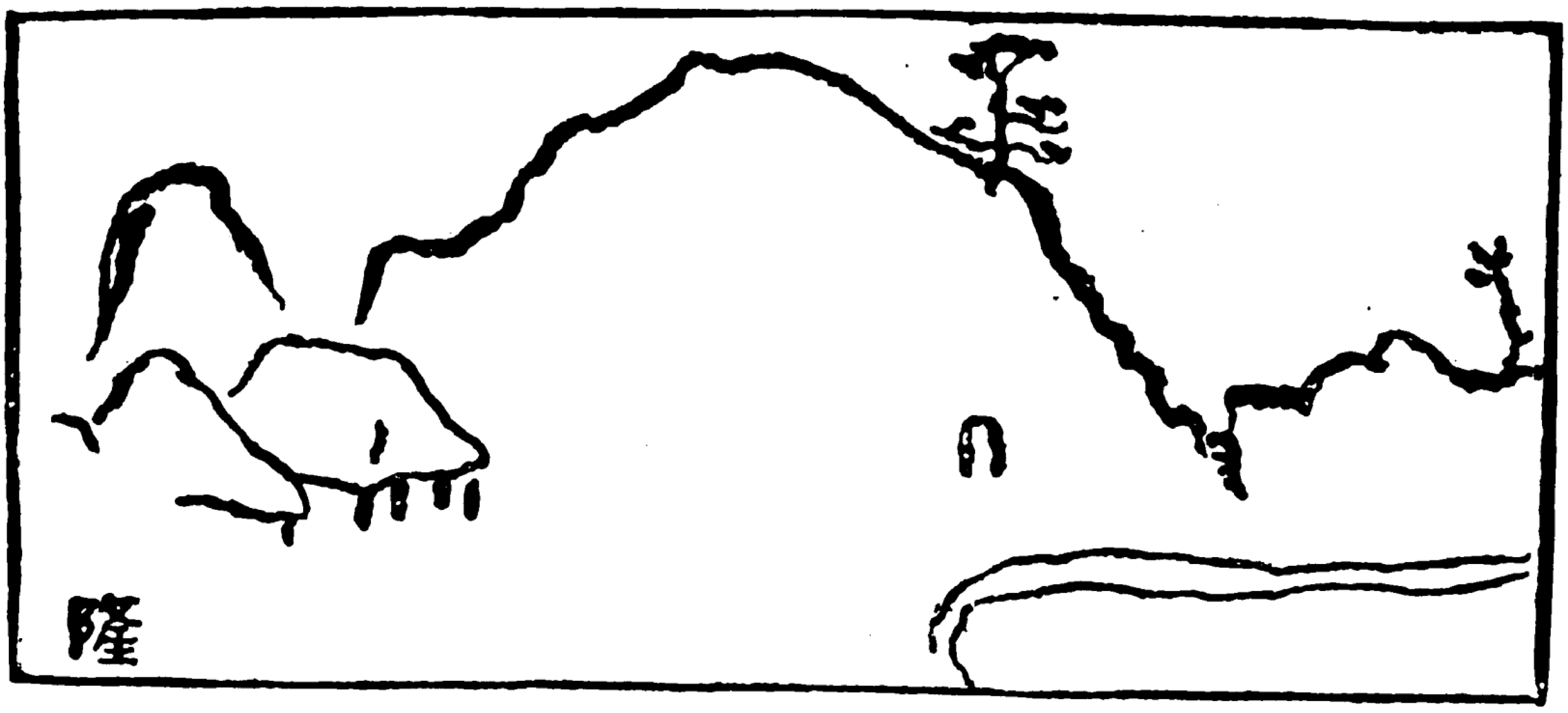
やがて日がすつかり暮れて終つた頃だつた。巡査がことこと音をさせて、檻の蓋の下の穴から、眞暗な中へ何かを大事さうに入れてくれた。

「先刻、歸つた連中がこれを君に差入れて行つたよ。さめない裡に早く喰べたまへ」

から云つたので急いで側へ行つて見ると、そこには二つの丼が置いてあつた。蓋を取ると中から暖い湯氣の騰つて如何にもうまさうな匂がぷんと強く鼻を打つた。うどんかけだ。私は何とも云へないほどの嬉しさに打たれながら、早速

二杯の丼を平げて終つた。

うどんの柔かな暖味が段々全身に滲み亘つた時、假令、二杯のうどんかけでも、無けなしの財布をはたいて差し入れてくれた勞働者達の心の暖味は、ほんとうにしんしんと強く私の心に滲みたのであつた。殊に、自分一人だけ逃げる事が出來れば、他人の事などはどうでも好いと島田などの事を思ふと、尚更であつた。そして、私は何時か涙ぐましいほどの氣持になつたのである　（一一・九・一二）



百花村物語（承前）

佐藤春夫

秋公には撒き散らされた花をそのまゝにして置くことが堪えられなかつた。落ちてゐる花びらを進みよつて一つ一つ手に拾ひ取つて集めた。踏みにぢられてあの五色の色も褪せ傷いたものどもは泥土のために汚されて了つた　秋公の心は裂けがするほど悲しかつた「花よ。私はお前をいつくしみ守つて今日まで花びら一枚葉一枚さへ傷けたこともなかつたのに、どうして今日こんなひどい目をお前たちに見せてしまつたらう。」涙が再び湧いて來て秋公はひとりで泣いてゐた。ふとその時うしろの方で人聲がして「お爺さん。どうしてそんなに泣いていらつしやるのです」と言つた者があつた。ふり返つて見ると、そこには十六ばかりの少女の見目美しいのがすつきりとした裝をして立つてゐるのである。見たこともない少女でどこの娘ともわからなかつた。秋公はやつと泣くのをやめてたづねた「お嬢さん。あなたはどこからお出でなすつた？　一たいまた何の御用です。」少女は答へた「私は御近所のものので、御庭の牡丹がちやうど花盛りだと伺つたものですから、それを見せて頂きたい

と思つて伺つたのでした。もう散つた後だとは存じませんでしたから。」秋公は牡丹と言ひ出されて覺えずもまた涙がこみ上げて來た。すると少女が言ふには「あなたは何がそんなに御心配でお泣きになるのです。」そこで秋公は張委が花を折つてしまつた一部始終を話すと少女は笑ひながら言つた「そんなことならその花がもう一ぺん枝にくつつけばいいのぢやありませんか。」「お嬢さん冗談ならばおやめなさい。一たん散つてしまつた花がもう一度枝にくつつくらゐなら誰も泣きはしないのです。」「ところがね、私のうちでは昔から散つた花をもう一度枝に咲かせる術が傳はつてゐるのです。私は幾度もやつて見たこともございますが一度だつてやりそこねたことはありませんわ。」秋公の悲しみは喜びに代つて來た「あなたはほんとつにそんな術を知つてゐるのですか。」「何の嘘なことがあるものですか。」そこで秋公は地面に跪いて頭をすりつけて拜んだ「本當にそんな術があるとおつしやるのなら、どうぞ一つやつて見て下さい。私は何の御禮も出來ないけれどもその代りには新らしい花が咲く度にいつでもあなたをお招きして見ていたゞきますから。」少女が言うには「そんなに拜むのはおやめなさい。それよりはお茶碗に一ぱい水を持つておいでなさい。」秋公は大急ぎで水を取りに走つた。が、考へ直して見るのに一旦散つた花がもう一ぺんもとの枝に咲くなどゝそんな法がある筈はない。これはてつきり自分があまり泣いてゐるので、笑にまぎらせようと思つてこんなことを言つたのかも知れない。さうだ、そんな理に合はぬことを言ひ出されながら何だつておれはまた信用をしたのだらう。と、さう思ひながらも茶碗に水を入れて秋公は歸つて來た。水を渡さうと思つて首を上げて見ると、もうその少女はゐなかつた。で、花は？と見るとこれは殘らず枝の上に返つてゐる！　地には拾ひ殘された花びら一つなく、枝の花は以前には一本について一色であつたものが、今度は赤い花びらのなかへ紫のがまぢつたり、淡いもののなかへ濃いのが入れ混つたりして、一つの花が五色の色で取合されてゐて、前のものよりももつと美しかつた。それにしてもこんな珍らしい妙術を知つてゐるあの少女はどこへ

行つたらうか、多分はまだそこらの庭の樹の間にでもゐるのであらうと、秋公は水はそとへ投げ出したまま捜しに行つた。ぐるぐると庭中を歩きまわつたがどうしても見つからない。そこでもう外へ出て行つたものと思つて、秋公は庭の小徑をいそぎ足で門のところへ行つて見たが、門はさつき近所の人たちが閉めて行つてくれたとほりに閉まつてゐた。門をあけて外を覗いて見ると、折からそこには二人の老人がしやがんでゐて、これは何れも近所の人で一人は盧公、一人は單公で漁師が湖畔に網を干すのを見てゐるところであつた。彼等は秋公の出て來たのを見ると思ひ合せたやうに起ち立つて拱いたままの手を擧げて會釋をしながら言うには、「聞けば張公子がひどい難儀をお掛けしたといふぢやありませんか。私らは野良へ出てゐてつひお見舞も出來ませんでしたが。」秋公は答へた「私をあんなひどい目に合せた悪者どものことは言ひ出して下さるな。それよりは不思議な術でわたしの花を助けてくれた娘はお禮の一言も聞いてくれずに歸つてしまつたのです。お前さんたちはその子がどつちの道へ行つたのか氣がつきませんかね。」「えツ？散らされた花が元のとほりになる術ですつて。」二人の老人はびつくりしながら問ひ返した「で一たいその娘が歸つたといふのは何時のことです。」「つひ今のさつきですよ」「はて、今のさつき。私たちはさつきから此處にかうして居るのだがその女の子どころか誰一人ここを通つた人は無かつたが、なあ。」さう言はれて秋公はふといみぢく思ひ當るところがあつた。そうして言つた「これやひよつとすると仙女が天降つたのぢやなかつたらうか。」「と言つて一たいどんなことをして花を助けたのです。それが聞かして貰ひたいものだが」二人の老人がさう問ひだした。秋公はそこで出來事の一とほりを話して聞かせると、二人の老人は言つた「何と不思議なこともあるものだ。私たちにも一つその花を見せてはもらへないでせうか。秋公が門をあけると彼等は走け出した。「不思議なことだ、不思議なことだ」と二人の老人は交々言ひつづけながら「これやてつきり仙人に違いない。でなけや誰がこんな法力を持つてゐるものか。」秋公はそこで香爐を取

出して好い香を焚き天を拜んで御禮を申し上げた「かういふこと〔が〕起るといふものも二人の老人が秋公に言つた「これも皆あなたが日頃から眞心こめて花を愛してゐるといふので神さまが天降つたに違ひない。明日にもなれば例の張公子でも引ぱつて來てこれを見せつけて愧ぢさせてやつたがよい秋公は答へた「いやいや飛んでも無いことだあんな惡い犬のやうな人たちにはなるべく遠くから用心をしてゐればいいので、もう一ぺん連れ出してかかり合ひにならうなどとは思ひも寄らないことだ』なるほどそれはそれに違ひない」二人の老人もそれに和した。秋公にもう嬉しくて仕方がない折からだから、早速先刻の未だ飮み殘してゐた酒甕をもう一度持ち出して、二人の老人を相手に花の下で夕方になるまで酌み交した。二人の老人が歸ると一緒に、彼等が傳へたものだからこの話は直ぐに村中に傳はつた。この話を知つた人たちは明日になつたら是非自分たちもそれを見たいものだと思つた。だけれども例の秋公の事だからきつと見せてはくれまいとも案ぜられた。ところが秋公はといふと、一たいこの人はもともと然ういふ考だあつたが上に一度神仙が天降つたのを目のあたりに見たものだから、どうかしてこの世俗から離れたい考がしきりに起つて、その爲にその晩は花の下に座つたきり、たうとう一晩考へ明したほどであつた。さうして張委のことを思ひ合してゐるうちにはたと悟つたことがあつたのである。これといふのも自分は普段からあまり心が狹かつたからその罰にあんな侮辱を受けるやうなことにもなつたのだ。もし初めから神仙のやうな自由をひろびろとした心を持つて居て人の見たいといふのを拒んだりなどしなければ、あんな事がもち上りもしよう筈がなかつたのだ――とかういふ風に考へた秋公はさう氣がつくと直ぐさまその朝、庭の門をすつかり開け放してしまつた。見たい人には誰にでも見ようと思ひ立つたのである。ちやうどそこへ數人の人たちが様子を探りに來て見ると、秋公は花に對ひ合つては坐つてゐたが人人を見つけてそれぞれに言ひかけた「さあさあ、勝手に這人つて見なさるがいい。ただ花だけは折らないやうにしてね。」人人はか

う言はれてはそれぞれに到る處でそのことを傳へた。村中のものはこれを聞いて誰も彼も來て見ない者はなかつた。

張委は次の日の朝になると家來のものどもに言つた「昨日はあの老ひぼれ奴に衝き倒されてそのままいい加減にした來たが、どうしてももう一度あいつの庭へ押しかけて行かなけりやならない。皆行かう。あいつが素直に言ふことを聞かないとなつたらあいつの木を殘らずたたきつぶしてくれるのだから。」すると皆の者が言つた「あの庭はお屋敷からは遠くもなし、爺が何と言はうが構ふことがあるものですか。時々押かけて行つて見物するには、昨日もさんざんにして來たのですから少しは殘して置いた方がよくはありますまいか。」「何を言つてゐるのだ。そんなことすれや來年また花が咲くのが忌々しいわい。さあ早く行かう。ぐずぐずしてちやあいつに先手を越されるぢやないか。」張委がさう言うものだから皆も一度に立ち上つて村の方へ出かけた。途中で彼等は、秋公の庭へは仙人が現はれてたたき散らされた花はもとの枝へくつつき直つて、五色の花びらは入り混つてゐるといふ噂を聞いた。しかし張委はそんなことには取合はなかつた「あの老いぼれ奴のどこが氣が利いてるつて仙人が出て來たんだい。ちやうど我々が花をたたき散した折を見計らつてさ。仙人を家に飼つて置くわけぢやあるまいし！　これやてつきり我々を喝さうと思つてゐやがるのだな。こんな話をふれ歩いて仙人が自分の身方のやうなことでも吹聽すれやこちらで怖氣がさして手を引くと思つてゐやがるのだ。」「なるほど、これや若様の仰言るとほりに違いない」皆のものもさう相鎚を打つた。

しばらくして秋公の家まで來て見ると、門は大きく兩開きにあけてあるし、男女が引きもきらずにどやどやと出たり入つたりしてゐる。何もかも噂のとほりである。「一たい本當にそんなことがあつたのか知ら」張委の家來どもはさう言ひ

出した。けれども張委は言つた「そんな事はどうだつて構ふものか。仙人がついて居るとしたらどうした 言ふのだい」人のなかをうねりねと掻き分けてやつとあの牡丹の前へ出て見ると、果して噂は嘘ではなかつた。この花は一層怪しむべき事には、見物人が來れば來るほど益々美しさを加へてちやうど人を見て笑ひかけでもするかと思へるやうであつた。張委は心中では大變に驚き怪しんでは居るものの、さればと言つてこの庭を自分のものにしてやらうといふ野慾な心持には少しのかわりもなかつた。一とほり見て居ると張委の胸には忽ち一個の甘い考へが思ひ浮んだ。そこで張委は人々に向つて言つた「さあもう歸らう。」門を出てから人々は尋ねた「若様どうしてあなたは彼奴に庭をよこせと仰言らなかつたのです。」「俺にはうまい考へがあるのさ、もう彼奴と押問答するにや當らないのだ。この庭は明日から俺のものになるのだよ。」「何だつて又そんなうまい法があるのでせう。」家來の者たちがびつくりしてゐるのを見て張委は言つた「お前たちも知つての通り、今、貝州では王則が謀反をしてゐる、彼奴らは專ら妖術を使ふといふ事だ。それ 政府では天下に布令をして嚴しく取締つて、妖術使ひがあれば召取つて居る。又それを密告したものには三千貫の賞金がかかつてゐる。散つた花を元の様に返したといふのを證據にして俺は、明日にも、張霸を役所へやつて訴へさせるのだ。彼奴は妖術で人を惑してゐるのだから、あの老ぼれ奴は釜熬りの拷問を受けてどうしたつて牢屋へぶち込まれる。それから庭は役所から公賣にされる。その時になつて誰が買ふことが出來るものか。手に入れるのは言はずと知れたこの俺さ。おまけに三十貫がうまうまと手に入らうといふものだ。」「成る程！　これは見事な計略だ」と家來たちも聲を揃へて言つた何事も急ぐに越すことはないといふのでその足で直ぐさま町へ出て訴狀を作らせた。

その次の日には張霸が平江府の役所へ出頭して秋先を訴へた。張委は家來のうちでも張霸が最も氣の利いた男だと信頼してゐるので特にこの男を使にしたのだ。

役所では妖術使ひを召捕へる役人を用意してある折から、この訴を聽いて、村中の者が皆これを見たといふからには張覇のいふのを信じなければならない。そこで捕吏を差し向けることになつた。張委は前以て捕吏に金をやつて置いたから幾人かの下役を從へた捕吏が張委を上役に仕立てて秋先の庭へ闖込んで來た。秋老人はやつぱり花を見に來た人たちだと思つて別に氣にも留めなかつた。彼等は突然掛聲を上げると一時に秋先に襲ひかかつて引捉へた。秋公はあまり唐突な事にびつくりして暫くは口も利けなかつたが、やつと言つた「私に何の罪があるのです。皆さんそれをお聞かせ下い。」役人たちは口々に「この妖術使め」「謀反人め」と罵るばかりで一向秋公の申開きを聞かうとはしなかつた。ただ秋先を引立てて門から曳き出して來た。それを見た近所の人たちもびつくりしない者はない。皆一度に進み出てその罪を詰つた。「貴樣たちは未だそんな事を尋ねるのか」役人はさう言つた。「彼奴の罪は輕いものではないぞ。村中のものが加擔してゐるといふ疑さへある。」から脅しつけられた憐れな人達は卷添へでも喰つちや大變だといふのでびくびくして逃げ散つてしまつた。只、虞公と單老人とそれに日ごろ親しくしてゐる幾人かの人だけが曳かれて行く秋公の後を追うてついて來た。

張委は秋公が連れ去られて行くとすぐそのあとから、家來を幾人かつれて秋公の庭へ來て自分のもののやうに庭の門を閉めたが、庭のなかに未だ人が殘つてゐてはいけないと思つたものだからもう一度一とほり庭のなかを改めて見てから門を閉め直した。かうして置いて大急ぎで役所へ出て見た。

法官の前には秋公が曳き出されて簀の上へ這ひつくばつて居る。秋公は自分の傍にもう一人自分と同じやうに平伏してゐる人間があるのを見たけれども、この自分を訴へ出た者は誰だか見わけがつかなかつた。張委から賄賂を貰つてゐる獄卒はさまざまの責道具を持ち出して法官の側に控えてゐる。法官はやがて大きな聲で言つた「その方は一たいどこ

の妖術使ひだ。何故に敢てこの地方へ來て妖術を以て民を惑にすやうなことをするか。その方の共謀者は幾人であるか。素直に申し上げるがよからう。」かう言はれた秋公は暗闇で鐵砲を聞いたよりも驚いた——一たい何事が起らうといふのだらう。秋公はそこで申し述べた「私は家代々長樂村に住んでゐる者で、又決して妖術使ひなどでは御座いません。妖術とはどんなものであるかも存じないのです。」法官は言つた「その方は昨日妖術で以て散つた花を再びもとの枝に返したではないか。これでも妖術を知らないと言ふのか。」法官からかう言はれたのでやつと張委に謀られたのだと思ひ當つた秋公は、張委が自分の庭を欲しいと言つたことや花をたたき散らした事や、それから仙女が天降つた事などを、事細かに一とほり法官に訴へた。しかし法官はそんなことには一向耳を假さうとはしなかつた、ただ笑つて聞き流して言つた「澤山の人は若い時分から神仙の道を慕つて年老いるまで修行をして、それでさへもなかなか仙人に遇つたなどといふ例は尠ない。お前がただ花の爲めに哭いたぐらゐのことでどうして仙女が現れる筈があるか。若し本當に仙女が現れたといふからにはその名前ぐらゐは明して行つたであらう。それさへも言はずに立ち去るなどとそんな迂散な言ひ草があるか。これこそまさに妖術使ひだ。」さう言つて獄卒どもを呼んだから、待ち構へてゐた獄卒たちは直ぐさま進み出て虎狼のやうにむごたらしく秋公をひつ捕へて、あとす去りをする秋公を無理やりに拷問の臺の上へ曳擦り上げた。獄卒たちが秋公を締め木にかけやうとした時、法官は急にぐらぐらと激しい眩暈を覺えて危く卓の下へくづ折れてしまひさうになつた。頭のなかと目さきとがくらんでしまつた法官はもうそのまゝ我慢をして座つてはをられなくなつた。そこで法官は獄卒に命じて秋公を締め棚に掛けさせて一先づ牢へ入れて置いて、明日改めて取調べをすることにした。

　獄卒は泣いてゐる秋公を引つ立てて外へ出た。秋公はひよくりと張委を見つけたので呼びかけた「張公子、いつどんな怨を受ける覺えがあつて、私をそんな殘酷な手にかけて命まで取らずに措かないといふのだ。さあわけを聞かう。」し

かし張委は無論答へなかつた。張霸やその外の一味の悪者どもと一緒にそ知らぬ顔をして立去つてしまつた。閔公と畢老とこの二人の老人だけは秋公のそばへ近づいて來て事の次第を聞いてから言つた「そんな不法なことがあつてたまるものか。私たちは明日にもなれば村中の者一同でお役人へ手紙で申立てをする相談をしよう。心配をしないようになさい。」秋公に泣きながら「どうぞよろしく賴みます」と言ひかけると、獄卒は叱鳴りつけた「この死刑囚め！さツさと歩かないか。いつまでめそめそ泣いてゐやがるのだ。」秋公は目に涙をためたまゝで牢屋のなかへ這入つてしまつた。

近所の人々は彼に食物と飲物とを贈つてよこしたけれども、獄卒たちが皆それを横取りしてしまつたから秋公は何も食べられなかつた。夜になつたから彼は囚人の床の上へ身を横へて見たが、これは全く活きてゐる死人と同じことで手足一つ思ひどほりに動かすことも出來ない。ただ苦しいこころだけは自由に動いた。さうして考へるには――「あの花をお助け下さつたのはどんな仙人であつたかそれが解らない。そこに自分はつけ込まれてこんな目に逢ふことになつた。ああ仙人さま。どうぞ、もしこの私を秋先を可愛相だと思召すなら、どうぞ私のこの命をお助け下さい。私こそ今、無殘な手に折り取られて路ばたへ投げすてられた花のやうなものです。どうぞ私の命をお助け下さい。さうすれば私はもう家などは見棄ててしまつてほんとうに「道」の教に身を捧げませう。秋先がこのやうに思ひつめてゐるその時であつた。ふと見ると昨日の仙女がしづしづと自分の方へ歩み寄つて來るのであつた。秋公は慌てて大聲で叫んだ「おお、仙人さま、どうぞこの可愛相なものを秋先をお救ひ上げて下さい。」すると仙女はにつこりとして言つた「あなたはさぞこの苦しさから逃れたい事でせう。」さう言つて進み寄りながら指を一本擧げると秋先の手錠はばらばらになつてひとりでに解け落ちてしまつた。秋先はそこでその仙人の方へに這ひずりながら進み出て額を地につけて言つた「仙人さま。どうぞお名前をお明し下さいませ。」仙女は答へた「私こそ瑤池の西王母に仕へてゐた花を司る娘です。あなたの花を惜し

む眞心に動かされて一たん散つた花を私が再び咲かせて上げたものを、それが思ひがけなくも心の拗けた者どもに無實の言ひがかりの種にならうとは！　あなたは不仕合せに出合つたのです。けれども明日になれば逃れられることでせう。張委は花を傷めた上に人を害した。花の神はもうそのことを天帝に申し上げてあります。あの人の命數はもう縮められたし、惡事に加勢をした者どもにも今に天罰が下ることでせう。ただあなたは一生懸命に今の志を固くして修行をなさるがいい。幾年かの後にはわたしもあなたのためにいいやうに取計らつて上げたい。」秋先は再び地に額をすりつけて、どうしたら仙人になれるだらうかといふことを尋ねた。仙女が言うには「仙人になる道筋はそれこそ澤山ある。しかしそれぞれ人の性質に從ふのが一番いい。あなたはもともと花が好きだといふが取柄だから、その花の道で仙人に成る方法がいい。ただ花びらばかり食べるやうになさい。そのうちには體が輕くなつてひとりでに地上から離れられるやうになるでせうから。」かう言つて仙女は花びらの食べ方を敎へた。秋先は平伏してお禮を申し上げた。さうして再び頭を擡げて見ると、もう少女の姿はもとのところには見えなかつた。あたりを見廻すと仙女は獄屋の塀の上に立つてゐて彼を手招きして呼んでゐた「あなたも私と一緒に上つてゐらつしい。」秋先は直ぐさま塀を攀ぢ始めた。しかしどんなに焦つてもなかなかその半分も上ることは出來なかつた。もう力が盡きさうになつた。それでももう一息で上までとどきさうになつた。その時、突然に銅鑼の音が鳴り響いて人が叫んだ「妖術使ひが逃げ出した。早く起きてつかまへろ。」秋公はもう氣が氣ではない手はしびれ足は萎えてしまつて、彼は塀から地面へどしんと落ちてしまつた。と思ふと、はつと目が覺めた。秋公は自分の身はやつぱり四人の縲絏のなかにゐるのに氣ついた。しかし夢のなかのことを思ひ出して見ると一つ一つの言葉まではつきりと覺えてゐる。何となくすべての事が彼に都合よく行くやうな氣がして、自分に疾しい事さへなければ天は何もかも知つてゐてくれるやうに思へて心がいくらか落ち着いた。

張委は裁判官が秋先を妖術使ひとして認めたものだから、自分の計畫が圖に當つたと思ふともう喜んでも喜びきれない程であつた。「あの老爺め實に頑固な唐變木だつたが、今晩は定めし牢屋の寢牀の上でさぞいい夢を見ることだらうて！さすがの花守もかうなつちやもう我々の酒盛の邪魔は出來まい。」張委がそんなことを言ふと仲間の者たちも言つた「この前の時は庭が彼奴のものだつたから存分な愉快を盡すことも出來なかつた。今日こそは一つ大がかりに底拔け騷ぎをやつてやらうぢやありませんか。」「よからう！よからう！」と張委も言つた。そこで一同は町を出て、家來たちに酒と肴との用意をさせ秋公の庭へ來ると門を開けてそのなかへ這入つて行つて。近所の人たちは張委の姿を見て怪しからぬことに思つてゐるが、皆その威勢に悁れて唯一人口を利かうといふ者もなかつた。仲間の者たちを引きつれた張委はすたすたと草菴の前まで這入り込んで行つた。來て見ると牡丹の枝には、これはまたどうした事であらう、花は一つもなかつた。さうして花は昨日たたき散らされた時のままめちやくちやに地上へ散り敷いてゐる。一同は怪しみ驚いたが張委は言つた「それ見ろ、あの老爺めやつぱり妖術使ひだつたのだ。でなけや僅かの半日のうちにさうたびたび散つたり咲いたりしちや花だつて忙しすぎらあ。それともまた仙人とやらが天降つて花を散らしたいといふのかな？」すると手下の一人が言つた「これや若しかすると彼の老爺めあなたが花を見にお出でなさることに氣がついて例の妖術で意地惡く花を散して置きやがつたのかも知れませんぜ。」「よし。それならそれで一つ散つた花を肴に飮んでやるわい」張委はさう言つて直ぐに地面へ毛氈を敷かせた。それから思ふ存分に飮み暴れた張委はこの事件に特別骨を折つた氣に入りの張覇には酒を二瓶も餘計に飮ませた。太陽が西に傾いたころには仲間の誰一人として醉つてゐないものはなかつた。この酒盛の最中に、突然大風が吹いて來た。庭の草木はまるで水の面の浮草のやうに搖れだし松の森林のやうに鳴りひ

びく聲は虎の群が嘯くやうに物すさまじい。地上に散つてゐる花びらをこの風が吹き上げた。吹き上げられた花びらはぬつくりと起ち上つた、と思ふと、それは丈一尺ぐらゐの小さな女になつてゐた。「やあ！　これは？」と皆は一度に叫ぶか叫ばないうちに、この小さな女たちは風に煽られてむくむくと恰も風に吹きふくらまされたやうに、丈が伸び上つて、顔容は美しく目に眩しいようなあでな衣物に包まれて、かがやくばかりに、円く輪になつて突つ立つた。悪者どもはこの少女たちの美しさに目を射られてぼんやりと立ち竦んでしまつた。すると少女たちのなかの燃えるやうな色の着物を著たのがほかの少女たちに對つて言ひ出した「姉妹たちよ、わたしたちはここにもう何十年もゐて秋公からどんなに手篤く愛せられて來たことでせう。こんな賤しい者どもに恥を蒙つて、むざむざ折りくだかれやうなどは夢にも思はない事でした。秋公はこの者どもの悪だくみに陥つてここはこの者どもに横取りされるのです。仇はいま目の前にゐるではありませんか。さあ皆さん、力の限りこの者どもを討ち懲らしませう。秋公への恩返しです。自分たちの恥を雪ぐのです。」他の少女たちも一度に叫んだ「さうです。妹よ、よく言つた。さあ早く逃してはなりません。言ひも終らないうちに少女たちは風に吹き飛ばされる袂を長旗のやうに飜して迫り寄つた。骨まで氷るやうな寒けがして「お化けだ！お化けだ！」と叫びながら人々は逃げ惑うた。座にあつたものなどは蹴り飛ばして友達などには目もくれて居らない。或る者は石に蹴躓いて打倒れる。或る者は樹の枝に顔を引裂かれる。倒れては起き上り、起き上つては打倒れ騒ぎは容易にやまなかつたが、やつとの事に收つたので、さて人の頭數を數へて見ると張委と張覇とだけが足りない。大風はもうやんでしまつたが日は全く暮れきつてゐた。悪者たちはともかくも一先づ命からがらで家にかへつたが頭を抱へたきりすごすごと立去つた。

彼等がやつとのことで回復したので、家來を幾人か呼び集めて灯をともして見えなくなつた人たちを捜すことになつ

た。急いで秋公の園へ行つて見ると、梅の大木の下で人のうなつてゐる聲がする。灯を差し出して見ると、それは張覇が梅の根つこへ躓いて打倒れて頭に怪我をして居るのである。彼ひとりでは立ち上ることも出來ないので家來二人に張覇を擔いで歸らせた。さうして皆はもう一人張委を見つけようと庭。しなかを一まわり捜し歩いて見た。しかし庭の中はただひつそりと靜まり返つて、牡丹の棚の下には花は元のとほりに咲き誇つて灯の光にもあざやかに輝いてゐる。さうして散つてゐる花びらなどは一つだつてない。草花の前には皿や杯がごたごたに飛び亂れて、こぼれた酒がぽたぽたと滴つてゐる。皆口をあんぐりさせて不思議なことだと言はない者はなかつた。さて彼等の一部は器具のかけらなどを掻き集めるし別の一部はまた明りをともして見てまわつた。庭と言つてももともと大して廣いわけではなし、三度も五度も見てまわつたのに、張委は影も形も見えないのであつた。皆は訝しがつて言つた「これや大風に持つて行かれてしまつたのぢやあるまいか」「それともあの女のお化けが食つてしまつたのぢやあるまいか。」何にしても一向どこといふ見當もつかないから。一先づこのまま引取つて、夜が明けたらばまた何とか考へるより外はあるといふ事になつた。さう決めて門を出ようとすると、折から別に提灯もつた一組がこの庭へやつて來るのに出逢つた。これは例の虞公や單老たちの連中であつた二人の老人は人々がお化に出逢つたことや張委の姿が見えないといふや皆が捜し廻つてゐるといふ事を聞いて本當かどうか試さうと思つて、近所合壁の人たちを誘ひ合つてここへ來合せたのであつた。張委の家來たちに聞きただして本當だと解つたので、二人の老人は今更ひどく驚いた。さうして歸らうとする家來たちを引きとめて「ともかくも私たちも皆さんと御一緒に念の爲めもう一度捜して上げませう」といふので、更に皆揃うて隅々まで一とほり、殘らずたづねて見た。皆はもううんざりしてもう途方に暮れ、それぞれに溜息をつきながら門から出ようとする時であつた。二人の老人は言つた「ところで皆さん。皆さんがもう今晩ここに御用がないなら私たちは門を閉めようと

思ふのです。何しろこの通り家は無人なのですから、私たちにも隣近所の務があります。」から言はれても強委の家來たちは、今はもう頭を砕かれた蛇同然で、今までのやうな無法なことをいふ勢もない　勝手にしろ。勝手にしろ。お前たちに任すよ。と答へるだけであつた。彼等は二組に右左へ分れたが、家來の一人が東の方の角まで來かゝつた時に不意に叫んだ「や！旦那だ！旦那だ！」そこで人々は皆そこへ集つて來た。するとその家來が楡の樹の枝にひつかゝつてゐるものを指さして「あの衣類は旦那のものぢやないか」「なるほどあれや旦那の手巾だ。あれがここにあるからには旦那もこのあたりだらう」人々はさう云つた。そこで垣根に沿うて灯を照して行つたが、幾足も歩かないうちに皆は思はず叫び聲を上げた。一たいこの東の角の引込んだところには糞溜(くそだめ)があつたのだが、その穴の中に一人の人間の二本の脚が空さまに突立つてゐた。ゆがみもせず倒れもせずそれこそ眞直ぐに、糞溜のなかへしつかりと根を生してゐるやうに見える。家來には靴下や着物の端でこれが張委だと云ふ事が判つた。そこで穢臭を我慢しながらひつぱり上げた。陳と單と二人の老人はただ口のなかで念佛を申してゐた。あたりの人たちも自然と集まつて來たが、張委の家來たちは溜の岸の方へ行つて主人を洗つてゐた。使ひを出して屋敷の方へ知らせてやつたものだから、屋敷中は皆泣き立てながら死骸の始末をしたが、そんな事はとにかくとして、あの張霸の頭の傷が其晩のうちにだんだん悪くなつて夜明け近くにはたうとう死んでしまつた。

氣分の直つた法官は、次の日役所へ出て秋先の事をよく調べようと思つてゐると、書記が、その事件の原告たる張霸もその家長の張委も昨晩二人とも死んでしまつた事、その事情を一つ一つ詳しく告げた。法官は大へん驚(おどろ)いたがそんな

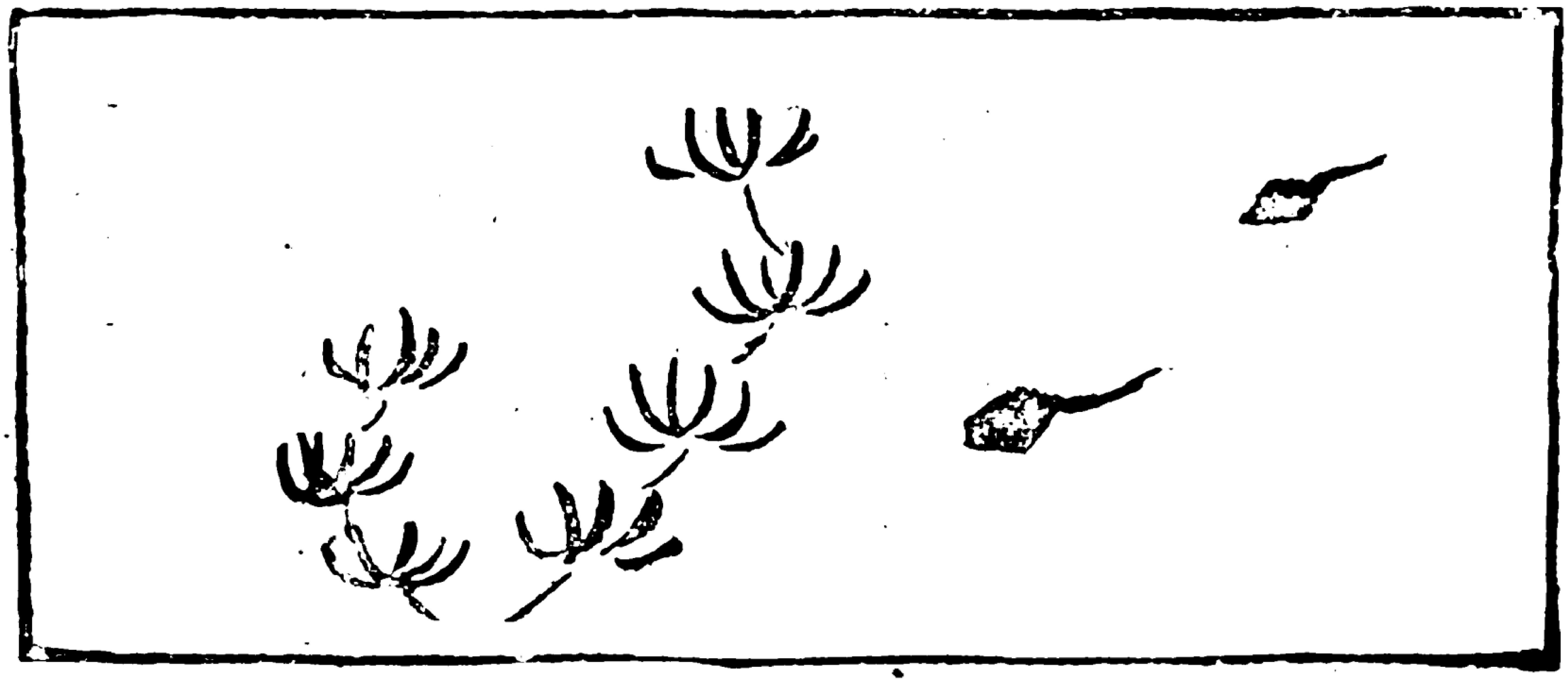
奇妙な事があるなどゝいふ事は信じなかつた。ところへまた暫くすると長樂村の年寄り役が村の者百十人の名前を書き連れて、同じことを詳しく書き記した書狀を差出したのを見た。それには秋公が常日ごろから花をひどく愛してゐた樣子やら、又決して妖術使ひではないといふこと、張委たちの悪企みにひつかかつたこと、神仙が報ひを現はしたこと、それらのいきさつが事細かに說き記してあつた。法官も昨日のあの解しがたい不意の眩暈のことを思ひ出すと、秋公の罪を疑ふ氣になつた。するとどうやら心のなかも氣が輕くなるのを覺えて今更に早まつて人に刑罰を與へてしまはなかつた事を喜ぶのであつた。そこで直ぐに秋公を牢屋のなかから呼び出して彼を放免することにした。同時に法官は自分の印を捺して與へて、猥りに秋公の庭に這入つて花を折つてはならない旨をその庭の門に掲げさせることにした、村の人々は深く禮を言つて役所から出て行つた。秋公はまた村の人たちに禮を述べた。さうして皆ともども村に歸つた。秋公と單老とが門を開けると秋公は門のなかへ這入つて行つた。秋公は牡丹が初めのとほり何の變りもなく咲き誇つてゐるのを見て涙も流さんばかりに喜んだ。村の人たちは酒の用意をして秋公に祝ひを言つたので秋公も亦同樣に酒盛をして村の人たちに答禮をした。皆して幾日も幾日も酒盛が打つづいた。

それはさて、この後、秋公は毎日花びらばかりを食べてゐたが、それがいつか習慣になつてしまつてしまひには人間の手で料理をしたものはもう食べなくなつた。さうして庭の果實は金に代えてもすつかり施しに費してしまつた。かうして幾年も經たないうちに白かつた秋公の髮の毛はだんだん黑くなつて來るし、顏色までが少年のやうに變つて來た。

或る日、それはちやうど八月の十五日であつたが、この日はうららかな天にはかすかな雲の影一つないやうな容であつつた。秋公がいつものやうに花のかげに膝を組んでゐると、不意にさわやかな風がそよそよと吹き出し虹のやうな雲が湯氣のやうに立ち昇り、中空からはほがらかな樂の音がひびき渡つて、得も言へぬ香がすると思ふと青い鶴と白い鶴と

がくるつと空に一まわりして舞ひ下りて秋公の庭さきへ來た。さて虹のやうな雲の眞中にはいつの間にかあの花を司る少女が、その兩側から幢幡と寶蓋とにかざし守られながら、そばには幾人かの仙女が音樂を響かせてゐるのであつた。秋公はそれに氣がつくと頭をぴつたりと垂れてひれ伏した。その時あの花を司る少女が秋先に對て言うには「秋先よ、おん身の行は今こそもう申し分もない。私はもう上帝にお願申して置いた。上帝からの命令があつておん身は天の花守になつた。下界のすべての花はおん身に任された。おん身の家屋敷はもう天のものだ。花をまことに愛すればこそおん身は今幸を享けた。徒らに花を弄ぶものには禍あれ。」秋公は天に向つて御辭儀をしてお禮を申し上げた。それから諸の仙女たちに隨つて雲に乘つた。秋公のあの草菴もさまざまの草木も一度に少しづつ浮き上つて來てだんだんと南の方へ動き出した。さうして皆地に手を突いて拜んだ。見上げると不思議な形の雲のなかから秋公は手を擧げて村の人々に會釋をしてゐるのであつた。しばらくは見えてゐたが、たうとう見えなくなつてしまつた。

その後この湖畔の平和な村は、ここから仙人が昇つたといふので昇仙里と名を呼び改めることになつた。またここは不思議とさまざまな花がよく榮えるので別に百花村といふ名もある。



親

里見弴

干ればぬらい土と砂と半分々々の床を見せ、上げきれば石垣三四段を浸すほどの小川に沿つて、申し合せたやうに東北へかしいだ松並木が、自然のまゝ庭さきに取り込んであつた。もつくり小高くなつた松の根方には、沿階草や蕗などが、昔を語り顔に生ひ茂つてゐたが、そこら緣先までは、よく手入れの屆いた廣々とした芝生で、木の葉のまを洩れた春の陽が、鮮な明暗の斑を描いてゐた。昔とも云へぬほどに、葉末が微風に鳴つて、時々ハラ〳〵と褐くなつたのが落ちて來た。

そこに私は、長閑な心持で、二人の男の子たちの相手になつてゐた、大きい方がやつと來年から學校と云ふ齡で、一緒に遊んでやらうにも、まだどうにも仕様のないやうな、少いものたちだつた。一人一脚、二人三脚、そんなことを敎へてみたがうまくいかないで、餘り面白がらなかつた。

「ぢや目かくしをしよう」

一休してから、ふと思ひついて、いま足を絹くのに使つた手拭を、パタ〳〵と操

ひながら、立ち上ると、「洋一、鬼になれ」

「僕いやア」

「なぜだい」

「いやア、暗いからいやア」

「暗い？……それア目を結けば暗くなるけど……、ちア錢郎、鬼になれよ」

「僕もいやア」

「そんなこと云つてちア駄目だ。ちやんちやん拳ぽんしよう」

と云つたが氣が、つくと、まだその拳の勝負さへ分らない彼等だつた。それでも。掛聲だけは勇ましく、

「ちやん、けん、ぽん」

と、出したのが、兄は鋏で、弟は石だつたが、違つたと氣がつくと、大急ぎで弟は、むづかしさうに二本の指を延ばして、同じ鋏に變へて了つた。

「よし／＼。ちアパヽが鬼にならう」

きり／＼と目をしばつたが、盲鬼で足でも踏んづけたりするといけないと思つて、兩方から手を把らせ、どこへでも、パヽが見當がつかなくなるやうなところへつれて行つてみろ、と云つた。「本所のおいてきぼり」と云ふ遊びは、それからさきどうするんだつたかしら、などゝ考へながら、子供たちに引つぱられて歩き廻つた。

「おや／＼、こゝはどこだな、へんなところへ來たやうだぞ」

などゝ云つてやると、二人は嬉しさうに、くつ／＼笑つた。

「まだよ。まだ目とつちやァいやァよ」

廣い芝生のことで　どこへ行つても大丈夫と思ふので、私は勇敢に歩きながら、

「やア、今度はおうちの方に向いたな。さうだらう」

「だめよ、見ちあアだめよ」

「見えるもんかね。……オヤ〳〵オヤ、こいつは大變なところへ來たらしいぞ」

下駄の下に芝生の感覺がなくなつたと思ふと、ゴワ〳〵と路の葉が鳴つた。

「こつち〳〵」

「こつち〳〵」

大喜びで、グン〳〵兩方から手を引ッ張つた。

「オイ〳〵、いやだぜ、川なんかにおつことしちやァいやだぜ」

その方角には違ひないのだけれど。そんなことをしようとも、――出來やうとも思はないので、口にはさう云つても索り足などはしずに、平氣で歩いてゐたが、どん〳〵眞ッ直に行くので、もう一度、

「オイ、大丈夫かい……」

と云ひかけたとたんに、空を踏んで、はッと思ふと　ボシヤンと水の音がした、勢がよかつただけ、石垣をずりもしずに、下駄もそつくり穿いたまゝ、腿きりの流れのなかに、ひよつこりと私は突ッ立つてゐた。いつ二人の手をはなし、目かくしを下へすつぽぬいたか、そんなをことは覺えがなかつた。――瞬間に私の見たものは、洋一の顔だつた。なんともかとも云ひやうのない、一つの深刻な表情だつた。驚き、心配、後悔、謝罪、そんなものゝどれ一つでもなく、それら

の混亂した、複雜な、大人にも見たことがないほどに緊張しきつた表情だつた。私も吃驚はしたが、すぐに、眞ツ晝間而も春光煦々たる下で、着物や下駄のまゝ川のなかに突ッ立つてゐる自分の姿を、狐でもつまゝれた男のやうに滑稽に感じて、もうちよつとで爆發しかけてゐた笑が、それを見るなり、ウツと止つて了つた。その瞬間に、私の表情も一變したに違ひない。――殆ゾッとした。と云つてもいゝほどに感動したのだから。

「オイ！」

怒つたのでも、口惜しがつたのでもなく、本能的に、私の聲が荒くなつてゐた。なにするんだ！」

石垣の中途に片足かけて、ひよつと跳びあがらうとした時、いきなり、

「いやア、いや／＼いやア」

と、まるで氣が狂つたやうに、洋一は兩手を振り廻し打つてかゝらうとしたが、びしよ／＼になつた私が、岸にあがつて立つたのを見ると、わッと聲をあげて、地べたに泣き倒れて了つた。

然し私には、すべてよく解つた。胸に抱きあげた手に、おのづとぎゆうッと力が罩つた。洋一の方でも、兩手で頭にしがみついて來た。私は涙ぐんで了つた。

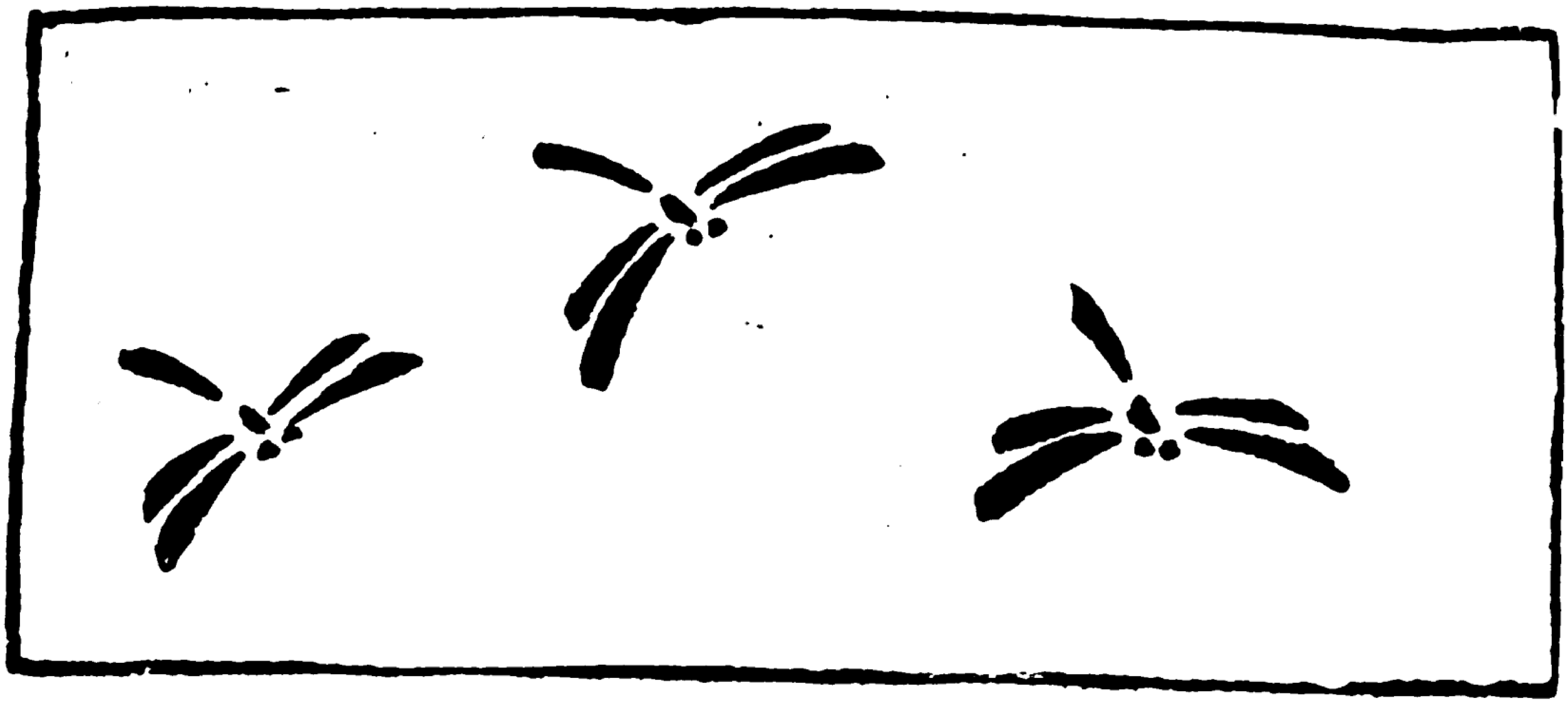
「よし／＼。解つてる／＼。なんでもありやアしない」

云はれて洋一は、一段聲を張りあげて泣きだした。鉞郎は、さつきから、呆氣にとられて、突ッ立つてゐたが、その時、これも、

「パ、ちやん」

と、泣き出した、

「親」と云ふ感情で、私ははち切れさうになつて了つた。



盗癖

橋本基

私は、これから書かうとして居る話を、初めて彼から聽いた時、たとへ、彼自身が語つて居るのだとは云へ、私は聽きながらそれを事實彼自身の身の上に起つた事として直ちに受け入れる事は出來なかつた。

自分達が中學の學生だつた頃から、お互に一人の子供の父親となつた今日迄の永い年月彼に彼の云ふ樣な暗い一面があつたと云ふ事は容易に信じられない事だつれた。

先づ、私はどんな風にして、彼がこの話を、私に語つたかは、簡單に書かなければならない。

その頃、私は或る仕事に忙しくして居て、彼と會ふ機會が餘りなかつた。彼も、赤坊が産れてから、餘り上京しなくもなつたし、上京しても、前の樣に私の家へ泊つたりする事もなく、大抵は明るい内に歸る樣にして居るので、自然話す折も少なかつた。(彼は東京から十里程離れた或る田舍に、三四年前から住んでゐる)

冬にしては珍しく暖かな或る朝の事であつた。私は急に思ひ立つて、前から約束のあつた、彼の赤坊の寫眞を撮りに、彼の所に出かけた。汽車の中で、何だか今日は行き違ひになりさうだなと、何の理由もなく考へたのであつたが、行つて見ると

果して、彼の上京した後だつた。細君が赤坊の寢床の側で針仕事をして居た。私は約束の寫眞を撮つてしまうと、細君が引き留めるのを、明るい内に歸りたいからと云つて、直ぐ歸つて來た。

その日から二三日して、彼からはがきで、先日は行き違ひになつて殘念でした。僕も君と行き違ひになりさうで、擦れ違ふ列車を見て居たんです。それに此の頃、君に會ひたい氣が切りにするので、尙殘念でした　その內にお會ひ出來ると思ひます。とこんな風な事を書いて寄越した。

それから又、半月程してからの事であつた。突然、彼が夕方私の家に來たのである。その日は、朝から雨氣を含んだ南風が吹いて、もう十二月の末だと云ふのに、蒸々して、部屋の中に居ると頭から何か重いものでもかぶせられた樣な氣のする、うつとしい日であつた。私は朝から何にも手につかずに、ぼんやりして居た所なので、彼の顏を見ると、待つてゐた人でも來た時の樣な滿足さと嬉しさとで彼を迎へたのである。

その晩、彼は平時になく亢奮して居た。そして、氣のせいか、彼の靑白い頰に血の氣さへ見られた。平時は澄んだ彼の眼が、その晩に限つて、重々しく充血して居た。彼は不斷の無口に似ず、何や彼や、とりとめもなくよく饒舌るかと思ふと、急に默つてしまつて、何か考へ込んで居る樣であつた。そして、今日は早く歸らなければと云つて居ながら、却々歸らうとする樣子もなかつた。

私は何か彼には話したい事があるのだと云ふ事を感付いたのであつた。之れ迄も、彼は何か話したい事があつた時、毎時、直にそれを切り出した事はなかつた。私には彼のさうした苦しい氣持が分るのである。で、私は直に「少し步るかうか」と云つた。

彼は、私がさう云ふのを待つて居たかの樣に、

「あゝ……」と直に立ち上がつて支度をする私を待つのであつた。私達は銀座の方迄步いた。そして、其處の珈琲店で二人は暫く坐つて居たのであるが、此時も、彼は一言も話らしい話はしなかつた。もう九時過ぎて居た。給仕の女が飲物を置いて行つた後、一度彼は思切つた樣に、熱した眼を私の方に向けた事があつたが、そして、私は彼が何を話し出

すか、身構へる様な心持で待つたが、彼は矢張りそれを云ひ出す事が出來なかつたのである。

彼が仕舞に漸くそれを云ひ出したのは、二人がその珈琲店を出て、殊更、人通りの少ない靜かな町、三十間堀から農商務省の裏の路を歩るいて居る時であつた。その晩の彼は、宛然別人の様であつた。それ迄に、彼がそれ程多く、次から次へと、彼自身の事に就て語つた事はなかつた。

今夜、僕が君に聽いて頂かうと思つて居る事を、充分何にも彼もお話し出來たら、君はそれが餘り意外な事なので、必ず驚かれる事と思ひます。そして、今迄、僕がさうした事を君に隱くして居たと云ふ事、それは、永い間、僕を友達として一番信じて呉れた君を、欺いて居たと云ふ事になるのですが、それに對して、君はどんなに不愉快な氣持になられるでせう。僕は君に對して何とお詫びしていゝか分らないのです、僕は君から、何と云つて責められても、侮辱されても、返す言葉はありません。

僕は何からお話していゝか分らない程、君には何にも彼も聽いて頂かなければならないのです。が、僕は僕の話がどんなに君をいやな氣持にするか、それを思ふと僕は堪へられない氣がします。僕は出來るだけ正直に話します。もし、君が聽くのが可厭だと思つたらいつでも僕は話を中止しませう。

大體、今夜僕がこんな風にして、突然君に自分の話を聽いて頂かうと決心したのには、いろいろ原因もあるのですがそれは後で話すとして、第一に、僕は今迄の永い間、殆ど大抵の事は君に話して居たのに、たつた一つ今日迄打ち明けずに居た事があるのです。それは、僕に盜癖があつたと云ふ事です。子供の時にあつたのです。そして、それは久しく僕に現はれずにゐたのですが、最近それが不意に現はれたのです。それはT寶石店の事で、あの時、君には間違ひから起つた事として、それを話してゐましたが、本統はあれは間違ひではないのです。疑はれるやうな事を、事實僕がしたのです、突然こんな風に云ふと、君は直には僕の言葉を信じられないと云ふかも知れません。が、これは事實なのです

僕は、自分の過去を顧ると、至る處で暗い記憶に出會ふのです。清浄で樂しい筈の幼年時代の思出にも、僕の場合、

暗い影がつき纏つて居ます。物心ついた時、僕は既に無心ではなかつた。僕は生れ乍らに、罪の血を體内に有つて居たのではないかと思ふ事さへあります。こんな物の云ひ方をするのは悪い事の様な氣もしますが、事實僕は幼兒の心とも云ふやうな、無邪氣さや、正直な心を、既に子供の時に失つて居たのです。

僕はこんな事を憶ひ出します。それはいつ頃の事と、判然した記憶はありませんが、何でも父の居た頃の事ですから僕の十歳前の事です。或る時、僕は父の部屋へ行きました。其處には誰も居ないで、菓子器が部屋の眞中に置いてありました。僕はその蓋をとつて、中の菓子を食べました。そして、又元の様に、蓋をしようとした時、はづみに、その焼物の蓋を落して、取手を壞してしまつたのです。その時、僕はどうしても自分の失策を正直に云つてしまう事が出來なかつたのを覺えて居ます。

又、或る日、病床に居た父が、僕に香水を買つて來るやうにと云つて、香水の瓶の入つて居る箱を渡しました。僕は外に出て、何氣なくその箱の蓋をとると、蓋の上の方に一圓紙幣の入つて居るのです。僕は別に香水の代を貰つて居たので、父がその箱の中に紙幣の入つて居た事を知つて居る筈はないと思ひました。僕はさう思つた事だけを今日覺えて居ます。そして、僕はそれを自分のものにしたかどうか迄は今僕の記憶には判然して居ません。けれ共それを自分のものにしても、父には分らないのだと思つた事は、ぼんやりとではあるが、今でも思ひ出します。この事は父が亡くなつて十數年を經て居る今日、妙に惱ましく取り返へしのつかぬ事として、僕の心に冷たく殘つて居るのです。そして、僕が默つて自家の金を使ふ様になつたのは、父が亡くなつて暫くして、小學校も終りに近づいた頃からの事だつたと思ひます。勿論、子供の事ですから大金を使ふと云ふのではありません。が、それが亢じて來ると、自分でも恐ろしくなる程でした。どうしても其の誘惑には負けてしまう。もう決してすまい、と思つた事は幾度か知れません。けれ共、する〳〵に僕のさう云ふ悪癖は續いて居たのです。

が、幸な事には、僕をその悪癖から救つて呉れた出來事が起りました。その時、僕は大きな銀貨を一つ握つて、母の部屋を出ようとすると、突然背後から誰かの手が僕の肩を掴みました。僕はギツトしました。それは兄の一人だつたので

す。その晩、僕は母の前に呼ばれました。

「お父さんが亡くなつて、一番末のお前がそんなさもしい心を出して吳れては、お父さんに申譯がない。女親一人になつて、充分お前にも欲しいものを買つてやれなくなつたので、こんな事になつたのだと思ふと、私はどうしていゝか分らない」とこんな母の言葉だけが、明瞭今でも僕の耳に殘つて居ます。その時、僕は唯、

「そんな事ありません。僕が悪いのです。どうか許して下さい……」と泣きながら、こんな事を云つて、心から母にあやまりました。僕は母の悲しさうな樣子を見て、本統に濟まない事をしたと心から思つたのです。母も聲を立てゝ泣いて居りました。その時以來、絕對に僕の盗癖はなくなつたのです。さうした誘惑すら感じなくなつたのです。そして、此頃ではそんな事のあつたのも忘れて居る程になりました。母なども全く忘れて居る樣です。今では、かうした昔の事は思ひ出す事があつても　總てが前の世の出來事かなどの樣に、只ぼんやり心に浮ぶ位になつて居たのです。

　こんな事があつてから、僕は全で變つた子供になつてしまつたのです。父の居た頃は、家中での我儘者で、何でも欲しいものは直に買つてもらはねば承知しない、行き度い所は何所へでも行く、と云ふ風で手のつけられない程の我儘を通して居たのです。けれ共、それが全く變つてしまひました。そして今は、何でも母に心配をかけぬ樣、母の喜ぶ樣とそればかりを考へる樣な子供になつて了ひました。中學に入つてからも、母のために勉强した樣なものでした。一年級の時、一生懸命勉强したために、首席の優等でした。その時、母は非常に喜びました。その喜ぶ母を見て、僕も心から喜びました。そして、その次の年も、又その次の年も優等でした。

　こんな風で、僕は全く母のために生活して居た樣なものです。

「僕はお母さんの生きてる間だけ勉强するんですよ」など云つた事さへありました。それでも、母は非常に喜んで居るのが、僕にはよく分りました。母は多勢の同胞の內、僕を一番信じる樣になりました。そして、末子と云ふ事からも、殊に僕を一番愛して吳れた樣にも思ひます。君も知つて居る樣に、僕の兄達は皆、酒も飮むし、放蕩もするのでした。そんな風で、僕だけが母から見れば、無垢な唯一のものだつたのです。母や大きい兄が、さう云ふ僕に唯一の望みをか

くのは自然な事でした。

「お前だけは、お酒も煙草も手にしないでお呉れ」とよく母が僕に頼む様にして云ひました。僕も母のために、酒も煙草も決して手にすまいと堅く決心した事などありました。僕は子供ながらに、母が酒の事ではどの位、苦労をして來たかがよく分るのでした。永い間、大酒家だつた父の機嫌をとり、父の酒が段々衰へて來た頃には、大きい兄の大酒ですそれに、大きい兄は體の弱い上に、絶えずの飲酒と放蕩で、確か十九の時からだつたと思ひます、突然癲癇の發作を起し、それが永い間、絶えず母を惱まして居たのです。

母は僕だけはさうした誘惑には全く縁のないもの丶様に安心して居たらしいのです。けれ共、僕にも早くから、情慾の誘惑はありました。兄達が集つて、女の話や、下品な話をして居る時など、僕の足音を聽くと、皆申合せた様に默てしまうのです。それは僕がさう云ふ種類の話を嫌つて、今迄毎時、苦い顏して仲間入りをした事もなかつたし、僕が他の兄達とは違つて、非常におとなしい子供だつたからなのです。さう云ふ時、僕はさう云ふ話に、何か知れない好奇心の動く自分を思ふと、却つて冷汗の出る様な氣がするのでした。いくら兄達だつて、僕の様な賤しい行はしなかつたでせう。僕は一度ならず寢靜まつた女の部屋へ醜い様子をして、這寄つた事がありました。それなのに、自家の者は僕を聖人の様に取扱つて居ました。僕も聖人になりすまして居たのです。

僕には母達が、僕に對して描いて居る幻影を壞す事が何より苦しく思はれたのです。それは、僕自身のためにと云ふよりは、母のためにさうだつたのです。

僕は君と知る様になつてからも、君にさへこうした僕の一面は見せまいとしました。そして、君も僕をさう云ふ方面では清淨な人間として取扱つて居ました。こんなにして、僕の僞りの生活は、今日まで續いて來たのです。

そして、僕は今T寶石店での事に就いてお話しなければなりません。この事は、一時僕を殆ど絶望的にしてしまつた程、僕にとつては大きな出來事でした。此の事に就いても、今日迄君を欺いて居たのです。前にも一寸話しましたがあの時、君は僕の言葉をその儘に信じました。あの事にたとへ、僕がどんなに巧に話しても、當然、あの話には何處か、

腑に落ちない不自然な所があつたに違ひないのです。が、君は二もなく僕を信じてしまつたのです。僕は君が餘りに、僕を信じ過ぎて居るので、恐ろしくなつた程です。今でも、君はあの事が一寸した間違ひから起つた事と考へて居るでせう。けれ共、總ては君が思つて居るのとは全く反對なのです。

僕はあの事に關して、自分の潔癖を強いて君に信じさせようとして、あゝ云ふ風に君に話したのです。それは、T寶石店へは君も時々行くのだし、あの店とは僕達が可成りよく知つて居るので、あの事がいつ君の耳に入らないとも限らぬと考へたので、もし、その前に、僕の口から君にあの事に就いて話して置かないと、話された場合、君が僕を疑ふかも知れぬと云ふ事を恐れたからなのです。

今、僕はもう一度、あの事に就いて本統を話します。僕は出來るだけ正確に、簡單に話さうと思ひます。あの時、僕は田村さんに贈る品物を買ひに、T寶石店へ行つた事は、前にも話した通りです。丁度、僕の他には一人も客が居ませんでした。主人が居て、僕の用向を聽くと、色々な品を見せて呉れました。僕は色々見た末、適當と思ふネクタイピンを撰びました。それは、極く地味な色の石の入つた。形もいやみのない品で、僕の好みにもよく合つたものでした。主人はそれを贈物の樣に包むために、奥の帳場へ行きました。珍らしい事で、その日に限つて、店には小僧も、それから平常必ず居る番頭も居ませんでした。夕方の事で、ガランとした奥まつた店には、電燈がともつて居ましたが、何となく薄暗い感じでした。僕は前のテーブルには、今主人が出して、僕に見せた澤山の品物が、その儘に置いてあります。一番僕の手近には、百何十圓と云ふ高價な卷煙草入が在りました。それは、主人が見せた時、その高價なのと、如何にも金ピカな作りなのに嫌な氣がしたものでした。それなのに、今それが自分の直ぐ手のとどく所にある、しかも其所には誰も居ないのだ、とかう思ふと急に、前にはそのために嫌な氣のした高價なと云ふ事、それだけのために、僕には思ひがけぬ誘惑が起つたのです。僕はそれをどうしようとか、その品物が自分の氣に入つて、どうしても欲しいと云ふ樣な目的があつたのでも全くなかつたのです。僕は、それを手に取ると同時に、洋服のポケットに入れました。僕はかうして盜みをしたのです。その時の自分の氣持を明瞭說明する事は困難な事です。僕は不意に思ひがけない事をした

のです。僕は何かの發作にかゝつた人の様に、これだけの事を、殆ど前後の考なく大膽に行つたのです。顔を上げると正面の大きな姿見は、自分の眞靑な顔が妙に明瞭と映つて居るのです。僕は慄然しました。そして、急に淋しい嫌な氣持になつたのを覺えて居ます。

僕は帳場から出て來る主人を見る前に、店から二階へ通じる階段の上の方で、小さい子供を遊ばせて居るその主婦らしい女の居るのに氣がつきました。その時は、體中の血が一時に頭へ昇つた様な氣がして、もう何も考へられなくなつてしまひました。一瞬間、僕は直に、主人の前に自分のした事を詫びてしまはうと云ふ考が浮びました。けれ共、さういふ考は、帳場から何にも知らずに出て來た主人の顔を見た時、全く僕の頭からは消されてしまつたのです。そして却つて妙に猾い考を起こしたのです 女だつて知つてると は限らないのだと無理にも考へようとしました。その内に、番頭も出て來ました。僕には、もう初めの打ち明けてしまはうと云ふ考は全くなくなつてしまひました。僕は半信半疑とは云へ、殆ど、自分のした事は、もう皆知れて居ると云ふ事を感じ乍らも、無理にその反對の考を行たうとしたのです そして、幾度か自分に「大丈夫だ、分つてはしないのだ」勇氣附ける様に云ひました。僕は番頭が出て來た時、主人に何か耳打ちしたのに氣付いたのです。それでも、「大丈夫だ……」と自分の心を胡魔化さうとしたのです。僕は妙に落ち付かなくなりました。それは息のつまる様に苦しい氣持でした。そして、無理に自分の落ち付きを見せようとした事はどれも僕としては不自然な事だつたに違ひありません。僕は持つて居た西洋煙草の未だ口を切らない罐を出して、態々口を切つてもらひ、主人や番頭に勸めて、自分も火をつけたりしました。店を出る前に、一掴みの煙草を番頭にやりました。そんな事をしながら僕は自分のして居る事が、どうも自然に感じてなりませんでした。こんな事をして、この煙草を何處からか盜んで來たと思はれはしまいかと、ふとそんな事まで心に浮びました。僕は毎日の通り、落ちついて店を出よう、さう思はせようとしましたが、外に出た時は、體中のふるへがどうしても止まりませんでした 扉を押して外へ出た時急に冷たい霧が頰にあたつたのを覺えて居ます。僕は濃い霧の中に吸ひ込まれるやうに店を出たのです。夢中で車に飛び乘りました。が、乘ると同時に、急に不安になりました。一度店の樣子を見なければと思ひました。僕は切符

も買はずに、電車を飛び降りてしまひました。未だ店から五六間行つたばかりの所でした。僕は要心深く店とは反對の暗い側の通を、普通の人の様に歩きながら、店の様子を見ました。明るく電燈のついた店の內は、霧を透してぼんやり見えました。客が居て、テーブルの前で主人と話して居ます。僕はそれが自分の事を話して居る様に思はれて、一層、足がしつかり地につかない様な氣持になりました。二三度行き來して居る內に、客が居なくなつて、今度は主人と番頭が話し合つて居ました。「もう確かに知れて居る」とさう僕は思ひました。が、直ぐに、「何、これは氣のせいだ」と思はうとしました

その晩、僕は何處をどう步いたか、今では明瞭思ひ出せません、兎に角、汽車に乘つて、暗い田舍道を提灯の燈で自家へ歸つた事は覺えて居ます。自家へ入つて、妻の顏を見る迄、忘れた樣に卷煙草入の事は考へませんでした。妻には殆ど不斷の通りにして居た心算です。煙草入は妻の氣のつかぬ樣な棚の奧に、注意深くしまひました、床に就く迄はそれ程でもありませんでしたが、床に入ると、妙にぐつたり心の芯迄疲れ切つて居て、何にも考へる力はありませんでした。少時は前からの亢奮で、うつら／＼して居ましたが、いつか、死んだ樣に眠つてしまいました。少しも苦しい眠りではなかつた樣な氣がして居ます。僕は朝迄一息に眠りました。

翌朝、目を覺ました時は、氣が拔けた樣にぼんやり、身にも心にも張がなくなつて居ました。妻が雨戶を開けたのも知らないで居たのです。南側の障子に日が一ぱいに當つて居ました。小鳥の聲がして居ます。勝手の方から妻が食事の支度をして居る音が聞えます。總ては平時と變らない穩やかさです。僕は少時、ぼんやりして居ましたが段々、前の晩の事が明瞭頭に浮んで來ると、急に不安になつて來ました。直ぐに床を離れて、戶棚を調べました。卷煙草入の包はその儘になつて居ました。妻の樣子も不斷と變りはありません。けれ共、靜かな朝の空氣が却つて妙に、僕を落ち付かない不安な氣持にさせるのでした。

「もし、分つて居たら……」とさう思ふと一時にぢつとして居る氣にはなれないのです。それに、その朝になつて考へて見ると、分つて居る事は疑ふ餘地のない程確かに思はれるのでした。僕は第一に、その煙草入の始末に困つたので

す。時間が經つて連れて、不安は段々大きくなるばかりでした。兎に角、もう一度、T寶石店の様子を見なければと思ひました。僕は妻の手前、用事を作つて又上京しました。

何の考もなく、直にT寶石店の方へ電車に乘りました。そして、心に何の用意もなしに、その前で電車を降りると、引き込まれる様に、店の扉を押して内に入りました。僕は殆ど絶望的な不安を感じて居ながら、どういふ風にして前の晩の事を辨解しようかと云ふ事は、殆ど考へて居なかつたのです。唯、不安のためにおびやかされて居た様なものです。店に入つて行つた時、主人も番頭も、平時の様に愛想よく僕を迎へました。僕はおどおどした氣持で少しも落ち付きませんでした。僕は態と、前晩見た煙草入の内で、餘り高價でないのを買ひました。それは、前の晩の事を疑はれないためにさうしたのです。少時して店を出ました。絶えず云ひやうのない不安を感じて居ながらも、店を出た時は、ほつとしました。五六歩も行つた頃でせうか。後から人の走つて來る氣配がします。どきつとして、思はず立ち止りました。

其處には、今迄僕を客として叮嚀に取扱つて居た番頭が、僕の氣のせいか、その時は僕を見下げる様な、勝誇つた冷笑を、顏にも態度にも現はして立つて居るのでした。僕にはさう見えたのです。その時、僕は自分が惡い事をして居るにも關らず、急に不快な腹立たしい氣持になつたのを覺えて居ります。番頭は僕を困らせまいとして居るのだと云ふ事は、僕にもよく分るのでしたが、その強いて何でもない事に見せようとする態度は、却つて、僕にはたまらなく不快に思はれたのです。番頭はこんな風に云ひました。前の晩、店の女主人が、僕が煙草入を洋服のポケットに入れるのを見た。そして、僕が歸つた後で調べると、一番高價な品が一つ紛失して居たと云ふのです。僕は默つて相手の顏を見詰めて居りました。番頭は直ぐ言葉を續けて、かう云ふのです。僕の事は前からよく知つて居るのだしするから、別に疑ふ譯ではないが、よくポケットなどに入るかどうか入れて見て、その儘、忘れてしまふ人が居るのだと。それは明らかに僕を恥づかしめないための言葉なのです。が、僕は却つて、番頭が頭から、

「お前は泥棒だ」と云つて呉れゝばいゝと思ひました。僕は妙に淋しくなりました。と同時に、大聲で笑ひたい様な氣

な氣持になつたのです。

「あれは僕が盗んだのですよ」と大きな聲でどなりつけてやりたいやうな氣がして、言葉が口迄出て來たのですが、僕はそれとは全で反對に、そんな事は少しも知らなかつたと云ふ風に云つてしまつたのです。幸、僕はその日和服で居たので、兎に角、洋服を調べて見ようと云つて、何時迄も胡魔化さうとしました。番頭は僕の言句には、一言も云々しないで唯しまひに、

「兎に角、高價な品の事ですから、もし、お宅の方で見當たらなかつた際は、公にしても、一應は調べなければなりませんので」と云ふのでした。僕は番頭と差し向ひで居る間は妙に、落ち付いた、明瞭した氣持で居ましたが、一人取り殘されると、急に孤獨な頼りない不安を感じました。夕方で、その邊の店には電燈がともつて居ました。僕の立つて居る前を幾臺か電車や自動車が騷がしい音を立てゝ通ります。絶えず、男や女が音もなく僕の側を除ける樣にしてすり拔けて行くのでした。どの位の間僕はあの人通りの多い街に立ち續けて居たか、總てあの晩の事は、今思ふと全く夢の樣にぼんやりして居ます。少時して、僕は歩るき出しました。そして、可成り歩いて或る洋食店に入りました。葡萄酒と二品ばかり註文しました。體の芯ががたがた震へて居る樣な氣がします。僕はしつかりしないといけないぞと云ふ氣持で、葡萄酒を一息に飲み乾してしまひました。給仕の女が料理を持つて來た時、

「今夜一緒に何所かへ行けない……」とこんな事を平氣で云つたりしました。女は唯笑つて相手にもしない樣でした。僕はその晩、初めて遊廓と云ふ所を知つたのです。僕は自分の體を置く場所が無かつた。そして、何かの強い刺激を欲して居たのです。僕はさうした惡い場所だけが、一番僕を樂に入れて呉れる樣に思はれたのです。けれ共、そんな場所へ行つても、唯堅苦しい氣持にばかりなつて少しも樂ではありませんでした。殆ど一睡もしずに、夜が明けるのを待つて其所を出ました。

自家へ歸ると直に、床をとらして一日眠り續けました。そして、其翌日、僕は煙草入を持つて又上京したのです。けれ共、僕は之を盗みましたと云つてあの店の主人に返へす氣にはなれなかつたのです。さうする事は、自分のした事を

母親、妻、同胞、それから自分の周圍の人達總てに知らせる事になります。それは僕にとつて非常に苦しい事でした。僕一人なら簡單な事です。僕は自分のした事のために、どんなに苦しんだつて關はないだけの決心はありました。が、そのために受ける周圍の人の苦痛、殊に年老いた母や、妻の苦痛、それらはどう考へても堪へられない氣がするのでした。もしこの儘、間違ひから起つた事だつたとして、曖昧に濟ませるなら、それでもいゝではないか。何にも殊更自分のした事のために、他の者に迄迷惑をかける事もないではないか、と云ふ樣な考へ方をしたのです。けれ共、一方僕は自分のした事に對して、取り返しのつかない思ひをして居たのです。物を盗む、しかも、それが深い必然性もなく、唯一時の全く思ひかけぬ發作からさうした事をすると云ふ事は、明瞭した動機がないだけに、却つて變に絶望的な恐ろしい氣がされるのでした。

　そして、その時迄、殆ど忘れかけて居た幼い頃のいやな記憶が、まざまざと思ひ出されて來ました。前にもお話した樣に、あの時以來、僕の惡癖は全く忘れた樣になくなりました。あの晩の母の態度は、どんなに重い懲罰よりも、遙かに僕にとつては有難いものだつたのです。そのために、僕は素直に恐ろしい習慣から脱する事が出來ました。その後、僕はさうした誘惑すら感じない樣になつたのです。その後、僕は神經的に金錢の事には可成り潔癖になりました。そして、その潔癖は永い年月の間に段々、金錢に淡泊な質に變つて來たのです。少なく共、僕自身にはさう思はれます。それなのに、十何年かの後、その忘れかけた傷が、再び思ひもかけぬ時に、しかも、それが大きくなつて現れたのだ。僕にはさう思はれたのです。さう思ふ事は、僕にとつて隨分恐ろしい事ですが、さう云ふ考を打ち消す事の出來る理由は、殆どありません。十何年かの永い間、あのいやな傷が、僕の心の何處かに、醫され切らずに殘つて居たかと思ふと、本統に心の底から恐ろしくなります。さう思つた時、僕は殆ど絶望的な苦痛を感じました。その上、僕は自分の同胞達の上に、大酒家だつた父の遺傳をまざまざ見て居ます。僕はいつか、その恐ろしい遺傳と云ふ事を信じる樣になつて居たのです。

　それでも、僕は自分だけはと毎時氣を張つて居ました。幸、前にもお話した樣に、僕は飲酒や放蕩からは、自然に遠

さかつて居る樣な狀態に居たのです。けれ共、後になつて思へば、僕にも充分さうした慾望はあつたのです。唯機會が與へられなかつた迄です。僕に强い情慾の誘惑のあつた事も前に話した通りです。その上、僕には異狀な惡癖があるのです。けれ共、それが僕自身の事となると、かうした自分の性格や、異狀な慾望を迄、總てを父の大酒のためとして簡單に考へてしまふ事は出來ないのです。又、さう考へる事で、自分の責任を避けようとは考へません。それは、自分と云ふものに對して、餘りに無責任な事に思はれます。

勿論、僕は醫學的に、遺傳と云ふ事がどんなものかを調べた譯でもありませんが、知らず知らず遺傳といふ事は僕の注意を惹いてゐたのです。一月程前、こんな小說を見ました。それも遺傳と云ふ題で書かれてあつたのですが、僕にとつては實に恐ろしいものでした。細かい事は覺えて居ませんが、或る人が子供の時に盜癖があつたのです。が、十五の時からは、全く、その惡い習慣を改めてしまつたのです。そして、大人になり、妻を有つて、幾人かの子供迄出來て、平和に暮して居たのですが、不圖、その子供達の一人が、或る時近所の店から菓子を盜んだと云ふ事が知れました。それは丁度十五になる男の子だつたと云ふのです。その人は子供を連れてその店へ詫に行かなければならなかつたのです。この小說は僕にとつて殊にさうであつたのか知れませんが、其處に書かれた以上の樣な事柄が、動かす事の出來ない事實として、僕には强く感じられました。之は作つた話かも知れません。がそれを讀んだ時、僕にはさうは思へなかつたのです。僕は讀みながら、自分の顏の熱くなるのを感じました。それを讀んだ當座　自分の赤坊を抱いて居る時など、不圖その小說の事が頭に浮ぶ事がありました。さういふ時、僕はどうにもならない不安な氣持になるのでした。が未だ百日足らずの無心な赤坊の顏を見て居ると、そんな事はあるものかと非常に明瞭（はつきり）、前の不安を打ち消す樣な氣持にもなるのです。勿論、その小說にしても、必ずどんな場合でもさういふ事が遺傳するのだと書いてあるのではありません。唯さう云ふ事があつたと云ふ事を書いたものです。が、それだけに、却つて一層、僕にはたまらなく感じられるのでした。僕は産れたばかりの赤坊を見ては、勿論そんな事があらうなどとは考へませんし、又あつてはならぬとも思つて居ますが、遺傳と云ふ事を僕自身信じて居る以上　又その小說の眞實さを感じて居る以上、全然さういふ事がないと

も、僕には云ひ切る勇氣はありません。僕は自分のさうした性格が父の大酒家だつた事のためだとは簡單に考へる氣にはなれぬとは云ひましたが、さうかと云つて、自分の性格や、悪癖が、全然子供に遺傳しないとも考へられないのです。さう思ふと、僕はどうしていゝか分らなくなりました。自分のさうした性格には僕自身その責任を有つとして、もし子供に迄それが傳つた場合を考へると、唯云ひやうのない不安を感じるばかりです。この事は後でお話しませう。餘り話がそれましたから、又前に戻ります。兎に角、その日僕には未だ勇氣がなかつたのです。それに一時も早く、その煙草入の始末をしなければならない時だつたのです。僕は矢張り自分の間違ひから起つた事として、何處迄もその事を片附けようとしました。何處迄も云ひ張ればそれでいゝのだと、さう思ふ自分の心をなさけなく感じながらも、ずるずるに、さういふ事にして、兎に角、その始末はつけてしまひました。が、僕は後で、主人や番頭が僕の事を、どんなに笑つて居るか、それが明瞭に想像出來る程に、自分の胡魔化しの不自然な事は知つて居たのです。

僕はそのために隨分苦しみました。そして、矢張一思ひに本統の事を云つて詫びてしまつた方がと思つた事も幾度かありました。が、僕は姑息な氣持から今日迄、この事に就いては誰にも本統を話さなかつたと同時に、T寶石店へも詫には行かず、その儘にして來ました。

然し、實は此の事を君に話す前に、どうしてもしなければならない事があるのです。それは、僕自身でT寶石店へ行つて、自分のした事に對して謝罪しなければならぬと云ふ決心をする事です。勿論、僕のした事はもう明かにあの店の主人や番頭には知れて居るのです。が、表面だけとは云へ、僕があの店の客であつたと云ふ事のために、僕の胡魔化しが、その儘に通つて居るのです。第一、僕がそんな風にして居て平氣で居る人間だと一生の間あの店の人達に思はれて居ると云ふ事は、今になつて思へば、一時も我慢のならないたまらぬ事です。僕はあの店の人達の前に出て、心から頭を下げなければならないのです。今の僕にはさうする事が本統であり又さうした方が、却つて僕には自分の苦しみを輕くする事なのだと云ふ事を、明瞭信じる事が出來る様になりました。勿論、さうする事は、もしあの店の主人が欲すれば、自分のした事總てを、公にされても僕にはそれをやめて呉れと云ふ何の理由も權利もないのです。ですから、それ

は自分のした事を、自分の周圍の總ての人に知らせると云ふ事になるのです。今では僕はさうなる事も、前の樣には恐れて居ません。僕は自分の過去にした事を、自分自身にもかくさぬと同時に、自分の周圍の人達にもかくしてはならないのです。かくさない方がいゝのだと云ふ事を知りました。これは自分の性格を强くする上にも、又自分の内にある傷の再び現れる事のない樣にし、出來ればその傷を完全に醫してしまうために、さうする事がどれ程必要な事かをよく知つたのです。さうは云つても、まだその后、T寶石店へも行きませんし、この事を話すのは、今夜が初めてなのですから、いつ僕がこの決心を決行するかは、自分にさへ分らないのです。

勿論、今では此の事を妻にはどうしても、話さなければならないとは思つて居ます。然し、何にも知らない年老いた母親に、この事を知らせると云ふ事は、それが本統かは知れませんが、今では未ださうする勇氣はありません。他から知れた場合は仕方ありません。僕はかくさずに、總てを話します。が、それ迄は未だ、どうしていゝのか分らないのです。僕にはもう一つ大きな困難があります。それは前にもお話した樣に、子供の事です。僕はこの事を自分の子供にも話さなければならないのでせうか。もし子供が大きくなつて、僕の樣に遺傳と云ふ事を信じるやうになつたら、──それ以上、もし偶然にも子供にかうした僕の恐れて居る事が現れたら、その時はどうしたらいゝでせう。僕にはもう之以上分らないのです。かうなると、今君にお話しする事には、何の苦しみも努力も要しない樣に思はれます。それは唯、自分の苦しみを輕くするためばかりの樣にさへ思はれて來ます。兎に角、僕には決心は出來て居ます。それに、今夜君にお話したので、思ひがけぬ勇氣を得ました。

彼の話には全く思ひがけなかつた。私は何と云つていゝか分らなかつた。云ふべき言葉を見出す事が出來なかつた。私は彼のために何一つの慰めらしい言葉も云はずに別れて了つた。然し彼は亢奮から寧ろ元氣にさえ見えた。私はあの亢奮が去つた後の淋しい弱々しい氣持になる彼が心配だつた。私は彼の今の元氣が、T寶石店へ行つて今決心して居る事を遂行する迄失はれなければいゝがと思つた。しかし、私は彼と別れた後、矢張り變に淋しい氣持になつた。

二三日して、私は親展として彼の手紙を受け取つた。それには次のやうな事が書いてあつた。

先夜は失禮しました。僕はあの夜、一言口を切ると後はそれ程の努力もなしに次から次とお話出來たので、お別れしてからも、久し振りに氣持よく人通りのない大通を、母の家へ歩いて歸りました。あの翌日、僕はお話した事を決行しました。

初めは可成りの努力が要りましたが、いざあの店の扉を押して内に入つてしまふと、僕はすつかり落ち付いて、靜かな氣持になれました。主人に會つて、すつかり話しました（あの出來事に就いてだけですが）主人は氣持よく聽いて呉れました。そして、何よりよかつたのは、僕が恐れて居た樣に、僕を咎として特別に取扱はず、その時は同等の人間として、僕の話を聽いて呉れた事です。僕も心から主人に或る親しみを感じた程です。そして、主人は僕の話を聽いてしまうと、こんな風に云つて呉れました。

「前から間違ひだとは思つて居なかつたが、今あなたからさう打ち明けて下されば、それですつかり氣持よくなつた。勿論、あなたの人格を疑ふ樣な事はないのだ。あなたのお話はよく分る」と。

しかし、僕は店を出て之で漸く濟んだと思つた瞬時、妙に淋しい氣持になりました。僕は歩きながらその淋しい氣持を味ふ樣に見つめて居ました。そして、僕はその淋しさの内には、自分を勇氣付ける何かがあるやうに感じたのです。この淋しさは一生僕からは去らないでせう。又僕は決してそれを忘れてはならないのだと思ひました。

それから、妻には未だ話しませんが、それも近くに必ず話さうと思つて居ます。子供に就いては、先日もお話した樣に、未だ明瞭した考は有てません。子供が生長してこの事を知つたとして、もしその子供が自分の親はかういふ人だつたと云ふ事を知つたために、却つて自身さういふ事に身を汚さぬ注意を常に怠らないとしたら、それは却つて知らした方がいゝ事になるとも考へられます。しかし、この事は考へだけでは分らない事です。母親に對しても　僕の氣持はこの前と未だ餘り變つては居ません。けれ共、もう今では、自分の事を誰に知られても關はぬ。自分から知らせる事もないが、自然に知れるなら、それも却つていゝ事だ、とも考へられます。

兎に角、今僕は非常に元氣にして居ますから安心して下さい。僕には恐らく今の淋しい内に元氣なこの氣持は、永く續く本統のものだらうと云ふ氣が強くして居ます。（終）（大正十一年八月）

編輯だより

◇大偉人——それも一萬年にも一人とも出ぬ、——我がアインスタイン教授は燈つく紅葉の國に來朝する、十一月十六日の神戸港の光榮に輝く曉の空を今からシビレを切らして憧憬れている。

◇「相對原理」の長講は始め三十名と限定したが、余り希望者が多いので出來る限り多數の聽講者を收容する計畫に變更した、現在でも各大學博士達ばかりでも五十名を凌駕し、その他數十名の志望者がある、期日までには數倍することだらう。

◇攝政殿下も目下熱心に「相對原理」を御研究中で、十月二十三日は長岡博士に對していろ〳〵の質問があつたと聞き及ぶ。

◇十二月號には卷頭にアインスタイン教授の「理論物理學の現時の危機について」の名論文を掲ぐ、物理學雜誌以外米歐の雜誌、新聞にも曾つて筆を染めざりし大教授の新研鑽を頂載することが出來たのは多大の光榮である。

◇十一月號の論文欄は將に百花研を競ふ、哲學のリツケルト、經濟の福田、理學の石原、農村問題の末弘等の重鎭があり、長谷川氏又珍しき設題の下に蘊奥を傾け、チタの私設大使アントーノフ氏また時事批判を寄す、若しそれ厨川氏の高朗珠玉の文字は何れの讀者も快讀を辭せないだらう。

◇ケマル・パシャの崛起は白人の恐怖だ、基督教徒の恐怖だ彼はありふれた帝國主義者ではない、ガンヂの思想はないが、膽略はある。汎イスラム運動は歐洲の天地を震駭さするに十分だ、先覺者は必ず此運動を凝視せ。

◇小說「無想庵無語」は風俗壞亂で發賣禁止となつた、しかし改訂して「結婚禮讃」として十七日賣出したが、全く飛ぶやうに賣れるさうだ。賀川氏の快著「空中征服」なる繪入小說も十一月早々出版される。

◇我誌は新人の詩を歡迎する、新機構の創作を歡迎する、大膽で、機構が雄大で、思想が淸新であつて欲しい、生命を打込んだ雄大な人類の理想標幟が籠つて欲しい、深刻な忍苦の體驗を經た結晶であつて欲しい。

◇科學智識の未發達につれて相對原理を否定するといふものが、却つて自分を殺す古い落葉集めをやつたもので白晝鬼面人をおどかす者がある。鎧袖一觸にも値せぬ。

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	八十錢	貳錢
半ケ年	五圓六拾錢	增大號共不要
壹ケ年	拾壹圓廿錢	增大號共不要

注文の注意

本誌一頁廣告料 一等 百圓 二等 七拾圓

本號特價壹圓

◎本社廣告取次所 博報堂 弘盛舍 日本電報通信社

◇增大號其他定價變更に依る前金拂込み不足は不足金の拂込みを待つて發送す

◇註文は凡て前金とす ◇前金切れの際は發送を停止す ◇外國發送の註文は壹部郵稅貳拾四錢を申受く(但し支那を除く)

◇見本は發送せず ◇郵稅切手代用は壹割增のこと ◇拂込みは振替によるるが最も便利なり

大正拾壹年十月廿日印刷納本
大正拾壹年十一月一日發行

編輯兼發行者 印刷者 東京市芝區伊皿子町四十番地 平田貫一郎

印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿七番地 秀英舍

發行所

東京芝區愛宕下町一ノ一 發行所 改造社

電話 芝(長)一六三八 芝二八五四 芝四三〇三

振替東京八四〇二

LECIONO V. 混成時

La birdo kaptita de la knabo. 少年に捕へられた(受身、過去)鳥

〔注意〕(1) 英語には發動現在分詞(-ing)と受身過去分詞(-ed)としかない。英語が科學や法律などの文獻で甚だ不正確貧弱であると譏られるのは止むを得ぬ。

〔注意〕(2) -ant, -int, -ont; -at, -it, -ot は動詞直接法の語尾が -as, -is, -os であるから覺えるのはわけない: 現在は a, 過去は i, 未來は o がつき、發動は nt, 受身は t がつく。

〔注意〕(3) 前置詞 de は元來 ←o なる意、即ち出發點を表はす(al が →o なる關係を表はすのに對す)。たまたま之を邦語に譯すると次の三樣の意がある樣に見えるのである。

1. Mi venis *de* li. 私は彼の所から(運動の出發點)來ました。
2. Li mortis *de* malsato. 彼は饑のために(死の起原、即ち出發點)死にました。

受身の場合に de が動作の發動者(即ちその出發點)を示すに用ひられるのは當然であろう。

3. La ĉapelo (posedata) *de* la patro, 父『の』帽子(とは父に『よつて』所有せらる帽子で、受身の發動者を示す)。

註: posedi 所有す。

(*b*) 語尾 -o をつけ、名詞とした例

vojaĝonto (これから)旅行に出かけようとしてゐる者

vojaĝanto (今)旅行しつゝある者、旅人

給仕：ハイ只今。

〔註〕 mi'a'j'n fo:kon kaj trancilon に於て miajn が複数形になつてゐるのは forko'n 及び trancîlo'n と二つの名詞を形容するからである。

Leciono V. 混　成　時

§ 1. **分詞接尾字** 既に第三課（第 25-26 頁）で六つの分詞接尾字があることを述べた。その實地應用數例:—

(*a*) 語尾 -a をつけ、形容詞としての例:

La knabo kap*tonta* birdon. 鳥を捕へようようとしてゐる（發動、未來）少年

La knabo kapt*anta* birdon. 鳥を捕へつゝある（發動、現在）少年

La knabo kapt*inta* birdon. 鳥を捕へた（發動、過去）少年

La birdo kapt*ota* de la knabo. 少年によつて捕へられようとしてゐる（受身、未來）鳥

La birdo kapt*ata* de la knabo. 少年に捕へられつゝある（受身、現在）鳥

dank'a) 給仕, 妻楊子 (dent'o'pur'ig'il'o) を下さい。

〔註〕 k. t. p.=kaj tiel plu... 等。

S-ro B: La fiŝo estis bonega, sed la saŭco estis nebone farita.

S-ro C: Kial vi ne ŝanĝas miajn forkon kaj tranĉilon?

Kelnero: Pardonu, mi forgesis preni vian manĝilaron.

S-ro B: Vi do pasigas vian vivon forgesante! Tamen vi certege ne forgesos alporti al mi la kalkulon.

Kelnero: Tuj, Sinjoro.

〔譯〕 B氏 魚はすてき (bon'eg'a) だつたが然しソース はよく作られて (far'ita) ゐませんでした。

C氏. なぜ (kial) お前は私のフオクとナイフ (tranĉ'il'o) をとりかへないのかい。

給仕: すみません、あなたの食器 (manĝ'il'ar'o) をとりますのを忘れてゐました。

B氏: お前はそんなら (do) 忘れ通しで (忘れ乍ら forges'ant'e) お前の生涯 (viv'o) を過ごすのだね (pas'ig'as)! だけど (tamen) きつと (cert'eg'e) 私に勘定 (kalkulo) を持つてくるのを忘れはしないだらうね。

A夫人: いゝえ、ありがとうごいます、私のこのみ (味gusto) では充分 (sufiĉe) 鹽胡椒がきいてゐます (spic'it'a)。

B氏: 私は御同様には (sam'e) 考へません。味ひと色とについては爭ふ (disputu) なと、そうではございませんか (ほんとではありませんか (u ne ver'e)。

S-ro C Mi tre dezirus scii, kia estas la hodiaŭa menuo.

S-ino A: Oni jam forprenis la karton, sed mi memoras: almanĝaĵo, truto en tomata saŭco, rostbifo kun pizoj, kokidaĵo kun salato, glaciaĵo, fromaĝo, k. t. p.

S-ro C: Mi estas al vi danka por viaj informoj, Sinjorino. Kelnero, donu al mi dentopurigilon.

〔譯〕 C氏: 今日の獻立はどんなですか知りたいのですが。

A夫人 もう表を持つていつてしまいましたわ (for'pren'is), ですけれど私は覺えてゐます・前菜 (al'mang'aj'o), トマトソース (をかけた) 鱒, 焼肉豌豆附合せ, サラダと雛鳥肉 (kok'-id'aj'o), アイスクリーム (glaci'aj'o), チーズ, 其他 (k. t. p.) です。

C氏 これはどうも奥様ありがとうございます (私はあなたの知らせ (informo'j) に對して感謝してゐます est'as

LECIONO V. EN RESTORACIO

S-ro B: Mi bedaŭras, sinjorino, ke vi havas la penon, kaj mi dankas pro via afableco.

S-ino A: Vere ne meritas.

〔譯〕 B氏: このソップはまるで味がない (sen'gusta)。給仕、鹽を!

A夫人: アノ抜に鹽壺が (sal'ujo), あなた (sinjoro).

B氏: 奥様、御手數をかけましてすみません (あなたが骨折を penon 持つことを私は遺憾に存じます), 御親切 (afabl'-ec'o) ありがとう存じます。

A夫人: まあどう致しまして (ほんとに ver'e 價しません)。

〔註〕 danki 感謝する。pro .. のために (原因、動機を示す前置詞)。meriti 價する、値打がある。afabla 愛相よき。

S-ro B: Ĉu mi pasigu al vi la salujon, sinjorino?

S-ino A: Ne, dankon, laŭ mia gusto la supo estas sufiĉe spicita.

S-ro B: Mi ne opinias same. Pri gustoj kaj koloroj ne disputu, ĉu ne vere?

〔譯〕 B氏: 奥様、鹽壺をお廻はしいたしませう (pas'ig'u)

物を示して人の注意をひく助辭`。nenio どれも、一つも……せず〔打消の代名詞（英語の no……; none)。tiu その, tiu ĉi 此の。

S-ino A: Ĉu vi fine servos al ni hodiaŭ aŭ ne? Al mi urĝas, kaj de pli ol duonhoro mi atendas la supon.

Kelnero: La supo alvenos post momenteto, kaj mi petas vin pacienci ankoraŭ unu minuton. (Li foriras kaj alportas la supon).

〔譯〕 A夫人: お前さん結局（終に fin'e）今日私達にお給仕して下さるの（servas)。それ共して下さらないの（aŭ ne)。私（に）は急ぎですよ（urĝas), それに半時間（du'on'horo）以上（pli ol）から私はソップを待つてゐるのです（atend'as)。

給仕: ソップはすぐと（瞬間 moment'et'o の後）参ります（al' ven'os), なほ（ankoraŭ）一分（minuto）だけ御辛抱を願います（忍耐すること pacienc'i をあなたにお願ひします pet'as)。（彼は去つて行つて for'iras そしてソップを持つてくる)。

〔註〕 de…… の,……から〔前置詞〕。for あちらへ〔副詞的助辭〕

S-ro B: Tiu ĉi supo estas tute sengusta. Kelnero, salon!

S-ino A. Jen la salujo, sinjoro.

LECIONO V. EN RESTORACIO

Sinjoro B. Kelnero, donu al mi botelon da Rejna vino.

Kelnero: Tuj, sinjoro.

〔譯〕 B氏: 給仕, ライン葡萄酒を一本くれ。

給仕: ハイすぐ様 (直ちに, 旦那様)。

Sinjoro C: Kelnero, donu la vin-karton.

Kelnero Jen ĝi estas.

Sinjorino A Kelnero, alportu manĝokarton, vi metis neniun ĉe tiu ĉi tablofino.

Kelnero Mi bedaŭras tiun forgeson, Sinjorino. Jen menuo, pardonu.

〔譯〕 C氏: 給仕, 酒類品目表 (vin'karto) を下さい。

給仕 ハイ 茲に (それが) ございます。

A夫人: 給仕, 獻立表 (manĝo'karto)を持つて來て下さい。お前さん此の (tiu ĉi) 食卓の端 (tabl'o'fino) には一つも置いとかなかつたのね (met'is neniun).

給仕: お忘れじましてすみません(奥様. 私はその忘却を遺憾に存じます)。ハイ 茲に獻立表 (menuo) が、すみませんでした (まゆるし下さい)。

〔註〕 vino 酒 (主に葡萄酒類). karto カード。Jen それこゝに (と

谷の中から皆行くのでせう。

お前をも亦，おゝ牧童よ，

いつか人はそこへつれてゆく。

Leciono V. En Restoracio

「料理店にて」（會話）

Sinjorino A: Kelnero, kiam vi alportos al mi la botelon da minerala akvo, kiun mi mendis?

Kelnero: Pardonu, Sinjorino, mi ĝin tute forgesis. Tuj mi alportos.

〔譯〕 A夫人（sinjor'ino）：給仕や（kelnero），何時お前は私が注文した（mend'is）炭酸水（鑛泉水 mineral'a akv'o）一壜（botelo）を持つて來てくれますの（al'port'os al mi）？

給仕：相すみません（御免下さい pardon'u），奥樣，（私はそれを）すつかり（全く tut'e）忘れてゐました（forges'is）。すぐ（私はそれを）持つて參ります。

〔註〕 da 數量を示すに用ひる前置詞。例：botelo *da* biero ビール（の分量）一壜、monto *da* oro 黃金（の量が）一山、山なす黃金。比較：botelo *de* biero ビール（の）壜、monto *de* oro 金の山。porti 運ぶ。

國際語

エスペラント講座

工學士 小坂狷二講

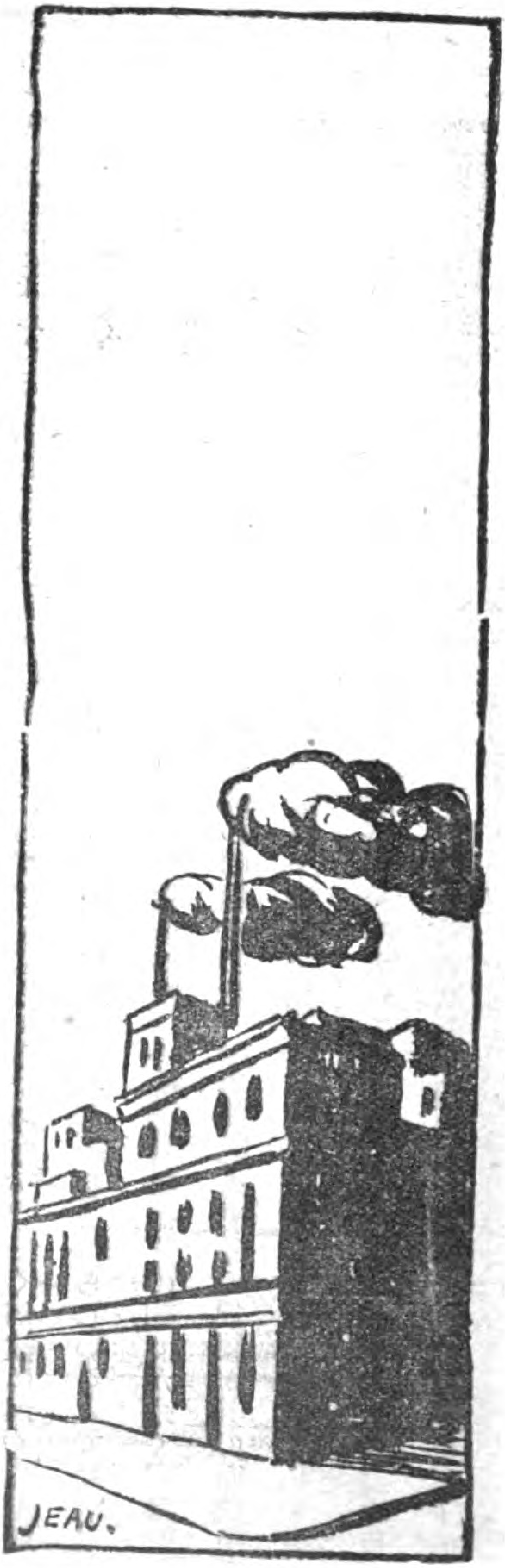
質疑應答

〔問〕 -n の發音は『ン』ですか、『ヌ』ですか。

〔答〕 日本語の『ン』の發音は三樣ある。(a) アンナイ、(b) カンガヘ、(c) シンペシ□に於て (a) のンは舌端を口蓋につけるが、(b) のは舌端は口蓋から離れ、舌の根が喉奥にくつつく。(c) のは上下の唇がふれ合つて發音される(國文學者は『ン』の三內音：a のを舌內音、b のを喉內音、c のを唇內音と分つてゐる)。西洋の n は此の內の舌內ン音、即ち舌端を口蓋につけて出す『ン』音である。然るに日本人は n を喉內音、即ち ng の如く屡々發音する癖があるので第一課の講義にはわざとンを用ひず、ヌを用ひて示したのです。ヌは『ヌ』と長く發音してはいけません、極めて極めて短く(即ち舌內ン音となる)發音せねばならぬ。因に喉內ン音は ng、唇內ン音は m である。

〔問〕 エスペラントの手記文字(草書體)は英語やなぞと同じですか。

〔答〕 勿論同じです。^ などの記號はあとから上へ書き加へることとtの橫棒や、i, j の點と同じことです。



世界經濟の恢復と日本支那米國の使命（其一）

福田德三

私は最近北京國立大學、天津南開大學、濟南齊魯大學、其他支那各地に於て、支那人及び日本人に對して、次の樣な意味の講演を數回試み、歸途大阪如水會大會に於て更らに之を繰返しておいた。今茲に總括的に其要領を記錄して、本邦識者の是正を乞はふと欲するのである。

今日世界の經濟が非常な窮態に陷つた原因は、何ぞと云ふ事は極めて簡單に之れを答へ得るが如く思惟せらる。今其最も代表的な說をあげて見ようならば、九月號の改造に掲げた堀江歸一博士の『歐洲の經濟界は何時に爲つて復興する

か」と云ふ論文中の次の一節の如き是れである。曰く

「何故歐洲諸國の經濟社會が窮乏のドン底に陷つたかと云へば、其最大原因は、戰爭當時の軍備費の財源に當つる爲めに、國民の所得を收用し、而して之れを濫費したる一方に、財源の一部分を公債の發行に仰ぎ、公債元利金の形に於て戰後の今日に負擔を及ぼしつゝあるの一事に外ならない。」

と、是は獨り堀江博士の所論であるのみに止まらず、殆んど大多數の人々の見解を代表するものであり、少くとも我日本に於ては何れも右樣に手取り早く解釋せられて居るようである。平易な言葉で云へば、歐羅巴に於ける五ケ年間の大戰爭の始から其の戰爭中に亘つて有ゆるものを使ひ了つて、尙ほ夫れにも足らずして國家としての負擔を將來に遺し、今日之れを償却せざるべからざるを得ざる事、是れ歐羅巴現下の大經濟難を來せる最大の原因なりと云ふのである。私は斷乎として此見解を以て一の大なる誤謬なりと認むるものである。此の誤謬を打破ることは、世界の經濟恢復の問題を考究する者が先づ第一に爲さねばならぬことであると私は信ずるものである。現在の世界經濟難が單にこのたびの大戰爭にのみ基因すると云ふことが眞ならば、我々は先づ大なる疑問を起さゞるを得ない。曰く何故にかくも這般の戰爭にのみ永續的にして廣汎な經濟難が伴ふか。戰爭なるものは人類の進化上に取つて決して珍らしいことでない、新しいことでない。我が人類は過去に於て實に數へ切れないほど屢戰爭をやつた。今度の戰爭はその期間が永く、參加した國の數が多かつたことは云ふ迄もないが然し是れは畢竟比較的の問題である、乍去昔しの戰爭の規模が其の時代〳〵の文化の程度、富の程度に對して持つ比例は、今度の大戰爭が歐洲今日の文化及富の程度に對して有つ比例よりも小なりと斷言することは出來ない。就中物質的破壞の比例は此度の戰爭に於て決して最大であつたとは云へないのである。」要するに、世界全體を通じて經濟上、社會上に於て、今日の如く行詰りたる狀態を現出したる事の最大原因を戰爭に歸する

は非常に誤つた考方である。

此度の戰爭は非常に多くの物質を亡したに違ひない、乍去、イギリスの學者ジョンメーナード・ケーンズ氏は次の如く謂つて居る。『世界大戰爭の持來した物質的破壞は歐羅巴に於ける現時の節約と努力とを以てすれば僅々數ケ年間に恢復する事は容易なものである。假令ば、佛蘭西及び白耳義に於て戰爭の爲めに破壞された家屋數、或は又西歐羅巴全體を通じて破壞された家屋數は、一ケ年或ひ二ケ年間に新たに建築せられる數以上には出て居ない、戰爭の爲めに破壞された鐵道の延長は、歐羅巴に於ける一ケ年間の新建設哩數と殆んど同じである』と。誠に其言の如くであつて、戰爭の爲めに被つた物質的破壞は、歐洲の平時生産力の能率を以つてすれば、戰後四年の今日に至つては、既に已に十二分に恢復せられ居る可き筈のものである。ケーンズ氏は又た云ふ『實際戰爭の爲めに土地は荒されたが、夫等は今日略ぼ恢復され居るのである、殊に著しき例は船舶である、戰爭の爲めに世界の船舶は非常な打擊を受けたが、一九二一年の末に於ては既に全く恢復されて、今日世界商船の能率は戰前の其れに比して少しも劣つては居らぬのである』と。

數步を讓つて假りに破壞されたる家屋なり鐵道が、三年四年間の建設數に匹敵するものなりとしても、戰後四年を經過した今日に於ては既に其の半分乃至三分の一は恢復せられたる可き筈であつて、而して實際恢復せられて居るのである。戰爭による物質上の損害のみに着目するは非常なる間違である、物質上の損害は大なるものに相違なきも、歐羅巴、否、世界の人間が既に作り出し、又將來作り出さんとしつゝある物質上の富に比ぶれば、決して大なりとは謂ひ得ざるのである。世間多數の論者は、一方に於ては戰爭の爲めに被つた、損害を餘りに過大に見積り、他方に於ては吾々人類上の富、物質上の富を作り出す力を餘りに寡少に見積つて居るものである、此の二つの誤謬は、五ケ年間に亘る戰爭が如何にして支へられつゝあつたかを考ふれば容易に是正せらる可きである。

五ヶ年の永きに亘る戰爭に於ては、成程堀江博士の言ふが如く公債を募り其手取金を支用して兵隊の食費に、大砲に、彈藥に、鐵砲に、或は其の鐵砲より射ち出す彈丸に使ひ了つたのであるが、其の今日に殘つて居るものは、唯だ債務と云ふ無形の物である、兵器食料品彈丸等の有形物は、皆現實に既に費消し終つて居るのである。一九二二年十月十五日になつて始めて打出さる可き彈丸を以つてヴェルダンの城砦を射擊したのではないのである。其の時、其の場所に現實に存在した食物を食し、武器を使用したるもので其は一部戰前よりの持越品、一部は戰時五ヶ年に亘る歐洲各國民の生産したものを以つてスッカリ負擔濟となつて居るのである。決して今日まで繰延されて、歐洲各國民の負擔を加重しつゝあるものではない。負擔となつて繰延されたものは、唯債務あるのみである。今日償却されざるべからざるものは政府の債務に過ぎざるのである、砲彈鐵砲等の實物ではない、政府が償却する義務あるものは錢である、武器や食料品ではない。今日各國政府が支拂ざるべからざるものは單に錢である、所が今日の人間の大多數は、資本主義の上に築かれた貨幣制度に深く囚はれて居る結果、貨幣の支拂を過當に重大視するが爲めに、此の簡單な道理が分らなくなつて仕舞つたのである。無論年々債務を償却すると云ふ事は輕々しいことではないが、然し其れは左程恐るべきものではない。歐洲戰爭に依つて歐洲各國が非常に多くの物質を滅ぼした、重き負擔を將來に殘したと云ふ事は、一面即ち堀江博士專門の立場たる財政金融上の考察としては正しいに相違ないが、實體的の立場から見れば大いに割引するを要するのである。金融の上に於ては來年生産すべきものを現に生産したるものとして取扱ふ、即ち『先物』を賣買する、これは商賈の上には出來得る。然し其れは決して實物ではない、吾々の體を溫むべき着物は、現に出來し居る綿糸綿布を以て作つた現實の木綿着物でなければならぬ。來年生産せらる可き綿衣を今着るといふことは絕對に出來ない。所が今日の産業及び金融界なるものは現實の物のみでなく所謂先物賣買なる虛の商賣によつて立つて居るのである、さうして儲け

たりとか損したりとか言つて居るは、一面から見れば實に馬鹿氣た事をして居る理である、所が大抵の場合に於て斯くせざれば取引を爲す能はざるもの〻如く考へられて居る、然し乍ら今度の戰爭に依つて惹起された眼前の被害は、左樣なる偏金融眼を以てするを許さない、堀江博士の立論は金融一點張り論である、而して大抵の人も亦同博士と同樣の見方を爲し、又爲しつ〻あるは、私の憤慨せざるを得ざる所である。

歐羅巴の五ケ年の戰爭が將來に殘したものは借金である、帳面の上に債務が殘つたのである、決して實物ではない。債務と云ふものは實物でない、而して一の大なる特徴を有するものである。曰く、其れは踏倒（レピユヂエート）さうとすれば、何時でも踏倒し得るものである、踏倒せば貸した人が困るのであつて、必ずしも人類全體が困るのでない、無理をして人類に大害を與へて迄も借金を返す可き理由はない。無理に返さうとする爲めに人類全體に大害を持來す場合には私共は借金踏倒しを斷乎として主張せねばならぬのである。何千億たりとも金と人類全體の利益とは到底比べものにはならないのである。何千何萬の債權者があつて其の金が返らねば多數の人類が活きて行く事が出來ないと云ふ場合には、必ず返すことを要求す可きであるが又た他方に於て、債務國に於て其の辯濟が非常に困難で此の辨濟の爲めに人類全體に害を及ぼす場合が多い、其の場合吾々は借金踏倒しを主張せざるを得ないのである。而して此の經濟道德的勇氣が最も必要であつて、今日の歐羅巴、今日の世界經濟の窮乏を救ふには此の勇氣がなければならぬのである。借りた物は必ず返さざるべからずとか、貸した物は必ず取戾さゞるべからずなど云ふ財產本位の權利義務思想に囚はれた頭から見れば私の言ふ所は甚だ不埒千萬に聞へるだらう。例へば佛蘭西のアノトーの如きは、斯る囚はれたる頭から盛んに驚入つたる愚論を今主張しつ〻ある。（近論『經濟形而上論』）吾々は斯くの如き愚論を一日も早く此の世界の表から驅逐せねばならぬ。

今日の世界經濟の行詰りは、這般の歐羅巴戰爭のもたらした物質的破壞も其の原因の一つに相違ないが、然し其れは諸原因中の最小なるものなりと私は斷言するのである。今日の行詰りには猶他に三大原因がある。其中最重大な原因は戰爭中に存せずして戰爭の後に在る。即ち其れは、休戰が成立し多數の各國代表者がヴェルサイユに集まつた其の瞬間から始まるのである。一九一四年八月幾日かの戰爭の始まつた時にあるのではない。ヴェルサイユ會議の時からは始まつたのである。ヴェルサイユに集つた各國全權共は夫々公平正義の考を以て居たのであらうがいざ集つて見ると群衆心理とも言ふか、或は外交官心理とも言ふか、何れも皆頭が狂ひ出し、其のぐれたる頭より出來たるものが平和條約となつたのである。恐く此のヴェルサイユの平和條約程莫迦〳〵しく、且つ人類を害する文書は歷史上類稀なりと云はざるを得ぬのである。何故となれば該條約なるものは基督の所謂右の頰を打たれゝば更に左の頰を出すてふ無抵抗主義より出でたるものにもあらざれば又汝の隣を愛せよと云ふ主義より出でたるものにもあらず、常識的な正義の觀念より出でたるものにもあらず、惡魔の如き精神より出でたもので、人々、國々、互に憎み合ふ荒みに荒み切つた、最も下劣なる精神の結晶物である、此の下劣なる精神の產物が實に今日世界を行詰りの狀態に陷らしめた最大原因である、即ち根本の問題は物質の上にあるにあらずして人の心の上に、各國民の肚の中に在るのである、其れはマテリアルではない、スピリチュアルである。從つて之れは我々の心の持樣一つで除却しようと思へば除却し得るものである。人の心さへ持直せば宜いのである。戰爭の始まらざる迄の各國人の國際心理は大體に於て左迄下劣險惡なものではなかつたが戰後に於ては、各國共に同情、寛恕、相愛の念は極端に衰へ、國民と國民、人と人との間に實に甚しき憎惡の念と猜疑心とが彌漫するに至つたのである。是れ今日の世界を困難の極に陷らしめた最大の原因である。從つて、問題の解決は人の心理上に在るのである。

獨逸に對して戰爭中各國が極力憎惡の宣傳を行つた、獨逸は憎い奴だと種々な宣傳、プロパガンダを行つた、食糧に窮

した獨逸は赤ん坊の死屍を絞つた脂肪から取つたバターを喰つて居るなどと嘘も甚だしきプロパガンダを行つたのである、戰爭の濟んだ今日左樣な無茶なプロパガンダが非常に害を爲して居るのである、私は當時莫迦も休み休み言つて呉れと切言したのであつた、近頃日本でも大分宣傳と云ふことが行はれて居るが、其多くは實に莫迦氣たものである、然し斯る莫迦氣たる事も度々宣傳する時は相當信用を得るようになる、却々恐るべきものである。戰爭中佛蘭西は極端に獨逸を憎んで種々なる宣傳を行ひ嘘を泌み込ましめた、日本でも獨逸を憎み、大學の先生達が獨逸の書物を一切讀まざる事としたるなど、馬鹿らしいことが新聞にれい〳〵と書いてあつた。

斯くて獨逸を憎むの念の向ふ所は啻に獨逸のみに止らずして、獨逸に加擔したるもの一切を憎むに至つた。今日イギリスとフランスの間の乖離して荒みに荒みつゝあるは、無理に獨逸を憎ましめたる結果である。坊主が憎ければ袈裟迄憎いと云ふが如く、獨逸を憎むの念は憎んで憎み足らずして更らに、他の物をも憎むに至つたのである。此點より觀ても冷靜に考ふるならば、今日の獨逸は素より各國間の國際問題は確に解決し得べきものである、やれ海牙會議、やれジエノア會議と諸種の會議の開かるゝも根本問題たる國民間の心持ちの既に憎み合ひ荒み合へる折柄如何で効果を收め得らるゝであらう。彼の勞働會議の如き又然りである、第二回、第三回と開かれ其都度代表者選出に就て適法不適法の問題を惹起し派遣されたる代表も何等の効果とて收め得ず歸來するが如き愚の極みである、何故日本は斷然參加を拒絶せざるか、綺麗に斷るべきである。如何に會議が開かれたればとて今日の歐羅巴人の心の變らざる限りは何にもならないのである。お互に憎み合ふ心を捨て戰前の一九一三年に立歸りなば、今日の難問題は悉くとは行かずとも大部分は大體解決せらるべきものである。假りに殘る問題ありとするも解決の見込は立つに至るのであらう。

斯く民族間の憎惡の念昂じて今日の世界に動搖を來し葛藤して居る爲め戰爭に依り受けたる物質上の損失を恢復する

事出來ず、又新らしき生産が殆んど停止したのである。其の反面に於て此の憎悪の爲めに無形の富を非常に減したのである、其の中で最も大なるものは何かと言へば政治的信頼と政治的結合の破壊是れである。其の結果として國際的協調が甚だ無意味になつて來たのである、ヴエルサイユ條約作成に方つてウヰルソン、ロイドヂョージ、クレマンソウなどは世界の地圖上に勝手に線を引いてチエツホスロヴアキヤとかユーゴースラヴイアとかポーランドとか名付ける小國を民族自決主義の名の下に獨立せしめた。日本でもウヰルソンは偉いと賞揚した人が尠らずある。姉崎博士は其の代表論者であつた。今日は如何である。ウヰルソンは國際聯盟、やれ十四ケ條など〻種々なる案を提唱せるも一も實行せずして逃げ去つて仕舞つたではないか、ウヰルソン位茶ラツポコな人間はない、無責任極まる人はない。ウヰルソンは今や精神的に破産して了つたものである。又更に最近のイギリス電報に見ゆる如くロイドヂョージも又勞働黨より排斥を受け辭職をさへ勸告され居るではないか、彼等が主張して獨立せしめたるチエツホスロヴアキヤ、ユーゴースラヴイア、ポーランドは今如何、是等の小國は、今や世界中の最も厄介な國々となつて居るではないか。私は此程朝鮮に旅行したる際朝鮮の有志の人々から直接に幾度か獨立の主張を聞いた。私は此れに同情せざるを得ぬ。然し乍ら朝鮮は今直ちに日本から離れて果してよく獨立の生活を爲し得る國たる事が出來るか、現在のルーマニア、チエツホスロヴアキアや、ポーランドなど云ふ一夜作りの小國は今は如何なる狀態に在るかを思ふならば朝鮮の獨立を主張する者は靜かに考慮せねばならぬのである。ポーランドの如き今日にては獨逸の馬克よりもポーランド馬克は下落し悲慘の狀態に陷つて居る、ウヰルソン等の出鱈目は玆にも證據立てられて居るのである。殊に今問題となり居る希臘と土耳古間の爭の如きヴエルサイユ條約の馬鹿さ加減の生きた左券である、土耳古を酷めたいと云ふので其地を割き取つて希臘に與へても希臘は之れを治める力がない爲めに今日の如き狀態となり希臘は見事に敗北し、土耳古は勝者として聯合國に對して居る。要

するに歐羅巴の政治家と云ふものは多くは嘘、胡麻化しをやつて居るが、今日の如く人心が荒んでくると之を抑へつけて善い方へ向はしめる正義の力が殆んどなくなり悪い方面のみが愈々鮮かに出て來る。日本に就いても亦然り、最近起つて居る問題の鐵砲を積んだ汽車が何時の間にかすり代へられたなど云ふ事は今世界を支配する暗黑面の一縮寫圖である　一體チェツホスロヴァキヤを援けるならば、何故他の社會主義の國をも援けざるか、夫れが定まらずして兵を出すとは愚の甚だしいものである。斯くて此の出兵は容易に撤兵せず、之れが爲めに他日國民に迷惑となり、どの仕舞ひには汽車がすり代へられたなど、日本の軍人は天勝以上の大手品師で汽車すり代への手品を使つたのである　新らしい辭典は、『軍人とは汽車を種に大手品を使ふ者なり』と云ふ新定義を入れなければならぬ事にならう。實に馬鹿々々しい世界ではある。

所で、此の民族互に憎み合ふ事は一九一四年以後に起つたもので、此の心を取り去つて戰前の人の心持ちを歸さしめる事が今の急務である。夫れには人民を指導するプリーチアーが必要である。此使命を盡くし得るプリーチヤーは、差し當り日本と亞米利加と支那との三ケ國であらうと思ふ。この大使命を果すには、この利己的利害關係を離れなければならぬ。日本の如きは利害關係を離れた立場に在るので　日本は說教者として最も適當である。然し人を說教せんとするには、先づ己れより善人とならねばならぬ。日本は三百年間に於て實に立派な歷史を持つて居る、國を封鎖して居つた爲めに物質的の進歩を遲れしめたが　其の封鎖の爲めに國際泥棒を爲さずして來つたのである。歐米の天地に於ては十六世紀頃よりは漸く泥棒は增加したるも日本は十六世紀以降三百年間國として他國に泥棒を働き他を侵掠したことは嘗てなかつたのである、斯の如き例は實に稀で私は之を以て日本の最大の誇りとする可き所と信ずる。日本人は萬世一系の國體を誇りとするが、其れは自らに對しては慥かに大なる誇である。其反對に、支那人、朝鮮人、歐米人の何れもこの誇りさ加減を

能くは理解し能はぬであらうが、徳川氏三百年間泥棒を爲さゞりし一事は自らに對しても、又他に對しても大なる誇りとす可き事で、殊に泥棒せられそうな國々は能く其有難味を感ずるであらう。支那も米國も此點に於ては日本と共誇りを共通に有する。支那は國内に於ては今日まで泥棒は朝野共盛に行はれて居るが、國外に向つては永く泥棒を働かなかつた朝鮮すらも之を完全な屬國とはせなかつた。否反對に支那は寧ろ泥棒される國であつた、又現に左樣である。日本は泥棒もせず、泥棒もされずの國で其過去三百年を誇り得るも今日にては最早之れを誇り得ざる國となつたのである、何故とならば、約五十年前其の處女の誇は破れた。爾來泥棒主義は漸次擴張せらるゝに至つて獨り軍人のみならず實業家は實業泥棒、或は宗教家は宗教泥棒、又教育家は教育泥棒と云ふのを行ふやうになつたのである。然し其れは極めて新米なもので、必ずしも病膏肓に入つて居るものではない、之を一擲することは、英佛などに比して遙かに容易である。米國もほゞ同樣であらう。今日の歐羅巴の經濟を救ひ世界の經濟を救ふには、此の泥棒主義を根本より打破らねばならぬのである、僅な金、僅な物質を以てしても到底世界を救ひ歐羅巴を救ふ事は至難である。先づ吾々の心持ちより代へざるべからざるのである。而して歐羅巴に向つて非泥棒主義、非侵略主義の大傳道を行らねばならぬ。斯くして世界行詰りの第三の原因を取除かねばならぬ。我々が除却せねばならぬ第三の原因なるものは、一部分は、我々の力を超越して居るものであるが、一部分は、又た、我々の力によつて左右し得るものである。其は何か、答へて曰く、經濟的周期に基くコンジアンクチューア(景氣)是れである、吾々の經濟生活は十九世紀の終り頃から始めて、一種の病氣に罹つて以來今日未だそれから脱することを得ないのである、其病氣とは我々の經濟生活は周期に支配されて時々間歇熱を起すことゝこれである。其周期は十年、二十年目という樣に時を距て起るのである。之れが所謂景氣、不景氣を來す、夫れが急性になるときには恐慌となる。我々の研究の足りない爲に何年目に不景氣好景氣が來るかと云ふ事を的確に豫知する事は出來な

いが、亞米利加などにはビジネスバロメーター(産業晴雨計)と云ふのが出來て居るが、今日迄に作られたバロメーターは狂いが多いのである、尤も種々作つた物を合せ見るとおほよその事は判るらしい、此頃は米國のハーヴアード大學英國の倫敦大學などで大分研究を進めて居る。

今日の世界的經濟難は其の原因を今滿足に取り去られても何年、何十年間の後には不景氣は再び來る、夫れを豫知すると云ふ事は、先づ吾々の學問の力では如何とする能はざるものである。然し全く吾々の力を超越したものではない、我等が知る事が出來る、恰度醫者が病氣を治す如きもので、如何なる名醫と雖も其の病人が最早死と決したる、即ち如何にするも生くる力のなきものなる時は、名醫も施すべき術はないが、生くる力あるものならば、それに藥を投じて、其生くる力を助くることが出來る。經濟界の病氣も亦然り其れが生きる力ある限り、我々は夫々適藥を投じて健全狀態の恢復を圖ることが可能である。ソコデ私の診斷によれば、今日の此の病氣を來したのは一種變態の經濟心理によるである當り前の經濟的心理の働きでなく、非常にがつかりした經濟病である。其のがつかりしたものに對して更にがつかりするやうな藥を以て來るは甚だ不可である、今日歐羅巴各國中で物質上に於て既に漸次恢復して居るもの亦尠くないが、經濟心理の上に於てがつかりして居るが故に行詰りとなつて居るのである。然るに此のがつかりした人氣を更らに萎微沈衰せしむる如き事を爲すは其恢復を害するも甚しいのである。私は此點からして今日本に行はれつゝある消費節約の宣傳を以て極めて有害な、否寧ろ危險な所業として斷々乎として反對せざるを得ざるものである。以下其理由を述べて見よう。(次號完結)

改造社出版目錄

◇文學博士醫學博士 榊保三郎著
學齡より丁年迄の **精神發育研究**
定價四圓　送料廿七錢　四六倍版上製
四版

著者が十一ヶ年を費して研究した世界的權威の大冊子で、六歲より廿一歲までの兒童の精神發育を研究した空前の大名著、小學校、中學校には一部を備付くる要がある。本書によりてのみ兒童精神の推移は判明すれば也。

◇片山潜著
自傳
定價壹圓八十錢　送料十五錢　四六版上製
四版

赤色露西亞に於てレニン、トロツキーと同等待遇を受けつゝあつた氏は最近第三インタナショナルの南北亞米利加の總指揮官となつた、我有史以來主義の爲めしかも無產者の味方として世界的活躍をなせるものは氏を措いて他にない。本書は氏の自傳だ。

◇理學博士 石原純著
(増補) **アインスタインと相對性理論**
定價貳圓貳拾錢　送料拾七錢　四六版上製
卅版

ニウトン引力を否定して、全科學界を革命せるアインスタインの相對性理論は既に絕對となつた。今までの物理學の公理、定義は本から轉覆された。本書を一讀せずして教育したら其生徒は殘らず時代後れとなります。

◇中澤臨川著
電子說から見た世界
定價壹圓八拾錢　送料拾五錢　四六版上製
改題六版

一代の文豪として世名を轟かした臨川氏は實に東大出の工學士だ、本書は我國に於て類例のない理學的文藝品であり、藝術的滋味に富める科學的世界觀の大傑作、本著は「新社會の基礎」の改訂版である。

◇野上彌生子著
小說六つ
定價貳圓七拾錢　送料拾九錢　四六版上製
三版

綺羅星と並ぶ創作壇に赤輪咲いだ一花、それは野上彌生子である、女流作家も多い、しかし野上氏に比すれば總ての作家は果して比較になるだらうか、氏の半生涯に於ける小說から特に六つを抽出して江湖に發表する。

◇文學博士 朝永三十郎著
カントの平和論
定價壹圓五拾錢　郵稅拾五錢　四六版上製
五版

著者は我國に於て哲學史專攻の第一人者だ、カントの平和論は近代平和論の根源であり、母體であることも一般周知の事だ、政治哲學を根本的に組織的に研究せんとするものは基礎哲學として本書の一讀を薦む。

◇文學士 板垣鷹穗著
新カント派の歷史哲學
定價壹圓五十錢　送料拾五錢　四六版上製
[illegible]版

本書は歷史哲學の入門書として書かれ、從來の歷史哲學が辿つて來た大體の經路を瞥見し、新カント派の學說を中心として現代の歷史哲學を概觀したものだ、著者は若き哲學者として斯中の錚々たる人である。



冬の御買物は三越

寒さが參りました、冬の御支度を遊ばさねばなりません、實用品と流行品とを非常に潤澤に取揃へ、しかも品がよく、價が安く、お買ひ心地のよいのが三越であります

◆三越マーケツト◆

木綿雑貨食料品等の實用品連日盛況であります

◆寄製格安反物賣出し（十一月一日より）
◆支那朝鮮美術工藝品展覧會（同）
◆婚禮衣裳陳列（同）
◆關雪新作展覧會（同　十四日より）
◆尾竹竹坡畫伯筆丸帯陳列（同　十五日より）
◆家具新製品陳列（同　十七日より）
◆中川八郎氏遺作展覧會（同　十八日より）
◆三越繪畫展覧會（同　廿二日より）
◆大阪朝日新聞七萬號二百年記念近松史料展覧會（同　廿三日より）

三越呉服店

◆東京駿河町◆

LA REKONSTRUO MONATA REVUO DE POLITIKO, LITERATURO, SOCIAJ AFEROJ, KTP.
PREZO: UNU EKZ. OKDEK SENOJ, JARE DEKDU JENOJ.
OFICEJO: KAIZOŜA, 1 ATAGOŜITAMAĈI, ŜIBA, TOKIO.

大正八年三月廿一日第三種郵便物認可